

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03148 6079

















昭和八年三月十五日 印刷  
昭和八年三月二十日 發行  
昭和十四年十二月十五日 再版發行

國譯一切經 經集部二

【定價金一圓五十錢】

編輯者兼

岩野真雄

東京市芝區芝公園地七號地十番

印刷者

長尾文雄

東京市芝區芝浦二丁目三番地

印刷所

進舍

東京市芝區芝浦二丁目三番地

不許  
複製

發行所

東京市芝區芝公園地七號地十番

株式會社 大東出版社

振替東京一九四七一番  
電話芝三〇九四〇番



# 索引

(頁数は通頁を表す)

## ア

阿逸多	17
阿迦膩吒天	41, 343
阿蘭陀	142
阿須倫	62, 233
阿僧祇	135, 161
阿難	62, 198
阿難陀	133
阿耨多羅三藐三菩薩	161
阿毘曇藏	28
阿鼻	178
阿鼻地獄	41, 354
阿彌陀	124
阿羅訶	23, 195
惡趣	223

## イ

維耶離	55
維樓梨	141
一切智の人	33
一生補處	248
一心	265
姪怒癡	352

## ウ

有漏法無漏法	90
優波羅	192
優鉢羅	103

## エ

迴向	116
奄婆羅	181
菴摩勒果	33
緣覺	113
琰魔王	154
閻浮	104
閻浮提	200, 293

## オ

王舍城	131, 176
應唯	264
遠塵離垢	128

## カ

加留羅	233
荷負	43
迦維羅衛	141

迦葉	343, 356
迦葉如來	123
迦葉佛	101
迦毘羅衛城	134
迦樓羅	161
迦陵頻伽	165
過度	341
閑士	233
學無學	350
活	266
灌頂	112
歡喜園	24
觀世音菩薩	99
合命類	354

## キ

記	126
其儀	333
喜王菩薩	116
歸す	354
祇樹園	143
誼歸	270
更法	332
憍薩羅	151
緊那羅	110, 161

## ク

九使	122
拘勿頭	192
拘翼	298
拘樓秦	356
俱致	125, 171
鳩槃	113, 137
瞿夷	144
瞿曇	135
群期	259
群黎	260
群僚	260

## ケ

結	21, 76, 103
結加跏坐	105
賢劫	124, 355
健沓和	233

甄叔迦寶	21
------	----

## コ

去心	261
去來	359
虛空藏菩薩	100, 116
牛頭梅檀	138
五蘊	242
五音	89
五陰	72, 216
五蓋	120
五眼	112
五根	112
五趣	272
五旬	311
五濁	251
五神通	198
五體	257
五體を地に投ず	216
五通	167, 301
五力	113, 311
護世四天王	39, 45
光明大三昧	32
劫波育	137
恒河沙	44, 214
恒沙	359
斛飯王	136
金剛莊嚴道場	38
金翅	123
紺瑠璃	35
嚴重	101

## ク

三有	33
三界	78
三苦	358
三十二相	213
三十二相大丈夫相	106
三十三天	103, 296
三十七品	348
三處	56
三世慧	55
三千世界	179
三尊	359



三脫門	82	舍利弗	59	僧伽梨	47
三達智	33, 55, 37	釋迦尼楞伽摩尼	21	總持	55, 233
三塗	56	舍夷	131	繕幡蓋	264
三毒	79	闍維	49, 144		
三忍	90	釋師子	128	—タ—	
三摩拔提	201	釋提桓因	29	多陀阿伽度	23, 118
三摩鉢帝	98	釋梵	254	多羅	101, 113
三昧	66, 79	首楞嚴三昧	21	多羅樹	204
三親三佛陀	23, 195	須陀洹	44, 138, 146	陀羅尼	96, 198
山王	113	須菩提	344	體性	64
—シ—		須彌	61, 111	大呼阿毘支	197
尸沙羅蜜	181	修多羅	198, 210	大士	21
支提	186	修妬路	28	大心衆生	18
四恩	253, 314	藥祐	255	大勢至	99
四弘誓願	19	滿首	344	大神德釋師子	49
四衢路	264	習	285	大雄	57
四種梵行	172	愁結	269	大龍	197
四象	126, 160	十惡	85	提頭賴吒	137
四攝	166	十種力	86, 253	檀	184
四禪定	198	十善	86, 172	檀波羅蜜	18, 181
四大	76	十二牽連	69	—チ—	
四大海	104	十二所因	269	智慧度無極	297
四等	253, 305	十二部經	84	調御丈夫	195
四道	136	十八不共法	80, 239	珍護	360
四輩	359	十力	313, 355	—ツ—	
四兵	144, 220	鷲山	358	頭陀	171
四部兵	258	聲聞	113	頭然を救ふ	48
四魔	33	清信士	191	塗香	101
四無畏	83	淨居天	138	痛想	332
四無色定	198	淨居天衆	29	痛想行識	347
四無所畏	313	淨飯王	139	通慧	270
使煩惱	98	眞際	68	—テ—	
馴馬	258	眞陀羅	58, 233	鐵圍山	145
慈氏	358	深法忍	98	天子	18
自然	63	塵勞	234, 262	天人師	195
持地菩薩	115	—セ—		顛倒	61
色	271	世間解	195	—ト—	
七識	120	誓多林	151	兜術天	356
七財	307	仙人野	61	兜率天	295
七寶	213	栴檀香	89, 103	兜率陀天	18
七寶塔	359	戰忒	260	忉利天	90
室羅筏	151	騰提波羅蜜	181	忉利天子	292
悉達	132	善逝	195	等觀	286
舍衛國	141	禪定	222	等處	267
舍利	89	禪波羅蜜	181	道慧	66



德本	350	毘樓勒叉	137		
		苾芻	151	未聞	358
奈氏樹園	55	白飯王	134	彌勒	17,100,117
那由他	112	白毫相	21	彌明行足	105
那羅延	104	辟支佛	44		
泥洹	263	頻婆娑羅	220		
何が心本なる	352				
難陀	132				
		不可計	259	無爲	68,343
二見	306	不起	352	無價	227
尼拘類樹	144	不起忍	343	無垢光	89
肉髻髮	21	不起法忍	233	無礙辯	194
日宮殿	79	不退轉	350	無礙辯菩薩	116
入金剛間定意經	305	布施	162	無從生忍	357
如如	208	布露	340	無從生法樂之忍	348
饒益勸助菩提音者	20	富伽羅	127,186	無所有	68,259,350
人頭の虫	45	伏藏	101	無所從生法忍	89
忍	198	福田	30	無生忍	97
忍界	264	佛說	214	無生法忍	203,293
忍土	344	分衛	58,251	無上士	165
		分陀利	192	無上正眞	242
		邠壽文陀施尼子	60	無上正眞道	342
能仁	344			無擇	260
能仁佛	243	菟	243	無斷	340
				無等等	193
				無明	216
波羅蜜	184	菩提果	181		
波斯匿	142	菩提附差	145	瑪瑙	105
婆伽婆	127,161	法印	90		
薄伽梵	151	法王	32	文殊支利菩薩	98
八關齋	104	法界	286	文殊師利	115
八十種好	108	法忍	342	文尼	356
八脫門	250	法服	360		
八顛倒	121	梵王	57	由旬	113
八部	23	梵行	198	猶豫	259
八法	265	梵志	267,358	維摩詰	56
八味	276				
八難	171	摩伽勒	58	羅云	133
鉢頭摩	192	摩訶迦葉	113	羅闍祇城	260
般若波羅蜜	162,181	摩訶薩埵	207	羅網	126
		摩訶男	144	羅網結疑	360
卑舍	113	摩休勒	233	來心	261
毘沙門天	137	摩呼羅	123	藍毘	134
毘尼	28	摩睺羅伽	161	蘭若	198
毘富羅山	161	摩尼	125		
毘摩詰	101	摩羅	73	龍華樹	44
毘梨耶波羅蜜	181	曼陀羅	188	龍華菩提樹	27,38

離車  
兩足最勝  
琉璃

一ル

100 襖至  
101  
105 囿圍

—V—  
—□—

350 漏  
狼山跡  
286 六根  
六堅法

261.341  
41  
172  
309



達龍王の所問決狐疑經を聞いて即ち受持、樂習誦讀せず、又た廣博布示して等く學せず、亦た心を興して權助せざるところの者は、當に知るべし、是輩の族姓男女は、已に衆の魔、及び魔官屬并に邪外道の便を得る所となりて常に羅網結所疑の中に在るなり。時に佛、歎じて曰く、快なるかな、所言、一切を誘進して斯法を習せしめ、行じて之に應ぜしめよ。如來は又た曰く、當に是經を以つて數々四輩の爲に宣て廣く之を説くべしと。爾時に慈氏、濡首菩薩、賢者阿難皆な佛に白して言さく。唯だ願くは世尊、輒ち當に受持して是法を布演すべし。又復た世尊、此經は何と名け、當に云何が奉すべき。世尊、告て曰はく。斯乎。族姓よ。阿耨達龍王、所問決、諸疑清淨法品と名け、亦た弘道廣顯定意と名くるなり。當に勤めて斯經の要を受持すべし。又た族姓等、是の道品は、三護せよ、諸法經の淵海なりと。慈氏菩薩、濡首童子、及び諸の來會の神通菩薩、釋梵持世、天龍鬼神、同聲に佛に白さく。甚だ善し、如來快く是法を説く、吾等は、世尊よ在所の聚落、國界、縣邑に是法を行する有りて當に共に躬身に斯輩を營護すべし。其れ此を聞かむ者は邪をして便なからしむ。吾等、亦た當に是經を受持して普く流布せしめて常に斷なかるべし。佛、慈氏、濡首童子并に衆の菩薩を歎じて曰く。善い哉、諸の族姓子、卿等の言ふ所る將來の諸學菩薩を勸樂して快甚なること乃ち爾り。佛此を説き已るや、十方より來會せる神通菩薩七萬二千は悉く定を逮顯し、五萬四千の天龍鬼神は皆な無上正眞道意を發し、五千の天人は、四法眼を生ずるを得。阿耨達龍王、慈氏菩薩、濡首童子、一切菩薩、賢者阿難、來會の四輩及び諸天龍、種々鬼神、人と非人は佛の是を説くを聞きて歡喜せざるなく、佛足を稽首して各々便ち退けり。

【二】宋元明三本に依りて以を已に改む。  
 【三】羅網結縶とは、羅網は本來は珠を連結して作つた網の莊嚴具であるがこの場合は縶の連結して網の如くなるに譬ふるなり。  
 【三】珍護とは、大切に護る意なり。

【四】法眼とは、分明に緣生の差別の法を觀察する眼力なり。

を了せば則ち顛倒なし、吾等は但だ坐して之れを了せざりし故に諸の地獄を更て衆苦無數なりしなり。願くは一切速に正眞を解せしめん。

爾時に佛は慈氏菩薩、濡首童子及び阿難に告て曰はく。諸族姓等、當に勤めて此れ是經の要説を受け、持つて諷誦し讀み以て宣べて流布し、廣く學者の爲に斯法を演説し、諸の四輩をして加心して是慧の要行、積辯句義を專習せしむべし。若し族姓子及族姓女の發心怡悅して是經に向樂せば當に斯輩の爲に此の奧藏深遠の諸義を解すべし。道の元府にして衆經の歸する所、諸佛の積要にして微妙無量なれば、若し授けらるる者は當に字句を了了分明して増減なからしむべし。又た諸の旌姓の若しは賢男女、過去に在りて、恒沙の諸佛所作の功德、施行の種種、諸佛の説法すべき所を受持し、一一專習し勤心に奉行す。若くは復た施、戒、忍、進、定、智、是の六道を行じて、億百千劫に是の諸佛并に衆の弟子に衣被、飯食、牀臥、醫藥、香華、妓樂を奉り諸の所欲を進め、又た精舍經行の地を造りて、奉敬すること是の如くして稱計すべからず。諸世尊般泥洹し已るに至りて諸如來の爲に、七寶塔を起て、一一に諸の如來塔に香華妓樂繒綵、幡蓋を供養し進んで、香燈を然し又た夜光、明月の諸寶を懸けて、供養すること是の如く極多無數なり。斯の所行の徳を集會して之を計るに、都て是の族姓男女、此の阿耨達龍王問うて諸狐疑を決せる所の法品の義を一聞して速得するに如ざるなり。所以はいかん、斯の法藏は諸佛菩薩の要行慧の最を出生するを以つての故なり。何に況んや奉持して卷を執り、誦讀し無疑心を以つて、深妙を體解し復た所聞を以つて、宣示流布するをや。斯の諸の功德は測量すべからざるなり

是時に慈氏、濡首童子、賢者阿難は佛に白して言さく。未曾有なり、唯だ然り世尊、又た若し如來、慈を降し一切に、大慈を興す有らば、乃ち十方の。去來現在の菩薩行者、天龍鬼神、諸の衆生の爲の故に弘く是の法の無極清淨道品の義を説かむ。又復た世尊、若くは族姓子及び族姓女の阿耨

【七】四輩とは、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷なり。

【八】恒沙は、恒河沙に同じ。ガンジス河の沙の意にして數量の無限なるを譬ふるに用ひらる。

【九】金・銀・瑠璃・雜瑠・碼磧・眞珠・玫瑰を以て合成せる塔なり。

【一〇】去來は、過去未來のこと。



神旨は忽ち三三 鷲山に、昇れり。

### 囑累法藏品第十二

是に於て世尊は鷲山に至り已て、慈氏、濡首童子、并に衆の菩薩に告て曰く、諸の族姓子よ阿耨達所間の道品を以つて宜しく重て宣廣し、諸の未聞をして、之を聞くを得せしむべし。慈氏、濡首は俱に白す、惟だ願くは如來、慈を垂れて當に説くべし。時に世尊は尋いで軌ち光を揚ぐるに光色無數に、天地震動すること六反に至り、光明鑠々として乃ち十方を曜やかせり。十方佛土の諸尊菩薩の神通備はる者は明を尋ねて飛來して到り皆な稽首して各々便ち座に就く。阿闍世王夫人の姪女、太子、眷屬、舉國の臣民、長者居士、梵志學者は是の光明を見、又た如來の無熱より還るを聞き、各々其事を捨て、悉く鷲山に詣で世尊の前に到り肅然として敬を加へ、又手し禮を爲して如來景福の無量なるを問訊し、即ち退き還りて坐し佛を觀じて厭無し。如來身の光明悉く普く無極世界に至り、諸の大地獄の衆の窮冥處に降徹せざる靡し、諸の地獄に在りて明を被むらざるなし。又た其の光明かにして而して聲を出して曰く。能仁如來は無熱池に於て弘く清淨道品の要法を説き、今ま鷲山に還りて重ねて化を演ぶと。又た其音聲は諸の地獄に徹して、十方の地獄の衆生の類の受くる所の苦痛は時に應じて免るゝを得、悉く遂に佛及び諸の衆會を見て、皆た自ら悲み嗟く。嗚呼、世尊、吾等に此の苦痛を受く、無數地獄の酸たる、六火圍遶し、燒炙苦毒、鋒瘡萬端、鑊湯の難、諸變種々に、斯の衆痛更り日月彌と遠し、善い哉、世人は如來に値ひ奉り佛道の化を稟けて、三苦を離るゝを得、吾等、宿世に諸佛に遇ふと雖も法化を受けずして衆の苦痛を被る、如來所説の法品に頼りて諸の殃罪をして軌ち彼輕ならしめんと。爾時に當り十方地獄の一切衆生は萬有億千悉く無上正眞道意を獲ずを得て、遂に佛聖を承け皆な同聲しく曰く。一切の苦痛の本は清淨たり、其の本

【三三】 靈鷲山のこと。

【一】 慈氏は、彌勒、濡首は文殊なり。

【二】 未聞は、彼の會座に列せずして道品を聞かざる者のこと。

【三】 鑠々はあきらかにかよやく貌。

【四】 梵志(Brahmacarin)とは梵天の法を志求する者なり。

【五】 三苦は一に苦苦：苦事の成るに由て生ずる苦惱。二に壞苦：樂事の去るに由て生ずる苦惱。三に行苦：一切の法の遷流無常なるに由て生ずる苦惱なり。

【六】 宋元明三本に依りて苦の字を加ふ。

と七丈、其の自然の師子の座に就き、廣く衆會の爲に法説を進講す。普き土は之を見るに譬ば其の日月宮殿の明、盛滿の時を觀るが如し。衆生に徳を種ゆるが故に彼土に生じ、其國の人民は世尊の師子の座の虚空に懸在して所著なきを觀じ、尋いで諸法を解するに亦た空無著なり。爾の時に當りて悉く法忍を得。其の如來は但だ金剛定入の門を説きて聲聞緣覺の雜言あらず、唯だ金剛定を演ぶる所以は、譬へば金剛の著すべきの所は處として降徹せざる靡きが如く、而も彼の如來の説法すべき所も亦た金剛の如く、吟疑住著の諸見を鑽碎すればなり。是の如くにし賢者よ阿耨達佛、若し滅度を現ぜんとせば、其世界の有尊の菩薩の名を持願と曰ふ、當に其れに決を授けて、然して後に滅を現ぜむ其の佛の滅に方りて、持願菩薩は即ち無上最正の覺を得、尋いで佛處に補し、號を等世如來無著平等正覺と曰ふ。其士の所有の神通菩薩及上弟子、衆會の多少は阿耨達の如し。時に阿耨達王の太子、名けて當信と曰ふ。信敬して心に悅欣し寶明珠交露せる飾蓋を以つて如來に進奉し、又手して佛に白さく。誰か當に時に於て持願菩薩と爲るを得べき耶。是時に世尊は王太子の當信の意向を知りて阿難に告て曰く。其時の持願菩薩大士の當に佛處に補すべき者は今の龍王の子、當信なり。時に阿耨達如來は方に滅し、持願菩薩は尋いで佛座に昇り、又た其等の世如來無著平等正覺方に適と佛を得、亦た便ち此法品の正要を轉す。佛の是の封拜品を説く時て當り、四萬菩薩は無從生忍を得、十方世界來會の菩薩、釋梵持世、天龍鬼神は佛の此の封拜品を説くを聞き已りて悉く皆な喜悅、懽心踊躍し、信樂遂に生じ、五體稽首して各宮殿に還れり。阿耨達王は諸太子眷屬と圍遶して伊羅憐龍象王に敕して曰く。如來の爲の故に交露ある琦珍の寶車を造作し、其をして廣博殊妙無極ならしめて當に以つて至真正覺を奉送すべし。尋いで應に教を受けて、軌ち如來の爲に七寶珠の交露車を化作して極めて高大、廣博に嚴飾ならしむ。世尊、菩薩及び諸弟子は悉く車に就きて坐し、無熱龍王太子の眷屬は心に恭格を懷き手に共に車を挽きて其宮中より大地に出づるに如來

【一〇】無從生忍は、無生法忍に同じ。

【一一】五體とは、右膝、左膝、右手、左手、頭首にして五體稽首とは、正しく立つて合掌し、右手を以て衣を纏り二膝を屈し次に兩手を屈して佛足を受け頂禮稽首することなり。

【一二】交露とは、珠を交錯して帳を作れるもの。

【一三】恭格は、うやうやしくつゝしむこと。



清淨品を説き悉く是處に坐して等く亦た今の如くならむ。又た及び前の<sup>一三</sup>拘樓秦佛、<sup>一四</sup>文尼、<sup>一五</sup>迦葉の如きも同く共に此の師子の座に坐し、及び其の最後の<sup>一六</sup>樓至如來も亦た當に此の法品要義を轉すべく、無熱龍王は當に賢劫の千佛を供養して、是法を聞き、諸佛、衆會も悉く同くして今の如くならむ。是阿耨達は後の無數世に諸如來を奉じ、衆の正覺に事へ、梵淨行を修し、常に正法を護り、菩薩を勸進し、然して後、七百無數劫已りて當に作佛を得べし。阿耨達如來、無著平等正覺、通行備足、無上法御、天人師爲佛世尊と號く。是の如く賢者よ、無熱如來の佛と爲るを得る時、其の士の人民は都て貪姪恚怒愚癡なく、相侵すなく、相に短を論ぜず。何となれば然るは、彼の衆生の志行備はる故なり。此の如く賢者よ。阿耨達佛至眞如來は乃ち當に應壽八十億載、弟子衆亦た八十億なるべし。其の始會の清淨たる如く、始より終に至りて異缺減無し。此の如きの比、數百千會、當に通辯受決の、菩薩有るべし。四千億人都て悉く集會し、又た諸の發意の菩薩行者は計數すべからず。無熱如來の當に、佛と爲る時に其土は清淨にして、紺瑠璃を地と爲し、天の金分錯飾は諸寶を用ゐ。衆の明珠を以つて樓閣及び經行地を造作す。彼の土の衆生、若し食想を興さば應に輒ち百味悉く五通を得、其の國處所の人民は居止し、但だ珍琦の被服、飲食娛樂を以ての自由なること悉く第四<sup>一八</sup>兜術天上の如し。彼れ二念ならず、又、貪欲姪行の心無くして諸の衆生は法樂し自ら娛む。其土の人民は都て欲垢無し。若し彼の如來、法説を敷雨らすも勞想有らず、神變無數にして以つて洪化を演べ、永く其難無し。方に適と説法して衆生輒ち度す。何となれば然るは、彼の一切の志の純熟の故なり。又た其如來は自ら三千大千世界に於て唯だ一法にて化して外に異道なし。又た若し如來、衆を會せんと欲する時は、輒ち身光を放ちて盡く其界を明にす。彼の土の人民は尋いで皆な念有り、世尊<sup>一九</sup>尊覺、將に法化を演べんとする故に光を揚ぐるのみと。各々佛の聖神足を承けて飛來して佛に詣でて法を聽くなり。又た彼の如來は終に不定なく大聖神に乗じて忽ち空中に昇り、地を去るこ

【一三】 拘樓秦(Kurukhothana)佛は現在賢劫の一千佛の最首す。

【一四】 文尼は、拘那含文尼(Kunakhanini)佛にて前の拘樓秦佛の次に出世す。

【一五】 迦葉(Kasyapa)佛は拘那含文尼佛の次にいで、この佛の次に釋迦牟尼佛が出世す。

【一六】 樓至(Rudra)如來は賢劫千佛中最後の出世なり。

【一七】 紺瑠璃は、紺青に同じ。

【一八】 兜術天は欲界の天處にして夜摩天と樂變化天との中間にあつて下より第四重に當り、内院外院に分れてその内院を彌勒菩薩の淨土とし外院は即ち天衆の欲樂處なり。

【一九】 宋元明三本に依りて覺來を尊覺と改む。

上りて、唯だ法王を講す。世尊、今、笑ふ。何の瑞應なる。具に誠諦を見て常に信を樂しみ、根定、寂靜にして衆は懼、敬ふ。一切を化度して以つて寂然たり、徳は過無極にして、説いて笑ふす故に、梵聲清徹して甚だ輒和なり。鷲音、商雁にして諸衆を諭え、衆音備足して缺減無し。笑を擲散するが故に宣布し示す。智脱の明は慧度に憑じ、行は常に清淨、樂にして淡然たり。衆の行を權曉して普智具り、賢聖、王を導いて笑義を説く。智辯通達し慧極り無く、力無量を現じて神足備はり、十力已に具りて、普く感動す。天師、笑を現す、何を用つての故ぞ、身光無數に杳冥を照し、大千の衆も明にして蔽ふ能はず、日月及珠火を踰越す。威聖の光、等倫なし。功德満足すること海の如く、菩薩を順化するに智明を以てし、懷慧無限にして衆疑を散す。何を興發するが故に、笑ひ有るや、尊は三界を度して極まり有ること無く、衆生を權導して諸穢を除き、能く欲垢を淨の化して餘り無し。天顔笑を含むは誰の爲にか興せる。如來の由る所、普く感動し、震動せる天龍諸の鬼神は、稽首して法王を。虔禮す。笑意を説いて衆疑を決せられよ。

是の時に佛は昔年の辯辭賢者に告げ給へり。汝阿釋達を見るや不や、如來を供する故に此の嚴飾を造れるを。曰く、然り世尊、已に之を見るなり。曰く、是龍王は已に九十六億の諸佛に徳本を施種し今ま封拜を受く、吾が如し前世は定光佛世尊の所決たり。汝、當來の世は佛と爲るを致すを得て、號を能仁如來無著平等正覺、通行備足、爲最衆祐無上法御、天人師と名け、佛世尊と號はん。是時に龍王は長者の子と爲り其號を名けて比守陀來と曰ふ。吾が受決を聞いて尋で轉じて願を興して、吾をして來世に其拜署を得しむ。斯の若き梵志は是れ定光佛の所決なり。爾時の浮意長者の子は阿釋達是なり。又た斯の龍王は賢劫中に當りて此池中に在りて莊飾せる種々の鮮交衆寶の、天宮室の若くなるを當に悉く賢劫の千佛に進奉せむ。斯の諸の如來は盡く王意を知り、率て皆な此の

【六】元明本に依り、權を惟に改む。  
【七】鷲は鳳凰なり。  
【八】商は明かの意。

【九】十力とは  
知覺處非處智力  
知三世業報智力  
知諸禪解脫三昧智力  
知種種解智力  
知種種界智力  
知一切至所道智力  
知天眼無碍智力  
知宿命無漏智力  
知宿命無漏智力  
知永斷習氣智力  
【一〇】宋元明三本に依りて受を處と改む。

【二】決とは、記別のこと。

【三】賢劫とは、現在の住劫を云ひ千佛出世すと云ふ。



る。斯れを菩薩、無欲心を以つて應に自ら法に歸すと謂ふ。其法性を彼は無數の爲に習ふ。無數とは即ち是れ聲聞なり、又た菩薩の如きは等しく無數を見、其の無數に於て數有らずして亦た不二なるは、斯れを菩薩、無欲心を以つて自ら衆に歸すと謂ふ。是語を説く時、太子感動は柔順の忍を得、來會の色、欲の諸天、龍、人、は此法品を聞き、等く二萬衆と皆な無上正真道意を發せり。

## 受封拜品第十一

爾時に龍王阿耨達は富夫人、太子、眷屬と俱に圍遶して自ら三尊に歸し、都て宮室并に池の所有を以つて世尊及び比丘僧に供へ奉り、以て精舍と爲し、又復た言うて曰く。吾れ今ま世尊、是願を興發す。斯の大池より四河出流して四海を充せり、其れ世尊、四河の流に従ひて若し龍鬼人、飛鳥、走獸、二足、四足、の舍命類有りて此の流を飲まば、願はくは其の一切皆な無上正真道の意を發さん。宿に發せざる者も此水を飲み已りて其行を成ぜしめ、速に佛座に在りて魔衆を降却し諸の外道を伏さんと。時に世尊は笑ひ、諸佛も笑ひ、法口に五色を出す。畜羅突突、光篋無數にして、十方無量佛の世を震照す、明なること日月を踰え、須彌の珠寶、諸天魔宮及び釋梵殿一切の天光盡く翳ひて明無し。是時に無數億千の天衆は悦を懷いて聖覺を發願せざるなし。光は阿鼻諸の大地獄に徹す。明を被むる者有れば尋いで衆苦を免れ、皆な無上正真道の意を志す。還りて世尊を遶ること、乃ち無數の匝にして忽ち頂より入る。爾時に賢者名を披耆と曰ふ、其光明を見て軌ち座より起ちて衣服を整著し、偏に右臂を袒にして佛に向つて跪膝恭檢し、又言ひて世尊を歎頌し偈を以て曰く。

其れ色無量にして見者悦ぶ、人雄、至最獨の世尊は、衆の冥を滅除して大明を與へ、威神を執持して笑意を説く。百福の詠する所、じ、満すを得、智の光明を得て慧の行を演べ、法の爲に

【七】 歸すとは、歸依する意なり。

【八】 宋元明三本に依りて依衆と改む。

【一】 舍命類は有情のこと。

【二】 釋梵とは帝釋、梵天なり。

【三】 阿鼻地獄は又無間地獄とも書く、間斷無く大苦に責められ叫喚の聲滿てり云ふ。

【四】 七はさじなり。

【五】 三本等に依り德を得と改む。

著無きなり。是に由りて欲も亦た清淨なるを知る。須菩提の曰く、云何が族姓子、欲を了知するや。曰く、因縁の起生を以つてなり。其れ因縁無くば爲に生有らざるなり。惟、須菩提、淨念を修せば欲無を了するなり。須菩提曰く、云何が族姓子よ菩薩は應に淨念を修すべしと爲すや。曰く、須菩提、菩薩は行に於て諸行を修す、是れを菩薩の淨念を修する者と謂ふなり。惟れ須菩提、其れ菩薩有りて都て衆生の爲に大徳の鎧を被り、化して泥洹に至り、等しく衆生を見、本より泥洹の如しとす。是れ則ち菩薩、淨念の行を修すなり。惟、須菩提よ、其れ菩薩は諸聲聞及び縁一覺の爲に隨應說法し、是に隨つて化せず。斯れを菩薩の修淨念行と謂ふ。惟、須菩提よ、又た彼の菩薩は自ら其欲を寂し衆生の欲を靜む。是れを菩薩の淨行を修するを爲すと謂ふ。又た須菩提、其菩薩は淨念に在りて不修を見、又不淨に於て修淨を見る。是れを菩薩修淨行者と謂ふ。

爾時に須菩提は王太子感動に謂うて曰く、又た云何んが族姓子よ、菩薩は淨に於て不修を見、其の不修に於て淨修念を見るや。曰く、須菩提、淨念を修する者謂ゆる眼色、耳聲、鼻香、舌味、身更、心所受法を修し、悉く不修を見、法性無二を修と謂ひ。三界著せずして是の菩薩は住し。住するに善權を以つてす、斯れを修念と曰ふ。菩薩、此行を作せば、須菩提よ、則ち淨念行を修する者と謂ふなり。是に於て世尊は太子を敷て曰はく、善いかな、等いかな、若、正士感動の所言の如く修淨は斯の如し。是れを菩薩は淨行を應修すと爲す。今の所説の若きは皆な佛の威神なり。其れ菩薩有りて修行すること此の如くむば。是れ乃ち應に大乘の行を興すべし。當に知るべし、斯輩は堅固普智なり。是に於て太子感動は佛に白す。云何が世尊、菩薩は無欲の心を以つて自ら佛に歸するを得るや。佛、曰はく、族姓子、若し菩薩有りて諸法の我人壽なく、無色無想にして、亦た無法相なるを了知し、性法に於て如來を見ず。是の如き菩薩は應に無欲にして自ら佛に歸命すと爲す。如來法の如く彼則ち法性、其の法性の如く普き所至となる。是法性の法を致すを得る有れば則ち諸法を知

【六】泥洹は(Nirvana)の譯にして涅槃のこと。



疾く佛座に近づかしめ、三界を濟度す。是法を説く時、會中の菩薩七千人は不退轉を得たり。

## 衆要品第十

時に阿耨達龍王の太子其の名を感動といふ、前みて佛に白して言さく。今ま我れ世尊、無貪心を以つて自ら三尊に歸す。願くは是經をして久く世に住せしめ給へ、正法を護らむが故に。惟、世尊、志は無上正眞道意を發す。願くは斯行に造りて樂興り之を達し、心本を了するを得、道本及び諸法の本を明曉し、自ら成佛最正覺を致し、廣く道を宣へ衆生を化潤せむ。又た惟、世尊、其れ諸菩薩、此清淨大道法品を聞いて而も信樂せず、奉行せざる者は當に知るべし、斯輩の菩薩の類は魔の魔まふ所たり、亦た疾く普智心の行に近くを得ず。所以はいかん、斯の世尊法品の要義に従り出生する菩薩は自ら成佛を致し、魔外道を伏す、去來、現在の諸佛正覺も皆な是法に由ればなりと。爾時に賢者須菩提は太子感動に謂ふ。仁、賢者の如きは心本を了解し、道本及び諸法本を明盡す、若し其れ諸法を覺るを成ずるを得るは、此れ何れの心本にして了するを得るや。曰く、其本は唯、須菩提よ、是本は心本を以てなり。須菩提の曰く、心は何をか本と爲すや。曰く、姪怒癡を本とす。曰く、姪怒癡は何をか本と爲すや。曰く、念無念を以つて本と爲すなり。須菩提曰く、云何が賢者、姪怒癡を本として其れより無念の興起し生ずと爲すや。曰く、須菩提よ、姪怒癡の本は念無念ならず亦た生ぜざるなり、又た其本は不起を本と爲す。又た須菩提よ、言ふべき所の者は此れ何か。心本なる、心本なるもの其の本は清淨なり。斯れを心本と謂ふ。もし、本清淨なれば彼れ姪欲、恚怒、癡垢なし。曰く、族姓子よ、欲の生起は彼れ何に従て生を生じて、常に生じ、生じて斷なきが如きや。曰く、須菩提よ、其欲は當生にして己生の生なり、心本に於ては著して生ずること有らず。惟、須菩提よ、若し彼の心本に、其れ著有らば則ち終に清淨に至るを致す者なし。是の故に心本は都て

【一】三尊とは、佛法僧なり。これ尊重すべきものなれば三尊といふ。  
【二】宋元明三本に依りて唯を惟に改む。

【一】姪怒癡は、貪瞋癡に同じ。三毒の煩惱なり。

【四】不起は、無生に同じ。

【五】明らかにすべきは何が心の本なるかと云ふことであるとの意。

寂は靜冥にして寂不寂なく、亦た其の亂無く、等く諸行を過え、心意識なくして本願に違はず、普智心に昇りて、等く衆念を離る。衆生の種々の意行を權曉して賢聖を得る者、及び非賢聖は勤めて精進を以つて正聖法を立て淫泆いんじつの行無く建志し捨てず、寂と不寂と等く皆な濟度し念不念なく、其の整はざる者は佛土飾嚴整して之を立つ。過俗向脫の脫は俗を離れず。是の如し龍王、智權を執するを以つて賢聖定有り。是れを菩薩修應向脫と爲す。

譬ば龍王聲聞の行の修應向脫の如し。名けて往還と曰ふ。以つて其道を成じ前進して無上を發し大悲を建立して衆生を化すること能はず。其の菩薩の如き亦た修脫に應じて復た動搖なく、不退轉の往還を成ぜんか。龍王、修應向脫は疑なく會して當に道果に至るを得べし。又た菩薩の修應向脫の如きは都て聲聞の果を忘せずして菩薩の道を受く。是を以て聲聞所修の向脫は其限有りと爲すに、菩薩の如きは永く其限なし。譬ば龍王よ、二匹夫有りて峻山の頂に在り自投を欲するが如し。其一人は力ちから最勇悍、權策通捷、宿習機宜にして諸變を曉了し、事として貫かざるなし。其の峻山より己れ自ら投じ、忽爾として復た還り彼の山頂に住す。其の勇勢に由り爽健猛達、身昇最力、輕轟翻疾、強慄ちからの致す所る墮無からしめ、亦た所住せず。其一人の如きは、志は怯、意は弱にして亦た權謀なく、山上に於て自投する能はず。是の如し龍王、其れ菩薩は空無相願に於て諸法を觀みて作念する所無し。是の如く觀みじみつて又復た能く權慧の力を以つて衆生の爲の故に普智心に住す。其の峻山は是れ無數と謂ひ、其の慧博達にして大力を顯す者は譬ば權慧を執して行ずる菩薩なり。其れ權慧の菩薩行を修する者は生死に處らず、無爲に住せず。是れ菩薩の普智鎧を被ると謂ふ。生死に入りて衆生を插拔し菩薩大乘の行を發さしむるが如し。其の劣弱なる者は彼の山上に住して返還する能はず。之を譬ふれば、聲聞なり。生死に入らず、衆生を益する無し。是の如し、龍王。其れ菩薩ありて是の脫慧の要行品を聞くもの、斯の輩を世尊は皆な無上正真道意を堅固にするを得しめ、

【九】 最は力の大なる意。



然も是の菩薩は凡夫の學無學處に住せず普く諸處に入り、習度して倦無く、欲處に於て其の姪行、患處、無く、怒癡處ならず、愚ならず、處所に於てせず、以て欲に住する無く衆の欲際を離れ、諸姓を御持して衆生を導化し、自らは欲垢食著の穢行無く、彼、魔界及佛界に於て并に自然の相にして疑惑なく、亦た其法性の處を念はずして普く彼の衆生の界に現じて諸の處、法非法の處を了知し、行處に曉入し、慧を以つて觀じ、行の處、及び生死の處に於ても亦た生死せずして、生死に入隨す。所在の諸處にて爲に徳本を造り、守るに靜にして疲れず、生死を解知して而かも生死無く、賢聖修應を以つてせずして而かも脱せしむ。

時に阿釋達は濡首に謂つて曰く。如仁、濡首是言を作さば菩薩は修應を以つて向脱せず、其の是の學を曉るは斯れ則ち菩薩の修應向脱なりとせば、何をか菩薩の修應向脱と謂ふや。濡首、答て曰く。不退轉を得る、是れを菩薩修應向脱と謂ふ。又復た龍王、菩薩は有念未脱を曉知し、諸の隨念衆生等の爲の故に精進を建立して無念を轉じ化す、吾が我あるを言ふは亦た未脱と爲す。又復た龍王、其の菩薩は已に吾我なく、諸の縛著衆生の類に向ふ故に、爲に大悲を起して以つて之を度し、彼の生死を見るに、都て生死無く、諸所に生を生ずるも、其れ無生なるを以つて、衆の無生を生じて皆な等しく見る。諸の著に倚る衆生の爲の故に現身受身し、永く其生なく亦た終有らず。是の慧の菩薩の修應向脱は權に執し還つて生死に還住し、現在所身受身の處に愚冥を濟化し、導くに智慧を以つて罪苦を免るゝを得。菩薩は空を以つての故に應寂向脱し、權を以つて還りて生死に反り、諸の衆生の爲に大悲を興發す。菩薩無相の修應向脱は權を弘めて還つて生死に還遊し、諸の隨念衆生に向ふの故に爲に大悲を起す。菩薩無願の修應向脱は權を執して還つて生死に還住し諸の隨願衆生の類の爲に大悲化を向發して無願の脱を行す。龍王、菩薩は無所有の法に曉入して衆生を捨てず、我及び人命壽なきに入り、道場を忘れず、無量果に曉入して大人の三十二相を致し、終に

【二】 學無學とは眞理を研究して妄惑を斷ずるを學と云ひ、眞理究り妄惑斷盡して更に修學すべきなきを無學と云ふ。

【三】 三本に依り、識を諸と改む。

【四】 徳本はまた善根と云ふが如し、諸善萬行の功徳佛果菩提の本となるもの。

【五】 不退轉は(Avatyanti)の譯にして所修の善根功徳に於て愈々増進し退失轉變せざるを云ふ。

【六】 他人の苦を見て救ふ心を悲と云ひ、佛菩薩の悲心は廣大なるを以て大悲と稱ふ。

【七】 無所有とは空のこと。

【八】 三十二相は大人の相にしてこれに具する者は家に在れば輪王となり、出家せば最勝覺を開くと云ふ。

## 卷の第四

### 不起法忍品第九

時に阿耨達は濡首に謂ふて曰く、不起法忍は當に云何が得べきか。濡首答へて曰く、忍は色、痛、想、行、識を生ぜず。是れを菩薩の不起忍を得と謂ふなり。又復た龍王、菩薩所得の不起法忍は等く衆生を見て以つて是忍を致し、彼の衆生を等くして、其の所生の如くし、等く衆生を見て亦た生有るなく、等く衆生を見て以つて自然の如くし、等く一切を見て其の相の如くし、亦た等と與にして其等を見ず。是れを菩薩の等見忍空と謂ふ。云何が空と爲す、眼は以つて色識、耳の聲識、鼻の香識、口の味識、身の所更識、心の受法識なり。如諸情空ならば其忍も亦た空、過の忍も亦た空、現の忍も亦た空、其れ如忍、空ならば衆生亦た空。何を用てか空と爲す、欲を以つて空と爲し、恚怒癡も空、如衆生空ならば顛倒は亦た空、欲、垢、起、滅亦た悉く空と爲す。是の智行を作すは斯れを菩薩行と謂ひ、不起法忍に應ずる者なり。其等の衆生は已に應に脱に向ふべし。何ぞ則ち是の如き。又た彼の菩薩にして是念を作すは如、其れ已に空に至れば、我が垢及び諸の衆生は空無所有なり。欲を御して此の如くば是欲已に脱し、本に於て自ら一切衆生なし。此の如きの忍は欲に於て自在に以つて是欲の根を脱し、寂して處する無く其れ永く滅せず、脱不脱なく亦た脱に至るを得る者有る無きなり。斯の若く永く脱せば、則ち彼れ是の故に住處自然なり。又た此の龍王、若し菩薩有りて行じて忍に應ぜば一切を拔度して其勞あらず。所以はいかん、諸の衆生は本より都て縛無くして、本に於て自ら脱するを見ればなり。彼れ此念を作す。是諸の衆生は悉く一欲に著し、行する者は著せずして本法を脱す、一切衆生は其の不諱妄想の念に著すに、菩薩は此を了して終始著無く已に本法を脱すと。又復た龍王、不起法忍を得たる菩薩は未だ佛の要行處に達すを得ずと雖も、

【一】宋元明三本に依つて以を已に改む。



るを以てなり。時に阿耨達は濡首に謂ひて曰く、善き修行者濡首童子よ、斯れ之の菩薩は是法を逮た聞きして佛を得るに難からず、進み已つて人を勤め道を勤め倦むことなし。

何をか菩薩は應に善行を修すべしと謂ふや。濡首、答て曰く、是の若し、龍王よ、貪行空なる如く施行亦た空なり、等く此れを解する、是れを善行と謂ふ。約して之を言はば、不戒と戒と、懷悲及忍、懈怠精進、亂意と一心は其の愚、空なる如く、智慧も亦た空なり、是等の行に於ける、斯れを善行と謂ふ。又復、龍王よ、其の姪欲、恚怒、愚癡の之を空と爲すが如く、其の姪欲恚癡なきも亦た空なり、參行空なる如く、無雜も亦た空なり。其等に於いて行する、是れを善行と謂ふ。又復た龍王よ、八萬四千の行の如き空なり。賢聖の正脱、亦た悉く空と爲す。斯等に於て行する、是れを善行と謂ふ。又復た龍王よ、若し明賢有り菩薩の行を修するに、行なく不行なく、亦た行を見ず惑行有らず、亦た念行なく又た行を知らず。是等に於て行する、是れを善行と謂ふ。無熱龍王は濡首に謂ふて曰く、云何が童子よ、菩薩は無所行を行するか。答て曰く、龍王よ、若し初め發意して菩薩道を行じて佛坐、所行の功德を得るに至るは悉く初行不生の行、無受處の行、無獲捨の行、無隙の行、又た無著行、亦た無諍行、無有限行、亦た無惑行、又た無姪行、無所作行、亦た無持行、無審の行、亦た無底行に由る。是れを菩薩の無行の行と謂ふ。若し菩薩、不生の行を以て、行不行無く、三十七品を得て造作する所無く、慧を以て脱し、永く脱を得ると謂ふ。斯くの如きの行、此れを善行と謂ふ。是語を説く時三萬四千の天龍鬼神の菩薩行者は、無從生法樂の忍に逮べり。

【一〇】 三十七品とは能く涅槃に至る道法にして四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺支、八聖道なり。  
 【一一】 不起忍は無生法忍に同じ次の註參照。  
 【一二】 無從生法樂之忍とは無生法忍 ことにして、生滅を遠離せる眞如實相涅槃眞實の法に安住して動かざるを云ふなり。

時に阿耨達は濡首に問ふて曰く。仁尊濡首よ、來りて如來を奉じ何等の像と爲し、如來を觀するや、色を以て觀するや。痛想行識にて如來を觀するや。答て曰く、不なり。以て之を約言するに色の苦觀なるや、痛想行識以て之を苦觀するか、滅色痛想行識觀なるや、空無相願行を以つて如來を觀することを爲すか。答て曰く、不なり。又た問ふて云く、云何が去來、現在、相好、肉眼、天眼、慧眼は如來を觀するか。答て曰く、不なり。云何が濡首よ、何等の相を以つて如來を觀するや。答て曰く、龍王は如來を觀じて當に如來の如くなるべし。又た曰く、濡首よ、如來は云何なるか。曰く、如來は無等の等なり、等は見るべからず、無雙を用つての故に妙なり、龍王如來は極尊、無偶、無雙、無比、無喙、無疇、無等、無巨、無倫、亦た色相なく其れ無像たり、無形、無影、無名、無字、無說、無受なり。是の如く、龍王、如來は此の若し、當に是の觀を作して、如來を觀すべし、亦た肉眼、天眼、慧眼ならずして如來を觀ぜよ。所以は如何、其肉眼は明を見るを以ての故なり、如來の如きは冥なく明なき故に肉眼を以て觀すべからず。又た天眼は有作の相にして如來の如きは等過して住無き故に天眼を以つて觀すべからず。又た慧眼は本無の相を知るも、又た如來は衆都て永無の故に慧眼を以つて觀すべからず。云何が濡首よ、其の如來を觀じて清淨を爲すを得ん。曰く、龍王の若きは其の眼識心の起あらざるを知り、又た色識心の起滅無きを知り、其の是觀を作して如來を觀するに清淨なるべしと爲す。爾時に其の寶英如來の寶飾佛土より菩薩の來れる者未曾有を得て皆な歡じて曰く、甚だ快妙なるかな。斯れ諸の衆生は善く如來に値ひ是の如き龍王所問の決狐疑品を遠聞し、聞き已りて悅心し、恐れず怖せず、又た驚怪なく、加へて復た受持、諷誦、宣布す。是の如き正士應に慧著在るべし。吾等は世尊よ、空しく此に至らずして是の要無極の像法を聞くに値ふ。又、若し世尊よ斯法の至る所の聚落國邑は當に知るべし。其處に如來は常に在りて終に滅度せず、正法毀する無く道化興隆せむ。何となれば然るは、此の法品は能く魔場を降し諸外道を伏す

【九】痛、想、行、識はこれに色を加へて五蘊と云ふ。痛は又受と書く、境に對して事物を受込む心の作用なり。想とは想像作用なり。行とは對境に食曠等の感情を起すを云ふ。識とは境に對して了知識別する心の本體なり。



寧ろ辯ずる有りや。曰く、無なり、童子よ、因縁の起のみ。曰く、云はざるか、惟れ大迦葉、一切の音聲は響の若きや。曰く、爾り。濡子又た曰く、響辯は致すべきや不や、曰く、致すべからず。又た曰く、是の如く惟れ大迦葉よ、菩薩は權辯の才を協懷し、不可思議にして、亦た其の斷なし。耆年の問の如く劫より劫に至り、耆薩の機辯は究盡すべきこと難し。爾時に迦葉は佛に白して言さく。唯だ願くは世尊、勸を濡首に加へ、此の大衆の爲に説法を講じ弘め諸の會衆の長夜をして安きに致さしめ、普く一切に明なる法要を得しめよ。是衆中に於て大菩薩有り。其名は智積といふ濡首に問うて曰く。何故に童子よ、長老迦葉は年耆極めて舊く、所言は怯弱微劣に、乃ち爾爲すや。何を以つての故に之れを耆年と名づくるや。濡首答て曰く、是れ聲聞のみ、故に果辯せず。智積復た曰く、斯れ大乘の志を發すを知らずや。曰く、永不なり、惟れ聲聞乘の脱を以つてなり。又た濡首、何故に名けて聲聞の乘と爲す。濡首は答て曰く、是の族姓子世尊能仁は諸の衆生に隨ひて三乗の教を興し、敷べ以て説法するに聲聞乘、緣一覺乘、及び大乘の行あり、然る所以の者は此の衆生は意多く、貪を懷き、志の劣弱に由つての故に三の行を説くのみ。智積の又た曰く、云何が濡首よ、空相の願の如きは都て其限なし、何故に之に限りて三乗あるや。曰く、族姓子、是の諸の如來執權の行、空無相願は其限有らざるに、諸の限に著し而して諸の限有るを爲して終に無限を限らざるなり。曰く、又た濡首、我等は退くべし、永く劣志の衆生と會あるを得ざらしめん。濡首、答て曰く、諸の族姓子、且く忍べ、當に無熱龍王に従ひて其の智辯及び無量の法を聞くべし。耆年の迦葉は智積に謂つて曰く、云何が正士、彼の寶英如來の佛土の如き云何が説法するや。智積答て曰く、唯一法味のみ、其の一家従り、無量法義の音を演出す、但だ菩薩の不退轉法を論ずるのみ。諸佛奧藏の要行の論は己が取脱に従ひて衆雜に由らず、普智に依りて永く餘の脱無く、恒に菩薩清純の談を講じ、其士は都て法弱の行なきなり。

を見、又た龍王所問の莊節道品の入法要説を聴くを志樂たのしみみ、其れ世尊は廣く法言を勸め其れ 歡悅たのしみせしむと。是に於て濡首及び諸菩薩は虛空より下りて悉く正覺に詣で、如來を稽首して欣心肅敬し、世尊の前に住す。爾時に天師は濡首に告て曰く。童子來るか、何をか志す爲の故に諸菩薩と俱に此に至るや。濡首、佛に白す、吾等は世尊よ、彼の寶英如來の佛土寶飾世界に在りて至眞能仁如來は慈を十方に垂れ斯要を演説するを承聞す、是法を聞く故に尋いで彼土より昇り此處に遊詣し、天師を禮し奉り緣して如來の講ずる所の法を聞くなり。迦葉は佛に白さく、世尊、寶英佛土寶飾世界の如きは近くして諸大士は忽ち此に至るや。濡首答て曰く、惟れ迦葉の一定に坐する時の如き其の神足飛行の力を極め、其壽命を盡して、中に於て滅度するも猶ほ彼土に達し到る能はず、其國の境界弘遠なること乃ち爾り。佛、迦葉に告げ給はく、其土は此を去ること六十恒沙の佛刹を過え、乃ち寶英如來の佛土に至る。曰く、其の來ること久如にして此に到るか。答て曰く、久如たり、耆年して漏盡きて意に解を得るなり。大迦葉曰く、甚だ未曾有なり唯だ然り、濡首よ、是の正士の神足は斯の如し。濡首は又た曰く、耆年にして漏盡、意解するに久如なるや。答て曰く、其れ轉意の頃まわりのの如し。又た曰く、耆年にして意已に解するか。答て曰く、已に解す。濡首、復曰く、其れ誰か心を縛して解有るや。答て曰く、濡首よ、心結の解を以て、脱するに非ず、解有れば慧見を致すなり。曰く惟れ迦葉よ、其の無縛の心は何を以つて解するか。迦葉は答て曰く、心の無縛を知るは斯れ則ち解と爲す。曰く、惟れ迦葉よ、何等の心を以つて云何が心を知り、過去を知るや、當來、現在をや。去は滅盡し、當來は未だ至らず、現在に住なきに何等の心を以つて其心を知るや。曰く、心已に滅せば是れ濡首よ、即ち身心の計數無きなり。曰く、賢者の心は其滅を知るや。曰く、心の滅は得知すべからず。曰く、其の都て滅心を致すを得ば彼永く身識の得を有する無し。曰く、大辯哉、濡首童子よ、吾等の微劣は豈に能く土の辯の辭に答ふべけむや。濡首又た曰く、云何ぞ迦葉、響は

【七】宋元明三本に依りて體を歡と改む。

【八】宋元明三本に依りて志を士と改む。



## 決諸疑難品第八

爾時に賢者 須菩提曰く。諸の族姓子よ、又、如來は滅度を爲すや。曰はく。須菩提よ。起生の處に於ては當に其の滅あるべし。須菩提曰く。諸の族姓子如來は生あるや。曰く。如來は其れ本無の如く、無生にして生ず。須菩提の曰く、如本無の如く無生、不生ならば彼れ都て無生なりや。答て曰く、是れは須菩提よ、則ち佛の所生は其れ本無の如くして生有らず。須菩提の曰く、佛の生は是の如し、滅は復た云何。答て曰く、亦復た是の如し。本無の如く無生を生じ、無爲滅度も亦た爾く本無なり、惟れ須菩提よ不起にして生じ滅度も亦た爾なり。是の如く、其滅も亦た爾く本無なり。是語を説く時に無熱淵池に大蓮華を現じて車輪の如く、敷は無量種々の色有り、名業寶を以て用ひて光飾し、諸華間に大蓮華有り、色最も暉明にして奇異の好を現じ特獨踊高す。賢者阿難は無熱大池の中に在りて其の變化を親て所見斯の如くして尋いで世尊に啓す。今ま此變化は何の瑞應にして其の感動を興すこと乃ち此の如きや。如來、告て曰く。且く忍べ、阿難よ、自ら當に之を見るべしと。説の適に未だ久しからずして、忽ち下方より、乃、實英如來の佛土寶飾世界に於ける六萬菩薩は、濡首と俱に忽然として涌出し、能仁の界に遷り、無熱大池の中に昇り、各妙なる大蓮華座上に現じ、濡首童子即ち蓮華高廣の顯座に就く。是時に衆會皆悉く之を見て愕然として驚く。時に阿耨達及び諸菩薩、釋梵持世、來會の諸衆は悉く各々又手し稽首して濡首童子を敬禮し、退いて虚空に住し共に珠寶、交露の蓋を持つ。時に濡首は諸菩薩と俱に蓮華座に並び、亦た虚空に踊り、地去ること乃ち遠く、上に於て未だ會て見ざる所の最妙の蓮華を雨して如來に供養するに、諸華の中より聲を出す有りて曰く、寶英如來は問訊す、世尊は起居無量、體祚康強、神力安和なるか。聲、復た言て曰く、濡首童子は諸菩薩六萬人と俱に、忍土に往詣して無熱龍王の淵池に至りて彼の感變

【一】 須菩提は佛弟子中解空第一と稱せらる。

【二】 宋元明三本に依りて是の字を加ふ。

【三】 阿難は佛弟子中多聞第一と稱せらる。

【四】 濡首とは文殊師利菩薩なり。

【五】 能仁とは釋迦牟尼世尊のこと。その界とは即ち娑婆世界なり。

【六】 忍土とは娑婆世界のこ

るを得るなり。又復た無憂は四精進ありて正法を持するを得。何をか謂うて四と爲す。法を求めて精進し廣く勤めて說法し、法師を敬禮す。若し法を毀する人あらば正法之を降し、亦た精進を以つてす。是の四精進にして正法を持するを得。時に阿耨達の五百の太子は佛の是を説くを聞いて悦懽欣喜歡樂無量なり。同聲して言く、如來の所説は甚だ善く無比にして諸の狐疑を解す。各宮室及其の官屬を以つて盡して以つて佛に上り所應を給し奉り敬順の心を以つて重て言うて曰く。今より世尊よ、當に勤めて受化すべく永く常に倦無けん。如來無爲の後に至り佛の所説は是れ實法に像どる、當に共に敬受すべく、是經の要品は通達を求索め修行を勸進す。斯れ則ち世尊よ、吾等の至願にして、又た若し如來無爲の後に吾等聖尊在所の國邑に共に心を同くして舍利を供養し護奉して禮敬し滅を現するに至るべきなり。是に於て賢者、青年、迦葉は諸の太子に謂ふ。又賢目等、仁輩の言の如きは、獨り全く如來神身の舍利を供養せんと欲す、汝達の是の言は多く、衆生諸徳の本を斷じ、明淨を障蔽し、道の化に至るを驕りて、是の言を興さしむ。何となれば然るは又若し如來の本始の願を造りて舍利を留め布いて芥子の如くならしめん、諸の衆生に大悲を降す爲の故には何ぞ全く獨り供養するを得んや。彼の正士等は則ち賢者大迦葉に答へて曰く。唯だ然り、迦葉よ。聲聞の所有の智限を以つて如來の深遠無極明達の慧を限る勿れ。所以は如何、如來の若きは普智心ありて、一切の見る處、神足を以つて感動變化す。若し其れ念を興し能く三千大千世界の天龍鬼神をして各宮殿に於て普く完全に舍利を安置せしめ、各念言をして吾れ獨り如來の舍利を供養す、其餘は不なりと。又復迦葉よ、若し世尊の無爲の後は衆生心に隨て應に舍利を安置すべし。又復た迦葉よ、若し如來の徳は阿迦膩吒天上に至りて舍利を立置せんに、其れ芥子の如くなるも能く普く明かに一天地内を照さん。是れ佛世尊の神威變化の感動力なり。

【二五】狐疑とは疑ひ深くして決する能はざるを云ふ。

【二六】無爲とは涅槃のこと。

【二七】青年とは長老に同じ。

【二八】迦葉は佛弟子中の最年長者にして頭陀第一と稱せられ付法藏第一祖なり。

【二九】阿迦膩吒(Akamīśha)は色界十八天の最上天なり。



の要行を發求し、彼亦、久しからずして轉法輪を得べしと。是に於て衆中の是説を聞く者萬二千有りて皆な無上正真道意を發し五千の菩薩は法忍を逮得す。

是に於て世尊は諸賢に告げて曰はく。又た正士等は其の正法を護り正法を受持し正法を營護す。是れを護法と謂ふ。所以はいかん。永く無滅に於て是行に應ずれば天及び世人終に當る能はず。時に無憂は前みて佛に白して言さく。又、世尊よ、斯くの若き正士は是の如き法を以つて最覺を得、其の本無に於ては惑者あらず。又、是の如き像、諸の正士等は當に共に擁護すべし。護る所以の者は諸の正士をして其れ速に此大乘に應ぜしめん。彼れ皆な行じ已つて轉法輪を得、又、能く識法の大明を興す。是故に世尊は斯等の教、要法の正護を以て大乘を發さしめ以つて法師を護り安救、敬禮し禁戒を順聽す。是時に世尊は無憂龍王子を讚歎して曰はく。善いかな、善いかな、無憂正士は諸の大乘を發して法師と爲る故に安救擁護す。是は護法と謂ひ、諸法師の爲に正法を營護し正法を護持す。又復た無憂の正法を護る者は十功德を得。何をか謂ひて十と爲す。其れ自大なく貢高を降下し、又た恭敬を行ひ亦た詔の行なく、勤思して法を樂しみ志慕して法を習ひ、專意して法に隨ひ、法を行觀し、説法を宣るを樂ひ、行法を修するを樂ひ、所至の乘に隨ひ、順ひて之を説く。是れを十行と爲し以つて正法を護る。又復た無憂は十事の行ありて正法を得護す。何をか謂ひて十と爲す。若し族姓子、及び族姓女に於て、聞く所の法師は遙かに其處を禮し、思樂つて奉するを得、來りて軌ち敬愛し、欲する所の衣被飲食を供給し、護るに諸事を以つてし往詣して謙敬し、所説を順聽し以つて同學を宣べ、其の非を説くを障へ、常に樂つて稱歎し譽を流布せしむ。是れ十事の正法を護るを得と爲す。又復た無憂は四施行有りて正法を護るを得。何をか謂ひて四と爲す。筆墨素を施して法師に給與し、衣被、飲食、牀臥、醫藥を衆所に供養す。若し法師に従ひ所説の法を聞かば無諂心を以つて之を讚善し、所聞受持し廣く人の爲に説く。是れを四施と爲し、正法を持す

【九】 無上正真道は (Anuttara-samyak-sambuddhi) の譯にして一切法を覺知せる無上の正覺なり。

【一〇】 法忍とは今迄信じ難かりし理を信するを得て惑の出でぬやうになりこれに依つて諸法を照明する眞智を決定すること。

【一一】 宋元明三本に依りて興を興と改む。

【一二】 宋元明三本に依りて本を大と改む。自大とは自ら尊大なるを云ふ。

【一三】 詔とはへつあひおねること。

【一四】 素は白色の生帛なり。

耳聲、鼻香、舌味、身更、心法諸情の轉隨を以てせずして轉あり。此を以つての故に彼は無二の輪なり、若し二あらば則ち法輪に非ず。又た其の法輪は亦た過去、當來、現在の著する所にて轉ぜず、是れ無著の輪なればなり。又た其法輪は我見の轉ならず、是れ無想の輪なり。又た其法輪は欲界<sup>三</sup>形是れ空輪と爲す。又た其法輪は識行想の滅念の轉ならず、是れ無想の輪なり。又た其法輪は欲界<sup>三</sup>形無形界の所望に於て轉ぜず、是れ無願の輪なり。又た其の法輪は衆生の異有るを計して轉ぜず、二法に處して是れ凡人の法、是れ聖戒の法、是れ聖聞の法、是れ緣覺の法、是れ菩薩の法、是れ佛法と爲さず、彼れ是を以つての故に無畏輪と爲す。又た其の法輪は有住法輪を以つて轉ぜず、斯を以つての故に無住輪と爲すなり。法輪の名たるや、諸賢者等よ、眞諦正輪は常に毀なき故に、要義の輪は三世に等しき故に、無處の輪は諸習見處の等く過ゆるを以ての故に、寂寞靜輪は身心無著、不可見<sup>四</sup>輪、意識の離の故に、無<sup>五</sup>隙の輪は五道に處せず、審諦の輪は諦現なき故に、行信の輪は等く衆生を化し用て欺無きが故に、不可盡輪は字無字の故に、法性の輪は其の諸法の法性に依る故に、本積諦輪は本無積の故に、本無の輪は本無の如き故に、無所造輪は念<sup>六</sup>漏無き故に、無數の輪は至聖に導く故に、如空の輪は明に内を見る故に、無相の輪は外念なき故に、無願の輪は内外なき故に、不可得の輪は<sup>七</sup>過度を修する故に。又、諸賢者よ、其れ如來は此法輪を以つて、之れを衆生諸の意行に轉するなり。其の轉、不轉は彼れ、不可得なるも法として捨つる所なし。

時に世尊の是の轉法輪品を説くの時、天龍鬼神及び諸種の神は欣心踊躍し如來の斯法を顯光し讚揚し皆な同聲して曰く。善い哉、世尊よ、甚だ値ひ難しと爲す。如來、示説して此法輪を轉す。聞く者は奉行して則ち法輪に應ず。是法は轉空虛の輪と名く。諸の<sup>八</sup>已過の佛及び當來と、并に諸の現在は悉く是法に由る。其の信有る者は斯れ則ち已度し諸に此の法を行す。吾等の世尊は其に代りて彼の諸の衆生を勸助せり。其れ是心を興して、常に斯の法輪品を聞かんと欲する者は當に是の道

【三】形、無形界とは、色界無色界を指す。色界とは欲界の食、婬二欲を超越せる有情の住所にして身體、宮殿等悉く精好殊妙なりと云ふ。無色界とは色即ち物質的のものは一つも無く唯心識を以て深妙なる禪定に安住する所なりと云ふ。

【四】宋元明三本に依りて轉を輪と改む。

【五】宋元明三本に依りて標を隙と改む。

【六】漏は煩惱の異名なり。

【七】過度とは自ら生死を出で又人をして生死を出でしむるを云ふ。

【八】已過は過去のこと。



に値ひ奉り、所處に惡有ること無く、以つて色行を造らず、佛世に値ふべきを得ん。色無く處あらず、不來にして亦、不去なり。色に於て生有るなく、不滅にして亦、無住なり。當に來るべくして所至無く、佛の廣演說に値ふ。五陰も亦是くの如し。習を化して無生を轉じ、佛に値ひて當に散說すべし。慧達の諸菩薩は其身及び諸情は亦、習するに無生を以てす。佛興るも無生を以てし、常に諸の墮生を救ふ。癡は生有ることなく、生死亦、斯くの如し。是縁は本無の如く、法に従ひて佛あり。無起にして生あらず、不滅にして住あること無し。是を以つて無處を知り、處亦、見るべからず。斯れ亦、自生ならず。三興佛と博演と志無ければ住有らず、是れ亦、佛の轉する所なり。諸種も亦是くの如し。佛種は如法に順ず。斯類も亦起無く、佛の如くして等く興る。其の行是くの如くんば、佛興爲するも此の若し。斯の大を悅信する處、其の限は得べからず。

## 轉法輪品第七

爾時に世尊は太子等又諸の賢者に告げ給はく。何をか菩薩、轉法輪を得ると謂ふや。其れ、布露有りて是の如きの像法に樂みて句義を説き、受持して修するを忘れずして之を行ふ、諸有の大悲の意を發さざる者には爲に普智を興し、衆の願に隨順して爲に之を説きて廣宣布示す。志は倦有らずして忽ちに利養を棄て勸念し、時に順じて受持護行す。斯れを菩薩轉法輪に應ずと謂ふ。又た如來の轉する所の法輪の若し、其の法輪は像を行じて徳に入る、粗、剖說すべし。起法を以つてせず亦た滅法せず、凡夫下劣の行法を以つてせず、亦た復た賢聖の法を以てせざる故に法輪を轉ず。又た其の法輪は斷絶に中らず等く善惡を斷ず。彼は是を以つての故に無斷の輪と爲す。又た其法輪は眼色、因縁の起なれば起不起ならずして其輪有り。斯を以ての故に無起の輪と爲す。又た其法輪は眼色、

【三】 三本並に官本に依り、  
興を興と改む。

【一】 布露(Purāṇa)は人、或  
は丈夫と譯す。

【二】 無斷とは常住のこと。

こと其の師の如し。心は宿に善く虔恭<sup>けんきやう</sup>、知足して遺す所なし。其心は常に無念に、志す所は惟、道法のみ。生死を厭ふ者あれば、引いて無爲の徳を示す。脱の當に行すべき所は惟、常に求めて悦心す。速に是の世を離れ、梵行を修して倦無し。諸の衆生を懷受して、彼を救つて利望なし。當に受けし所の恩に報ずべく、悦信して當に勤求すべし。己利は以つて悦ばず、亦、彼の供を嫉ます。仁忍して悉く備へ、諂なく質直を調へ、信じて自ら見る所を行じ、背いて人の短を説かず。根は寂し性は安じて敏に、志して閑居を悦樂し、其心、憤鬧なく、自ら勵みて恩行を備ふ。先に順じて諍あらず、内に省みて己の過を刻す。勤求して戒行を具へ、専ら定道を習ふ。悦信にして樂行を慕ふ。信者の相、是くの如し。其の俗信を過ゆる者は、彼れ行じて此を解し、法と與に諍ふことあらず。深妙なる佛の所説は誠信にして空を信じ、彼都べて衆見なし。諸法は相あること無く、意せずして衆念を離る。當に諸念を斷除すべく、去來の事を覺了す。法は永へに著作無く、身心に有らず。信は無欲の法爲り、我人壽命を離る。信者は本無を解し、不二の處に至るを得。其本は積有ることなく、體無なること虚空の若し。諸法の信も亦然なり、便ち法性に同す。等く三世を過え、諸法は漏有ること無し。欲處及び食も與に、信を樂みて受見なし。諸法に著あらず、其本は明に清淨なり。客欲は能く蔽ふこと無く、心の有住するに處せず。諸法は見るべからず、因縁にして起無し。常に高行を觀じ、所住の短を受けず。合無く離あらず、脱者は合同なし、空法を信悦す。愚の惑ふべき所の懼怕の意、起す無く、欺僞は芭蕉の如し。口、言ひて自然に去無く亦、有ならず。諸法は所有無く、所見は皆な要ならず。其法は虚空の如く、縁を等くして數有ることなし。諸法は泥洹の如く、本無にして見るべからず。悦して此を行じ、身の虚空を解了す。其れ是くの如き信有れば、菩薩及び凡人、彼則ち佛

【八】 明本に依り、目を自ら改む。

【九】 三本並に宮本に依り、興を與と改む。

【一〇】 三本並に宮本に依り、求を永と改む。  
 【一一】 三本並に宮本に依り、無本を本無と改む。

【一二】 三本並に宮本に依り、湛泊を懼怕に改む。



と信知して常に自ら寂靜なり。是の如く賢者は其の世俗に於いて是の信を興起す。斯れを信を造して佛法に値ふと謂ふなり。又復、賢者よ、其れ信有りて佛法の名に値ふ者は此れ則ち名けて、諸法の都と曰ふ、無起の謂なり。所以は如何、色生ぜざる故に色は無生にして化轉の習ならず、痛想行識ならず、識の起なく、眼耳鼻舌身意を以てせず。起の轉習なく、身、起轉せず、癡の有無有らず、生老死ならず。無起有るが故に。佛世に値ふ如く、生有るを起さず亦た滅を起さず。又復、無起にして無滅を習ひ、正意を以てせず、志意の習なくして佛世に値ふ。總要して之を言はば、亦三十七道品の法、起無起の習を以てせず、亦、道無生の習を以てせず、起慧を以てせず、亦、滅慧ならず、不慧無慧無二の習ならず、而して佛世に値ふ。信値佛世品を説く時に當りて、無熱龍王五百太子は皆な悉く柔順法忍を逮得せり。是に於て世尊は復頌を説いて曰く、

佛世に値ふを興信して不生を習ふ。其の向信なき者は斯れ佛世に値はず。信を修するを最上と謂ひ、從つて清淨の法を致す、行質にして報應有り、厥の所修に違はず、諸の賢聖を信習し、勤修して常に禮敬し、心に懈退有らず、此れ信の所行なり。勤修して説法を聞き、陰蓋も動かす能はず。信に從つて道を致すを得、行は柔順に逮ぶ。法の所得の財を以つて、惠を轉じて普く周濟し、戒と毀戒を護り、信を行じて施を等しうす。能く諸の恚怒を悦び、道心は懈倦せず。大乘の法を勤求して、信あれば悦んで衆に向ひ、永く大貢高を離れて、志は常に自ら卑下す。所在に所著なく、信を立つるの相是の如し。信を志して身を惜まず、終に悪行を造らず、善を守りて妄語無く、言行は常に相應す。悦信、以て界を過え、樂つて無心を行す。身口意清淨にして、習つて聖の護る所に隨ふ。信行有りて内に淨く、常に慧の將ゆる所となる。身の要本を知り、求問して所聞を宣ぶ。等く七財を念じ、力根以つて足るを得。長く衆の邪見を離れ、志して常に等行を習ふ。禮恪にして悦心有り、敬事する

【五】 三本並に宮本に依り、已の字を削る。

【六】 三本並に宮本に依り、信値佛世品と改む。

【七】 三本並に宮本に依り、法説を説法と改む。

を行す。受くる所の師友には謙恪、禮敬にして安定、易養に、數々法會に詣りて心に退厭なく、生死を患ふる有り。無爲の徳を示して勤心精進し普智に昇るを求め、以つて道化を弘め、如來の法に於て出家を志樂ひ、諸の無數の梵清淨行を修し、慈悲を造立し彼の衆生を救ひ、志して反復を存す。其れ報恩及不報者に有りて等しく接して之を護り、心に適莫なく、自ら利を念ぜず、常に彼の供を悦び、忍調の行は已に悉く備足して、自見、惡なく、人に説くに背かず、内性、寂なるを以て閑居を志し、心常に靜を樂しみ、專念に法を習ひて諍訟無く、己彼の過を等しくし、戒を求備し、具さに定行を集合し道に勤勤す。斯れを賢者の行、俗信に應じて信を樹つると謂ふなり。是の如くする此れを佛世に興値する者と謂ふなり。又、賢者等よ、其の世俗に於て信に造りて忘る無き、是れを信を興して佛世に値ふと謂ふなり。又、賢者等よ。何をか俗信と謂ふや。其れ信有るものは諸法の空を信じ以て妄見を離る。諸法を信知し、以て無相と爲して離念に應じ、諸法悉く皆な無願と信知して去來有らず、諸法の無識無念を信知して身口意を靜め寂にして識有るなく、諸法を信知して以て離欲を爲し、我人壽命無し。諸法を信知して本無去來の自然を信知し、諸法の眞際無跡なること本無跡の如しと信知し、諸法は已に皆な自然にして、等しきこと空跡の如しと信知し、諸法を信知して法性に依り、諸法の等く三世を過ゆるを信知し、諸法を信知して欲處邪見皆な悉く盡く。法の無著を信じ、以つて本癡を離れ本無清淨なり、諸法を信知して心は常に清淨に、亦た客欲の垢を興起さず、諸法を信知して觀見する所なく、諸の法護を信じ等しく衆行を斷じ、法の無我を信じて以つて喜怒を過え、諸法の無心にして形像なく、獲べからざるを信じ、諸法の僞は空を握る眷の小兒を誘調するが如しと信じ、法は無欺にして上下有らず、捨離する所無しと信じ、諸法の虚なること芭蕉樹の若しと信じ、法は自由にして常に寂靜の如しと信じ、法は無審にして三處に往せずと信じ、法は永無にして所生有らずと信じ、法は空の若しと信じて以て無數に等し、諸法は泥洹の如し

【二】適莫。甚しく好き嫌ひあること。

【三】三本並に宮本に依り、恭を供と改む。

【四】三本並に宮本に依り、想を相と改む。



## 卷の第三

## 信値法品第六

爾時に阿耨達龍王は心甚だ悦豫す。又、及び龍王の五百太子の宿に無上正眞道意を發せるも佛の是れを説くを聞きて尋いで即ち皆な柔順法忍を得て、心忻ぶこと無量にして各々供養を樂ふ。輒ち如來の爲に寶蓋を施飾し、進んで世尊に上り、同時に佛に白して言く。聖師如來至眞正覺は吾等の爲の故に出現して世に生ず。何となれば然るは吾等をして普く信道具を聞かしめ、是を聞くことを得已つて意して倦なく懈退あらず、亦、驚恐無く、聞き已つて加重し專心に習行し、樂聽して是の如き像法を厭ふ無からしむるなり。又、惟だ如來、解説せられよ、菩薩は云何が諸の佛世尊に値ひ奉るを得ん。如來、告て曰く。諸の賢者は等く勤念し受聽す。吾當に廣く説くべし。諸の太子の言く、惟だ聞くことを思樂む、彼の諸の上士は世尊の教を受けん。如來、告げて曰はく。信を樹つる賢者は興ちて有佛に値ふ。何をか謂つて信と爲すや。信は正士の諸の明法を修するを謂ひ、之を奉するを先と爲す。何をか明法と謂ふや。曰く、行に依て應じて徳本を離れず、習求して賢を樂ひ、慕つて、聖教に隨ひ、勤心して信志を樹て、勞疲なく、聞法を思憶し、陰蓋を拔棄し、道を順習し、法の利養を得、施を以つて周く恵み、戒と不戒とを濟く接し等く與へ、諸の恚怒に在りて、而かも常に悦び有り、普智心を勤樂して懈退なく、信佛して休まず、未だ曾つて法を亂さず、心を聖衆に悦ばし、道を志して動じ難く、正眞を喜樂して貢高を離れ、衆に於て自ら卑うし、常に心を諸處に等うして著する無く、終に身命を捨つるも惡行を造らず、質信を修立して、言行、相應し、等く著を過え、心に垢穢なく、身口意の行は聖化に順隨し、諸事に明了し清淨たるを得、知足して貪なく所行は淨に應じ、智幻に曉入し慧根を習求し七財に依順し、誠信に修念して、根力已に備り、正見

【一】 宮本に依り、衆を教と改む。

すべし。其れ此の無欲を聞いて、悦信し廣く奉行せよ、彼れ常に無欲を致さば、佛を得ることと是れ久しからず。無欲は聖の由る所にして、最清淨を致す、無欲は成佛を得、以て化するに邊有ることなく、去來現在の佛、諸の衆相好を得るは、悉く斯の無欲従りし、及び是の法を行するが故なり。

爾時に世尊は是の無欲品の法を説き給ふ時、諸の在會する者四萬二千、天龍鬼神、人と非人と皆、無上正眞の道意を發し、萬二千人は不起の忍を得。又、八千人は柔順の忍に逮び、三萬二千の天人、神龍は塵垢を離るるを得て悉く法眼を生ぜり。又、八千人は欲行を離れ、八千の比丘は漏盡して餘り無し。爾時に當つて三千大千世界は六返に震動す。普徧く十方に晃然として大いに明し、雪山の下無熱地中に於て周布して未だ見聞せざる所の光耀有りて現す。妙華皆膝に至り、其の池の水中に普く生じ乃ち異る。鮮飾の蓮華は大いさ車輪の如し。中より美香を出し、花の色は無數百千の諸種にして、皆、是れ佛の威神の致す所なり。亦、是法の爲に其の供養を興すなり。無熱龍王の意を悦ぶを以ての故に。

【三七】 三本並に宮本に依り、子を人と改む。

【三八】 三本並に宮本に依り、反を返に改む。



は因縁を了す、是れを世尊を見ると謂ふ。彼の無欲の行を求むる悦情三の諸賢聖は、法性毀するも捨てず、賢聖の種を護る。常に佛の正法を護り、無欲にして聞いて忘れず、戒根は捨離せず、定に於て難動に達す。身慧の動ぜざるを知り、常に脱身及び脱慧の所見に住す。無欲は常に安住す。諸の佛法、無量衆の聖道二四に解入し、佛の神足を得ること具さにして、一切の行に辯達す、衆の情意の行を知り、忽然として諸の土に遊び、諸の如來を見ることを得て、彼の所説の法を受け、聞守して義を解達し、無量の人に宣示す。彼の億數の行を知り、志して無數に向ふを得、無數も當に自在なるべく、降心して功德に入り、意を伏して無欲たらしめ、終に是世に遷らす。諸の陰心二五は已に脱し、起滅の處を了知し、滅、無所有を觀じ、所習以つて無みす。聲性心の行する所、詔はずして常に端直に、佞無く、仁善を調す。無俗の徳は斯の如し。脱空相願を以つて、苦と解して生死を知る。無我の法は常寂に、無欲にして心従り行じ、普智心は慈を等しくし、悲を以て衆生を濟ひ、喜びて生死を厭はず、行護して邊有ること無し。所施の報を望むなく、己を省みて諸行を立て、善、不善を忍耐し、彼の衆生を脱せしむることを念す。勤精強めて徳を修め、身命あるを計らす。次いで諸定を知り、亦た定に隨はず、慧定、大いに精進し、數に於て數に墮せず。諦を以つて聲聞を化し、智は滅度を志さず。無欲は佛世に値ひ、彼れ斯の諸法を有し、魔は其行を知らず、法に安住して是を了す。無欲は限あらず、是の貪垢二六の限を曉る。欲を離れて彼れ無想なれば、魔も其處を知らず、其想に吾我の應あれば、彼れ自ら魔事を起すなり。是く、悉く諸行を度すれば、衆の魔も當らず。無欲を志して忘れざれば、所行は常に清淨なり。無欲は慚行を意志せずして、而かも毀たず。以て無欲を聞かば、悦慧して如來を敬す。其住は法住の如く、彼れ應に世尊の如かるべし。諸佛の十力は、菩薩奉事せんと欲し、斯の無欲の行を聞かば、勤意して受持

【三】 三本に依り、悦性を悦情と改む。

【四】 三本並に宮本に依り、人を入と改む。

【五】 三本並に宮本に依り、以を已と改む。

【六】 三本並に宮本に依り、茹根を垢限と改む。

せず滅有る無し。不生、亦た終なく、是く知りて尊の習に應ず。五陰解すれば幻の如し、其れを知れば法性に如す。内は空聚の如し曉らむ、是を了するを無欲と爲す。法の至趣する向きを知れば、衆生の情に明達す。斷念するに正意を以てし、無欲なれば是の慧を得。意斷二ある無く、神足の心輕勝に、力を以つて慢する無く、諸根、止足を知る、覺定解、智を以つてし、八直道に明了なり。慧は滅行を觀じ、法の至歸する所を解すれば、本法、生ずる有らず、當に來るべくして未だ至らず。現在、住法無し、欲知せざること是の如し。身像は堅固なく、語空ば譬ば響の如し。心の幻なるは風の如く、欲解無きこと是の如し。順義の經を説くを知りて、因縁を了達し、本の癡、生死、滅して、無欲なるは是れ慧の義なり。我、人命壽なく、法非法を解了し、以つて三門を脱す、所説の空、無著無生は滅を見る道なり。慧を習するは喩ば俗行にして、心意従り生ぜず。無欲の覺は是れ行なり。法性常に住する如く、佛の興及び滅度は、二の覺不覺無し。無欲なれば是の法を知る。其積は本際の如く、彼の積は諸法を悉くす、積及び人際を空す、無欲は是智に達す。法性常に住するを以つて、覺起と滅度と其二を識知せざるも、無欲の法は是の如くなれば、善不善に殃いされず。法の罪報無きを知る。佛法は他に從らず、行に従つて度無極なり、以つて離するは緣覺にして、音の脱は聲聞の行なり。惠施は大富を致し、彼の見戒は天に生ず。博く聞きて智慧を得、意を守りて衆生を化す、至聖都て意を守る。無欲の法は是の如し。力は常に諸欲を轉じ、智慧の志は法を存し、是の諸法を等念するに、法性常に無得なり。因縁の起を識知して、四徳の行を致し、義及び法を知り、義に順じて無欲を知る。縁を觀する彼は法を見、法を以つて世尊を見る。起滅の法に等しくし、無欲なるは算法を了す。因縁の跡は無得なり、音聲の法は無字なり。斯く法の本無を得る、是の聖を如來と謂ふ。慧を以つて因縁を見るに見不見の法無し、明慧

【八】 三本並に宮本に依り、如を知と改む。  
【九】 元明兩本に依り、音を陰と改む。

【一〇】 三本並に宮本に依り、逝を斷に、止を正に改む。

【一一】 其積とは、覺を意味し、彼積は不覺を意味するならん。

【一二】 三本並に宮本に依り、智を知と改む。



佛旨、賢聖の行法を承くるを得、是れ降魔力なり。斯れを菩薩の十六大力と謂ふ。其れ行者あり、志慕して此の十六の力を願ひて、得んと欲する者は當に無欲を修すべし。譬ば龍王、一切の流河の大海に歸するが如く、道法諸行の三十七品悉く無欲に歸す。又、龍王よ。諸の樂草の地に依因する如く諸の善行法は皆な無欲に由る。譬ば龍王、轉輪聖王は衆生の所樂なるが如し。此の若く其れ無欲菩薩有らば乃ち諸の天龍鬼、世間の人の愛樂する所と爲るなり。

爾時に世尊は阿耨達并に諸太子の爲に頌を説いて曰く。

慧の菩薩たらんと欲して、佛道を志願する者は、彼れ當に穢法を離るべし。常に無欲を勤行

し、因縁法を慧解し、見際に倚らず、法を覩るに因縁を以つてし、縁無ければ法あらず、縁生の彼れは無生なり、是れ自然に興らず。縁に著するも斯れ亦た空、空を知れば彼れ無欲なり、

縁に著して而かも無相、脱を願つて寂亦た寂す。憍怕の像は大愚なり、其處に魔當らず、法

を見て縁に著する無くんば、其に於て吾我無し、彼に我人有らず、是を知れば則ち無欲なり、

主なければ守護せず、獲ざれば亦た捨てず、本、脱すれば取捨なく、離欲なれば常に法を了

す、義を觀て飾を爲さず、慧行常に識を脱し、順義の經を曉了し、法に依つて人の爲にせず、

空義は之れ佛法なり、脱、無相、願に及びて見念を猗り造らず、是の義は其れ無欲なり。法

に於いて二有らず、音聲は得べきなく、法に處して動すべきこと難く、不入の義あるは無欲な

り、法の義は欲我無し、眼耳は色聽せず、鼻口は香味を離れ、身心更法なし。色、生滅の義

あらず、又た痛想を離れず、亦た識の我に住する無し。是に達すれば法義に應ず。三界の

義に住せず、亦た吾我の義無し。世尊は色身なく、字法説の義無し。計數は非法の義なり、

至要は施を以てせず、戒忍進定慧に非ず、我、世尊無し。諸法の無義を解する智は是れを法

要と謂ふ。義に於て永に義調に非ず、無欲は則ち佛法なり。無生の曉なること慧の若く、起

【三】 宮本に依り、與を與に改む。

【四】 元明宮三本に依り、善を著と改む。

【五】 更法とは、觸法に同じ。

【六】 痛想は、受想に同じ。

【七】 明本に依り、若を若と改む。

諦を行ひ、主として法師の爲に數々蔽礙を興し、又た師訓を障へて諛語多し。又、二魔事有り。諸の徳本を捨て、心に不徳を存す。復、二事有り、閑居に在りと雖も三毒を懷想して志は常に憤鬧し、國邑に遊ぶが若くして貪利の心有り。復、二事有り。爲に其の人深要の法を説くを非とし、應に爲に説くべきに反つて説かず。復、二事有り。魔事を覺らず、普智を遠離して、意、數々錯亂す。

是くの如し、龍王よ。其の諸の魔事の色像は斯の如し。無欲の菩薩は而かも永えに此れ無し。又復、龍王よ。若し菩薩有り、清淨の行を修し無欲に應ぜば、當に菩薩の十六大力を致すべし。此の諸力を以つて己が志を降調し以つて衆生を化せむ。何をか菩薩の十六力と謂ふや。曰く、志力、意力、行力、慚力、強力、持力、慧力、徳力、辯力、色力、身力、財力、心力、神力、弘法の力、伏諸魔の力なり。無欲菩薩は是の菩薩十六大力を得。何をか菩薩の志力を爲すと謂ふや。是の如し、龍王よ。菩薩の志力は能く諸佛一切の所説を覽て、總じて之を持つ。是れを志力と謂ふ。斯の菩薩の意は諸佛の行に應じ諸の衆生に於て斷礙なし。是れを意力と謂ふ。能く一切音聲の所説に達して諸義を解了す。是れを行力と謂ふ。諸の罪行を離れ衆の徳法を興す。是れ則ち慇力なり。一切の諸難あるも非行を爲さず、斯れ則ち強力なり。億千の魔兵も敢てして當らず、是れ則ち智力なり。通達持法し宣示し、等學して遺忘なし、斯れ則ち持力なり。無著にして忘れず、百千劫に於て其の説く可き所無礙に、不斷に諸法を隨解す、是れ則ち辯力なり。諸の釋梵及び四天王の菩薩に往詣するが若く黯然として無色なるは是れ端正力なり。其の寶首を以つて念願すべき所、意に應じて即ち至る、是れ則ち財力なり。諸の外道に過、中に在つて獨尊なるは是れ則ち身力なり。衆生の心は能く其心を一にし衆生の心を知りて順じて之を行化す、是れ則ち心力なり。衆生の神足を以つて度すべきは爲に神變を現じて衆をして覩見せしむ、是れ神足力なり。所説の法の若き衆をして之を聞かしめて中斷なく、彼れ受けて順行し、等しく苦盡を除くは是れ弘法力なり。其の禪定正受の時の若き、

【一】 憤はみだる、鬧は鬧ん同じ、さわぐなり。

【二】 宮本に依り、得の字を削る。

【三】 三本並に宮本に依り、奥を興と改む。



所生有らず。曉智は權を以て衆生に順隨し、其の諦慧を以つて諸の脫を志すを度し、聲聞緣覺乘に達せんと欲する者には佛法を念じて諸佛の法を求むるを顯す。心能く苦を忍び廣く法を宣ぶるが故に。衆利敬養は蔑して之を棄て、志は諸相を具し、德行、厭なく、智慧を充滿して博く多聞を勤む、善友を習ふが故に。善知識に値ふは謙敬を用つての故に。謙行に應ずるを得るは自大を降すが故に。以て自大を降すは志行備はるが故に。意行を具滿するは無詔を用つての故に。以つて詔者を離るゝは言行應ずるが故に。其の無欺を以つてするは誠信を修するが故に。以て信言に住するは衆の欺を離るゝが故に。妄語を滅除するは誠信を生ずるが故なり。心を信に降せ是くの如し龍王よ、其れ菩薩有りて是心を生ずれば斯れを無欲と謂ふ。又復、龍王よ、無欲菩薩は魔も其の限便を得る能はず。所以はいかん。彼の菩薩は無限に應ずるを以ての故なり。亦、有限の法を行ぜず。彼れ何をか謂つて是の限法と爲すか。欲婬悲癡斯れ皆な有限なり。菩薩は是れに於て所著有らず、此を以て之を謂つて無限と爲すなり。聲聞緣覺、其乘は限有り。菩薩は普智心に住すれば魔も終に其の限便を得る能はず。有念無念の想念は限有り、菩薩は衆念の應を離るゝを以つてなり。此の如き菩薩は魔も其の限便を得る能はざるなり。是くの如し、龍王よ。二の魔事有り、而かも是の菩薩は當に深く之を覺るべく、亦、當に遠離すべし。何をか二事と謂ふや。其の師友に於て恪敬の心無く、而かも自ら大に責高に處りて人を蔑る。是れを謂つて二と爲す。又、二の魔事あり。菩薩の六度無極の藏を捨て、心反つて喜樂して聲聞緣覺の法に親行す。復た二事有り。何等をか二と爲す。其の智慧なくして行權を欲し諸の墮著妄見の衆生と相狎れ、習ふを樂む。復、二事有り。寡聞少智なるも自ら慧達を以てし、通博有りと雖も、中に於いて自大なり。又復、二事あり。徳に於て甚少く、妄に尊貴を生じ、徳行を修するが若くにして而かも小乘を樂しむ。復、二事有り。正法を護らず、衆生を度せず。復、二事有り。志は習して諸菩薩及び衆の通達明智の者に於て俱に樂はず専ら清高の菩薩に誹

智身は傾くなく、定身にして動かす、其の慧身に於て善堅住を得、慧見を脱する身は強固にして轉じ難し、脱慧見の故に。又復た龍王よ、無欲菩薩は無數の佛の正法度義を得、亦た無數の諸佛の要慧を具し、又無盡の諸佛の辯を果し、通無量の諸佛神足を得、無數の諸佛の權解を致すに因り、普く無量の衆生の行に入り、無數の諸佛の國土を遊過し、百千如來を見るに因つて緣して無數の諸法を聽聞するを得、無數の義を得、無數の慧に達し、無數の行を曉らめ、無數の衆を度す。

是くの若し、龍王よ。無欲菩薩は常に應清淨にして衆穢を消盡し、徳、量るべからず。三界に自由にして所著有らず。何となれば、然るは其の無欲は自ら心より生ずればなり。三事有りて心従り出生す。何をか謂つて三と爲すや。其の欲に従つて生じ、又た愛に従て生じ、亦、起に由て生ず。復た三生有りて起生を觀じ、又起生を觀じて、又所行を觀じて心無處を觀ず。

又復、三生は滅寂專一にして觀を曉解し法の如く修行す。又復、三生は徳備り仁調し、以つて靜寂を爲し行動に従て生ず。又復、三事は行に従て直ぐ、詔有ることなく、仁慈調忍なり。復、三事有り、疑に沈吟することなく順善にして疊ならず、志足して養ひ易し。又復、三事は其の空に従りて生じ、又復、無相亦、無願と曰ふ。又復、三事は心の所生にして、諸法の無常は其の心、従り生じ、諸法皆苦も亦た心由り生じ、諸法無我も亦た心従り生ず。復、三事有りて心従り生ず、諸法無常、諸法無我、滅盡無爲は皆、心従り生ず。其の如く、龍王よ、菩薩の等滅も亦た心由り生ず。其れを普智心を捨てずして平等を行じ、一切に大慈を以てするが、故にと謂ふなり。衆生を捨てざるは大慈心の故に、生死を厭はざるは大喜を用つての故に、等く喜怒を離るゝは大護を以つての故に、所有の<sup>九</sup>惠施は報を望まざるが故に、衆の戒學行徳の義備はるが故に。内、己が過を免し、彼の短を論ぜず。能く衆生の諸の不善行を忍び、彼の人心をして固く金剛たらしめんと欲し、衆善諸徳の本を合集し、身命を惜しむなく、一切に致すを得、諸定正しく受け心に勞倦なく、正受を以つて

【八】 宮本に依り、隨を修と改む。

【九】 三本並に宮本に依り、慧を惠と改む。



て無我なり。然らば我人及び命壽無きに於いて深く諸物を解す。如來我の如き皆な眞法に非ず。然るに三脱の門に於いては三世に等しく、三無著を求む。所謂る諸法の都て無生なるを見るなり。觀了し知る者は等滅を得、俗情態を離る。菩薩はこのかた智慧度無極なり、諸の意に於いて念じて疑惑なくんば應に是行に入るべし。斯れを順義と謂ふ。去至する所無く、亦た從來する無し、泥洹無爲にして去至すること有らず。是れを順義と謂ふ。何をか如法と謂ふや。諸の如來の如きは興ると興らざると與に法身常住なり。是れを如來と謂ふ。如々本無にして増減無し、不二にして無二なる眞際法性、之れを如法と謂ふ。行報を毀せず、行報の法無き斯れを如法と謂ふ。大乘は六度無極に由り、緣一覺乘は因緣に従りて脱し、聲聞の乘は音聲に依つて脱す。是れを如法と謂ふ。施は大福を致し、戒は生天を得、博聞多智定念は脱を致す。斯れを如法と謂ふ。行に従つて修せざるは生死有るを興す。行の純なる、至りて無爲に立つは、如法の謂ひなり。愚は欲力を以つてし、智なれば慧力を以てす斯れを如法と謂ふ。其れ、一切の法は悉く法性に依る。此の如し龍王よ。其れ因緣に依りて起生する者は斯れ則ち四依の念を得べし。其れ因緣に依れば、彼れ則ち斷に依りて有無に著せず。是れを、其れ因緣を見て起る者は斯れ諸法を見ると謂ふなり。其れ見法者は斯れ如來を見る。所以は何の因緣ぞや。龍王よ。起無起に等しくば法非法に於いて等にして著無し。又、如來とは亦た因緣の起に無著たり、亦た起法あること無く不可得なり。其法を覺る者は斯れ則ち如來なり。因緣の起に於て慧眼、之を見る。慧眼の見は斯れ即ち諸法なり。諸法を見る者は斯れ則ち如來なり。是れを其れ因緣の起を見る者は斯れ則ち法を見、其れ法を見る者は斯れ如來を見ると謂ふなり。又、如來とは法を以つて法を見るなり。是の如し、龍王よ、若し此の法行を以て脱に應ずる者は斯れを菩薩にして無欲の行と謂ふ。又た龍王よ、無欲菩薩は欲習を作さず、賢聖を悅樂し、非賢聖を捨て、勤慕して賢聖種を興護し、廣く諸慧を合し、法の爲に護を作し、博聞を修し、志、樹ちては忘るなく戒身を捨てず、

【七】三本に依り、法於を於法と改む。

識念を爲さず、義經に依願して<sup>はんえん</sup>攀縁に依らず、法に依念して人の爲にせず。彼れ何をか義と謂ひ、何等をか慧と爲すや。云何が義に順ひ、何をか念法と謂ふや。義とは謂く、空義なり。妄見を受けざるは無相の義なり。念識に著せざるは無願の義なり。三界に著せざるは無數の義にして數に著せざるなり。又復た義とは法非法に於いて其れ二なし。音聲無得、念想無念、法處無住なり。無人を用つての故に、壽命<sup>じゆみん</sup>言聲は無所有たり。又復た義となすあり、其れ法義は無欲を義と爲す。何をか菩薩、法義となすと謂ふや。其れ五眼<sup>ごげん</sup>に色、耳に聲、鼻に香、舌に味、身に更、心に法の義、無くんば、色の義を生ぜず、色の義を滅せず、痛想行識の義と爲らず、亦識行を滅するの義を生ぜず、亦欲色無色の義ならず、亦欲色無色を滅するの義を生ぜず、亦我の義ならず、亦我見著入の義無く、入の義有らず、亦著入見入の義ならず、亦た著入有佛身の義ならず、亦法字著入の義ならず、數の計會して著入有るの義ならず、亦復施、戒忍、進、定、智に著するの義あらず、一切諸法の義に曉入す。是れを菩薩の法義をなすと謂ふなり。其れ是の義に従へば退有らず。是れを義と爲すと謂ふ。

彼れ何をか慧と謂ふや。日に苦にして衆生なるは慧なり、習つて無念なるは慧なり、盡くして都て盡くるは慧なり、道して去るなきは慧なり、陰幻法、諸性法性に於いて無毀なるは慧なり、諸情に在りて空聚なるは慧となす、諸法に解入し、衆生の根に明了にして滿具なるは慧なり、志念して諸正意を忘るるなく、不意無念にして、諸斷に於ては、意、善不善に等しくし、其神足、身心に於て慧を建つ。又た諸根に於いて輕重を了するは慧なり、諸覺意に於いて諸法を覺るは慧なり、而して諸力に於いて已に淨調するは慧なり、道、無數たるも滅寂に於けるは慧なり。法を觀別するは慧なり、始にして不生をるは慧なり、來つて至らざるは慧なり、中にして住する無きは慧なり、身に於て像れるは慧なり、言へば以て響くは慧なり、心法の幻なるは慧なり。是れを菩薩の明達智慧と謂ふ。又た何をか謂つて順導義經と爲すや。是の因縁従りして起る時然らば愚癡を滅し、老死を滅し

【四】 三本並に宮本に依り、命壽を壽命と改め、元明兩本に依り、偽を爲と改む。

【五】 六境を色香味更法と譯し、五蘊を色痛想行識と譯せるは注意を要す。

【六】 三本並に宮本に依り、志を去と改む。



釋達は即ち如來に啓す。願くは法説を聞かんと。是に於いて世尊は日昃時の後ち便ち定より起ちて端坐說法す。諸の來會の衆は滿千山旬、地より上に至り中に空缺なし。天龍鬼神及び人、非人は周帀して至眞正覺を圍遶す。一切の會者は各々踊躍を懷く。

## 無欲行品第五

爾時に龍王は悅顔進前し跪いて重て佛に白さく。唯だ願くば世尊よ、斯の衆會の爲にもし應に說法すべくんば諸の一切をして生死を免離し、永く想著五陰、諸苦穢垢、味味勞塵の行を除き、其をして永く三毒、意結の蒙なく及び諸の龍衆をして邪冥を棄つるを得、其心意を伏し、弘く至善を致して、悅豫有らしめ、深く菩薩を行じて後、如來の如く現に存亡有るも、當に吾等所在の國邑に正法を護持せしむべし。是に於いて世尊は龍王を讃めて曰はく。善い哉、善い哉。阿耨達王よ、諦かに其義を聽き、勤めて之を思念し、以て宣べ布示せよ。吾れ當さに廣く説き此會の衆をして多く罪の痛根を免れ、雜想の意識、志の疑を抜かしめ、普智を解し三界を昇遊せしめんと。時に龍王の言く。善い哉、世尊よ。願樂くは廣説せられよ、當さに頂受して行すべしと。

是の時、聖尊は龍王に告げて曰く。一法行有り、菩薩應者の天世人の爲に甚だ敬重する所たり。何をか謂つて一と爲すや。深法を修し以つて無欲を行す。何をか深法行無欲と曰ふや。是の如し、龍王よ。菩薩は因縁の無に依順し二見の際を離る。有無を知る者は斯れ諸法を見る。因縁に著するに依り法の縁生に由らざる有るを見ざるなり。彼れ此念を作さん。其れは因縁に依り、斯れは縁に依る無く、彼れ魔に依らずと。其れ縁に依れば彼、吾と言はず亦た我と言はず。又其れ、縁中に依つては我所なし、縁の無主にして亦た執守無きに依る。其れ順縁に依つて起生を了解すれば速に四依の念を致すを得ることやすし。何をか謂つて四と爲すや。至義に依つて文飾せず、慧行に依つて

【一】元明兩本に依り、精を永と改む。

【二】三本並に宮本に依り、諸の字を加ふ。

【三】宋宮兩本に依り、我を所と改む。

を見ることを得、又説法を聞いて緣して復た無熱所設の莊嚴感變を觀視し而して世尊の故に遊到せしむ。時に諸天子は各々發念して如來を供養し、或は願つて華を散じ或は名香を雨らし、或は天樂を施し以つて佛徳を歌ひ、或は復た幢旛蓋、繒綵を懸け率ゐて如來に隨ふ。世尊は身光焰耀、

熒熒（一〇）として明かなること日月星宿淨の色及び諸天の光にも踰ゆ。佛の聖威は神耀無量に、根定

は寂靜に、行遊祥安に、釋梵四天の威變種々に、奉敬追侍して如來に隨從す。時に聖尊は雪山の下に到り右面に住し止りて便ち賢者大目連に告て言はく、汝、無熱王所處の宮に到りて當に之に宣告すべし、如來已に至る、時に入るべくして可なるや、と。是に於いて賢者大目連は佛の神旨を承

け、忽ちにして無熱大池の中に遷り虚空に現じて地を去ること七丈、化の身像は金翅鳥の若し。王は阿耨達龍王の宮上に住して便ち王に告げて言く。如來、至ると。彼の諸の龍衆及び姦女等は愕然

として驚恐怖悸せざるなく、衣毛は豎となり四走の藏寘展轉して相謂ふ。此池には初より金翅鳥なし。斯れ、何れ従り來れると。時に阿耨達は諸の宮人太子眷屬に告げて之を慰めて曰く。且く各各

安心して恐るゝ勿れ。怖るゝ勿れ。此れは賢者大目連たるのみ、如來の使を承け神足の變を興すと。賢者目連は彼に到り告げ訖り、還りて世尊に詣す。時に阿耨達は便ち其衆の諸子臣民夫人姦女と、

宮の大小とを擧げて俱に圍繞し、各々名華及び美なる末香并びに衆の塗香、幢蓋、繒旛を奉じ、倡妓は種々調作し相應じ進みて正覺を迎ふ。時に世尊は諸菩薩及び衆の弟子、天龍尊神の爲に共に圍

遶せられ俱に前（十一）み、無熱所設の廣博道場に至る。如來は到り已つて尋いで高顯師子の座に就き、菩薩相次ぎ、然して後ち弟子の諸衆坐し訖る。爾時に龍王は世尊及び諸菩薩、弟子、衆會の座の悉く

定まるを觀視て、心に無量を興し内に怡悅を懷く。輒ち其衆と手に斟酌を執る。所設の饌、具さに世の甘肥を踰え、延いて天味の餽膳百種あり、以て用つて佛菩薩弟子并に諸の衆會に供へ、皆な充

足せしむ。世尊、菩薩及び諸の弟子は飯し畢りて各々應器を洒盪（十二）し、衆の都て訖るを察す。時に阿

【九】 三本並に宮本に依り、法説を説法と改む。

【一〇】 熒熒とは盛んに明かなる形なり。

【一一】 三本並に宮本に依り、星の字を加へ、淨字を削る。

【一二】 三本並に宮本に依り、詳を詳に改む。

【一三】 三本並に宮本に依り、者の字を削る。

【一四】 三本並に宮本に依り、之を走と改む。

【一五】 示明兩本に依り、座を道と改む。

【一六】 三本並に宮本に依り、洗盪を洒盪に改む。



徳は普く稱へ、行は王に等しく、無請の友、普き念を興こすを造し、至仁清淨にして踰ゆること空の若く、所設、辨じ訖りて神尊に枉がる。威は十方を御して猛に世を持し、佛事は十八にして等有なり。衆の最首の悲を度して踊行し、願て其衆と與に時に至らん。色妙端正の相身を彩り、琦好種々の華、文を繡り、志樂歡悦して法施を惠まむ。大仁、上導して願くば時を察せよ、梵聲清淨なること雷霆の若く、鸞鳳哀み鳴いて師子、歩み、妙音は具足して諸士を悦ばす、衆の心は忻望す、願くば時に顧みられよ。佛土三千は等き倫なく、能く如來心を知る者有らず。聖尊は明に衆生の行を觀、所修あれば常に時に應じて此に降る。時に普く應じて權化を懷ふを知り、衆生に聖誓有るを了達す。詳審の行目、明好に、威神檢足す。願くば光を廻らせよ。衆生は甚だ多く普く渴仰し、十方、勢威を持して慢なし。大仁徳、峻勇にして果は、聖性、爾れ枉げて此處に昇遊す。慙詳、備足を徳は最上に、寧ろ救済し育すること、偏に極り無く、師友の無雙は衆を協懷し、化龍の億百は有悲を興す。世に於いて威猛に普く慈救し、衆行を達知すること意の如かるべし。闢布散示せられよ、惟だ天尊、輕舉、神足なれ、願の時に至れり。

爾時に世尊は阿耨達の「請時」、已に到るを知り、諸の比丘に告ぐ。衣を著け器を持ち差んで留守すべく、無熱龍王遙に跪啓する時、受到應すること半月宜く即就くべしと。時に八萬四千の菩薩は皆な大神通の徳具さにして果辨す。弟子二千は亦た上神足にして、世尊を侍繞し周帀して至真如來を導き、鷲山の頂より忽ち虚空に昇り神力にして進む。其の色像身の如きは無數百千の光を放ち、遍く三千大千の境界を照し、普く悉く是明なり。諸の欲色天は皆な世尊を見て光を揚ぐるること無數に虚空を飛過して自ら相謂ふて言く。神尊を彼の無熱王の所に致して、法化を興して奥無極を演べんとすと。乃ち如來をして衆の爲に圍遶せしめ、卽いで彼の半月中に多くの諸天、數百千衆は世尊

【七】 三本に依り、方を力と改む。

【八】 三本並に宮本に依り、及を乃に改む。

して皆な諸佛眞正の要戒を承く。是を以つての故に汝等は半月して宮に入るを得ること無くして、當に婬恚愚癡の念を除くべし。又復た如來は法を講宣するが故に、必ず他方の神通菩薩、釋梵持世宿淨天子有りて、當に普く來會すべし。汝等、勤念して廣く殊妙を施し、光顯、嚴飾し、愼みて中懈する勿れ。諸の會衆をして變を觀じて踊躍せしめよ。此れ乃ち眞に如來を供養するに應ずるなり。

時に阿耨達は都て約勅し詵つて輒ち如來の爲に雪山の下、無熱の池中に於いて世尊の爲の故に、其の無瑕淨瑠璃座を化し、縱廣七百由旬ならしめて、乃ち殊異に妙周布列して八萬四千の雜寶奇樹を置き、校するに衆珍を以つて諸寶鮮飾し、蔚として光華有り精耀百色中に美香を出し、諸樹の間は八萬四千の七寶の堂を化して衆珍の光彩は極好無雙なり。十萬の交露綺帳を施置して、乃ち異妙の赤眞珠を垂れ貫き、諸堂の上に、師子座有り、八萬四千は皆な大いに高廣にして無價妙好の雜毼を牀座に布き、寶分は、諸の交露に施し、校するに衆寶を以つてす。所在の堂上に龍の姪女各々二千人あり。其色は殊妙に、姿、美なること無量なり、顔像は蔗華に口は熏香を出し、雜華末香塗香を擊持し、諸妓を調作し以つて佛徳を詠じ、衆會に悅を興し、上虚空に於いて大寶蓋を化して千由旬を周らし漏く會上を覆ふ。奇珍綵鏤なる其寶蓋中は衆色無數にして、好繪幡を懸け、旛綵の間に於いて諸の寶鈴を垂る。景風は和らぎ降りて音は諸樂を踰え、饌の百味を施し備さに都てを辨じ訖る、此變を爲し已つて、其眷屬と與に恭檢、又手して佛に向ひ脆膝して、遙に尊に啓すに其の請意を以つてし、歎詠し頌して曰く、

慧、藏して智富み辯徳を積み、慧、達し、無著にして明に衆を導き、慧、弘く普く至りて礙有らす。慧の上最力は神光を降らし、慧解の心行は惟れ大仁よ、當に十方衆生の類を觀すべし。

最上の神尊よ、吾請を受け、念啓慈愍して惟、時に屈せよ。智足無貪にして養ひ易く、祥福審諦なる聖導の師よ、善行質信にして衆の意を知る。時節至るを以つて尊に屈すべし。其

【四】 三本並に宮本に依り、琦を奇と改む。

【五】 蔚はこんもりしげる形。

【六】 三本並に宮本に依り、道を導に改む。



## 卷の二

## 請如來品第四

時に阿耨達は自ら其衆の諸の眷屬と俱に世尊を稽首し跪膝、又手して佛に白して言さく。願請くは天尊、神光を迴屈し、無熱の大池中に往詣して、其れ三月を盡さん。吾等聖尊并に神通果辯菩薩及び上弟子を志樂し供養せん。懇み、納許せられて願くば其請を受けられよ。然る所以の者は、吾等は至真正覺に供事するも豈に能く如來の儀に應ぜんや。冀くば速聞せられ寂然上化を蒙り、唯だ此法を以つて供養すべきなり。重ねて是の如き像法を聞き、常に歡悅するを思願す此れ乃ち三寶に奉すべきのみ。爾時に世尊は其請を受けず。重ねて二月を啓するに、如來は然らず。一月聽す事を垂るゝに、世尊は不可なり。半月を納るを願ふに世尊は默然として已に之を受く。是に於いて龍王は自ら其の衆の諸將從と俱に、尊の受請せらるるを見て、忻喜、悅擇して善心遂に生じ、佛を遶ると三匝、雲を興し電を震し、微雨を降らすこと、漏に天下に普し。忽然の頃に還つて宮中に昇る。時に阿耨達は正殿に到り坐し、尋いで輒ち諸の五百長子を召す。其名は善牙、善施、善意、善明、能滅、寂相、感動、大威、甘威、甘威、甘威、甘威、普稱、威勇、持密、忍力、行詳なり。是の如き比ひ等の五百の長子は宿とに無上正眞道を樹て已れるなり。王之に告て曰く、又た諸子等よ。吾れ今ま己に如來無著平等正覺に請ひ、衆の菩薩に、諸の弟子と俱に其の半月を盡すことを請へるに、世尊正覺は大慈哀を垂れ弘愍を興して請を受けらる。汝等當に共同して其心を一にして相勸勵し世尊至眞如來に敬を加ふべし。無常を勤念して當さに各々寂靜、謙恪恭肅にして如來の儀に住持すべし。婬心、欲意及び龍戲の樂を棄損すべく、貪怒の害を除き欲色聲香味細滑を離るべし。所以は如何、世尊は無欲にして且つ安詳、仁雅審諦に順調寂靜にして、諸徳を顯備し、侍從圍衛せられ、儀容は無量

【一】 宋本並に宮本に依り、震雲電を雲震電と改む。

【二】 三本並に宮本に依り、尋の字を加ふ。

【三】 三本並に宮本に依り、以を已と改む。

に極盡すべからず。此の如きの習道は、不習にして亦た無住なり、彼の處は魔を咎めず、衆は都て不著を行す。其の此の道に順ふ者は、不起にして亦た無滅なり。已に意を得て行を志せば、總持して弘く大に辯じ、施惠及び戒忍は遂に増進して海の若くならむ。身口の穢、無きを以て、心は潔く、乃ち清淨にして、垢は消え永へに瑕無し。此道を修應する者は、智達に昇るを得て、行習する所、深妙に、難動の慧は無印なり。是道を守習する者は、其れ諸の最正覺にして、過去と當來と、現在も亦た是の如く、道を致し、世の歸するところならん。彼、已に衆の難を離れ、世に値ひ、難過に遭ひて、永く諸の佛子と爲る。其れ此法を聞く者は、快い哉、諸の衆生、至善にして斯法を聞き、眞に如來に奉すべし。其れ是經を樂しむ者、此の道習を曉る有る者は、能く諸の情態を斷じ、紹德して衆の相を具し、應に三界の將たるを得ん。

【一〇】 三本並に宮本に依り、知・智と改む。  
【一一】 卽は印か。



の如し。解行して此に致るは、乃ち道の習に應ず。若し其れ道に至らざれば、所作は不住の如く、能く其行を止むことなく、佛法は道に由らず、所習の道の如きは、并及に無習とは、所演、此の如く、以て本無に住すと爲す。有限の餘の道は、劣情の所依なり。是は無上道にして、大乘の因由する所なり。諸の此道を興す者は、以つて致し而して無住なり。斯れ則ち行徳を顯し、道習に應ずるを致すべし。道正にして無險、端直にして且つ平坦、勤親して此道を行じ、永く衆の邪迹を離れむ。若し卿、龍王の如きは、自ら其の宮室に住し、所處に於て動ぜずして、雨を降らし大海を充す。大士も亦是の如し。習道は所行に如し、法身は動ぜずして、能く智海を満たさむ。又た仁龍王の、大地上に在りて、雨を以つて遍に之を充し、其の身著有らざるが如く、菩薩の徳も斯の如し。此の所習を行じ、法を用つて衆生に満すも、其の内に所著なし。阿耨達龍王の、大神變なるが如く、勝道の徳も是の如し。普く十方を感動し、衆生の邪徑に墮し、諸の墮は著見を受く。其の是の道に住するものは、將順して無爲に度せん。已に斯の道に住すれば、菩薩の果、大に稱へ、能く魔波旬、并及に邪の外道を降す。得道は其れ如の如く、如道にして能動なし。諸の俗法を踊過する、其行は蓮華に譬へん。道心は愚有る無く、是行は住止なり。千數、諸の衆生、化度し立つるに道を以つてし、常に斯の道に住するを以て、五句を致すを得ん。神足は諸に感動し、衆の爲に廣く法を説く、諸事、悉く清淨にして、身口及び意もともに、當に賢聖道を願ふべし。人性は識るべからず、忍行は無著たるも、其住所に至るべし。斯れ如來を得るの處なり。諸の衆生を示導し、生死も至歸に於てする、斯の處、則ち如來なり。其の住に至るが如きに似たりとも、此は無所至爲り。衆生の至るべきところ、當に彼の上處を念すべし。最なる佛の道を學び、遊樂するに幻法を以つてせむ。其れ是の習道を作すは弘道の所習なり。彼の衆の徳儀の行は、諸佛の稱歎する所なり。其徳は邊有ることなく終

【六】 三本並 宮本に依り、本、大と改む。

【七】 三本に依り、足を之に改む。

【八】 宮本に依り、行を道と改む。

【九】 宮本に依り、往を住と改む。

道意を發し、七萬の菩薩は法忍を逮得す。爾の時に一切は同聲して言く。世尊よ。其れある族姓子及び族姓女は、是の清淨道品無習の法を説くを逮聞する者、其れ値聞し已つて心に驚恐なく、捨退せざる者は、皆な是れ如來無上正眞道意を受習し、諸佛の轉ずる所の法輪を轉ずるを得。又た惟れ世尊よ。是輩の菩薩は悉く無上正眞の道意を獲て、無量の人の爲に斯法を分布す。亦、復た當に師子の座に坐すべし。天上天下の人中に於て極めて師子吼するに當り、今の如來の吼の如くにして悉く魔衆を降し、外道を伏進し、法旛を顯樹し、熾法、輝明にして、震雷の法鼓は已に鳴りて能く法雨を降さん。爾時に世尊は諸の天龍神、衆の人と非人、及び四輩を見、其の至説を聞いて悦懽せざるなし。是に於て如來は阿耨達の爲に重て復た弘演して頌を説て曰く。

道は習して得べきに非ず、乃ち習想を興すなし。其道の行は是の如く、習念の行を棄離して、習道を求むるを望まず、衆の異想を蕩除し、其の道は都て習なく、清淨なること明月に像どる。若し習想を起す有りと雖も、無處亦た不習なり。已に過えて習處なく、最上道を致すを得ん。道は無我の念たり、亦た空習と與ならず。是の道は二有ること無し。安快にして無上、命壽も亦た是の如し。人及び言なく、其道は人あらずして無命にして亦、無住なり。諸の道を習ふ有る者、空に住するを欲せば、斯れ聖路を去ること遠くして、是れ道習に應ぜず。道は亦た空有る無く、以つて有習を捨て、本の如く同一の相にして、永空は空を空す。道は無起相たり、亦た滅の相有らず、不起にして亦た無滅なる、彼れ悉く道習たり。吾が音は譬ば幻の如し、解想は當に此の如くすべく、持想は所習を行す。道は當に何に従てか生ずべき、道は都て過俗たり、彼れに身習あらず、亦た滅の身行なく、習を致すを得べし。是の身根の家は、本無なるも所演廣し、彼れ、有らずして、餘に求む、本、無にして不可得なり。其れ是の道を習する者は、當に如々本無なるべし。如本は本無と知る、是れを道習に應ずと謂ふ。諸法、之れ本無なれば、所覺は幻

【四】三本並に宮本に依り、是皆を皆是と改む。

【五】三本に依り、無乃を乃無と改む。



## 道無習品第三

又、復た龍王よ。其の菩薩は是の淨心に乗り、欲界に生じて形界に在り、諸天と俱に衆梵中に處して、安詳靜然たり。中に在りて進止して勝動する者無し。又、斯の菩薩は能く諸天を降し、化導するに權を以つてす。或は形界に生じて俗界に在り、現に家に有るが如く諸の衆生と周旋坐起し、有勞に與あつからず、衆生を慢にせず、亦た自ら輕んずる無く、彼れ斯淨を以つて諸の定を正しく受け、盡して自ら定を爲しては正定に隨つて所生有らず。何となれば然るは、彼の菩薩は執權方便して心の淨に應ずるを以つての故なり。此の若し、龍王よ、菩薩清淨の行を曉解する者は當に清淨を修し已つて道を習ふべし。是の如し、龍王よ。菩薩は不習にして以つて道習を求め、習無習ならずして以つて道習を想ひ、亦た望道の習を習はず、亦た習を求めずして道習を了解し、所生を習はずして道習を冀向ひ、行滅を習はずして道習をなし、亦た習ふを求めずして以つて道習を爲し、習無習ならずして道の習を爲し、執捨を習はずして以つて道習を習ひ、我人壽ならず、身無常ならず、身性苦ならず、身に我有らず、身、夢幻、野馬、影響ならず、亦た身、空無想無願ならず、身、無欲法行ならずして習道す。要を以つて旨を言はば、身性諸情は興るに十二因縁乃至老死無欲の法有らず。數無數ならず、道、二習無し。俗無俗ならず、漏無漏ならず、犯無犯ならず、不二の習にして、以て道習を求む。又、復た諸法無習の習は是人道無習、斯れを道習の不習の習と謂ふ。空の如き無習は亦た無習ならず。當に此の如く習すべく、是の道は無習無相無願なり。彼の習を作さざるは亦た無習に非ず。當に是の習を作すべく、偶不偶無く諸法無住なり、勤習することは是の如くなれば乃ち道習に應ず。佛世尊は是の清淨の行、無所習の道品の法を説くに當り、時に三萬二千の天及び世人悉く皆な無所從生法樂の忍を逮得す。五萬の天人の宿に心を菩薩に發さとりし者は皆な無上正眞の

【一】 三本並に宮本に依り、詳安を安詳と改む。

【二】 三本並に宮本に依り、道を導と改む。

【三】 三本並に宮本に依り、綱を偶と改む。

つて之を言ば、何者を言と爲すや、欲、恚、癡を以つて言と爲すや。諸垢を言と爲すや。言は無著にして眼耳鼻口身心に著せず。所言、風像、風動、聲出の因縁合會して聲有らしむるのみ。所言は響の如く、賢愚の所言皆な同く響の如し。言ふ可き所の者は内に住せず、亦た外に出でず、其の中間に於いて而も得べからず。本の所念及び其の所行に住し、言を出す者、并に所念想は無住無想なり。是れを龍王よ、如來の所言及び其衆生一切の音聲は皆な空非眞にして斯法を捐つるのみと謂ふなり。曰く、唯だ世尊よ。如來の所言は斯く不諦なるや。曰はく。是れ龍王よ。如來は審諦なり。所以はいかん。知來は諦なるが故に諸法の非眞、非諦を知る。又、復た龍王よ。如來所言の隨字音聲は皆な衆生一切の音聲に答ふ。爾の故は衆生も亦、法輪を轉するも而かも亦た法義に順するを知らず。此の報應を以つて其をして之を行はしむ。如等に衆苦を滅する事に隨つて諸法を曉解し、行了することは是の如くなれば衆生の音聲は已に無所住なり、諸の煩惱に在りて而も常に閑靜、欲言を現出するも著に於て著なし。聲出、所言、講論、談語、其れ法の如くして違錯あらず。是れを菩薩の口言清淨と謂ふなり。

何をか菩薩心、清淨たりと謂ふや。其の心本は染汚すべからず。所以はいかん。心本淨の故に。其の所、欲垢蔽を容るゝと言ふべきも、菩薩は斯に於て、所著有らず。心權を了解して本に於いて自から淨なればなり。又た其の心行は徳本を撰ばず。彼の徳本は心本を了識し、此の心行を以つて慈は衆生に及ぼし識は彼の空無我の人を了知し、其心の徳本は道を助勸し、彼の道に等しきを知る。是の如く觀するは斯れを心淨と謂ふ。此の淨心を以つて諸の婬恚の愚行者と俱にして而して永く欲、怒、癡、垢を受けず、操行と俱に諸穢に著せず。是れを菩薩身の三清淨と謂ふ。斯の清淨道品の法を説くの時に三萬の菩薩は補生處に逮べり。

【一六】 三本並に宮本に依り、  
容を容と改む。  
【一七】 三本並に宮本に依り、  
以を心と改む。

く淨にして泥洹の如く、彼に於ては永えに無なり。是れを無念と謂ふ。應に所念無かるべし。無念道とは亦た識念無きなり。其れ道は都べて心意識行無し。此を以つて之を清淨の道と言ふなり。是の清淨道品の法を説く時、二萬の天人皆な法忍を得たり。

時に阿耨達は復た佛に白して言さく。云何が世尊よ。菩薩大士は是清淨を修して道に向ふべき。聖尊、告て曰く。是の如し、龍王よ。菩薩大士は是の清淨道意を行ぜんと欲せば當に淨行を曉るべく、亦た其身口意をして清淨ならしむべし。何をか身淨と謂ふや。己身、空なるを<sup>三</sup>以つて諸身の空なるを解し、身の寂靜は諸身の寂なるを解し、身の已脫は諸身の脫を解し、身の怠慢は諸身の怠を解し、身の影の如きは諸身の影なるを解す。是れを菩薩の清淨道と謂ふなり。又た云く。身淨なれば身行は無生なり。其れ生死有りて無生を觀す。彼の無生を以つて生死に等すれば則ち<sup>三</sup>其身亦身行に曉なるを知るなり。何をか身行と謂ふや。去未生法、來無盡法、見在<sup>四</sup>量法、終無盡法、其の無盡は是れ身行と謂ふなり。

又、復た身法の因縁は合會す。其因縁は則ち空無相、惔然、無念なり。此の若し、龍王よ。是の象法觀は斯れを身淨と謂ふ。又、如來身の無漏は三界に墮せざるが若く、身の無漏を觀するに<sup>五</sup>等く本無なるが如く、無漏身身を以つて三界に墮せざるなり。彼の無漏身は能く生死に入る。其れ無漏の際は倦、捨、退なく、無漏身を以つて色身を示現し、此の如く現じ已つて亦た滅身の法本を念ふ無し。如來身淨の如く衆生身淨にして己身亦た淨、等きこと本無の如し。是れを菩薩行應清淨と謂ふ。何をか謂ひて口言の應清淨と爲すや。一切賢愚の言は皆な清淨なり。所以はいかん。等相を用つての故に。凡夫劣勢は音聲に著し、若しくは信するも諦ならず、憂喜無常にして顛倒を樂ふ。衆生を觀察するに本、無し、都べて姪怒癡欲無し。何となれば然るは、諸の字説、聲出皆な淨にして欲、恚、愚、無く亦た其の著無きを以てなり。此を以つて之を謂はど一切の言は淨なり。言を以

【三】 三本並に宮本に依り、已を以と改む。

【三】 三本並に宮本に依り、其知を知其と改む。  
【四】 三本並に宮本に依り、景を量と改む。

【五】 宮本に依り、如を等と改む。



る者有ることなく、亦た其侶なく、三界を獨歩し、靜一の心は、特に智慧行を修し、應に所得す當きは己れ自ら之を果し、諸法を明達して本無を知る。斯を如來と謂ふ。是を龍王の八正道と曰ふ。彼の一切凡諸の若干の衆生の所行の爲に種種の説を興すに此の要説は等同一にして、無妄説を以つて未生説に歸するなり。云何が此道に於いて清淨なるや。曰く、道無垢なり、無塵を用つての故に。是道は無瑕にして本、無念の故に。是道は冥無く慧照明するが故に。是道は無著なり、本清淨の故に。道は常に無生なり、無所滅の故に。道は永無本の如し、本有無きが故に。道に漏穢無し、三界淨の故に。是道寂然たり、凡行を過ゆるが故に。道は至るべき無し、去る有る無き故に。道は所來無し、從來するなき故に。道恆に住無し、諸欲を過ゆる故に。道は所處無し、衆見を過ゆるが故に。道は勝者なし、諸魔を過ゆるが故に。道は大にして弘覆す、外道及ばざるが故に。道は永く妄を離る、自から大者なるが故に。道は容るゝ所無し、修入ならざるが故に。是道は極遠なり、希望を用つての故に。道は永離となす、愚夫の行を過ゆるが故に。道は果なるべし、修行を致す者なるが故に。是の道は夷易たり、勤行を樂しむが故に。道は極て平坦なり、正見に住するが故に。是の道妨げ無し、修するに無礙なるが故に。是道無礙なり、等正行の故に。是道無垢なり、三毒淨の故に。是道清淨なり、終に無著なるが故に。是れを菩薩道の清淨と謂ふ。是の如く菩薩は清淨道に於いて務め進みて勤修し又た應行せば、彼の性法に於て已に悉く清淨にして我性を淨むるを得、亦た以つて過なり。法性淨なるが故に則ち數性淨なり、數性淨なるが故に無數性淨なり。無數性淨なるが故に、三界淨を得。三界淨なるが故に眼識性淨なり、眼識淨の故に意識淨なり、意識淨なるが故に空性淨を得。空性淨の故に諸法性淨なり。是淨を用つての故に則ち諸法等にして淨なること空の如し。空等淨の故に衆生淨を得。諸淨を以ての故に便ち其二なく亦た二に著せず。無二淨の故に則ち道清淨なり。斯を以つて之れを清淨道と言ふなり。彼の衆の念も亦不念も無き道なり。諸念悉

【七】元明本に依り時を特と改む。

【八】三本に依り、致を智と改む。

【九】三本に依り、如を知と改む。

【一〇】三本に依り、向を同と改む。

【二】夷易とはたやすきこと。

演示するを以つて菩薩の行恩は一切を containment 受し、覆ふに四恩を以つてし廣く爲に說法して衆生をして戒化を順受せしめん。是れ四恩道なり。神足道とは諸佛土を親て、天眼徹視し、衆の一切の生者、終者を見、又た十方の諸佛世尊弟子の圍遶するを見、悉く見るに是の如く、諸の佛土に於いて其の天眼を以つて應に探る所に當りて之を採受し、又、其の天耳は諸佛の言を聽き、聞きて輒ち受行し、衆生及諸類人に在りて皆な明曉し、悉く了知し盡して、爲に隨ひて說法し、宿命を識るを得て前世所作の功德を忘れず。

又た神足を具へて無數の諸佛國土を遊過す。應に神足を以つて當に度を得べきものは輒ち神足を弘めて之を度脱す。是れを神足の應度と曰ふ。又た何をか謂ひて四等行道と爲す。其れ淨梵志中者、并及に諸餘の色像、天子に隨修して彼の意行隨順の化を知る。斯れ則ち慈悲なり、是れを喜護となす。建立するに、道を以つてし彼をして應に度すべからしむ。此れを菩薩の四等行道と謂ふ。其れ八正道は普く悉く之を行じ、聲聞の所由、緣覺の依因、大乘亦た然なり。是れを賢聖の八直正道と謂ふ。何をか心等の諸の衆生道と謂ふや。當に此の爲に興し是の爲に興せず、斯の爲に説くべく、此の爲に應ぜざるべし。是は賢徳有り、此は福人に非ず、斯は盡の爲に應じ、此は復應ぜず。行等の菩薩は悉く此の意を除く。是れを心等の諸の衆生道と謂ふ。何をか菩薩の三脫門道と謂ふや。空を以つて諸の妄見を斷じ、其無相を以つて衆の念想の應と不應を除き、其の無願を以つて永く三界を離るるを致すを得。是れを菩薩の三脫門道と謂ふ。何をか法忍の道を致すと謂ふや。菩薩を受拜して菩薩自覺の行忍に應じて諸佛世尊の爲に決授せらるゝ者は無上正眞の道意を得。是れを菩薩不起忍道と謂ふ。菩薩は此八直正道を致して弘化流布し權導して礙なし。時に佛、是の八正道を説き已りて、二萬四千の天龍及び人悉く此の八道行に速應せり。

是の如し龍王よ。菩薩は此八直正道を以つて等塗一歸し、無等を用つての故に、能く菩薩と比ぶ

【五】四恩とは、父母、衆生、國王、三寶の恩を言ふ。

【六】三本に依り、曰ふの字を加ふ。

本を承け悉く法忍を得たり。時に阿耨達并に餘の龍王及諸の眷屬は自ら神力に乗り虚空に踊昇し、香の雲を興し忽ちに便ち普く布き、調和し、美香及び末梅檀は如來及衆の會上に微かに雨ぎ、又た奇妙の珠交露蓋を化して徧く王舎一國の境界を覆ひ、悉く歡悅し、上に於て歌詠し、至眞如來の積祚巍巍として聖德無量、雲日に列住して各半身の光を現じ虚空に文なし、一切の衆會見ざる者なきなり。

## 清淨品第二

是に於て龍王は復た佛に白して言さく、甚だ未曾有なり、唯然、世尊よ。乃ち如來の如きは博く衆生の爲に道俗心及び普智、心の行徳所應を説けり。又、唯だ世尊如來無著平等正覺よ。願くば演散して菩薩の行、修應清純明賢の由る所を説きたまへ。得道清淨にして、其の終をして已に長久無垢、中に懈あること無く、倦無くして退せず、十力、四無所畏を得るに至りて諸佛の法を具足するを得ん。爾時に世尊は阿耨達に告げ給はく、善い哉、龍王、勤めて行を思念せよ。吾れ廣く菩薩大士の清淨道品を説くべし。阿耨達の曰く、甚だ善し、世尊、幸ひにして授教を蒙らむ。惟だ願くは之を説き給へ。時に世尊は龍王に告げて曰はく、菩薩の行に八の直正道有り、當に勤めて受持すべし。何をか謂ひて八と爲す。六度無極道、忍行の道、得五通道、行四等道及び八正道、等衆生道、三脫門道、入法忍道なり。此の如し、龍王よ。是れを菩薩の八直正道と爲す。何をか菩薩の度無極道と謂ふ。度無極道とは諸の布施する所、彼の普智を勸む、何となれば、然れば施を勸むる無きを以て普智を成ぜざるも、其の行は徳本を勸助する者なればなり。斯れ施度無極を得るの名目なり。又、戒忍を行じ、定智を進むるも亦た以つて彼の普智心を勸助す。乃ち慧度無極を得るの名目なり。是れを菩薩の度無極道と曰ふ。忍行の道とは衆生を含受す。何となれば、然れば彼の菩薩は法度を

【一】 品目の上に宋元兩本共に弘道廣顯定意經の七字あり。

【二】 三本に依り、及心を心及と改む。

【三】 十力とは如來の十力なり。

一に知覺處非處智力

二に知三世業報智力

三に知諸禪解脫三昧智力

四に知根上下智力

五に知種種解智力

六に知種種界智力

七に知一切至所道智力

八に知天眼無碍智力

九に知宿命無漏智力

十に知永斷習氣智力

【四】 四無所畏とは佛の四無畏なり、一に一切無所畏、二に漏盡無所畏、三に說障道無所畏、四に說盡苦道無所畏。



脱行を求め習ひ、權變を弘む。是れを五種と爲す。何をか五根と謂ふや。大慈悲を以つて、徳本の厭ふことなく、衆生を勸進して、小乘をまぬがれて、餘道を志さしめず。是れを五根と爲す。何をか五莖と謂ふや。權方便を曉らめ、慧度無極にして、人民を示導し、正法を護持し、喜怒を等觀す。是れを五莖と謂ふ。何をか五枝と謂ふや。施度無極、戒度無極、忍度無極、進度無極、定度無極。是れを五枝と爲す。何をか五葉と謂ふや。樂び進みて戒を聞き求めて空靜に處し、常に出家を志し、心を佛種に安じ、所遊無礙なり。是れを五葉と爲す。何をか五華と謂ふや。文相を得るは具さに滿徳を積む故に、衆の好繡儲るは種種施の故に、七覺財具るは心無雜なる故に、顯辯有るを致すは法を蔽はざる故に、總持に深達するは聞いて忘るゝ無きが故に。是れを五華と爲す。何をか五果と謂ふや。戒果に昇致し、己にして度果を得、緣覺の果に達し、又た菩薩不退轉の果を得、佛法果を獲。是れを五果と曰ふ。斯れを能王よ、菩薩の七五三十五事の廣普智樹實行と謂ふなり。之れを修應する者は佛を得ること難からず。

佛、龍王に告げ給はく、其れ菩薩有りて此の普智心樹の深妙にして要行を明顯するの句を受持せんと欲する者は當に勤加して普智寶樹を習ふべし。是の如し、龍王よ。善く一切諸法の功徳を見るに斯の寶樹の奥義に由らざるはなし。諸の無上正眞の道意を起すは、悉く皆な是の普智寶樹の至要句に因るなり。譬ば龍王の樹種を選植し此を知り已つて樹の根莖枝葉華果を致して甚だ盛茂せしむるが如し。是の如し、龍王よ。其の能く普智心種を受くる有れば、斯れ已に諸佛賢聖の最上慧法三十七品を致すを得るなり。是の故に龍王よ。普智所行の功徳に入らんと欲し、法輪を轉ぜんと欲せば當に之を受持し、精修讀誦し專心習行し廣く一切の爲に宣傳布演すべし。是の如く、龍王よ。勤受して之を學ばば當に佛の斯の普智心品の法語を説くの時、諸の龍衆中七萬二千皆な無上正眞道の意を發すべし。龍王、太子及び諸の姪女萬四千人は悉く皆な柔順法忍を逮得し、五千の菩薩は宿に徳

【三】 慧度は、智慧波羅蜜なり。

【四】 施度、戒度、忍度、進度定度は檀波羅蜜（布施波羅蜜）持戒波羅蜜、忍辱波羅蜜、精進波羅蜜、禪定波羅蜜なり。

【五】 三本並に宮本により、吾を善と改む。

【六】 三本並に宮本に依り讀誦を讀誦と改む。

を用つての故に、一切を捨てず、大悲を以つての故に、憎愛二なし、身命施の故に、財利周く恵む、法に供事する故に、是れを五事の普智を致すを得ると爲すなり。

復た五事進普智心有り。何をか謂ひて五と爲すや。善智識を習ひて生死を患へず、志して無蓋を遠ざけ、非時心を去りて諸佛の智を求む。是れを五事進普智心と爲すなり。

復た五事在普智心有り。諸聲聞、緣一覺念を過ゆ何をか謂ひて五と爲すや。聲聞脱を過え、緣覺脱を過え、衆智心を過え、諸の吾我を過え、又た習結を過ゆ。是れを五事過諸行法と爲すなり。

復た五事有りて普智心に於いて其悦有り。何をか謂ひて五と爲すや。惡道を過ゆるを悦び、普智を審にするを悦び、覺慧を具するを悦び、戒にして厭無きを悦び、衆行を解するを悦ぶ。是れを五事普智の悦と爲すなり。

復た五事有りて普智心を發し、五力の助を得、生死に溺れず。何をか謂ひて五と爲すや。其れ怒恨無し忍力を用つての故に、能く所願を滿す、徳力を用つての故に、己が自大を降す、智力を以つての故に、勤習し廣聞す、慧力を用つての故に、衆の恐怯を過ゆ、無畏力の故に、是れを五事、諸の助力を致すと爲す。

復た五事有り。普智心に在りて五清淨を得。何をか謂ひて五と爲すや。衆の穢行を離れて諸の墮者の因縁を淨め、諸根に惑なくして之を淨め、諸時に隨順し、觀を以つて之を淨め、等しく權道を行治して之を淨め、一切諸の法化轉して之を淨む。是れを五事普智の清淨と爲すなり。

復た五事有り。普智の明を得。何をか謂ひて五と爲すや。明解にして無欲、已彼の心に明かに、  
三 五句に明に、慧行に明達し、明眼にして無礙なり。是れを五事の普智の明を致すと爲すなり。

復た五事廣普智心有り。何をか謂ひて五と爲すや。其れ五種、五根、五莖、五枝、五葉、五華、五果を以つてす。何をか謂ひて五種と爲すや。日に修し、修を志して、内性を淨め、人物を等觀し、

【八】大正藏には聲聞緣覺一覺念とあれど、三本並に宮本に依り緣覺の覺を除けり、緣一覺にて緣覺の意なればなり。

【九】五力とは、一に信力、二に精進力、三に念力、四に定力、五に慧力なり。

【一〇】元明兩本に依り勢を習と改む。

【一一】三本に依り體を離と改む。

【一二】五句とは、五神通なり、宮本に依り、句を句に改む。

又、復龍王よ。其の普智心は二行處に依りて普智心を致す。何をか謂ひて二となすや。其の所言の如くんば應の行處、諸の功德の本を修し、道の行處を觀す。是れを二事の普智行處と謂ふ。復た二事ありて其の普智心は毀すべからず。何をか二事と謂ふや。衆生にありて異心を増すなく、諸の殃行に於いて濟ふに大悲を以つてす。是れを二事普智無毀と謂ふ。

又、復龍王よ。其の普智心に二重の法ありて過者なく、生死の黨及び衆の聲聞并に諸の緣覺の能く勝踰するものなし。何をか謂て二と爲すや。權方便に執し、深く智慧を行す。是れを二事普智重法と爲す。

又た二事休普智心有り。何をか謂ひて二と爲すや。事に處して疑滯結の心なく在在して俗欲の諸樂に安樂せず。是れ二事休普智心と謂ふ。

復た二事護普智心有り。何をか謂ひて二と爲すや。聲聞緣覺の行地を志さずして大乘至美の徳を觀觀る。是れを二事護普智心と謂ふ。

復た二事妨普智心有り。何をか謂ふて二と爲すや。志常に多佞にして内性に詔を懷ふ。是れ即ち二事の普智心を妨ぐるなり。

復た二事有り。普智を妨げず。何をか謂ひて二と爲すや。專修直信して無詔を行す。是れ二事、普智を妨げずと謂ふ。

又た四事蓋普智心有り。何をか謂ひて四と爲すや。數々正法を亂し諸菩薩賢明達士に於いて亦た奉敬せずして、常にセツ恭敬なく魔事を覺せず。是れを四事蓋普智心と爲すなり。

復た四事有りて普智心に於いて其の蓋なし。何をか謂ひて四と爲すや。正法を護持して謙恭受聽し、菩薩を尊重し視ること世尊の若く、常に魔事を覺す。是れを四事普智無蓋と爲すなり。

又た五事有りて普智心を致す。何をか謂つて五と爲すや。所行は生死の漏を望むことなし、戒徳

【六】元明本に依り毀を事と改めたり。

【七】恭敬とは、ちやまひ、つゝしむの意なり。



實の事を觀じ、其れをして斷ぜざらしめん。斯れを龍王よ、三十二法と謂ふなり。菩薩は此に應じて普智心に違ふ。

又、復た龍王よ。十六事ありて普智を増進して顯力弘執す。何をか十六の普智を進むると謂ふや。施行、衆濟し具戒缺くる無く、忍應、調忍、果上、精進して定の諸行を致し、已に智慧を具して信行悉く足り、如來に供事して靜に遊び閑を樂み、六堅法を備へ最十善有りて身口意を飾り、徳具、操行にして足を知り、靜を樂み、身三、彼に勸めて、勝定の觀を修し、諸徳具はるを得ん。是れを十六行法之事と謂ふ。應さに相詳福して大智心を演ぶべく、佛世に顯持して流化自由ならん。

又、復た龍王よ。其の普智心は二十二事を以つて邪經を除き、其所乘を以つて普智を修す。何をか二十二事と謂ふや。行は聲聞緣一覺の意を過ぎ、已に貢高を下し、我的自大を無みして、詔事を消去し、俗雜言を抑へ、非戒を遠棄し、悲怒の根を拔し、魔事を挽却し、蔽礙を除去し、師訓を章せざるも罪を耗滅し除き、己を省みること切惻に、彼の非を論ぜず、惡友に離るゝを習し、良善に逆ふを遠ざけ、非の六度を去り、又た貪惜を逝り、戒にして不淨なく、已にして諍訟を棄て、懈怠を離れ、迷に於いて自ら正に、諸の無知を捨て、斷去に便り無からしめ、惡行を却去す。是れを菩薩の普智にして二十二の邪執を釋除すると謂ふ。速に權慧に應ぜば永く解退なからん。

又、復、龍王よ、二十二踊事の進順隨行は普智心を得て當るべからず。諸の魔波旬、及び魔宮の屬、竝に外道を降して之を却く。何をか二十二踊と謂ふや。戒事を過え定を踊過し、亦た智を踊過し、慧行を過え權化を過え、亦た大慈を過え、大悲を踊化す。要を以つて之を言はゞ、空相の願、我れ人の壽命を過え、衆見及發因緣を過離し、過えたる心は自淨にして神聖を承覺し、識念に於ける應不應の見を過え、過ぐれたる大金剛堅固の行なり。是れを龍王菩薩所行の二十二踊法、普智心を致すと謂ふ。一切衆の魔及び諸の魔身并に邪外道は自在を得ず、敢て當る者なく悉く之を降却せん。

【二】六堅法とは、一に信堅、二に法堅、三に修堅、四に徳堅、五に頂堅、六に覺堅なり。信堅とは別教の菩薩、十住位に於て空觀を修習し、一切の法皆眞諦なりと知り、よく毀壞することなきを言ふ。法堅とは、別教の菩薩、十行位に於て假觀を修習し、一切法は皆俗諦なりと知りて毀壞するなきを言ふ。修堅とは佛教の菩薩十回向位に於て中觀を修習し、一切法は皆中諦と知りて毀壞するなきを言ふ。徳堅とは別教の菩薩十地位に於て中觀を修するに依り、一分の無明を破し、一分の三徳を顯して毀壞するなきを言ふ。頂堅とは別教等覺の菩薩十地の頂に居り、破惑顯徳し毀壞するなきを言ふ。覺堅とは、別教妙覺の果佛一切の法は皆中道なりと覺して毀壞するなきを言ふ。

して、樂遊、閑居及び修靜は、惟だ慈尊の廣き敷説を蒙らん。辯才の行、具さに云何が得ん、深く總持を致して永く安住し、法要を弘め説いて常に斷無く、聞けば即ち奉行して終に忘れざらん。寂滅清淨にして行觀し、覺意は深遠に、智は廣博に、其慧は究め難く、徳は無邊なり。解行は云何が、菩薩なるべき。魔力と怒意を制持し、外道、衆の邪類を毀壞し、勇徳にして動じ難きこと大山の如くならん。月明、至極に、弘く之を説き、曉に無相性の所在を宜べ、野馬及幻法は、體像を夢想するも計するに皆な無なるを解了せん。惟だ願くば世尊よ、指示して説かれよ。

是に於て世尊は龍王に告て曰はく。善哉、善哉、快なること甚しく比なし。乃し自ら發心して如來に啓疑せり。今、汝の所問、宿しき功徳を承け、已に大悲を顯し、衆の志友となり、生死を勞はず、三寶を斷ぜず。王の質疑する、是れを用つての故なり。聞くに諦を以つてし、聽受し、思惟せよ、吾れ當に廣く菩薩大士の所修の行彼此無限果なる最要法を説くべし。時に龍王は言く。大善世尊よ、願樂くは聽聞を思へられよ。輒ち受行して十方に宣布し勸進して倦むなからん。

是に於て世尊は龍王に答へて曰はく。一法行あり、菩薩應者は相好備はりて、具に諸佛の法を得。何をか謂ひて一となす。道意を造記して衆生を捨てず。是れを一行諸佛の法を致すと謂ふなり。又、三十二事ありて普智心を得、當さに勤樂して行じ、意を専らにして守習すべし。何をか三十二と謂ふ。内性を御修し、上最の志を執り、大慈を昇行して、大慈を堅固にし、志慕して厭なく、精進を發して、仿は猛邁を具へ、強力を得、踰躡の勢あり、安靜にして煩無く、衆の爲に忍住し善友に習近して専ら法事を行じ、權化を執御し、思行を施備して檢戒を樂み、諂想は已に無く僞佞を滅斷して言行相應し、志に返復を存し、常に愧色有りて、内に自ら慚恥す。已に調忍、怡悅して、根行至信なれば、意して制御し、功徳を持するを得、志して小道を遠ざけ、樂つて大乘の行を弘め、一切三

【二】三本並に宮本に依り、  
敷と改む。

【三】三本並に宮本に依り、  
遊を極と改む。

【四】踰躡は、踰躡にして、こ  
えおどるの意。



得、己が自大を降し、法の上力を得て殃行を曉解し、所造すること有らざらしめん。施力を得しめ、所有は惜みなく恵みて報を望まざらしめん。戒力を得しめて等く衆罪を除き、而して諸願に過えしめん。忍力を得しめて諸の苦法、受生の處に於いて身命を惜むなく、精進力を得て衆の徳本を積み、志は常に倦むことなからしめん。定力を得しめて善寂にして靜に居り、定の要行を解せしめん。慧力を得しめて、邪見疑冥の昧昧たるを過ぎ、權方便を曉め、衆生を濟度するに明了にして勸助、具に五通に達して、天眼無限にして聽徹、知心、神足、明宿ならしめん。此を以つて果に遊樂し大辯才にして辯才句義、無盡不斷ならん。便ち總持を得て、志に恍惚無く、海印三昧の正定に逮ばしめ進みて普智に隨ひて果同一味、佛の志定を得て通行を習樂し、永く常に奉遵して障礙なく、法の志定に逮びて定意を勉進し、長久く聞法し都て限礙なく衆の志定を崇め、普く一切をして不退の衆を奉ぜしめ、施の志定を得て俗貨、法施に遺惜あらず。戒行念靜定を具足して速に佛心を得しめ、昇天の志定を忘るるなく、常に兜迹一生補處を念じ、菩薩の清行の行を志樂せしめん。爾の時に龍王は質疑畢りて悦心、怡懌し、重ねて讃頌を以つて世尊に啓問せり。

大仁よ、願くは現世の義を説かれよ、菩薩の徳行の應に入るべきところ、内性の志操の應に修すべきところ、何の道を興發して行するや、云何。順導するに慈を以つてし、行じて悲に入らん。衆を度するに護濟の念を以つてするを喜び、定智に弘化して清淨ならしめん。願くば哀傷を垂れて普説せられよ。衆を誘ひて止意し及び意斷し、根力神足の行は是の如く、道の七覺を演べて衆に散示せん。願くは彼の徳の應に奉すべき所を説かれよ。施調、撿戒の徳具足し、忍力、善行及び精進、慧志の因縁轉た無量ならん。云何が彼の蒙を度せん、之を説かれよ。辯才通達して愚冥を免れ、志行詳審に、常に清淨に、諸の起生する者は即ち覺知せん、惟だ願くは諸菩薩の爲に説かれよ。欣悦の徳は歡豫有り、聖種の七財、是れ行の最に

【七】五通とは、天眼通、天耳通、他心通、宿命通、如意通なり。

【八】兜迹とは、兜術とも書く、都率に同じ。

【九】三本並に宮本に依り、意を喜と讀めり。

【一〇】三本並に宮本に依り、勉を免と改む。

【一一】七財とは、七聖財なり、諸經の説一致せず、實樸經に依れば、信、戒、聞、慧、慍、捨、慧の七を言ふ。



とすること勿れ。如來至眞等正覺は當に隨ひて敷散し汝が心を解釋すべし。

時に阿耨達は神尊の聽す所となり質疑するを得て、心益々欣悅し、佛に白して言さく。天師、最尊、人中の聖尊、猛きこと師子の如く、感變すること無量なり。吾れ如來に問はん。普く衆生に及ぼし、亦た菩薩大士の爲の故に世の師者と爲り過俗の法を抜き、志行清淨に因縁を明盡し、群生を濟度し請ふ無きに友と作り、心は普く安く、之を救誘育立し、無畏十種力を執持して、衆魔を進伏し、諸の外道を降し、心に穢行なく、堅く金剛大徳の鎧を被、志、倦むことあらず、積徳の因縁は計量すべからず、<sup>三</sup>施戒、忍、進、定智は已に備り、心は一切に等しく雜相を蠲除し、<sup>四</sup>二見を棄捐し、越智度を以つて因縁法を解し、已にして深奥難極の要に入り、<sup>五</sup>聲聞、緣一覺の念を去離し、大乘の一切智心を捨てず。意行は堅強にして常に自在を得、身は淨無垢にして暉曜、明徹、志は虚空の如く、無數の諸劫に意倦まず。總持を逮獲し、貪穢を降除し自ら大に貢高にして如逝に等しければ、空無相の願、夢幻に住するが如くなるに過ぐるを以て、影響、野馬、水月、斯の諸法に於て等く解し、動かす。三寶の教を重し奉じて之を敬し、其法輪を轉じて所礙なく忻悅て信樂し自ら之を得ること優曇花の億世に希に出するが如し。志は靜に獨に安じて普く相を具する有り。宿に恭恪を樹たる明賢の大士は上の義法を、<sup>六</sup>遵修して住すること此の如し。彼の正士の爲の故に如來に問ふ。唯だ願くは如來至眞等正覺、菩薩大士の所行を解説せられよ。法門に遊び金剛の徳果に入り、深妙に達するを得ん。其をして修めて應に總持の場を獲しめ、四諦の行を以つて聲聞を順化し要眞を解せしめ、衆の緣覺を導いて因縁を靜起せしめ、熒むるに一心を以つて正覺に等しからしめん。諸法に達して當に大乘に入るべく、大乘に隨入して能く魔場を伏し、疑結を散棄し罪惱を過度せんと欲す。普く衆生の意志所行を知り、最も辯達を積みて諸法を敷演し一切の願に隨ひて所欲を化示せん。善い哉。世尊、如來無著平等正覺、廣く賢明の大士の爲の故に普く弘く演説し、諸の菩薩をして智力を致すを

【三】布施持戒忍辱精進禪定智慧の略。

【四】斷見と常見なり。

【五】原文には去離聲聞緣一覺念とあり。緣一覺とは緣覺に同じ。緣覺の原語は Praty-ekabuddha にして、是を Pratyekabuddha にして、是を Pratyekabuddha に分けて讀んだ故、緣一覺と譯せるもの、蓋し、珍らしき譯例なり。又、此の語の後に「等如逝者」の句あり、思ふに、此の如逝とは善逝の意ならん、(Sugata) の Sa には、善、如實の意ある故、如逝と譯せるなるべし。

【六】三本及宮本に依り尊を違と改む。

弘道廣顯三昧經

西晉 月氏三藏竺法護譯

卷の第一

得普智心品第一

是の如く聞けり。一時、佛、王舍城の鷲山の頂に遊びて大比丘衆千二百五十人、諸菩薩八千人と俱なりき。時に世尊は廣く無數百千の諸衆の爲に園遶せられて說法を敷演せり。

爾時に龍王有り阿耨達と名づく。宿に徳本を造し、菩薩を遵修し、大乘に堅住して六度無極を行じ、満相を具するを以つて勤めて衆生を救ひ、化道して極り無し、曾つて九十六億の諸佛に事へて功徳を積累せること稱數すべからず。權方便を執して普く五道に現じ、諸の愚冥を抜きて菩薩無欲の行を修せしめ、慈の四等を懷きて一切を濟度し、罪類を傷懲するが故に龍と爲りて龍を化し、億數殊行を免れしめて自ら池に處る。諸の眷屬八千萬衆を率ゐ、又た姪女十四萬人を將ゐ周匝導從、偕妓を調作す。其音は和雅にして龍に乗するもの感動し、威徳を協懷し、神變自由なり。衆の雜華を齋し、最妙の香を奉じ、幡蓋を齋持して世尊に詣で、至りて輒ち稽首し敬ひて如來に問ふ。尋いで所持の香華、雜寶、綵絲、幡蓋を以てし、重ねて音楽を調べ、欣心敬意して、衆の眷屬及び諸の姪女と俱に進みて佛に詣で、則ち前みて長跪し、肅然として叉手し佛に白して言さく。如來無著平等最正覺に問はんと欲す、菩薩の行すべき道は當にいかんがすべき、唯だ聽許を蒙り、乃ち能く敢て問ふ。爾の時に、世尊は龍王に告げて曰さく、汝、所問を恣にして所欲を疑ふこと勿く、難し

【一】 入金剛問定慧經又は阿耨達龍王經等と言ふ。

【二】 四等とは、慈悲喜捨の四無量心なり。

佛說三昧經

佛告諸比丘。若人欲求三昧。當先修持戒律。戒律清淨。則心無散亂。心無散亂。則易入三昧。若人欲求三昧。當先修持禪定。禪定清淨。則智慧現前。智慧現前。則能斷煩惱。若人欲求三昧。當先修持般若。般若清淨。則能證涅槃。涅槃清淨。則能得阿耨多羅三藐三菩提。

佛告諸比丘。若人欲求三昧。當先修持慈悲。慈悲清淨。則能化眾生。化眾生。則能得三昧。若人欲求三昧。當先修持忍辱。忍辱清淨。則能入三昧。若人欲求三昧。當先修持喜捨。喜捨清淨。則能入三昧。若人欲求三昧。當先修持淨信。淨信清淨。則能入三昧。若人欲求三昧。當先修持淨慧。淨慧清淨。則能入三昧。若人欲求三昧。當先修持淨行。淨行清淨。則能入三昧。若人欲求三昧。當先修持淨心。淨心清淨。則能入三昧。若人欲求三昧。當先修持淨意。淨意清淨。則能入三昧。若人欲求三昧。當先修持淨智。淨智清淨。則能入三昧。若人欲求三昧。當先修持淨覺。淨覺清淨。則能入三昧。若人欲求三昧。當先修持淨慧。淨慧清淨。則能入三昧。若人欲求三昧。當先修持淨行。淨行清淨。則能入三昧。若人欲求三昧。當先修持淨心。淨心清淨。則能入三昧。若人欲求三昧。當先修持淨意。淨意清淨。則能入三昧。若人欲求三昧。當先修持淨智。淨智清淨。則能入三昧。若人欲求三昧。當先修持淨覺。淨覺清淨。則能入三昧。



考へられないし、又大藏經の註には、何本には一の字無しとか、覺の字無しとか、緣一覺とある場所に記してゐる所などから考へて、其の當初は、緣一覺のみであつたと考へ得る。そして斯かる譯語が上手だとは言はれない。して見れば本經が法護譯なる限りに於て、法護晩年の譯出とは考へ難い。要するに、此の譯出年時には疑問を存し得ると思ふものである。

次に本經の成立に就て一考しやう。經集部の諸經は、今日尙殆んど未整理であつて、全體を見た上でなければ何とも斷言し得ないが、本經が般若系のものたる

は明かで、且つ大般若已後のものと考へられる。問題は法華等との前後であつて、思ふに本經を法華已前と見るには多少の困難がある。即ち、本經の言はんとする所は畜生なる龍の成佛で、是が首尾一貫してゐる。そして、其の龍族の成佛を般若空觀の立場から論じ、其間に手際よく、墮地獄者の成佛や、一切衆の發心を挿入したものである。従つて空觀の立場からは、言ふべからざること述べて、そこに立場上の矛盾が見られる。尙又、空觀に立脚する菩薩を稱揚する反面に、聲聞としての迦葉、阿難等を卑下するは、

先づ般若の立場である。乃で思ひ當るのは法華經中の提婆品で、同じく龍女の成佛を扱つてゐるが、提婆品の構想は本經に比して、どうしても劣つてゐる。思ふに、何づれも斯かる思想流行時の產物であらうが、本經中に、聲聞乘、緣覺乘、大乘の三乘を述べ、全體として開會思想が窺はれる所等から見て、本經は、法華の影響に依る、般若系統の產物と見るが、穩當であらう。終りに臨み、文學士渡邊隨嚴君の勞を謝する。

昭和七年十二月廿七日

譯者 布施浩 岳 識

功德や、方法等を説き、經典受持の事、舍利供養の功德等も説いてゐるが、注意すべきは、聲聞なる迦葉、須菩提、阿難尊者等が、卑下せられ、文殊、智積等の諸菩薩が忽然出現して、主役を演じてゐることである。

第十一受封拜品は感激せる龍王が、其の池中の宮殿を世尊に捧げ、精舎とする許しを得て、世尊は微笑せられ、佛の口より、五色の光り現れて全世界を照す有様を述べ、こゝに於て、世尊は龍王の本

地を説き、定光佛との因縁を明かにして龍王に阿耨達如來の授記をなし、且つ其淨土を詳細に説明してゐる。そして、阿耨達如來の寂後は、龍王の子、「當信」が持願佛となり、代つて此の經法を弘通すると述べられて、説法が終了し、世尊は龍王の大莊嚴の車にて、池中より奉送せられ、靈鷲山にお歸りになるのである。

最後の囉累法藏品第十二は靈鷲山に於

ける説法並に經過を叙したもので、十方佛土の諸尊や、阿闍世王夫人等まで來集し、佛の説法を聽聞する。この時、墮地獄の者共が救はれる一段があるのは注意を要する。佛陀は此經の受持讀誦並に説法の功德を述べて、佛滅後に舍利塔を建立し供養する功德より勝ると説き、慈氏、濡首及び、諸衆に此經を付囑して本經は終つてゐる。

已上は本經内容の大體であるが、全體として本經は般若の空觀に立脚し、多少積極的に進出したかと思はれる程度のもので、非常に読み難い經典である。余は涅槃の解題に、故島地師の言を引用して読み難いと言つたが、本經の難讀なるは蓋し彼れ已上である。

## 二、本經の傳譯と成立

本經は出三藏記集一の記録に依れば、阿耨達龍王經、阿耨達請佛經とも名づけ

られたもので、内容から見て、阿耨達龍王經と言ふが最も適當してゐやう。傳譯年時は本錄には記されず、只法護譯として認められてゐるのみで、其年時を記すは、歷代三寶記六に、永嘉二年三月の譯出とし、聶道眞の錄に見ゆとあるに始る。長房の記録には隨分疑はしい點が多いが、此の記録も、どうやらと思ふ。なぜなら、永嘉二年は西紀三〇八年で、法護示寂の前後である。(法護に就ては、文殊師利普超三昧經解題に書いておいたから、こゝでは省く)乃で、本經が、長房の記す如く、永嘉二年の譯出であるとすれば、今少し、譯出が上手に出來さうなものと思ふ。本經は読み難いし、又妙な譯例がある。例せば、緣覺を緣一覺と譯し、六境中の觸を更と譯せるが如きである。一見、不思議に思はれるは、本經中に、緣覺と緣一覺と兩譯のあることで、傳譯當時から兩譯語が入つてゐたとは、

# 弘道廣顯三昧經解題

## 一、本經の内容

本經は四卷より成り、其の構成は左の如くである。

### 第一卷

得普智心品第一  
清淨道品第二  
道無習品第三

### 第二卷

諸如來品第四  
無欲行品第五  
信值法品第六

### 第三卷

轉法輪品第七  
決諸疑難品第八  
不起法忍品第九

### 第四卷

突要品第十  
受封拜品第十一  
賜累法藏品第十二

本經の説處は王舎城靈鷲山と阿耨達池の中とで二處三會になつてゐる。先づ、初めは、第一品名の示す如く、普智心を取扱つたもので、阿耨達龍王の質問に端

を發して、世尊の説法が始つてゐる。其説法は普智即ち一切智を得る方法として、三十二事、十六事、二十二事、二十二踊事、三十五事等を擧げ、反復説明を試みてゐる。次の清淨品は更に龍王の請によつて、菩薩の清淨道を説けるもので、八直正道と言ひ、度無極道、恩行道、神足道、四等行道、八正道、等衆生道、三脫門道、入法忍道の八種を擧げ説明してゐる。其の内容は大小乘に渡る佛教徒一般の修行法を集めたものに過ぎぬが、其根本精神は空觀に立脚してゐる。第三の道無習品は第二品の繼續で、清淨道により淨心を得たる菩薩の神通に依る垂迹化導を説くもので、其根本精神は空觀に依つてゐる。已上が靈鷲山の説法である。第四請如來品は雪山の下にある無熱池

中の阿耨達龍王の宮殿に、世尊等を半月の間招待する事を世尊から許されて、其の準備する光景を描き、且つ目連尊者が、靈鷲山と池中との間を往來して、使者の役目を果し、斯くして、遂に世尊等、池中に到り、龍王の供養を受ける有様を描いたものである。そして、此供養が終るや、説法が始るので、其内容が、第五無欲行品已下である。無欲行品は空觀に依る無欲行を説き、轉じて斯くの如き菩薩は化他の爲に三界に化現し衆生を指導することと自由なるを述べ、三十七道品は結局、無欲行に依存すると説いてゐる。次の第六信值法品は龍王の請に依り、更に佛に値ひ奉る方法として信が根本なるを説くもので、其の信とは空觀に依る修行より生ずる、空觀の信である。

第七轉法輪品より、第十衆要品に至る迄は流通分に屬すべきもので、先づ空觀に依つて法輪の意義を述べ、更に護法の



り。佛是の經を説くの時、九萬六千の天人は遠塵離垢し法眼淨を得、六萬八千の人は悉く無上正眞道の意を發し、二萬二千の菩薩は不起法忍を得、八千の人は諸の食欲を離れたり。三千大千世界六反に震動し、時に應じて大音あつて普く告せり。天上世間悉く來て斯の經典を供養し、諸天の伎樂鼓せずして自ら鳴り普く告せり。天上世間悉く來て散華燒香搗香澤香し面て悉く所轉の法輪に値ふ。如來此の所説の經に於て悉く衆の邪異道を降伏し、諸の邪行を却け、衆の魔を仰制す。斯の如來の印は則ち如來の法を精修すと爲す。諸の族姓子よ。便ち當に分別して此の法印究竟の正見を求むべし。佛是の如く説けるに、王阿闍世、濡首童眞彌勒大士一切の菩薩、諸の大聲聞の舍利弗大迦葉須菩提阿難等、諸天、世人、阿須倫は佛の所説を聞いて歡喜せざる莫し。

しは禽獸に逢ひ、若しは鬼神に値ひ、若しは盜賊に遇ひ、若しは水火恐懼之難に遭ふも便ち當に斯の經典を思念して説き歌頌すべし。若し怨家寇逆惡賊有るも其の便を得る能はざるなり。爾の時に佛、賢者阿難に告ぐ、斯の經典を受けて持ち誦誦し讀め。所以者何。假使人有て汝に從て此の經典の要を求めば其の族姓子族姓女は一切の疑を斷じて猶豫有ること無く、衆の結を洗除して永く已に除了し、諸魔罪蓋も覆蔽する能はざるなり。宿の殃戮邪害聖礙は自然に消滅す。所以者何。設、斯の經を聞かば則ち狐疑無ければなり。佛、阿難に告ぐ、吾汝に屬累す。慇懃に戒勅せよ。犯逆の者の若きも斯の典の要に入て歡喜欣悅せば則ち逆有ること無く亦危害無く罪蓋無し。青年の迦葉、佛に白して曰く、唯然大聖、吾斯の經典を證明するを見たり。向者王阿闍世の宮に就て逆事を分別し、王阿闍世は尋いで時に不起法忍を逮得し疑網即ち除きたればなり。我時に念じて言く、阿闍世は本より一切諸法を曉了せず、亦諸逆の事を分別せず、唯然、世尊、諸法の本淨は自然の性なり。而も（これに）反して思想し吾我有りと計り諸見を立て一切諸逆の本淨なるを理練する能はざるなり。阿闍世の如きは近く顛倒を習ひ虚偽の衆想勤苦の患を成ぜしなり。若し此れを究暢せば則ち衆難無きなり。吾今より始めて諸の群生も亦罪有ること無く惡趣の法無く、其れ之れに入らば則ち超絶して去り終始有ること無きを説かん、と。佛言く、善哉、善哉、迦葉よ、誠に云ふ所の如し。諸佛世尊の道義は之れ正しくして塵垢有ること無し、と。賢者阿難前みて佛に白して言く、唯然世尊、斯の經典を建立して後の末世において閻浮提に遊ばしめむ、と。爾の時に世尊左右の脇より大光明を放つて普く三千大千世界を照すに樹木牆壁普く自然に茲の如き音響を出せり。如來則ち斯の經典を建て已りしなり。設、此の經典大海中に在らば若し劫燒の時も應に是の經を聞くべし。中斷して聞かざるを得ざるなり。佛、阿難に告ぐ、悉く樹木牆壁出す所の音聲の如きは誠に云ふ所の如し。斯れ諸の正士、衆の徳本を殖へるなり。最後の世の時是の經を受けむ者は中に失はざるな

【四】戒勅とは、慎重に心を引きしめること。

【五】耆とは、六十歳を云ふ。

【六】正は三本宮本に依りて政の字を改めたり。

【七】劫燒とは、壞劫の時の大火災を云ふ。

【八】牆壁は、かこひのかべ。

と需首とに報を加ふる能はず、當に何等を以て大供養を興すべき。若し氏族子よ、人に從て斯の經典を聞かば其の恩は報じ難し。假使人有て如來を見て從て是の經を聞かむと欲せば當に其の人を觀じて世尊を見るが如くすべし。設、如來至眞等正覺を供養せんと欲せば當に此の族姓子を供養すべし。若し族姓子族姓女を觀れば當に之れを、仰いで佛世尊の如くすべし。諸の菩薩吞嗟し已畢つて佛足に稽首し。右邊三匝す。此に於て佛土忽然として現らず、各各其の本國土に遷還し、各各自ら其の如來の前に住して所受の法の如く廣く人の爲に説き、則ち佛前に於て一一の彼土にて無數の群生を開導し教化して無上正眞道の意を發さしめたり。

### 屬累品第十三

爾の時に世尊、彌勒に告げて曰く、仁當に斯の正法明典を受け無量の人の爲に分別して説くべし。多に安隱にせられ、多に哀念せられよ。諸天世人悉く當に恩を蒙るべし。彌勒菩薩、佛に白して言さく、唯然世尊、吾則ち斯の經典の教を受け已れり。亦過去の等正覺の所に從て是の經を啓受せり。

今現在に於て世尊に面値し斯の法を聞くを得たり。唯然大聖如來の現在に吾此の經を以て演べ流普せしめん。佛の滅度の後には兜率天に在りて當に群生の爲に分別して此れを説き衆の徳本を殖へるべし。若し族姓子族姓女の然も後世に於て耳に斯の經を聞き大乘に志さん者は當に知るべし、彌勒の建立する所の斯の經を奉持せば若し弊魔有つて其の便を伺求するも吾等當に世尊の聖旨を承けて之れを將護し瑕短無からしめん、と。佛、帝釋に告ぐ、當に斯の經の阿闍世品を受けて一切の結を斷すべし。所以者何。天と阿須倫と假使恨を懷きて戰鬪するも當に斯の經典を念せば諸天則ち勝ち阿須倫降ればなり。佛言く、拘翼よ、今汝に、屬累す。若し斯の經典、州域郡國縣邑城墾丘聚に在れば則ち其の土を護り怨、敵、讐、隙、其の使を得ず。若しは縣官に至り、若しは賊中に在り、若

【四】大正藏經は瞻とするも宋元明三本宮本に依りて仰に改む。  
【三】右に三遍まわること。

【一】拘翼とは、帝釋の名。  
【二】屬累とは、法を付屬して傳通せしむること。  
【三】讐隙は、仇や不和のもの。



忍を得たる菩薩は衆徳を成就し亦復是の如ければなり。佛故に汝に告げて殷勤に屬累す。若し族姓子族姓女よ、是の三千大千世界に於て中に七寶を滿して如來至眞等正覺に布施するに晝夜各三(度)にして懈怠せず。布施時に隨て一劫に至り若しは復劫を過ぐるも、(その功德は)是の經典を受くる(功德)に如かざるなり。王阿闍世諸の狐疑を除き猶豫有ること無く諸の陰蓋を淨めて一切諸法の平等を分別するを若しは書し若しは讀み、受持し諷誦し、(又は)之れを聞いて信樂し、竹帛一四 匹素に書著せる經卷を一五 矜莊に執翫して此の正法をして久しく住するを得しむる此の功德の福は彼(の)布施の功德に過ぐる事甚だ多く、稱限すべからず。佛言く、族姓子よ、若し百劫に於て禁戒を奉持し普く止足を知り乃ち閑居を得て志樂して捨てざるも、其れ是の經を聞きて信樂せば其の功德の福は則ち彼の禁戒を守るの上に過ぎたり。若しは百劫に於て忍辱を行じ一切衆生の罵詈一六し、搥捶一七して以て杖痛を加ふるも皆之れを忍ぶも、若し復人有て此の經要を聞きて信樂せば其の功德の福は彼の忍辱の上に超越す。若し百劫中に於て精進を行じて一切衆生の類を供養し身及び壽命を愛まざるも是の經を聞いて歡喜して信する者に如かざるなり。若しは百劫中に於て禪思を行じ、燒一八に觸れること有るも惑亂せざる(にいたる)も是の經を聞きて歡喜して信する者には如かざるなり。若し百劫に於て智慧を行じ傳攬曉了して達せざる所無きも、設復一九此の究竟本淨、心暢、自然の經典の品を聞いて歡喜し受持して諷誦せば其の功德の福は則ち彼(の)智慧を行する功德に超越し能く速かに諸の通慧を勸立するなり、と。時に諸の菩薩俱に佛に白して言さく、唯然世尊、吾等已に斯の經典を受けたり。在在の所遊の諸佛國にて所任の處に有て便ち當に宣布すべし。所以者何。衆の經典は則ち佛事を興せばなり。時に諸の菩薩聲を擧げて歎じて曰ふ、便ち復華を散じて三千大千世界に遍ねく而して斯の言を説く、設二〇、此の經典を閻浮提に布いて長久く住すれば世尊能仁の正法顯成し濡首童眞も當に永く存せしむるなり。吾等未だ曾て是の如きの像經を省聞せざ、所以に假使聞かば吾等は佛恩

【四】 匹、素は、共に絹布なり。

【五】 矜莊は、うやうやしくつゝみて。

【六】 稱限すべからずとは、量り盡くすことの能はざるなり。

【七】 搥捶は、うつこと。

【八】 燒は、うつしくくなまめかしきもの。

誠に云ふ所の如し、今斯の經典の宣布せらるる處は則ち是に如來遊止せられ、則ち是に如來應勸に教を垂れたまふなり。又族姓子よ、乃ち昔往古ひかし鏡光佛の時吾彼の世に於て決を受得せり。髮を敷く所の地にて鏡光如來は髮の上を踏越ふみこへて散ずるに蓮華を以てし法忍を速得す。吾に荊を授けて曰く、後無數劫に當に作佛するを得べし、能仁如來と號けむ、と。是の如くして族姓子よ、時に鏡光佛諸の比丘に告ぐ、汝等は當に斯の地を越踏こすべからず、所以者何、是れ則ち天上世間神寺佛塔た爲ればなり。菩薩髮を敷ける其れに處所せば法忍を速得す。誰か此れを欲して塔を起つる者ぞ。彼の諸の天子八十億人同時に稱して曰く、吾等當に起つべし、と。爾の時に會中に一長者有り、名を賢天と曰ふ。世尊に白して曰く、吾斯の地に於て當に塔寺を起つべし、と。佛言く、興す可し、と。族姓子よ、賢天長者は即ち彼の處に於て七寶の塔の莊嚴具足せるを起て還また鏡光に詣でて佛に問ふて言く、予其の地に在て七寶の塔を興せり、福は何所に越くや。鏡光如來尋いで之れに報へて曰く、長者知らむと欲するか、菩薩大士不起の忍を得て其の地處を計るに車輪の如く下地際を盡す、一切衆生各土塵を取りて皆舍利の如く之れを供養し乃復、上九三十三天に至る、溝中の七寶以て佛に布施するも若し之れを塔寺を起すの福に比べむと欲せば終に相及ばざるなり。塔寺の福最も多くして計り難し。長者此所に於て徳本を殖へたり、吾今一〇摩訶に一一荊を授けむ、當に無上正眞の道を爲し、若し成佛せば亦當に卿は大道を立つべきこと決せりと。族姓子の意念に於て云何。爾の時の長者の賢天と名ずくる者は豈異人ならむや。斯の觀を作す莫かれ。所以者何。此の衆會の中に長者の子有り。名を受行と曰ふ。今吾一二決を授く、當に來世に於て佛道を得て、善見如來至眞等正覺明行成と號し、善逝世間解無上士道法御天人師たり、佛衆祐たり。是れを以ての故に族姓子族姓女よ、比丘比丘尼清信士清信女若しは住し若しは坐して是の經典を書き、持つて諷誦し讀み他人の爲に説かば則ち其の處に於て下地際を盡し一切諸塵は悉く衆生と爲り又此の土は悉く舍利の如くならむ。所以者何、

【九】 三十三天は、初利天のこと。欲界の第二天にして須彌山の頂上におり、中央を帝釋天として四方に各八天あれ合せて三十三天なり。

【一〇】 摩訶とは、長者のこと。荊は、記荊なり。

【一一】 決は、記荊のこと。

【一二】 出家在家の教徒のこと。

度一切の智慧は衆の罣礙を超越し、群生類の心行の根原を解了し、以て本末を分別して時に應じて説法し、普ねく世を照す、願くば何に因て欣笑するかを説きたまへ、衆生は十方に在り、一切は其の前に處す、無數億姪の衆は一一に問ひ難し、能仁は之れ聖師なれば乃ち其の疑を決するに堪へたり、善い哉、願くは慇懃して何が故に欣ぶかを解説したまへ、其れ過去の諸佛は最勝に住立せられ又當來の世尊は猶恒河沙の如し、分別して六趣を知り、慧は無極に度る、欣笑を現する所以は、垢を離る、願くは疑を決せん、光明は日月を超へ、魔釋梵宮を翳ひ諸の鐵圍を通徹して、衆山の頂を超照す、蒸黎の元を安隱にし、衆の勤勞を枯渴す、善く説いて諸の垢を除きたまへ、何が故に熙欣して笑ふや。

是に於て世尊、阿難に告げて曰く、寧ろ月首太子を見る乎。對へて曰く、唯然已に見たり。佛の言く、今此の月首は佛前に於て衆の徳本を殖へ則ち以て無上正眞道を勸助し稍く當に漸積して菩薩行を修せり。淨界如來佛道を成するの時又此の太子は彼の佛土に生じ轉輪王と爲り、淨界如來至眞等正覺を供養奉持して其の形壽を盡すまで施すに所安を以てせん、滅度の後は舍利を供養し正法を將御し、法滅盡せる後は即ち當に遷没して、兜率天に生じ則ち其の劫に於て無上正眞道を爲すを得て最正覺を成じ、月英如來至眞等正覺明行成と號し、善逝世間解無上士道法御天人師たり、佛衆祐たり。國土の所有佛之壽命は諸の比丘衆とともに亦淨界世尊の如く等しく差特無きなり。爾の時に他方世界より諸の來會せる菩薩大士、濡首と俱に此の忍界に至り斯の言を説くを聞きて前んで佛に啓白す、濡首眞の遊至す可き所は則ち當に之れを觀するに其の土の處所は悉く如來の爲にして空缺有ること無し、諸佛世尊は復勞慮せず、所以者何。唯然世尊、濡首の所攝は終に惡趣不劇不閑及び諸の魔事罪蓋塵穢無ければなり。其れ州域郡國縣邑丘聚城郭有て斯の正典を流布し、則ち其の處を觀るに如來遊居して虚空有ること無きなり。世尊告げて曰く、是の如し、是の如し、族姓子よ、

【六】鐵圍は、山の名。閻浮提の南極端より三億六萬六千六百三由旬の處にある鐵山なりと云ふ。

【七】などやかによるこぶ貌。

【八】兜率天は、欲界の天處にして彌勒菩薩の淨土なり。



む。無造陰世界の所有（ちんごう）。梨庶（りじょ）は壽盡に至るも狐疑無ければ終没の後も三塗に歸せざるなり。淨界如來は設けて群生の爲に經を講說せば悉く諸垢を去り塵勞有ること無く皆清淨を得む。是の故に舍利弗よ、人人相見るも相平相莫し。相平相に當らざる所以は人根見難ければなり。獨（ひとり）如來有て能く平相の人たり。佛の如く行すれば平相の人とす可きなり。賢者舍利弗、及び大衆會驚喜踊躍して斯の言を説く。今日より始めて其の形壽を盡して他人を觀ず、敢て人某は地獄に趣き某は當に減度すべしと説かず。所以者何。群生の行は思議すべからざればなり。時に佛此れを説きて阿闍世の決を喻ふるに三萬二千の天子は無上正眞道の意を發し、各誓願して曰く、淨界世尊正覺を成ずるの時吾等當に彼の佛土に生じ欲世界に造らず、と。佛即ち之れに當に彼の土に生ずべきを（二五）記せり。

月首受決品第十二

王阿闍世に一太子有り名づけて月首と曰ふ。厥年八歳なり。頸の（一六）瓔珞を解いて用て佛の上に散じて曰く、吾此の徳を以て無上正眞之道を勸助し、斯の善本を以て淨界如來正覺を成ずるの時、願くは彼の土に於て四域の主たる轉輪聖王となり、其の形壽を盡すまで如來及び比丘衆を供養せん。佛滅度の後は舍利を奉持して經典を受け然して後に無上正眞道を成ずるを得て最正覺を爲さんと。這散（二〇）ぜる珠璣は便ち虚空に於て則ち七寶交露の棚閣と成り、四方四植上下平等にして嚴正微妙に、其の閣の内に於て四寶の床を安んじ天繒綵を敷く、如來之れに坐して相好莊嚴なり。佛時に即ち笑ひたまふ。世尊笑法して則ち無數の（二一）寶限す可からざる百千の光色其の口より出でて照すこと思議すること難く邊際有ること無し。諸佛世界より梵天を超へ、魔之宮殿の日月光明は自然に（二二）蔽暝し、焰廻して身を遶ること無央數。匝（二三）にして頂上より入る。賢者阿難即ち坐より起て偏（二四）に右の肩を袒にし、長跪叉手（二五）して偈を以て讚めて曰く、

【二五】 梨庶は、もろもろのたみなり。  
【二六】 壽盡とは壽命の終ること。

【二七】 記とは、記別にして修行者の未來の證果に關し一々區別して豫め説き給ふこと即ち修行者に關する佛の豫言なり。  
【二八】 瓔珞は寶玉を連ねて造れるかざりのこと。

【二九】 實は、三本宮本に依りて偈を改めたり。寶限すべからずとは計る能はざるの意。  
【三〇】 おほひかくれること。  
【三一】 匝は、めぐること。  
【三二】 長跪は、體を伸してひざまづくこと。

濡首童眞は阿闍世を勸めて無上正眞道の意を發さしめたり。計り難き劫に於て離垢藏如來と無數の諸佛ありき。彼の劫中に於て三億(の佛)有りて平等正覺せり。(これは)悉く是れ濡首に誘惑せられて法輪を轉じ長壽久しく存せしめられしなり。設百千の世尊も終に爲す能はざる王阿闍世に説法して疑を決せるは其惟れ濡首能く斯の王の爲に疑網を決除せばなり。所以者何。濡首童眞は數諸佛に從て是の深法を聞けばなり。是れを以ての故に當に斯の觀を作すべし。其れ菩薩有て所度に應ぜむ者は本發意に從て其の本師を得ば之れが爲に説法し乃ち能く解するのみ。王阿闍世は集欲輕地獄より出生せり。上方に於て是れを去ること五百佛國の其の世界を莊嚴と曰ひ其の佛を寶英如來至眞等正覺と號す。今現に説法せり、當に復重ねて濡首を見るべし。從て深經を聞き彼の上<sup>ニ</sup>に在り。即ち當に不起法忍を逮得すべし。彌勒菩薩正覺を成ずるの時、當に復來下して斯の忍世界に還り號して不動菩薩大士と曰ふ。彌勒如來は當に衆會の爲に不動菩薩の前に興爲せる所を宣講すべし。又復此の經典を分別して至説を敷陳し、不動菩薩は能仁如來の世に大國の王と作り阿闍世と名すけたり、惡友の言に從て自ら其の父を害す、濡首に從て所説の經典を聞き柔順法忍を得、此れに因て罪を除き餘有ること無からしめたり、と。彌勒如來は不動菩薩に緣りて此の經法を説くに八千の菩薩は不起法忍を得、八萬四千の菩薩は無數不可計會の罪蒙の積聚を蠲除せん。是の如し舍利弗、王阿闍世は今より已往八百難計會の劫に菩薩行を修し衆生を開化し佛土を嚴淨せり。又舍利弗よ、王阿闍世の所化の衆生は聲聞地、若しは緣覺地と爲り、若しは大乗を行す、斯等の衆生は當に罪蓋有るべきも塵垢の蔽無く狐疑悉く除きて猶豫有ること無し。八千不可計の劫を過ぎて當に無上正眞の道を得て最正覺を爲すべし、劫を喜見と名すけ世界を無造陰と曰ひ佛を淨界如來至眞等正覺と號し壽十四劫ならむ。諸の聲聞衆は七十萬人にして大會を爲し一切慧解して八脫門に志し、諸の菩薩衆は十二億有りて皆智慧度無極善權方便を得、滅度の後、正法當に住すること一億歲なら

【八】久遠の過去の時<sup>ノ</sup>意。

【九】無生法忍とも云ふ、見惡を斷じて空理を生ずるを無生法忍を得と云ふなり。

【一〇】已往は已前なり。

【一一】難計會とは、計算すること能はざる程の數量なり。

【一二】劫とは、通常の年月日時を以て算し能はざる遠大の時節を分別する稱なり。

【一三】三界の煩惱を捨離してその繫縛を解脫する八種の禪定なり。

【一四】智慧度無極とは、般若波羅蜜のことにて諸法の實相を照了して通達無礙なる菩薩の智慧なり。此の智慧に依りて生死の此岸より涅槃の彼岸に渡れば度と云ひ、亦其の行法、際限なければ無極と云ふなり。

聞き心木を解暢し清淨顯曜なり。又其の人の如く此の【二二】典語に入らば一切の法を受けて解脱を得るなり。佛言く、舍利弗、是れを以ての故に若し族姓子族姓女我が滅度の後に能く是の法誼を聞き即便信樂せば、又人迷惑して心乖き、惡知友に隨て【二三】罪鬘を犯すも法忍を失はず、乃ち無餘に至り解脱を得るなり。吾斯等を惡趣に墮すと謂はざるなり。是の如き像類深妙の法を信樂する有らば所得是の如し。斯れを以ての故に茲の如き【二四】等倫は正路に處するなり。其れ斯の典を聞いて即ち信樂せる者、講說平等に章句歎頌に廣く他人の爲に分別して演ずる者は徳悉く是の如し。何に況んや奉行して修すること所教の如くなるをや、と。濡首は諸菩薩大士、迦葉、王阿闍世、及び無數の人と共に佛所に往詣して稽首し足を禮して却て一面に坐しぬ。

爾の時に舍利弗、濡首と諸の會者悉く坐し定り已るを見て、王阿闍世に謂へり。大王は狐疑寧ろ斷ずると爲す乎。答へて曰く、唯然、仁者に尋ねて則ち斷ぜり。又問ふ、何をか斷ずと云ふや。答へて曰く、受けず捨てず是れを謂て斷ずと爲す、亦所得無く本末永く了し垢染有ること無きを則ち斷ずと爲すなり。舍利弗、佛に白して曰く、王阿闍世畢す所は幾如なるや、餘は幾如有るや。世尊告げて曰く、王の餘殃は猶芥子の如く、滅する所の罪は須彌山の如し。深法所説の經誼に入りて無生法に至れり。舍利弗又佛に白して言く、王阿闍世は當に復惡趣に往歸すべき乎。答へて曰く、忉利天子は七寶重閣の【二五】交露ある(ところ)に在りて、閻浮提に下り、尋いで木處に還るが如し。是の如くして舍利弗よ、王阿闍世の所入の地獄を賓跢羅【二六】(晋に集飲)と名づけ、這に入り尋いで出づるも其身は苦惱の患に遭はざるなり。舍利弗の言く、及び難し、世尊よ、王阿闍世諸根明達して乃ち斯の如き乎。又能く若干の罪鬘、斯の如き重殃の地獄之毒をも獨除せるかと。佛、舍利弗に告ぐ、王阿闍世は前に已に七十二億の諸佛世尊を供養し、衆の徳本を殖へて咸く經典を受け、法を聞く所にて無上正眞道を勤めたればなり。汝豈に濡首を見たる乎。對へて曰く、已に見たり。世尊告げて曰く、

【二二】 典語は、經典のおしへ  
いましめなり。

【二三】 つみあやまち。

【二四】 ともがらなり。

【二五】 忉利天子は帝釋なり。

【二六】 交露は、珠を交錯して  
幔を作り其の形垂露の如きも  
のを云ふ。

【二七】 閻浮提は、須彌山の南  
方にある大州の名にして吾人  
の住處を指す。



はず、若し染汚するも惡趣に歸せず。設し、心清淨にして垢染無くむば則ち諸趣無ければなり、と。時に於て逆人は地獄の火毛孔より出で毒痛甚だ劇しくして救護無ければ則ち佛に白して言く、我今燒かる。唯天中の天、救濟せられよ、大聖に歸命せん、と。是に於て世尊金色の臂を出して實人の頂上に著くるに火時に即ち滅し復苦痛無く、如來の身の若干の相好を見て身痛休息して安隱なるを得たり。又前みて佛に白す、沙門と作らむと欲す、と。佛尋いで之れを聽し即ち寂志と爲す。時に於て世尊爲に四諦を説き、其の人之れを聞いて遠塵離苦し法眼淨を得、法教を修行して往還證を速得し、羅漢を得るに至れり。又佛に白して言く、般泥洹せんと欲す、と。世尊告げて曰く、意の所存に隨へ、と。時に於て比丘虛空に踊在し地を去ること四丈九尺なり。身中に火を出して還自ら體を燒く。百千の天人虛空の中に於て來り供養す。時に舍利弗、彼の入斯の律教を受けて滅度を得るを見て則ち驚きて之れを怪み、前みて佛に白して言く、誠に及び難きなり。天中之天、如來恩施所説の法律は乃ち逆者をして法教を受くるを得しむ。是の如く行ぜざる者を然も殊別に救済に堪ゆる者有らば惟如來有るのみ。濡首童眞と大德鎧を被れる諸の菩薩の倫は能く一切群萌の根原を覩て之れを度す。聲聞、緣覺の境界には非ざるなり。佛言く、是の如し、舍利弗、誠に云ふ所の如し。是れ佛、大士、法忍の菩薩三境界なり。又舍利弗、汝等の所見は地獄に墮すると想へるも佛之れを覩るに滅度の法に至るあり。汝等、人の滅度に應ぜざる者を視るも世尊省知するに惡趣に墮するなり。或は知足有徳の士閑居して戒を奉じ三昧定なるを以て汝等は之れを滅度の法に至ると謂ふも如來之れを見るに反て地獄に墮するなり。所以者何。汝等三類は心行を離れ遍く衆生の心原を察する能はざればなり。群萌の所行は思議す可からず。又舍利弗、汝此の母を殺せる者を見ると爲す乎。深法を説くを聞きて無餘に至り般泥洹するを得たるをも（見ると爲すや）。對へて曰く、惟見たり、天中の天よ。佛舍利弗に告ぐ、斯の母を害せる者は五百の佛に於て衆の徳本を殖へ深妙の法を

【九】 沙門のこと。

【一〇】 度の字の下、地の字あるも三本宮本に依り之れを削除す。

【一一】 知足は、足るを知つて分に安んずること。

度せむと欲す、と。佛の威神、彼の化人をして地を去ること四丈九尺の虚空の中に於て滅度を取り身中に火を出して還また自ら體を燒かしむ。時に於て逆子、彼の化人の沙門と作るを得て經法を聽受し佛の所説を聞くを見て心に念じて言く、向者、彼の人は自ら二親を危くせるも世尊の前に在りて沙門と作り亦滅度を得たり。今吾何ぞ彼の人に効たごはざる故あらむ、沙門と作りて亦當に滅度すべし、と。是の念を作し已て佛所に往詣し聖足に稽首し前すんで佛に白して言く、我も亦逆を造り自ら母の命を危くせり、と。佛言く、善哉、善哉、子至誠を爲して欺る所無し。言行相副ひ如來の前に詣て誠諦の言を説き兩舌ならず亦自ら侵さず。當に自ら惟察して心の法を觀すべし。何所の心を以て其の親を危くせる、過去心、當來心を用てなる乎、現在心なる耶。其れ過去心は已に滅盡す。其れ現在心は即ち已に別れ去りて處所有ること無く亦方面無く安住を知らず。當來心は則亦未だ至らざれば集聚の處無く未だ旋返するを見ず亦往還無きなり。子當に之れを知るべし。心は亦身の内に立せず、亦外にも由らず、亦境界無く、兩間にも處せず、中に止まるを得ざるなり。其の心を察するに亦五色の青赤黃白黒無し。子當に之れを了すべし。心は色無く亦見る可からず、亦所住無く、亦退轉せず、言教有ること無く、執持す可からず、猶幻たづの如し。子、心を察せんと欲せば分別す可からず、解了す可からず、姪と名す可からず、怒と究む可からず、癡と知る可からず、姪怒癡無ければなり。子當に心を知るべし、生死の行無く、亦所作無く、亦所現無く、亦現在せず、心は清淨にして亦垢染も無く、亦淨も無きなり。心は此に在らず彼にも在らず、異處にも在らず、猶虚空の如く、亦等倫無く、色像無く、亦言教無し。明智有らむ者も依倚すべからず、吾を言て是れ我所と謂ふを得ることなし。處に造るを得ること莫く、想と爲すを得ること無く、畢竟に造る莫く、所爲有ることなく、過去を念すること莫し。所以者何はたが。子當に之れを知るべし。一切諸法は悉く所住無く猶虚無の如ければなり。子且まに之れを聽くべし。是の如く解すれば佛は人、法に於て脱有りと謂

誠を爲して欺る所無し。言行相副ひ如來の前に詣でて誠諦の言を説き兩舌ならず亦自ら侵さず。當に自ら惟察して心の法を觀すべし。何所の心を以て二親を危くせる、過去心、當來心を用てなる乎、現在心なる乎。其れ過去心は即ち已に滅盡す。其れ現在心は即ち已に別れ去りて處所有ること無く亦方面無く。安在を知らず。當來心は則ち亦未だ至らざれば集聚の處無く未だ旋返するを見ず亦往還無きなり。子當に之れを知るべし。心は亦身の内に立せず、亦外にも由らず、亦境界無く、兩間にも處せず、中に止まるを得ざるなり。其の心を察するに五色の青赤黃白黑無し。子當に之れを了すべし。心は色無く亦見る可からず、亦所住無く、亦退轉せず、言教有ること無く、執持す可からず、猶幻の如し。子、心を察せんと欲するも分別す可からず。解了す可らず、姪と名す可からず、怒と究む可からず、癡と知る可からず、姪怒癡無ければなり。子當に心を知るべし、生死の行無く、亦所作無く、亦所現無く、亦現在せず、心は清淨にして亦垢染も無く、亦淨も無きなり。心此に在らず亦彼にも在らず、異處にも在らず、猶虚空の如く、亦等倫無く、色像無く、亦言教無し。明智有らむ者も依倚すべからず、吾を言て是れ我所と謂ふを得ることなし。處に造るを得ること莫く、想と爲すを得ること無く、畢竟に造る莫く、所爲有ることなく、己身と言ふこと無く、吾我と云ふことなく、過去を念すること莫し。所以者何。子、當に之れを知るべし。一切諸法は悉く所住無く猶虚空の如ければなり。子且に之れを聽くべし。是の如く解すれば佛は人、法に於て脫有りと言はず、若し染汚するも惡趣に歸せず。設、心清淨にして垢染無くば則ち諸趣無ければなり、と。時に於て化人即ち歎じて曰く、未曾有を得たり。天中之天なる如來の因らるる最正覺を成じて法界を了知するに作者有ること無く亦受有ること無く、生者有ること無く、滅度の者無く、依倚する所無し。願くば出家するを得て佛世尊に因り沙門と作るを得て具足戒を受けむ、と。佛言く、比丘、善く來れりと。時に於て化人前みて沙門と作り即ち佛に白して言く、唯然世尊、吾神通を獲て今滅

【六】宋元明三本及び宮内省本に依りて以を已に改む。  
【七】安在は、とどまり在るところなり。

【八】天中之天とは、佛の尊號なり。諸天の尊ぶ所なればなり。或亦、佛は實の至極なれば天中天と云ふ。



心本淨品第十一

爾の時に濡首、王阿闍世及び諸の眷屬並びに餘の來者無數の衆の爲に開化說法し、即ち坐より起て比丘衆、王阿闍世群臣寮屬及び無數の人と宮門を出で行けり。塗路を行くに一男子を見たり、自ら其の母を害ひて他の樹下に住し、啼哭懊惱して、奈何んがして其の人究竟して現在に度に應ずべきやを稱呼し、而も自ら剋責して所作無狀なり。大逆を造つて自ら其の母を危くせば當に地獄に墮つべければなり。爾りと雖も其の人當に律行を修すべければ時に濡首、比丘衆の前に於て 異人を化作し即ち時に母を害へる人の所に往詣し、之れを去ること遠からざる道に中つて住す。其の母を害せる者は遙かに父母、子と共侶なるを見る。父母、子に謂ふ、是れは正路なり、と。其の子答へて曰く、斯れ正路に非ず、と。遞互に誦を起す。是に於て 化子 現に瞋怒を懷き化父母を殺せり。其の逆罪の子遙に化子の化父母を害ひて啼哭 酸毒し自ら勝ふ能はざるを見る。尋いで(化子)即ち母を害へる人の所に往詣し之れに謂て曰く、我父母を殺せり、當に地獄に墮すべし、哭いて言く、奈何にして當に何の計をか設くべき、と。其の母を害せる者自ら念じて曰く、今此の來れる人は乃ち二親を害ふ。我は但母を危するのみ。其の人の癡冥の罪は莫大なり。我の逆を爲すは尙彼に差へり。彼の受くる罪の如きより吾、猶輕きを覺ゆ、と。其の化人は悲哀酸酷に口に並びに宣べて言く、吾當に能仁佛の所に往詣すべし。其れ救無き者には佛は爲に救を設け、其れ恐懼せる者には所患を慰除すればなり。佛の所教の如く我當に奉遵すべしと。時に、化人啼哭して路を進み其の前に在て行き、而して母を害せる者は尋いで其の後に隨へり。(自ら念じて曰く)彼の過を悔ゆるが如く吾も亦當に爾るべし。吾罪は微薄なるも彼の人は甚だ重からむと。化人、佛に詣でて地に稽首し佛に白して曰く、吾大逆を造り二親を害し斯の大罪を犯せり、と。佛、化人に告ぐ、善哉、善哉、子は至

【一】大摩に泣き、もだへなやむ貌。

【二】元本明本に依りて異人を異人とす。

【三】大がひにの意。

【四】化子は、濡首の化作せる人。化父母も同じ。

【五】酸毒とは、甚だしく心を苦しめること。

を演べ、眞諦の原を説けばなり。已に我有ること無くむば彼則ち人無きなり。人無くむば所有衆生は虚無にして實有ること無し。是の如く之れを計れば則ち所造無く、亦作者無く亦受者無し。又問ふ、大王、狐疑は斷ぜざる乎。答へて曰く已に究除せり矣。濡首問ふて曰く、云何んが大王、猶豫、絶ちたるや。答へて曰く、永く絶ちしなり。濡首又問ふ。今王云何んが衆會の中に於て王は逆有るを知て而も逆無しと言ふや。答へて曰く、不也。又問ふ、云何んぞ。答へて曰く、其れ已に逆なる者、無の結を脱して證に造る者、彼の諸の逆なる者、斯の會の逆なる者。其の諸の逆なる者は則ち是れ菩薩柔順の法忍にして、衆人をして斯の忍に入るを得て、彼に於て諸逆を攬持すべからざらしむればなり。是れを以ての故に彼に於て諸逆を總攝すべからざればなり。時に慧英幢菩薩、聲を擧げて歎めて曰く、以爲に、大王の路を嚴除して乃ち能く斯くの如きの法忍を逮得せり、と。王則ち答へて曰く、一切の諸法の本末は悉く淨なり。又一切の法は究竟して閑黙に、染汚する所無し。是れを以ての故に染汚して爲に垢を作る可からず。無所著道斯れを名ずけて道と曰ふ。又彼の道は生死に歸せず、泥洹に至らず、諸の賢聖の道は道御の者無し。無所起道、斯れを名ずけて道と爲す。道は道有ること無し。王阿闍世此の言を説くの時、柔順法忍に明達することを逮得す。時に於て中宮の四十二の女は濡首の威神變化を見て皆無上正眞道の意を發し、五百の庶民は遠塵離垢し、法眼淨を得たり。時に無央數百千人の衆、皆來て王宮の門下に集會し、聞法供養奉事を得むと欲す。濡首眞眞、脚足の指を以て此の地を案ずるに時に王舍城悉く琉璃と作り、一切の城里所居の民は悉く濡首、菩薩、聲聞を見たり。譬へば明鏡其の面像を照して自ら其の影を見るが如くなりき。濡首眞眞は諸來者の爲に如應に説法し、八萬四千人の經法を聽ける者は法眼淨を得、五百人は皆無上正眞道の意を發せり。

【一九】永く絶つとは、久遠の昔に絶ちたるを云ふ。

【二〇】一切法の空無所有なるを知るも而も能く一切法を假立して諸の衆生を化す。即ち假法中に於て忍可信證する故に法忍と云ふなり。

【二一】分明に眞諦を見るを法眼淨と云ふ。

【二二】明本に依りて諸の字を得の字を改めたり。

【二三】案ずとは、おさへること。

【二四】無上正眞道とは、阿耨多羅三藐三菩提に同じ。

ち見と爲し諸見を離れたるなり。假使、見を離れて所見有らば所見無くして諸見を離れざるなり。是の如きの見は能く<sup>三三</sup>等觀と爲すなり。設、諸法に於て所見有らず、已に所見無くむば則ち等觀と爲すなり。時に於て王阿闍世、皆一切想念の所著を離れ、三昧より起て尋ひて則ち還る。復衆の會者を見るに諸后、姪女、城郭、殿宅亦復故の如し。王阿闍世濡首に白して曰く、向者の衆會は何所に湊まれりと爲すや。又吾前に在りしに之れを見ず、と。濡首報へて曰く、猶大王の狐疑の湊まれるが如し。其の衆の會者は向には彼に在り、と。又問ふ。大王、衆會を見る乎。答へて曰く、已に見たり、濡首問ふて曰く、云何むが見たる。而も狐疑を見て衆の會者を觀るも亦復是の如くなりしか。又問ふ、何等を以て狐疑を見たる乎。答へて曰く、會者目前所見の諸形色を觀るが如くんば狐疑も亦然なり。内外を見ざるなり。又問ふ、大王、世尊説いて曰く、其れ犯逆の者は中に止まるを得ず、無有間に處す、と。王自ら知て當に地獄に至るべき乎。王尋いで答へて曰く、云何んが濡首、如來至眞は正覺を成ずる時、豈、法、罣圈に歸し、斯れは<sup>三五</sup>三塗に趣き、斯れは天上に趣き、斯れは泥洹に趣く有るを見る乎。答へて曰く、不也、大王。濡首察見するに、吾今一切諸法を覺了す。覺了せる所の法は諸の經法に於て亦<sup>三六</sup>無所得なり。地獄に趣き、若しは天上に生じ、般泥洹するも、一切諸法は皆悉く如と爲すなり。若し空の歸趣する所を分別し空を瞻れば、地獄に趣くこと無く、天上に至らず、泥洹に歸せず、一切諸法は破壊する所無く、一初諸法は悉く<sup>三七</sup>法界に歸するなり。其の法界とは惡趣に歸せず、天に上らず、泥洹に歸せず、其れ逆無間も則ち法界と謂ふ。諸逆の原も則ち法界と謂ふ、其れ本淨なれば則ち諸逆と謂ふ。其れ諸逆なれば則ち本淨と謂ふ。是の故に言て諸法本淨と曰ふなり。是の故に濡首、一切諸法は無所生に至り、斯れに由て自ら<sup>三八</sup>惡趣に歸せざるを知り、亦天に上らず、泥洹に升らざるなり。濡首答へて曰く、云何んが大王、佛法の教を亂すや。答へて曰く吾亦世尊の教命に違はず、佛法に詭らざるなり。所以者何。世尊分別して無我の際

【三三】 等觀。平等觀なり。

【三五】 無有間とは、無間地獄のこと。

【三六】 罣は領、圈は羂。囚徒を領録して禁繫する義。

【三七】 三塗とは、一に火塗、地獄趣の猛火に燒かるゝ處。二に血塗、畜生趣の互に相食む處。三に刀塗、餓鬼趣の刀劍杖を以て逼迫せらるゝ處なり。

【三八】 眞理を體得して心中執着する所無く、分別する所無きを無所得と云ひ、空慧とも云ふなり。

【三九】 法界は、本經の異譯なる阿闍世王經には法身と譯せり。

【四〇】 衆生が惡業の因縁を以て趣くべき所に於て、三惡趣、四惡趣、五惡趣等有り。三惡趣とは地獄、餓鬼、畜生にして、これに修羅を加へて四惡趣とし、人天、を加へて五惡趣とす。



則ち亦現らず、空中に聲あつて曰く、其れ身を現せる有らむものに衣を以て之れに與へよ。と。王阿闍世、次第を以て衣を以て施すに諸の菩薩一一現らず。各各説いて曰く、其れ現せる有らむものに衣を以て之れに與へよ。と。床榻机案も亦空にして現らず。王阿闍世、賢者大迦葉に謂て曰く、今現に有らむ者、當に斯の衣を受くべし。仁者は最尊にして王の容歎せる所なり宜しく之れを受くべしと。大迦葉曰く、吾姪、怒、癡、除盡無きなり。如今、吾身は衣を受くるに應ぜず。無明を捨てず、欲索を除かず、苦惱を斷ぜず、習を滅せず、盡證を爲さず、路に由らず、吾れ佛を見ず、亦法を聞かず、聖衆を御せず、塵勞を釋かず、思想を發さず、思想を離れず、慧を建立せず、亦慧を離れず、吾眼は淨ならず亦慧を造らず、亦所滅無ければなり。其れ我に施すも大福を獲ず、亦福無きにも非ず、吾亦生死の法に在らず、滅度の法も無きなり。其れ我に施すも衆祐の徳を究竟する能はざるなり。假使、大王、能く行じて是の如く等しく諸の誑を護らば我斯の衣を受けむ。と。王阿闍世、衣を以て之れに擲げるに忽然として現らず、空中に在て聲を聞くに曰く、其の身現せる者に衣を以て之れに與へよ。と。王阿闍世次第して衣を施すに則ち各現らず。是の如く一切の諸大弟子一一恍惚として没し復現せず五百人を盡せり。復聲を聞くに曰く、王の見る所の身に衣を以て之れに施せ。と。即ち自ら念じて曰く、菩薩聲聞悉く復現ぜず。吾當に第一の后と與に還るべし、則ち宮裏に入り遍く觀察するに亦一切の姪女を觀見す。王阿闍世便ち斯の如きの定意に親近するを得たり、其の目の瞻る所は諸色を見ず、亦男女を見ず、童子を見ず、童女を見ず、大小を見ず、牆壁を見ず、樹木を見ず、屋宅を見ず、城郭を見ず、續て身想を見る。と。復聞くに空中に聲有て曰く、其の身現せる者に衣を以て之れに與へよ。と。王即ち自ら著して自身を見ず。尋いで則ち一切の色想を雪除せり。復聲を聞くに曰く、假使、大王、諸色形像の所有を見ざれば柔軟安隱にして狐疑を觀ぜよ。亦當に狐疑を見る如く一切法を觀ぜば亦復是の如くなるべし。如、所所見無くむば斯れ乃

【三】習とは、煩惱の餘氣なり。

【三】恍惚は、微妙にして測られざるを云ふ。

於て受けず、捨てず、亦收むる所無く、諸法を脱して而して意有ること無く亦意あらざること無く、一切法を觀て吾我を見ず、吾我を計せず。是の如く行ぜば乃ち從て衣を受けむ、と。王阿闍世、衣を以て之れに施すに則便現すなはちあららず。空中に於て聲有て曰く、其れ現はるる有らむ者に衣を以て之れに與へよ、と。次に菩薩有り、定華王と名す。王阿闍世、衣を以て之れに施す。時に於て菩薩亦受くるを肯せず。而も斯れに説いて曰く、假使、大王、諸の三昧を行じて、定意に於て所懷有らず、諸法の本淨平等なるを信解して脱有ること無くんば我乃ち彼に從て斯の衣を受けむ、と。王阿闍世、衣を以て其の身の上に著く。時に於て菩薩則ち亦現らず。空中に於て聲を聞くに曰く、其の身現ざる者に衣を以て之れに與へよ、と。次に坐せる菩薩を無逮得と名す。王阿闍世、衣を以て之れに施す。時に彼の菩薩亦受くるを肯せず、而も斯れに説いて曰く、假使、大王、一切の陰に於て得度し、文字音聲は一切平等にして不可得なるを信じ、已に諸法を見て所得無くんば則便導利すなはちして所得の誼無く、衆好を御せず、嚴飾を導をへず。斯の行を作さば我乃ち彼に從て所受有らむ、と。王阿闍世、衣を以て之れに擲ぐ。時に彼の菩薩忽然として現らず。空中に於て聲有て曰く、其の身現ぜる者に衣を以て之れに施せ、と。次に菩薩有り淨三垢と名す。王阿闍世、衣を以て之れに施す。時に彼の菩薩亦受くるを肯せず。而も斯れに説いて曰く、假使、大王、自ら身を得ず亦受くること無くむば、其れ施あるも亦稀望無きなり。若し是の如くむば我乃ち衣を受けむ、と。王阿闍世、衣を以て之れに擲げるに則ち亦現らず、空中に於て聲有て曰く、其の身現ぜる者に衣を以て之れに與へよ、と。次に坐せる菩薩を化諸法王と名す。王阿闍世、衣を以て之れに施す、時に菩薩亦受くるを肯せず。(菩薩曰く)假使、大王、聲聞も示現してこゝろな般泥洹するも亦滅度せず。緣覺を示現して般泥洹するも亦滅度せず。如來を示現して般泥洹するも亦滅度せざるなり。終始の法も無く滅度の法も無ければなり。(若し是の如くむば)吾乃ち衣を受けむ、と。王阿闍世、衣を以て之れに擲げるに

【八】般涅槃なり。即ち入滅のこと。

【九】眞諦門に徹底せば諸法に終始有ることなく惑迷、滅度の分つべき無ければなり。

覺を度する者にも従つて斯の衣を受けず。吾亦如來の所受にも従はず、亦度如來法者にも従て所受有らず。假使大王、斯の法を行ぜず、斯の法を捨てざれば吾乃ち彼に從て所受有らむ。當に受くべき所の者、若しは施有らむ者は俱に同一等にして差特無し。此の如く施さば則ち清淨と爲し、衆祐の説く所なり。王阿闍世則ち其の衣を以て慧英幢の身に著く、即ち座上に於て忽然として現らず。已に空中に於て復聲を聞くに曰く、其の身現する者に衣を以て之れに施せ、と。次に菩薩有り、信喜寂と名すく。王阿闍世、衣を以て之れに施す。其の菩薩の曰く、吾亦從て自ら身を見て所受有るに如はず、他を見るにも從はざるなり。塵に見著するに從ふも所受有らず。塵を離るるにも從はず、亦寂寂に從て所受有らず無綺に從はず。定慧にも從はず。亂志にも從はず。智慧にも從はず、無慧にも從て所受有らず、と。王即ち衣を以て菩薩の上に著く、則ち亦現らず。空中に於て聲有るが如くして曰く、身を現はす有らむ者に衣を以て之れに施せ、と。次に菩薩有り、不捨所念と名すく。王阿闍世衣を以て之れに施す。時に於て菩薩も亦受くるを肯ぜず。而して斯れに説いて曰く、吾れは身に依るに從て所受有らず、言に綺るに從はず、心に綺るに從はず、慧に綺るに從はず、諠に綺るに從はず、陰に綺るに從はず、種に綺るに從はず、衰入に綺るに從はず、諦に綺るに從はず、佛音聲に綺るに從て所受有らず。所以者何。一切諸法は皆綺る所無く著する所無く、究竟して永く安く亦震動無ければなり、と。王阿闍世、衣を以て之れに施すに時に於て菩薩則ち亦現らず、空中に聲有て王に語つて曰く、其の身現する者に衣を以て之れに施せ、と。次に坐せる菩薩を名すけて尊志と曰ふ。王阿闍世、衣を以て之れに施す。時に於て菩薩亦受くるを肯ぜず。而も斯れに説いて曰く、王當に之れを知るべし、吾は卑脱に從て所受有らざるなり。假使、大王、無上正眞道の心を發して其の心等なれば道意則ち等なり。信道意等にして道已に平等なれば其の心も亦等なり。已に道意を等しくせば諸法も則ち等なり。已に能く一切法を平等とせば乃ち從て衣を受けむ。一切法に

【二五】異譯の阿闍世王經卷下には、「若し他人に我有りと計する有らば我是の物を受けず」と有り。

【二六】異譯の阿闍世王經には「若し自ら他人に著する有らば我是の物を受けず」とある。

【二七】等とは、平等なり。



假使人有て處を求めば言教して諸法を推索せしむ。假使、大王、諸法に在て所念無ければ則ち一切の狐疑の結を除かん。而も諸法に於ては決除する所無きなり。所以者何。其れ狐疑は法と適等にして差特無ければなり。故に曰く法界は平等を御す、と。一切諸法と法界とは此の諸法に於て當に平等を御すべし。所以者何。一切諸法は則ち法界に入ればなり。若し法界を等しくせば則ち諸法も等し。是の故に名ずけて法界平等一切諸法と曰ふ。其の法界は諸法を等御すればなり。是の語を説くの時、王阿闍世柔順法忍を得、歡喜踊躍して心に大安を獲たり。尋いで即ち又手して歎じて曰く、善哉、快よく斯の言を説いて余の疑を辯除せり、と。濡首答へて曰く、王當に之れを知るべし。斯れ大冥狐疑の結と爲すなり。王の如きは究竟して一切法を釋せよ。而して斯の言を説く、善哉濡首、快く斯の言を説いて疑惑を辯除せり、と。王又答へて曰く、吾諸の陰蓋を滅盡するが爲に、假使我身、命終して没せば則當に道に至るべし。濡首答へて曰く、是れ大王の甚き狐疑と爲す。乃ち一切諸法を究竟して滅度に至らむと欲せば乃ち能く稀望して泥洹を想へ。泥洹を究竟せば一切諸法において復滅度を望想すべし。泥洹を究竟せば諸法は本淨にして所生無し。爾の時に王阿闍世、軟妙衣の價值百千なるを取つて即ち手持し濡首に奉上し、法恩に報ひ其の身を覆んと欲するに濡首童眞忽然として現らず。其の身何所に歸趣せるやを見ず。空中に聲あつて曰く、如今、大王、濡首の身を觀見せず。其の狐疑を觀るも亦復斯の如し。狐疑を見るが如く、一切諸法を見るも亦復是の如し。諸法を觀じて所見あるが如きも是の如きの見は所見無きなり。又曰く、大王、所見の身に衣を以て之れを與へよ。濡首に次いで坐せる菩薩有り、名を慧英幢といふ。王阿闍世、衣を以て之れに與ふ。時に於て菩薩、衣を受くるを肯むせず。而して斯れに説いて曰く、吾、所有を脱するを欲せず、亦瞋恨せず、亦滅度せず、吾亦凡夫の法に近きて斯の衣を受けず、度凡行者に従はず、學者に従はず、亦復、度塵法に従はず、不學に従はず、無學にして法を度する者に従はず、緣覺に従はず、亦復緣

則ち諸法と曰ふなり。心は形色無く亦見る可からず。危害する所無く、處所有ること無く、言教有ること無し。譬へば幻の如く外に處せず、内に處せず。心は本より淨にして自然に明なり。設、心淨なれば則ち染汚無く亦所淨無し。王當に此れを解すべし。其の本淨の心は染汚すべからず、淨有ること無ければ虚妄有ること無く亦所著無く危害する所無し。無諦の想に因て所造有るなり。無諦の思想設所住する有れば凡夫。愚駭は欲の塵勞に狎て、彼は則ち謂て誠諦有ること無きを何り、則ち無誠諦の想を發起す。其れ無誠なれば則ち諦を興さず、一切の諸法は不眞諦に住す。彼の無誠諦の想を存するを以てなり。譬へば大王此の虚空を喩ふるが如し。色無く見ること無く執持す可からず、亦所捨なく亦言教も無し。假使、人有て説言して曰く、今此の虚空は色無く見ること無く執持す可からず、亦所捨なく言教有ること無し。吾今、塵烟焰雲霧を以て虚空を汚染せんと欲す、と。王答へて曰く、能はざるなり。濡首曰く、是の如く大王、心本之れ淨にして自然に顯明なれば則ち塵烟焰雲霧を以て蔽礙し之れを汚す可からざるなり。譬へば塵烟焰雲霧は虚空に住するも終に空を染めて垢汚を爲さざるが如し。是の如く大王、吾我の想を發せば是れ我所は、鑿に因り結の婬、怒、癡、爲るを緣するも、心法を汚さずと謂ふなり。汚れざる心法は自然に之れ淨なり。是の故に大王、仁者は彼に於て狐疑を懷くこと勿れ。王之れを知らむと欲するも其れ過去心及び當來心は則ち形貌無く、其れ當來心及び過去心も亦形貌無し。現在心は依倚する所無く亦無所有なり。前心の所念は後心を礙へず、後心の所念は前心を礙へず、其れ現在心も亦復是の如し。彼れを明知して斯の觀を造れ。心は無所有にして亦有らざること無し。過去心は已に滅盡し、未來心は未だ至らず。現在には住無くして諸法を觀見し、當來は住無くして諸見を蠲除す。怪しむ所無き者は解脱を爲す故に。清淨の想は諸法の垢を離れ、世に普等し、明に普等す。所生無ければ言教有ること無く、及び言教無ければ處不處無し。世尊の所説は寂然の議なり。其れ寂然なれば彼法を計るも處有ること無し。

【一〇】 愚駭は、おろか者なり。

【一】 大正大藏經は相となすも三本宮本に依り想と改む。  
 【二】 鑿とは、觀察すること。  
 【三】 當來心は、未來心に同じ。

【四】 大正大藏經は以とすれども三本宮本に依て已に改む。

無爲等哉、諸法は究竟して生無きが故に。王の意云何。彼の法は生無く亦所起無し、亦 所有無く眞諦有ること無し。豈能く人有て之れを汚染せんや。答へて曰く、不也。濡首曰く、彼の法は寧決斷すべきや不耶。答へて曰く、不也。濡首又曰く、一切の諸法は等しく泥洹の如し。如來は此れを解して最正覺を致せり。猶是のごとき故に王の狐疑は決斷すべからず。是の故に大王は修行して造立する所有るべからず。倒心に從はず當に修して眞諦の觀を造立し、無本を觀すべし。設能く察せば則ち諸法に於て所受無く亦 所曉無く與に遊居せず。若使大王、諸法と俱に遊居せずば斯れ乃ち信と爲すなり。其れ信有るを寂滅と爲す。其の寂滅は乃ち自然に淨なり。自然に淨なれば乃ち所造無し。所造無ければ一切諸法は則ち主有ること無し。彼則ち忍に造るも、一切諸法は造有ること無し。王當に之れを知るべし、所造無ければ則ち滅度と爲す。諸法を計るに亦所造無く所破壞無し。亦造有ること無く亦造せざる無し。斯れを滅度と謂ふなり。假使大王、此の脫に順ぜば則ち平等脫なり。已に等脫せば則ち其の法に於て 趣無く逮無く不増不減なり。所以者何。一切の法に於て利誼する所無く、亦所求も無し、諸法は無本なればなり。其れ無本なれば則ち所生無く、所生無ければ則ち無本なり。其れ無本なれば等しくして差特無し。故に無本無異と曰ふなり。設使大王、無本を解信せば一切の狐疑は自然に爲に斷ぜん。又若し大王、眼は染汚無く亦所淨無し。眼は之れ自然にして無本爲るが故なり。無本自然なれば則ち眼と曰ふなり。耳鼻口身心も亦復是の如し。心は大王、染汚有ること無く亦所淨無し。心は之れ自然にして無本爲るが故なり。無本自然なれば則ち心と曰ふなり。王當に之れを了すべし。色は染汚無く亦所淨無し。色は自然にして無本爲るが故なり。無本自然なれば則ち色と曰ふなり。痛、想、行、識も亦復是の如し。識は染汚無く亦所淨無し。識は之れ自然にして無本爲る故なり。無本自然なれば則ち識と曰ふなり。王當に之れを了すべし。一切諸法は染汚有ること無く亦所淨無し。諸法は自然にして無本爲るが故なり。無本自然なれば

【七】 所有無しとは、空の意なり。

【八】 通曉せざるところ無き意。

【九】 歸趣もなく逮得もたきなり。



所無し。是れを以ての故に何所にか法有て染汚するの逆限を見ん。豈決了し若しくは淨除すべけむや。大王、斯の法誼を等觀せよ。吾是れを以ての故に向者に説いて江河沙等の諸佛世尊も能く決了せざる所なりと言ひしなり。復次に大王、諸佛世尊は内心を得ずして所往有り。外心を得ずして所往有り。所以者何。一切諸法は自然に清淨にして處所有ること無し。自然に淨なれば處所有ること無く、志願有ること無し。所往有りとはいかなん。自在を得る哉、諸法は自然の故に。自然に無き哉、諸法は興立無きが故に。蹉跌無き哉。諸法は所有無きが故に。所有無き哉、諸法は形貌を離るるが故に。形貌無き哉、諸法は虚無なるが故に。蔽礙無き哉、諸法は教相無きが故に。教化無き哉、諸法は自然にして所有無きが故に。所有を離るる哉、諸法は歸趣を釋く故に。歸趣無き哉、諸法は別離無き故に。別離無き哉、諸法は所生無き故に。所生無き哉、諸法は自然に淨なるが故に。心性淨なる哉、諸法は分無くして空等の如き故に。倫比無き哉、諸法は伴黨無き故に。侶無き哉、諸法は二を離るるが故に。二有ること無き哉、諸法は澹泊の故に。無量なる哉、諸法は斷絶無きが故に。邊際無き哉、諸法は崖畔無き故に。誠諦無き哉、諸法は顛倒して不誠諦に従て所往有るが故に。顛倒無き哉、諸法は常に淨にして安已を得るが故に。常有る哉、諸法は歸嚮無きが故に。清淨なる哉、諸法の本淨は明達に因るが故に。已自然なる哉、諸法は無我にして顯曜する故に。安隱なる哉、諸法は想念無きが故に。猶豫無き哉、諸法は内寂然なる故に。欺妄無き哉、諸法は究竟して誠諦無き故に。靜寞なる哉、諸法は澹泊五十九の相の故に。吾我無き哉、諸法は我を除くが故に。穿漏無き哉、諸法は解脫相の故に。寂滅に趣く哉、諸法は所念を離るるが故に。恐懼無き哉、諸法は若干を離るるが故に。一等を造る哉、諸法は脱を等御する故に。故に。慌忽みくわつなる哉、諸法は本際を想せざる故に。想有ること無き哉、諸法は閑默を壞する緣無き故に。空に順する哉、諸法は衆見を離るるが故に。願有ること無き哉、諸法は三世を離るるが故に。三世を斷する哉、諸法は去來今無きが故に。

【五】澹泊とは、心のあつさりとして無欲なる貌。

【六】慌忽とは、微妙にして測られざる貌。

卷の 下

決疑品第十

是に於て阿闍世、諸の菩薩及び聲聞の衆の食し訖り、<sup>一</sup>澡し畢るを見て更に卑き榻を取りて濡首の前に於て坐し法を聽聞せんと欲す。惟願くは濡首、我が狐疑を解け、と。濡首答へて曰く、大王の所疑は、<sup>二</sup>江河沙等の諸佛世尊も能く決せざる所なり、と。時に王自ら救無く護無きを省て榻より墮つ。大樹を斷つて摧折し地を<sup>三</sup>攤するが如し。大迦葉曰く、大王自ら安んじて恐懐を懐くこと莫かれ、以て懼を爲すこと勿れ。所以者何。濡首眞眞は大徳の鎧を被り善權方便あつて此の言を説く。

<sup>おもしろ</sup>徐に問ふべし。時に王即ち起て濡首に問ふて曰く、<sup>四</sup>向者、何ぞ江河沙等の諸佛世尊も我が爲に狐疑を決する能はずと説くや。濡首報へて曰く、王の意云何。諸佛世尊は心行を縁とする乎。答へて曰く、不也。濡首又問ふ、諸佛世尊は心行を發す乎。答へて曰く、不也。又問ふ、諸佛世尊は心行を滅する乎。答へて曰く、不也。又問ふ、諸佛世尊は有爲を行する乎。答へて曰く、不也。又問ふ、諸佛世尊は無爲を行する乎。答へて曰く、不也。又問ふ、諸佛世尊は有爲を行すること無し。行有ること無くんば歸趣する所無し。寧ろ人有て教化し法に於て之れを決斷する乎。答へて曰く、不也。<sup>いかなり</sup>(濡首曰く)王當に之れを了すべし。吾れ是の故を以て斯の言を説けり。王の狐疑は江河沙等の諸佛正覺も能く決せざる所なり、と。復次に大王、假使、人有て自ら説いて曰く、我、塵冥灰烟雲霧を以て虚空を汚染す、と。寧<sup>じしう</sup>堪任する乎。答へて曰く、汚すこと能はず。濡首又問ふ、設令大王、吾此の空を取つて之れを洗ひ淨ならしむ(と云はば)寧<sup>じしう</sup>堪任する乎。答へて曰く、能はざるなり。濡首報へて曰く、是の如く大王、如來の身は諸法を曉了して猶虚空の如し。最正覺を成じて自然に淨なれば染汚する

【一】澡とは、口をそそぎ清めること。

【二】江河沙とは、ガンデス河の沙の數のことにて數の多きことを示すに用ふ。

【三】攤とは、ひつさくこと、

【四】堪忍する乎とは、出來ると思ふかの意。

斯の諸の菩薩本建立する所、又彼の如來昔願を造るの所は鉢虚空より來て掌に在り、と。王阿闍世  
濡首に問ふて曰く、是の諸の菩薩は何れの佛國より來るや。世界は何と名ずくるや。如來正覺は號  
して何等と曰ふや。濡首答へて曰く、世界は常名聞と名づけ。如來は離聞首と號し、今現在說法す。  
是の諸の菩薩は彼より來て仁の食に就けり。王之狐疑所懷の虚妄を聽省するを得んと欲す。時に諸  
の菩薩志に建立する所、如來本願の鉢空中に於て自然に飛來し無芽八味の浴池に投じ洗滌して清淨  
なり。諸の族姓子二萬三千の諸の龍采女各香を齎して諸の菩薩の掌中に著けたり。時に王茲れを見  
て信用踊躍し則ち前みて濡首童眞に稽首す。濡首童眞王に告げて曰く、供饌を設くべし。宜しく是  
の時を知るべし。王即ち教を受け則便若干種の食、奇妙の珍膳供具を陳列するに悉く徧ねく食して  
消滅せず。是の如くにして阿闍世本供施する所の五百人の饌にて悉く二萬三千をして皆飽足するを  
得しめて飲食故の如し。阿闍世王、濡首に白して曰く、今饌故の如くにして消賜せず、と。濡首答  
へて曰く、如今仁者の狐疑未だ盡きず、疑盡きざるが故に猶斯れ饌を食して用て消索せざるがこ  
ととなり、と。時に諸の菩薩飯食し畢竟て尋いで其の鉢を以て空中に跳擲す。鉢は虚空に處し  
依據する所無くして墮落せず。王阿闍世濡首に同ふて曰く、今斯の諸の鉢は何所に止まると爲すや。  
濡首答へて曰く、猶大王の狐疑所存の如し。今此の諸の鉢は亦彼に處するなり。時に王答へて曰く、  
鉢は所立無し。濡首答へて曰く、猶大王の所有の狐疑も亦所立無きが如し。今此の諸の鉢は依據す  
る所無くして而も墮落せず。諸法も是の如く所有無く亦所住無し。是れを以て諸法も亦墮落無し、  
と。

【三】 消索は、きへつきるなり。

【三】 跳擲は、上に高く投げること。

【三】 大正大藏經は虚無とするも宋元明三本及び宮本に依りて虚空と改む。



則ち弘意を以て濡首を念ずること佛世尊の如し。王阿闍世、諸の群臣中宮官屬と與に、花、香、搗澤香、衣服之具、幢幡、繒蓋、伎樂、琴瑟、箜篌を齎持し、濡首を奉迎して稽首し禮し畢り、濡首に侍從して城に入り宮に歸れり。濡首、諸の眷屬と初めに城に入るの時、城内の蒸民は各所有を齎して以て來り供養す。時に會中に於て一菩薩有り名を普觀と曰ふ。濡首告げて曰く、卿族姓子よ、其の殿舎をして會者を包容せしめよ、と。尋いで即ち教を受け其の左右を察して普ねく阿闍世殿を周觀するに、自然に寬大となり繒花蓋を懸け幢幡を跣立し、其の地平博にして衆の花香を散す。復菩薩有り、名を法超と曰ふ。濡首告げて曰く、卿族姓子よ、衆座を嚴辨せよ、と。時に應じて教を受け手を舉げて彈指するに彼の殿館に於て二萬三千の床座自然に具足す。若干種の飾、微妙莊嚴なる無數の座具を其の上に敷けり。濡首童眞と諸の菩薩衆悉く俱に座に就き、聲聞之れに次げり。王は濡首と諸の菩薩聲聞と坐し畢るを見て前んで自ら啓白す、且らく斯須を待て供具を増辨せん。濡首答へて曰く、大王自ら安んぜよ。自から當に備足すべし以て勞を爲す勿れ、と。時に四天王其の眷屬と悉く來り濡首童眞を供侍す。又天帝釋良善夫人及び餘の玉女無央數千、天上の梅檀雜香蜜香搗香を齎持して以て用て一切の菩薩及び諸の聲聞に供散す。時に諸の菩薩は諸の花香及び諸の玉女を見るも玉女の想無く、花香の想無し。梵忍跡天、梵志摩納の形に化作し、手に拂扇を執り濡首の左面に侍立し扇を以て之れを扇ぐ。諸の梵天子は各拂扇を執りて諸の菩薩に侍立て扇げり。無夢龍王は其の身を現ぜずして虚空に在て、貫眞珠を垂れ、其の貫珠より、八味の水を出す。清凉にして且つ美しく所當に供給す。其の諸の菩薩、一切の聲聞は其の前に各各貫珠の垂るる有りて美水を出し亦所用に給す。王阿闍世、心に自ら念じて曰く、是の諸の菩薩は鉢を齎らさずして當に何をか食すべき、と。濡首、王の心念を知つて之れに告て曰く、斯の諸の正士は遊至する所有らば鉢を齎らさずして行くなり。遊行す可き所の佛國土は這れ坐して食せんと欲せば鉢自然に至るなり。

【一八】 箜篌は胴曲りて長く二十三絃あり抱へて兩手にてかき鳴らす樂器なり。

【一九】 斯須は、しばらくなり。

【二〇】 貫眞珠は、ひもで眞珠を連ねたるものか。  
 【二一】 八味とは甘、辛、鹹、苦、酸、淡、澁、不了の八種なり。

子の吼ゆる其の音聲を聞くも恐れず、怖れず亦懷を懷かず、畏難する所無し。益、以て踊躍し衣毛悅澤し、其の力勢に乗じて亦當に鳴吼すべし。是の如く濡首大士は佛の師子吼を聞くの時恐れず怖れず、亦懷を懷かず畏難する所無く、歡喜踊躍して安心生ずるなり。吾も亦當に猶今の佛の如く師子吼を習ふべし。假使平等正眞の聲聞緣覺を説く有らば如來は尊と爲し發意の菩薩は則ち是れ本と爲す。斯の言は至誠平等にして邪無し。所以者何。是れに由て一切諸法を出生して普ねく顯現すればなり。故を以て明かに知りぬ、濡首を尊と爲すを。其の年幼少年れども則ち是れ聖長なり。宜しく當に前に在るべし、吾當に後に從ふべし。濡首童眞、尋いで前に在て行き、菩薩之れに次ぎ、諸の聲聞衆は乃ち其の蹤を繼げり。濡首這に、莊嚴せる寶路に向むれば則ち天花を雨らし、無數の伎樂は鼓せずして自ら鳴り、時に應じて其の地六反に震動し、其の大光明は灼徹せざるなし。時に於て濡首所現の變化に威神感動し、大光明を放ちて華を雨し香薫じ、諸の音樂の聲は相和して鳴れり。王舍城に入るに王阿闍世、濡首二萬三千の衆の菩薩と俱にして及び諸の聲聞の眷屬圍繞して來つて路を進むを籌慮し即ち恐懼を懷く。今吾五百人の供を整設せるのみ。來る者猥りに多し、安んぞ能く周遍して焉に所座を當て何を以てか之れを飼はん。又念じて曰く、濡首童眞、果して疑誤を相し此心を發せりと。時に應じて濡首は威神聖徳の建立する所の息意天王即ち自らの化身なる金毘鬼神微妙の體と變じ則ち王阿闍世に謂て曰く、大王且らく止めよ、以て慮と爲す勿れ、勞悒は無用なり。濡首童眞は善權方便あつて智慧無極なり、大功徳を現じて威靈赫奕たり、神力を恢闡して光祚堂堂たり、路に昇て來臻するも一人の食にして能く三千大千世界に周遍し衆生の囑類悉く充滿せしむ。何に況んや斯の二萬三千の眷屬の來る者をや。是の故を以て勞慮するには足らざるなり。大王且らく安ぜよ。復供を加ふること勿れ。一切の來る者は悉く當に豐足すべし。所以者何。濡首大に齋すを求めば無盡の衆祐量り難きを得ればなり。王阿闍世、時に應じて踊躍し自ら勝ふ能はず。

【二〇】 懷とは、おそるゝこと。

【二一】 大正藏經は嚴莊とせるも三本及び宮本に依り莊嚴と改む。

【二二】 籌慮とは、數へおもんばかるなり。

【二三】 威神とは、威勢勇猛にして測度すべからざるを云ふ。

【二四】 勞悒は心配しうれふること。

【二五】 善巧の方便のこと。

【二六】 恢闡は大いにひろめ明らかにすること。

【二七】 光祚は德譽具はれる貌。



華を生ず。諸の寶樹の下は寶を以て地と爲し、一切の寶地は寶香瓶を列ねて名香を燒く。一一の寶樹には五百の玉女儼然として羅佳し、各各布施の徳を建立す。濡首這れ斯の定三昧の正受を以て時に應じて即ち彼の異學の外道の師の爲に變化を示現する有り。巍巍無量にして亘然ならざるなし。

濡首童真則ち坐より起て衣を著し鉢を持して行を發さむと欲し迦葉に謂て曰く、唯大迦葉、便ち前に在るべし、吾今後に尋かむ。所以者何。大迦葉は年即ち五耆宿なり。素より梵行を修して久しく沙門と爲るを尊べばなり。未だ如來を見ざるに出家して學び世間を計り、所有羅漢は皆仁の後に從て啓受する所有り。是の故を以て宜しく當に前に在るべし、吾今後に在らむ。迦葉答へて曰く、法律を計るに年歳を以て尊長と爲さず。法律の載する所は智慧を以て尊と爲す。神智聖達乃ち尊と爲すべし。博聞才辯乃ち曰て尊と爲し、諸根明徹乃ち曰て尊と爲すなり。法律の記する所斯れを以て尊と爲す。是れに由て之れを計るに、濡首童真は智慧總巍として、博聞普ねく達し、辯才無礙にして一切衆生の根本を曉了せり、是の故を以て、最長弘遠の仁を大尊と爲す。宜しく當に前に在るべし、餘應に後に在るべし、と。今喩を假りて此の誼を分別せんと欲して迦葉又曰く、譬へば師子の子は這れ生れて未だ久しからず、幻少の爲に氣力未だ成ぜずと雖も、其の師子の子、遊歩する所有らば其の氣の流ぶ所、野鹿諸獸は其の猛氣を聞きて皆悉く奔走す。若しくは大象の六牙を有し其の歳六十にして又身高大なる有り、若し革繩を以て之れを繋ぐこと三重なるも、師子の子の威猛の氣を聞かば恐怖し畏慄し跳騰し、力を盡して三重の繋を斷ちて馳走奔突し、山谷谿澗林藪巖樹の間に入り、若しは大水に入りて自ら沈没す。樹禽は樛に翳れ、走獸は一六藏窟す。水に居る一七魚鼈は淵に潛逃し、又諸の飛鳥は虚空を一八翔翺す。發意の菩薩も亦復是の如し。假使發意して智慧道力未だ成就せず心猶懦するも仰て師子歩を習ひ、諸の聲聞緣覺の路を過ぎれば一切の衆魔は自在宮殿にあつて一九悉く恐懼を懷き、自ら安んずる能はず。設師子の子、餘の師子の威力猛勢なるを見、若しは師

【一五】耆宿は、老年にして學徳あるを云ふ。

【一六】藏窟は、かくれのがれること。

【一七】鼈は、すつぽんのこと。翔翺は、とびかけること。

【一八】三本宮本聖本に依りて志を悉と改む。



すを得ず、斯の如きの法門は仁者の所説の正誼に従ふに如るなり。又問ふ。今者、濡首及び諸の菩薩は何でか食すると爲すや。濡首報へて曰く、吾等の所食及び施與は亦長益せず亦耗減せず、生死を動ぜず泥洹に近づかず、亦凡夫の地を超度せず亦賢聖の法を證明せず、聲聞を越へず緣覺を捨てざるなり。吾等當に彼の所請を説くべし。其れ布施も亦慧と所識とを淨除せず、損せずして益するも解脱に至らず、諸の經法に於て亦興す所無く、亦法を得ず亦釋する所無し。迦葉答へて曰く、是れを大施、無極の廣施と爲す。已に無本の所致に入る也。爾の時に濡首、心に自ら念じて言く、今日城に入ては寧ろ佛の如く感動變化すべし。時に應じて衆の神足變動三昧を以て正受と爲さんと。這是の定を以て正受と爲すの時、尋いで即ち一切は是の三千大千世界に於て普ねく悉く等住し、平なること手掌の若く普ねく此れ佛國となる。其の大光明は周遍せざるなく、其の地獄に在て苦患に遭ふ者は即ち時に休息し、畜生餓鬼諸の不安の者は尋いで安隱を獲、衆生の類は心悉く開解し、姪怒癡無く慳嫉無き者は亦詔詔無く願悲憫慢の結有ること無し。興起する所無く亦熱惱無し。爾の時に衆生展轉相瞻ること父の如く母の如し。此の三千大千世界を觀るに六反に震動し、欲行天子、色行天子、悉く會に來集し、濡首に供奉し、鼓樂樂歌の倡仗百千なり。天、花を雨し途路を嚴治す。濡首眞這れ斯の定を興して其の室宇より城門に至る。自然に莊嚴せる途路平整して既に廣く且長く、皆七寶の無央數の珍を以て若干校飾し、自然に出現せる不可計の寶は化して寶塹と爲り、中に蓮華、芙蓉、薔花、充滿して、輝暉なり。塹上には珠交露帳を化造し、而して幢幡、繒綵、花蓋を起て、其の塹の周匝には遍ねく欄楯有り、欄楯の左右には皆寶樹有て甚だ高大に、諸の寶繩を以て展轉連綿して諸の寶樹を繋ぎ、一一の寶樹の邊には寶架ありて皆香爐を置き諸の名香を燒く。一一の香爐に燒ける諸香は四十里に聞ゆ。諸樹の間には寶浴池を化し、八味の水有て池中に盈滿し底は悉く金沙なり。寶欄楯を以て周ねく池を圍繞し琉璃を崖と爲し、悉く青蓮、芙蓉、薔

- 【六】大正大藏經は溥首とすも前後總て濡首とし元本も濡首とせば濡に改む。
- 【七】無央數は、數ふべからざること。
- 【八】寶塹は、寶で造つた溝のこと。
- 【九】薔花は、葵に似て香ある花なり。
- 【一〇】煇暉は、かやきさかんなる貌なり。
- 【一一】幢幡は竿柱高く秀でて頭に寶珠を安んじ種々の綵帛を以て莊嚴するを幢と云ひ長帛の下に垂るゝを幡と云ふ。
- 【一二】繒綵はいろどれるきぬのこと。
- 【一三】欄楯は、てすりのこと。
- 【一四】架は、棚のこと。

故なり。其れ願無きは金剛句跡なり。皆一切五趣を度りて有爲を滅寂せしむるが故なり。其れ法界は金剛句跡なり。若干の諸疆界を超越するが故なり。其れ無本なるは金剛句跡なり。無我滅寂を致すが故なり。色欲を離れたるは金剛句跡なり。貪欲の諸の所有を蠲除するが故なり。緣起の行は金剛句跡なり。本性を壊せざるが故なり。無爲を察するは金剛句跡なり。諸法の自然を見るが故なり。濡首童眞、諸の菩薩の爲に三夜に於て普ねく法を分別し竟れり。彼の諸の菩薩は皆、光明華三昧に親近するを得、菩薩の設、此の空を逮たる者は一一の毛孔より百千の光を放ち、一一の光明に百千の諸佛の儀容を化現す。又斯の諸佛、天中之天、所在の佛土にて現り佛事を作して衆生を開導し、群萌の嚆類は迎逆接納し法教を聽受せり。

變動品第九

爾の時に王阿闍世、明旦早く起き、濡首の所に詣で稽首して曰く、供具已に辨ぜり、時に至て行くべし、と。賢者大迦葉も晨朝夙興し、衣を著し鉢を持して諸の比丘五百人と俱に舍衛大城に入り分衛せんと欲す。中路に於て念すらく、吾、分衛を行ぜんには時太早きが如し、寧、造いて濡首童眞に見え、這斯の念を設ぶべし、と。尋いで便ち往いて至る。則ち濡首と言談し關を叙べ堅要を演説す。濡首之れに謂て曰く、唯大迦葉、晨に何ぞ湊せらるるや。答へて曰く分衛を行ぜんと欲するが故に來り諮受するなり。濡首曰く、今當に吾に就いて設くる所の饌を食すべし。眷屬と俱に吾當に仁に分衛の具を與ふべし。迦葉答へて曰く、供具已に達せり。吾法を以ての故に來りて斯れに至るなり。饌を食するを以てせざるなり。又曰く、迦葉、惟當に請ふて供を受け二事たる大法供養と飲食の饌を受くべし。亦法を釋せず亦食を失せざらむ。鄙等の擧は法を用うるを以ての故に饌を絶つて食せず、其の形壽を盡すは志、法に在ればなり。所以者何。他人に從ては乃ち能く致

【六】五趣とは、地獄、餓鬼、畜生、人間、天上なり。

【七】境界に同じ。

【八】嚆類とは、ともがらの意。

【一】晨朝夙興とは、朝まだきに早く起きること。

【二】三本宮本に依り大を太に改む。

【三】關を叙ぶとは、久方振りの挨拶をすること。

【四】朝早く何用あつて集まつて來たのか。

【五】三本宮本に依りて俱を供と改む。

ること無し。其の輪は是の如くにして悲哀輪の如し。其の輪の所趣には自然の誼、己の所至に在り。其の輪は法界場に趣く所の輪なり。又族姓子よ、假使、菩薩斯の不退轉輪を信樂せば則ち己身の患を解脱するを得、則ち一切の所信を信樂すと爲し、一切の所想、如來の所興なるを悉く亦之れを信じ、信を以て脱を得るなり。如來に於ては二脱有ること無く、亦二を説かざるなり。其の如來の相好は諸法の相を解脱する如く、一切の法の想は如來の脱を信すれば則ち想有ること無く、己に相を離脱すれば則ち自然に己身を濟ふに至るなり。是の如きの行は能く勝るもの無く、亦能く斯の慧に踰ゆるもの莫し。是の故に名づけて不退轉輪と曰ふなり。又族姓子よ、不退轉輪は色においても不退なり。色は自然の故なり。痛、想、行、識も亦復是の如し。識の退轉せざるは識は自然の故なり。所以者何。一切の諸法に退轉せざること猶無本の如くなるを則ち法輪と爲せばなり。是の故に名づけて不退轉輪と謂ふなり。其の法輪は邊限有ること無く、維無く、隅無く、斷絶有ること無し。無常輪の故なり。其の法輪は亦門有ること無く二有ること無きが故に則ち法輪門とす。其の法輪には能轉も無く所轉も無き故に其の法輪も亦所説無し。法輪は無言の故に其の法輪は亦名稱無く顯曜する所無し。輪は獲る無きが故に又復此の不退轉輪を計して空に入るなり。所遊の相無きが故に澹泊なり。門は來相無きが故に善ねく所至有り。空相の爲の故に一切等御は本淨にして無相なり。是の故に名づけて不退轉輪と曰ふなり。又族姓子よ、不退轉輪には所遊の行有て而して所至有るなり。是の故に名づけて不退轉輪と曰ふなり。故捨する所有て徑に所至有り。是の故に名づけて不退轉輪と曰ふなり。

是の如く濡首、諸の菩薩に謂へり。又族姓子よ。名づけて金剛句跡と曰ふ所以は一切諸法は皆悉く滅寂すればなり。何をか一切諸法を滅寂すると謂ふや。又族姓子よ、己に空を了するは金剛句跡なり。諸の邪疑、六十二を消すが故なり。其れ想無きは金剛句跡なり。一切の諸想念を斷絶するが

【三】色、痛、受、想、行、識は五蘊と云ひ色は物質にして他の四は精神作用なり。略解せんに色は五根、五境等の有形の物質なり。痛(或は受)は認識の對象を想像することなり。行は認識作用に附隨して起る瞋貪好惡等の感情なり。識は認識を綜合統し對象を了別識知する作用なり。

【四】維無く隅無しとは窮する所無きこと。

【五】六十二見にして諸法に執して、或は生滅と云ひ、或ひは常住と云ひ、或ひは有爲と云ひ、或ひは無爲とする邊見を指すなり。



菩薩藏に入らば諸法に像類する所有るを見ざるなり。設使、諸佛の法を曉了せば則ち亦諸法の處を親アす。菩薩の學を學んで諸法の歸趣する所を見ず、其れ觀を修せざれば彼則ち一切諸法を親見す。而も逆順有るなり。一切衆生は不順を親、菩薩は皆諸法の順正を見て諸法には一法として佛法に非ざるもの有ること無きを親るなり。是の故に名すけて菩薩篋藏と曰ふなり。又族姓子よ、菩薩藏は説いて無崖底とす。文字の演ぶる所、順にして時に應じて計量すべからず、所立の處は思議すべからず、光明を垂顯して通達せざるなく、邊際有ること無くして炤曜せうやうせざる莫く、利益する所多くして悉く諸五通慧に歸趣せしめ、群萌ぐんもうをして悉く無本を樂しましむればなり。假使、彼の學を學する者有つて、甫て學に當るも一切悉く此の菩薩篋藏に入るべし。則ち大乘に至り已て學ばんことを欲する者は當に獲べく、其の至らざるものも悉く至るを得しめ普あまねく入れ令しむればなり。是の如く濡首、諸の菩薩衆の會者の爲に中夜に在て菩薩藏經典の秘要を説き廣く分別して誼を演べ所趣に歸せしめたり。

不退轉輪品第八

濡首童眞、復後夜に於て諸の菩薩大士の爲に廣く宣べて不退轉輪金剛句跡を講説す。何をか不退轉輪と謂ふや。又族姓子よ、名づけて不退轉輪と曰ふ所以は今の如く菩薩、經法を説く時若し來聽する者は悉く誼歸二を獲て復迴還せざればなり。便ち不退轉輪を講説するは其れをして信樂せしむるなり。不退轉輪菩薩行とは衆生の爲に若干の行を造らず、諸法の爲に若干の行を修せず、諸國土に於て若干の行を興さず、諸佛に於て若干の行を尊ばず、諸乘に於て若干の行を行ぜず、一切の所至にて悉く普あまねく見、法輪を轉じて法界を壞せざるなり。是れを謂て乃ち法輪を轉ずると爲すなり。是の故に名づけて不退轉輪と曰ふ。彼の所轉の輪は絶斷すること無く、其の輪は理を修めて二輪有

【五】 通慧とは神通と智慧なり。

【六】 群萌とは衆生なり。

【一】 大正大藏經は不退輪とするも三本及び宮本に依りて轉の字を加ふ。

【二】 誼歸とは義趣の意なり。

の十二因を曉了して報應の因起所盡を分別するなり。菩薩藏は無量の諸法の正誼を綜理し自ら分別して覺するなり。又族姓子よ、其れ聲聞乘には三藏有ること無く、其れ緣覺にも亦斯の藏無し。諸の所説の法は菩薩のみ三藏の秘要を究練し菩薩法に因て三たる聲聞、緣覺、無上正眞道を生ず。故に三藏と曰ふなり。菩薩は説法して衆生を勸化し、三乘たる聲聞、緣覺、無上正覺に處せしむるなり。是の故に菩薩を名づけて三藏と曰ふなり。斯の三藏有れば餘藏の學無し。何をか三と謂ふや。聲聞學。緣覺學。菩薩學なり。何をか聲聞學と謂ふや。但能く己身の行の相を炤すなり。緣覺學とは是れを中學と謂ふなり。大悲る行するは菩薩學と謂ふなり。無量慧に至て大哀を攝取すればなり。其れ聲聞は緣覺の所學を學ばず亦曉了せざるなり。其れ緣覺は菩薩の所學を學ばず亦曉了せざるなり。又菩薩は悉く聲聞の所遊の學を學びて皆之れを曉了するも彼を願樂せず、亦其の所行を修するを勸助せざるなり。緣覺の所遊の學を學びて悉く之れを曉了するも彼れを願樂せず、亦其の乘を修せしむるを勸化せざるなり。又菩薩は菩薩の當所の學を學びて之れを曉了し、願樂して其の乘の所行を勸修し、所行を勸め已れば則ち聲聞所行の解脫を説き、亦緣覺所行の解脫を講じ、菩薩所遊の解脫を分別するなり。是の如く族姓子よ、其れ此の所學を曉了する者有らば是れ則ち名すけて菩薩薩藏と曰ふなり。琉璃器の如く盛らるる者有らば時に應じて一切自然の性を示すこと琉璃色の如し。是の如く族姓子よ、菩薩、假使菩薩藏の遊居すべき所に入らば諸法に於て一切の法を見て悉く佛法と爲すなり。菩薩、假使菩薩藏に入らば諸法に處所有るを親ざるなり。諸佛乘を覺了する有らむ者は諸法の像類する所を見ざればなり。其れ菩薩の學を學ばざる者は則ち諸法に處所有るを見るなり。設、菩薩の所學を學ぶ者は諸法に處所有るを見ず、設、菩薩の所學を學ぶ者は諸法に所住の處有るを見ず、其れ修行せず、斯の一切を計して皆自然と爲すなり。是の如く族姓子よ、假使菩薩、菩薩藏に入らば在在の所行、所遊の諸法、一切悉く諸佛の法なるを見るなり。假使、菩薩、

【四】十二因縁のこと。即ち、無明、行、識、名色、六入、觸、受、愛、取、有、生、老死にして衆生が三世に涉りて六道に輪廻する次第縁起を説けるものなり。

三藏品第七

時に濡首童眞、中夜に於て菩薩大士の爲に三篋藏たる菩薩の秘典を講ず。何をか菩薩の篋藏の秘要と謂ふや。都て諸法は此の篋藏に歸入せざるもの無し。若しは世俗の法、度世の法、有爲の法、無爲の法、若しは善法、不善法、有罪無罪の法、有漏無漏の法、悉く來歸して菩薩藏に趣入す。

所以者何。菩薩藏の經典の要は一切諸法の誼を曉了すればなり。譬へば族姓子よ、此の三千大千世界、百億四天下の大地、百億の日月、百億の須彌山王、百億の大海、悉く苞合して三千大千世界に入り一佛土よ爲るが如し。是の如く族姓子よ、若しは凡夫の法及び餘學の法、若しは聲聞の法緣覺の法、若しは菩薩の法及與佛法は悉く來入して菩薩の篋藏に歸するなり。所以者何。菩薩の篋藏は一切の聲聞、緣覺を攝護し、大乘を將養すればなり。譬へば族姓子よ、其れ樹の根株堅固にして盛なれば枝葉果實は則ち爲れ滋茂するが如し。設へば菩薩の篋藏を攝取する有れば菩薩大士則ち一切諸乘を攝取し一切衆徳の法を將養すと爲すなり。菩薩藏は無量器とも名すく。名すけて無量器と曰ふ所以は譬へば大海の無量の水を受くるを包含の器と爲し、實を計るべからざるが如ければなり。諸龍、鬼神、健香想、阿須倫、迦留羅、眞陀羅、摩羅勒、及び衆生類、禽獸に在る者、此れ等を含受するを無限の器と爲す。菩薩藏の經典の秘要なる、亦復是の如し。無限の施聞戒定慧度知見の器と爲すなり。故を以て名すけて菩薩の篋藏と曰ふなり。譬へば含血の類、大海に生せば彼に於て生ずるを以て餘水を飲まず惟だ海水を服するが如く、菩薩も是の如く菩薩藏を行じ餘法に於て進行する所有らず、惟常に諸の通慧の誼を修行するなり。故を以て名すけて菩薩篋藏と曰ふなり。又族姓子よ、菩薩には斯れ三篋の要藏有り。何るか三と謂ふや。一には聲聞と曰ひ、二には緣覺と曰ひ、三には菩薩藏と曰ふなり。聲聞藏は他の音響を承けて而して解脫を得るなり。緣覺藏は緣起

【一】 大正大藏經は卷合とするも宋本に依りて苞合とす。  
【二】 三本宮本に依り如しの字を加ふ。

【三】 將養はやしなふなり。



如く亦所置無く以て憂感せず不増不減亦動搖せざるなり。

譬へば族姓子よ、斯の地上に於ては悉く天雨を受け以て厭と爲さざるが如く、菩薩も是の如く總持に違ばば悉く一切諸佛典の（一三）語及び諸の菩薩、一切の緣覺聲聞の法を受け、餘の正見の士、平等行者、沙門、梵志、一切衆生、天上、世間は其の說法を聞きて以て厭と爲さず、所説の經を聽きて以て憊と爲さざるなり。

譬へば族姓子よ、地の種ゆる所は皆、時を以て生じ、其の節を失はず、亦違錯せずして時に應じて滋長するが如く、菩薩も是の如く、總持を違得せば一切の諸の功德の法を統攝して欺人にも侵されず、亦時を失はず、佛樹に座して道場に所在し諸の通慧に至るなり。

譬へば族姓子よ、勇猛高士は邦域に在て戰鬪に入らば怨敵を降伏して歸依せざるもの無きが如く、菩薩も是の如く、總持を得ば道場に處して佛樹に坐し衆魔を降伏するなり。

譬へば族姓子よ、一切の法の常無常有るを檢するが如し。若し微妙のごとくんば安んぞ非我を隱はんや、及び、無常及び諸の瑕穢及苦、非我を計せんや。所以者何。惟族姓子よ、已に二を離るるが故なり。（これを）則ち總持と謂ふなり。譬へば族姓子よ、虚空は受持せざる無く、亦總持するに非ざるも亦持せざる無きが如く、菩薩も是の如く總持を得ば一切諸法の要を攬攝するなり。

譬へば族姓子よ、一切諸法及び諸の邪見は皆悉く空爲れば之れを悉く總持するが如く、菩薩も是の如く總持を得ば攬せざる所無く總持し、是の如く一切諸法の誼を救攝するなり。是れを族姓子よ、總持を計れば盡時有ること無しと爲すなり。已に盡有ること無ければ則ち放逸無し。已に放逸無ければ則ち中間に處す。已に等處せば即ち身有ること無く則ち虚空界なり。已に虚空の如くは虚空及び地は則ち二有ること無きなり。濡首童眞此の言を説くの時五百の菩薩は斯の總持を得たり。

【三】 語とはをしへいましめのこと。

【四】 梵志とは梵天の法を志求する者なり。

【五】 節は季節なり。

【六】 誼は義に通ずみちなり。

【七】 等處とは前句の中間に處すと同義にして、何れもの執着を離れたる中道にして平等觀のことなり。

皆空を攬執し、諸法の一切無想を攬執し、諸法は一切無願を攬執し、諸の所行を離れて寂莫無形なり。悉く所有無く、亦所覺無く、亦所行無く、處所有ること無く、亦所生無く、亦所起無く、亦所趣無く、亦滅盡せず、來無く往無く亦所壞無く、亦所度無く、亦所敗無く、亦所淨無く、亦不淨無く、亦所嚴無く、亦不嚴無く、亦所著無く、亦所有無く、亦所見無く、亦所聞無く、亦所忘無く、亦所教無く、亦有漏無く、亦想念無く、亦想を離れず、應不應無く、亦顛倒無く、亦満足無く、我無人無く、壽無く命無く、亦放逸無く、亦所受無く、亦所取無く、亦殊得無く、猶虚空の如し。名聞有ること無く、亦所獲無し。破壊する所無く、亦二有ること無く、審に本際に住し、一切法界、一切諸法は無本に住す、是れを總持と謂ふなり。又族姓子よ。一切諸法は譬は幻の如くにして而も悉く自然は諸法を總持す。自然は夢の如く、自然は野馬の如く、自然は影の如く、自然は響の如く、自然は化の如く、自然は沫の如く、自然は泡の如く、自然は空の如し。諸法を分別して此の如くんば是れを總持と謂ふなり。

濡首曰く譬へば族姓子よ、地の所載の如く統せざる所無く不増不減なり。亦所置無く以て厭と爲さざればなり。假使、菩薩、總持を得ば則ち能く一切衆生を利益し、恩施救済すること無失數劫に、衆徳の本、諸の通慧心に至り總て統持するなり。(これも)亦所置無くして以て厭と爲さざればなり。

譬へば族姓子よ、斯の地上に於て一切衆生仰てたのみ 活を得兩足四足之れに應ぜざるな 摩きが如く、菩薩大士總持を得るも亦復是の如く群生類に於て饒益する所多し。

譬へば族姓子よ、藥草、樹木、百穀、衆果、皆地に因て生ずるが如く、假令、菩薩總持を速得するも亦復是の如く便ち能く一切徳本、諸佛の法を興闡するなり。

譬へば族姓子よ、地の所載亦所置無く、亦憂感せず不動不搖以て増減せざるが如く、菩薩も是の

【三】 活は生活のこと。

御するが所以に(一)、心未だ嘗て忘せず(二)、所至に亂れ無く(三)、其の心未だ嘗て捨廢の時有らず(四)、智慧の業を學び(五)、諸法の審諦の義を精覈し(六)、正慧を分別し(七)、果證を得とは但文字のみ(八)、度至寂然とし(九)、一切諸法の章句を條列し(十)、賢聖の要を攪り(一)、佛の教を斷ぜず(二)、法令に違はず(三)、一切賢聖の衆を攝取し(四)、諸の經法に於て典籍を部分し(五)一切殊絶の智慧に入り、(六)、衆會に著せず亦怯弱ならず(七)、衆會に遊歩して經典を宣揚し畏憚する所無し(八)、諸の天音を出して明智を料簡し(九)、天、龍、神、阿須倫、迦留羅、眞陀羅、摩休勒に於て其の音を採揚して說法を爲し、(二十)、釋梵の音を出し(一)、平正を覺了して諸の根原を知り(二)、邪見の諸の所立の處を識練し(三)、一切衆生の根原所趣を總持觀察し(四)、住等の心に所し(五)、世の八法に於て動轉せず(六)、一切眞正の法を具足し(七)、其の罪福の報應の果證に隨て說法を爲し(八)、衆生所造の志業を興發し、(九)、諸の群黎の處に禁戒を立て(三十)、其の慧普ねく入り(一)、諸の衆庶の爲に代りて重擔を負ひ(二)、勸勞を以て患厭有らず(三)、諸法を解説して本性清淨なり(四)、斯の本淨を以て人の爲に演じ(五)、本淨の慧を以て道誼を解説し(六)、慧に聖礙無く(七)、法施を習設し(八)、其の心堅固にして未だ嘗て懈倦あらず(九)、説く所有らば疑結有ること無く(四十)、一切の供養利入を貪らず(一)、而して諸の通慧の心を忘捨せず(二)、力勵して衆行の基塲を集累し(三)、布施において厭無く毎に諸の通慧を勸助し(四)、禁戒において厭無く斯れを以て一切衆生を勸化し(五)、忍辱において厭無く佛の色像を求め(六)、精進において厭無く衆の徳本を積み(七)、一心において厭無く修行專精に衆冥無からしめ(八)、智慧において厭無く一切の行に入り(九)、道法の業を以て此の一切に於て所生無し、(五十)、諸の族姓子よ、所謂總持とは一切不可思議の諸法の要誼を攝取し諸法を持して所行無く行無し、故に總持と曰ふなり。又族姓子よ、其の總持は諸法を攝持するなり。何をか諸法を總持すと謂ふや。諸法の一

【四】攪とはすべくくすること。

【五】釋梵は帝釋、梵天。

【六】八法とは一に利、二に衰、三に毀、四に譽、五に稱、六に譏、七に苦、八に樂なり。

【七】衆庶は多勢の人。

【八】重擔は重荷のこと。

【九】聖礙はさきはること。懈倦とはものうき貌。

【二】一心とは禪定なり。



べし、と。王、城に入り宮中に還り、即ち夜に若干の食膳、百種の味を興設し、五百の榻（三二二）を施け、無量の座をもつて其の上に敷き、宮殿を莊嚴して、繡帷蓋（三二二）を懸け、名ある雜香を燒きて衆花を散じ、及び四衢路（三二二）と平ねく城の内外を皆悉く掃除し香汗を以て濡ぎ、國の人民男女大小をして莊校嚴飾して香花を齎持し、威俱（三二二）に濡首童眞を奉迎せしめたり。

總持品第六

是に於て濡首、初夜中に於て其の室より出でて自ら思念すらく、吾身、少少の人眷屬と俱に王の請に就くは宜しからず、今吾且らく當に異佛土に詣でて諸の菩薩を請ふべし。皆普ねく經法を講説し諸の狐疑を斷ずるを聞き阿闍世王の宮に就て食せしめむ、と。濡首童眞、勇猛の士の臂を屈伸する頃（三二二）の如くにて忽然として現さず、斯須して八萬の佛國を超越して東方常名聞界に至れり。其の佛を離聞首如來至眞等正覺と號す。今現在說法して諸の菩薩の爲に清淨の典を説けり。其の佛世界にて如來一時等しく、六度無極を轉じ、自然に通達し具足して廣く不退轉の法を宣べたれば其の佛國土の一切諸樹の若干種の花、果實は茂盛する毎に、其の樹より常に自然に佛聲、法聲、不退轉輪菩薩衆聲を出せり。是の故に世界を常名聞と號し、斯の道寶の聲、常に斷絶せざるが故に常名聞と曰ふなり。濡首童眞、離聞首佛の所に詣で、足下に稽首し其の如來に白さく、唯然世尊、諸の菩薩を遣して余と俱に往いて、忍界（三二二）に至り、阿闍世の宮に詣でて其の請に就かしめよ、と。離聞首如來、諸の菩薩に告げて曰く、諸の族姓子よ、濡首と俱に忍世界に詣で意の所樂に従ふや、と。是に於て會中の二萬二千の菩薩大士同時に發聲し、應唯、世尊、我等願くは濡首と俱に忍界に詣らん、と。是に於て濡首二萬二千の菩薩と常名聞國より忽然として現さず、忍界に至りて自ら其の室（三二二）に處ぜり。濡首、諸の菩薩大士を會めて初夜に於て總持の法を説けり。何をか總持と謂ふや。諸法を總持し統

【五】榻とはこしかけのこと。

【七】絹布で作れる帷と蓋。

【八】四衢路とは四方に通ずる道のこと。

【九】迎は三本宮本要本に依りて迎の字を改めたり。

【一】六度無極とは布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六波羅蜜なり。

【二】忍界とは娑婆世界なり。

【三】應唯とはいと返事すること。

ところ無きを是れを道行と爲す。王又問ふて曰く、行と道とは斯の如くして何れに歸趣すると爲すや。濡首曰く、是の如きの行は趣むく所無しと爲す。王又問ふて曰く、道は豈泥洹三果泥洹に至らずや。濡首問ふて曰く、寧て諸法の滅度に至れる有りや。答へて曰く、あらざる也。濡首曰く、是の故に大王、至て至る所無きを賢聖の道と爲すなり。又問ふて曰く、其の賢聖は何所の處と爲すや。濡首曰く、其れ賢聖の道は所住無し。又問ふて曰く、其の聖賢の道は禁戒、博聞定慧に處せざる乎。濡首曰く、賢聖の戒は行相有ること無し、放逸の相無きは聖定意爲り。所著の相無きは聖定意爲り。所念の相無きを聖智慧と爲すなり。王の意云何。其れ所行無く、放逸有ること無く、處するの所有る乎。答へて曰く、あらざる也。濡首曰く、是れを以ての故に、王當に之れを知るべし。所住無きは則ち賢聖の道なり。王又問ふて曰く、族姓子族姓女は云何んが道に向ふべき。濡首曰く、假使、求めて諸法の有常無常を觀ず、亦所得無く、諸法の有淨無淨、有空無空、若しは我無我、若しは苦苦樂を計せず、諸法に於て亦所得無く、諸法の終始若しは滅度在る者を見ず、是の如く行ぜば道に向ふと爲すなり。王阿闍世、濡首に白して曰く、惟當に請を受くべし。斯れに因て余をして諸の顛倒を離れ使めよ。解脱を得て淨行を分別せしめよ。諸の眷屬と與に宮に就て食せられよ。濡首曰く、向に之れを説く。悉く所有無く生有ること無ければ善哉と不善哉と有ること無し。其れ所有無ければ解脱有ること無し。其れ解脱せば則ち所有無く、亦解脱無きなり。亦解脱無しとは所以者何、一切諸法は皆自然淨なればなり。爾の時に世尊濡首に告げて曰はく、阿闍世王の請を受け、此の縁を以て無數の人をして利誼を逮得し安隱度に至らしめよ、と。濡首童眞、世尊に勸め見れて則ち當に其の請を受くべきを諾すと言へり。敢て如來の教に違失せざるが故なり。阿闍世王歡喜踴躍し、已に請を受けるを見て善心生ず。佛足及び濡首童眞、一切聖衆に稽首し、便ち退いて還出せんとし、舍利弗に請ふ、濡首の眷屬は幾人有りと爲すや。舍利弗答へて曰く、五百人が俱に當に往いて就く

【三】 泥洹は涅槃のこと。

所作有らば則ち哀を荷にたはず安隱にも至らざるなり。王阿闍世、又濡首に問ふて曰く、何所の法を受くれば患有ることなく所有無きに至るや。濡首答へて曰く、若し空を了せば所作無く、亦所不作無く、想無く願無く亦作有ること無く、亦不作無し。若使大王、造立する所有て行を爲し、身口意に行ぜば則ち是れ所作なり。假使たとふ、所作有らず亦所行無く、身口意を以て所造無くば則ち所作無きなり。是の故に、大王、一切の諸法は悉く相有ること無し。其の所行無く所有無きが則ち是れ其の相なり。又濡首に問ふ、何をか所行にして所三三不行無く、所造有らずして不造無く、不増不減と謂ふや。濡首答へて曰く、假たとへば能く過去の已盡を念ぜず、當來の未至を念ぜず、現在して所起無きを念ぜず、有常無常を想はざれば是れを無行と爲し亦無行とす。其れ能等の色は諸因縁に於て衆縁と爲り不増不減なればなり。又濡首に問ふ、塵勞三四の欲は是れ道と爲すや、云何んが與ともに合するや。濡首答へて曰く、王の意云何。其れ明は冥と合すると曰ふなるや。答へて曰く、しからざる也。日明這出て冥滅す。王寧ろ別に冥の所去の處を知る乎、何方に在て何所に積聚するなる。答へて曰く及ばざるなり。濡首答へて曰く、是の如く、大王、道慧を興さば塵勞則ち消ゆるなり。塵勞之所湊の處を知らざるも亦處有ること無く方面有ること無し。是れを以ての故に當に之れを了知すべし。道は塵勞と俱に合はざるを。又塵勞に等くば則ち名すけて道と曰ふ。道に等しくば塵勞も亦等し。塵勞と道とは等しく差持無し。一切の諸法も亦復平等なり。假使、斯の如くに議を分別せば塵勞は則ち道なり。所四五以者何。塵勞を以ての故に道有るを現する耳。塵勞は形無く亦所有無し。其れ塵勞を求むれば則ち道と爲なり。王又問ふて曰く、云何んが塵勞を求むるを道と爲す乎。濡首曰く、設五六ば所求有て人心を越へず、亦是れは塵勞、是れは道と爲すと念言せず。是れを以ての故に塵勞を道と爲すなり。其の塵勞は亦道に入るなり。王又問ふて曰く、云何んが塵勞は道に入るや。云何んが行を爲すや。濡首曰く、一切法に於て行する所無きを乃ち道行と爲し、一切法に於て亦行ぜざる

【三三】 三本に依り、行不を行と改む。

【三四】 塵勞とは煩惱の異名なり、食眠等の煩惱は眞性を空穢し身心を勞亂すれば塵勞と云ふなり。



て曰く、大王且らく止めよ。已に供を具足せばなり。正法の律に於ては未だ是の記有らず、衣服を受け若しくは饍を食して具さに哀を加へんことを怖望するは。王則ち又曰く、當に何をか陳露して丹赤を呈現すべき。濡首答へて曰く、假使ば大王、深妙の業、殊特の眞議を聞きて恐れず怖れず、畏懼を以てせず。震愾を以てせず難へず懼れざれば乃ち哀を加ふと爲す。正使、大王、法を想念せざるも亦無想に非ず、想不想無し、是の如く行ぜば乃ち哀を加ふと爲す。縱使、大王、去心を想せずして亦想せざること無く、來心を念ぜずして亦想せざること無く、現在心に於ても亦所受無ければ乃ち哀を加ふと爲す。設使、大王、邪見に墮せず亦滅除せず、亦見る所無くして亦見ざるところ無くれば乃ち哀を加ふと爲すなり。王阿闍世、又濡首に白して曰く、今の所説は悉く法の載する所なり。惟れ懲傷を見て當に其の請を受くべし。濡首答へて曰く、王、當に之れを知るべし。法律の載する所は恩施供養分衛衣食の饍を以てせず。若使、大王、有我を計せず、有人を計せず、有壽を計せず、有命を計せざれば乃ち哀を加ふと爲し、供施を受くると爲す。設使、大王、自ら身を愛せず、他人をも愛せず、悉く所取無くれば乃ち哀を加ふと爲す。假使、大王、心を攝斂せず、因縁を計せず、陰種諸入之事に在らず、内法有ること無く、外法有ること無く、三界を受けず、三界を度せず、善不善無く、徳不徳無く、世に處せず、亦世を度せず、罪無く福無く、亦漏有ること無く、亦有爲ならず、亦無爲ならず、生死を捨てず、滅度を受けざれば、是れに哀を加ふと爲す。王答へて曰く、唯然濡首、吾當に斯の如きの法議を啓受すべし。是れを以ての故に當に余が請に就き哀を懲傷せる下劣の徒類に垂るべし。濡首答へて曰く、王當に之れを了すべし。設使、諸法に所倚有らば、所受有らば、所得有らば、救護せらるゝ有らば則ち哀を蒙らず、至安を得ざるなり。如使、法に於て所著有らば想念を爲す。所立の處有て放逸を爲すは皆依著の爲なり。想念の有る處放逸之れが護となるなり。設使、大王、究竟して畢極を望み永安に至らば乃ち患有ること無し。如、大王復、

【二六】 丹赤はまごころ。

【二九】 震愾はふるひおそれること。

【三〇】 去心とは過去の心なり。

【三一】 來心とは未來の心なり。

【三】 漏は煩惱の異名。漏泄と熟字し吾人の身口の提を破り善根の苗稼を損ずるが故に名付く。

を聽省して、群僚の上に處するも晝夜に憂悸して沈吟の結を捨却する能はず。飲食をも欲せず、美饌有りとも雖も以て甘しと爲さず、其の目は、昧昧として視る所、膏骨たり。顏貌憔悴し心恒に戰灼して處する所に安んぜず、壽終の後地獄に墜つるを畏れたり。仰惟、唯、來來は其の恐怖する者には懼無からしめ、其の盲冥の者には眼目を惠み授け、其の沈没の者は之れを拯拔し、苦惱に遭ふ者には大安を獲せしめ、歸する所無き者には其の歸を受けしめ、其の護無き者には救濟を爲し、其の貧窮の者には財業を給施し、其の病有らん者は消息療治せしめ、其の邪徑に墮せるには以て正路を示し、其れ正路に在れば爲に大哀を興す。其の心勞を忍んで以て患と爲さず。等しく、群衆を恤みて其の慈堅固なり。本末を究竟して苦樂を以て動轉すること有らず。如來の興す所は衆生を救度して遺漏する所無く一人をも捨てざるなり。私怙世尊。恩を垂れて安慰し其の惶慄を除き、孤にして救有ること無きは惟れが爲に救を作し、飢渴の者には飽滿を得しめよ。今已に、虚乏にして地を蹙らむと欲するものには惟に、扶接を蒙らしめよ。今歸する所無きものには願くは其の歸を受けしめよ。今已に沈没せんものには願くは拯拔を加へられよ。我身大地獄に墮して、無擇に至ること無きを得しめよ。唯然大聖、如應に説法し我が狐疑を決し、愁結を解散して猶豫無からしめ、其の重罪をして微輕なるを得しめたまへ。時に於て世尊、心に念じて曰く、王阿闍世の説く所、聰達にして甚だ微妙なり。所入の法甚だ優奥と爲す。其れ餘人にては能く堪任して爲に狐疑を決し餘結を無からしむるもの莫し。其れ唯、濡首のみ能く滯礙を雪がん、と。時に舍利弗、佛の聖旨を承けて王阿闍世に謂へり。疑惑を辨ぜむと欲せば當に餽饌を饒へ、濡首童眞に請ふべし。(しかれば)則ち王の虚偽塵勞狐疑の結を決し、國土及び中宮とを鎮安し、王の床榻、衆諸の供饌を受くべし。中宮の姪女及び諸の侍は從て無量の福を獲、羅闍祇城摩竭大國の無數の衆生は皆利議を享けん、と。阿闍世王即ち前みて濡首童眞に啓して白さく、唯愍哀を加へ與に其の營に從て小飧食を受けよ。濡首答へ

- 【二】 群僚とは多くの役人。
- 【三】 憂悸とはうれへおののみ貌。
- 【四】 結とは氣分がふさがるを云ふ。
- 【五】 昧味はくらき貌。
- 【六】 戰灼はおののきおどろく貌。
- 【七】 壽終とは死するなり。
- 【八】 群衆とは多くの人民なり。
- 【九】 怙とはたのむの義にして、私怙世尊とは「願くは世尊よ」の意なり。
- 【一〇】 惶慄はおそれなやむこと。
- 【一一】 虚乏はよわくまづしきこと。
- 【一二】 扶接とは近づき助けること。
- 【一三】 無擇とは無間地獄なり無間業を作るは人を選ばざればなり。
- 【一四】 愁結はうれひなやみて氣分くらぐふさがること。
- 【一五】 床榻はこしかけなり。
- 【一六】 羅闍祇城(Rajagṛha)。王舍城なり。
- 【一七】 三本宮本に依て惟を唯と改む。

象、車、步、騎を將<sup>つ</sup>ゐて佛所に往詣し、佛足に稽首<sup>けいしゆ</sup>し、右邊三匝<sup>さんさつ</sup>し、退いて一面に坐し、佛に白して曰く、唯天中天、衆生の所住は何所の因に依り、何の縁にて興るや。何に由て罪を得るなるや。佛、王に告げて曰く、已に吾我人壽命に住せば衆生此れに由て罪<sup>つみ</sup>を造り、食身に依<sup>よ</sup>りて縁を興して顛倒<sup>てんたう</sup>し、群萌<sup>ぐんもう</sup>は斯れに因て災患を起すなり。又問ふ、其の食身は根原の所在ありや。世尊答へて曰く、其の食身は無慧を本と爲すなり。又問ふ、其の無慧は何所を本と爲すや。答へて曰く、所念邪支は則ち是れ其の本たるなり。又問ふ、所念邪支は何所が是れ根なるや。答へて曰く虚偽が是れ根なり。又問ふ、虚偽は何所が是れ根なるや。答へて曰く、無實の諸想是れ則ち根と爲すなり。又問ふ、無實の諸想は何所が是れ根なるや。答へて曰く、謂ゆる無所有、無覺が是れ根なり。又問ふ、何をか無有、無覺と謂ふや。答へて曰く、謂ゆる無生、無有なる、是れを無覺と謂ふなり。又問ふ、不生、不有は當に何をもつてか之を計るべき。(また)數<sup>かず</sup>何所に在るや。答へて曰く、其れ不生、不有なれば彼計<sup>かれけい</sup>する有ること無きなり。又問ふ、狐疑之事は何の因縁にて起るや。答へて曰く、其れ狐疑は猶豫<sup>じゆい</sup>に從て起るなり。又問ふ、猶豫は何所を是と爲すや。答へて曰く、賢聖所説の誠諦之語を聞いて則ち懷疑する斯れを猶豫と謂ふなり。又問ふ、何所が賢聖なる。何をか審諦<sup>しんたひ</sup>と言ふ。世尊答へて曰く、其れ賢聖とは一切の愛欲諸見を除くを謂ひ、其れ審諦とは一切の法は悉く無所有なるを知るなり。王阿闍世、世尊に白して曰く、所謂賢聖無所有とは實には虚偽爲り。世尊。安住して己の塵勞に從て之れを造立し世間に矯著せる諸賢聖の講説せらるゝは心に猶豫あれば不可計<sup>せ</sup>の殃<sup>あふ</sup>之罪を獲ん。我父は、世尊。久しく 愆咎<sup>けんこ</sup>無く、翰<sup>き</sup>綴<sup>せ</sup>する所無くして而もその命を危くせり。國土を食るが故なり。財寶に 惑<sup>まど</sup>ひ、榮貴に迷ひて産業を荒<sup>あ</sup>し、利に耽<sup>た</sup>りて民を宰<sup>さ</sup>め逆害を圖<sup>はか</sup>りしなり。疑<sup>ぎ</sup>を持って、怵<sup>おそ</sup>惕<sup>てき</sup>し自ら寧<sup>やす</sup>んずる能はず。若しは歡會に在て戲樂するも娛<sup>たの</sup>しみ無く、若しは中宮に在て姪女と嬉遊し、若しは座し若しは臥して決正する所有り、若しは獨處に在て國事

【三】 罪、覺、共につみなり。

【四】 群萌は群生と云ふが如し。萌とは草木の芽を生じて未だ冥味なる貌にして衆生の盲昧に譬ふ。

【五】 猶豫はうたひが深くして決せざるを云ふ。

【六】 無所有とは空なり。

【七】 不可計とは、はかり知れざるの意。

【八】 愆咎はあやまちとがなり。

【九】 宋元明三本及宮本に依り惑に改めたり。

【一〇】 怵惕とはおそれて心安からざるを云ふ。



當に無上正眞道の意を發すべし。所以は何ん。言ふ所の超速とは諸の通慧の能く過ぐる者なきを謂ふ、諳かにして欺くこと無し、其の乘第一なり。普く一切群生の類を安んぜしむるは則ち諸の通慧なり。最も微妙特尊にして無上なりと爲す、等倫無く、儔匹無しとなす。雙比無く能く出過するもの無しとなす。無罣礙の乘なり、一切聲聞緣覺の乘の及ぶ能はざる所なり。是れ則ち名けて諸の通慧の乗と曰ふなりと。佛時に斯の大乘法典を説けば一萬の衆人、無上正眞道の意を發せり。時に彼の諸の大聲聞、賢者舍利佛、大目犍連、大迦葉、離越、阿難律恕、利分釋文陀尼子、尊者須菩提等自ら地に投じ、佛足を稽首し、俱に世尊に曰く、唯然大聖、若し族姓子族姓女の大意を發する者は當に之を供養すべし。微妙解脱の處、至眞の行なり。所以は何ん。正さに百千の諸佛世尊をして吾等が爲に諸の通慧の行を説かしむるも、堪任する能はず、勢力有ること無し。通慧心を發す一切の慧者は罣礙する所無く、殊勝にして及び難し。寧ろ、吾等をして五逆罪を犯して、無間に在るとも、無上正眞道の意を中止せず捨てずして聲聞たらしめよ。所以は何かん。設へ逆罪を犯して地獄に墜ち、諸の苦毒を受くるとも、其の痛み會し畢りて地獄より出づるに、無所罣礙の諸の通慧心に違ふること遠からざればなり。計すること今の如くんば當さに何づれの施か。堪諾する所無かるべき。正眞を焚燒し根原を敗壞すれば、茲に於て佛慧、無罣礙の智も是れ佛器に非ず。譬へば終没の士の親屬を益する無きが如し。吾等是くの如く聲聞乘を以て解脱を志し、一切無益の衆生を捨てん。譬へば此地多く、一切の群萌、二足四足若しくは多足者を餽潤する所なるが如し。是くの如く世尊よ、其れ無上正眞道の意を發さば天上天下、恩を蒙りて度を獲んと。

## 無吾我品第五

爾の時に世尊、斯の本末を説き竟已らむと欲するに向ひ、王阿闍世、驪馬に乗じて 四部兵たる

【六】 三本並に宮本に依り、來を過と改む。

【七】 堪諾とはタヘアフの意なり。

【一】 四頭立の馬車なり。

【二】 四部兵とは象兵、車兵、馬兵、歩兵なり。

り此の言を説くや、今、仁の發意、天上世間悉く救護を蒙らんと。佛舍利弗に告げ給はく、時に一切達如來正覺の邊に侍者有り、名を海意と曰ふ。博聞最尊にして之に告げて曰く、寧んぞ三童の各珠璣を執りて遊來するを見るや、と。對へて曰く、已に見る、天中の天、と。世尊告げて曰く、比丘知らんと欲するや、中央の幼童、其の志性を建つること、巍巍として量り難し。一一の歩中に百劫終始の患を超越し、其の一舉足の功德の本は當に更に百たび轉輪聖王に臨むべし、帝釋の位を受くる亦復斯くの如し。梵天に昇生して梵天王と爲る亦當に是くの如くなるべし。一一の舉足の功德の本は更に百佛に見へんと。時に三幼童は一切達如來の所に往詣し、足下に稽首し、寶の珠璣を以て世尊の上に散す。其の小意を發して聲聞たらんとする者の散する所の珠璣は兩肩上に住し、其の一童の諸の通慧心を發して散する所の珠璣は佛の上、虛空の中に在り、變じて交露重閣棚帳となり、四時周章して莊嚴平等なり。其中に化して床座有り、如來之に處せり。是に於て一切達如來尋で欣笑し給ふ。侍者啓問す、唯然世尊、何を以ての故に笑ふ、笑ふこと會々意有るや、と。如來告げて曰く、海意よ、汝斯二童の聲聞の意を發して手に珠璣を執り如來に散するを觀るやと。對へて曰く、已に見る、大聖よ、又比丘に告げ給はく、知らんと欲するや、二童の生死の難を懼れ、怯弱の意を發し、意救護を求むるを。猶是れ無上正眞道の意を發さず、聲聞を得て尊の弟子たらんと欲す。然るに後來の世皆當に證を得べく、一者智慧最尊、二者神足無雙なり、と。佛舍利佛に告げ給く、卿、意に疑ふや、時に中央の童、諸の通慧を發す者は則ち吾身是なり、右面を願ふ童は舍利佛是なり、左面を願ふ童は大目捷連是なり。舍利佛、卿等の本時を觀るに生死の難を懼れ徳本を植ると雖、無上正眞道の意を發す能はず、心志怯弱にして疾く減度するを欲し、超速なる能はず、甫めて吾が法に因て無爲を得たり、今寧んぞ吾が諸の通慧を觀るや。汝等の友、佛の弟子と爲り、乃ち解説を得たり。是れを以ての故に當に斯の觀を作すべし。假へば人あり、減度を成せんと欲して

【四】宋、宮兩本に依り障を章と改む。  
【五】三本並に宮本に依り爲を有と改む。

が如く、大衆と俱に星中の月の如し。時に一幼童、二童に謂つて曰く、汝等豈如來を見るや、是れ則ち一切の尊、無上衆祐なり。世の福田たり。光明灼灼燁燁として當り難し。吾等僉然宜しく之を供養すべし。其の施を進むる者は利慶弘大なり、と。頌を以て讚して曰く、

斯れ衆生の尊、福田なり、上有ること無し、當に俱に供養を供ふべし、此れに施さばまほ無量なり。

## 第二幼童の曰く、

今我が無爲の花、亦糴澤の香無し、斯の聖、等倫無く、當に何を以てか供養すべき。

是に於て一童は即ち頰に著くる珠璣の價直百千なるを脱し、頌を以て讚して曰く、

當に此れを以て無上の福田に供養すべし、何所の明智者か、斯れを見て憐む所有らん。

時に二童は彼の童子になま効ひ各各頰に著くる珠璣を解脱し手を以て執持し、頌を歌つて曰く、

其さに正覺に供養し汎湍の江波を度り、無量の志意を脱し平等法に住せん。

爾の時一童は二童に謂つて曰く、汝等斯の徳本を以て何れの所にか志求する。一童子の曰く、

其れ世尊の傍に在りて右面する大聲聞の智慧尊第一なる、吾れ斯くの如くなるを誓願す。

二の童子曰く、

猶世尊の傍に左面する大聲聞の神足超最尊なるが如く、吾れ斯くの如く誓願す。

時に二童は一童に謂つて曰く、族姓子、斯の徳本を以て何なる願を誓はんと欲するや、と。一童

報へて曰く、

今、如來至眞等正覺の普く見て一切に達するが如く、猶師子の歩、大衆會を焔燿するが如けん。吾身、斯くの如く、二界尊第一にして諸の十方を度脱することを誓はん。

一幼童は適々此を説き已る。尋で虚空の中八千の天子俱に讚歎して曰く、善哉善哉、快な

【三】三本宮本聖本に依り道を適と改む。



# 卷の中

## 幼童品第四

爾の時に世尊、舍利弗に告げ給はく、例へば人有り、族姓子若しくは族姓女の爲に疾く滅度して當に無上正眞の道意を發すべきを欲す。所以は何ん、今吾れ親見するに終始の難を懼れて敢て無上正眞の道意を發さざるなり。聲聞を志願して疾く滅度せんと欲し、續いて生死に在りて慕ふ所有り。然るに諸の菩薩は精進に通達して等しく法に住し、諸の通慧に逮び一切智爲り。所以は何ん、乃至久遠、過去世の時、計會すべからず思議すべからざる無央數劫の時、如來有り、一切達と號して世に興出せり。如來至眞等正覺、明行成は善逝世間解無上士道法御天人師爲り、佛衆祐たり。佛、舍利弗に告げ給はく、其の一切達如來正覺の聲聞の集會は百億の衆有り、其の佛の壽命住すること百千歳なり。佛に聲聞上首の弟子有り。智慧巍巍たり、名づけて超殊と曰ふ。神足飄捷なり。次を大達と名づけたり。時に如來は五濁の世に興り、明且に正しく著衣を服し鉢を持し、諸の聖衆の眷屬圍遶せると與なり。大國有り名聞物と號す。斯の城に入りて分衛を行ぜり。其の大聲聞の智慧最尊なるは佛の右に侍し、神足最上なるは佛の左に侍し、智慧博聞にして殊勝なるは佛の後に隨從せり。八千菩薩は前に在りて導き、或は身を化現すること若しくは帝釋の如く、或は梵天の如く四天王の如し。或は天子の形にして嚴に道路を治せり。佛、舍利弗に告げ給はく、彼の時如來向きに城に入らんと欲して、三幼童の衆寶莊嚴し其身を瓔珞し、中路に逍遙して共に遊戲するを見る。時に一幼童遙かに如來を見るに、晃然として威神を顯赫し、巍巍として端正なること倫無く、諸相寂定にして志性澹泊、上の調順を獲、第一靜漠にして諸根を降伏し仁賢の龍象の如く、大淵淳の清淨無垢なるが如く、三十二の大人の相、八十種好有りて遍く其の體に布き、日出づる時光耀奕奕たる

【一】衆祐とは世尊に同じ。

【二】三本並に宮本に依り、  
を嚴に改む。

餘人を勸化し開き、道に至りて無上正眞を退轉せざらしむ。吾等、何んぞ墮落を欲せんや、吾等何が故に如來の前に在りて卑賤の意志を興し、小節を崇んや。今當に聲聞緣覺を捨て慇懃に無上正眞の道意を志求すべし、と。濡首、掌を伸べ、變化を示現し、乃し下方の光明玉佛、所處の國土に至りて、鉢を致り來り一切普く入る。又復、往古開化し説く所の經典を講説す。下方の佛土、此世尊の界の不可計數の衆生の類即ち道心を發せり。十方世界の群萌の儔、悉く來つて濡首眞眞に供養す。諸佛世尊皆、寶蓋を遣して經典に供施す。彼の時の寶蓋は則ち三千大千の佛國を覆ふ。其の寶蓋より自然に音を出すこと誠に能仁尊の如し。如來の所讚の如く稱揚す。悉く是れ濡首の勸化する所なり。

佛、舍利弗に告げたまはく、時に幼童は其の父母及び五百人を化し、悉く法を念學し無上正眞の道<sup>五二</sup>を志す。皆佛世に於て家を棄て道<sup>五三</sup>を爲す。時に佛、之をして菩薩の道、六度無極、四等<sup>五三</sup>、四恩<sup>五三</sup>を行ぜしむ。分別解空、精進して懈まず、自から佛を得ることを致せり。卿、舍利弗知らんと欲するや、爾の時慧王比丘の法師と爲りし者豈異人ならんや。斯の觀を作すこと勿れ。所以は何ん。則ち濡首童眞なり。其の離垢臂尊者の子とは則ち吾れ是れなり。昔往古の世、濡首童眞は饒を以て施して佛衆を供養するを見、無上正眞道の意を發さしめぬ。則ち是れ本身初發意の原なり。是を以ての故に、當に之を知るべし。今、如來成ずる所の聖覺無極の慧<sup>五三</sup>、十種力<sup>五三</sup>、四無所畏、十八不共、無聖礙慧は皆是れ濡首勸むる所の恩なり。所以は何ん。發意より諸の通慧に至るに因て、佛所蒙の因の如く大道を致す。今吾れ、十方世界を觀觀するに稱限すべからず、計會すべからず。諸佛國土の今現在する者の諸佛世尊、同じく能仁と號す。悉く是れ仁者濡首の勸むる所なり。或は威聖と號し、或は明星と號し、或は所歡と名づけ、或は鏡光と名づけ、或は離漏と謂ひ、或は妙勝と謂ふ。佛、舍利弗に告げ給はく、今我が一劫、若し一劫を過ぎれば諸佛の名號を宣揚し演說せん。濡首大師、開化する所の者、今に於て現在し法輪を轉すること稱限すべからず。何に況んや、菩薩乘を行すること有る者、或は兜率天に處すること有る者、或は退いて母の胞胎に來入し、復出生して家を捨て道<sup>五三</sup>を爲し、或は佛樹に坐し、或は道場に處して最正覺を成ずること有る者、限喻すべからず。其の誠諦の事を説かんとは寔實無慮ならんと欲す。濡首童眞は則ち諸の菩薩の父母なり。慇懃し勸化して大道を興顯す。所生の親とは則ち當に濡首童眞を謂ふべし。向きには濡首宣揚報恩し、今復仲説す。當に食すべき者と雖、我鉢饒所食の餘を施せり。吾れ前世の時、先きに所施有りとは斯れを謂ふなり。爾の時に千二百の諸の天子、墮落を欲する者、各心に念言すらく、當に其の志を堅くし、法を恭敬し、諸の因縁を察し、諸根の原を去るべし。今、現在の世尊、前きに發願する所なり。濡首は、

【五二】 四等とは四無量心の意。  
【五三】 四恩とは一に父母の恩、二に衆生の恩、三に國王の恩、四に三寶の恩なり。

【五三】 十種力とは十力の意。



臂は遙に比丘を見、遊行して之に趣き、乳母を下りて抱かる。尋いで比丘に隨ひ、從いて飯食を求む。時に比丘は模持蜜搏を幼童に與ふ、即ち食して其甘味を知り、遂に比丘に隨ふ。蜜搏盡きんと欲して、乳母を願丐し、意、還つて抱かるるを欲せり。比丘復蜜搏を授くれば幼童復進む。稍々轉じて莫能勝幢如來の所に至る。足下に稽首し則ち其の前に住す。時に比丘慧王は得たる所の分衛の食饍を幼童に授け、之に謂て曰く、童子、斯の分衛の具を受け、如來を供養し尋いで即ち之を受けよと。已にして佛鉢を滿せるも食減損せず。次に聲聞の八萬四千、菩薩十二億に與ふ。佛及び聖衆皆悉く充飽す。是くの如きの供、七日に至り、飯則ち故の如く亦損減せず。時に幼童、踊躍歡喜して善心を生ず。世尊の前に住し、則ち頌して曰く、

佛聖衆、鉢の食を飽滿して損耗せず、衆に奉事して福田を祐くること疑有ること無し、世吼の食、餽饍を充足して減ぜず、衆に獻進して祐くる、道の無盡なるを疑はず、其の饍既に損せず、供具さに轉た弘多なり、等正覺を恭敬し、清白法を増長せん。

佛、舍利弗に告げたまはく、時に幼童は一鉢の食を以て世尊及び聖衆に供養し、佛の聖旨を承け、已心清白に、七日の食を具足して損耗せず。慧王比丘は幼童を教訓し、佛及び法聖衆に歸命し、禁戒を受け、刻心悔過せしめ、勸めて請問し、無上正眞の道意を發せしめぬ。時に父母、其子を求索して便ち莫能勝幢如來所に詣る、稽首、禮を作し退いて一面に住しぬ。幼童拜謁し父母に問訊し偈を以て讚して曰く、

我れ佛道を志願し、諸の群生の閑暇も値ふことを得ること難きを懸哀す、親亦宜しく誓意し、且つ正覺身の諸の浬好莊嚴せるを觀すべし。慧度の無極に於ける、孰れか道意を發せざらん。惟、父母、釋てて出棄し、家を損するを見る。妙智慧の教に順じ、得學、寂志と爲るや。父母即ち答へて曰く、我等好んで道を樂ひ、爾に從つて明を爲さば、亦捨家を願はんと欲す。

二江河沙等の諸佛の國土を照し、照曜世界に至りて周遍せざることをなし。下方の世界の諸の菩薩衆、身に斯の光を蒙り、皆悉く須彌光明三昧を逮得せり。當に爾の時、斯の佛土及び彼の世界に於て斯の土彼を見、彼土此を見、轉た相規達せること、猶此土閻浮提の人の地上に住して日月を仰瞻するが如し。下方の世界の諸の菩薩の能仁如來及び忍世界を觀ること亦復是くの如し。此土の人民下方を見るに猶諸の天の須彌頂に住して天下閻浮提城を俯るが如し。斯の諸の菩薩、光明王如來の諸の菩薩等を見るに、大徳の鎧を被、及び難く量り難し。是に於て、濡首は右の掌を以て照曜界の彼の光明王如來の佛土に至り虚空の中に於て即ち鉢を握取し、無央數億百千姪の諸の菩薩衆の眷屬圍遶せると與に上方に踊出し、手掌に鉢を擎げ、摩所の佛國の轉々來上する者、光明蓮花稍現せず。右手に鉢を執り、忍世界に還る。大聖の前に於て跪いて投げ奉り、世尊に啓して曰く、恩を垂れて之を受けよと。佛即ち鉢を受く。時に諸の菩薩の濡首の掌と俱に來れる者、前みて佛所に詣て地に稽首し、各各自ら如來の名を宣ぶ。某佛大聖敬を致すこと無量に、聖體勝常にして遊歩すること無限に慧力平康なり。諸の菩薩衆は敬問已に畢つて、退いて一面に佛教の所如き安隱の座に坐す。爾の時、世尊、舍利弗に告げたまはく、今且く斯れを聽き、善く之を思念せよ。今、爲に若し説くが如くんば、乃ち昔往古に吾身、菩薩たるを造行せし時は則ち是れ濡首の本、建發する所なり。今、斯の意を宣置する所以なり。世尊は食すと雖當に疇昔法施の恩を念すべし。乃ち曩きに過去久遠の世の時、無央數、計會すべからず、億百千劫復此數を踰ゆ。爾時に佛有り、莫能勝幢如來至眞等正覺と名づけ、世界を無別異と名づく。莫能勝幢如來の諸の聲聞衆八萬四千、菩薩大士十二億衆、其の佛世尊、五濁の世に於て三乘の教を演す。一比丘有りて法師と爲り、名づけて慧王と曰ふ。明且、衣を著、應器を執持し、弘廣國に入つて分衛を行じ、百味の飯、若干種の食を得。分衛し竟りて街路に出行すれば尊者の子有り、離垢臂と名づく。乳母の爲に抱かれて遊戯を行す。時に離垢

【四】五濁とは一に劫濁とは二萬歲已後に至て見等の四濁起る時を云ふ。二に見濁とは身見邊見等の見惑なり劫濁時の衆生盛に之を起す。三に煩惱濁とは貪瞋癡等の一切修惑の煩惱にして劫濁時の衆生盛に之れを起すなり。四に衆生濁とは見濁、煩惱濁の結果として人間の果報おとろへ心頓體弱にして苦多く福少きを云ふ。五に命濁とは是亦前二濁の結果として壽命漸く縮少し乃至十歳に至るを云ふ。

【五】分衛とは音譯にして、乞食の意なり。

時に光明王佛土の諸の菩薩衆皆共に渴仰し、彼の忍世界の能仁如來濡首大士を親見するを得んと欲す。光明王佛は悉く衆の會の意の所見を知り、便ち眉頂の相光を放つ、其光通じて七十二江河沙等の諸佛の國土を照し、上、忍界に至り晃昱せざるなし。其れ衆生有り光を蒙らせらる者は一切安を獲、諸患有ること無し。四域皇帝轉輪聖王の如し。諸の修行者は専ら學定に精しく、斯光を被る者悉く道迹を得、其の禪を得る者は悉く三界を過ぎ四證德を獲、其の漏盡の者は四六八脫門を得、禪定の羅漢は無著の原を得。其の諸の菩薩の光の身を照す者は普く皆日光三昧を速得せり。是くの如きの比、光明王四七如來佛土の菩薩大士は斯忍界の世尊能仁、濡首童眞、一切聲聞比丘聖衆、諸の菩薩等を見る。光英菩薩は忍世界の諸の菩薩衆を親、尋いで卽涙出し、便ち斯言を説き、自ら佛に白して曰く、唯然世尊、妙水精、如意明珠の不淨の中に墮するは誠に矜惜すべきが如く、此の諸の菩薩の忍界に生ずるも亦復是くの如く甚だ憐感すべし、と。光明王佛、光英に謂て曰く、是の語を宣ぶること勿れ。所以は何ん。此の佛土に在りて禪行を精修して十劫に至るは忍界の明晨且より早食の頃に至り、慈心を興發して衆生を哀念するに如かず。此の功德は最勝にして倫無く、逮及す可きこと難し。所以は何ん。斯の諸の菩薩大士の衆は陰蓋有ること無く、塵勞四八已に盡きたり。其の忍界に於て正法を護る者は德、量る可からずと。爾時、忍界の諸の菩薩衆、光明、身を照し、則ち能仁天中天に問ふて曰く、唯然世尊、此れ何の光明、孰れか演出し來る、諸の塵勞を滅して瑕穢無からしむと。時に佛告げて曰く、有らゆる族姓子、下方、此の七十二江河沙等の諸の佛國土を度りて世界有り、名けて照曜と曰ふ。彼に如來有り、光明王と號す、現在說法したまふ。其の光明王如來至眞、眉頂の光を放ち、其の光通じて七十二江河沙等の諸佛の國土を照して、大いに晃昱にして斯土を遠照す。時に諸の菩薩及び衆の聲聞、各佛に啓して曰く、唯然世尊、我等照曜世界光明王如來諸の菩薩衆を見たてまつらんと欲すと。能仁如來は足心の千輻輪の光を放ちたまふ。其の光普く下方七十

【四六】 三界の煩惱を捨離して其の繫縛を解脫する八種の禪定なり。

【四七】 三本並に宮本に従つて邊の字を削る。

【四八】 三本並に宮本に依り以て已と改む。



衆、數は江河沙の如く、悉く濡首の開道する所なり。一步擧足、所念を知らんと欲して歸する所を識らず。是の故に仁者、當に濡首に請ふべし、惟斯の大士鉢の處、所止する所を知り、致來に堪任す。時に須菩提、世尊に啓して曰く、願くは恩教を垂れ、大聖則ち濡首を遣し、鉢を取らしめたまへ。濡首命を奉じ、自ら思念して曰く、吾、座を起たす、衆會を離れずして鉢を擧げ來らんと。濡首の三昧を名けて普超と曰ふ。是の諸の菩薩定意正受す。時に濡首、其の右掌を伸し、而して地に内れ、下方を過ぎ踰へ、經る所の諸佛無極大聖、一二次四四に手四五を以て之を禮す。其手掌中、自然に音有り、能仁如來至眞等正覺と稱す。敬しく無量の興處、輕利力勢、常の如く遊居し安んずるやと問ふ。其の手掌臂の一一の毛孔より、尋いで自然に億四五百千姝六の光曜の明を出す。一一光明に各各百千の蓮華を變現し、一一の蓮華に各化の如來相好具足せる蓮花の上に處し跏趺して坐す。一一の世尊各各に能仁如來の名徳功勳、遊歷すべき所の諸佛の土を讃揚す。時に諸國六反に震動す。又諸の佛國、自然大光、周遍せざるなし。一切の佛國、各各にして斯の手掌有るを現す。又諸の佛土、自然に繒幢、幡衆蓋を懸け莊嚴せざるなし。遍く衆花を散して處々校飾す。濡首の手掌、七十二江河沙等の諸佛の國土を過ぎ、諸佛を禮し竟る。斯の須の間、忽然として即ち照曜世界光明王佛國に至る。禮し畢つて自然に大音ありて出で、能仁如來敬しく無量を問ふと稱す。光明王如來有侍の菩薩を名けて光英と言ふ。自ら如來に啓す。此れ何の手掌ぞ、殊妙にして魏魏たり、威神も及び難し、而かも自然に億百千姝の光明を出して曜赫たり。一一の光明各、億百千姝の嚴淨の蓮華を化出し、一一蓮華に如來各坐し、能仁聖哲の勳を諮嗟するやと。光明王佛、光英に告げて曰く、有らゆる族姓子、上方此の七十二江河沙等の諸佛國土を過ぎて、忍世界有り、如來至眞等正覺、號して能仁と曰ふ。現在して說法す。彼に大士あり、名けて濡首と曰ふ。戒徳の鎧を被、不可思議一切の神通力あり、度すること無極なり、自在に座に於て移起せず、手掌を延して來り、鉢を擧げ還らんと欲す。

【四四】 三本並に宮本に依り、首を手と改む。

【四五】 宮本並に聖本に依り、億を億と改む。

在り、光明王如來の國界に至るを見る。界を焔燿と號す。鉢は彼處に於て虚空に住し、執持する者無くして自然に立つ。所住の諸佛の弟子衆は各々前すみて其の世尊に鉢の從來する所を啓問す。諸佛各々告げて其意を説くが故に上方世界を號して忍と爲す。彼に如來有り、名づけて能仁と曰ふ。現在說法す。能仁如來は斯鉢を降す、諸の異の菩薩の志退落する者を勸化せんと欲するが故に。時に世尊、舍利弗に告げたまはく、汝行きて鉢を求め所在を察知して赴致し來れと。即時に受教、自ら智力を以て佛の聖旨を承け三昧正受す。一萬定を以て萬の佛土を超へ、遍く鉢を求索すれども所在を知らず。還つて佛に白して曰く、唯然、世尊、之を求むるに見えず、所在を知らずと。時に世尊、大目連に告げたまはく、汝今、且行して鉢を求索し來れ。其の所在を察するに何方に處ると爲すや。

目連、教を受け、神足を以て佛の聖旨を承け、三昧正受して八千定に入る。倏忽にして八千の佛國を超過して、之を求むるに見えず、處る所を知らず。還つて佛に白して言く、輒ち神力を竭して鉢を蒙執せず、致し能ふやと。世尊復、須菩提に告げて曰はく、汝行きて鉢を求め、其の歸する所を知り求め齋して來ることを致せと。即ち亦、教を受け三昧正受し、萬二千定、恍惚として萬二千の佛土を超越す。求むるに鉢を見ず、所止を知らず。是くの如く五百の諸大聲聞、虚空に在りて各各神足を現じ、三昧の力、神通の聖勢にして天眼徹瞻し、各々行きて鉢を求むるも所在を知らず、亦得ること能はず。時に須菩提は即ち前すみて慈氏菩薩に告白して曰く、仁者高才にして一一生補處なり、如來の三剃する所、當さに無上正眞道を爲し、最正覺を成すべし。仁慈恩廣、智慧弘達にして衆の及ばざる所なり。三界に獨歩して侶有ること無し。當に鉢の處を知り、惟能く之を致し齋來し奉るべきのみ。幸に威尊に屈して鉢を擧げ還られよと。慈氏菩薩、須菩提に報へて曰く、誠に云ふ所の如し、如來の慧を受け當に正覺を成すべし。今、濡首、興す所の定意、進止坐起、予の及ばざる所、斯の三昧を曉すること能はず。惟、須菩提、來世に於て吾當に成佛すべしと雖、佛菩薩

【四】前佛につぎて成佛する菩薩を補處と言ふ、而して一生を隔て、成佛する故に一生補處と言ふなり。慈氏即ち彌勒菩薩は釋迦牟尼に於ける補處の菩薩なり。

【三】剃とは記別の意。

こと無きを要せず、所説有らば所趣寂然として動轉せず。大徳の鎧を被、定意説法して、能く其の經典を毀敗すること無くんば諸法の所増者有り、所減者有るを見ず。是くの如き所説なれば如來に可せらる。是の語を説く時八百の菩薩、不起法忍を得たり。

### 學鉢品第三

その時に千二百人、會中に在り。乃ち往古に於て菩薩に造りて行ず。則ち道意を忘れ、志堅固ならず。心に自ら念じて曰く、佛慧は巍巍として、限量すべからず。無上正眞道の意、獲致すべからず。菩薩の所學は而かも違ふべからず。最正覺者は甚だ得べきこと難し。吾等は是に於て學辯すべからず、改めて聲聞緣覺を求め、滅度を取るに如かず。その時に世尊、諸の天子の心の所念を知らしめし、此れ等の倫は無上正眞の道を成じ最正覺を爲すに堪へるを以てして而かも中廢を欲し、隨つて小乘に取す。佛は諸の天子を勸化せんと欲するが故に、道場を離れて衆會に在り、表てに長者を化作して手に鉢の百種飲食を滿せるを擎げ、齋して佛所に詣り、世尊に白して曰く、惟願くは大聖哀れみを加へ食を受けよと。佛即ち鉢を取る。濡首菩薩興きて佛所に詣で、又手して啓して曰く今盛饑を食す、當に故恩を念すべし。吾れ誠に信聞す、大聖、食すと雖法惠を以て鄙に及ぼさずと、惟宜しく施に加るに法相を以てし、恵みて往意を剋復せよと。是に於て賢者舍利弗心に自ら念言すらく、濡首往古に何の恩徳ありてか世尊の所に於て、食すと雖前の法恩を顧みよと言ふやと。則ち佛に白して言く、濡首童眞、宿し何の恩か大聖に有る。而して如來は當に食すべき者なりと雖前の法恩を念ぜよと言ふを置すや。佛告げたまはく、且らく斯の須を待て、自から當に發遣すべし、如來の所知は爾の及ぶ所に非すと。佛即ち尋時にして鉢を地に捨つ。鉢即ち下り没して諸の佛土に遊ぶ。諸佛正覺、今現在する者各々鉢の其の足下に降り、下方七十二江河沙等の諸佛國土に

【元】三本並宮本に依つて一を大と改む。

【四】須は少時の意。

【四】尋時は暫くの意。



を學す。其の聖慧に従つて分別し説くなり。舍利弗、本所學の如き自らを禁するが故なり。斯の慧辯才亦然なり。光淨菩薩、世尊に問ふて曰く、何をか聲聞の學と謂ひ、何をか菩薩の學と謂ふや。佛、言はく、限有り礙有るは是れ聲聞學、限無く礙無きは是れ菩薩學なり。其れ聲聞學は其の所限に因りて罣礙を致す。是に由るが故に所説限り有りて罣礙を致すなり。而かも諸の菩薩學は限あること無く、無罣礙を致す。是に由るが故に所説限り無く罣礙あること無し。光淨菩薩、前きに佛に白して言さく、惟、天中天、願くば感應を現じ、諸の正士をして斯こに來至せしめ、此衆會をして所説の法を聞かしめ各々其所を得て唐學せしむること無からしめ玉へ。所以は何ん。濡首童眞は所行深奥にして、論する所の經法亦復要妙なればなり。爾の時に世尊即ち瑞應を現す。濡首、尋時に二十五正士及び諸の天子と共に佛所に往詣し、足下を稽首し、遷りて一面に住す。光淨菩薩、濡首に謂つて曰く、仁者、何が故ぞ如來會を越え、獨り屏處に於て經を論講するや。濡首答へて曰く、族姓子、如來の三三如きは甚だ尊にして當るべからず。諸佛大聖は是に由るが故に、一切の所説或は不可を懼る。故に一面に在り。又濡首に問ふ、何所の法を説かば如來に可せらるるや。濡首答へて曰く、吾が所説の如き世尊之を知る。光淨曰く、爾りと雖、願くば其意を説き玉へ。答へて曰く、吾が及ぶ所の如き、今當に宣現すべし。惟、族姓子、所説有るが如き法界に達せず、本三三源を失はず、本際を失はず。説く所是くの如くんば如來に可せらる。又若し、説く所、理に訟ふる所無く、呵叱せらるる無く、興爲する所無く、亦因縁無く、色像有ること無く、亦比類無し。是くの如く説かば如來に願じ奉る。我れに同像無く、他人の形、法に不等なる貌無く、非法の貌無く、終始の貌無く、泥洹の貌無く、是くの如く説かば、爲に如來に可せらる。是に於て世尊は濡首に告て曰く、善い哉、善い哉、快く此の言を説く誠に云ふ所の如し、是くの如く説かば如來に達せず。又次ぎに濡首、假へば悉く一切の戲樂を離れて憤亂無からしめ、若しくは三三本、諸の所想を離れ、衆想有る

【三三】 宮本に依て知を如と改む。

【三三】 聖本に依て無を源と改む。

【三三】 三本並宮本に依て平を本と改む。

と是くの如くならしむれば能く佛を成じ、衆魔を降伏し、無上正眞の道を成ずるを最正覺と爲す。亦能く一切衆生を導利す。時に化の如來此の語を説き竟り、尋いで卽ち化滅して其處を知らず。辯積菩薩は濡首に問ふて曰く、今は如來(何をか)所至處となすや。答へて曰く、所來の處に従ふ。又問ふ。何れの所よりか來れる。答へて曰く、所去の處の如し。又問ふ、濡首、其れ化現者は從來する所無く、從去する所無きや。答へて曰く、族姓子、譬へば化者は從來する所無く從去する所無し。一切の諸法亦復是くの如し。一切衆生は等しくして異り有こと無く、不來不去なり。又問ふ、濡首、一切諸法は何かなる所趣となすや。答へて曰く、所趣自然なり。又問ふ、一切衆生は何かなる所歸となすや。答へて曰く、其の所作に隨ふ。又問ふ、濡首、一切諸法は無作無報なりや。答へて曰く、族姓子、其れ法界とは作無く報無く往無く、諸法を等御すれば則ち法界となす。又問ふ、云何んが有作有報有往にして謂つて無往と言ふや。答へて曰く、族姓子、其の所作の如く、其の所報の如く、所往亦然なり。又濡首に問ふて曰く、何をか謂つて作と爲し、云何んが報應、何の因か所往なる。答へて曰く、所作の如きとは報應亦如なり、所往亦如なり。又問ふ、濡首、其れ如無本とは亦作有ること無く、報應有ること無く、往趣有ること無しとするや。答へて曰く、如し族姓子如無本とは亦所作無く亦報應無く、亦往趣無し。所作報應往趣亦然なり。來なく去なきは所作報應所往の至處なり。其れ如は本無く歸趣する所無し。是の語を説く時、世尊能仁の佛前に在るが如し。賢者舍利弗、賢者阿難、及び餘の大弟子悉く斯の講を聞く。舍利弗は佛に白す。唯然如來、怪未曾有なり。斯の諸の正士は大聖人にして等しく同一の法を師子吼するとなすや。若干種を説く音聲言説は法と會同して錯謬なきや。誰か斯れを聞く者無上正眞の道を發たつさざらんや。佛、舍利弗に告げ玉はく、誠に云ふ所の如し。菩薩大いに無聖礙を學するが故に、今は説く所、聖礙する所無し。其の所種は必ず其の果を獲るが如し。其の出す所の報應の如きも亦然なり。菩薩は是くの如く無聖礙

と無く、亦倫比無く、亦所受無く、亦受ならざるに非ず。亦想念無く、亦想を離れず。亦所行無く、行不行無きは則ち菩薩の學なり。著不著無く、慢不慢無し、亦調戲ならず、亦邊修ならず、邊修を離れず、想無く、取無く、遊居する所無し。亦想あること無く、不起不滅、不來不去、無住無化なり。亦形あること無く、亦言辭【三】無く、普く一切諸の所想の行を離るるは則ち菩薩の學なり。其れ斯の學を作すは是を等學となす。斯の學に造る者は則ち所趣無く、則ち所増無く亦所損無し。斯の學に造る者は亦所著無く亦所脱無し。亦所染無く亦離塵無く亦結恨無く、愚冥に墮せず。是くの如く學する者は乃ち名けて學となす。學ぶこと斯くの如くんば諸趣に詣らず。是の故に族姓子よ、菩薩大士、無上正眞の道に逮成せんと欲する者は我が所學を學ぶなり。又問ふ、如何んが佛の學なる。答へて曰く、我、戒無きも亦犯す所無く、施さず受けず、戒ならず犯ならず、忍ばず瞋らず、進まず怠らず譚ならず亂ならず、智ならず、愚ならず、無學にして無學に非ず、行はざる所無くして而かも吾れ得無し、亦所等無く佛無く法無し、亦我想無く亦人想無く亦壽想無く亦命想無く、亦法想無く亦有想無く亦無想無きが如し。所以は何ん。一切諸法悉く所造無し。一切諸法所造無きを以て自然如幻なり。亦相有ること無く亦二有ること無し。一切諸法は諸の所樂を離れ、一切諸法にして而かも見るべからず。一切諸法は眼句を超度す。諸法平等にして差特無し。諸法愚冥にして亦所徑無し。無爲無人なり。故に人の言教無し、故に處所無し。言教有ること無ければ所生無し。其れ此れを信する者は所信を念とせず。亦自ら大とせず、亦道を念ぜず。是の故に族姓子、若し菩薩ありて是くの如き、比類の佛道を學する者は不恐・不懼・不難・不畏なるを、乃ち菩薩と爲す。如し、族姓子、虚空之れ畏るも火を畏れず、風を畏れず、雨を畏れず、霧を畏れず、塵を畏れず、雷を畏れず雲を畏れず、電を畏れず、雪を畏れず。所以は何ん。空は自然の故に空畏と曰ふなり。菩薩は是くの如く一切法に於て畏るる所無く、一切法に於て苦樂を念とせず。假へば菩薩の心をして等なるこ

【三】 三本・宮本・並に聖本に依て辭と改む。



眞の道意を發せり。

## 化佛品第二

是に於て辯積菩薩は濡首に白して曰く、且く當に俱に往いて如來に覲え、面り大聖に問ふべし。菩薩大士は當に何なる行を興すべきやと。濡首は其處を尋ね、化して如來となる。其體・形像・能仁佛の如し。濡首眞眞、辯積に謂つて曰く、族姓子よ、如來は斯こに在り、何ぞ菩薩大士所設の行を啓問せざる。是こに於て辯積菩薩は化の如來に問ふ。唯然世尊、菩薩大士は當に何の行をか説くべき、と。時に佛告げて曰く、我が所設の如きは菩薩亦當に是くの如き行を修すべし、と。又問ふ如何んが世尊、行を造立する所なる。其の佛答へて曰く、亦施を行ぜず、禁戒を行ぜず、忍辱を行ぜず、精進を行ぜず、一心を行ぜず、智慧を行ぜず、欲界を行ぜず、色界を行ぜず、無色界を行ぜず、身行を造らず、言行を造らず、心に行を念すること無く、一切無行亦因縁無し、是れ菩薩の行なり。族姓子の心趣に於て如何。其れ化現者は豈行あらんや。答て曰く、天中天よ、化者に行無し。報じて曰く、是くの如し、族姓子よ、菩薩大士は當に斯かる行を造るべし。辯積菩薩は濡首に白して曰く、今、見る所の佛、將に化無しとするか。濡首答へて曰く、仁者、一切諸法は化の自然なるを聞かざるや。幻變の相にして而かも退轉せず。報じて曰く、是くの如し、諸法は實に化の自然なり、幻變にして而かも退轉せず。答へて曰く、今族姓子よ、何が故ぞ、今、現する如來、將に化無しと發言するや。一切諸佛及び一切の法、豈に化せざらんや。又問ふ、誰か化を爲す者ぞ。答へて曰く、自然業淨にして之を化するのみ。又族姓子よ、菩薩は當に我が人の壽命、佛の聖道及び凡夫に住すべからずして而かも住ありと計するなり。辯積、化の如來に問ふ、世尊よ、何の學か自ら佛を得ることを致すや。答へて曰く、所學無きは則ち菩薩の學なり。菩薩の所學は形像有るこ

【三】能仁佛とは釋迦牟尼佛のことなり。

【三】佛陀の尊稱なり。

【三】三本並に宮本に依て豈を今と改む。

謂ひ、若し遵修なれば無爲法にして不想慢と謂ふ。其れ翫習なれば謂て三 罪法と爲し、若し遵修すれば罪法無く不想慢と謂ふ。其れ翫習なれば諸漏と謂ひ、若し遵修なれば無漏にして不想慢と謂ふ。是を翫習、遵修に至りて諸の所見を離れ著せず斷ぜずと謂ふなり。苦翫指趣すれば應に大乘諸の慧に通ずべし。

又次に仁者、而かも諸の通慧に至るを得ず。何が故ぞ至らざる。何等を以てか、諸の通敏慧に至る。諸の慧に通ずる者は諸の所作を離る。其れ諸の通慧は亦所至無く亦有逮無し。諸の通慧とは又諸の通慧の亦色像、無く亦二 痛痒・思想・生死・識の形貌無きなり。其れ諸の通慧とは亦法無く、亦非法無し。其れ諸の通慧とは亦施有ること無し。所以は何ん。諸の通慧とは則ち施與と爲す。又諸の通慧は持戒忍辱精進一心智慧有ること無し。所以は何ん。諸の通慧とは則ち自然聖なり。諸の通慧とは去來今無し。所以は何ん。其れ諸の通慧は三世を超度す。諸の通慧とは眼耳鼻二 舌身心識無し。所以は何ん。諸界を度するが故なり。諸の仁よ、諸の通慧を知らんと欲する者、若し菩薩ありて、通慧を得、如の通慧に住せんと欲するに、當に云何んが住すべき。一切法に於て所住なきは斯れ則ち諸の通慧に住すと爲す。一切諸法皆三 我所に非れば斯の諸の通慧は一切法に於て倚著する所無し。斯の諸の通慧は凡夫地に等しく佛地に等しく、一切法に於て亦平等と爲す。斯の諸の通慧は又菩薩を行じて餘に求むべからず。諸の通慧は唯當に此四大界より求め、自然に造行すべし。所以は何ん。斯の自然とは此れ所有無し。斯の自然とは則ち形あること無し。是に於て善法を名けて我身と曰ふ。我身に於て而かも、身有ること無く、善惡有ること無く、無我・無壽・無命・無人なり。假へば我身則ち所有無く、亦復彼有ること無ければ行無く亦所有無し。彼の所有の形則ち亦實無し。其の所見者亦所有無く亦實有ること無し。其れ慧の所有を見るや有實無實等有ること無し。斯の諸慧則ち諸通慧なり。濡首童眞是の語を説く時、二千天子は不起法忍を得、萬二千の人は皆三 無上正

【七】 三本並に宮本に依て法字を加ふ。

【六】 五蘊なり。後には色受想行識と譯す。一に色とは五根五境等の有形の物質を指す。二に受とは境に對して事物を受け込む心の作用。三に想とは境に對して事物を想像する心の作用なり。四に行とは境に對して起す所の食曠等の善惡の一切の心の作用なり。五に識とは境に對して事物を了知識別する心の本體なり。【九】 三本並に宮本に依て口を舌と改む。所謂六根なり。【一〇】 我所とは我所有の略なり。

【三】 眞正に通く一切の眞理を知る無上の智慧なり。阿將多羅三藐三菩提はこの原語の音譯なり。

に通すべし。

常進法行天子の曰く、仁者當に知るべし。其れ精進とは懈怠心無し。是の故に菩薩は諸の徳本を修して厭倦せず。常に當に遵崇して八法行を志すべし。何等か八なる。六度無極・四等梵行・遊歩五通・四恩を以て群萌を救攝し、三脫門を志し、法忍を逮得し、佛慧に勸勉して樂生を開化し道意を發さしめ、權方便を導いて有爲所有の諸法を接濟す。是を八となす。八法の行を遵崇すれば應に大乘諸の慧に通すべし。

是に於て濡首は諸の正士及天子に語つて曰く、仁者、菩薩の精進を知らんと欲せば精進せずして諸通慧に至るが如し。所以は何ん。其れ翫習の者は行三界に在り。若し遵修すれば諸れを往見と謂ふ。其れ翫習者は是を謂て内と爲す。亦不翫習者は是を謂て外となす。其れ翫習者は謂く聲聞地なり、若し遵修なれば緣覺地と謂ふ。其れ翫習者は謂く衆結に在りて所行勤勞なり。若し遵修すれば謂く凡夫の法に著せず。其れ翫習者は即ち謂つて名と爲し、若し遵修なれば謂て色となす。其れ翫習なれば即ち報應と謂ひ、若し遵修なれば所見と謂ふ。其れ翫習なれば有所著と謂ひ、若し遵修なれば有所得と謂ふ。其れ翫習なれば即ち我所と謂ひ、若し遵修なれば吾身と謂ふ。其れ翫習なれば即ち慳貪と謂ひ、若し遵修なれば布施にして不想慢と謂ふ。其れ翫習なれば犯戒と謂ひ、若し遵修なれば持戒にして不想慢と謂ふ。其れ翫習なれば瞋怒と謂ひ、若し遵修なれば忍辱にして不想慢と謂ふ。其れ翫習なれば懈怠と謂ひ、若し遵修なれば精進にして不想慢と謂ふ。其れ翫習なれば亂意と謂ひ、若し遵修なれば一心にして不想慢と謂ふ。其れ翫習なれば愚癡と謂ひ、若し遵修なれば智慧にして不想慢と謂ふ。其れ翫習なれば善本ならずと謂ひ、若し遵修なれば善本に等しくして不想慢と謂ふ。其れ翫習なれば福根無しと謂ひ、若し遵修なれば徳本を殖て不想慢と謂ふ。其れ翫習なれば世俗法と謂ひ、若し遵修なれば世法を度して而して不想慢と謂ふ。其れ翫習なれば有爲法と

【三】所は不の眼ならん、宮本に依て不と改む。



ば尋いで無礙脫門に逮成せん。菩薩已に無礙脫門に逮たべば大乘諸の慧に通ずべし。

無憂施菩薩の曰く、仁者當に知るべし。其れ惡を犯す者は後に湯火を懷ふ。其れ善業を爲さば後に憂感無し。是の故に菩薩は當に善業を修すべし。其れ所作ある者は能く短を説くこと無く、興造する所ある者は悔る所無く諸の礙蓋無し。假へば衆生の愁憂して樂しまざれば則ち爲に離憂の法を講説せん。菩薩大士是くの如く行すれば則ち大乘諸の慧に通ずべし。

諸講告菩薩の曰く、惟族姓子よ、其れ士夫ありて、禁戒を奉ずる者は所願必ず獲ん。已に所願を獲れば、所獲立つ、本放逸無きに由るなり。無逸を立て已つて道品の法を具す。已に能く具に道品の法を立すれば諸の通慧禁戒の正なり。菩薩已に無逸道法に住すれば大乘諸の慧に通ずべし。

普花天子の曰く、譬へば族姓子よ、樹花の盛なる時は一切の人を饒益する所多し。菩薩の功德の本を以て自ら莊嚴するは猶樹花の茂りて、群黎を饒益するが如し。忉利天の晝之を度るに樹紛葩茂盛すれば忉利諸天敬仰せざる莫きが如し。菩薩は是の如く諸の法門を以て自ら校飾す。諸天龍神・捷耆和・世人・阿須倫・宗戴せざるなし。猶天上明月の珠の瑕穢あること無く、衆德具足するが如し。開士志性清淨にして瑕無く、德二五義顯備すれば則ち應に大乘諸の慧に通ずべし。

光華天子の曰く、譬へば族姓子よ、日は光明を出して衆冥を滅除し、終始光り現す。菩薩も是くの如く慧光慧法を具足して世に施し、諸の愚冥無明の衆生の爲に大光を顯示して自然法に導く。其れ幽闇は能く暉を蔽はず、其れ光明は能く冥を消す。徑路を導示し已つて徑路に住す。菩薩大士は其の邪徑に在るや正路を示現し、已に正路に住すれば應に大乘の諸の慧に通ずべし。

心華香天子の曰く、譬へば族姓子よ、心華の樹は其香普く薫りて周四十里其香想無し。菩薩も是くの如く、戒博開定慧解度知見之香を以て、芬と爲し三千大千世界を薫す。法の香は周遍せざるなきを以てなり。一切衆病の香即ち療愈す。假へば菩薩をして此法香を被せしむれば應に大乘諸の慧

【二五】三本並に宮本に依り議を義と改む。

喜王菩薩の曰く、假へば人有りて菩薩を罵詈誶誹謗輕易毀辱搗捶打撲する者あるも、心恨を懷かずして喜悅を加へ、善友の想を以て對者を待遇し、能く忍辱して忍力を現す。其心欣豫して其法を思惟するに何れの所か是れ罵、誰か罵者と爲らん。内空を信解して外空を疑はず。自ら己身を見、又他人を觀て歡喜悅す。便ち能く身命を惠施して體頭眼手足を支ふ。妻子男女國城丘聚、財穀珍寶倍倍復踊躍す。寧ろ一頌を聞いて世榮、轉輪王位に恬忽たり。常に樂つて人の爲に經法を講説して帝釋を羨まず。思一人を開きて道心を發さしめ、梵天を僥せず。願て如來を見て、三千大千世界に滿溢する<sup>三</sup>琦珍を食らず。生に従て明達し諸根を乏せず、諸の道品法を信樂愛敬す。是くの如く所造を悅樂する行者は則ち大乘諸の慧に通ずべし。

察無垢菩薩の曰く、假へば一切法の彼岸に度るを見て、貪身に墮せず、諸の佛土を淨む。諸佛の國皆亦清淨にして亦無想行なるを見、一切の佛色想を發さざるを見る。諸の群黎想を見るに、肉眼有りて罪福を見ると雖も淨なり。天眼を具足して無所壞なり。慧眼を得て諸の塵勞を離ると雖、佛眼を信樂し、具足して<sup>二</sup>十八不共諸佛の法を成就す、已に法眼を得て如來の十種の力を具足す。假へば菩薩被る所の德鑑信行斯くの如くなれば應に大乘諸の慧に通ずべし。

遊無際法行菩薩の曰く、族姓子よ、一切は菩薩を緣する所爲なりと知れば悉く諸の通敏慧に歸趣す。所以は何ん。諸のあらゆる一切の因縁を觀するに、内に住せず外に處せず、口外に在らず。假へば菩薩は因縁に住せず、亦塵勞に趣くの礙を御せず。亦罪福の礙に勸導せられず。報應の礙無く諸の根礙無く、諸の法礙無く、非慧の礙無し。已に罪福塵垢の魔界を度れば應に大乘諸の慧に通ずべし。

超魔見菩薩の曰く、惟族姓子よ、已に吾我に住し自ら己身を見れば便ち魔の事業に處す。已に吾我を斷じて所虚を觀ず、已に所見を除けば諸陰無し。已に諸陰を除けば魔を見ず、已に魔界を度れ

【三】三本並に宮本に依て河を琦と改む。

【二】十八不共法とは不共法に大小乘各々十八あり、如來の功德は他と異なるが故に不共と言ひ、通じては一切の功德を悉く不共法と言ふ。十八の名目は煩しければ略す。

の慧に通ずべし。

海意菩薩の曰く、菩薩の所入は當に海に入るが如くなるべし。大道を覺了す。一切の聲聞及ぶこと能はざる所なり。信樂して一法味に専心し、若干の法に入るも若干あること無し。深く妙法を觀じて未だ曾て惑亂せず。緣起の法に於て増せず減せず。諸の經典に於て若干あること無し。是れ則ち名づけて不生不起と言ふ。一切衆生起す所の業は徳本の福盡くる無きを植えず、所教無邊なり。當に分別し了りて斷滅有常の事を棄捐すべし。諸法を受けず、諸法を斷ぜず。當に志を建立して無量の器となるべし。法を忘捨せず諸の通慧を習ふ。亦法を釋て平等法を以て衆生の爲に説く。當に一切諸徳善法を習ふべし。是くの如く無數の佛法を具足し、是くの如き心を以て戒徳の鎧を被れば則ち大乘諸の慧に通ずべし。

大山菩薩の曰く、仁者當に知るべし。其れ此の乘は普く諸の世に超へ則ち佛慧と謂ふ。其の行所は不可限量に入る。是に由るが故に一切世間の志性を超度す。已に能く世間の所行を超度すれば、其の所信は俗間を過ぎれば其の所施は持戒忍辱精進一心智慧なり。亦復是くの如く、悉く能く一切世間の所有の慧を超度す。其の所造の福は世間與す所の福祚を過ぐ。則ち大乘諸の慧に通ずべし。

喜見菩薩の曰く、假へば菩薩の目視る所の色にして惡とする所無し。色之れ自然にして其心清淨なればなり。耳聽聞する所亦惡とする所無し。音聲自然にして其心清淨なればなり。鼻の香、舌の味及び身の更、心の法、六情界に於て所惡無し、其れ六情界の自然本寂にして其心清淨なればなり。其れ憎愛に於て心所著無ければ其心清淨なり。衆生の佛法に順ずる者を觀るに器として應ぜざる無し。又其の衆生の邪見に處する者も亦復之を觀るに佛法に在る器なり。其の已を愛する者、王に在る者歡喜して俗を習ひ施與する所あるも尋て復悔む者も等しく敬ふこと茲の若し。菩薩大士の所行是くの如し。則ち大乘諸の慧に通ずべし。

【三】 三本及當本に依て本文の如く改む。



戒忍辱精進一心智慧は等しきこと虚空の如くなれば則ち大乘諸の慧に通ずべし。

發意轉法輪菩薩の曰く、菩薩の意が發す所の意を發する者は發意はついに魔をして便を得しむべからず。如來をして欣樂せざらしめ、諸の天人をして悦喜せざる所ならしむる無く、徳本をして耗滅有らしめず。若し興建して道意を爲さんとする者は、隨順に誘勸して弊魔をして其便を得ざらしむべし。如來の意に順ずれば天人悦豫して己が身の造る所の徳本の所修を失はず。斯くの如く一切發意すれば則ち法輪を轉するなり。所以は何ん。其れ菩薩とは諸の所發の意は、因縁所造にして所生無く、諸法を曉了して永く所起無し。所起無しとは諸佛如來は正覺に順如して法輪を轉するなり。斯くの如く發心して戒徳の鎧を被れば則ち大乘諸の慧に通ずべし。

辯諸句菩薩の曰く、正士當に知るべし。其れ道心とは正士普く塵勞怒害有漏無漏有爲無爲に入り、亦罪不罪殃福に入り、亦善に入り不善に入る。亦世法に入り世の法を度し、亦終始無爲の爲に入り、亦斷滅有常の計に入る。亦諸陰衰入の事に入り、亦地水火風に入る。所以は何ん。此の諸の因縁は悉く自然たり。志性本淨所在の處、言説する所あるは一切の所講皆悉く空にして所有無しと爲す。譬ば虚空の入らざる所無きが如し。道心是くの如く一切普く至る。菩薩の是くの如き慧を喜樂する者は一切の文字辯才べんさいを除棄し、衆庶を分別して辯慧を逮得す。若し能く斯の一に入る聖達は則ち大乘諸の慧に通ずべし。

辯積菩薩の曰く、一切の所説は皆言あること無し。一切の音聲而かも不可得なり。菩薩、斯くの如き慧を喜樂すれば好言惡言悦ばず感へず。譬へば太山の風來りて之を吹くも尋いで復還反し、山動搖せざるが如し。菩薩は是くの如く、諸の異學一切語言に於て動かす搖がず。諸の外徑に於て亦所著無し。若しくは如來の言外徑の異語等の法、之を察して以て増減せず亦所亂無し。諸の辯才の一切法盡を見るも諸の盡法に於て自ら大を念せず、菩薩能く斯くの如き慧を行すれば則ち大乘諸

【三】三本並に菩薩本に依て大とす。

師子意菩薩の曰く、仁者當さに知るべし。無畏の鎧を被るは是れ無懼となす。誓ふ所の德鎧、無難難鎧、無罪礙鎧、無怯弱鎧、無懈怠鎧、斯れ則ち佛慧なり。是の故に行者は恐怖すべからず。無難無礙・無怯・無怠にして諸の危懼を離れ、衣毛豎せず。終始に在りて瑕穢有ること無く、亦泥洹の德を希仰せず。等しく苦樂に住して而かも二行無し。則ち大乘の慧に通ずべし。

師子步雷音菩薩の曰く、仁者當に知るべし。其れ斯の事は下才の行に非ず、則ち正士の建造する所と爲す。其れ正士とは平等に歸趣して邪見を離る。其れ正士とは其の心質朴にして諛語無し。其れ正士とは勞謙柔順にして師を尊び聖を敬ふ。其れ正士とは勸學倦まず、所受の根を究む。其れ正士とは正治を欽悦し正業を建立す。其れ正士とは若しくは所欲有るも穢法を損廢す。其れ正士とは若しくは瞋怒あるも意に結恨無し。其れ正士とは若しくは愚癡あるも幽冥を照除す。其れ正士とは寂然澹泊にして定藏に近づく。其れ正士とは一九恩惠を具足し貧厄びんやくに施し一切輒ち濟ふ。其れ正士とは身口意を護り二〇清くして靜寞なり。其れ正士とは言行相副ごうふて情性質直なり。其正士とは所志堅強にして眞諦の法を尙うぶとぶ。其れ正士とは非法を離れ親しく正典を存す。其れ正士とは法樂を樂ひ、護るに正法を以てす。其れ正士とは身命を輕忽にして衆生を釋すてず。其れ正士とは所立鏗然として善く施して義無し。其れ正士とは純じゆんら淑法を志し凶偽を消化す。其れ正士とは則ち寶藏を以て貧匱を救濟するなり。其れ正士とは則ち、良藥と爲て諸の疹疾を療するなり。其れ正士とは諸の畏懼を護り、自ら歸することを得しむ。其れ正士とは諸の邪見を導いて無崖際に至らしむ。其れ正士とは勞穢を免濟し勤むるに經典を以てす。其れ正士とは瞋怒を調忍して宜しき所に順ず。是の故に正士の法を建立するは則ち大乘諸の慧に通ずべし。

虛空藏菩薩の曰く、修するに無量虛空の慈を以てし、其の精進の行は未だ曾て大哀の行を釋廢せず、諸相悅豫して悉く踊躍を懷き、諸の愛欲の娛樂すべき所に於て察すること虛空の如く、布施持

【一九】 三本及宮本に依て施惠を惠施と改む。  
 【二〇】 宮本に清とあるに依て改む。

こと無し。衆生を以ての故に誓つて徳の鎧を被、一切を設護す。則ち吾が將濟救攝に應ずる所は須臾も精進して懈怠ならず。<sup>【五】</sup> 黎庶を教化し、速びて學を廢すること無し。斯くして則ち大乘諸の慧に通すべし。

持地菩薩の曰く、譬へば仁者は地の載する所なり、一切の衆果、百穀、藥木は地に因つて生ず。地は置かるゝ無きも亦報を求めず。群庶品類、皆地活を仰ぐ。地は辭厭せず。以て勞と爲さず。開士大士も亦當に是くの如くなるべし。發心は地の如く、心所著無し。喜怒を以て諸の黎庶に勧めず。佛慧に趣かして報を想はず、則ち大乘諸の慧に通すべし。

寶掌菩薩の曰く、仁者當に知るべし。上徳の鎧乃至佛慧を被れば能く沮敗して大乘を失ふこと無し。若しくは夢中に於ても二乗の聲聞緣覺を忘さず。常に實心諸通慧心を以て人の爲に講宣し、珍寶に於て心に貪惜する所無く愛惜する所無し。衆に大乘を勧め、誓つて徳の鎧を被、彼の所學の乘は無有の乘に非ず、増せず減ぜず、其心是くの如く欽慕する所無くんば、則ち大乘諸の慧に通すべし。

寶印手菩薩の曰く、群黎の六趣に墮墜するを親て、愍哀を發し、衆生に惠施し投くるに法手を以てす。其れ無信者には造信の手となり、其の少智の者には博聞の手となり、其慳貪なる者には惠施の手となり、其の犯戒者には禁を護るの手となり、其の瞋怒者には忍辱の手となり、其の懈怠者には精進の手となり、其の意を亂る者には一心の手となり、其の邪智なる者には智慧の手となり、而して衆生の清白法を離るるに隨つて各各に時に應じて法手を具設す。開士は斯の徳本の手を植へて三寶を印す。何をか三と謂ふ。具さに群生を佛智慧に立たしめ、勸助して寶印手に至らしむ。徳本を成じ已るは則ち寶印手なり、一切法を念するに猶虚空の如くなるは寶印手なり。興立斯くの如し、是れ則ち三と爲す。則ち大乘諸の慧に通すべし。

【五】 宋、官本に依て改む。多くの人民のこと。

【六】 三本に依て釋を失と改む。

【七】 三本、官本に依り、寶を實と改む。

【八】 明本に依て殖を植と改む。



際を盡す無きを知らんと欲せば小意思を以て大徳の鎧よろいを原ぬべからず。當さに何の方便を以てか誓つて戒徳の鎧を被て、能く茲の大乗佛乘・諸通慧乘・不可思の乘に逮ぶべき。斯れぞ道なるべきや。

龍首菩薩の曰く、功徳を積累して以て厭足せず、<sup>三</sup>休祚を建立して限量すべからず、而して戒徳の鎧を毀失せず、一切所作に希望する所無くんば則ち大乘の諸の慧に通ずべし。

龍施菩薩の曰く、普く弘く心を等しくし、其志を調和し、其性を溫潤し、其意を柔軟にし、而かも心は仁厚に、堅く正願に住し、諸の通慧に於て戒徳の鎧を被、生死を化度すれば則ち大乘諸の慧に通ずべし。

首具菩薩の曰く、計るべからざる劫に斯の大乗に趣き、戒徳の鎧を被、無數劫に於て劫數を念ぜざれば則ち大乘諸の慧に通ずべし。

首藏菩薩の曰く、其れ自ら建立して獨り己を安んずる者は能く大乘諸の通慧に逮趣せず、己の安を捨て衆生を建立し、大安をして其の所便に隨はしめ、僥冀無く、所起無く、群黎を勸進して道法に立たしむれば則ち大乘諸の慧に通ずべし。

蓮首菩薩の曰く、族姓子よ、如來の講ずる所を憶へ。假へば人有りて自ら柔順ならず、靜寂有ること無く、律教に隨はず、而かも他を調伏し靜寂ならしめんと欲して、律を以て人に勸むる者は未だ之れ有らざるなり。其の自ら調順靜寂にして律を奉じて、乃ち能く剛強憤亂を化勵し、犯禁はんぎんを抑挫すれば則ち大乘諸の慧に通ずべし。

蓮首藏菩薩の曰く、其れ<sup>三</sup>塵勞を世法に同じうする者は則ち世を度せず、其の<sup>四</sup>塵勞を世法に同じうせざる者は乃ち能く世を度す。是の故に菩薩は利あるも利無きも、若しは譽、若し毀、名あるも名なきも、若しくは苦若しくは樂なるも動かす揺がず、則ち大乘諸の慧に通ずべし。

持人菩薩の曰く、他に從つて大乘諸の通慧を致すべからざるなり。吾れは獨り一己にして侶有る

【三】 休祚とは福祿の意なり。

【三】 塵勞とは煩惱の異名なり。  
 【四】 三本並に宮本に依り、塵の字を加ふ。

# 文殊支利普超三昧經

## 卷の上

西晋 月氏三藏竺法護譯

### 正士品第一

是くの如く聞けり。一時、佛、王舍城靈鷲山に遊びたまひ、大比丘衆と俱なりき。比丘は三萬二千、菩薩は八萬四千なりき。一切の聖は達して明らかならざる所なし。開士、大士は神通已に暢び、已に總持を得て辯才無礙なり。無所著、不起法忍を得、曉了に定行して衆生心を見、所應に隨つて度し、爲に法を説く。四天王・天帝釋・梵忍天王及び餘の無數の諸天龍神・健杏和・阿須倫・加留羅・眞陀羅・摩休勒、人と非人と各百千の衆にして俱に來會せり。

その時に、濡首眞菩薩は山一面の異處の梁上に在り、二十五の正士と俱にして法を講論せり。其の名を龍首菩薩・龍施菩薩・首具菩薩・首藏菩薩・蓮首菩薩・蓮首藏菩薩・持人菩薩・持地菩薩・寶堂菩薩・寶印手菩薩・師子意菩薩・師子步雷音菩薩・虚空藏菩薩・發意轉法輪菩薩・辯諸句菩薩・辯積菩薩・海意菩薩・大山菩薩・喜見菩薩・喜王菩薩・察無圻菩薩・遊無際法行菩薩・超魔見菩薩・無憂施菩薩・諸講告菩薩と曰ひ、是れを二十五正士と爲す。兜率天上に四天子有り、俱に濡首眞眞に造り、後に於て待す。其の名は普華天子・光華天子・美香天子・常進法行天子なり。復、異の天子あり、數を計るべからず、僉然として來待す。斯くの如きの正士、諸天子等亦悉く會坐し、各各講論す。是くの如きの儔、迭いに相い謂つて曰く、仁者、佛の智慧の弘普、無限・不可思議・不可稱量にして、能く減度するも極

正士品第一

【一】 文殊支利の四字、三本並に宮本に無し。

【二】 三本並宮本には卷第一とあり、聖本には正士品第一卷上とあり。

【三】 開士とは開悟の士又は法を以て開導するの意にして菩薩の德名なり。

【四】 總持は陀羅尼の譯にして、善を持して失はず、惡をして起しめざる意なり。

【五】 不起法忍とは又、無生法忍とも言ふ。不起とは無生の意、見惑を斷じて空理を生ずるを無生法忍を得ると言ふなり。

【六】 健杏和は健達婆等と書く、樂神の名なり。

【七】 阿須倫とは阿修羅のここと、阿須羅、阿蘇羅、阿素羅などと譯す。

【八】 加留羅とは迦樓羅、揭路茶、等と譯す、金翅鳥のことなり。

【九】 眞陀羅とは緊那羅、緊陀羅、甄陀羅等と譯す、樂神の名なり。

【一〇】 摩休勒とは摩睺羅伽、莫呼洛伽等と譯す。大蟒神なり。

【一一】 大正藏には軟首とあるも、元明聖各本によつて濡首と改む。濡首とは文殊師利なり。

尙、如來の十號が丁寧に形容詞様に譯されてゐることも注意すべきであらう。即ち、

昭和七年十二月十一日

如來至眞等正覺明行成は善逝世間解無上士道法御天人師爲り、佛衆裕爲り。其他、細い譯語は未だ澤山あるが、略

四

すことにする。終りに臨み文學士岩間湛良君の勞を謝する。

譯者 布施浩 岳識



ち、菩薩藏を高調して二乗並に佛覺の乗を是を統歸せんとするのである。それは本品中にある次の如き例で知れる。

。菩薩に三藏あり、聲聞・緣覺・菩薩なり。

。菩薩法に依て三たる聲聞・緣覺・無上正眞道を生ず。

。菩薩は說法して衆生を勸化し、三乗たる聲聞・緣覺・無上正覺に處せしむ。

右の例は凡てではないが、是だけでも、一寸變つてゐる事は分らう。次は後夜の說法で、即ち不退轉輪品である。こゝにも、又、不退轉輪の説明あれど、結局は空觀で結び、變動品に移る。此品は既に朝の出來事で、先づ、文殊と迦葉との問答に始まり、文殊は大衆を率ゐて、阿闍世王殿に供養を受ける爲に赴く。時に大王は大衆供養の用意なく非常に心配すれども、文殊の神通に依て宮殿を擴張し、飲食を増設す、宴終つて、諸の菩薩は鉢を空中に投げる。然るに鉢は空中にかゝり

て落ちず。こゝに於て、大王の爲に空を説いて疑を除かんとす。次いで、決疑品に入り、文殊は空觀を高調して、大王の疑を解く。斯くして大王は文殊の言に依り、其の衣を諸の菩薩に順次に施さんとすれど、皆姿を消して受けず。遂に又、文殊に依て空觀を聞き、法忍を得。斯くして心本淨品に入り、子が母を殺す喻、及び、文殊の化作せる化子が化父母を殺す喻を説き、以て、過去心・當來心・現在

心の空なるを力説し、母を殺すとも、佛前に悔いて修行すれば沙門となるを許すと述べ、是より記別に移る。先づ阿闍世王並に其の弟子と三萬二千の天子との記を説いて、月首受決品に入り、始めに阿闍世王の太子月首の八歳なるに受決し、又佛、自から、曾て錠光佛の許にて決を得たりと述べ、轉じて舍利供養、塔供養を説き、五種法師の行を力説し、且つ又經並に持經者を佛陀なりと説いて、屬果

品に移り、先づ、彌勒菩薩に付屬し、次いで、帝釋天と阿難尊者に付屬し、阿難尊者は、末世弘法を誓つて此經は了つてゐる。

要するに、本經は全般的に言へば、般若系の立場から、諸大乘經の善い所を探り來り、般若の空を高調せんとした一種の試みと思はれる。背景を史實に取れるは、作者苦心の存する所ならんも、最後に到つて、彌勒帝釋、阿難に付屬せるに當り、餘りに末世的で、感心出來ない。然し、阿闍世王を問題にして受記する當りは、法華經以上に出やうとした苦心の跡なるを認めねばなるまい。最後に、本經中に現れたる譯例を二三摘出して參考に供しやう。先づ、五蘊を譯して、  
色像、痛痒、思想、生死、識、  
となし、又は色痛想行識とも譯してゐる。

更に法護の傳譯記録を見るに、彼は長安に定住せるに非ず、長安・洛陽・酒泉の間を歴遊してゐる。出三藏記集所載の諸記録に依り其年時處を示せば、略ほ次の如くである。

- 二六六一二七四年……………在長安
- 二七四一二七九年……………深山隱居
- 二八〇一二八七年……………在長安
- 二八一―二九〇年……………在洛陽
- 二九一―二九六年……………在酒泉
- 二九七―三〇八年……………在長安
- 三〇八……………在昆池卒

今、文殊支利普超三昧經は出三藏記集に依れば太康七年十二月二十七日出であるから、二八六年の譯出にかゝり、正法華經等と同年の長安譯出である。

本經は支婁迦讖譯出の佛說阿闍世王經や、佛說未曾有正法經、佛說放鉢經と同本異譯で、皆現存してゐる。

## 二、本經の内容

### 正士品第一

化佛品第二  
 舉鉢品第三  
 幼童品第四  
 無吾我品第五  
 總持品第六  
 三藏品第七  
 不退轉輪品第八  
 變動品第九  
 決疑品第十  
 心本淨品第十一  
 月首受決品等第十二  
 屬累品第十三

右の如き内容を有する本經は先づ正士品に於て文殊及二十五菩薩が、互に諸通慧乘に就て意見を述べ、次いで化佛品に於て、文殊は分身を化して佛世尊を現じ、菩薩行の説明をなし、空觀の立場から、菩薩行は無執著なりとか、所學無きは則ち菩薩の學なりとか、以て空觀の理論を説く。こゝに於て轉じて舉鉢品に入り、

鉢の喻を説く。即ち、佛自から、鉢を落す時、鉢は地下に落下して、照曜世界に達す。佛弟子等、命を受けて鉢を求むれども得ず。遂に文殊自ら出馬して鉢を求む。時に文殊の身を説明すること、華嚴の佛身觀に相似たるものがある。文殊の照曜世界に到るや、忍界との間に互に光明を交換し、互に能く洞見する狀を説く。文殊鉢を持って歸るや、更に飲食供養を説き、此品終る。次いで幼童品に入り、三童の古事を説きて、聲聞の救はるべきを説き、其理由として、無吾我品に於て般若の空論を高調す。こゝに於て、阿闍世王は佛を供養せんと準備にかゝるが總持品なれど、再び本品に於ては總持の理論の説明をなし、遂に又、空觀の立場より總持諸法の説明を與へてゐる。是が初夜の說法である。次いで中夜の說法に移り、三藏品は即ち是であつて、こゝに説明される、三乘は一寸風變りである。即

# 文殊支利普超三昧經解題

## 一、譯者竺法護に就て

竺法護の支那に滞在せる年數に就ては古來異説がある。經錄の多くは皆四十餘年を算へてゐるが、境野氏は支那佛教史講話(五九頁)に二十年なりとし、出三藏記集に

自太始中至懷帝永嘉二年

とあるを、傳に相違するし、又事實としても四十餘年に跨る故長すぎるので容易に信じられぬと言つてゐるが、思ふに是は法護傳中に

宣隆佛化二十餘年

とあるを感違ひしての結論であらう。

法護は、約二十年間支那に滞在せるに非ず、即ち傳に曰く、

護以晋武之末隱居深山、……後立寺

於長安青門外、精勤行道、於是德化四布、聲蓋遠近……於是四方士庶聞風嚮集宣隆佛化二十餘年、

それ故、深山隱居の後再び長安に出て、傳譯弘法に従事せること明かである。尙傳には

後值惠帝西幸長安、關中蕭條百姓流移、護與門徒避地東下、至昆池、避疾卒、春秋七十有八、

とあつて、法護は長安滞在中、惠帝の行幸に値ひし事明白である。此の年時は晋書五卷に依れば永興元年(三〇四年)十一月で、惠帝は光熙元年(三〇六年)再び洛陽に還り、懷帝即位となつてゐる。乃で惠帝の長安に留りし間は、法護に取つても地を避ける必要がなかつたと思はれる。それ故法護が地を避けて東下せるは

三〇八年頃と見れば大差は無い。そして深山隱居は晋武末年なる故二七四年で、是れ已前、既に長安に来てゐたのであるから、法護の始めて支那に入りしはそれ已前でなければならぬ。然る時は法護の傳記のみに依るも其の在支年限は二七四—三〇八年で、三十五年間となり、而かも是は最少限度である。

加之、出三藏記集七、須眞天子經記には

太始二年十一月八日於長安青門內白馬寺中、天竺菩薩曇摩羅察、口授出之、

と明記してゐる。太始二年は二六六年である。それ故、二六六—三〇八年迄は少くとも在支せること明白で、其間實に四十三年間である。而かも此の年限は最少限度であるから、是已上になるとも、已下とはならぬものである。故に境野氏の二十年説はとんでもない誤りなるを知べきである。



を作すも、影像、幻夢、陽焰、響聲、太虛空等、自在ならざるなり。無相無願無作離欲寂滅涅槃、彼虛妄等は增長成就し、所有事を作して深き山谷に入りて、多くの人衆有りて各大聲を發す、諸の影像乃至虛空を呼ぶに彼は聲を出已つて没して現さず、彼空谷に於て染著する所無し、彼の時に衆人は是の聲の處を求め了つて得べからず、是の如き一切の煩惱等は實の如く之を求めて亦得べからず、彼の陽焰、動搖して水に似たるも而も飲むべからざるが如し。是の如き響聲陽焰は形像無し。

爾の時に衆中の未だ法を證せざる者は此説を聞き已つて皆法を證することを得たり。二十億那由他の諸の天及び人有りて皆悉く一切の法中に染著する所無きを得たり。

爾の時に、虛空に還復聲を出せり、諸の天人衆は皆悉く見聞せり。此は唯名字なり、所謂影等乃至虛妄影像等なり。影像幻化は其所聞有り。如來解釋して先に於て證を作せり。二十億の諸天人等有りて此の法を聞き已つて皆決定を得ん阿耨多羅三藐三菩提中に住して當に諸の衆生を成熟せん爲の故に、之が友となれり。

爾の時に聞持菩薩、佛に白して言く。世尊、當に何とか此法本を名くべきや。我等、云何が受持せん。佛言はく。此法本は諸罪無相惡捨と名く。是の如く受持すれば如來は自在なり、是の如きの持を無所有菩薩の所問と名づけ、是くの如きの持を佛の大神通を説くと名づけ、是くの如きの持を、惡心難調怨讐の悔過と名づけ、是くの如きの持を、無所有法可示現者と名づけ、是くの如きの持を、非不見一切諸法と名づけ、是くの如き持と名づく。佛、此縁を説きし時、其の無所有菩薩及び難調怨讐、聞持菩薩、及び彼の大衆なる天人阿修羅、乾闥婆等、佛の所説を聞き、歡喜して奉行せり。

本性の體眞實なり、所有無く、證すべき無く、識る所無し。是の如く知り已つて知ること無きが故なり。是の如し是の如し。彼は何處に從つて有るも名字を作すべからず。

爾の時に上虚空に於て九無價の寶有りて其間に遍滿せり。菩薩有りて滅及び無出生菩薩と名く。佛に白して言はく。世尊、是れ何の瑞相ぞや。此無價の寶、虚空に遍滿せり。佛言はく。善男子等、若干の菩薩等有りて、此の證すべき所無き法門を聞いて出難を得已つて、皆悉く已に無生法忍を得るが故に此相を現ざるなり。

爾の時に彼の諸の一切の大衆は皆佛に白して言く。希有なり世尊、善巧にして能く巧方便智を學するは諸の衆生を解脱せんと欲するが爲の故なり。世尊、乃し、能く知りぬ、此の一切は無動空無所有なり、衆生有ること無く本性寂靜なり。然るに今如來は諸の衆生の爲に諸法一切は影の如しと辯説し而して能く勤勞して衆生を教化せり。佛言はく。是の如し是の如し、諸の善男子、汝の所説の如し。諸の善男子、若し辯説無くんば云何が能く、影像、幻夢、陽焰、響聲及び虚空、無相、無願、無作、離欲涅槃の法を知りて虚妄影像等の法と爲さむ。

爾の時に佛の威神力を以ての故に上虚空に於て是の如くの聲を聞けり。世尊、何者か是れ彼の影、形を影とやせん。世尊、何者か彼、乃至虚妄にして影形とや爲さん。世尊此の一切は莊嚴已に具足し法本は莊嚴を假らず。世尊、譬へば畫師若くは畫弟子が善く技能を學んで如來像を畫き衆相を具足して缺少する所無く、更に金巧師有りて最勝金を取りて其金鑿を作りて頂上に著け、然して後、形像は倍して更に端正なり。爲に一切の衆は之を瞻て厭く無きが如し。世尊、是の如し是の如し。此、法本のきは諸相を具足して之を瞻るも厭なし。世尊、今は更に倍して莊嚴せり。此語を説き已りて、時に佛は彼の虚空の聲に告げて言はく。譬へば巧學幻化の師の如し。若し幻の弟子、幻化を善くし、男子の端正可喜なるを幻作し、諸根具足して皆共に和合し、もつて子息を生み爲に名字

【九】無價とは金錢を以て賤ひ得ざる程貴重のもの意なり。

く是の如く證せば、此經中の説の如く、彼等、皆經に、諸佛の所説ある、所有の諸の文字、所説の諸法を知る。若し此經を聞かば、則ち文字を離る。諸法は文字を離れたるに文字を以て説法す。文字は是れ法に非ず、亦復た非法にも非ず。彼等は此經に於て菩提中に住し、彼等は此に於て、世間の最名聞を求めん。

爾の時に爾時無有出生菩薩は此偈を説き已つて世尊を頂禮し右遶三匝し即ち佛前に於て没して現いづす。

爾の時に衆中に一菩薩有りて無所續と名く。世尊に白して言く。世尊、此爾時無有出生菩薩は何より來るや。佛言はく。如所より來り還また、是の如く去る。彼の菩薩言はく、世尊、彼云何んが來り、云何が去るや。佛言はく。影、幻、夢、焰、響、虚空の如く、空無相、無願無作なり。離欲寂滅無實無像なり。是の如き等の聚分別して遣來す。汝今我に語つて一切を生ず、一切の衆生一切の菩薩一切の諸佛は亦影幻夢焰焰響虚空の如く空、無相無願無作なり、離欲寂滅涅槃無實なり、彼等所有の一切の果報及び彼の名字、彼等は皆是れ我等の爲す所なり。彼等及び我一切は一に非ず二に非ず、多に非ず少に非ず亦、物有るに非ず、聞くべからず、共に具足せず、能く見る者有ることなし、能く知る者無し、能く聞く者無し。是の故に汝等我に従つて等く聽き信解し思惟し歡喜し善と稱す。彼等は無量阿僧祇數に無實を行じ已つて皆不可得なり、汝等も亦不可得なり、汝等は虚妄を以て我等を誹謗すること莫れ、我を毀害すること莫れ、我等は已に物有ること無し、無相にして處所有ること無し、他の爲に何ぞ假に説を須ひん、寧ぞ勝を説かさらむ、若し説く有れば、彼は還つて是れ彼の如く、此は還つて是れ、此の如し。是の如く遣し、是の如く説き已り、是の如く來れるなり。

爾の時に、大衆は是の如き句義を聞くを得已つて色心無く出入の息無く、物に染著無し、彼等は世尊の所に於て一切の樂具皆悉く遍滿せり。彼等は本念を得已て、是の如きの言を作す、此は是れ

【二〇】 三本に依り、文字を亦復に改む。



聲は一聲、一聲は一切聲なるべし。諸聲は等しく和合なり。此經に於て覺悟する所有の諸

心者、衆生の思覺する所なる計我の所思者、一切心の因る所、一切皆、能く知る。是等の諸

の思覺は、彼に思處有ることなし。此經に於て覺悟し、亦思有ること無ければ、自及び他に

於て、一切悉く能く知る、心所轉の行の如く、諸法を照すこと鏡の如し。此の修多羅を説け

ば、彼此に於て等見し、彼等は還つて此を覺る。一切は一たるに非ず、別に多説を見ず、一

切の反句離る。若し此經を見て、彼、衆生の爲に説かば、衆生は此彼に非ずして、彼の衆生

をして住著不動處を脱し、一切の虚妄なるを知らしむ。虚妄説を爲すを以てなり。既に虚

妄を知り已れば、虚妄の中に著せず、所生の道有ることなし。諸佛は一切を見れば、此に於

て覺らざるなし。能く此經を覺らば、一切の功業處、呪術醫方の智、及び時智の生ずる所は、

皆此經の覺悟にして一切は一切智なり、所有、數ふべからず。彼は一切を次第に此經に於て

悉く知る。一切に見捨し已つて、衆生の迷惑する所は、若し此經を知れば、彼の名字と衆生

の著に著せずして、彼相に覆ふ所の者を脱せしむ。此經の威力の故に、中に於て實證を得。

若し此經を學せば、彼は一切の報を得。天中及び人中の、一切の功徳を具す。此は是れ教

師の法なり。此は即ち是れ父母なり。和上阿闍梨なり。亦是れ善知識なり。此れ知足

少欲にして、諸の頭陀を具足す、此の修する所の資財は、皆、彼の爲に當に作るべし。若し大

衆生有りて、多種の法を説かんと欲せば、彼はまさに此經を學し、一切法處を學ぶべし。若

し、大衆生有りて、多種の法を説かんと欲せば、彼れ應に此經の一切法持の處を學すべし。

生處に皆當に少病にして壽命を長するを得、常に諸の禪定を得べし。此經に隨順し已れば、

身は常に安樂を受け、心も亦常樂を得。若し此經を證せば、口業は悉く具足す。是の如く

差別法に、彼當に隨順するを得べし。若し能く此經を證せば、即ち諸經を總持す。若し能

字を和合して、復た是の如き義を説くも所有、見る可き無く、亦、當に觸るべき無し。無二にして取るべからず、無餘にして見るべからず。不可説にして而も説く、法教は比有ること無し。

爾の時に闍那那修多女は生疑菩薩に告げて言く。善男子、汝は誰の力を承けて能く此偈を説けるや。彼即ち答へて言く。我身は是の如く、無所有菩薩の身中よりは是の聲出るを知る。善姉、當に知るべし、今、此の偈聲は我身より出るに非ず。

爾の時に闍那那修多女は佛に白して言く。希有なり。世尊、是の無所有菩薩は乃し能く不思議の法を得るに至て皆已に具足せり。能く種種の方便を以て開示し彼の無所有の處にて説法せり。佛、彼に告げて言く。是の如し是の如し。善女人よ汝が所説の如し。

爾の時に兩時無有出生菩薩は佛に向して言く。世尊、我れ能く無所有所問の修多羅を辯説せん。佛言はく。兩時無有出生菩薩、汝今爲に諸の菩薩摩訶薩の境界を辯説せよ、廣き境界は礙無く、得べき無く、無邊にして畔際無く、多聞を發起して利益を興ふるが故なり。善巧智を以て諸の菩薩摩訶薩の如く自ら境界の増長を爲し、著無く可得の處無く、邊無く、畔際處無く、諸に多聞利益し善巧の方便法中に於て教へて處を開現し建立せしめんと欲するが故なり。當に速に菩提の道を成就すべきが故なり。

爾の時に兩時無有出生菩薩摩訶薩は偈を説いて言く。

善く此經を説き已つて、正念にして禪定に入り、當に一切法を覺るべし。此經典を顯示して

一切義及び如文字等を覺らしむ。所有の修多羅、諸佛の所説は一切義を顯現せん。彼此皆

相見るに、無量不思議なり。諸經に善説せる處、此の經の法を知り已つて、義と文字に莊嚴

し、諸法缺少無けん。一切不思議、陰界諸入等、當に方便智を得て、十二緣に隨順し、一切

【二七】 三本に依り、皆を諸と改む。

諸幻を覺り已に證し已に觸せり、此善男子は即ち是れ幻師なり。是の故に此等は取量すべからざるなり。

爾の時に、世尊は彼大衆に無所有を以て法義に和合せしめ、教化し言説して、歡喜を得しめ、威神を得しめて、教化を増長し、歡喜せしめ已つて歡めて言く。汝等、各目に時を知り其所至に還れ、と。時に諸の人衆は各本處に還れり。其の去ること未だ久しからずして一菩薩あり、名けて生疑と曰ふ。而して佛に白して言く。世尊、其無所有菩薩は能く此等の衆生の爲に神通を以て化し還舊またの如くならしめて、彼の諸の衆生等に愛別離有らしめず。世尊、此等は當に何等の利益を作すべき、佛は生疑菩薩に告げて言はく。善男子、此の諸人等、所在の處にて、此諸女の會つて根を轉ぜし者と共に語言し飲食し共に相娛樂し遊行し戲樂し、種々の諸事に、種種方便して彼の時處に於て此衆人をして菩提の中に於て、發心を得て、佛法の中に近づくかしむ。何を以ての故に、善男子、此無所有菩薩は已に往昔諸の如來の所に於て、一切の樂具を以て供養し尊重し諸の善根を種えて皆已に具足し、是の如き願を發せり。是の故に願滿ちて分別の意を滿せり。此善子は是の如く衆生を教化し成熟して、教へて義に於て文字の中に入らしむ。所有の法體、無生の處、無成就の處に入らしめ覺らしめ、是の如き教中に失有ること無からしむ。佛法を成熟することを得せしむるが故なり。善男子、此無所有菩薩は衆生を教化して、彼の中の者に於て、一衆生として當に惡趣ナクに向ふべき無し、一衆生として所教の師の過去の佛土に於て、中に生ぜざる無し。善男子、彼の諸の衆生は還つて當に是の如き菩提を成就すべきこと亦今、無所有菩薩の成就せる所の者の如し。

爾の時に生疑菩薩は、佛世尊に従つて善説を聞き已つて諸の疑惑を除き、而して偈を説いて言く。衆生、聞き已つて、中に於いて得て方便して健に修習するを學ぶ。無所有者と名くる者は純直にして心、柔和に愼意にして嫉妬無く、亦法弱有ること無し。無所有者と名くる者は多文

【二〇】惡趣とは、衆生惡業の因を以て趣く所にして地獄、餓鬼、畜生等なり。



即ち起つて合掌し、善哉を三稱して白して言はく。世尊、是は誰の神力なるや、是は菩薩無所有の力と爲すや、當に是れ佛の威神の力と爲すや。佛は王に告げて言はく。大王、當に知るべし、此は是れ諸女の往昔の願力なり。彼は往昔に、多くの千佛に於いて、此諸女をして諸の善根を種え菩提心を發して、諸佛の法中にて成就することを得しめたり。故に今我が所にて其願を滿すを得たるなり。大王、諸の女人は未來世に於て亦更に無量の諸女を教化して女身を轉ずることを得る有らむ。

爾の時に佛は無所有菩薩に告げて言はく。善男子、汝今此衆人の爲に、此諸女をして各本身に復せしむべし、と。爾の時に無所有菩薩、是の如き言を作せり。我れ實に説ける如く、我は無量無邊の婦女に於て、女身を轉じて丈夫身を得せしめたり。皆是れ實なるが故に此等の衆生は還つて女身に復せむと。是の語を説きし時、多く婦女有りて彼の丈夫の前に於て、是くの如き形有り、是の如き色有り、是の如き行に住して、還つて先きに向來せる者の如くに復せり。彼等各各相共に言説すること前の如く異ること無し。彼時に諸女及び頻婆娑羅王等は希有の心を生ぜり。云何が諸女は已に女身を轉じ、今已に還女人の身に復するや。此諸の女人は是れ實身と爲すや。當に化の起と爲すべきや、と。佛言はく。大王、此等の婦女は實に非ず化に非ず。所以はいかん。大王よ此善男子は往昔の時に於て是の如き願有りき。若し諸の婦人、我身を見れば、彼は我身を見て即ち是の願を發して女身を轉ずるを求めむ。彼の諸の婦人の所有の夫主は更に餘婦を取りて還つて復た是の如く、不増不減にして前の婦身の可愛端正にして相離別せざるが如くならん、と。

爾の時に頻婆娑羅王は佛に白して言はく。希有なり、世尊、諸の菩薩摩訶薩等は能く是の如き神通善根有り。世尊、一切の諸法は思議す可からず、衆生の果報も思議す可からず。禪定を得たる者の定の境界も思議す可からざるなり。佛言はく。是の如し是の如し、大王、是の如し是の如し、大王、此に三種の思議す可からざる有り。何をか三となす。業幻、量幻なり（梵本少）此善男子は已に

【五】 禪定とは、禪は靜慮にして心、體、寂靜に保て養慮することにて、定は三昧にして心を一境に定止して散動を離るゝことなり。

り。彼大衆も亦皆坐せり。時に頻婆娑羅王は佛に白して言く。世尊、我に少女有り、衆の侍女と與に園林に出遊して久くし乃ち還らず。後に園中に於て求覓するも得ず、又世尊の所に向へり、と説く有るを聞く。今此衆に於て我復た見ず。佛大王に告げたまはく。今、會せり、當に見るべし。王言く。世尊、我今未だ見ず。佛言はく。大王よ汝今無所有菩薩に問ふべし。當に王に處を示すべし。王言く。世尊其の無所有菩薩とは何者か是なりや。時に世尊、無所有菩薩に告げて言はく。汝無所有、汝今應さに頻婆娑羅王所問の諸女行來の處を報じて此衆をして知らしむべし、と。

爾の時に無所有菩薩は身を現はさずして、頻婆娑羅王及び大衆に告げて言く。大王、當に知るべし。彼の諸女等は此衆の中に在り。王言く。大士、我但、聲を聞きて汝の形を見ず。菩薩告げて言く。大王、今、所有の諸女は我名を聞きて、一一の婦女は樹下に至つて皆我身を取りて意に隨つて娛樂し我身を取り已つて皆女身を捨て、丈夫身を受けたり。彼等諸女は既に我身を取りて丈夫身を成せば、我れ則ち身無きなり、と。然るに無所有菩薩は彼の諸女の丈夫身の者に告げて言く。汝善男子、各各自身の徳を示現せよ、と。爾の時に諸女の男身を得たる者は共に一處に集りて丈夫相を具し端正にして喜ぶべし、是の如き言を作せり。我等今は女身を捨て已つて是の如き丈夫の身を成ぜり、と。爾の時に頻婆娑羅王及び諸の大衆は疑を生じて信ぜず。

爾の時に無所有菩薩は復た是の言を作せり。大王及び諸の人衆は何故に猶、疑惑を懷くや。王は今佛を豈に信すべからざるや。若し信すべくば、如來は現前せり。王今宜く問ふべし。此善男子の是の如き所説は異有りや不や、と。

爾の時に頻婆娑羅王は佛に白して言く。世尊、是の如し是の如し、虚空聲の所説の如くなりやいなや、而も身を見ざるや。爾の時に佛は頻婆娑羅王に告げて言はく。是の如し是の如し。大王、皆悉く此の菩薩の所説の如し。大王、今は宜く此語を信じ疑惑を生ずること莫れ。王は此語を聞きて

佛言はく。善哉、善哉、善男子等、汝今一切、善く此法を説けり。

爾の時に海姉妹は佛に白して言く。世尊、此無所有菩薩は起たず亦此の如き等を説かさらむ。善男子善女人等は、此法本を説き當に光顯すべきが故なり。世尊、彼は當に正法を受持し、亦一切の現在過去未來の諸佛の法行を爲すべし。彼は亦受持し讀誦し通利し、亦他人をして讀誦通利せしめ、教のごとく知らしめむ。

爾の時に無所有菩薩摩訶薩は海姉妹に告げて言はく。阿僧祇百千劫の中を過ぎて、彼時に劫有り、名けて法寶開敷と曰ひ、彼劫中に於て満足して五日の諸佛出世す、時に一佛有りて、最初に出世し難降幢如來、應供、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調禦丈夫、天人師、佛世尊、と名く。彼時中に於て亦復た多くの衆生有りて煩惱濁の中に住し、業障の覆ふ所となり煩惱、増上し、貪欲、恚礙の諸惱、増上して毒を含みて惱せらる。

善女人よ、爾の時に彼の難降幢佛如來應供正遍知に、我れ爾の時に於て亦是の如く問ひ、彼の佛如來は亦是の如く解釋せむ。今の世尊釋迦牟尼如來應供正遍知の解釋する所の如し。善女人、是の如く次第して五千の諸佛に亦是の如く、此の如き法本を問はむ。彼諸の世尊も亦復た我が爲に是の如く解説せむ。今の世尊釋迦牟尼の如く諸釋中の王は我が爲に解説せむ。善姉よ汝、今、意を安んぜよ、善姉我今より已に未來世に於て當に無量阿僧祇數の諸佛世尊に於て亦當に是の如く此法本を問ふべし。所有是の如き諸の佛刹中にも亦諸濁、煩惱の衆生有り、或は少き者有り、或は復た倍して多なる煩惱有る者あればなり。

爾の時に無所有菩薩摩訶薩の是の語を説きし時、刹那の頃あひたに於て、彼摩伽陀の主たる頻婆娑羅王は大勢力の四兵圍遶する有つて次第に漸行せり。彼の諸女所行の處を尋ねて佛所に來詣し佛所に到つて佛足を頂禮し却つて一面に住せり。佛を慰勞し已つて所敷の具に隨つて而して其坐に就け

【三】頻婆娑羅(Bimbisara)は佛在世時代、摩伽陀國王たりし人。

【四】四兵とは、象兵、馬兵、車兵、歩兵なり。



爾の時に世尊は長老阿難に告げたまはく、汝此の無所有の所問を受持せよ、我今說法して廣く人の爲に説いて此法を光顯せり。阿難、汝は何等の衆生をして當に此法本を聞かしむるの者となれ。彼等は聞き已つて能く廣く義を解して文句を莊嚴せん。彼等は皆當さに阿耨多羅三藐三菩提を決定すべし。若し聞くを得て而も義を解せずと雖も、後に於て漸次に亦當さに是の如く其の義趣を解し修行し觸證して多くの百千那由他數の諸の如來の所に於て諸の善根を種ゆべし。所以はいかん、其れ無所有菩薩に是の如き願有ればなり。

爾の時に衆中に諸女等有りて大乘に住せり、而して佛に白して言さく。世尊、何用ありて阿難に此法を受持することを勸請するや。所以はいかん。我今已に此の如く法本を受け習誦し通利せり。世尊、我今此法本を聞き未來世に於て當さに他の爲に説き阿僧祇百千那由他劫の中に於て此法を光顯すべければなり。

爾の時に衆中に百の比丘六百の比丘尼、二百の優婆塞、優婆夷有りき、復た那由他數の諸天子等有りき、諸の雜華を以て世尊に散じ已つて是の如き言を作せり。世尊、此<sup>三</sup>修多羅は而も能く一切を照明して、實の如く顯示す。世尊、我今此法本を聞くを得已つて即ち能く受持し讀誦し通利せり。猶、明鏡に其面像を見るが如し、是の如し是の如し、我等は此法本を受持し已れり、是の故に世尊よ、我等は今及び未來世に於て此の如き法本を阿僧祇那由他劫に於て廣く人の爲に説いて是の行を光顯し、當さに證覺せしむべし。諸の衆生の爲に我等は是の如き利益を知らしめむ。我は菩提に住せり。云何してか當に諸の衆生の爲にも作すべき。一切の利益は佛法に具するが故なり。世尊、我等は利養及び名聞等を貪らずして此法を受けて衆生の爲に説き、亦復、己自の生命の爲にせず、但一切の諸の衆生等の爲めにす、一切の衆生と與に諸樂を具せむと欲するが故なり。諸佛の法に近かしめむと欲するが故なり。無量の諸の衆生等に於て愛著の諸の煩惱を除滅せんとするが故なりと。

【三】修多羅(Sutra)は經のこと。

虚妄と非虚妄と、虚妄と虚妄の愛とを實の如く此等を知る。是の故に皆投記せらる。我等は是の如く、一切は皆虚妄なるを知つて、今丈夫身を得て、我等は皆具足せり。我は虚妄を聞き已つて、知解して疑を生ぜず。是の如く虚妄に還りて實には知説有ること無し、實無き無實の中に、諸の衆生を誘誑す。無實を知らざるが故なり。無所有の教説は、中に於て滅する所無し、亦増益有ること無し。中に於て示現無し。但假名を以て説くのみ、平等にして危険無し、説きて散處有ること無く、既に等等有ること無し。何かに沉んや勝者有らんや。其色は色形に似たり。其色は色を色とするが故なり。若し色の虚妄なるを知れば、實とすべき者有ること無し。受は觸形に似たり、受を以ての故に受を爲す。受の虚妄なるを知り已れば、彼に實とすべきこと有ること無し。想が欲想たれば、其識は想を以て現はる。想の虚妄なるを知り已れば、彼に眞實處無し。諸行に自在なし、假名示現の行なるのみ、諸行の虚妄なるを知れば彼に眞實有ること無し。識は了知を以て義となす。是故に現識を示すも若し識の虚妄なるを知れば、恒常に虚空の如し。是の如く皆虚妄なり、所有り世は憂愁なり。彼の愚輩は知らず。我見に住するを以ての故なり。彼等に所安無し。彼等に所遣無し。彼に住處有ること無し。愚輩は而かも知らず、此法は知り易からず、寂滅の句は解し難し。懈怠、我想に住し、惡作の爲に覆はれて、無所有を見ず、彼の所説を聞かず、所として説くべきの處無く、中に於て置く所無し。

爾の時に諸女の男身に轉ざる者は此偈を説きて、佛を供養せんが故に 五體を地に投じて佛足を頂禮し、而して偈を説いて言はく。

南無最大力、一切世無上、世尊は大恩有します、其れ等にして所著無し。

此偈を説き已つて世尊を禮敬し合掌し而して住せり。

【二】五體を地に投ずとは兩肘、兩膝、頂の五を以てする最上の敬禮なり。即ち先づ正しく立已て合掌し右手を以て衣をかかげ兩膝を屈し已て次に兩肘を屈し手を以て足を承げ然して後に頂禮するなり。

行想を起す。略して説くに、乃至、受想行識中にも是の如く作すこと、色の所作の如し。虚空識の如く我識も亦爾なり、彼識の如く如來識も亦爾なり、如來識の如く彼識、一切衆生識も亦爾なり、一切衆生識の如く彼識一切樹林藥草識も亦然なり、一切樹林藥草識の如く一切界の和合識も亦爾なり。其の虚空識及び我識、如來一切衆生識、一切樹林藥草識、一切界和合識は二相無く、知るべからず、分別すべからず、生無く、等等無く、行無く、名字を作すべからず、法に非ず非法に非ず、法界に非ず非法界の所攝に非ず、虚空に非ず非虚空に非ざるなり。衆生は愚癡にして覺らず知らず、無智、少智、少聞にして、嫉妬、慳貪、惑著あり、嫉妬は結縛し、無明の網覆ひて惡知識の所攝となれる者は各自に迷惑す。是の法を聞かんと欲するも障礙を作して受持讀誦修行して觸證有る能はず。諸の菩薩は善巧智慧有つて住著する所無ければ一切法に於て法想を得ず、何に況んや餘想をや。彼等は能く此行中に於て行じ、諸の小智等は此法行所に於て知る能はざるなり。此の五種の色等の平等を説かば諸行を出離して壞散有ること無く別法無し、と。時に大地震動して虚空に華雨ふりれり。

爾の時に、難調菩薩摩訶薩は佛に白して言く。世尊、何の因、何の緣にて虚空に華を雨らすや。佛、難調菩薩摩訶薩に告げて言はく。善男子、此は是れ彼の五陰は空にして二無く別無く、所住有ること無く、言説すべき無く、藏積有ること無く散壞有ること無く、邊量有ること無く、顛倒を樂しまざるを説くに依てなり。是の諸佛自在處を説けるの時、百千億那由他數の諸天有りて皆無生法忍を得たり。此衆中に於て諸の比丘、比丘尼、優婆塞優婆夷等五千人等は皆亦無生法忍を得たり。未來世に於て當に作佛するを得て、號を不可說陰聚所生如來應供正遍知と曰ひ、當に世に出でて、劫を無住と名け、此因緣を以つて大地震動し衆華を雨らすん。

爾の時に女人の男身を得たる者皆共に同聲に偈を説いて言く。」

【二〇】宋元明三本及宮本に依りて解を觸と改む。



爾の時に彼の諸の菩薩摩訶薩は心に是の念を作せり。所有の身は五陰の聚合なり、名字を以て所説し聞く可きこと有るを得べからず。我等は云何して能く彼と共に善根を種えん、と。

爾の時に世尊は彼の菩薩の心の所念を知ろしめして、無所有菩薩摩訶薩に告げて言はく。善男子、汝今應さに此の諸の菩薩摩訶薩等の爲に五陰衆、和合身の事を説くべし。此等は聞き已つて當に我見を壞すべし、更に復た當さに佛菩提に近くべし。

爾の時に衆中に一菩薩有りて名けて愛語と曰ふ。佛に白して曰く。世尊、今は何の事を見るが故に如來阿羅訶三藐三佛陀は自ら解釋せずして而も當に彼の無所有菩薩に解釋を勸むるや。佛言はく。善男子、此衆は是の如く無所有に長夜に隨順し流注し歸向せり、是の故に我今此菩薩摩訶薩に説くことを勸むるなり。

爾の時に無所有菩薩は佛に白して言く。世尊、我今、我が所見の如く説かんと欲す。佛の色は空なる如く我が色も亦爾なり、佛の色しよくの如く一切衆生の色も亦爾なり。衆生の色の如く一切の樹林、藥草の色も亦爾なり。彼の一切界の和合聚の色も亦爾なり。所有の空色及び我の色、如來の色及び一切衆生の色、一切の樹林藥草等の色、一切界の和合聚の色は二相有ること無し、知無く、動なく、生無く、等なく、等等有ること無し、行無く、説無く、法に非ず、非法に非ず、法界に非ず、法界の所攝ならざるに非ず、空に非ず、非空に非ず。衆生は愚癡にして知らざるなり覺らざるなり。虚妄、貪著、慳慳、嫉妬あり。虚妄の毒箭を抜き出すこと能はず、慳妬中に於て恩義を忘失し、無明の網、覆ひて善知識を遠ざけ、多く疑惑有りて是の如き法に於て聽受すること能はずして當さに障礙を作すべし。受持讀誦修行して觸證有る能はず。諸の菩薩は智慧善巧有りて猶虚空の如く所著無ければ、諸の世間の所有法中に於て法想を得ず、況んや復餘想をや、彼等は能く此法行に入る。諸の少智の者は無色中に於て是の想を作し、希望して此法行の中に入らんと欲して、無色中に於て妄りに

【七】五陰とは色、受、想、行、識なり。色は肉體、受等の四は精神作用なり。

【八】無明(Avidya)とは諸法の事理を照了する明なき闇鈍の心を云ふ。

【九】元明兩本に依り、掃を希と改む。

養を皆悉く捨て已るも彼等衆生は値遇を得ること難し、彼等衆生は未だ辨ぜざる所あり、若し是善知識を得ずんば、唯如來を除きて、我等は別の善知識に無所有菩薩摩訶薩の如き者有ること無し。

爾の時に無所有菩薩摩訶薩は諸の女人の男身に轉ぜし者に告ぐ、善男子等、我今、但獨り汝等の爲に善知識を作るに非ず。我亦一切衆生の爲に善知識と作る。善男子等、若し衆生有りて能く無所有菩薩は衆生の爲に利益成就を作すを知らば、彼等衆生は更に諸の餘の師友に承事せざれ。彼等衆生は即ち飲食を忘れ、疑退を生ぜず愛欲有ること無くして我が所に於て晝夜に親近せよ、所以はいかん。我今、一切衆生に善根を和合するを教へ、一切世間出世具足の中に住せしめ、無量の彼羅蜜中に入らしめ、一切の諸の功德中に入らしめ、無濁・無障・無顛倒處に住せしめて、一切の諸の有相中に現ぜずして無行處に住し、一切の身心熏習具足の法中に樂修せしむればなり。我已に會て無量の衆生をして是の法の如き善巧智の中に住せしめたり。我今實に語つて異言有ること無し。佛自ら證知したまひ諸天世人はもつて證明を作す、と。佛言はく、善男子、是の如し是の如し、汝の所言の如し、と。爾の時に大衆は佛の神力の故に即ち東方南西北方に千の諸佛有るを見たり。

爾の時に世尊、諸の大衆に告げて是の如き言を作したまふ。諸善男子、汝今此諸佛を見たりやいなや。彼言く。世尊、我等は皆佛を見たり。佛復た告げて言はく。此等は已に諸の善男子をして是の如き阿耨多羅三藐三菩提を成熟せしめたり。彼等は復た更に歡喜踊躍して是の如き言を作せり。世尊、我等は今世に現れて女身を轉じて男身を得たり、世尊、是の故に我今深く此事を信じ、此事を解知し、此事を念持して疑惑有ること無し。世尊、我今已に佛の大神通に入るを得たり、漸次にして少分なるも、皆是れ無所有菩薩の神通力に由るが故なり。願くば我當に諸佛の神通を皆悉く開現するを得む。願くば當に共に此の諸佛の所に於て諸の善根を種えて、當に一切の功德具足するを得む。

【六】 宋本元本に依りて辨を辨と改む。

願くば我當に是の如き妙身を得む、染著有ること無く、染著の處無き此の如き佛身は寂靜にして無惱なり。彼の諸の女人は是の語を説きし時、彼の諸の女人は悉く女身を轉じて丈夫身を得たり。唯往昔是の無所有菩薩等を供養して乃ち道場に至り然る後に我れ當さに女身を轉すべしと、發願せる者を除く。是の如きを以ての故に女身を轉ぜざればなり。所有、身を轉じて男身を得たる者は端正にして喜ぶべく世間、天、人は皆悉く愛敬す。

爾の時に佛の像忽然として現さず、唯世尊釋迦牟尼を見るのみ。爾の時に諸女の男身を得たる者は佛に白して言く。希有なり、世尊、甚だ奇なり甚だ特なり、乃ち是の如く幻化の戲者有るを未だ曾て聞かず。諸の凡夫等は心意迷惑し未だ曾て安定せず、油輪を壓するが如し。彼は住して善知識に近くこと能はず。世尊、若し善知識に親近して供養し承事する者有れば、善知識の威神力を以ての故に我今轉じて女身を離れて五神通を得ん。世尊我今往昔を憶念するに多くの千佛所にて善知識と與に同く善根を種え自ら身命を捨て、我等は諸の善根を生ぜしめんが爲に、復、彼等に諸佛世尊は示して在家の諸の過患の事を説き、方便して出家の功德、諸の勝妙の事を讚歎せり。我等は已に爾許の多事を経て善知識に近づき、爾れ從已來未だ曾つて諸の惡趣の中に生ぜず、我過去に於て未だ教師の我に教示するに逢はざるが故に、恒常に人天に流轉、馳逐して諸の苦惱を受けたり。世尊、我今假使能く恒河沙等の諸世界中を以て用つて七寶を滿し、或は已に自身に具足し滿じ已つて善知識に施すも、是の事を作すと雖も、猶、善知識の恩に報ずること能はざるなり、所以はいかん。是の神力に由つて、我等をして當に世間に於て作佛することを得しむればなり。我等の佛利を開現し成就するは皆此等の善知識に因るが故なり、我等を教示し諸佛の所に詣り諸の善根を種え、種々の疾利の方便を教行し、我等をして深法の行中に入らしむるに、或は愛語を出し、或は訶責を示し、或は清涼を言ひ、或は熱惱を説き、或は逼迫有り。是の如く教示せり。一切の樂具、一切の供

【四】恒河沙とは恒河の沙のことにして數の無量なるを譬ふるに用ふ。

【五】佛利(Buddhakeśana)は佛土、佛國なり。



爾の時に世尊は無所有菩薩に告げて言はく、汝、圓滿の自身を現すべし、多くの衆生をして汝の身を見已て菩提の因を種えしむべし。亦當に汝の如く多くの百千の諸の如來の所に於て善根を種ゆべければなり。

爾の時に無所有菩薩は即ち其身を現じたまへり。爾の時に大地は皆悉く震動するも、安穩潤澤にして衆生の恐怖し毛豎つこと有ること無し、一切の音樂は鼓せずして自ら鳴り、虚空中に於て衆くの天華を雨らし、一切處に於て天香人香皆自然に燒く。爾の時に無所有菩薩は是の如き色を具足せる身を現せり、彼身を現ぜし時、諸の女人衆は皆愛樂を生じ、一々の婦人は皆是の念を作せり、是の無所有菩薩は唯我と共に相娛樂すと。各々の前に現するも、亦復彼の神通の化なるを知らず。各其願を稱ふ。毘富羅山の叢林樹下に於て、我は此處に於て歡喜し樂を受けん。我等未だ曾て是の如き諸の妙音聲諸の色香等を聞くを得ざりき。我等今は世尊の恩を荷ふ。彼の諸の女等は各一樹下に七寶輦ありて、一切の果報皆悉く具足し、歡喜して樂を受け、一切の所須は悉く皆備足せり。復た更に歸還の想を念ぜず。彼等は是の如く歡喜の樂を受くること七日七夜なり。

爾の時に、世尊は諸の衆生の爲に更に法要を説きたまふ。若し彼の菩薩身を見ざるもの有るは、皆善根未だ成熟せざるに由るなり。望んで見んと欲すと雖も終に得べからず、何事も知ること莫しと。彼等見者七日を過ぎ已つて、彼の菩薩身を見るに漸く毀壞して精光有ること無く、受用の果報は皆没して現ぜず、唯一樹を見るのみ。彼等に菩薩は漸漸に現ぜず亦住處無し。彼即ち空中の聲を聞けり、言く。諸の善男子、此は是れ諸行眞實の體性なり、汝等應さに常有の想を起すべからず。汝等は女人の身想を捨つべし。當さに丈夫の身、無等等身、諸佛の身を願求すべし。汝等阿耨多羅三藐三菩提心を發して丈夫の身を受くべし。彼の議の女人は是の聲を聞き已つて、刹那の時に於て心寂靜に住して、如來像に具せる。三十二大人の相を見たり。彼等は見已つて皆是の言を作せり。

- 【二】七寶とは、金、銀、瑠璃、  
 磚渠、珊瑚、眞珠、玫瑰なり。  
 【三】三十二相とは  
 一に足安平相  
 二に千幅輪相  
 三に手指纖長相  
 四に手足柔軟相  
 五に手足綫網相  
 六に足跟滿淨足相  
 七に足趺高好相  
 八に腓如鹿玉相  
 九に手過膝相  
 十に馬陰藏相  
 十一に身縱廣相  
 十二に毛孔生青色相  
 十三に身生塵相  
 十四に身金色相  
 十五に常光一丈相  
 十六に皮膚細滑相  
 十七に七處平滿相  
 十八に兩腋滿相  
 十九に身如獅子相  
 二十に身端直相  
 二十一に肩圓滿相  
 二十二に四十齒相  
 二十三に齒白齊密相  
 二十四に四牙白淨相  
 二十五に頰車如獅子相  
 二十六に咽中津液得上味相  
 二十七に舌長舌相  
 二十八に梵音深遠相  
 二十九に眼色如紺青相  
 三十に眼睫如牛玉相  
 三十一に眉間白毫相  
 三十二に頂上肉髻相

## 卷の第四

爾の時に、王舎城中の頻婆娑羅王に一女有りき。出遊せんと欲す、時に、頻婆娑羅王は諸の侍女其數一千に敕す。汝等已に我女の眷屬たり。共に彼の處に於て相圍繞し、王の飲食する所を汝等常に食ひ汝等常に飲め、と。彼王舎城に多くの婦女有りて其數一千なるは、此語を聞き已つて種種の瓔珞自ら身を莊嚴せり。彼の諸の婦女は是の希有なる喜ぶべき諸花を見て、身心、喜悅して自ら勝ふ能はず、彼華を取らんと欲して取る能はず遠離する能はず、手を伸して取らんと欲せば華を去ること一尺にして及ぶ能はず、彼の諸華を見れば皆悉く遇富羅山に向ひ去つて住まらず。

爾の時に衆人及び千の婦女は頻婆娑羅王女と興に王舎城より次第に出づれば、彼の諸華等は衆人の前に在りて微行して進む。衆は亦行と不行とを知らず、彼の諸の人衆は是の如き念を作せり。此華は手を近づけて取る能はず、と。時に彼の諸の一切の華は皆毘富羅山に上り、彼の諸の男女も亦彼山に上れり。既に山に上り已つて、如來阿羅訶三藐三佛陀は無量百千の大衆に圍遶せられて爲に說法したまふを見たり。爾の時に二十八女姉妹は佛前に合掌して世尊を勸請せり、時に頻婆娑羅王の女は彼等一切の諸女を見、亦彼等の諸女の姉妹の世尊を勸請するを見て、是の如き言を作せり。此の諸の婦女は何故に合掌して世尊の前に在り、何をか求請せらるゝや、欲求するは何の願なるや。即ち空に聲あつて之に語るを聞くに曰く。此等は無所有菩薩の身を見んと欲せり、唯、佛身を除けば三界の中に於て能く勝れたる者無ければなり、と。彼等は同聲に咸是の言を作せり。我等願はくば彼の菩薩身を見ん、と。是の語を説き已るや彼の諸華等は即ち彼の衆人の手中に在りき。即ち此花を以て如來の上に散じて、是の如き言を作せり。唯願はくば世尊、我等に無所有菩薩の身を示したまへ、と。

【一】 三本に依り、福を言と改む。

一の指端に於て皆光明を放ち、一一の光明は王舍城に至り、彼の人家に於て皆悉く出現せり。彼の光明は諸の衆生有れば彼等は地より涌出して、諸華の縦の廣き一天にして昔未だ見ざる所の色香具足せるを化成するを見たり。」



背と名け、二十四を善住持精進と名け、二十五を善住と名け、二十六を安樂と名け、二十七を王と名け、二十八を悲と名く。

是の如き等類の二十八女は姉妹とともに坐より起つて身の瓔珞ようらくを脱して世尊に供養し、右膝を地に著け、皆共に合掌しもつて佛に白して言く。世尊の所説の無所有菩薩の功德は是の如し、願はくば、我等佛の威神(力)を承けて其身を見るを得む。成就せる是の如き實業の果報を別身を以てせる莫くして我等に示したまへ。我今菩薩の實身を見ん、と欲す。

爾の時に佛は善女人等に告げたまふ。汝今、無所有菩薩の成就せる色身を見んと欲す、今見むと欲するや、彼等答へて言く。唯然、世尊よ、我等に疑有り、願くば爲に開解したまへ。佛言はく。諸女よ、汝等は今は彼の身を見已つて何の利益有らん。汝今家に還るの意有ること勿れ、當に眷屬を捨つべし。若し彼の身を見ば安住して一切の功德を具足す。彼の諸女の言く。我等今は一切を能く捨てたり、決定して當に彼の菩薩身を見るべし。爾の時に世尊は彼の菩薩無所有に告げて言はく。汝無所有、此等の諸女は汝が身を見んと欲す。彼言く、世尊、已に許可を言はゞ彼の姉妹等に我身を示現せむ。佛言はく。善男子、我已に之を許せり。多く意に喜んで汝の身を見んことを欲す、當に利益有り、勝身心を得、妙身心を得、淨身心を得べし。若し汝の身を見ば即ち當に阿耨多羅三藐三菩提を決定し女身を轉ずるを得て、丈夫の身を成ずべし。汝今已に是の如き淨願有り、多くの諸佛に於て百千身を以て諸の善根を種え、是の願中に住し、三界中に於て願くは我れ當さに最勝の佛身を得べし、所有の衆生は我身を見れば決定して菩提に住し、所有の女人は悉く女身を轉じ、若くは我所に於て善根を種えん、已に是の如き甚深の法を思惟し已つて忍をばの本性を得む。願くば當さに眞如法中に入るべし、願くば當に諸菩薩の法を具足し、諸佛の法を開現し親近すべし、と。無所有菩薩は佛の此説を聞き是の如き言を作せり。是の如し、世尊、世尊の教の如し、と。即ち手中の一

善男子、一切の衆生は畏るゝ所有ること無し。所以はいかん。諸の語言有るは自在あること無し。善男子、汝今、是の諸の語言の法を觀じて自在有ること無けん。我今説く所の此の語言中に成就者おらば、彼は三界に於て容受せざる所なり。所有一切衆生の言説は若は合、若は散、有益、無益、著くは雜不雜、若は念若は起、若は衆生の爲に煩惱を淨めしめ、煩惱を捨てしむ。我彼等を見るに皆悉く平等なり。若は智、若は愚、皆一名を得るなり。彼言く、善哉善哉、善男子、汝、往昔曾て諸佛に供して是の合實の語言の解釋を得たるが如し。善男子、汝は何の利を見て而して身を現ぜざる、彼即ち答へて言く、汝今まさに世尊に問ふべし。

爾の時に無畏菩薩はもつて佛に白して言く。世尊、是の無所有菩薩は何等の利を見て而して身を現ぜざるや。佛、彼に告げて言く。善男子、唯我身を除きて此三界に於て衆生有ること無し。是の如く身相の其と等しき者は唯神通所化の勝身を除き、是の如く業果報を成就する故に、一切の諸の婦人をして見せしむる勿れ、必ず此處に於て染著し意を亂して聽法すること能はず、諸事を作さず、本夫を棄捨して、飲食するも歡び無く、染愛し迷著して多く苦惱を受けむ。是の無所有は是の如き等の諸の過患を見るが故に身を現ぜざるなり。

爾の時に無畏菩薩及び彼の大衆は皆疑惑を生じて咸是の念を作せり。是の無所有菩薩の身相は何如なる。而かも今世尊は是の如き説を作すや、と。

爾の時に衆中に諸の女人有りき、一を解染と名け、二を寶璽と名け、三を解華と名け、四を寶華と名け、五を普香と名け、六を香自在と名け、七を金華と名け、八を作愛と名け、九を不染と名け、十を善任意と名け、十一を作光明と名け、十二を甜味と名け、十三を阿那羅梨耶と名け、十四を住持と名け、十五を無垢と名け、十六を海と名け、十七を功德上と名け、十八を無過失と名け、十九を調順と名け、二十を諸天供養と名け、二十一を壞上と名け、二十二を普照明と名け、二十三を不

るや。彼即ち答て言く、善男子、我今、自身を見ず、能く一切衆生の爲に利安を作す故なり。能く如來に是の如き等の處を問へ、と。彼、不自在菩薩問ふて言く。彼の所問の處は身と合するや、合せずとせんや、無所有の言く。我所問の處は身と合せず。彼復問ふて言く。善男子、汝今云何が身と合せずして所問を成就するや。無所有言く。善男子、我三處を以て如來に發問せり。何等をか三となすや、謂く身・口・意なり、此等の三處を我、如來に問へり。善男子、是の身・口・意に和合の義無し。彼復た問ふて言く。善男子。汝は何の意をか見て身を現ぜざる。彼三即ち答て言く。我今、示さむ、汝當に我言を信すべし、我は諸の衆生を安樂と爲さんが故に身を現ぜざるなり、彼の菩薩言く。我肉眼を以ての故に見る能はず。無所有言く、天眼を以て看よ。彼言く。天眼も亦復見ず、無所有言く、法眼を以て看よ、彼の菩薩言く。善男子、所有法行は、彼亦一切眼を離れず、彼の處中に於ては法として見るべき無し。無所有言く。汝云何が聞くや。彼復た答へて言く。彼處に和合して聞くべき有ること無し。善男子、我如如を見る。無所有言く。善男子、如如の中に於て三眼有ること無し。不自在言く。汝云何が見ん。時に無所有は默然として住せり。不自在言く。善男子、見る能ふ無き一切法中に於て何が故に黙して住するや、其虚空に於ては豈に容受無からむや、虚空は悉く能く諸法を容受し染著する所無く、所入無礙なり。一切法に於て假借有ること無し、彼處に著せず、應に解説あるべし。善男子、何縁を以て黙して説く有ること無きや。彼即ち答へて言く。我今、彼の所有語言に於て能く解釋する處皆不可得なり。我は是を以ての故に黙して答へず。然るに善男子、汝は我説を聽くに、何の因縁を以て不自在と名くるやを以てせり。善男子、我億劫を念ふに已に曾て諸の衆生等の爲に、無益の語を離れ諸の衆生の爲に利益を所作し柔軟にして樂を生じ皆悉く美妙にして、歡喜踊躍し鹿濯有ること無く、時に依つて利益し腹恨を生ぜず、是の如き言を説き、衆生の我を怨恨すること有ること無きを知れり。善男子、是の因縁を以て我は無畏を得たり。

【三】 宋元明三本に依り則を即と改む。

【三】 宋元明三本に依りて亦を示に改む。

【三】 如如とは、法性の理體不二平等なるを如と云ひ、此彼の諸法皆如なれば如如と云ふ。

【三】 宋元明三本に依りて求を於に改む。



所無し。一切の勝相皆悉く具足して衆生を教化し佛刹と涅槃とを開現し具足し成就して等しく平等無二にして名説有ること無し、説くべき無きが如く亦生るゝを欲せず、無言中の如如、是れ住する如く、是くの如きの如如亦所行無し。彼は諸佛の大神通中に於て復た疑惑無し。

爾の時に無名菩薩は彼の善男子を讃めて言く、善哉善哉、善男子、汝今善く佛の大神通に住し、汝今是の如く辯才を成就し辯説して是の如し。

彼即ち答へて言く、善男子、我亦佛の神通中に住せず。其れ佛の神通は能く作る者無し、一切諸法の眞體は無名にして不可得なり。故に彼は入るべき無く、出づべき處無く、知るべき處無し。是の如く信じ已つて住處有ること無し、其れ佛の神通は住處なきが故なり。彼は人の能く名字を説くもの有ること無し、但無名中に我今汝に問はん、疲倦を生ずること莫れ、其れ智有らん者は承事すべきこと難きか。彼即ち答へて言く。善男子、汝今但、問へり、我れ所知を當に爲に解釋すべし、彼の「難調」の言く、<sup>三</sup>摩訶薩埵、汝今何故に名けて無名と爲すや。彼、即ち答へて言く、我れ是の處に於て言説するを得ず、亦汝が名字示現する所の如し。彼即ち答へて言く、善哉善哉汝善男子、汝今、佛の大神通を度するを以て名字を離る、彼の無名の言く、善男子、平等中に於ては法として離るべき無く、斷すべき有ること無く、建立<sup>こんりふ</sup>すべき無く、去來無く、平等相無し。善男子、若し一切法彼に平等なれば別離有ること無し。其平等の處も亦處所無し。云何が斷離せむ。若し平等の法にして而も別有なれば乃ち斷離すべし。

爾の時に衆中に一菩薩有りき、自在と名く。而して佛に白して言く、世尊、何の因、何の縁にてか無所有菩薩は名けて無所有となすや。佛は彼に告げて言はく、善男子、汝まさに還つて無所有菩薩に因縁を問ふべし。彼は當に汝に報すべし。

爾の時に不自在菩薩摩訶薩は無所有菩薩摩訶薩に問ふて言く。善男子、汝今云何が無所有と名く

【三】摩訶薩埵とは大有情と譯す、作佛の決心を有する衆生の義にして即ち菩薩の通稱なり。

り、と。彼は佛前に於て合掌して住し心に歡喜を生じ踊躍無量なり。彼佛を禮敬して是の言を作せり。我今佛の大神通を禮し已り、各種の相に善根を生ぜしめ已り、還て涅槃平等の法中に住し、罪福の徳を離れ、是の如く不住にして善根に近づけり。諸佛の法の中に彼能く親近して乏短なる所無く、勸請して菩提中に住せしむ。復た偈を説いて言く。

衆生、覺せば是の如く、當に大苦生死の大險道を脱すべし。所有の苦の衆生は、彼亦成就せず、所有の苦を言ふ者、彼亦彼の苦を受く。此教を覺らざるが故なり。

此偈を説き已つて默然として住せり。

爾の時に無名菩薩は彼の善男子に告げて言く。善男子、汝今已に能く一切施を行ぜり。若し自身を持し佛を供養せんに、善男子、汝更に我自在なりと言ふを得ず、汝は此身を以て已に用つて佛に施せばなり。善男子、譬へば人有つて他に財を施して後、還是れ我物なりと言ふを得ざるが如し、彼は彼の財に於て自在を得ざればなり。是の如く善男子、汝今身を以て已に佛に施せり。汝今既に是の如きの言を作せり。我れ當來の世に當に作佛することを得て、投記に忍ぶを得べし、と。善男子、汝は今、何をか作さむと欲するや。彼は此を聞き已つて即ち疑念を生ず。我今云何せん。我今云何せん。是の如く思念す。彼時に即ち復た無所有菩薩の聲を聞けり。言く、善男子、汝今作す莫れ、善男子、汝は還つて諸佛の神通を念すべし、汝が信解するが如し、まさに是の如く彼に報じ無名菩薩の所問に向ふべしと。此の言聲を聞き即ち辯才を生じ明に前來を見て身心有ること無く、言無く、説無く、施無く、戒無く、忍無く、進無く、禪無く、智無く、斷無く、常無く、聲聞無く、菩薩無く、菩提心を發する無し、如來無く、如來法無し、涅槃無く、涅槃聲無し、信者有ること無く、所住有ること無く、所取有ること無く、所言有ること無く、縛著有ること無く、所聞有ること無く、所聞者有ること無し、所有者有ること無く、所有者有ること無し、承攬する所無く、承望する

爾の時に彼の難調怨讐なるものは此偈を説き已つて、空より下つて佛前に住し、佛足を頂禮し合掌し、而して住せり。

爾の時に、世尊は彼を歎じて言はく。善哉、善哉、汝善男子、快く此偈を説いて、義理に合し、虚妄有ること無く、別異有ること無し。是の如き如來の神通威力を一切の菩薩は中に於て當に學ぶべし。是の如く學び已つて衆生は空なるを得ん。

爾の時に難調怨讐の善男子は是の如く思念せり。今、世尊は我を稱めて善哉とせり、我今稱慶す、當に何事を以て世尊を供養すべき、と。彼即ち空中の聲を聞けり。曰く、汝、身を以て世尊を供養すべし。即ち空に問ふて言く、云何が供養せん。

復た空の聲を聞けり。汝善男子、汝、今宜しく虚空に飛騰して此大衆をして皆悉く知見せしめ、虚空に住して是の如き偈を説くべし。

所有の諸の慳著は、皆自身に由つて住す。我已に一切を捨て、今導師を供養せり、と。

爾の時に彼の善男子は此偈を聞き已つて歡喜の心を生じ、佛の神力を以て虚空に飛騰すること一多羅樹なり。而して此偈を説き、即ち自ら身を捨て、如來に供養せり。虚空の中に於て自ら身を捨て已つて、千數華有り柔輦香潔なること未だ會つて見聞せざりき、光明と香氣は一由旬に満ちて猶、日光の如くなりき。或は一時を經、或は半時を經て、彼の諸華等は佛を遶つて三匝し、而して供養し已つて、佛の神力の故に、虚空中に於て華蓋を成じ、而して彼中に於て是の如き偈を説けり。我れ已に自身を捨て、諸の教師を供養せり。我れ自身を知らず、亦世尊をも知らず。

彼は彼時に於て、一切處に於て身心を知らず、如來を知らず、衆生を知らず、住處を知らず。彼は彼時に於て涅槃平等なり。亦是れ我れ已に證を得たりと念する無し。彼の時の中に於て一化佛有りき。自然に身を現じて是の言を作せり。汝善男子、汝は已に佛刹の種子を成就して、一切開現せ



時、九十二那由他等の百千の衆生有りて無生忍を得、三十六億那由他等の諸の菩薩は業障を淨むるを得たり。爾の時に調し難き怨讐あり、先に人を害せる者は佛の授記を聞きて歡喜踊躍して虛空に飛住し高きこと七三多羅樹なり、而して偈を説いて言く。

若し淨土に住せんと欲せば、應さに導師の説の如くなるべし。應さに諸佛の最上の大神通を信すべし。佛の神通を覺り已つて、無分別處を知る。世間に於て有無く、得べきこと難き

者、若し無所有所問の經法を聞きて、能く信じ能く觸證せば、則ち諸佛を供養するなり。若し此經を學び已つて、能く諸の有想を除き、已に作惡を捨つるを得ば、當に諸の導師を見るべし。

若し此經を學せば、是れ則ち諸佛を見、諸の如來に親待するなり。此經に廣説するが如し。此は則ち是れ施度なり、淨戒の依住する所なり。忍辱及び精進、智慧等の本處なり。若し所得有ること無くして、是處に説いて著せざれば、世尊の所説の如く、是の如く調伏を覺るなり。

若し此經を聞きて、諸義をして種々の諸の供養を示現せしめんとならば、力盡きて能く報する無く、不可數の多劫に、闇に面して所見無からむ。若し此經を聞かば、諸佛の地に到るを得。彼は愚癡を悟り、以て無明の闇を破し、以て一切空を得るは、此經を聞くに由るが故なり。

多種なる煩惱を盡して少く未だ盡くさざるもの有るは、猶、大海に於て、一滴の水を取るが如し。衆生を成熟せんが故に、煩惱の滴を盡くさず。衆生を悲愍するが故に、彼は煩惱を盡くさず。佛利を清淨せず、一切を滿せず、彼は衆生を成熟して、彼の處に滅せず、亦彼れ滿すべき時、菩提を授記するが如し。是の故に諸水の滴は、瓶中に於て盡きず。若し一切開現せば、彼當に佛利に有るべし。彼即ち當に満足して餘の熏習有ること無かるべし。

是の如き是の如きの處に、是の如き經有りて聞きて、能く善く解説せば、諸の功德具足す。

【三】多羅樹(Plum)は多羅葉の樹にして高木なり依て物の高きを譬へるに用ひ、七多羅樹とは多羅樹を七倍せる高なり。

【三】宋元明三本及宮本に依りて學を覺と改む。

に速かに兩足尊を成すべし、世間無上智は自在なり。甚深の諸法は最も妙勝なり、思量すべからず寂にして三九説無し。若し我見を開發せずんば、多俱致劫に於ても覺り難し。

善男子、爾の時に彼の利益上菩薩比丘は此偈を説きし時、上空中に於て六十六那由他の諸天は無生法忍を得たり。復た六十二千の衆生有りて阿耨多羅三藐三菩提心を發せり。爾の時に寂定威儀比丘は此偈を聞き已つて氣樂の意無く心に熱惱を生じ、身は遍く皆腫れたり。是の人所以に於て慈心を生ずるも、是の一慈心を思推するが故にして、餘は皆瞋根なり。彼時間に於て大地開裂し、彼は現身に阿毘地獄に墮せり。彼中に住すること億那由他百千歳にして、數々大極苦を受け、彼は命終して即ち生を見毒蛇の中に受けたり。是の如く次第に多くの那由他等を経て百千の生の中に、二惡處に行けり、阿鼻獄と大叫喚獄となり。還つて復た見毒蛇の中に生ぜり。彼は是の如き不善根を以ての故に、満足して六十二億那由他等の百千の劫數を終たり。彼は往昔、利益上菩薩に於て一慈心を生じ眼を以て觀視したるを以て、彼の善根を以て彼處より、終に人身を受くるを得たり。彼の慈心は熏習有るに由るが故に、又復た彼の見毒蛇の母を以て、而して彼の所に於て慈心を起せるが故に、復た是の如き深妙の法を開けるが故に、今、是の如き利智神通を得たり。

善男子、意に於て云何。彼時の寂定威儀比丘は豈に異人ならんや。今此の難調怨讐のもの是なり。此は往昔に於て此の業障有ればなりき。善男子、意に於て云何。彼時の利益上菩薩比丘とは、異見を作す莫れ、我身是なり。諸の善男子、彼時に王の勇健力なる者有りき。今の無所有菩薩是なり。

諸の善男子、是は往昔菩薩の邊に於て瞋恨心を生ぜしに由るが故に、是の如き等の知り難く畏るべき業障惱患を受けたり。諸の善男子、是の如きを以ての故に、若し菩薩有りて當に諸の業障を淨めんと欲せば、諸の菩薩に於て供敬尊重して、教師の想の如くなるべし。諸の善男子、若し當に自身を害せずして菩薩に住するを得んと欲する者は應さに是の如く學ぶべし、此の往昔出品を説きし

【二七】 三本に依り、流を説と改む。

【三〇】 無生法忍とは無生法は生滅を遠離せる眞如實相の理體なり。眞智是の理に安住して動かざるを無生法忍と云ふ。

爾の時に彼利益上菩薩比丘、及び五千の菩薩諸の眷屬衆は虚空に飛騰し、彼に於て住し已つてもつて偈を説いて言く。

居家の自性は菩提を説き、分別無く破壊無きを欲す。若し此行を覺り演説せば、彼は菩提無上の安を覺らん。瞋行しんぎやうの自性は菩提の如く、世師なる智者は已に爲に説けり。若し是の如き法行を覺れば、彼は菩提を覺らん、<sup>二</sup>二足の上よ、愚癡は菩提等を示現し、菩提と愚癡とは異の性無し。

此の示現せる癡は一行なるを以て、當に菩提無上道を覺るべし。

若し已に諸の見行、及び彼の菩提勝上覺を説ける有らば、此二行中に於て説かば、見行は菩提を得ず。諸佛の法は甚だ深妙なり、有を以ては能く知見するを得ず。分別を離れて所依有り、善巧の智者は菩提を覺らん。若し能く諸の分別を捨離し、及び持戒を以て、我慢のみに依恃し、多聞にして自矜なる、是等を捨て已れば菩提を覺るべし。處を居家に寧んじ貪欲を樂み、若し此法を聞いて驚疑せず、導師所説の法を信解するも、能く一行に於て廣く演説し、

此教中の出家を用ひず、有所得見にして閑處に在り、我相中に於て常に繫著し、我當に菩提を證すべしと起念し、所有の動念にして演説する所、彼等は皆是れニ魔羅網なり。若し諸法を知れば虚空の如し、彼に則ち動念有ること無し。諸の如來に是の如き法有り、諸の普眼等是一行を説く。煩惱と菩提は二にして無二なり、煩惱及び菩提を得ず。若し欲及び瞋を分別せずんば、亦癡等も分別せず。彼此こに於て捨離せば、彼は菩提を覺らん。諸の導師、若し有所得に住せずんば、亦有念ならず及び動ぜず、我相を起さず依處無くば、彼は菩提無上を覺りて安し。若し分別・詔曲・幻偽・嫉妬を分別するを捨て、頭陀戒の福德を行するを樂まば、彼は菩提無量眼を覺らん。若し此法を聞きて所捨無く、廣説時に於て亦疑はざれば、彼は當

【二】原文に彼覺菩提二足上とあり、二足上とは兩足尊と同意ならん。

【三】魔羅は魔なり。



釋多羅三藐三菩提心を發して比丘を供養せり。而して彼比丘は彼の諸の衆生を教化せんと欲するが故に、一切處に於て諸の供養を受け、厭悔を生ぜず倦心を生ぜざりき。彼王は彼比丘を供養し已つて三月を満足せり。及び八萬四千の采女に於て各自ら莊嚴し諸の香花、及び諸の音樂・衆寶・瓔珞・塗香・衣服を持せしめ、是の如き等の事を以て比丘を供養せり。及び彼比丘の所有の門徒八千五百は常に相ひ隨順して、一切は皆阿耨多羅三藐三菩提に於て不退轉を得たり。善男子、彼の時に於て、調じ難く怨讐あり人を殺害せし者は比丘となり、名を寂定威儀と曰へり。善く法要を説き多聞總持にして十千の修多羅等を満足し、誦持し通利して能く廣く諸の修多羅を分別せり。常に少欲知足の法義を説いて彼比丘は已に四禪を得、復た五通四無色定を得たり。而して彼の寂定威儀比丘に多く徒衆有り、其數五百にして相共に隨逐して、亦是の如きの威儀勝行有りき。

爾の時に寂定威儀比丘は、彼利益上菩薩比丘を見て喜せず悦ばず、惡心を生じて瞋恚の意を發し、惡色を現じ衆人の前に在つて、是くの如き言を説けり。此の比丘の如きは何處に菩提の行有るや、何處に諸佛の法有るや。是の如きの雜行は世間に於て行するも威儀の尙無し。況んや復た當に勝智を證する有るべきをや、而も彼の衆人一向に唯利益上菩薩比丘を信じて能く壞する者無し。爾の時に寂定威儀比丘は復た瞋恨を増し轉更に増上し、彼地より方に背面して去れり。我れ復た是の惡事を見るを喜ばず。若し此の比丘邪見を行じて、諸の人衆をして皆顛倒を行ぜしめば、蘭若處に至り三昧に入らんと欲するも、瞋根有るを以て彼の三昧に順入すること能はず、況んや復た能く定せんをや。彼に是の如き強力の行有るが故に所有禪定〔三〕三摩拔提及び五神通の一切は皆失はむ。彼は是の如き恚惡心を以ての故に大重病を得ん。爾の時に彼利益上菩薩比丘、是の如き念を作せり。希有なり、乃至、此の比丘の如きは、大不善・瞋恚・濁意を生ず。我今應さに憐愍を生ずべし。利益を作し深法を聞くをなさんが故なり。

【三】三摩拔提(Samapatti)は定の別名なり。

て、彼の諸の菩薩は皆合掌し、咸共みなに彼如來を瞻仰して、悲泣し涙を雨あめして此言を作す。

唯願くは兩足尊、我及び百千の衆生等を慰諭したまへ。尊の滅度の後には誰か佛となる、世尊は諸の世間の上に於て、哀愍あひみん輒語して、告げて言へり。世間、天人等を慰諭したまへ、我れ滅するも比丘、怖を懐くこと莫れ、我が後に復た當に佛出世すべし。菩薩有りて功德分と名く、修行して無漏智に至るを得て、未來世に於て當に作佛すべし、名を智焰兩足尊と曰はん。

我今勸請せり、汝當に知るべし、此法を攝持せんと欲するが爲の故に、是の如く法教を廣く開顯し、世間、天人等の爲にせよ、と。世尊の是の如き説を聞き、即時に安慰し復た言を發す、大神通力此れ甚だ難し、攝受無き法を攝受せんが故に、我れ導師を尊重爲るが故に、我今正法を攝受し、我當に廣く此法教を宣ぶべし、我れ當に身及び壽命を捨つべし。己の身、壽命等を護らずして、乃ち如來の法を守護すべし。若し嘗て己身を愛せずんば、彼は即ち能く教師の法を護らん。

善男子、爾の時に彼佛は彼の諸の一切大衆を慰諭して歡喜せしめ已つて、法を説いて教誨し威力を與へ已り、夜の後分に於て涅槃に入れり。善男子、彼の時世尊涅槃に入りて後に、彼菩薩は滿足の八十千數の法門を説いて、是くの如く隨順し衆生を成就せり。多くの那由他百千の衆生は當に阿耨多羅三藐三菩提の中に於て成熟することを得べし。沉んや復た聲聞乘に住せる者、辟支佛乘の者をや、沉んや復た生死中に流轉し善根を種ゆる者をや。善男子、彼の佛如來般涅槃の後、正法滅し已り像法中に於て多く比丘有り、有の得べきを説き、有の滅すべきを説く。彼等は是に於て諸の修多羅を受持するを樂はずして復た誹謗を生ず。善男子、彼の時中に於て此閻浮提二閻浮提に一人の王有り勇健力と名く。果報廣大なりき。爾の時に彼の利益上菩薩比丘は、彼の王の所に至つて爲に佛法を説き、如來祕密の教を説けり。彼の王聞き已つて、即ち三五利益上比丘に敬重の心を生じ、即ち阿

【四】閻浮提(Mandvita)は須彌山の南方の大州なり。

【五】諸本皆上利益となすも利益上なるべし。

善男子、是の如く彼利益上菩薩は自在王如來所説の那由他百千の修多羅に於て悉く能く受持し、能く彼の那由他等百千の菩薩の爲に其義を解説せり。善男子、爾の時に自在王如來阿羅訶三藐三佛陀は二萬歳に於て、諸の菩薩聲聞衆及び諸の衆生の爲に説法教化して二萬歳に滿てり。然る後に乃ち一切の菩薩及び比丘衆諸天魔梵、沙門婆羅門等の大衆の中に於て、彼の利益上菩薩に告げて言はく、善男子、汝當に此不思議那由他等の百千俱致所修の阿耨多羅三藐三菩提法を受持して、後の末世に於て諸の天人の爲に善根を増長し、此法を護持して如來の菩提を光顯し、久住せしめむが故に受持解説すべし。善男子、この夜半を過ぎて諸佛如來は當に 般涅槃すべし。

爾の時に彼の利益上菩薩は佛の涅槃するを聞きて悲泣し涙を雨して坐より起つて衣服を整理し、右邊を偏袒し右膝を地に著けて合掌して佛に向ひてもつて偈を説いて言く。

願くは兩足尊一劫に住し、世間天人等を利益したまへ。我今世間眼を勸請す、願くば妙法を説いて以て教示したまへ。深智無惱の導師は、勝行して諸の功德に住せり。普眼調伏の天人者なる大神通尊、願くは久住したまへ。若し聞道の師の涅槃に入るを聞かば、諸の天人等は心憂惱せん。導師、願くは彼等を慰むが故に、唯願くは世に住して教示せられよ。我及び百千の衆生は、衆苦逼切して憂惱を生ぜり。皆、導師滅度を唱へたるに由る。世の親今涅槃にならんと欲す。能く人を調へたる調御者、唯願くは、普眼尊よ久住したまへ。世間天人を利益せんが故に、我今諸佛世尊を勸請す。

爾の時に世尊、諸天、世人を利益せんと欲して、偈を以て彼の利益上菩薩に報へて言はく。

我已に世の爲に利益を作し、是の如き等の諸の法教を説けり。我已に充滿せる諸の菩薩をして、諸佛無漏の中に住せしめたり。即ち此夜後分の時に於て、我當に般涅槃に入るべし。

我今汝に此法教を付し、世尊の滅後に久しく住せしめんとす。彼衆此の語を作すを聞き已つ

【三】 般涅槃は、入滅のこと。



爾の時に無障淨月菩薩は、佛に白して言く。唯願くは世尊、我が爲に解説したまへ。佛言はく、善男子、我往昔を念ふに、然燈如來阿羅訶三藐三佛陀滅度の後、九十億那由他劫を過ぎて、佛有つて世に出で、名を法意喜王如來應供正遍知行足乃至佛世尊と曰へり。彼の佛の壽命は六十八千歳なりき。初會の聲聞衆は六十二俱致百千有り、菩薩摩訶薩は其數復た倍せり。彼の佛の世界を名けて梵主と曰ひ、劫を淨意と名づく。彼の法喜王如來は彼の劫に生じ、何が故に彼劫を清淨意と名く。彼の劫には常に如來の出世及び諸の菩薩有れば、是の故に彼の劫を清淨意と名づくるなり。

善男子、彼の法喜王如來の世に住せし劫の中に於て、此の調じ難く怨讐ある善男子は爾の時に王となりて名を降怨と曰へり。彼の如來及び比丘僧、諸の菩薩衆に請ひて一切の樂具を以て、三月に彼の如來を供養し、其に従つて法を聞き、阿耨多羅三藐三菩提心を發して、彼は善根を植え復た十千の諸佛に值遇するを得て、一切處に於て常に梵行を修し、常に多く聞くを得て、精進を發勤し、四禪定を得たり。此善根に由つて復た如來に値へり。その名を金剛焰光といふ。彼の佛の所に於て、出家修道し梵行を行じ、精進の行を發勤し、頭陀法を行じて、常に蘭若空閑之處に在り、

修多羅の十千部に滿つるを誦せり。皆是れ大乘なり。亦四禪及び五神通、四無色定を得たり。

善男子、彼の金剛焰如來阿羅訶三藐三佛陀に十俱胝の諸の比丘衆有りて皆阿羅漢なり。復た八十四俱胝那由他百千の諸の菩薩衆有り。常に世尊に隨つて皆、等しく忍及び陀羅尼を得たり。不退の輪を轉じて善く深法を解し、已に無邊陀羅尼の門に入れり。已に能く巧みに無邊法界海印三昧に入り、遊戲神通して、心、決定を得て、諸佛の住持せる身體を顯現し、諸の衆生に常に慈悲を行ぜり。善男子、爾の時に彼の佛、菩薩衆の中に、一菩薩有りて比丘の上首法師たり、利益上と名く。善く法義を説いて示教利喜し、諸の菩薩をして不思議具足の功德を得しむ。彼の世尊の爲に待者と作りて、恒に隨つて遊止せり。猶、今日の阿難比丘の如くなりき。皆能く諸の修多羅を受持せり。

【一】梵行とは、清淨無欲の行なり。

【二】四禪定とは、初禪、二禪、三禪、四禪を云ひこれを修して欲界の惡網を超へ色界の四禪天に生ずるなり。

【三】頭陀(Dhuta)とは衣食住に對する不當な欲望を離れる爲の行法なり。

【四】蘭若、空閑とは蘭若(Aranya)は音譯にして空閑とはその義譯で梵漢衆舉せるものである。意味は閑寂なる比丘の住處を指す。

【五】修多羅(Sutra)は經のこと。

【六】五神通とは、神足、天眼、天耳、他心、宿命の五なり。

【七】四無色定は、一に空無邊處定二に識無邊處定三に無所有處定四に非想非非想處定なり。

【八】忍(Kṣanti)とは遠順の境に忍耐して瞋心を起さず道理に安住して心を動かさざるなり。

【九】陀羅尼(Dharaṇī)は總持と譯す。善法を持して散せずしめず惡法を持して起らしめざればなり。

【十】阿難(Ānanda)は佛陀の從弟にして二十五才出家し佛陀に隨侍すること二十五年一切の佛法を受持せりと云ふ、十大弟子の一なり。

何に縁つてか此衆は見ん。然るに今利根なる者は、先に於て人を殺害し、復菩提を記するを得たり。二 大龍願くば爲に説きたまへ。彼の往昔しほの行業は、既に億數劫爲り、常に惡趣地に作せり、多劫に數しほく積聚せる、癩の爲に盲覆せらるゝが故に。多く百億劫に於て、常に多種の苦を受け、生死の中に流轉し、地獄の火熾然たる。三 大呼阿毘支あひしにあり。彼の業を觀るに是の如し。復た倍して生死の中に、惡毒の蛇身を受け、見れば即ち能く殺害し、多く百億の生死あり。多種の苦を受け已つて、多きこと百億數劫にして、人道の中に生ずるを得て、復た人を殺害することを作す。今、世尊を見るを得て、即ち利根を生じ、速かに諸の煩惱を斷じ、意を發して菩提に向ふ。佛の爲に授記を蒙むり、阿僧祇劫に於て、當に世間燈を成すべく、利上功德と名く。彼の往昔の事を、人上は爲に解説したまへり。是の如き作業の事、苦惡の果報は是を以て億數劫なり、已に多種なる苦を受けたり。若し所有の善業は、教師亦爲に説く。昔行ぜし所の諸行の、惡業と不善とは、世の燈悉く照知せり。唯願くは我が爲に説きたまへ、疑を斷ぜし大丈夫は、我及び衆生、及び未來等の爲にす。能く此教を聞く者、若し疑惑を懷くこと有り、此法に於て疑有れば、教師今爲に斷ぜん。現在兩足尊は、衆生を攝受するが故なり。是に於て善男子、此の往昔の如くに行ぜば、大に名稱せらる。願はくば説きたまへ。

爾の時に佛は無障淨月菩薩に告げて言はく。善哉善哉。善男子、汝今一切の大衆の爲に疑を斷除せんと欲するが故に、能く如來に是の如き義を問へり。汝善男子、諦しとらかに聽き諦に聽いて善く之を思念せよ、當に汝が爲に説くべし。彼の善男子の彼の往昔作せる所の諸業の如きは、此の如く多數に百千那由他劫を経て諸の苦惱を受けたり。汝等聞き已つて當に如來を信じ恐怖を生ずること勿れ。一向に奉持して教の如くに説け。

【一】大龍(Mahāraja)は世尊の德號なり。

【二】大呼阿毘支とは、八熱地獄の第五にして此に墮せる者は劇苦に逼られて大哭聲を發すと云ふ。

尊に散す。復た是の言を作して言く。我等當に是の如き精進を作すべし、亦當に是の如き佛刹莊嚴の事を成就すべし。昔釋迦牟尼世尊の釋種の勝王として我が爲に光明を示現して顯照し、彼時に於て無量の多數の衆生を菩提の中に於て成熟せし如く、亦彌勒如來世尊の多くの菩薩衆の如く、彼の利上功德如來は初會時に於て菩薩無量にして、授記中に於て皆悉く忍を得む、第二會に於て諸の菩薩衆復た倍して無量ならむ。第三會に於て復た倍して無量ならむ。是の如く方便して彼利上功德如來阿羅訶三藐三佛は當に是の如き諸の菩薩衆有つて、而して彼利上功德如來は諸の菩薩衆に示教し利喜せしめ誓願を行ぜしめ、初心を得已つて皆一切智乃至菩提を成就せしめむ。善男子、此難調にして怨讐有り先に人を害せし者は彌勒佛の出世に値ひて後、一切の生處に壽命無量なり。唯、一生補處の時中の壽二十歳を除く、而して彼處に於て、一日中に於て自身に具に一切の惡業無量の苦惱を受く。是より已後は乃ち菩提に至り當に更に修習し菩提を覺り已つて壽命無量ならん。佛の滅度の後正法世に住し、無量の時に於て惡世有ること無し。我が今日の詔惡の衆生の如きは惡口有る者智慧無き者、道に入り難き者、魔に持たれたる者なり。

我れ今中に於て說法し教化するも、此等の衆生は解し難く入り難し。此善男子には是の如き諸の患難の事有ること無し。善男子、彼の佛刹中には諸の魔及び魔に事ふる者有ること無く、所有の利根通敏の衆生は皆彼に集る。是の故に彼の佛刹上功德如來は說法するに少しく功力を用ゐて而かも開解することを得ん。

爾の時に衆中に菩薩有りて無障淨月と名く。即ち坐より起つて衣服を整理し、右膝を地に著け合掌して佛に向つて自ら疑を決せんと欲し、及び此衆の爲に疑を斷ぜしめんが故に、即ち偏頰を以て世尊に問ふて曰く。

我れ世間の燈、智聚、無礙者に問ふ。自ら及び此衆に於て疑を斷ぜんと欲するが爲の故なり。

【一〇】三本に依り、魔事を本魔と改む。



# 卷の第三

爾の時に世尊即ち微笑したまふ。金色の光有りて佛の口より出で、上梵世に至り遍く三千大千世界を照し、佛を遶ること三匝にして還つて頂より入れり。

爾の時に衆中に一菩薩有り名けて不染と曰ふ。坐より起つて衣服を整理し右邊を偏袒し右膝を地に著け、合掌して佛に向つて白して言く。世尊は何の因縁を以て今微笑を現したまふや。諸佛如來若し微笑せば、因縁無きに非ざるなり。唯願くは解説し衆をして歡喜せしめたまへ、と。爾の時に佛、不染菩薩に告げたまはく、善男子、是の難調にして怨讐あり人を殺害せん者は未來世に於て八十九百千阿僧祇劫を過ぎ已つて後當に作佛することを得べし。號して利上功德如來、阿羅訶・三藐三佛陀と曰ひ、當に世に出でて、明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛世尊となるべし。善男子、此惡心調じ難く怨讐あり、前に人を害せし者は此に命終して後當に兜率天上の彌勒菩薩の所に生ずべし。彼に隨つて壽に住し、彌勒菩薩當に下生せん時、彼は爾の時に大長者と作り財福無量にして、一切の果報は皆悉く開現すべし。即ち二十晝夜に於て彌勒世尊及び聲聞衆を供養し、彼は即ち彌勒世尊佛利莊嚴の事を見て、即ち願求を生じ、爲に佛利を莊嚴することを成就せんと欲するが故に諸の眷屬と與に彼の彌勒如來世尊及び聲聞衆に請ふて、前後を圍遶し、諸の供養一切の樂具を以て三月に奉獻し恭敬し尊重し承事し供養し、即ち素衣の長さ八十肘を以て用つて彌勒如來の形像及び彼の佛利莊嚴の相を畫き、已に圖畫し已つて彼の彌勒如來世尊に奉り、即ち願を發して言はむ。此功德を藉りて願くば我れ當に是の如き佛利莊嚴の事を得む。亦今の彌勒世尊阿羅訶三藐三佛陀の所有の如く莊嚴の相を具足せむ。願くは我が佛利の諸の聲聞衆の智慧具足せん、願くは我が佛利の諸菩薩等の無量の智慧皆悉く具足せん。是の願を作し已つて、金銀の花を以て彌勒如來世

【一】三匝とは、三度めぐること。

【二】阿羅訶(Araha)は應供と譯す。衆生の供養を受くべきものなればなり。如來十號の第二。

【三】三藐三佛陀(Samyaksambuddha)は正徧知と譯す。諸法の眞理實相を如實に知ればなり。如來十號の第三。

【四】明行足(Mahāvīrya-sambhava)實相を覺るを明と云ひ戒定慧を修するを行と云ふこれを具足せば明行足と云ふなり。如來十號の第四。

【五】善逝(Sugata)は如實に彼岸に去つて再び生死海に沈没せざればなり。如來十號の第五。

【六】世間解(Tolavīd)とは世間の有情非常の事を知ればなり。如來十號の第六。

【七】無上士(Amitara)は八中最勝の士なればなり。如來十號の第七。

【八】調御丈夫(Puruṣa-dharmasambhava)は丈夫を調御して修道に入らしめればなり。如來十號の第八。

【九】天人師(Devamanuṣya-paṇḍita)天と人との教師なればなり。如來十號の第九。

爾の時に惡心難調にして怨讐ありて人を殺害せん者、是の如き大神通を見已つて彼の所知の如く上下を取らず、心は調順なるを得て喜怒有ること無し。此語を説きし時に難調怨讐なるものは身を虚空に踊らして是の言を作せり。諸の善男子、一切の諸法は猶幻化げんげの如し、眞實の分別所作有ることなく、諸法の實體、如不動にして顛倒有ること無し。是の故に汝等所有の諸想を住持建立するも是の如き等の想に實想有ること無し。是の顛倒の想は實想有るに非ず。是の故に汝今已に疑惑無き處に至るを得て亦當に二元無礙辯才を得べし。汝等は已に諸の疑惑を脱せるが故に菩提を求むる時に他に由らず、當に能く自體に一切を開悟すべし。時に世尊言はく。汝善男子、善哉善哉、汝が所説の如し。爾の時に難調惡心怨讐あるものは世尊に白して言く。世尊、我今即ち是に授記せられ以て世尊の稱歎善哉を蒙れり。然りと雖も世尊は但、我記とともに此大衆をして踊躍を得せしめ、心意歡喜して更に勝心を發し、怯弱ならざらむが爲の故に。世尊、我今彼の法を見て歡喜踊躍せず。世尊、一切諸法は思念有ること無く、眞實有ること無く、分別の所起なり。分別を以ての故に、莊嚴有り、猶幻化の如く、夢の所見の如く、旋火輪の如し。我れ彼等に於て如實に覺知せり。佛世尊の無所有菩薩の爲に解釋するが如く、我亦隨順せん。隨順無きが故なり。

【二元】法義を説く才能の極めて通達善巧なるを云ふ。

聽聞し已つて此に來至せり。教示菩薩復た之に問ふて言く。善男子等、汝は何なる法を聞けるや。彼之に答へて言く。我等亦聞けり。菩薩有りて無所有と名く、佛に問ひ、爲に解釋す。亦此間釋迦如來所解の說法の如し。亦復た増減有ること無し。彼の菩薩も亦無所有と名く。彼の佛に問はんに、彼の佛世尊は亦是の如く説けり、煩惱を起さずして疑惑を斷ぜしめ、光明を作らしめ諸佛、及び一切智、無等等法二五に近かしむ。

爾の時に大衆は希有の心を生じ、皆此念を作す。彼の諸人等は善く人身を得、善く壽命を得て、佛の出世に値ひ諸佛に隨順し、無所有菩薩の所問と是の如き等の法を聞き信入し奉行し、無相無得にして煩惱を起さず。世尊、我今善く大利を得、善く人身を得、善く壽命を得たり。我等今は無所有菩薩の所問と佛の解釋を聞く時に耳根に於て聞き、聞の如く信解して疑惑有ること無く、觸證する所有りて、我今一切智を知るを得已れり。亦當に是の如く諸の衆生の爲に利益を作して、善く普ねく覆ふを得む。我等今はたとひ能く一切の珍寶の此三千大千世界を滿せるを持つて用つて布施するも是の如き等を以ては猶是の無所有菩薩の徳に報すること能はず。而も身を現ぜずして能く如來に寂靜の法を問ひ、能く無量の衆生の疑惑、顛倒の意を斷ず。我等今當に何事を以て此の身を現ぜざる者を供養すべけん。

爾の時に無所有菩薩、是の如き言を作す。諸の善男子、汝等若し是の如き等の法を聞いて能く信解せば、即ち已に上妙の供養を一切の諸佛及び諸菩薩に作せりとす。我今問ふ所を佛は爲に解釋したまへり。汝等若し疑惑處無く熱惱處無きを得ば菩提を成ぜん時諸の衆生の爲に利益を作すが故に、衆生の執著をして解脱せしむるが故に、亦、彼の惡心にして怨讐ありて人を害せん者を化するが故に、唯、若干の事を是故を以て問ふて如來を勸請せり。我今已に諸佛の法教を顯はし、已に一切の無明黑闇を照せり。

【二五】無等等(Aśamansya)とは、佛道又は佛の尊號を指す。佛道は超絶して他に與に等しきもの無ければ無等等と云ひ、唯佛と佛とのみ等しければ等と云ふ。



べし。邪徑に著して當に惡業を作らず。善男子、我已に一切衆生の爲に利益し安樂ならしめてもつて攀縁となる。今汝に向つて説かんに、虚妄有るにとなし。佛自ら證知したまへり。若し佛世尊、記を授けずんば、我菩提に於て我即ち自ら記さむ。所以はいかん。我已に菩薩種子に信入し已に信忍に住し疑無く惑無し。此諸佛の大神通の中に於て、此に是の一切の諸の菩薩等は所著有ること無く、菩提心を發して根本となす。若し増長し已れば次第に能く菩提の果及び一切の智、一切の佛法の當に覺り當に知るべきを證し、次第に無量の衆生を成熟し、菩提道に於ても亦當に成就して菩薩の不動法の中に住すべし。善男子、是の如く、如にして異無く別無し。能く是の如くなれば願ふて諸相を生ず。然るに諸の衆生は厭離想有り無疑惑を得て、願ふて當に佛の大神通の處に入り自ら我の少分を見るべし。所以はいかん、其佛の神通は無量有るが故なり。善男子、諸佛、世尊は大神通を以て能く決了して、諸の菩薩等、若し未だ忍を得ざれば唯、信行を以てし、若し諸の菩薩、忍を得る有れば、佛の神通の少分に於て已に入るを見る。爾の時に佛は神通力を以ての故に、此の大地の六種の震動に於て安樂にして潤澤なり。一衆生の驚怖する者有ることなし。一切の音樂は鼓たすして自ら鳴り、上虚空より 優波羅花・鉢頭摩花・拘勿頭花・芥陀利花を雨し、虚空中に於て自然に種種の天衣の懸垂して現はるゝ有り、衆の天人は所有の諸香を燒けり。彼の一切の衆の所有三千大千世界の彼の菩薩等邊際を知らず。彼等は皆悉く此花を掬つて以て佛上と散す。是の如く再三にし、及び此衆に散す。時に復た十六俱致百千那由他等の蓮花の猶、車輪の如くなるもの有て地より涌出せり。彼の花臺中には菩薩有つて坐し、皆悉く三十二相を具足せり。彼の諸の菩薩は各花より下りて還、此花を以て佛上に散じ、花を供養し已つて、合掌し禮敬して佛に向つて住せり。

爾の時に教示菩薩は佛の威神を承けて而して彼等、諸の菩薩に問ふて言く。善男子等、汝は何より來れるや。彼の菩薩言はく。我れ十方阿僧祇等の諸の世界中より阿僧祇の佛に奉侍し禮敬し法を

【三】 大正藏に如是とあるも此にては如々とす久原文車本の説による。

【四】 優波羅(Utala)は青蓮華なり。  
 【五】 鉢頭摩(Padma)は赤蓮華なり。  
 【六】 拘勿頭(Kumuda)は黃色華なり。  
 【七】 分陀利(Pundarika)白蓮華なり。

是の如し、利智得聞の菩薩を無所有と名く。世尊に空義を請問して漏を斷じ、煩惱顛倒の分別を起さず、瞋恚の意慳貪妬嫉を斷じ、恩義無き處悉く能く破除して、無言説を得ることを聞くを得て、佛所に從つて解説を聞く、之時に聞き已つて更に復た利智を増益し、復た諸佛の大神通の事に入れり、故に是の如き勝利の功德を得たり。

爾の時に復た教示菩薩摩訶薩有り、座より起つて衣服を整理し、偏に右邊を祖し、右膝を地に著け、合掌して佛に向ひ所問有らんと欲す。彼合掌の時佛神力の故に、水陸所生の種々の妙花開敷する者有り、色香微妙にして其手中に満てり、即ち歡喜踊躍を生ずること無量なり、歡喜の意を以て彼の諸花を用つて佛上に散じ、再三散じ已つて而して佛に白して言く。世尊、今此の調じ難く人を殺害せん者、已に會て菩提心を發せりや、と。時に佛告げて言はく。汝善男子、宜く應さに還つて此の調じ難く人を殺害せん者に問ふべし。是の善男子、當に汝が爲に説くべし、と。

爾の時に教示菩薩、還つて復た合掌しもつて之に問ふて言く。汝善男子、已に會て菩提心を發せしや、と。彼即ち答て言く。善男子、我今即ち是に菩提心を發して清淨無濁なるを知れり。我れ佛の大神通を聞き已つて即ち諸惡を斷ぜしが如し。而して復た此無所有菩薩の所問と世尊の解釋を聞くを得たり、聞き已つて信受し念持し觀察して疑網有ること無し。世尊の説に於て、一切諸法は空にして我有ること無し。生無く滅無く境界有ること無し。境界處無く、虛空處無し。汝善男子、此の如き處に於て何心をか起して所問有らんと欲する、と。

教示菩薩復た彼に問ふて言く。汝善男子、汝衆生の幾所に於て菩提を成熟したる耶、と。彼即ち答へて言く。善男子、我、無量不思議の等しく瞋恚すべからざる諸の衆生に於て、菩提の種子を成熟し安置し、無邊却に於ても當に更に所有の衆生を成熟すべし。善男子、譬へば虛空の容受する所多きが如し。佛法も亦爾なり容受無量なり。若し信受有れば彼能く成熟し、亦一切衆生をも成熟す

爾の時に大臣、王に啓白して言く、大王當に知るべし、其の刑を主る者の名を氣噓と曰へり。其命已つて其れ彼に子有りしも身亦命終せり。大王當に知るべし、人死に合ふ者を殺すもの有ること無し、と。

爾の時に彼の王は大臣に告げて言く、彼の氣噓の門に頗種族有つて、彼の世業を受くるの資生れたるや否や、と。臣、王に白して言く、彼の氣噓の門に現に孤子有りて其世業を受く、と。王、臣に勅して言く、汝等往つて彼孤子を將ゐて來り我に見えしむべし、と。大臣勅を受け將ゐ來つて王に見ゆ。王之に勅して言く、童子よ、汝今既に氣噓の世業を受けて資生す。云何が死に合ふ人を刑殺するを習はざるや、と。彼、王に答へて言く、敬して王教の如くせんも、我れに親屬有りて、我が殺を聽さず。王今若し從來の命に遣伏せしめば、我れ暫く家に還り、須臾にして復た來らんと。

王言く、童子よ、汝時を知るべし宜しく應さに速かに來るべし、と。彼、家に至れば、已に所有の妻子及び諸の眷屬皆命を斷ち已りしかば、還つて王所に至り、而して王に白して言く、大王當に知るべし。我が親屬皆已に殺盡せり。更に人有りて我が殺を遮る者無し。唯願くば、大王我に所作を勅すべし、と。是に於て即ち刀杖殺具を付するに、彼仍ち受けず。王復た勅して言く、汝今何故に刀杖を受けざるや、と。彼王に報へて言く、大王、我今既に名けて刑殺害の人なをを知る。自ら牙齒有れば刀杖を假らず、大王、當に知るべし。若し齒力無くば彼の刀杖を須ひん。我に牙齒有り死に合ふ者有れば我齒齧を用ひてもつて彼の命を斷ぜん。

彼の血を飲み已つて我身を資潤し、氣力を増益せん、と。是に於て即ち合死の人を取り、齒を以て項を齧み、而して其命を斷じ、即ち其血を飲む。其血を飲み已つて氣力倍增し、威勢嚴熾にして倍す更に惡を増せり。善男子、彼の調伏すること難く人を殺せん者は、彼の時間に於て多く衆生を殺し皆其血を飲み、惡心嚴熾にして心智猛利なりき。



由他歳なり。若し彼の身を捨つれば還つて復た見毒蛇中に生ぜり。是の如く次第して五百歳を経て、常に當に見毒蛇の身を受けぬ。若し彼身を捨つれば還つて復た阿鼻地獄に生ぜり。彼の惡集つて是の如く起るを以ての故なり。

最後の生に於て彼は毒蛇の母愛に縛せらるゝが故に、若干の蟲を殺して彼に與へて食せしむるに、食し已つて飽滿し、身は安樂なるを得て便ち睡眠を得、晝夜に覺めず、彼睡眠せる時、其母は即爲に多く諸の蟲を殺し或は千數に至れり。其命を斷つてもつて其の左右に置き、周匝圍繞して復、其の口邊に置くに、皆にして大聚を成ぜり。彼睡より覺め已つて彼の諸の蟲を食し、身潤ひて飽滿し還つて安穩なることを得たり。尋いで復た睡眠して七日夜を経たり。彼の母は復た七日夜中に於て百千の虫を殺し、其の口邊に置いて大聚をなせり。彼は睡より覺め已つて、彼の虫聚を食ひて而も猶未だ盡きざるに、即ち其の母、更に諸蟲を殺し、持ち來つて聚集し更に一聚をなすを見て、彼、即ち念を生ぜり。奇なる哉、我母は能く難事をなし、我を愛するがための故にそこばくの蟲を求め、我に與へて食せしむ、然るに我は今に於て厭足するを知らず、然も食盡さずして邊際を知らず。我れ今應さに是の如く食を求めて、我母をして我を愛するが爲の故に我が爲に食を求めしむべからず。我れ今母に於て能く何の報をか作さんと。彼は母の所に於て慈愛心を起し、益處有るを知り恩義有るを知り、即ち愛心を生じ憐愍心を生ぜり。彼、身を資潤するや、復た母に於て慈念心を生ずるを以て稍、柔潤あり。即ち睡眠に於て身心安樂なりき。彼の時、遇たま薪草を取る人有りて皆共に之を見、即ち利斧を以て其命根を斷ぜるに、彼命終し已りぬ。旃陀羅有り名けて氣噓と曰ふ。彼の子の家に生るるや還つて惡心有り、彼れ時に祖父氣噓死して後、氣噓の子復た刑殺に當り、復た後時に於て彼の氣噓の子の身復命終す、既に命終し已つて遂に此業を絶つ。死に合ふ者有るも人の刑殺するもの無し。

れり。今聞義を知り、是等の大衆を見て、即ち自身を厭ひ、自ら最下類を見て、佛の神通を知る故に、復た更に信深く入り、不可思議等は、彼入つて即ち得、非法、非非法、此は是佛の神通なり。諸の世間の無上は、無分別を覺り已つて、所無く得ざる無し、此害人は利根なり。

所聞の如く聞は已つて、利根は我に向つて説く。諸佛は之れ法體なり、衆生心は頑鈍にして、癡網の爲に覆はる、復た多時に聞くと雖も、佛の神通を知らず。我れ昔會て佛を見、證して人中の上と作り、是の大神通を覺り、後に於て授記を得、過去八十四阿僧祇劫中に、我れ然燈佛に値ひ、以て有爲法を知り、所得有るを以ての故に得の所覆となり、もつて我想到著して、諸の煩惱に惑ひ、佛の神通を覺らず、執著有るをもつて、生死中に流轉して、しばし邊際を得ず。自餘に若し是の如は佛の神通を覺らざる菩薩摩訶薩は、彼れ亦多時に著あらん。是の諸の菩薩等は速かに菩提寂靜佛の神通を證せんと欲して、應さに願覺入すべし。是の如く調伏すべきこと難く、害人と名くる者が、還つて利智根を得、故に彼れ得ること難からず。

爾の時に衆中の無煩天子は、即ち諸天の曼陀羅華を以てもつて佛上に散じ、合掌し供敬してもつて佛に白して言く。世尊、何の因縁を以て、是の惡心調し難く人を殺害する者は、是の如く利智根にして智慧微妙に、乃ち能く是の如く速疾に決了するや、と。

是語を説き已つて、爾時に佛は無類天子に告げて言はく。天子諦かに聽け、是の惡心調し難く人を殺害する者は過去世に於て會て五百生なり。毒蛇身を受け、見れば即ち物を害す。彼れ身を受け已つて、日夜の中に於て、多く衆生の彼の爲に害せらるもの有りき。飢惱するを以ての故に皆彼を食し盡くして猶足る能はず。食し已れば消滅して皆灰燼と成れり。彼は食を求むるを以て睡眠するを得ず。身は安穩ならずして惡心更に増せり。或は日夜半月一月を經、或は年歳を經て、惡心に因つての故に命終を取つて、即ち阿鼻地獄に墮し、彼の處に生れ已て大苦惱を受けること百千俱胝那

【二】曼陀羅(Mandala)の華は又、天妙華、白團華、適意華等とも云ひ、見者心悅すると云ふ。

【三】阿鼻(Avīci)とは無間と譯す、苦を受くること間斷無き故なり。最苦の處なるが故に極惡の人これに墮す。

の過去佛は、彼是の如く説法せり、若し當來佛有らば、彼當に是の如く説くべし、十方世界に於て、現在兩足尊、彼の所説の法教は、亦是の如く無二なり、若し衆生有るが故に、能く是の法を説かば、當に我が所説の如くなるべし。是の如く當に覺知すべし、若し此法を覺らずして、もつて當に涅槃を得ば、終に觸證する能はず、及び當に菩提に住せざるべし。此彼皆具足せり、此は是諸佛の見なり。所有は是の如き法なり、及び是の如き見處なり。衆生界は時を求めて、出現し得べきこと難し、若し此諸法を覺らば、眞實體は空寂なり、諸法に實有ること無し、諸法は亦有ること無し。若し法想有ること無ければ、一切に寂靜有り、此彼、如實に知つて、諸法に得處無く、所有の所問無く、所有の所説無し。時に彼の摩訶薩は、名けて無所有と曰ふ。以て如來を念じ、復た人中の上に問ふ。所説の是の如き法は不可見にして而も説く、誰か能く是の如きを覺らん。覺知すべからずんば、是等の多億天、及び諸の四部の衆は、十指の爪掌を合し、意を寂してもつて聽聞し、彼は聞き已つて欣慶し、而して所得有ること無し。無智及び得處、多衆は是の意に住し、若し未だ知らざる有れば、彼等は欲樂を起し、勤精進の意を發して、當に聞いて知るを得べし。是の如く眞義を聞けり。眞智は分別無し。如にして如ならざる無し。眞は復た是の如く説く。諸佛の妙法を聞き、大神通を所見して、皆歡喜の意を發して、當に上菩提を得べし。多く俱致天有り、及び百那由他は、已に覺つて自ら證知せり、我が之の所説の如し。今我が此衆中、所有の聞法者は、倍して百千數有り、已に眞法を觸證し、皆已に共に和合せり。昔恒沙の佛の所に、已に聞いて是法を覺れり。彼は聞きて今觸證し、彼は此に當に作佛すべし。我が今の所在の如く、當に是の如く説法すべし、増減有ること無し。是れ人を殺害せん者、往昔、生處に於て、曾て是の如く法を聞き、昔未だ曾て聞かざる所を、彼今に於て聞くを得たり。無所有の解釋は、已に佛神通に入



く身を知るべし。即ち具足願を得て、好色にして甚だ端正なり、見ん者歡喜を生ず。丈夫富伽羅は、是の如き教を覺知し、正行、正念なれば、聞持し已つて能く思はんを、智慧丈夫と名く。衆の爲に疑網を決すればなり。若し多くの衆生有つて、疑惑して定意無く、智慧を求めんと欲せば、彼は能く爲に疑を斷ぜしむ。若し不正道に住せば、彼は正路に住せしむ。<sup>二九</sup>幽冥の諸の衆生に、能く彼は照明となり、所有の受生の處と一切處とに明を得しむ。衆生は爲に愛樂す。此教を覺知するが故に、壽命は長遠なるを得て、諸根は悉く具足し、常に勝族姓に生れ、眷屬皆隨順せん。何等の生處に隨つて、一切の利益を爲し、并びに餘の衆生等を悉く菩提に住せしめん。若し是等の法を聞かば、能く速かに自ら證見し、諸の衆生をして、當さに常に供敬し奉事せしむべし。當さに常に福田と作り、一切施を受くるに堪へ、常に善丈夫となる、世間<sup>三〇</sup>支提と爲りて、諸佛の前に住し、一切の勝施に於て、無上世尊の邊に、彼等は施主に堪へ、諸の世間を降伏して、當に福田と作るべし。若し是の如き法を聞かば、能く勤修し速かに證せん。一切の諸佛の教は、此修多羅の説なり。是の如く菩提を覺つて、如如に分別なし。此益は法教のためなり。當に菩提行を行すべし、阿僧祇劫數に、是の教法を聞くが故に、若し人天の中に於て、諸の果報を受けんと欲せば、能く是法を聞き、應さに勤修し速かに證すべし。彼に能く降伏無く、諸の衆生を調禦し、諸の餘衆に於て、彼は恒に威徳有り、彼の智は能く利するを得、善く壽命を得、佛の出世に値ふを得ん。能く此の教を聞くが故に、所有の諸の佛法に、彼は不思議を知り、彼は爲に聲聞と作る。復た僧の功德を得、一切法を捨て、復た内の自身を得、應さに修多羅を聽くべし。聞き已つて應さに覺知すべし。此法は説かざる無し、是の處に所説無し。是の如き等の諸法は、此中に是の如く説く、取らず亦捨てず、亦得失有ること無し、處として持ち來るべき無し、是の法に住處無し。所有

【二八】富伽羅 (Pudgala) は人、又は衆生と譯す。

【二九】幽冥とは、三惡道の眞理の光無き處を云ふ。

【三〇】支提 (Cetiya) は新譯には制多と譯す、廟の意、或は禮拜所、神聖な場所の意なり。

若し内外の法に於て、所有あつちゅう依著無くば、此は是れ最勝の智なり。智は能く散すること無く、當に一切法を觀すべし。若し智處有ること無ければ、是の如く觸知し已つて、諸世に染著せず。是の如く如實に知り、常に能く一切に施して、亦一切施無く、彼に所取有ること無し。諸法は無所有なり。即ち是れ諸の法體なり。彼に所觸しよえく無きを、名けて財富者と爲す。若し能く清涼を思はゞ、善く平等を修して、諸の怯弱有ること無く、疑を斷じて遍普く照さん。清淨にして戒中に住し、彼に熱惱有ること無し。若し所證有ること無くば、彼の戒は所轉無し。解脫は虚空の如く、更に所見有ること無し。虚空の如く清淨なり。故に彼に惡作無く、所見の諸法無し。而して無上道を求むるは、諸の衆生が爲の故なり。所起の煩惱處に、彼彼の身を見ず、彼身を見ざる時、煩惱に縛處無く、解脫は皆夢の如し。更に復た見る所無く、彼無く亦見ず、是の故に夢の如しと名く。是の如き諸の言説、有無等の差別、聲覺觀分別は、空の如く取るべからず。持戒と破戒と、善趣及び惡趣、癡と虛妄との分別は、是の處に眞實無くして、猶、鏡中の像の如し。分別の故に彼を見る、彼に於て無所有なり。色體は實に是の如し。是の如く内に我を計して、士夫は得べからず。内既に無所有なり、外亦得べからず。此は是如如の教なり。是の故に言つて空と爲す。若し能く空を知らば、彼當に寂滅を證すべし。色は因縁によつて生ず、彼の色に實體無し。若し彼の無有を緣せば、彼無く因有ること無し。無因なるが故に不生なり。本性は空にして寂靜なり。取無く亦捨無し、棄無く亦似無し。若し是の無二を證せば、一切の根は能忍なり。若し是の如き忍を得ば、彼は當に速に成佛すべし。我れ是の如く知つて、然燈佛を見るを得、後に我に記を授く。汝往ゆきに當に成佛すべしと。若し善男子及び善女人有れば、彼は是の如き等を覺つて、則ち亦當さに難からざるべし。若し善女人有れば、女身を轉ぜんと欲して、應さに是の如

知者無し。是の如く佛の神通は、復た邊際有ること無し。若し自ら此を證し已れば、即ち是れ勝布施なり。一切施中の上にして、更に惡處に生ぜず。能く一切施を行じ、彼常に施を行ずる時、分別知有ること無し。亦所住有ること無し。是の教を覺知し已つて、彼に物として捨せざるなし。一切生中に於て、是の故に一切を捨つ、若し此法を聞き已つて、能く我思の取を捨て、已つて所著無ければ、是を最上一五檀と爲す。聞き已つて熱惱無く、身心寂靜を得、是を最上戒と爲す。更に勝者有ること無く、一空法中に於て、忍無く靜競無し、是を最勝忍と爲す。中に於て無上者は、諸法空を知り已つて、怯弱心有ること無し。是を勝精進と爲す。中に於て過無き者は空に於て常に亂れず、一切心に發覺す。此は是快禪定なり。惟、聲中に示現し、若は空に於て怖れず、一切智は無想にして、睡眠無知を離る。是の智を最上と爲す。是等の諸度を行じ、是の教の中に入り、若し無言説を知らば、彼は諸度を度し、諸法を壞たず、亦逼惱有ること無し。彼は即ち正法を知るなり。無功用の智は定なり。諸法を壞たず、亦逼迫有ること無し。無智は寂靜なるが故なり。施をもつて彼岸に度る。若し諸法を壞たず、亦諸法に逼られずば此は是れ最勝の戒なり。一切の戒中の上なり。若し物を破壊せず、非法に於ても亦然なり。是の如く疑ひ無き已れば、更に惡道に墮せざるなり。忍の若きは無盡なるが故に、一切有爲を覺る。此は是れ最勝の忍なり。一切の鬪諍を斷じて、常に是忍に習近し、晝夜に休息せず、是の如く身に觸證せば、當に喜ぶべき色を得べし。常に空を修習せん時、勞倦の意を生ぜずば、是れ即ち上精進なり。一切の懈怠を捨てたる、是の如きの彼の精進を、若し能く身に觸し已れば、即ち上精進と名く。一切に過無き者は、空法と及び禪寂滅とに著せず、此は是最勝空なり。諸の覺觀を遠離して、是中に禪喜する者、彼は諸の煩惱を捨て、是の如く身に觸し已つて、即ち輕躁有ること無し。

【一四】檀(Dana)とは布施と譯す。

【一六】宋元明三本に依りて唯を惟と改む。

【一七】宋元明三本に依て若を常に改む。



思慮無くば彼を忍辱者と名く。佛の神通を覺り已つて、彼心に怯弱無く、更に復た精進を生ず。故に精進者と名く。佛の神通を覺り已つて、彼心散亂せず、一切の諸相を捨つ、故に禪定者と名く。佛の神通を覺り已つて、彼は三界に著せず、諸の障礙を超越す。故に智度者と名く。是は一切處に行ず、諸度の調伏の者は、一切の佛を覺知せん。是を佛神通と名く。爾の時に惡心調し難く人を害せん者、佛に白して言く、世尊、一一の諸佛の法教は覺り難し、微妙智者は更に深く思惟せん。而して偈を説いて言く。

若し聞く有れば觸證すべし、云何が神通を覺つて、彼當に能く是等の諸の六度及び菩提を助くる法を満足するや。何をか佛神通と謂はん、何なる實體の相有るや、彼何の色住有りや、何をか證を得と云ふや。

爾の時に世尊、偈を以て彼の惡心調し難く人を害する者に報へて言はく、

若し自ら覺知する有れば、自ら已に衆生無し。一切法中の智は、是れ佛神通なり、衆生に著心有れば、教ふるに空法中に於てす。是の如く衆生を教へて、當に佛の神通を得しむべし。

衆生に著心有れば、當に一心に普く覺らしむべし。亦當に發心せしむべからず。此は是佛の神通なり。所有の諸の佛刹は、即ち一佛刹なるを知る。彼此相入せず。此は是佛の神通なり。諸法の不生を知り、能く菩提心を發せば、諸の衆生は一生となるが故に佛神通と言ふ。

忍心を神通と爲す。忍法の體も亦盡く、一切法に入りて亦所住有ること無し。彼は佛神通に住し、一切法に疑無し。無疑無生の法なり、故に彼は授記を得。衆生を成熟せんが故に、當に佛刹を清淨にし、多劫に於て修行し、當に佛智を得べきが故に、諸佛の空を覺知す。一切を最も上と爲し、佛法の彼岸に渡る。衆生を成熟せんが故に、佛聲及び神通、

文義を皆能く證し、祕密教の中に於ても、即ち彼岸に渡るを得。無邊は取るべからず、亦偏

【二四】宋元明三本に依りて言を心と改む。

たり。寂靜無比の智は、寂して所寂有ること無し。何事をか爲して、布施して、多百爾所劫となるも、我に布施の行無し。已に無比に寂を證せばなり。布施の中に何をか作さば、彼の施は寂と爲さざるなり。寂靜無比の智は、寂して寂處有ること無し。何事をか爲して持戒し、多百爾所劫となるも、我には今、持戒ならず、已に無比の寂を證せばなり。寂中には持戒無く、戒も亦寂を爲さず、已に無比の寂を知り、所寂に寂處無し。何事をか爲して忍を修し、多百爾所劫となるも、我今忍を修せず、已に無比の寂を證せばなり。寂の中何の所忍かあらむ、忍も亦寂と爲さず。已に無比の寂を知り、所寂に寂處無し。何をか爲して精進し、多百爾所劫となるも、我れには精進を行すとせず、已に無比の寂を證せばなり、寂中に進を用ふるも、寂滅には精進無しと爲す。已に無比の寂を知り、所寂に寂處無し。何をか爲して修禪し、多百爾所劫となるも、我には今修禪ならず、已に無比の寂を證せばなり。中に於て禪を用ふるも寂中に禪定無しと爲す。已に無比の寂を知り、所寂に寂處無し。何をか爲して智慧を修し、多百爾所劫となるも。我には未だ智慧を修すとせず、已に無比の寂を證せばなり。中に於て智を用ふるも、寂中に智慧無しと爲す。何ぞ施戒忍、精進及び禪定、智慧等の諸度を用ゐん。何ぞ多くの所行を用ゐん。我れ無智なるを以ての故に、已に寂の無比なるを知れり。中に於て智は何をか作さむ。寂中には智を用ひること無し。願くは我が爲に解釋したまへ。所有諸法中に、一切智は自在なり、尊は知らざる者無し。彼此義を問ひ已り、兩足尊は釋を爲したまふ。如實、眞如等は、散せず亦合せず、取らず亦捨てず、汝今當に知るべし、中及び自他に於て當に更に疑ひ有ること無く、佛の神通を知り已れば、則ち我想を離れ、亦復、言說無し。自身に無上を捨て、佛の神通を覺り已れば、一切の罪皆滅す。滅し已つて熱惱無し、故に持戒者と名く。佛の神通を聞き已つて、彼は大神通を言ひ、如實に

作せり。嗚呼、諸佛の神通は是の如しと。世尊、我れ佛の神通を念する時、即ち世尊を見るに、彼  
 の水中に坐してもつて水に著かず、我れ亦五菴摩羅果及び六菩提果有りて缺壊せる所無く、佛を繞つ  
 て三匝し佛前に在つて住するを見る。佛爲に說法し復た諸佛の大神通等を説きたまふに、說法せら  
 るゝ時菩薩形を成じて、佛を頂禮し已つて即ち没して現ぜず。復、世尊を見るに毘富羅山に在りて  
 衆の爲に說法し是の如く略説したまへり。乃至、火を成じ又螢火を成じ、又復た風大毗羅果を成ず。  
 是は則ち地を成じて大母指の如し。一切世間は即ち一世間なり。一世間は即ち一切世間なり。彼の  
 諸の世間に復た無智を成じて彼は則ち眞體なり。我れ彼時に佛の神通に於て是の如く觸證せり。是  
 を思惟して疑惑を生ぜず、亦恐怖せず心慮を行ぜず。爾の時に一如來の形像有りて我前に在つて住  
 せり、而して我に謂つて言く、汝善男子、幾時に於ても六七波羅蜜を行じて能く此の佛の大神通  
 を信じ廣く證を思惟せよ。世尊、我れ彼の時に彼の佛に白して言はく、所言の如き六波羅蜜とは、  
 是れ何を謂ふとせんや、彼れ我に告げて言はく、所謂九檀波羅蜜・九尸波羅蜜・一〇羼提波羅蜜・二毘梨耶  
 波羅蜜・一三禪波羅蜜・一三般若波羅蜜なり。汝善男子、是の如きを名けて六波羅蜜と爲す。行じ已つて  
 當に諸佛の大神通の中に證入するを得べし。汝已に佛の大神通を成じ已りぬ、我れ時に白して言く、  
 是の故に世間、諸天、及び人、阿修羅等我れ今説くを聽かん。現に今世尊は我が爲に證明したまふ、  
 諸法中に於て無礙智を得たりと。世尊は現に知りたまふ、我れ今説くが如し。我れ未だ曾て六波羅  
 蜜を行ぜず、而も佛の大神通を證するを得たり、我れ今始めて六波羅蜜を聞けり。我れ本、前際に  
 は黒闇中に墮して知るを得べからざりき。今世尊を見、無所有菩薩の所問と世尊の解釋は我れ既に  
 聞き已つて諸法中に於て復黒闇無く、諸陰聚、分別法の中に於て所著無きを得たり、而して偈を説  
 いて言く。

我れ寂靜の智を得たり、復た所著有ること無し。今已に諸苦を脱して、現（あまた）に不動の樂を得

【五】 庵婆羅(Amra)の果は桃や梨に似たものであると云ふ。  
 【六】 菩提果は、菩提樹(Bodhi-druma)の實なり。

【七】 波羅蜜(Paramita)は度、或は到彼岸と譯す。生死の海を度りて菩提の彼岸に到ればなり。  
 【八】 檀波羅蜜(Dānaparamita)は布施波羅蜜なり。  
 【九】 尸波羅蜜は(Sīlāparamita)持戒波羅蜜なり。  
 【一〇】 羼提波羅蜜(Kaṣṭhāparamita)は忍辱波羅蜜なり。  
 【一一】 毘梨耶波羅蜜(Vīrya-paramita)は精進波羅蜜なり。  
 【一二】 禪波羅蜜(Dhyāna-paramita)は禪定波羅蜜なり。  
 【一三】 般若波羅蜜(Prajñāparamita)は智慧波羅蜜なり。



て、餘の世界無佛の處に至り、彼に於て般若波羅蜜の法要を演説し、無量の衆生を教化し成熟して菩提に住せしめ、諸佛の法中にて勤修して斷ぜず、説法を爲すが故に彼等は還没し、如來の鉢中の果還盈滿す。復た此果を見るに鉢より出でて一切世間の衆生を供養し自身を充潤して皆佛所に至る。

佛足を頂禮し右遶三匝して合掌し恭敬して却つて一面に住す。世尊の所聞に従つて無所有、法相を解釋し、一心に聽受して更に見る所無く、更に知有ること無し。世尊、我れ亦是の如く、聽入し隨順して所説の如く行す。我れ是の如く知る、我身は佛及び此大衆と與に空にして説くべき無し。

是の如く念する時、一佛像有り、起つて我に語つて言はく、汝善男子、此は是諸佛大徳の神通なり、我れ彼時に於て所得の諸想我想を行ぜず亦歡喜無し亦怯弱ならず我れ唯諸佛の神通に信入し、是の如く思惟す、願くは諸の衆生の未だ入らざる者は入らしめ、未だ度せざる者は度せしめんと。

我れ是心を發す、願くは諸の衆生をして佛の神通に於て圓滿無缺ならしめんと。我れ時に亦復た衆生想無し。然るに我れ佛の大徳神通に於て破壊すべからず、諸の衆生及び此大衆をして成熟せしめんが爲の故に是の如き言を作す。嗚呼、諸佛の大徳神通は、是の如く希有にして、我今乃ち見たり、然るに佛の神通は亦増減無し。彼の時に復た空中に佛有つて是の如き言を作すを見る。汝善男子、更に諸佛の神通に信入することを求むべし、と。世尊、我れ彼の時に於て一心に諸佛の神通に信入し、一心に念する時即ち諸佛の神通力を見たるが故に、一切衆生は即ち一衆生、一衆生は即ち一切衆生なりき。然るに彼の一切は我れ亦見す。世尊、我れ彼の時に是の如きの念を作せり。諸佛の神通は不可思議なり、と。もし我れ佛の大神通等を見ば、我れ彼の時に更に諸佛の大徳神通を求めて亦厭足無く、我れ彼を求むる時更に轉じて信入し更に復た專念せむ。思惟觸證をして増廣せしめんが故に。世尊、我れ彼の時に此三千大千世界を見るに四方の所有の毗富羅山、佛及び四衆・天人・修羅・諸世界、等皆大海を成じ、清淨無濁にして更に餘相無かりき。世尊、我れ彼の時に復た是念を

【二】宋元明三本に依て智を知と改む。

【三】宋元明三本に依りて徳の字を補ふ。

【四】四衆とは、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷なり。

## 卷の第二

世尊、我れ彼時に於て、復た彼の諸の聽法の大衆を見るに、天人の花及び衆の寶物を以て、佛上及び諸の菩薩に散じ聽法し已て、復た更に種々の音樂、雜色の衣服（衣服）を出生して世尊を供養し、諸の衣服を以て世尊の上に覆ひ、還つて本處に坐して共に聽法せり。

世尊、我れ彼時に復た是の念を作せり。嗚呼、諸佛の神通は無礙なり、思惟し信入し隨順して行ぜんと。世尊、我れ此の無礙法聲を説くを聞きて即ち覺知に入り、而して偈を説いて言く、

我れ寂靜を覺らん時、障礙の處有ることなし。即ち一切苦を脱して、不動の樂を得ん。

世尊、我れ彼時に於て復た空中に於て、如來身を見て是の言を説くを聞けり。汝、善男子、汝、意を捨つる莫れ、汝、應さに更に諸佛の神通を信じて勤求し信入すべし。汝、善男子、汝は長夜に於て無智にして愚癡なり。恒に欺誑の爲めに苦惱を受くるが故なりと。世尊、我れ彼時に是語を聞き已つて、復た恐怖を生じ身毛皆堅てり、一心に思惟して佛の神通を求む。我れ思惟せる時、即ち

三千大千世界を見るに、所有草木樹林花果皆悉く開敷し、好色香潔にして甚だ愛樂すべし、世間・

天・人・阿修羅・等、皆花を以て佛に散じ供養し已つて還つて没して現ぜず。復た諸の果の香潔無比なるもの有り。復た世尊を見るに左手に鉢を執り、諸果を取つて以て鉢中を滿せり、又世尊を見るに臍の中に於て諸の化の菩薩を出せり。鉢の中より果を取り已て、遍ねく十方の阿僧祇等の諸世界中に至つて、無量の諸佛世尊に授與したまふ。彼の世尊の鉢は皆悉く盈滿せり。我れ彼の佛世尊を見るに食せるの時に、臍中に復た諸の化の菩薩を出せり。身は皆金色にして衆相莊嚴なり。身より出て已つて我れ復た彼の諸世界中を見るに、諸の菩薩及び諸の衆生有り、彼は諸の果を以て奉獻し供養す。既に奉獻し已つて彼の食する時を見るに、彼等は食し已つて皆悉く如來の形相を成ずるを得

【一】 三千世界とは、小千世界と中千世界と大千世界の總稱にして一世界は日、月、須彌山、四天下、四王天、三十三天、夜摩天、兜率天、樂變化天、他化自在天、梵世天にしてこれを千個合したるを小千世界と云ひ小千世界を千個合したるを中千世界と云ひ、中千世界を千個合して大千世界と云ふなり。

無く、言説有ること無し。是の法を聞き已つて自身を見ず、知無く得無く、亦處所無し。當に彼時に於て如來像有りて我前に出現せんに、彼時間に於て即ち自ら身を見及び諸佛を見、還つて復た世尊身に來入して世尊身を見ず、世尊身に増減有るを見ず、世尊の住處に明暗を見ざりき。佛彼に告げて言はく。汝善男子、此は是彼等諸佛如來の大神通力なり。彼調じ難くして佛に白して言く、唯然、世尊、我今佛の大神通力に於て更に疑有ること無し。我れ疑無きが故に無量の諸菩薩等の、身は皆金色にして三十二の大人の相有りて、諸の音樂、種々の香華を持つて、甚だ悅樂し世尊を禮拜し、奉獻し供養して香華を以て佛上に散じ已て、無所有の所問の法を聞き、歡喜踊躍其身に遍滿し、即ち自ら稱歎欣慶して去れるを見たり。世尊、我れ彼時に於て是の如き念を作す。此れ是の諸佛の神通の力は衆生の邊際を得る有ること無し。我れ彼時に於て還入して諸佛の神通を思惟し、此を思求せり、時に此聽衆たる比丘比丘尼・優婆塞優婆夷・天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・緊那羅・摩睺羅伽、等の一切の大衆を見て、もつて偈を説いて言く、

無比なり、寂を知り已つて、處所に染著無し。當に一切苦を脱して、もつて不動の樂を得べし。



て一の能く世尊に功德光明、衆相、諸色、形貌、長短、若くは寛廣、等には能く勝ふ有らむ者有るを見ず。世尊、我れ自ら身を見るに最も卑賤と爲す、我れ爾の時に自身に於て惡穢の想を生じ、輕弱想、不如物想を生ぜり。我れ、爾の時に自身を毀辱して、我れ今利無く我れ今惡に活き、我れ是の如く多人衆中に於て、最も下賤と爲し最も穢惡と爲し、最も不如と爲し、最も嚴熾と爲せり。世尊、我れ爾の時に自身を厭惡し是の如く羞愧せり。若し此大地、我を容受せば即ち中に入らん。唯然、世尊、我れ爾の時に則ち空中に是の如き聲言を聞けり。汝善男子、但諸佛大德法身を信ぜよ、汝、當に此下類の身を離るゝを得べしと。我れ爾の時に是の如く思惟せり。正念根の中に諸佛大德法身を念ぜん。是の如く念する時則ち虚空に是の如き聲言を聞けり。善男子、汝、當に莫隣に世尊を諦觀せよ。汝、觀察せん時、即ち當に諸佛の體中に入るを得べし。當に信すべし、當に得べしと。世尊、我れ彼時に合掌し瞻仰し瞬きせずして世尊を瞻仰し、即ち世尊の諸の毛孔中より大蓮花を出したまへるを見たり。衆寶の所成無量色、金色、無邊色有り。諸の蓮華等は大きなこと車輪の如くにして身中より出で、彼の花臺の中に皆諸佛有りて、釋迦如來の如く諸相具足し、皆中に於て坐し虚空に遍滿せり。衆生の能く障礙する者有ること無し。日の光明に於ても亦能く障ぐる無し。世尊、我れ彼時に最勝の歡喜踊躍を生ず。此は是諸佛神通の力なり。我れ彼時に清淨を生じ已に佛世尊を見る。是の如く歡する時即ち所有諸の世界中に佛の出處無きを見て、即ち彼間に往いてもつて爲めに說法して諸の菩薩を攝し、著無く、作無く、熱惱有ること無し、空にして所有無く、言無く説無し、所住有ること無し。彼時に中に多くの俱致那由他、等の百千の衆生有りて菩提心を發して、顛倒の法を離れて無言の空を信じ、多億劫に於て菩提の中に住す。我れ是の如く知ぬ、亦晝を知らず亦夜を知らず、半月一月年節を知らず。我れ是の如く知ぬ、彼時中に於て般若波羅蜜の法を聞いて、染著處無く、言無く説無し。我れ彼時に是の如き法を聞いて、所有の法相に染著有ること

り、諸佛世尊は諸法の中に於ても、諸物の中に於ても嫉と妬意無し。善男子、諸佛世尊は果報を受用す、諸物の中に於て染著無きが故なりと。彼是の念を作す、今は世尊已に我を聽許したまへりと。即ち諸花及び上下衣を以て、遙かに無量の諸佛世尊に散す。彼花衣を見るに諸佛の上に於て、虚空中中に在りて蓋と作つて住す。及び彼衣を見るに諸佛の前に在り。即ち愛樂を生じ歡喜踊躍し、四支を地に投げ世尊の足を禮し、世尊の足を舐めてもつて頂禮を爲す。彼は復た身を見て諸佛及び釋迦牟尼佛を頂禮す。時に彼の諸の世尊及び釋迦牟尼佛は皆右手を以て其頭を摩なでて言はく。起て、善男子、汝今已に無量の福聚を生ぜりと。彼則ち起つて以て、唯釋迦牟尼如來を見るのみ。彼則ち問ふて言く、世尊、彼等無量の諸佛世尊は今何所に在るや、我復た見ず。佛言はく。善男子、此は是れ諸佛の大徳法身なり、具足して無所得なるが故なり。汝應さに信すべしと。彼是の念も作さく、嗚呼、諸佛は不可思議なり、是の如き色有りて大法體を見ると。佛足を頂禮し右邊三匝して、一面に在つて住し、合掌して佛に向ひ、白して言く、世尊、我は是れ惡心調じ難く怨讐ありて人を殺害する者なり、唯然、世尊、我先に作せる如きを此の衆をして知らしめよ。世尊、我此衆生等の爲めの故に是の如く説くなり。此等を聞き已れば、當に是の如き等の惡を厭離せんがために起つべし。先に所有せる毒害の如きは嚴熾なり、若し諸の衆生、我を見ること有る時には恐怖し馳走せり。世尊、我は今朝に於て、死に合あつる者十丈夫を取つて殺し、彼の項を嚙み壞こいて即ち彼の血を飲めり。世尊、我れ時に人血を以て酔へば惡心更に増し、更に人を害せんと求めたり、然るに我れ時に求めて王舍城に在り、漸漸に遊行して東北分に至れり。時に我れ王舍城の中を見るに、多人衆有りて遊行して路に在り、我れ則ち背面して遠くに在つて住す、恐らく彼は我れを見れば怖を生じて迴還すべしなり。世尊、時に彼の人衆は王舍城を出で皆共に毘富羅山に往詣し、到り已つて山に上れり。我れ時に復た多く、俱俱致致那那由由他他の百千の諸天有るを見るに漏滿して邊際を得ず、世尊、我れ彼の時に於

【註】王舍城 (Rājagṛha) は中印度摩伽陀國にあり。

【註】俱致 (Kūṭi) も那由他 (Nāyuta) も數の名にして德にあたる。

徧へに右肩を袒し衣服を整へて、是の如き念を作す。當に何なる事を以て世尊を供養せん。其れ世尊は、具足の法身にして、少物をもつて供養すべからず。如來、大徳は具足の法身なり。然るに我れ今は世間中に先に暗障有り、今世尊を見るに、無所有菩薩の所問を世尊の解釋せらるるに及び法要を聞くを得たり。我れ已に一切法中に於て障礙有ること無くして、已に黑暗を滅し世間を照曜するを得たり。我れ今自らの見に已に天眼を生じ、已に五通を得、我れ今已に諸の苦惱を脱するを得て、我れ自身の著る所の衣服を見れば皆血汚あり、我れ今若し此衣を以て世尊の上に覆んに、唯、如來の所受に任ぜざるを恐る。願くば佛の威神、我をして更に勝物を得て施を奉らしめよ。世尊に供養し、當に用つて奉事すべし。是の如き最勝大徳の法身は、此の如き衆生には具足して有り難し。是の惡心、調ふること難き、怨讐以て人を害する者は是の如き願を起さん。佛如來大徳の神通に信入せんと欲して、念する時に彼の左手の中に、自然に一篋の天華有つて、柔軟にして潤澤なること諸天に過ぐ。衆香は自ら右手の中に燒け、上衣下衣自然に生ず、歡喜、踊躍其身に遍滿せり。更に諸佛大徳の神通に於て、更に信入せんことを求む、彼時に即ち十方無量世界の諸佛皆光明を放つを見る。爾の時に彼れ復た是の如き念を作す。嗚呼、諸佛は思議すべからず、大徳の神通は稱量すべからず、等等有ること無し。願くば諸の衆生は佛の大徳を信じて自身に觸れて皆行願を得む。即ち上衣及び下衣を以て、佛上を覆ひ彼の天華を以て是の如く再三に佛上に散するに虚空中に於て莖の上、葉の下に花蓋を成す。然るに彼復た第二の花篋を生じ、亦第二の上衣及び下衣を生ず、彼復た歡喜、踊躍すること無量にして其身に遍滿す。即ち是念を作す。若し佛、我を聽して此花を以て此の無量の佛に散じ此等の上衣下衣を以て諸佛の上に覆はん、願くば我れ信を生ぜん、諸佛世尊、願くば我をして當に悔意有らしむべく施を成ぜざらしむること勿れ。則ち空中に是の如き聲言を聞く、汝、善男子、汝、應さに普く此の諸の如來に散すべし。善男子、一切諸佛は同一法身な

【四〇】 明本に依りて邊を肩と改む。  
【四一】 舊本に依りて如是を如來と改む。

【四二】 稱量は、はかること。

【四三】 華蓋とは、花を以て飾れる傘蓋のこと。



めに、處所に邊有ること無し、今亦不可得なり、當も亦不可得ならむ。此身を養育せんに、處所に邊有ること無し、今亦不可得なり、當も亦不可得ならむ。此身は我所を起して、處所に邊有ること無し、今亦不可得なり、當も亦不可得ならむ。愛欲等流轉して、處所に邊有ること無し、今亦不可得なり、當も亦不可得ならむ。無實、無物なるに、顛倒して常に欺誑せらるゝ如く、癡にして諸の有爲に惑ひ、是の如く世に誑癡するは、猶癡の小兒の爲めに欺誑せらるゝが如し。是の如く愚無智は虚事を以て誑られ、無實にして愚蒙に誑る。無實なるを知らざるが故に、當に虚妄の苦を受くべし。癡意は毒想を起して自然に自身に於てし、自然に自ら苦に合す。猶、悪行の如くなるが故に、後に自ら三六 刑首を受け、心に思ひて言を出す。身に非善の事を作し、其思は所有無し。言説は亦事無く、其聲は過去無く、過去は亦復無し、過去の我は何とか説かん、亦實相有ること無し。若し是の如く知る有つて、身心是の如く觸るれば、彼は即ち戒行具つて、諸の惡道に生ぜず。此等の四種の偈、舊三七十億數を作る、往昔別生の中、勝菩提を求むるが故なり。我此等の偈を聞き、未だ捨て惡道に墮三九ちず、當に諸佛と無量の人中の雄に逢事して、我れ過去に次第に三九 然燈佛に值遇し、彼の時の觸是の如し。後に我三九 記を得たり。我衆生の爲めに説き後に佛智に住して我れ取るべき所無し。愚癡は教を受けず、嗚呼、衆生の鈍にして盲冥、癡にして無智なる、能く苦の因縁を盡し、之に授くるに肯て欲せず、無智にして肯て取らず、小法を樂ぶ衆生は大法を取らず。若し世間の樂を得、及び世間を解脱せば、當に世間眼を生ずべし。三九 彼に授くるに而かも取らず。此偈を聞くを得て、若し是の如く住し已れば、世に於て分別無し。我れ世間中に於て寂靜にして所著無し、當に一切苦を脱れて不動の樂を得べし。

爾の時に衆中に怨仇を調伏せずして、人を害せんとする者あり。彼の衆中に在つて坐より起つて

【三六】 宋元明三本に依りて形を刑と改む。

【三七】 然燈佛とは、釋迦如來の因行中、第二阿僧祇劫の滿時に於て此の佛の出世に遇ひ此の佛を供養して成佛の記刻を受けたと云ふ。  
【三八】 記とは記刻にして成佛の印可なり。  
【三九】 宋元明三本に依りて常を當と改む。

無し。所有の影は有ること無し。無有にして亦無有なり。其れ空を空する中に於て、諸の煩惱等、現に無なるに於ては當に亦無なるべし。若は男若は女の二の如き今無く當に亦無かるべし。此等は虚空の如し。思無く、分別無し。若し此の如きを知れば彼に所著有ること無し。諸身は有住を離れて、當に諸佛の法を求めん。虚空の無邊なる如く彼に住すべき所無し。住無く攀緣三三無し、意去るに隨ひて去る。是の如く摩訶薩、當に此方便を覺つて、三界に著せざるべし。當に菩提行を行じ、心及び身口、常に衆生の爲に行はずべし。體空虛なるを知らざるは猶、壓油の輪の如し。彼等行するを見る時に邊際を得ず、不動法に住せしむるも所有の住處無し、しばしば衆生の諸の苦惱を受くるを見る時、彼に於て悲心を起し、當に菩提行を行じ、諸の衆生の爲に、如實に眞如の相を説き、汝等、有爲を離れて應さに眞實を覺れと説くべし。顛倒の無智なるが故に、牢無くして牢思を起し、牢無き身體中に愚癡等味著す。此身は常に日に別なり、飲食を以て買贖す。彼は自他のためにせず虚妄にして疲倦を受く、常に樂を受けん時、亦恩徳を念すること無し、恩念無く羸弱三四なり、宜く應に速に捨て去るべし。生死の中に苦を受くるに處所に邊有ること無し。今も亦不可得にして、當も亦不可得ならむ。生死中に多欲にして處所に邊有ること無く、今も亦不可得にして當も亦不可得ならむ。生死に戲樂を受け處所に邊有ること無く、今も亦不可得にして當も亦不可得ならむ。生死に多く喜を受くるに處所に邊有ること無し、今も亦不可得なり、當も亦不可得ならむ。此身を承事してもつて處所に邊有ること無し、今も亦不可得なり、當も亦不可得ならむ。生死流轉中、處所に邊有ること無し、今亦不可得なり、當も亦不可得ならむ。生死中睡多し、處所に邊有ること無し、今亦不可得なり、當も亦不可得ならむ。此身に受樂せしめんに、處所に邊有ること無し、今亦不可得なり、當も亦不可得ならむ。此身に受苦せし

【三】攀緣とは、よりたよること。

【三】羸弱。つかれよはること。

【三】當とは、未來のこと。

善く此語言を説きたまふ。これ諸智具足の體なり。此言に隨喜す。復た問ふ人中の上よ、何に緣つてか諸身を捨て、當に一切苦無く、平等に諸界に到つて、當に壽命の行を捨てん。

若は復た右に脇臥し、若しは結跏趺座し、或は復た起立して住し、或は復た當に合掌せん。甚深の法を説く時に般若波羅蜜、一切の諸佛の法は不住にして諸法を寂す。或は成佛を見る

時、或は諸法を讚歎し、所有に諸法を説き、定意をもつて彼に聽くも、當に故の身體を捨て、後に新なる身體を生ずべし。家より家に至り、發菩提心を生じ、迷はずして念を調伏し一

念、正しく定に住せむも。云何が當に捨命すべき、當に復た神通を現すべき。我がために此問を解きたまへ。無邊にして智聚せる者は中に於て略々當に知らん、調伏の所説の如く所

有の諸の功德、無量の不思議、一切の勝具足は彼等當に成就せん。教師よ我が爲めに説け、實に有る如く相の如くに。若し是功德を聞かば一切、當に供養すべし。當に十善を護り已

つて空法に疑ひ無く、四種の梵行を具し一切皆成就し、六根及び一切三界に得ず、一切に自在を得て所聞に疑を生ぜざるべし。所有の有爲法は當に皆影の如しと知るべし。當に是の如

く知らば其影は有爲なくして、無有爲、無影、無説、無分別、無思、無言説、無慳、無有施なるべし。無爲無影中には、無説無分別なり。無思無言中には持戒破戒無し。無爲無影中

には無説無分別なり。無思無言中には無諍、無忍なり。無爲無影中には無説無分別なり。無思無言中には無懈、無精進なり。無爲無影中には無説無分別なり。無思無言中には無愚無智慧なり。時に影

を無くし已れば更に所見有ること無し。彼に所見無きをもつての故に言つて無影となす。亦、眼有ること無きに非ざるも、其眼淨くして無垢なり、彼中に物有ること無し。物無ければ

目は見ず、清淨にして常に物無し、名無ければ清淨も無し、是の如く淨眼は清淨にして所見

【三】 佛陀の坐法なり。足を左右の胫上に結加して坐するを云ふ。

【二八】 十善とは、不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不兩舌、不惡口、不綺語、不貪欲、不瞋恚、不邪見なり。

【二九】 四種梵行とは慈悲喜捨の四無量心なり。これ梵天に生ずる行業なれば梵行と名く。

【三〇】 六根とは、眼、耳、鼻、舌、身、意なり。

【三一】 宋元明三本に依りて盲を目と改む。

【三二】 同じく三本に依りて當を常と改む。



四輪の中、常に彼の住を得て、彼の三三八難に墮ちずして、當に此閑處を得ん。當に何の三四頭陀を取り、當に何の苦行を行じて、彼に惡悔有ること無く、又復た、煩惱無からん。爾の時に世尊、偈を以て報へて曰く、

衆生は想行に著し説くこと陽焰の義の如し。空無我の義を覺り已つて當に諸の辯才を解せん。實の最勝の義を覺り、彼は當に八難を離れ、當に四種輪を満さん。菩薩の善巧の智、抖擻して諸に得有り、上の苦行を得ざるも、自ら我空を知り已つて、復た疑悔有ること無し。諸法は虚空の如しと知り已つて世に著せず、顛倒の義を覺り已つて、當に佛菩提を成ぜん。

爾の時に無所有菩薩、此言に隨喜し、復た世尊に偈頌を以て問ふて曰く、  
善く此語言を説きたまふ。これ諸智具足の體なり。此言に隨喜す。復問ふ人中の上よ、開き已つて閑處に到るに當に住すべき所無くむば、云何が菩提を發するをもつて名けて最上と爲さん。

爾の時に世尊、復た解釋を爲さんとして偈を説いて言はく、  
是の如く聞き已つて發し、發し已つて住せざれば、彼は上勝の衆生なり。當に勝菩提を行ぜん。若し是の如き行を行ぜば、彼に處として住すべき無し。當に速かに菩提を覺るべし。人あつて射箭を上るが如し。此は是れ三行の説なり。若し當に如實を覺せば本性の如く寂靜にして、彼は菩提を行ぜず。若し有爲聲中の所説世間に於てするも、一切の聲無きが故に。當に知るべし實と爲さずと。實無き中には發する無く、行も亦得べからず、若し能く是の如く知つて、彼、菩提行を行ぜんに、行無くして以て行を取く、亦聞敷して淺からず。所覺無きを知り已つて、彼の行は不可得なり。

爾の時に無所有菩薩、偈を以て問ふて曰く、

【三四】四輪とは、風輪、水輪、金輪、虚空輪なり。  
【三五】八難とは見佛開法に於て障礙ある八處にして左の如し。  
一、地獄。二、餓鬼。三、畜生。四、薺單越。五、長壽天。六、瞽盲瘡啞。七、世智辨聰。八、佛前佛後。  
【三六】頭陀(Dhuta)は衣食住に關する欲望を仰制する行にして十二頭陀あり。

善く此語言を説きたまふ。これ諸智具足の體なり。此言に隨喜す。復た問ふ人の中の上よ、何に縁つてか衆生、所有の諸の飢渴を皆悉く除愈し飽滿して身に充悅するを見るや。

爾の時に世尊、偈を以て報へて曰く、

常に多くの飲食を施し、復た爲めに上法を説く。是の故に衆生は、飢、虚ふして自然に滅するを見るなり。

爾の時に無所有菩薩、世尊に偈頌を以て問ふて曰く、

善く此語言を説きたまふ。これ諸智具足の體なり。此言に隨喜す。復た問ふ人の中の上よ、

何に縁つてか、斷滅及び常、等に著するを離れて、彼の中邊の中に於て、亦復た依住無けん。

爾の時に世尊、偈を以て報へて言はく、

分別に攀緣せず、世の語言を超越し、諸法の平等なるを知れば、彼に染著無きを得。

爾の時に無所有菩薩、復た偈頌を以て世尊に問ふて曰く、

善く此語言を説きたまふ。これ諸智具足の體なり。此言に隨喜す。復た問ふ人の中の上よ、

何に縁つてか惡行の、能く此世間に縛せらるるを見て、一切の諸趣を捨て、能く業を淨め報を思はん。

爾の時に世尊、偈を以て報へて曰く、

當に善知識に近き、若は菩提心を發す。是の故に惡行を離れて當に佛智を淨めん。

爾の時に無所有菩薩、復た偈を以て讚し、世尊に問ふて曰く、

善く此語言を説きたまふ。これ諸智具足の體なり。此言に隨喜す。復た問ふ人の中の上よ、

何に縁つてか想行智一切皆有ること無く、眞實の空法の中、彼當に疑無きを得ん。何に縁つてか辯才を得て、能く諸句を分別し、衆生の行を知つて、是の如く説法を爲さん。云何が

・に縁つてか婦人の身を變じて丈夫と爲るを見るや、端正なれば人喜び見、衆生皆愛樂するや。  
爾の時に世尊、偈を以て報へて言はく、

所有の婦人の念、婦人攀縁の處、婦人歌詠の聲は、彼に於て共に住せされ、皆喜び見聞せされ、觸れざること毒器の如し。遠離すること毒蛇の如し。常に婦人を恐怖し、諸の女に觸れざれ、勤めて女身を受けされ、女身を轉ぜ教るが故に、彼男身を成ずるを見る。是の如きの行を、行じ已つて、正に此行に住す。是の故に婦人は見て、即ち身を變じて男と爲る。

爾の時に無所有菩薩、此を説くを聞き已つて、此言に隨喜し、偈を以て問ふて曰く、

善く此語言を説きたまふ。これ諸智具足の體なり。此言に隨喜す。復た問ふ人中の上よ、何に縁つてか衆生の、能く菩提心を發して、不退轉を得て乃ち菩提の座に至るを見るや。

爾の時に世尊、偈を以て報へて言はく、

小處を説かず、唯、勝れたる菩提を説く。是の故に衆生は見て、即ち菩提心を發し、若し少分も所有の想行中の衆苦は如實に處有ること無きを、諸の衆生の爲に説くなり。

爾の時に無所有、復た偈頌を以て、世尊に問ふて曰く。

善く此語言を説きたまふ。これ諸智具足の體なり。此言に隨喜す。復た問ふ人中の上よ、何に縁つて病者を見て、此に慈心を發さん。

爾の時に世尊、復た偈を以て報へたまはく、

身を觀するに是虚妄なり、中に於て、此は世間樂なりと著する所無し。是の故に衆患を脱す。此に由つて病者は見て須臾にして除差を得、彼に於て慈心を起す、是の故に諸患を除く。

爾の時に無所有菩薩、復世尊に問ふて、偈を説いて言く、



恆常に諸佛を念じて亦た所念有ること無し。衆生に得ざるも、彼等は菩提を言ふ。是の故に菩薩と名く。恆常に佛前に在つて、亦煩惱を壞たす、亦諸佛を離れず、猶、智慧人の如し。仰いて上虚空を觀じ、中に於て身心無し、彼れ二三差別有ること無し。何時、彼智人、觀じて上虚空を看るも、彼の時に餘念無し。若は身、若は心の中に是の如く菩提を二三獲ば、彼は諸佛の所に於て身心等を動ぜず、亦諸佛を遠ざからず、物を妄分別すること無し。欲等の患を發起しては物として分別せざる無し。是の故に破る可からず。念有れば現前に生ずるも、念無きが故に障げ無し。捨て已つて實無きが故に覺り已つて此等を捨つ。

爾の時に無所有菩薩、復た偈頌を以て、世尊に問ふて曰く、善く此語言を説きたまふ。これ諸智具足の體なり。此言に隨喜す。復た問ふ人の中の上よ、何の緣によつて當に化生せん。菩薩は常に樂有り、諸佛說法の時、諸の蓮華の中に生ぜん。爾の時に世尊、偈を以て報へて曰く、

所有の諸の功德は生死の中に樂有り、衆生は中に於て生じ、諸佛の法中に教うる所有の波羅密は一切教の中に於て、世間及び出世に一切法を覺らしむ。一切の諸の法相は相無く持者無し、諸法は是の如く住し、中に於て衆生を教ふ、空及び無相、無生中に於て亦然り、世間に行處無し、中に於て衆生を教ふ。是の故に彼の化生の諸菩薩常に樂有り、諸佛說法の時、諸の蓮華の中に生ず。是の如く功德を修して、菩薩を毀たざるは彼等難しと爲さず。諸の樂は不思議なり、是の功德を修し已つて能く菩薩を毀つこと無し。諸法中の巧智、彼知らざる所無し、諸法に於て自在にして、決定して見て疑無し、衆生に説を爲すは、衆生を攝取するが故なり。爾の時に無所有菩薩、此偈を聞き已つて、此言に隨喜し、世尊を稱歎して、偈を以て問ふて曰く、善く此語言を説きたまふ。これ諸智具足の體なり。此言に隨喜す。復た問ふ人の中の上よ、何

【二三】明本に依て別處を差別と改む。  
【二三】宋元明三本に依り護を獲と改む。

の衆生等に於て、當に同一事を共にすべし。是の故に諸の衆生常に共に眷屬と爲る。己が所有の愛物を能く以て他に施し、念じて分別を失はず。是の故に多く眷屬と爲る。

爾の時に無所有、復た偈頌を以て、世尊に問ふて曰く、

善く此語言を説きたまふ。これ諸智具足の體なり。

此言に隨喜す。復た問ふ人中の上よ、

云何が彼の念淨くして、當に無邊に趣く有らん。云何が彼れ法を樂ふて、亦正法を離れざらん。

爾の時に世尊、偈を以て報へて言はく、

法を樂ふ者には爲めに説き、法を失へる者には念ぜしむ。衆生を惱まさざるが故に彼は正念を行す。

爾の時に無所有菩薩、復た偈を以て、世尊に問ふて曰く、

善く此語言を説きたまふ。これ諸智具足の體なり。此言に隨喜す。復問ふ、人中の上よ、

云何が法を聞き已つて、常に疑惑有ること無けん。若し<sup>二</sup>五通を得已つて、云何が當に失は

ざらん。

爾の時に世尊、偈を以て報へて言はく、

衆生をして惑無からしむ。最上の佛法中、彼等聞きて疑無く、當に通を失はざるを得ん。

爾の時に、無所有菩薩、復た偈頌を以て世尊に問ふて曰く、

善く此語言を説きたまふ。これ諸智具足の體なり。此言に隨喜す。復問ふ、人中の上よ

云何が諸の菩薩常に諸佛の前に在つて、貪瞋一切の種、亦能く降伏する能はざらん。云何が

煩惱を生じ、何に依つてもつて對治し、復た能く慚愧有れば、生じ已つて能く寂靜ならん。

爾の時に世尊、復た偈を以て報へて言はく、

【二】五通とは  
一に神足通：境界及び自身を變現し遊涉往來の自在なるを云ふ。  
二に天眼通：色界天の眼根を以て照久無礙なるを云ふ。  
三に天耳通：色界天の耳根を以て聽聞無礙なるを云ふ。  
四に他心通：他人の心念を知ること無礙なるを云ふ。  
五に宿命通：自己及六道の衆生の宿世の生涯を知ること無礙なるを云ふ。

ん。

爾の時に世尊、偈を以て報へて言はく、

説法の時に讚歎し、復た毀譽の言無く、和合を破壊せず。是の故に上音を得。四種口過を

護り、常に利益の言を説き、自過は能く發露す、是の故に上音を得。螺鼓等の音聲、和合衆

の伎樂、諸佛を供養し已んぬ、是の故に上音を得。

爾の時に無所有菩薩、偈を以て問ふて曰く、

善く此語言を説きたまふ。これ諸智具足の體なり。此言に隨喜す。復た問ふ、人中の上

よ、云何が彼の身腹もつて平正を得、所有眷屬は相隨順するを得ん。

爾の時に世尊、偈を以て報へて言はく、

毒藥及び非藥は與へず他に教へず、病に應じて湯藥を施す。是の故に腹平正なり。善友及

び怨讐も平等に光に於ても、彼等の心を明かし已る。是の故に腹平正なり。あらゆる衆生

界の數量あること無き者をも愛念すること自身の如し。是の故に腹平正なり。父母は一子

に於て、常に憐愍の意を起し、衆生に於ても是の如し。故に腹平正なるを得。菩薩及び

父母は、供養して疲倦せず。是の故に彼の眷屬、常に順ふこと自身の如し。世尊、諸の

長宿及びある尊上なる者、若し事を彼等に承れば心を調柔して謙下す。是の故に彼の眷屬

は隨順すること自身の如し。彼は分別有ること無く、一切に平等心なり。四攝を以て他を

攝し、能く多くの衆生を攝す。是の故に彼の眷屬、當に自身の如くなるを得べし。諸の善

利を行するを教ふるに、不思議の衆生に於てす。是の故に彼の眷屬、隨順すること自身の如し。

菩提心に和合すること、不思議の衆生に於てす。是の故に彼の眷屬、隨順すること自身の如し。

彼等は諸の衆生の所に於て捨せざる無し。故に彼の眷屬等、隨順すること自身の如し。諸

【七】 宋元明三本に依りて憐を憐に改む。

【八】 宋元明三本に依りて勸を僞と改む。

【九】 謙下とは、へりくだること。

【一〇】 四攝とは

一に布施攝：衆生の所樂に従て財、法の二を布施し是に因て親愛の意を生じ入道せしむるなり。

二に愛語攝：衆生の根生に隨て善言慰諭し、是に因て親愛の心を生じ入道せしむるなり。

三に利行攝：身口意の善行を起して衆生を利益し、是に由て親愛の心を生ぜしめ入道せしむるなり。

四に同事攝：法眼を以て衆生の根性を見、其所樂に従て形を分けて示現し其の所作を同じくして利益に露はしめ、是に因りて親愛の心を生じて入道せしむるなり。



善語中、一切諸問の解釋中に略説す。 彼等は云何が堅く精進し、一切處に於て違背せざる、  
彼は云何が諸乗有ることを得て、若は世間及び出世に在らん。

爾の時に世尊、偈を以て報へて言はく、

事を作して怯弱ならず、心中中に分別す。 故に精進及び智、所生の中に常に有り。

爾の時に無所有菩薩、復た偈頌を以て、世尊に問ふて曰く、

善く此語言を説きたまふ。 これ諸智具足の體なり。 此言に隨喜す。 復た問ふ人中の上よ、

彼云何が智有りて、世間中に決定し、彼云何が力有りて衆生をして能く伏無からしめん。

爾の時に世尊、偈を以て報へて言はく、

常に諸佛の法を問ひ、諸法を誹謗せず、諸の巧方便を求む。 故に彼上智有り、五種味を常に

施し、衆生に無畏を施す。 是の故に彼力有りて、衆生をして能く伏無からしむ。

爾の時に無所有菩薩、偈を以て問ふて曰く、

善く此語言を説きたまふ。 是、諸智具足の體なり。 此言に隨喜す。 復た問ふ、人中の上

よ、彼云何が勝色あつて、世間に於て最上ならん。 云何が長壽を得て、多きこと百億數歳な

らん。

爾の時に世尊、偈を以て報へて言はく、

若し虚實の過を聞かば、他に向ひて説を傳へず、常に三寶を讚歎せば、名聞十方に至らん。

諸の衆生を惱まさず、喜殺の者に隨はず。 是の故に長壽を得、多きこと百億數歳なり。

爾の時に無所有菩薩、復た偈を以て世尊に問ふて曰く、

善く此語言を説きたまふ。 これ諸智具足の體なり。 此言に隨喜す。 復た問ふ、人中の上

よ、云何が梵音を得、迦陵頻伽聲ならん。 若し聞くことを得る有れば、聞き已つて歡喜を得

【二六】迦陵頻伽 (Kalavinka) 譯して好聲鳥、美音鳥、妙聲鳥と云ふ。雪山中に居て、卵中にて既に極めて和雅なる聲を出すと云ふ。

常・樂・我・淨の處は、顛倒の取にして虚空なり。如實に眞に覺し已れば、渴愛皆當に盡き、我慢・渴愛・取、等無くして、虚空の如からむ。内外に住せずして、彼等は得處無し。

爾の時に、無所有菩薩、此偈に隨喜し、復た稱讚して、偈を以て問ふて曰く、

能く此言を説きたまふ。一切智は無礙なり、此言に隨喜す。復た問ふ、人中の上よ、當に何んの業をか作し已れる。彼の種子は云何ん。彼等多く財有つて、恆常に盡くること有ことなし。復た能く一切に施し、捨施して慳吝なし、身肉、財、頭等 彼皆悉く能く捨てん。

爾の時に世尊、此の問を聞き已つて、無所有の爲に解釋を爲したまふ。復た偈を説いて言はく、恆常に三寶に供養して疲 倦せず。若し復た世間に彼の智者を斷ぜば、菩提心の發する所に供養す、衆生を樂ばしめんが爲の故に。彼は菩提を荷擔し、他の爲めに受用を説く。一切、

一切智をもつて衆生の爲めに説く。是の故に彼は財有りて、一切時に盡くること無し。是

の如き業を作し已り、是の如き子を種え已つて、一切所生の處、福饒にして多く財有り。若し

は龜、若は細なるも食、飲し已つて淨きこと法の如し。若し新衣服を得ば、他を先にし後に自ら著く。是の故に生生の中、一切具足して勝たり。功力を加用せずして而も無盡財を得。

是の故に一切に施し、捨施して慳吝無し。身肉及び頭も、彼等に施さざる無し。

爾の時に無所有菩薩、此偈を聞き已つて、隨喜し稱歎す。復た偈を以て問ふ。

善く此語言を説きたまふ。是、諸智具足の體なり。此言に隨喜す。復た問ふ、人中の上

よ、云何が熱惱、身口及び意を離れん。云何が上色有るも無垢にして最も清淨ならん。

爾の時に世尊、復た敷演を爲さんとして偈を説いて言はく、

齋戒を受けて闕くること無く、常に空を説いて缺くること無く、一切皆空を知つて、諸の打罵辱、身口及び意を忍ぶ。是の故に熱惱無く、當に最上色を得、一切衆生を愛すべし。一切

【一〇】 三本に依て偈と改む。

【一五】 齋戒とは、心の不淨を清むるを齋と云ひ身の過非を禁ずるを戒と云ふ。

爾の時に、無所有菩薩、佛世尊に從つて此偈を聞き已つて歡喜し隨順す。復た、偈頌を以て世尊に問ふて曰く、

善く此言を説きたまふ、一切智は無礙なり、此言に隨喜す。復た、人中の上よ問はん、何を以て因縁と爲し、何の方便智を用つて、何の法を觸證して、當に如何んが覺知せんや。

爾の時に、世尊、偈を以て彼の無所有菩薩に報へて言く、

勇猛は菩提の縁なり、方便して衆生を攝す、諸法空を證して已つて、智者は菩提を覺す。

爾の時に、無所有菩薩、此偈を聞き已つて歡喜隨順す。偈を以て稱讚し、復た問ふて曰く、

善く此言を説きたまふ。一切智は無礙なり、此言に隨喜す。復問ふ、人中の上よ、何故に惡大いに熾んなる、畏る可き處に墮ちずして、一切の惡處を捨て、速かに善處に至らんや。

爾の時に、世尊、偈を以て報へて曰く、

一切の罪を造らず、是の故に惡處を捨つ。恆常つねに法行を爲す、是の故に善處に至るなり。

爾の時に、無所有菩薩、此偈を聞き已て隨喜し稱讚し、復た、問ふて曰く、

善く此語言を説きたまふ。一切智は無礙なり、此言に隨喜す。復問ふ、人中の上よ、云何が罪多くして、無智處に造作し、一切能く速かに滅して、盡く滅し遺餘なからんや。

爾の時に、世尊、復た偈頌を以て、彼の無所有菩薩に報へて言く、

衆生は解脱を求む。此等は菩提を願ふて、菩提を得ざるが故に、諸罪皆滅盡せん。

爾の時に、無所有菩薩、此偈を聞き已つて、隨順し歡喜す。復た頌偈を以て、復た、問ふて曰く、

善く此言を説きたまふ。一切智は無礙なり。此言に隨喜す。復た問ふ、人中の上よ、云

何んが諸の愛著と流轉、煩惱苦は、菩提を成就せん時、皆盡して餘有ること無からんや。

爾の時に、世尊、偈を以て報へて言く、



訶薩に告げて言く、汝、無所有、我れ亦諸の菩薩の爲めに有染、有著、有縛、有繫、有犯、犯處を説かず。所以はいかん、一切の著處、一切の染處、一切の縛處、一切の犯處に超越して諸相を遠離せしめんと欲せば、行和合せず、諸法雜らず、不可得の故に。阿耨多羅三藐三菩提を證することは是の如くなれば、一切の諸法は縛せず、諸法は染せず、諸法は著せず、繫せず、障せず、犯さず、得ず。是の故に當に一切種智を成ぜん。善男子、一切智發心の處有り、衆生、得ず、彼の處の中に於て、法として縛すべく、染すべく、著すべく、障すべく、犯すべく、得べく、知るべき處無し。汝、無所有、汝當に諸の菩薩の爲めに問ふべし。諸の菩薩摩訶薩等の如く、倦ま  
ず、汚れず、著なく、縛なく、障なく、虚空にして、虚空相を離れ、障礙有ることなく、阿耨多羅三藐三菩提に於て速かに成就するが故に、一切處に於て當に開顯を爲すべし。

爾の時に、無所有菩薩、既に如來の教の爲めに、加持及び智力を請ひ、多佛の所に於て善根を種ゆるが故に、能く般若波羅密中に於て疑惑有ること無し。身を隠して現ぜず、所著無し。諸の菩薩を攝化せんと欲するが故に、而して復た、諸の福德を顯はさんと欲するが故に、復た、著心の爲めに諸の衆生等は取著の覆を爲し行をして相に在らしめ、善智識を遠ざけて惡知識の攝取する所と爲る。諸の菩薩の輩は一切法は皆得べからざるを知つて著なからしめんと欲し、覺らしめんと欲するが故に、即ち無量種種の名花の或は水陸生、或は金銀の花を以て普く佛上に散じ、精誠の意を以て、歡喜勝妙し缺減有ることなし。諸の衆生をして歡喜を生ぜしめんがための故に、偈を以て問て曰く、

菩薩は何處に遊び、何者か是れ父母なる、何處に住止し、何等を眷屬と爲すや。

爾の時に、世尊、即ち偈頌を以て、彼の無所有菩薩に報へて言く、

勇猛にして空を遊處とす。般若を母、佛を父とす。佛塔を住處と爲し、菩薩を眷屬と爲す。

六波羅蜜に遊び、菩提心を父母とす。三昧を住處とし、諸福を眷屬と爲す。

【一】 大正大藏經は勸とするも宋元明三本に依りて倦と改む。

【二】 六度の中、最後の智慧波羅蜜なり。

【三】 布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六にして菩薩行なり。波羅蜜とは度、或は到彼岸と譯す。此れを行ずれば菩提の彼岸に至るを以てなり。

# 無所有菩薩經

隋 天竺三藏闍那崛多等譯

## 卷の第一

是の如く我聞けり。一時、婆伽婆、王舍城の毘富羅山中に住し給ひき。大比丘衆満足百千人と俱なりき。復、百千の諸の菩薩衆、及び比丘尼、諸の優婆塞及び優婆夷、天、龍、夜叉、乾闥婆、緊那羅、摩睺羅伽、迦樓羅、等有りき。復た、欲界の諸天子、色界の淨居の諸天子、等有りき。圍遶して前に在り、而して爲に法を説き給へり。

爾の時に、衆中に一菩薩有り。無所有と名く。彼の會座に在り。然るに彼の衆中に諸の菩薩の心に疑惑を懷き、作惡を悔ゆる者、顛倒に住する者、業障有る者、法障有る者有りき。及び諸の衆生は障の爲めに障せられて佛に問ふ能はず。然るに、彼は彼等衆生の爲めに業障を淨めんと欲するが故に、世尊に問ひたてまつらんと欲す。此の諸の衆を觀るに、多く菩薩有り、先惡を悔みんと欲するも心 煩惱して法を聽くこと能はず。復た、菩薩を見るに、心悔惱して能く一心に聽かず、彼の心行を觀るに多く苦惱有り、多く憂患有り、多く穢雜有り、生老死・憂悲苦惱多く、怨憎會多く、愛別離多し。當に 阿耨多羅三藐三菩提を成就せんと欲するも、是の如き等の無量の纏縛の爲めに、云何んが當に 阿僧祇劫に於て菩薩行を行ぜん。既に自ら縛有り、云何んが當に能く衆生の縛を解かん。爾の時に無所有菩薩、是の如く念し已つて即ち自ら思惟すらく、若し世尊、我をして此の衆の爲に請問するを聽せ、一切衆生の作惡疑悔を遠離せしめんが故に、と。

爾の時に世尊は、無所有菩薩摩訶薩並びに及び彼等諸菩薩衆の心所念を知り已て、無所有菩薩摩

【一】 (Bhagvat) 世尊のこと。

【二】 (Vipula) 譯して廣博臨山と云ふ。摩竭陀國にあり。

【三】 乾闥婆 (Gandharva) は八部衆の一にして俗樂神なり。

【四】 緊那羅 (Kinnara) も八部衆の一にして樂神なり。

【五】 摩睺羅伽 (Maharaga) も八部衆の一にして大蟒神なり。

【六】 迦樓羅 (Garuda) も八部衆の一にして金翅鳥なり。

【七】 淨居とは、色界の第四禪に不還果を證せる聖者の生ずべき天なり。

【八】 煩惱とは、憂惱の甚だしきを云ふ。

【九】 (Anuttarasamyak-sambodhi) 無上正徧知と譯す。眞正に遍く一切の眞理を知る無上の智慧のこと。

【一〇】 阿僧祇 (Asankhyā) は無數と譯す。劫とは (Kalpa) の音譯で通常の年月を以て算し能はざる遠大の時節を分別するに用ふるものであるから阿僧祇劫で無量の長年月を指すのである。

に依つて本經と法華との關係を直接説明する譯にはゆかぬが、本經と提婆品とが其成立に於て無關係でないとは考へ得る。そして此種の思想は經集部の諸經には可なり現れてゐるから、斯くの如き種

類の經典製作流行の時代があつた事を豫想し得る。法華の提婆品は單譯されてもゐるが、竺法護譯の正法華經中に、入つてゐるから、遅くも西紀二百年頃には斯かる思想が流行したと考へてよからう。

從つて此種の經典の成立も、全部とは言はれまいが、二百年より古いものと見てよからう。終りに臨み、文學士久保田敬君の勞を謝する。

昭和八年一月六日稿了

譯者 布施浩岳 識



## 無所有菩薩經解題

本經の譯者なる闍那崛多是犍陀羅國の人で、其の首都なる富留沙富羅に生れたらしい。其の傳譯記録を見ると、隋の開皇五年から仁壽四年迄、約二十年間長安附近に滞在したやうである。然しながら其の間の傳譯經中、後世に影響ありしは殆んどなく、其の名の知られたるは、添品法華經、佛本行集經位のもので、従つて本經の如きも、支那日本の佛教史上に何等の影響を持たぬもので、古來本經の鑽仰者ありしを聞かぬ。其れ程、譯されたまゝで讀まれなかつた經である。恐らく、終始一貫、よく讀まれたるは今回の國譯が其の最初であらうか。開元錄は内典錄に依つて本經を闍那崛多譯としてはゐるが傳譯年時を示さぬ故、其年時は的確でない。

次に本經は四卷より成立し、品名を出さず、大體からすれば、不體裁な經典である。鑽仰史上から言へば、前述の如くつまらぬ經典であるが、經典成立史の觀點からすれば、興味が無いでもない。其れ等の點を已下少しく説明しやう。

本經は説處を王舍城とし、無所有菩薩が主役をつとめ、其主張せんとする所は、般若波羅蜜に依る空觀で、其間に種々雜多の思想や資料を取りませたものである。乃で其の雜多中の或物を少しく摘出せんに、先づ眼につくのは、婦人が男子に轉身して成佛するを説くもの、第四卷に詳説されてゐる。又、四顛倒として常樂我淨を説くことは般若及諸大乘經の例で、本經もそれを説くが、本經は其れと共に常樂、即ち大涅槃經系の思想を説い

てゐる。次に、佛塔供養を説くは大體に於て諸經の通例とする所であるが、本經には支提(Caitya)をも説いてゐる。

譯語としては別に珍しいものも無いが、偈頌は相當讀み難い。そして偈頌は必ずしも重頌ではなく、體裁から言ふと、滅茶苦茶で、後世の成立を想はしむるものである。されど、闍那崛多の傳譯だからとて、それ程新しいものではなく、遅くも大乘涅槃經の成立する已前と見てよからう。一面、常樂我淨を四顛倒として扱ひながら、他面大涅槃經の如くに常樂を説くけれど、我淨は説かぬから、大涅槃經の影響によるものと考へるは困難である。法華經との關係を言へば、女人の轉身成佛及び殺生を事とする惡人の成佛を擧げ得るけれど、法華の提婆品は元來、法華に無かつたもので、後人の挿入なるは周知の事項である。従つて法華の提婆品と本經と相通するものありとも、其れ



非眞・保信すべからず。皆變易法にて迅速にして停らず。流轉移動し、終に壞滅に歸す。念々遷謝して後に灰燼と爲る。究竟して同じく滅盡の門に趣く。是れ失壞の法なり。諸の怖畏あり、諸の災穢あり、諸の愁惱多し。皆是れ墜墮・零落・斷壞・離散の法なり。

『是の故に大王よ、當に隨無常觀隨盡滅觀を勤修すべし。食欲の汚染する所と爲る勿れ。瞋恚の鼓動する所と爲る勿れ。愚癡の覆蔽する所と爲る勿れ。復た王の富貴樂に耽染する勿れ。復た王の自在樂に耽染する勿れ。復た王の愛欲樂に耽染する勿れ。復た餘所の諸欲樂を受くる所の具に耽染する勿れ。應當に財命橋逸を滅除すべし。應當に無常の死魔を敬懼すべし、人期二奄忽一として至らず。大國主と爲りて應さに正法を以つてすべし、悲法を以つてする勿れ。當に法行に隨ふべし、非法に隨ふ勿れ。應に衆生を愍むこと皆一子の如くなるべし。應當に至誠を以つて佛法を護持し、三寶を紹隆して復た餘を顧る勿れ。所以は何ぞ。生死海中流轉無始なり。唯佛の正法は是れ大津梁なり。千萬億劫は實に値ひ難し。

『大王よ、當さに知るべし。我終に世間の諸欲樂具、積聚衆用富貴と名くる者を獲得するを説かず。我れ諸佛の正法慧聖の財寶積聚受用乃ち圓滿眞富貴と名くる者を獲得するを説く。是の故に大王よ、應當に世間の所有の諸の欲樂具を厭離すべし。應當に諸佛の正法慧聖の財寶を願求すべし。』と。

時に薄伽梵是の經を説き已つて、憍薩羅主勝軍大王、及び諸の世間天人等の衆は佛の所説を聞いて皆な大に歡喜し、信受して奉行す。

## 佛說示教勝軍王經終

【二】 奄忽、すみやか、にはか、たちまち、はやし。



見、要す驚怖憂悲苦惱すべし。

「大王よ、當に知るべし。是の如き身は、宮室綵飾圖畫殿閣樓臺に處りて戸六牖軒窓重關密掩し、種々の香花を以つて自ら嚴飾し、種々の燈燭は光を増して照明し、珍奇の屏障帷幄を施設し、衆の名香を燒きて諸の妙花を散じ、香花寶瓶處々に陳列し、種々の金銀琉璃の衆寶の床座を安置し、上妙の毼ニキク毼錦繡文ニキク蓐花氈を敷設し、床座兩頭俱に丹枕を置き、覆ふに上妙の綺ニキク吧錦袋を以つてし、寤寐安寢し歡娛耽嗜すと雖も、命終るの後に於いて覺知する所なし。或ひは屍骸を送つて葬處に置き、烏ウ鵠カク鸚ヒナ鴛ウ鴦ウ狐狼、野干、餓狗、鴉梟の諸惡禽獸争ふて共に食噉し、骨肉膿血髮髮糞穢、地上に流溢し、臭處惡むべし。

「大王よ、當に知るべし。是の如きの身は先づ常に香像、駿馬、衆寶輦輿に乗取し、鼓を撃ち、貝を吹き、大音楽を作し、衆寶傘蓋後に隨侍し、扇を執持して拂ひ掩映搖動し、無量の勇健なる象軍、馬軍、車軍、歩軍前後に導從し、防衛の左右百千の臣僚誠を竭して敬奉し、城邑士庶合掌して驚歎す。是の如き勝妙果報を受け自在榮華すと雖も、久しからずして要す瞑目辟手して復た動搖するなく、横屍して喪車輿上に偃仰し衆人荷挽して大城門を出で、父母、妻子、兄弟、姊妹、作使、僮僕、群僚、輔佐、親屬、内人隨從の左右は心に憂惱を纏ひ、頭髮被散し、手を擧げて頭を拍ち胸を推して悲噎し、哀感崩働して皆な言ふ。「苦しい哉」と。城邑國人之を親て慕を號し、葬所に隨送す。或ひは露屍あり、諸禽獸鳥鵠餓狗鸚鴦鴉梟狐狼野干及び諸惡獸、植ニキク梨食噉骨肉狼藉し、風に飄り、日に曝され、雨に漬され、霜に封ぜられ、支節解散し零落して所を異にす。或ひは薪を積んで火を以つて焚葬するあり。筋骨焦爛し血肉消化し、臭煙ニキク燈ニキク焯ニキクし四面充塞し、火滅し、骨は消へ、灰は飛び、塵散す。或ひは地を掘つて墳陵に埋殮するあり。多時を經歷して肉消へ、骨腐る。

大王よ、當に知るべし。此の身是の如く變遷無常にして一切衆生及び諸行皆悉く是の如し。非常

【二〇】 罽、壁を穿ちて風日を引き所、まど。

【二七】 氈、けおりのしきものまうせん、氈、けをり。

【二八】 毼、しきぐさ、しきわら、しとね、しきもの。

【二九】 吧、ふるしき、衣類をつむ巾。とばり、きぬのたちのこり。

【三〇】 鴉、形鴉に似て、長尾尖嘴、黒爪椽背白腹なる一種の鳥、かささぎ。

【三一】 鸚、胡地の鸚鳥、わし、くまたか、みさこ。野干、梵語(Pratyak) 、英語の(Talk) (dog)、山犬又は狼に似、ぬくての一種。肉食獸。

【三二】 植、查に同じ、いかだ、うきき、鶴(かささぎ)の聲に言ふ。後者の意か。

【三三】 燈、火の熾する貌。焯、煙の起る貌、むしあつし、あつし。

へす所となり、往くに標記なく方所に冥莫たり。爾の時に當りて異の救護なく、異の歸依なく、異の投竄なし。唯だ正法を除く。大王よ、彼れ爾の時に於いて唯正法ありて能く救護をなし、能く宮室を爲し、能く歸依を作す。是れ奔趣する所、是れ投竄する所、能く衆生を抜いて生死の苦を出づ。大王よ、當に知るべし。譬へば人ありて寒苦の逼る所、唯煖火日光衣等ありて、能く止息する所に於いて安を護べし。熱苦の逼る所唯林泉等あるのみ。苦し遠道を涉れば唯清凉の蔭のみ。若し渴の逼る所唯だ清冷の水あり。若し飢の逼る所唯だ美膳多く、若し病の逼る所唯だ良醫藥及び供侍者あり。若し怖の逼る所唯だ強伴侶あるが如し。是の如く大王よ、一切衆生死箭中あたる所、復た勢力なく、復た救護なく、歸依する所なく、投竄する所なし。命を捨てんと欲して支節を解く時に臨み、血肉枯竭して心胸熱惱し、焦渴逼る所張口太息し、手足紛亂して堪能する所なし。廣説乃至、彼れ爾の時に於いて唯だ正法有り、能く救護を爲す。能く宮室と爲り、能く歸依と作す。是奔趣する所、是れ投竄する所、能く衆生を抜いて生死の苦を出づ。所以は何ぞ。

「大王よ、當に知るべし。是の如き身は守護を加ふと雖も、洗飾を久ふすと雖も、衆多の上妙飲食を以つて姿意飽満すと雖も、臨終に至るに必んで（のひ）要（もちか）て免かれざるべし。飢渴の逼る所便ち命を捨つ。

「大王よ、當に知るべし。是の如き身は、常に淨浴して塗香・末香・熏香・花鬘を以つて隨意に嚴飾すと雖も、此に由つて自體穢漏を成するが故に、命を捨るに臨むの時終に必ず不淨具穢に歸す。」「大王、當に知るべし。是の如き身は種々上妙の衣服を以つて覆蔽纏裏すると雖も、此に由りて自身の諸の不淨物の合成する所の故に。命終るの時に於いて要す不淨の種々流出すべし。

「大王よ、當に知るべし。是の如き身は宮室に處りて后妃・嫪女・内宮美人の眷屬圍繞すと雖も、衆伎樂を作し、種々倡伎し、自らの娛樂を以つて歡喜快樂するも、命終るの時に臨んで自ら惡相を

【五】要、ちかふ。

び諸の有情蠢動の類皆磨滅せらる。決勇を以つてして逃避すべきは難く、勢力を以つてして能く抗拒すべきこと難く、呪術財貨藥物を以つてして禁止すべきこと難し。是の如く大王よ、世に四種の大怖畏事あり。各來りて一切衆生を磨滅す。決勇を以てして逃避すべきこと難く、勢力を以つて能く抗拒すべきこと難く、呪術財貨藥物を以つてして能く禁止すべきこと難し。云何が四種の大怖畏事なる。大王よ、當さる知るべし。一には老來逼害して、衆生の少壯を磨滅す。二には病來りて逼害して、衆生の調適を磨滅す。三には死來りて逼害して、衆生の壽命を磨滅す。四には衰來りて逼害して、衆生の興盛を磨滅す。

『大王よ、當に知るべし。譬へば師子の衆獸王となり、鹿群中に入つて一鹿を搏取するが如し。若し噉むも未だ噉まざるも自在に難なし。其の鹿爾の時先に騰勇する所あるも、師子の口に入れれば復た能く爲すなし。是の如く大王よ、一切衆生は既に無常の師子王の口に入れれば復た能く爲すなし。所有の勢力復た能く爲すなし。大王よ、當に知るべし。譬へば、人ありて勇健多力なるも毒箭の中る所、一切の威猛も皆悉く摧滅するが如し。是の如く大王よ、一切の衆生の剛強佞戻も死箭の中る所復た勢力なく、復た救護なく、歸依する所なく、投竄する所なし。命を捨てんと欲するに臨み、支節を解く時血肉枯竭して心胸熱惱し、焦渴の逼る所張口大息し、手足粉亂して堪能する所なく、勢力有るなく、延涕交流し、大小便利は身體を穢汚し、六根閉塞して喉<sup>ニ</sup>頰<sup>ニ</sup>哽<sup>ニ</sup>噎<sup>ニ</sup>し、喘息遡急に、良醫も手を拱き、諸の妙藥を棄つ。其の飲噉する所美味珍饌も悉く捨てざるなし。床枕に偃臥して異趣に往くに臨み淪没して際なし。生老病死の無常瀑流して、臨終の位に至りて餘命幾もなく、業有力の故に後ち甚大なる怖畏を現前するあり。琰魔王の使廣大にして黒闇の夜分呑む所なり、出息入息最後に將に滅せんとす。唯獨り一身にして第二及び餘の伴侶あるなし。此の生に奮背して後世に歸す。是れ大いに移轉して大叢林に趣き、大黒闇に入り大曠野に遊び、大溟海に泛び、業風の颯

【二】頰、ひたひ、哽、涙にむせぶ、咽喉ふさがりて聲出でず。噎、咽喉ふさがる、むせぶ。

【三】琰魔王(Mandhara)、欲界天の名。欲界天の中、第三重の天處。其稱、須焰摩、略稱、焰摩。譯、善時、新稱夜摩、譯、時分。初め婆羅門教の神であつて、吠陀時代には冥國を支配する神であつたが、死の神となり、佛教に入つて地獄の裁判官になつた。

【四】颯、はやて、ひるがへる。



「大王よ、當に知るべし。譬へば樹林先に開華を見て、尋いで復た結果し後還た果無く、先に其の葉の榮茂青翠を見て、尋いで復た萎黄し、後皆凋落するが如し。是くの如く大王よ、國祚身命・王の富貴樂・王の自在樂・王の愛欲樂、及び餘の諸の欲樂を受くる所の具、所謂象馬車歩の軍等も廣説すれば乃至皆是れ墜墮零落斷壞離散の法なること、亦復た是くの如し。

「大王よ、當に知るべし。大火聚の如し。先づ熾然たるを見、復た極めて熾然たり。轉じて遍く熾然として、後皆洞然たり。久しく熾盛なりと雖も、終に滅盡に歸す。是くの如く大王よ、國祚神命・王の富貴樂・王の自在樂・王の愛欲樂、及び餘の受くる所の諸欲樂の具、所謂象馬車軍等は廣説すれば、乃至皆是れ墜墮零落斷壞離散の法なること、亦復た是くの如し。

「大王よ、當に知るべし。日月輪の如し。大神有つて用ひて大勢力を具し、大光明を放つて以て自ら莊嚴し、遍く世間を照し、終に隱没を歸す。是くの如く、大王よ、國祚身命・王の富貴樂・王の自在樂・王の愛欲樂、及び餘の諸欲樂を受くる所の具、所謂象馬車歩軍等は廣説すれば、乃至隨墮零落斷壞離散の法なること、亦復た是くの如し。

「大王よ、當に知るべし。譬へば大雲遍く虚空を覆ふが如し。暴風疾雷掣電注雨、天地を震動し、須臾にして散滅す。是の如く大王よ、國祚身命・王富貴樂・王の自在樂・王の愛欲樂、及び餘の諸欲樂を受くる所の具、所謂象馬車歩軍等は廣説すれば、乃至皆是れ墜墮零落斷壞離散の法なること、亦復た是の如し。是の故に大王よ、應に善く勸修し、無常觀に隨ひ盡滅觀に隨ふべし。自らの命終に於て常に當に驚懼すべし。大國王と爲り、應に正法を以つてすべし、非法を以つてする勿れ。應に法行に隨ふべし、非法に隨ふ勿れ。

「大王よ、當に知るべし。四大山四方より來るが如し。牢固堅密にして缺漏あるなく、諸の間隙なし。周匝充遍して總一合成し、上虚空を盡し、下地際を窮む。其中所有の一切草木枝篠花葉、及

【九】熾然、火の盛に燃ゆる貌。洞然。洞、ふかし、ほがちか。  
【一〇】歩軍を加へて、印度の四兵、又は四軍ある。印度普通の兵制である。

【一一】以下に出る數箇の譬喩は巧妙である。

捨して諸の邪法を以つて國王と作らば、彼れ現在に於いて諸聖賢の訶毀する所と爲り、後に憂悔を致し、身壞れ、命終りて諸惡趣に墮し、地獄の中に生れて諸の劇苦を受けん。又若し國王或は諸王等、邪法を棄捨して其の正法を以つて國王と作らば、彼れ現在に於いて衆聖賢の稱讚する所と爲つて後に憂悔なく、身壞れ命終つて善趣に超昇し、諸天の中に生れ、諸の妙樂を受けん。

「大王よ、譬へば父母の子を憐愍するが如し。心常に苦を離れ樂を得しめんと欲す。王亦應に爾るべし。諸の國邑に於ける所有の衆生・僮僕・作使・輔臣僚佐は應さに諸佛の所説を以つて四攝して之れ授受すべし。何等を四と爲す。一には布施、二には愛語、三には利行、四には同事なり。是の如き國邑の衆生僮僕・作使・輔臣僚佐を善攝して、二義を攝して同事同歸せしむ。何等か二義とする。一には現在、二には未來なり。

「大王當さに知るべし。譬へば男子或は諸女人の、其の夢中に於いて夢心の見る所の如し。可愛の園林、可愛の山谷、可愛の國邑並びに諸の異類は彼の夢覺め已つて見る所皆無なり。是の如し、大王よ、國祚身命虚偽にして常無し。一切皆夢の所見の如し。大王當に知るべし。王の富貴の樂、王の自在の樂、王の愛欲の樂、及び餘に諸の欲樂を受くる所の具、所謂象馬・車步・諸軍・宮殿。后妃・太子・諸王、輔臣僚佐防衛の士衆、父母・兄弟・姉妹・妻妾、男女・大小の僮僕・作使・國邑の衆生、金・銀・珍寶・末尼・眞珠、衣服・財穀・庫藏等の物、是くの如き所有の諸の欲樂の具は命終の時に於て皆當に棄捨すべし。獨り往いて後世に一も相隨ふなし。

「大王よ、當に知るべし。如上の所説の一切の樂具は非常非恒にして保信すべからず。皆變易法にして迅速にして停らず。流轉移動して終に壞滅に歸す。念念遷謝して後灰燼となる。究竟して同じく滅盡の門に趣く。是の失壞の法は諸の怖畏有り、諸の災横有つて諸の愁惱多し。皆是れ墜墮・零落・斷壞・離散の法なり。

# 如來示教勝軍王經

大唐 三藏法師玄奘詔を奉じて譯す

是の如く我れ聞けり。一時 薄伽梵、室羅筏に在して 誓多林給孤獨園に住し、其の無量の大苾芻・天人等と俱なりき。爾の時 憍薩羅主勝軍大王、尊位威德皆悉く成就せり。佛を瞻仰請問せんと欲する爲めの故に、駕を嚴かにして城を出て、如來所に往き、乗つて 下處に至り、歩進して園に入り、遙かに世尊の一樹下に坐し、端嚴殊妙なるを見て、諸根閑寂にして其心 宴然たり。已に能く善く最上調順にして寂止究竟を得たり。已に能く善く第一調順寂止彼岸に到り、善く密護して諸根を降伏し、丈夫龍丈夫牛王丈夫良馬と爲り、清淨無撓にして澄める泉池の如し。威德熾盛にして光明照耀として大金山の如し。三十二大丈夫の相圓滿莊嚴あり、八十隨好間に支體を飾る。時に勝軍王遙かに佛を見已つて、心喜んで踊躍して自ら勝ゆる能はず。便ち即ち刹帝利種の灌頂を脱去す。大王の隨身所有の五標尊飾とは一には頂上の寶冠、二には所執の神劍、三には衆寶の傘蓋、四には末尼マニの扇拂、五には織成の寶履なり。既に是を去つり已つて如來所に詣る。到り已つて世尊の雙足を頂禮し、右繞三匝して一面に退坐す。

爾時勝軍大王、一面に坐し已つて佛に白ふして言く。「大悲世尊よ、惟願くは如來哀愍して教誡せよ。惟願くは善誓よ、哀愍して教誡せよ。我長夜をして大義を證り、利益安樂ならしめよ。」

爾の時世尊大王に告げて曰く。「善い哉善い哉、大王よ、汝今乃ち能く如來に是の如き大義を請問す。大王よ、汝今大國主となる。應に正法を以つてし、邪法を以つてする勿れ。應に法行に隨ひ、非法に隨ふ勿れ。所以は何んぞ。大王よ、當さに知るべし。若し國王及び諸王等ありて、正法を棄

- 【一】 薄伽梵 (Bhagavat)、世尊と譯す。前出。
- 【二】 室羅筏 (Śrāvastī) の音譯。普通舍衛城と言ふ。
- 【三】 誓多林 (Jetavana) 給孤獨園 (Anāthapindasārāma)。誓多是祇と同じ。祇園精舍を言ふ。
- 【四】 苾芻 (Bhikkhu)、比丘と同じ。特に佛弟子(男)に言ふ。四衆の第一。
- 【五】 憍薩羅 (Kosala) 勝軍 (Prasenajit) 憍薩羅は印度北部の大國名、舍衛城を首都とす。勝軍は波斯匿王 (Prajāpati) の譯名で、同人。佛在世の折の憍薩羅國の國王である。
- 【六】 梵巴文では、車に乗りて行き得る處迄行き、其處にて乗り物を下り徒歩にて行く和普通記してある。
- 【七】 宴然、宴、たのしむ、靜かなり、やすし、ひまなり。
- 【八】 末尼 (Mani)、普通末尼と表音す。殊玉のこと。



た折に、佛が王道について懇ろに大王に

說法されたものである。先づ佛は國王又は諸侯が邪法を棄捨して正法を以て國王とならば、衆聖賢の稱讚する所となり、

後に憂悔なく、死後善趣に超昇して諸天の中に生れ、諸妙樂を受けるとし、父母の子に對する如く國民に對し、四事（布施・愛語・利行・同事）を以て攝受し、臣僚を補佐せしめよと述べる。國詐・身命も夢の如く處無にして、王の富貴樂・自在樂・愛欲樂・其他諸欲樂を受ける是即ち宮殿諸兵一家臣民調度は命終の時に皆棄捨すべきものである。樹草の繁茂と枯衰の如く、火の熾盛と消滅の如く、日月輪の出没の如く、天候の晴暴の如く、諸樂と樂具は墜墮・零落・斷壞・離散するものである。故に無常觀・盡滅觀に隨ひ、善く勸修すべく正法を以てし、非法を以てすべ

からずと勸誡する。

四方より迫り來る大山の逃れ難き如く、老病死衰の四大事は人間に迫り來り、獸王も人の毒箭には敵し難く、欲樂の具——宮殿諸裝飾調度衣服者香にて嚴飾するもこの四事迫り來れば、肉身は衰え、死滅し、死しては諸民悲しむも詮なく、肉は腐り醜惡に、土入に入りては骨も灰滅する。是れ失壞の法であり、怖畏あり、災横あり、愁惱多く、墜墮・零落・斷壞・離散の法である。

病に藥、飢渴に飯食、熱に涼を求め、可く之を愈すものを求むべく、無常觀・盡滅觀に従つて勸修すべく、食欲に汚染されず、瞋恚に鼓動されず、愚痴に覆蔽されず、王の富貴樂・愛欲樂、他の諸欲樂を受ける具に耽染せず、財命憍逸を滅除し、無常の孔魔を怖るべしと誡め、法行

に隨ひ、非法に隨はず、衆生を惑むこと一子の如く、至誠を以て佛法を護持し、三寶を紹隆して餘を顧る勿れと諭し、諸欲樂の具を厭離し、正法聖慧の財寶を願求すべしと述べてゐる。

上述の如くこの經の思想は殊異のものはなく、王者の佛敎的處世を説いた者で、第二義的俗諦門的であつて、尼柯耶の思想系統に屬し、小乘阿毘達磨論的思想も、大乘的進歩思想も伺はれず、原始的無常觀を出でない。

思想的にはかくの如くであるが、表現は玄奘の名譯による點もあらうが、論意明徹、文意明快にして、叙述亦文學的にして巧妙に殊に譬喩に巧みである。佛敎文學のかゝる思想を滅し、題材を扱ふも亦勿論明快である。琉璃王經と比較する時、内容譯文共に興味深きものあらう。

佛生二四九九年三月五日

譯者 平

等 通 昭 識

# 如來示教勝軍王經解題

## 一、如來示教勝軍王經の

### 漢譯者と成立年代

如來示教勝軍王經の漢譯者は有名な唐の釋玄奘である。玄奘の元の姓名は陳禪と云つた。河南省の洛陽の支那沙門で、紀元六二二年成都で受戒した。紀元六二九年支那を出發して印度への有名な旅行を爲した。紀元六四五年貞觀十九年一月廿四日に支那の首都に歸つた。同年より死に至るまで努めて譯經に従ひ、七十五部千三百三十五卷に及んだ。紀元六六四年麟德二年二月四日に齡六十五歳で死んだ。義淨・鳩摩羅什等と共に譯經家として最も活躍したものであつて、旅行家としても著名で、有名な旅行記大唐西域記を現し、此の著は今尙西域古代印度地方

の貴重な史的地理的文獻である。三藏中現存する玄奘の譯經は七十五部である。

その内大般若波羅蜜多經(Mahaprajñāpāramitā-sūtra)六百卷・稱讚淨土佛攝受經(the smaller Sukāvativyūha-sūtra)・般若心經(Prajñāparamitā-hṛdaya-sūtra)・

廣百論本(Saṣṣṭraivaiṇya)・大毘婆沙

論二百卷(Abhidharma-mahāvibhāṅga-

sūtra)・阿毘達磨俱舍論(Abhidharmako-

śāstra)・阿毘達磨集門足論・阿毘達磨品類

發智論・阿毘達磨識足論・阿毘達磨界身足論

等があり、經部にては大乗經典多く、論

部にては小乘阿毘達磨論書が多く、皆共

に教理史上重要な經典のみであつて、彼

自身も大乘の進歩思想を抱懐して居つた

ものと思はれる。

如來示教勝軍王經の譯出年代は紀元六四一—六四四年間との外は確定の資料はなく、南條目錄は六四九年譯出としてゐる。更に製作年代は原典は無く、之又紀元六四五年以前とより確定の論據は得られない。然しその内容が尼柯耶的であつて、何等進歩的思想を藏しない點から、理論的には紀元前の製作にかゝるかと思はれる。

異譯として宋の施護(九八〇—九八二)の譯出になる佛經勝軍王所問經がある。本經と大同小異である。

## 二、如來示教勝軍王經の内容と表現

如來示教勝軍王經は題名の示す如く『如來の勝軍王を示教するの經であつて、佛が舍衛城誓多林給孤獨園(Jetaṇṇa-Anāthapiṇḍāśyama)に在す時、在俗の篤信者憍薩羅主勝軍大王が佛に來詣し





伎樂自娛みて、外に併命の厄あるを知らず。亦た奔波の怖あるを聞かず。安雅常の如し。一として所豫なし。琉璃王厚く摩男を葬り、其の後を存寵す。王舎夷を平げ、更に長を立つ。安慰し畢訖つて、舍衛國に還る。佛、弟子と迦維羅衛に至り、諸の人民の傷殘する者多きを見、又た衆女人を察するに、（四〇） 杙に手足耳鼻支體なし。身形裸露して、委して坑塹に在り。用つて自ら蔽ふなし。世間の苦痛是の如し。不仁の人、相害する甚だ酷なり。佛、諸比丘に言ふ。『彼の琉璃王肆意惡逆にして、罪盛なること乃ち爾り。却つて後ち七日、地獄の火あり。當さに之を燒殺すべし。現世に罪を作れば、便ち現世に受く。』大史讖を奏し、恠むこと佛と同じ。王、大に恐怖し、船に乗りて海に入り、自ら免かるゝを得るを冀ふ。海中に停住すること、七日に至りて期盡く。水中に則ち自然に火出づるあり。船及び王を燒きて、一時に灰滅す。世尊、諸の裸露者を哀愍し、即ち威神を以て、忉利天紫紺の殿を動し、帝釋及び后、首耶等の、無數の天子、各天衣を齎らし、俱供に來下し、服を以て遍く裸露の死者を覆ふ。佛衆生の爲めに、偈を説いて曰く。

「諸仁の目の見る所

現在變じて是の如し。

畢故新を造る莫れ。

後長く度脱すべし。」

佛、偈を説き已つて、復た説法を爲す。諸の來觀者、（四一） 天・龍・鬼神・阿須倫・迦留羅・眞陀羅・摩休勒・梵志・居士・長者・人民・無央數千、佛の所説を聞けり。五百の梵志、其餘の現人、國の荒毀傷殘の痛を見て、出家して道に遵ひ、皆沙門となる。五百の天子、不起法忍を立て、二百の阿須倫、千の龍王、皆無上正眞道意を發し、溝坑五杙の裸形の男女、命盡きて忉利天に上生するを得。千五百人は迹道を見るを得たり。千人は不還證を得。佛之を説き已つて、一切遍く聞き、稽首して退く。

## 佛說瑠璃王經終

【四〇】杙・木に枝無きこと。木の短く出づる貌。きりかぶ。伐木の殘餘。

【四一】首夜、不明。(Sudhamā)の意か。然らば太陽神、日天のことである。

【四二】以下八部衆。詳しくは前出。

る者は少し。少きを以て多に従ふ。門を開いて惡を助け、調を成じ、内と外と應じて敵をして勝しめんと欲す。善を勸る者は少し。門を開いて入るを得。入つて門衛五百人を拵殺す。所害サシ警シせず。生縛せらる貴姓三萬人、地に埋著し、但だ頭を現ぜしむ。驅つて群象に迫り、比足踏殺す。然る後型に駕して其の首を耕す。此の酷に値ふ者は、皆須陀洹サツダエンなり。釋摩男は波斯匿ハシノクの舊好なり。自ら謂ふ、「國人よ、諦かに無常を觀ぜよ。苦毒の對なり。宿罪當に償ふべし。怨恨を懷く勿れ。生現じ尋いで死す。存者忽ち終る。若干の痛・斧・五・杙ミヤヅを解き、喟然として悲歎す。福を食する同時にして禍を受くるも一處なり。」家族七萬餘生じ、復た生獲せられ、其の頸を鐵鎖す。貴姓女千人、鎖を以て之を貫き、道側ミチノヘに羅豎す。貴姓の年少嬰兒を、格上に置きて、之を射殺す。時に琉璃王、釋摩男の衆と與に辛苦するを見て、顧みて臣に謂つて曰く、「是れ何人ぞや。」答へて曰く、「釋摩男なり。釋摩男の來るや、乞ふ處あらむと欲す。」と。王曰く「之を現せ。」釋自ら陳べて曰く、「王の大王よ、存遇隆厚なり。納の所啓ウケを聽ユせ。當さに具さに以て、聞くべし。王委曲を識つて、其所説を恣にせよ。願くは威怒を節せん。唯權りに兵を止めて、放逸ならしむる無し。殘害する所多し。我れ池中に入らむ。斯くして須らく當に還るべし。王と密義して身策を立つるなり。我、水の出づるを待ち、乃ち復た懼おそれせよ。」王、心に言ふ。人水中に在るも、勢久しきを得ず。」と。即ち所白ウケを聽ユす。是に於て摩男、國の人民大厄に遭ふ爲めの故に、辭して行いて池に入り、髮を解いて樹に繫し、自ら水に沈み、良久しくして還らず。王大いに恠み、遂に左右を遣はして、往いて科索を求め、樹根の下に於て、其の尸喪を得。出して池側にミナト殮ウツす。王甚だ之を憐み、慈哀の心あり。門族を用ふるが故に、自ら沈んで死す。其の義茲イダの如し。吾國主となりて小忿を忍ばず、豈に當に急戰すべけん。所害をして彌々熾しならしめんや。前の三億人畢對し併命し、次の三億人蒙りて自ら之に次ぐ。救ひ得て皆視息す。奔突して走脱し、全きを得て命を濟ふ。又三億人、家を修めて供養し、歡宴熙怡し、

【三〇】 珥、みみだま、みみかざり、劍、うでわ。

【三一】 類、ひたひ。

【三二】 櫛、くじ(櫛)。

【三三】 警、そしる。にくむ。

【三七】 須陀洹(sacramm)、四果の第一。詳しへは前出。

【三八】 杙、一種の喬木、一種の草、ふちもどき。

【三九】 殮、死して未だ葬らず、棺に在らしめ、將に葬棺に遷さんとする時、之を殮として遇す、かりもがり、埋没すること。





爲す。哀愍を用ひて親屬を傷むが故なり。王、心に念じて曰く、「先古に載する所、藏室の秘ニシレン識。用兵征旅に、沙門に遇へば、轉じて便ち軍を廻らして還る、と。況んや今佛に値ふをや。焉んぞ進むを得ん。」と。佛足を稽首して、即ち便ち反旅し、舍衛に還り來り日未だ久しからず。侍者阿難・力士樓山、世尊に翼從して、尼拘類樹園に還り、阿難をして座を敷かしめ、四輩に宣告して、皆な集會せしむ。時に佛の尊顏姿容耀なく、頂に光明なく、衣服變色す。阿難坐の已に定まるを察し、則ち衣法服を整て、右膝を地に投じ、又手して白して言く、「尊に侍すること積年。未だ三變を觀ず。」佛、阿難に告ぐ、「却つて後七日、迦維羅衛釋氏貴姓は皆な當に傷斃すべし。斯の變を現するは、中家持服を爲すの故なり。」と。大目犍連、前んで佛に白ふす。「是れ何ぞ言ふに足らむ。我の神力、正覺の究むる所、能く右掌を以て、舍夷國を擧げて、跳つて空中に置き、上、天に至らず、下地に至らず。瑠璃王焉を殺さんとするも焉んぞ能く得んや。」佛目連に告ぐ。「汝の威徳を知れば、通足斯の如し。宿命の罪、誰れか代つて受くべき。」又曰く「鐵文籠を以て、此の國を躡遮し、上は又鉢を以て之を覆ひ、形候無からしめ、他方の異土を擲置せむ。又以て須彌山を四披せん。南は山に内著し、然る後之を合せば、各所安を得ん。又大海水、深廣の量、三百三十六萬里、我れ此の國を以て、中央に浮置し、諸人民をして往來の想無からしめむ。又此の國を以て、須彌山の頂に倚せ、復た能く倒覆して、毀害なからしめむ。又下も之を金剛地際に没せしめん。又た瑠璃王の衆四種の兵を打擲して、大鐵圍山表ニシレンに置き、兩怨敵をして相討伐せざらしめん。」と。佛言く、「善い哉、世尊は汝の此十威力能く此の擧を辨するを信す。舍夷の貴戚の、宿世の殃罪、孰れが畢償して代り受くるに堪ん。阿難佛に白ふす。「寧ろ譎詭ありて、此の國を祐護せば、安穩オクニならしめむか。」佛言く、「若し舍夷の人、能く同心して外讎を興えず、往來の緣あらば、國全ふすべきなり。」と。

大史三たび王を諫む。「宜しく時を用ひて進んで舍夷を討つべし」と。王聞きて赫怒し、軍を興し、

又たひらげほるぼす。夷、諫滅すること。こるす、ほるぼすのぞく。

【四】 積、かしらづみ、かんむり、覆ひ結びて髪を整ふる巾。拂、からざを。

【五】 儼、たふるたふす。

【六】 哽噎、涙にむせぶ。咽喉ふさがつて聲出でず。しぶ、咽むせぶ。嚙、咽喉塞がる、むせぶ。

【七】 號食、むさぼる、射貨を食ふ。邁、ひま、いとま。

【八】 蘿蔔、だいこん。蘿は一種の蔓草。つた、かづら。蘿蔔はすずしろ、だいこん。

【九】 臚、腹の前、又腹張る、ふぶる。

【一〇】 饗、死者に物を贈る、喪を助け、物を贈る。おくる、又其の物、おくりもの。

殯、死して未だ葬らず、棺に在らしめ、將に葬柩に遷さんとするとき、之を賓として遇す、かりもがり。

【一一】 閻維(Yamhi)、茶毘、閻提、閻鼻多、耶維、耶句、譯、焚燒。茶火に造るのは俗字である。屍體を火燒すること。

【一二】 摩男(Maharman)、佛陀時代釋迦族中の有力者にて徳望あり。

【一三】 瞿夷(Koli)、瞿毘耶、瞿比迦、瞿波瞿婆(喬婆彌)、喬

爾の時觀る者、無數千人、王の歡音を聞き、八百人大道意を發して、皆不退轉に立ち、憂色して悦ばず。王后末利王に白して曰く、「幸に愁憤する勿れ。共に俱に遊いて我が父國に還るべし。」と。即ち進發す。七日七夜にして迦維羅衛兜薩聚に到る。冥門閉するに値ひ、亦入るを得ず。各々共に飢渴して向仰する所無く、求乞するに地無し。水傍に止つて人の茶を洗ふ處に。迸ニハ蘿蔔を得て之を食ふ。臏腹脹痛して寤す。王后悲慟し、聲を擧げて大哭す。守聚者問ふて曰く、「何人ぞや。」曰く「吾は王后なり。」又問ふ。「王何れに在りと爲すや。」后曰く、「痛ましい哉。王は水側に寤せり。聚門者即ち馳せて、舍夷諸貴姓に白す。貴性、凶を聞いて奔波驚愕して尋いで皆來る。聞贈殯の棺を出し、閑維して法の如くす。咸皆號悼して摧感せざる無し。爾の時貴族釋ニハ摩男は、瞿夷の父なり。諸豪右と偲を以て歎して曰く。

『子有り、財有り、思惟波波たり。』  
我自ら我に非ず、何ぞ子、財あらん。  
太子國を用ひて、登ニハれて地獄に入らん。』  
釋氏貴姓二百五十深く無常を惟ひて、不退轉を得。五百の女人の未だ出家せざる者は、不起法忍を得たり。

是に於て瑠璃太子、父王の薨するを聞いて、即ち殿に在つて制を稱して王と爲る。異道の太史帶中の書を出して、本狀を證安して惡の忌を記す。之を聞いて大いに怒り、心意憤踊して、四種の兵を召して、迦維羅衛を伐つ。佛、其の意を知り、精舍より路に中止して、要して萎枯樹下に坐す。

斯須の頃、太子の軍至る。時に瑠璃王、遙かに世尊を見て、即ち便ち象車より下り、地に稽首して長跪して佛に問ふ。「唯天中の天よ、菩提附差ニハ・尼拘類ニハ・畢鉢ニハ・優曇鉢ニハ・薩羅恒羅ニハ・隗尼赦羅ニハ、此の七樹有りて、其蔭高大にして、有德茂盛す。何に因りてか棄捨して、枯槁せる多刺の樹に處るや。」佛、瑠璃王に告ぐ。「七樹有り、樹蔭茂盛すると雖も、盛豈に常あらむや。吾刺樹に坐して、以て安穩と

しめた。未生怨王、之を聞いて大いに喜び、駕を駈つて自ら出でて之を迎へた。時に勝光王久しく食さず、團主に乞ふて蘿蔔五顆を得て、之を食ひ水邊に往きて過量に之を飲む。因つて霍亂を成じ、遂に介れて死んだ。未生怨王、後に來つて厚く之を葬つた。

【一〇】 祇樹園、祇陀太子の樹林を略して祇樹と云ふ。是れ太子が佛に樹林を供養したも。祇陀林、祇洹林、新得誓多林。

祇樹給孤獨園 (Jetyavana Kūṭa-jaridandhayanam) 舍衛城に長者あり、よく孤獨者を哀恤す。世に、給孤獨 (Andhupitaka) と呼ぶ。佛摩竭陀國に在つた時來つて法を聞き、三歸して優婆塞となつた。後佛が舍衛城に來り、國人を度せんことを乞ひ、佛に園林を獻せんとした。佛之を許した。長者國に歸つて太子祇多の園林 (Jetyavana) を撰び、巨額の金を出して買はんとした。太子奇貨を嘆じ、自らは林を寄進した。

【一一】 四兵、轉輪聖王の出遊する時隨從する四種の兵。象兵、馬兵、車兵、歩兵の稱。

【一二】 父王太后、今有所ニハ在。以下原文不明瞭。

【一三】 夷滅、たひらぎほるぶ、



け、冠を免じて、劍を解き、四種の兵を除いて、小徑を歩涉し、末利と俱に五體を地に投げ、稽首して禮を爲し、却つて一面に坐す。瑠璃太子時に歸つて宮に還り、瞻視するなし。左右に問うて曰く、『父王太后の今所在と爲すや。』奏して曰く、『佛に造く。』と。太子聞いて問ひ、欣んで所領を率いて、復た嚴を解かず。遂に精舍に至る。曰く、宜しく是の時を知るべし。』是に於て太子は翼従を逼害して、王の近臣五百餘人一時に夷滅す。王冠、幘蓋劍拂履服乘の諸飾を却けて、外に白者無し。時に世尊、王及び後の爲に、世の無常愛欲合會別離の法句を説く。王立つて退轉せず。后は道迹を覩るを得たり。佛、經を説き已つて、王稽首して退いて侍輔を見ずして、僵に狼藉して唯王の衣冠にて二人免るるを得て、逃れて樹間に入り、還つて王に遇ふ。王之に問ふて曰く、『群僚は所在するや。』二人答へて曰く、『太子、所統を率動し、脇將宮に還る。と。王末利に謂く、『子不順を造る、謀逆是くの如し。素此を知る、吾當に我避けて國を以つて之を精舍に付すべし。』と。左右の族姓、王及び後の體柔狀にして楽しんで歩濟に堪えざるを憐み、濟すに車乘を以てす。弊陋の難處遂に昇進して邁んで城門に至る。先時に太子、五百人を列して、門に置いて鎮衛す。門監に敕して曰く、『若し父王來らば、入らしむるを聽す勿れ。』と。王曰く若し入るを得ざれば、吾將に焉んぞ如かん。曰く、『大王に詔りして、境を出でしむべし。』時に王波斯匿、涕泣哽噎して、偈を以て歎じて曰く。

『誠なる哉、世尊の教。』

興衰と貴賤と

寧ろ戒を守つて道を念じ、

憍に法を講ずるを聞いて會し、

王は國に據つて情を恣にし

法を聞して解脱を蒙り、

演ぶる所審かにして諦なり。

一切は常任する無し。

厚き俸祿を食らず、

億國土を願はざらん、

糞穢の邊は樂む所なり。

塵垢は用ひて消除す。』

【六】 割、たひらく。ゆづる。除き去る。

【七】 阿薩陀(Aśata). 觀、天子が諸侯を謁見するを云ふ。

【八】 波斯匿(Prasanna). 合衛國の王名、和悅又は月光と譯し、新稱鉢羅摩那多(Prasenajit)巴(Prasanna)文非は勝軍と、義淨は勝光と譯す。梵授王の子で同日に生れたと。有部毘奈耶雜事八に橋薩羅國王勝光と云ふのは是である。王の第二の夫人末利(Chandika)勝婁と譯す。勝婁經の勝婁夫人は此王夫人の女である。母子名を同じくすを云ふ。もと劫比羅城、迦毘羅城の婢女である。歸佛の福力を以て王の爲に聘されて夫人となり、一子を生む。惡生(Asoka)と名く。逆害自立の心あり、長行大臣を誅す。後に王長行大臣を將いて佛所に至り、法を聽いて久しく出せず。長行意を變じ、車馬を引いて城に還り、惡生太子を策立して王となし、大王の二夫人、行兩勝婁を驅逐した。二夫人王所に詣でて中途に王に遇ひ事を白す。王便ち勝婁をして城に還らしめ、自ら行兩と共に王令城に向ふ。城外に一園林あり、王此に停り行兩をして末生惡王(阿闍世王)に報せ



# 佛說瑠璃王經

## 西晋 月氏國三藏竺法護譯

聞く是くの如し。一時佛迦維羅衛の釋氏精舍、尼拘類樹の下に遊び、五百比丘・侍者阿難・金剛力士の樓由と俱なりき。城中に於て舍夷貴姓五百の長者有り。共に世尊の爲に講堂を造立し、自ら相與に誓ふ。講堂成り已つて、當に正覺を請じて上に於て供を設くべし。沙門・梵志・長者・居士・群黎の人民、佛に先んじて妄りに此の堂に昇るを得ず。若し要に違ふものは、罪不測に在り。舍衛國王時に太子有り。維樓黎と名く。産育の初、瑠璃寶と俱なり。因つて以て號と爲す。衛士を領し、定めて外氏を省し、方に來つて城に入る。講堂を見視するに、高廣嚴淨にして、都雅殊妙なり。世の希有とする所なり。則ち其の上に於て頓みに止つて息涼す。講堂を監する者の、往いて諸の貴性に白して言く、「舍衛の太子、來つて講堂に止まる。」と。貴性之を聞いて、怒を興して罵つて曰く、「吾等の家産、何の異徳か有らん。敢て此の堂に登る。本斯の殿を造るは、乃ち佛の爲に擧げて上饌を具すべし。延いて世尊を屈して、眞聖衆に至る。供養畢訖つて然る後吾等自ら處すべし。而して微なるもの尊に前んじて體を此に置く。」と。尋いで使者を遣し、面あたり之を罵辱し、催逐發遣して久しく滯まらざらしむ。蹈む所の地、足跡を刻去して、履む所の寶階を、輒ち更に貿易す。時に瑠璃太子、其の罵音を聞いて、姿色變動して、心に毒恚を懷く。太史に敕して曰く、「深く之を憶記せよ。須く吾れ王と爲るとき、當に此の類を誅すべし。」と。太子、阿薩陀。(晋に無信)能く天文を觀て、災怪を占究して、此の狀を書して帶中に内れしむ。惡識を挾んで嚴退せず。還歸して復た前み、朝、親して外家に至らず。

太子の父王を波斯匿と名づく。后の末利と、駕乘導從して、祇樹園に詣る。車を下りて蓋を却

【一】迦維羅衛(Kapilavastu) 前出。

【二】尼拘類樹(Nyagrodha) 又尼毘陀、尼拘類陀、尼俱陀、尼拘尼陀、尼拘慮陀など。樹の名。原語は「下に生長する樹」の意である。即ち榕樹(=oak Indian)である。舊譯は無節と云ふが、從廣樹と云ふのが最も近。

【三】舍夷(Sari)、釋迦族五姓の一。前出。

【四】舍衛國(Sravasti) とも城の名。以て國號とする。

【五】維樓黎(Vidudhaka) 國王の名。又流離王、毘琉璃瑠璃王、婁勤王、樓黎王、生ずる時瑠璃寶と俱なれば毘瑠璃寶と號し、又大夫人の讒に由つて惡生王と名ける。舍衛國(新に室羅伐悉地國)の波斯匿王(新に勝軍と譯す)の子、末利夫人の所生である。父王を弑して位を嗣ぎ、又舊怨を以て迦毘羅城の釋種を滅した。

し歸すること三度、第四回に佛は出向かれなかつた。王は迦毘羅城を攻め、釋種は射をよくしたが、五戒を守つて敵を死傷せしめず、瑠璃王は城を圍んで七日にたり、降伏を勧めた。城内内肛を生じ、門を開いて敵を入れた。王の部下は城内の武士を虐殺した。釋摩男は王に自ら水中にある間逃ぐる人を助けよと乞ひ、王は人の水中にある時間は僅かなりとて之を許した。釋摩男水中に入り久しくして出でず、人をして驗せしめたら、男は毛

髮を水中の樹根に縛し溺死してゐた。王は之を嘆賞し、厚く池邊に葬つた。

佛は迦毘羅城を訪ふて、衆の女人の裸體にて虐殺されるを見て、『瑠璃王は意惡逆にして罪盛なる故、七日の後地獄の火あり、當に之を燒殺さるべし。現世に罪を造るものは現世に之を受ける』と述べ、王は怖れて、海中に停住したが、七日目に水中より自然に火出で、船及び王を燒いて一時に灰滅した。世尊は諸の裸露者を哀愍し、威神力にて天衣を齎らし、厄

者を蔽ひ、度脱を勧めて説法した。目前の有爲轉變を見て、出家するもの多かつた、と。

瑠璃王經一卷は短少にて、特別の佛教思想を説かないが、佛教の無常と因果應報の理を、瑠璃王の興亡を以て語つてゐる。譯文難澁行文簡枯であるが、短文のよく佛教の哲理と舍衛城の一大悲劇を生々と躍動させてゐる。熟讀、人生の運命が是非曲直に想を廻らし、味ふべきの短篇である。

佛生二四九九年二月二十二日

譯者 平等 昭識

# 佛說瑠璃王經解題

## 一、佛說瑠璃王經漢譯者と

### 製作年代

佛說瑠璃王經、(Vaṅḍīya-rāja-sūtra)の漢譯者は西晉(紀元二六五—三二六)の竺法護、梵名では竺曇摩羅察又は刹(Dharmarakṣa)で、焮焯の沙門、紀元二六六年に洛陽に來り、紀元三二三又は三三七年まで譯經に従ひ、九〇部現存してゐる。詳しくは大方等頂王經に記述した。西藏譯に一致するものがある。

佛說瑠璃王經の製作年代は紀元三二七年以前であるとの外、推定の論據はない。

## 二、瑠璃王經の内容と表現

瑠璃王經は王舍城の阿闍世王(Ajātasattu)と共に佛在世に於て大波瀾を起し

た舍衛城の瑠璃王(Vaṅḍīya)の有名な出來事を記してゐる。舍衛城の波斯匿王(Prasenajit)の子維樓黎(Vaṅḍīya)は父

王が釋種の貴種なのを尊んで婚を求めた時、釋種は之を好まず、釋摩男(Mahānāman)が婢に生ました美女末利(Mallikā)を送つた。その子維樓黎は之を知らず、外を省さんとし迦毘羅城に行き、高廣嚴淨なる講堂に上つて憩ふた。釋種は之は佛に獻ぜられ、佛初めて上ることに定められてゐたので、卑しき女の子が之を汚したとて怒り、之を罵詈し、床上の足跡をけすらせた。太子は深く毒恚を懷いて、太史に記録させて、復讐を誓ひ外家に至らなかつた。

父波斯匿王が後末利と祇園に詣つてゐる間に、太子は兵を率いて王の近臣五百

餘人を一時に夷滅した。王と王后は僅かに逃れて、拒れて王城に入るを得ず、王は悲嘆した。王后は慰めて父國に行くをすゝめ、迦毘羅衛兜に到り、夕にて門閉ぢ、入るを得ず、飢渴して王は蘿蔔(大根)を食ひ、水を飲み、腹脹つて死んだ。釋摩男等釋種諸貴族は聞いて悲み、多くの人が出家心を起した。

瑠璃は自立して王となり、迦維羅衛を伐たんとした。佛はその意を知り、精舍より道に出生して、萎枯した樹下に坐した。太子の軍來り、跪いて他に繁つた良樹あるのに、枯樹の下に憩ふ理由を問ふた。佛は親屬を傷む故なりと答へた。王は征路に沙門に會へば還へる、まして佛に會つては、とて舍衛城に歸つた。阿難等に問はれて、釋種は皆斃るべしと述べた。諸弟子は自らの神力を以て之の變を防がんと述べたが、釋種の宿世の殃罪は何人も代り得ぬと説かれた。かく王出征



變形鬼。冬瓜鬼。南方增長天王の領鬼。

【四】毘留婆叉(Virupakṣa)、尾嚕博乞叉、廣目天と譯す。

四天王中西方天王の名。

【五】須陀洹、新稱牽路多阿半那(Sokāpanna)、小乘四果の初果、舊に入流又は逆流

と譯す。入流預流は同一義にて、凡夫を去つて初めて聖道の法流に入るを云ひ、逆流とは聖位に入つて生死の暴流に逆ふを云ふ。即ち三界の見惑を斷じ盡した位である。

【三】牛頭栴檀、栴檀は香樹の名、牛頭山より出せば牛頭

栴檀と云ふ。牛頭山は天摩羅耶と云ひ、良き栴檀香を出す。

【四】極めて短き時間を云ふ。

【五】神、精神を言ふか。輪廻の主體を指すのであらう。

【五】淨居天(Suddhāvāsa=Śādeva)五淨居天と同じ。色界の第四禪に不還果を證せる

聖者の生ずべき處五地あり。一に無煩天、一切煩雜なき處、二に無熱天、一切の熱惱なき處、三に善現天、能く勝法の現はれる處、四に善見天、能く勝法を見る處、五に色究竟天、色界に於て最勝の處。

佛前に向ひ、宛轉自ら撲ち、益と便に悲哭す。得道する者有り。皆自ら慶幸なり。未だ道を獲ざる者は心戦いて惶怖し、衣毛堅つを爲す。

爾の時世尊、衆會に告げて言く、『世は皆無常なり。苦空非身堅固なる有る無し。幻の如く、化の如く、熱き時の炎の如く、水中の月の如く、命久しく居らず。汝等諸人よ、此の火を見て、乃ち熱となす勿れ。諸欲の火は極めて復た是に過ぐ。是の故に汝等、自ら勤勉して、永く生死を離るべし。乃ち大安を得。』と。時に火は大王の身を焚燒し已る。爾の時諸王、各各皆五百瓶の乳を持つて、以て用ひて火を滅す。火滅すの後。競ふて共に骨を收め、金匱に盛置して、即ち其の上に於て便ち共に塔を起し、鬘の旛蓋及び種々の鈴を懸け、塔廟を供養す。時に諸の大衆、同時に聲を發し、俱に佛の白して言く、『大淨飯王は今已に命終す。神何所に生くるや。唯願くは世尊よ、分別解說せよ。』と。時に於て世尊、衆會に告げて言く、『父王淨飯は是れ清淨人なり。淨居天に生る。』と。衆會是の語を聞き已つて、便ち愁毒を捨つ。佛、經を説き竟つて、諸天龍神及び四天王、將ゆる所の眷屬、世間の人民一切大衆、佛の爲に禮を作し、各自ら還り去れり。

【三】 續、きぬ、帛の汎稱。

【四】 斂、内に藏す。

【五】 蓋、死者の意か。

【六】 駢、馬頭をうごかす。馬の悪行。

【七】 毘沙門天(Visakha)

又、又多開天。四天王中毘沙門天の王である。もと金毘羅

(Kubera)として暗黒の屬性であつたが、次第に光明神と

化してマハーバーラタ物語に入つては施福の大神として尊

重せられるに至る。佛教中には護法の天神と施福の神性とを兼ねる。法華義疏には常に如來の道場を護つて法を常く故に多開天と名く云ふ。胎藏界曼荼羅には外金剛部院北方の門側に在り、金剛界曼荼羅には西方に位する夜叉王である。此の天と吉祥天とは古神話時代より常に相關連して夫妻とせられ、台密には歡喜天の如く双身毘沙門法もあり、

但し阿婆縛抄に出す双身は共に男天である。その形像は多種である。胎藏界曼荼羅の像は甲冑を着て、左掌に塔あり、右に寶棒を持す、坐像である。或ひは傳によつて立像のものもある。金剛界曼荼羅も之と同じである。

【八】 提頭賴吒(Dhṛtarāṣṭri)

又提多羅吒に作る。即ち持國天である。四天王の一。須彌の半、第四層の東。東方天

主にして東洲を守護する故東方天とも云ふ。マハーバーラタ物語にその名出づ。

【九】 毘樓勒叉(Viśvadeva)

又毘盧擇迦、鼻溜茶迦に作る、舊に毘琉璃と云ふ。四天王中南方天王の名。素に増長と譯す。

【一〇】 鳩槃荼(Kumhāradu)

又弓盤荼、兜槃荼、恭畔荼、拘槃荼、吉槃荼、鳩滿拏。鬼の名。人の精氣を啖ふ鬼。譯

る。此の中菩薩乘の無學は果徳究竟圓滿なので勝進道である。二乗の見修無學三道に皆此の四道を具する。

【三】 胸、目を動かして私かく見る。めくばせず。またよく。

【三】 嚙眇。眇、なく、さけぶ。

【三】 劫波育、又劫貝、劫波羅、劫波婆、劫貝婆。樹の名。

(譯、時分樹)。又、白樹の名。即ち劫貝樹の葉を以て織つたもの。玄應普義には劫波育は以て布と爲すべく、鬪賓以南では大は樹をなし、以北は形小にして、杖十莖の如くで、殼あり、裁り以て華を出し、柳葉の如く、糸は布と爲すべきである。譯、地質細く、厚くして袖に似たる織物。

【三】 劫波育、又劫貝、劫波羅、劫波婆、劫貝婆。樹の名。

(譯、時分樹)。又、白樹の名。即ち劫貝樹の葉を以て織つたもの。玄應普義には劫波育は以て布と爲すべく、鬪賓以南では大は樹をなし、以北は形小にして、杖十莖の如くで、殼あり、裁り以て華を出し、柳葉の如く、糸は布と爲すべきである。譯、地質細く、厚くして袖に似たる織物。

【三】 劫波育、又劫貝、劫波羅、劫波婆、劫貝婆。樹の名。

(譯、時分樹)。又、白樹の名。即ち劫貝樹の葉を以て織つたもの。玄應普義には劫波育は以て布と爲すべく、鬪賓以南では大は樹をなし、以北は形小にして、杖十莖の如くで、殼あり、裁り以て華を出し、柳葉の如く、糸は布と爲すべきである。譯、地質細く、厚くして袖に似たる織物。

【三】 劫波育、又劫貝、劫波羅、劫波婆、劫貝婆。樹の名。

(譯、時分樹)。又、白樹の名。即ち劫貝樹の葉を以て織つたもの。玄應普義には劫波育は以て布と爲すべく、鬪賓以南では大は樹をなし、以北は形小にして、杖十莖の如くで、殼あり、裁り以て華を出し、柳葉の如く、糸は布と爲すべきである。譯、地質細く、厚くして袖に似たる織物。

【三】 劫波育、又劫貝、劫波羅、劫波婆、劫貝婆。樹の名。

(譯、時分樹)。又、白樹の名。即ち劫貝樹の葉を以て織つたもの。玄應普義には劫波育は以て布と爲すべく、鬪賓以南では大は樹をなし、以北は形小にして、杖十莖の如くで、殼あり、裁り以て華を出し、柳葉の如く、糸は布と爲すべきである。譯、地質細く、厚くして袖に似たる織物。

【三】 劫波育、又劫貝、劫波羅、劫波婆、劫貝婆。樹の名。

(譯、時分樹)。又、白樹の名。即ち劫貝樹の葉を以て織つたもの。玄應普義には劫波育は以て布と爲すべく、鬪賓以南では大は樹をなし、以北は形小にして、杖十莖の如くで、殼あり、裁り以て華を出し、柳葉の如く、糸は布と爲すべきである。譯、地質細く、厚くして袖に似たる織物。

【三】 劫波育、又劫貝、劫波羅、劫波婆、劫貝婆。樹の名。

(譯、時分樹)。又、白樹の名。即ち劫貝樹の葉を以て織つたもの。玄應普義には劫波育は以て布と爲すべく、鬪賓以南では大は樹をなし、以北は形小にして、杖十莖の如くで、殼あり、裁り以て華を出し、柳葉の如く、糸は布と爲すべきである。譯、地質細く、厚くして袖に似たる織物。

【三】 劫波育、又劫貝、劫波羅、劫波婆、劫貝婆。樹の名。

(譯、時分樹)。又、白樹の名。即ち劫貝樹の葉を以て織つたもの。玄應普義には劫波育は以て布と爲すべく、鬪賓以南では大は樹をなし、以北は形小にして、杖十莖の如くで、殼あり、裁り以て華を出し、柳葉の如く、糸は布と爲すべきである。譯、地質細く、厚くして袖に似たる織物。

【三】 劫波育、又劫貝、劫波羅、劫波婆、劫貝婆。樹の名。

(譯、時分樹)。又、白樹の名。即ち劫貝樹の葉を以て織つたもの。玄應普義には劫波育は以て布と爲すべく、鬪賓以南では大は樹をなし、以北は形小にして、杖十莖の如くで、殼あり、裁り以て華を出し、柳葉の如く、糸は布と爲すべきである。譯、地質細く、厚くして袖に似たる織物。

【三】 劫波育、又劫貝、劫波羅、劫波婆、劫貝婆。樹の名。

(譯、時分樹)。又、白樹の名。即ち劫貝樹の葉を以て織つたもの。玄應普義には劫波育は以て布と爲すべく、鬪賓以南では大は樹をなし、以北は形小にして、杖十莖の如くで、殼あり、裁り以て華を出し、柳葉の如く、糸は布と爲すべきである。譯、地質細く、厚くして袖に似たる織物。

【三】 劫波育、又劫貝、劫波羅、劫波婆、劫貝婆。樹の名。

(譯、時分樹)。又、白樹の名。即ち劫貝樹の葉を以て織つたもの。玄應普義には劫波育は以て布と爲すべく、鬪賓以南では大は樹をなし、以北は形小にして、杖十莖の如くで、殼あり、裁り以て華を出し、柳葉の如く、糸は布と爲すべきである。譯、地質細く、厚くして袖に似たる織物。

【三】 劫波育、又劫貝、劫波羅、劫波婆、劫貝婆。樹の名。

(譯、時分樹)。又、白樹の名。即ち劫貝樹の葉を以て織つたもの。玄應普義には劫波育は以て布と爲すべく、鬪賓以南では大は樹をなし、以北は形小にして、杖十莖の如くで、殼あり、裁り以て華を出し、柳葉の如く、糸は布と爲すべきである。譯、地質細く、厚くして袖に似たる織物。

【三】 劫波育、又劫貝、劫波羅、劫波婆、劫貝婆。樹の名。

(譯、時分樹)。又、白樹の名。即ち劫貝樹の葉を以て織つたもの。玄應普義には劫波育は以て布と爲すべく、鬪賓以南では大は樹をなし、以北は形小にして、杖十莖の如くで、殼あり、裁り以て華を出し、柳葉の如く、糸は布と爲すべきである。譯、地質細く、厚くして袖に似たる織物。

爾の時世尊、當來世を念ふに、人民兇暴にして、父母育養の恩に報いず、是れ不孝の者たり。是の當來の衆生の等の爲に、禮法を設くるが故に、如來躬身父王の棺を擔がんと欲す。即時に三千大千世界六種に震動し、一切の衆山、駸駸涌没して、水上の船の如し。爾の時欲界の一切の諸天は無央數百千の眷屬と俱に來つて喪に赴く。北方天王、毘沙門、諸の夜叉鬼人等、億百千衆を將いて俱に來つて喪に赴く。東方天王、提頭賴吒、諸の妓樂鬼神等、億百千衆を從いて、俱に來つて喪に赴く。南方天王、毗樓勒叉、鳩槃荼鬼神等、億百千衆を從いて俱に來つて喪に赴く。西方天王、毗留婆叉、諸龍神億百千を從いて俱に來つて喪に赴く。皆共に哀みを發して聲を擧げて啼哭す。時に四天王、竊かに共に思議して世尊を當來世の諸の父母に孝順ならざる者の爲の故に、大慈悲を以て現に自ら躬身、父王の棺を擔ふを瞻望す。時に四天王、俱に共に長跪して、同時に聲を發し、俱に佛に白して言く。『唯然り、世尊よ。願くは我等の父王の棺を擔ふを聽されよ。然る所以は、我等も亦た是れ佛の弟子にして、亦復た佛に従ひ、法を聞き意解して法眼淨を得、須陀洹を成じたり。是を以ての故に、我曹宜しく父王の棺を擔ふべし。』と。

爾の時世尊、四天王の父王の棺を擔ふを聽す。時に四天王、各々自ら身を變じ、人の形像の如くなり。手を以て棺を擎げ、擔うて肩上に在り。舉國の人民一切大衆、啼哭せざるはなし。

爾の時世尊、威光益々顯はれ、萬日の並ぶが如し。如來躬ら手に香爐を執り、喪前に在つて行き、出でて葬所に詣る。靈鷲山上、千の阿羅漢有り、神通力を以て虚に乗じて來至し、佛足を稽首し、復た佛に白して言く。『唯願くは世尊よ、勅して何事を使せしむるや。』時に佛便ち諸の阿羅漢に告ぐ。『汝等、疾く大海濱上に往いて、牛頭梅檀種種の香木を取れ。』と。即ち教勅を受けて、指を彈する頃の如く、各々大海に到り、共に香薪を取り、臂を屈伸する頃に便ち已に來到す。佛大衆と與共に香薪を積み、棺を擧げて上に置き、火を放つて之を焚く。一切の大衆は火の盛然たるを見て、皆

の祖射殺せられ、血塊より二莖の甘蔗を生じ、次が一男一女を生じた。姓を甘蔗とし、別稱を日種とし、四子北に移つて釋迦姓を唱へた。その別姓を命夷と云ふ。佛は甘蔗王 (Ikshvaku) の末にして釋迦は姓、日種 (Gurva Yamso) 中の釋迦族 (Gurva) なのだから稱するのである。又置養の意味に付いて天台は純淑、慧苑は最勝とし、慈恩は日矣種泥土種とする。

【三】 斛飯王 (Dronakana)、獅子頰 (Sinhahana) の第三子淨飯王の弟に、阿難 (Ananda) 提婆達多 (Devadatta) の父である。

【二】 四道、道とは涅槃の道路である。此に乗じて涅槃の城に到れば道と名く。道異なるも四種を以て攝盡す。一に加行道、先づ三賢四善根の位に於て力を加へて三學を行ずる位である。二に無間道、加行の功徳成就して、正智を發し、正しく煩惱を斷する位である。惑の爲に間隔せられないので無間道と云ふ。三に解脫道、無間道の後に生ずる一念の正智正しく眞理を證悟する位である。既に惑を證脱した正智なので解脫道と名ける。四に勝進道、解脫道の後に更に進んで定慧增長する位であ



して言く。佛は是れ王の子なり。神力具足して與に等しきものなし。次子難陀は、亦是れ王の子なり。已に生死諸欲の海を度つて、四道無礙なり。斛飯王の子、阿難陀は已に法味を服し、佛の所説の法は、猶ほ溷海の如きも、一句も忘れず。悉く之を總持す。王の孫羅云は、道德純備して、諸禪定に逮び、四道の果を成ず。是の四子等は、已に魔網を壊れり。」と。時に淨飯王は是の語を聞き已つて歡喜踊躍して、自ら勝ゆる能はず。即ち自らの手を以て佛手を捉り、其の心上に著く。王は臥處に於て、仰向に合掌し、世尊に白して言く。『我、如來を瞻るに、目眩して、眈かす。之を視るに厭くこと無し。我が願已に滿つてり。心意踊躍して、是より別を取る。如來至眞にして、饒益する所多し。其の見るを得る有り。説く所を聞けば、此の輩之等の者は皆是れ有相にして、大功徳人なり。今日の世尊は、是れ我の子なり。接遇過多にして、捐棄を見ず。』王、臥處に於て、合掌して心に世尊の足下に禮す。時に佛の手掌は、故に王心に住り。無常對至し、命盡きて氣絶え、忽ち後世に就く。是に於て諸釋は、嚙啖啼哭し、舉身自ら撲ち、兩手地を拍ち、鬢を解き、髮を亂し、同じく聲を發して言ふ。『永く覆蓋を失ふ。』と。中に自ら瓔珞を絶つ者あり。中には自ら衣服を毀壞する者あり。中には灰土を取りて自ら塗する者あり。中には自ら其の髮を捻拔する者あり。中には王政に順ひ國を治め、人民を枉すと説く者あり。中には復た言ふものあり。『諸小國等は其の覆護を失ふ。王中の尊王は今已に崩背し、國は威神を失ふと。時に諸釋子、衆の香汁を以て、王身を洗浴し、纏ふに、劫波育疑及び諸、縵帛を以て、棺を以て、斂す。師子座を作り。七寶莊嚴し、眞珠の羅網は垂れて其の傍を繞り、便ち棺を舉げて師子座上に置き、散華燒香す。佛、難陀と共に、喪の頭前に在つて肅恭して立つ。阿難・羅云、住して喪足に有り。難陀長跪して、佛に白して言く。『父王、我を養ふ。願くは難陀の父王の棺を擔ぐを聽せ。』と。阿難、合掌して、前んで佛に白して言く。『唯願くは我に伯父の棺を擔ぐを聽せ。』羅云復た前んで佛に白して言く。『唯願くは我に祖王の棺を擔ぐを聽せ。』

ひは可愛と譯す。  
 【二〇】以下印度文學に於ける悲歎の表現であつて、常例的であり、巴利語佛敎文學にては言語さへも同一である。  
 【二一】哽咽、涙にむせぶこと、すよりなきすること。哽は涙にむせぶ、咽喉ふさがりて聲出せず。しぶる、ふさがる。  
 【二二】椶、一種の木、しゆる、びらう。  
 【二三】坐、ちり、あつまる。  
 【二四】十力、四無畏、十八不共諸佛法、前出。  
 【二五】三十二相、八十種好、前出。  
 【二六】阿僧祇 (Asankhyā)、舊稱、阿僧祇、譯、無數或ひは無央數、印度數目の名。  
 【二七】儻、たちまち、あるひは、もしくは、たまたま。  
 【二八】瞿曇 (Gautama)、舊稱、瞿曇、俱譯、具譯など。新稱、喬答摩。釋種の姓、古來佛の姓に瞿曇、甘庶、日種、釋迦、舍夷の五種を稱し、諸説がある。十二遊經には梵志瞿曇 (Gautama) の弟子を瞿曇 (Gautama) と云ふ。世人小瞿曇 (Gautama) と稱する。賊の爲に殺された。師知つて屍を以て泥に和し、兩團とし、兎十月、一男一女と成る。瞿曇を姓とし、又舍夷と名けるとする。佛本行集經では淨飯六代

來るを聞き、敬意踴躍して覺えず坐を起つ。須臾の頃佛便ち宮に入り、王、佛の到るを見て、遙に兩手を舉げて足を接して言く。「唯願くは如來よ、手我が身に觸れ、我をして安きを得しめよ。病の爲に苦しむ所は、麻油を壓するが如く、痛、忍ぶべからず。我が命將に逝かんとす。寧ろ違反すべし。我今最後なり。世尊を見るを得て、痛恨即ち除く。佛、父王の病重くして羸瘦するを知つて、色變じて識り難く、覩て形體を見るに、憔悴して看<sup>だ</sup>回し。佛は難陀に告ぐ。「王の本時を觀るに、形體羸<sup>だ</sup>として顔色端正に名聲遠く聞ゆ。今重病を得て、乃ち識るべからず。端正なる形容・勇健の名、今何所にか在る。」爾の時淨飯王、一心に合掌して世尊の言を歎す。

「汝の願已に成就し、

我今重病を得たり。

瞿曇種を嚴飾して、

末世に正法を説き、

法王は法味を以て

是くの如く後世の人、

人中の上寶なり。

上、淨居天に至つて、

亦た衆生の願を滿す。

願くは佛我が厄を度せよ。

汝甚だ奇特を爲す。

護り無くして護を作す。

諸の衆生に灌澤す。

我が子極めて慈孝にして、

名、大千界に達し、

獨歩して等雙無し。」

佛言く。「唯願くは父王よ、復た愁悒する莫れ。然る所以は、道德純備して缺減有る無ければなり。佛袈裟の裏より金色の臂を出す。掌は蓮華の如し。即ち手を以て父王の額上に著く。「王は是れ清淨なる戒行の人、心垢已に離る。今應に歡悅すべし。宜しく煩惱すべからず。當に諦に思念すべし。諸經の法義は不牢固に於て堅固の志を得、已に善根を種ゆ。是の故に大王よ、宜しく當に歡喜すべし。命終らんと欲すと雖も、自ら意を寛かにすべし。」時に大稱王は恭敬心を以て、淨飯王に白

瞻羅は執日又は障蔽の義である。

【三】懸遊。懸、はるか、遠く隔てたる。遊、とほし、はるか。

【三】怛、やすからず、うれふ。

【四】白飯王(Shuddhān)師子頻王の第二子、淨飯王の弟釋尊の叔父である。

【五】迦毘羅衛城、又迦維、迦毘羅婆蘇都。城の名。悉達太子の生處上古黃頭仙人(Asita)がこゝに道を修したので、因んで名けたと言ふが、この地方が赤土なる故(Chand. 5) (赤褐色の)と名けたのであらうと(高楠博士説)、現在尼波羅國境に近く遺跡あり。

【六】觀、まみゆ。諸侯の天子に謁見するをいふ。

【七】時を知れ、とは印度にては希望通りになせ、御意にせよの意で承諾を現すのである。

【八】嵐毘尼、嵐毘と同じ。嵐毘は嵐毘尼(Varāṇasī)にて、又嵐毘尼、嵐綺尼、流毘尼、流彌尼と云ふ。新稱、臘伐尼、臘半尼、花園の名。迦毘羅城の東に在り、摩耶夫人が佛を生む處である。臘半尼は鹽と譯す。上古國を守る婢の名である。因て以て圃に名く。或



かんと欲す。』と。羅云復た前んで佛に白して言く。『世尊は是れ我が父なりと雖も、國を棄て道を求む。我は祖王の育養の成就を蒙り、而して出家を得たり。是の故に往いて祖王に奉觀せんと欲す。』と。佛言く。『善い哉、善い哉、宜く、是の時を知り、王の願をして満足しむべし。』と。

是に於て世尊、即ち神足を以て猶鷹王の如く、身を虚空に踊らして忽然として迦維羅衛に現在して、大光明を放つ。國中の人民遙かに佛を見來り、皆共に聲を擧げて涕淚して言く。『設へば大王崩すれば、舍夷の國名必ず絶滅せん。城中の人民佛に向つて啼哭し、世尊に白して言く。『爾の時太子宮城を踰出し、藍毗樹の下に詣つて坐して思惟す。父王、之を見て稽首敬禮す。大王は是くの如し。命斷ゆるも久しからず。唯願くば如來、宜しく時に往いて及び共に相見るべし。』と。國中の人民宛轉して自ら撲ち、嘔咽啼哭して中に自ら瓔珞を絶つ者有り。中には自ら衣服を裂壞する者あり。中には自ら其の髮を遙擧拔する者有り。中に灰土を取つて自ら塗する者有り。痛、骨髓に徹し、猶ほ癡狂人のごとし。佛是を見已つて、國中の人を諫めて『無常の別離は古今是れ有り。汝等諸人當に之を思念すべし。生死を苦と爲す。唯道は是れ眞なり。』と。佛、法雨を以て衆生の心に灌ぎ、種種の法を以て之を開解す。

是に於て世尊、即ち十力、四無所畏、十八不共の諸佛の法を以て大光明を放つ。更に復た重ねて三十二相・八十種好を以て大光明を放つ。以て無量阿僧祇劫に作す所の功德より大光明を放つ。其の光照耀して内外通達して國界に周遍して、光、王身を照し、患苦安きを得たり。王遂に怪みて言く。『是れ何の光ぞや。日月の光、諸天の光とせんか。我が身に觸れて天の旃檀の如し。我が身中の患苦をして息むを得しむ。我遂に疑怪す。儼は、是れ吾子悉達の來るや。先づ光明を現す。是は其の瑞のみ。時に大稱王外より宮に入り、大王に白して言く。『世尊、已に來れり。諸弟子阿難・難陀・羅云等を將ひて、空に乗じて來至せり。王宜しく歡喜して愁毒の心を捨つべし。』と。王、佛の

ある。  
【10】阿難陀(Ananda)、又略して阿難。歡喜、慶喜。斛飯王の子、提婆達多(Devadatta)の弟、佛の從弟にて十大弟子の一。佛成道の夜に生れる。佛壽五十五、阿難二十五歳の時、出家して佛に從侍すること二十五年、一切の佛法を受持した。佛弟子中多聞第一とされ、佛滅後摩訶迦葉が摩揭陀國の大石窓に於て三藏を結集した時、阿難をして經藏を集めしめた。

【11】羅云(Mrigha)、舊に羅云、羅吼羅、羅睺羅、羅睺と云ひ、新に曷羅怛羅、阿羅怛羅、又羅怛羅と云ふ。佛の嫡子にて、古傳は多く佛出家前生れたとする。在胎六年、成道の夜に生れたとするが、之は佛の納妃生子を神聖を害すると考へる後世の構想であらう。十五歳にて出家し、舍利弗を和上として沙彌となり、遂に阿羅漢果を成じて十大弟子中密行第一となつた。後傳にては法華會上に於て大衆に廻し、蹈七寶華來來の記別を受けたとするが、事實より遠い。羅睺羅(阿修羅(Maharajah))が月を障蔽した時に生れたので羅睺羅と名け、又六年母胎の爲に障蔽された故に名けるとも言ふが、眞偽判じ難い。羅



涙下ること雨の如し。時に白飯王、淨飯王に答へて言く。『我聞く世尊は王舍城着闍崛山中に在り。此を去ること懸かに遠く、五十由旬なり。王今轉羸し、設へ使を遣すも道路懸遠にして懼恐くは遅晩して益を加ふる所無し。惟願くば大王よ、大いに愁悒して諸子を懸念すること莫れ。』時に淨飯王、是の語を聞き已つて涙を垂れて言つて。白飯王に答ふ。我子等の輩復た遠遠なりと雖も意望を斷たず。所以は何ぞ。我子成佛して大慈悲を以て恒に神通を以てし、天眼徹視し、天耳洞聽し、衆生の應に度す可き者を救接す。百千萬億の衆生有つて水の爲に溺るる所となれば、慈愍心を以て爲に船筏を作り、而して之を度脱して終に勞疲せず譬へば人有りて、賊の爲圍む所となり、或は怨敵に値つて惶怖して計を失へば、自濟を望まず、唯救護を求め、有勢者に依つて恐難に従つて解脱を得んと欲するが如し。譬へば人有り、時に重病を得れば、良醫を得て、以て其の疾を療せんと欲するが如し。我が今日の如し。世尊を望見すること亦復た是くの如し。然る所以は世尊は晝夜常に三時を以て恒に天眼を以て衆生に應に受化すべき者を觀すること、慈愍心を以て母の子を念ふが如し』と。爾の時世尊靈鷲山に在つて、天耳をもつて遙に迦維羅衛大城の中に父王愍遲し、及び諸王の言を聞き、即ち天眼を以て遙かに父王の病臥して床に著き、羸困憔悴して命終りに向はんと欲するを見、父の渴仰して諸子を見んと欲するを知る。

爾の時世尊、難陀に告げて曰く。『父王淨飯は世間の王に勝れたり。是の我が曹父今重病を得たり。宜しく當に往いて見るべし。餘命少しく在り。時に嚴に速に發せん。我曹應に往くべし。及び命存在すれば、與に相見るを得て、王の願をして滿しめん』と。難陀、教を受けて長跪作禮し。『唯然り、世尊よ。淨飯王は是れ我曹が父なり。所作奇特にして能く聖子を生み、世間を利益す。今宜しく往詣して育養の恩を報ずべし。』と。阿難合掌して佛に白して言く。『我れ世尊に隨つて會して共に相見る。淨飯王は是れ我が伯父なり。我に出家を聽して佛弟子と爲し、佛を得て師と爲す。是の故に往

勝とし、慈恩は日矣種泥土種とする。

【四】淨飯王、梵名首闍那那(Suddhodana)淨飯王又は白淨と譯す。迦毘羅衛國の王にして釋尊の父王である。

【五】四大とは地水火風の四である。詳しくは前出。印度醫學では四大の調和によつて人間の健康があり、その不調和によつて病氣があるとする。

【六】駸、とし、はやし。

【七】眩、くらむ、目くらむ、めまひす。

【八】悉達(Siddhartha)又悉達多、悉多類他に作る。正菩薩婆易刺他悉陀(Sarvārthasiddha)一切義成と譯す。釋迦佛が淨飯王の太子たる時の名である。

【九】難陀(Nanda)、孫陀羅難陀(Sundara nanda)略して但難陀と云ふ。牧牛難陀とは別である。佛の親弟であつて、其の妻孫陀利(Sundari)の愛に溺れて出家を樂はず、佛方便して之を化し、阿羅漢果を得しめた。孫陀羅(Sundara)は鬘と譯す。是れその妻の號である。彼は鬘妻を有するので孫陀羅難陀と稱して以て牧牛難陀と區別した。身長一丈五尺二寸にして三十相を具したと傳へられてゐる。身體端正であつたことは事實の如くで

# 佛說淨飯王般涅槃經

宋居士沮渠京聲譯

是くの如く我聞けり。一時佛王舍城耆闍崛山中に住し、大比丘衆と俱なりき。爾の時、世尊、光明輝燦として、喩へば日出でて世間を照明するが若し。時に舍夷國王、名を淨飯と曰ふ。治むるに正法を以てし、禮徳仁義にして常に慈心を行ふ。時に重病を被り、身中の四大同時に俱に作して其の體を殘害し、支節解かんと欲す。喘息定まらず、駛水の流るるが如し。輔相國中の明醫に宣令し、皆悉く集會して王の疾む所を瞻る。病に隨つて藥を授け、種種療治するも、能く愈す者無し。瑞應已に至つて將に死なんとして久しからず。時に王煩躁し、轉側して停まらざること少水の魚の如し。夫人姪女其の是くの如きを見て、益と更に愁惱す。時に白飯王・大稱王等及び諸の羣臣、同じく聲を發して言く、『今王設し崩すれば、永く覆護を失ひ、國將に虛弱ならんとす。』と。王の身戰動して唇口乾燥し、語聲數と絶えて、眩目して涙下る。時に諸王等、皆敬意を以て長跪又手し、同じく共に白して言く、『大王の素性は作惡を好まず。彈指の頃を経るだにも、徳を積んで厭ふ無く、人民を護養して安を得ざる無し。名は十方に聞ゆ。大王今日何故愁惱せらるるや。』と。時に淨飯王語聲を輒ち出して諸王に告げて曰く、『我が命は逝くと雖も、以て苦と爲さず。但だ我が子悉達を見ざるを恨む。又次子難陀の以て貪姪の世間の諸欲を除くを見ざるを恨む。復た斛飯王の王子阿難陀は佛の法藏を持して一言も失はざるを見ざるを恨む。又孫子羅云幼稚なりと雖も、神足純備して戒行缺くる無きを見ざるを恨む。我若し是の諸子等を見るを得ば、我が病篤しと雖も未だ生死を離れざるを以て苦と爲さず』と。諸の王邊に在るもの是くの如き語を聞き、啼泣せざる無く、

佛說淨飯王般涅槃經

【一】王舍城、梵名羅閱祇、羅閱者、羅閱、曷羅闍姑利伽城(Rājagṛha)中印度摩伽陀國に在りて頻婆沙羅王(新に頻毘婆羅と云ふ)が上栗城の舊都から新に都した所である。王舍城を圍んで五山がある。五山の第一は靈鷲山である。耆闍崛、梵音(Gṛdhrakūṭa)耆闍崛は巴利音(Gijjhakūṭa)をうつす。又、伊沙迦、揭梨、鷲峰、靈鷲、山頂が鷲に似てゐる。又山中鷲が多い、故に名けた。中印度、摩揭陀國王舍城の東北にあり、釋尊說法の地である。

【二】輝々、輝く貌。

【三】舍夷、釋種五姓の一。古來佛の姓に釋曇、甘蔗、日種、釋迦、舍夷の五種を稱し、異同を論ずるに諸説がある。佛本行集經には淨飯六代の祖射殺され、血塊より二葉の甘蔗を生じ、次いで一男一女を生じた。姓を甘蔗とし、別稱を日種とし、四子北に移つて釋迦姓を唱ふその別姓を舍夷と云ふ。佛は甘蔗王(Chandana)の末にして釋曇は姓。日種(Suneha)中の釋迦族(Sakya)なので、かく稱するのである。舍夷は(Shyāma)釋迦の女性なのであらう。又釋曇の意味について、天台は純淑、慧苑は最

別の佛教思想は現れてゐない。

文體は平明にして、潤ひがあり、純情

佛生二四九九年二月二十日

溢れ、孝順の情に涙を催さしむるものがある。孝順を説く經として上々のもので

ある。

譯者 平等昭識



# 佛說淨飯王般涅槃經解題

## 一、佛說淨飯王般涅槃經

### 漢譯者と成立年代

佛說淨飯王般涅槃經 (Suddhodana-vajra-parinibhāna-sūtra) の漢譯者は劉宋 (紀元四二〇—四七九) の沮渠京聲であ

る。沮渠京聲は居士であつて、安陽侯であつた人の太子である。青年時にクスタナ (Kustana, 于闐 Khotan) に行き、其處で印度僧ブツダセーナ (Buddhasena) に會ひ、若干の梵語原典を暗誦することを得、北涼に歸り、禪定に關する經を紀元四三三—四三九年に先づ譯したが、之は紀元七三〇年には失はれてゐた。北涼の滅亡の後、紀元四三三—三九九年に南方に向き、宋の領内に避難し、其處で若干の經を譯

し、紀元四五五年には二十八經又は三十五經を譯し、(紀元七三〇年に十五經が現存した) 紀元四六四年に死んだ。三藏中に十六部が現存してゐる。内佛說觀彌勒菩薩上生兜率陀天經・佛說練王經・八關齋經等を含んでゐる。

淨飯王般涅槃經の成立年代に就いては四五〇年より前と言ふ外推定の論據がない。

## 二、内容と表現

佛說淨飯王般涅槃經は迦毘羅城 (Kapilavastu) 淨飯王 (Suddhodana) が病篤く、嫡子佛陀悉達多 (Siddhartha) ・次子難陀 (Nanda) ・孫羅云 (Rahula) ・阿難 (Ananda) 等に會ふのを切望してゐる時、佛陀は王舍城靈鷲山に在つたが、遙かに之を知つ

て難陀・阿難・羅云を誘つて虚空を通つて迦維羅衛に現れ、大王亡き後を悲しむ人衆を教化し、佛を讚嘆する王に對し、王をなぐさめ、王が道德純備して缺減する所なく、清淨にて戒行の人、諸經の法義に於て堅固の志を得、善根を種えた故、心を寛くして命終らんとしても意を寛かにすべしと述べてゐる。王は歡喜踊躍して逝いた。

喪に侍し、佛は後世人民兇暴にして父母育養の恩を報いず、不孝の者多きを思ひ、この當來世の衆生の爲に禮法を設くるが故に王の棺を擔がんとした。難陀・阿難・羅云も夫々王の恩を思つて棺を擔がんとした。四天王も恩を思つて來り、佛は四天王に棺を擔ぐを聽した。かくて別離を悲しむ諸民に對し、淨飯王は清淨人にて淨居天に生ると述べてゐる。

之によつても知られる如く、本經には孝順を主として記述したもので、外に特

釋多羅三藐三菩提を成すべし。」と。月上菩薩、眼に自ら彼の百千佛の其の記を授くを對見し已つて歡喜踊躍遍く其の體に滿ち、自ら勝ゆる能はず。即ち如來に従つて出家を求請し、白して言く。「善い哉。唯願くは世尊よ、自說法中我れに出家することを與へよ。」と。佛即ち彼の月上菩薩に告げたまはく。「若し必ず然せんには、當さに父母に問ふべし、汝を聽するや不や。」

爾の時童子所生の父母、是の如き變化神通を對見し、復た佛に従つて彼の爲めに授記するを聞きて佛に白して言く。「是の如し、世尊よ、我等已に許す。唯願くば世尊よ。彼の出家を放せ。又願くば我等未來世に於て此の如き法に會はん。」爾の時世尊、即ち童子を放つして出家せしむ。時に彼の童子出家の時に當り、即ち一萬二千人有り、俱に阿耨多羅三藐三菩提を發す。佛此の如き法本を説くの時、復た七十那由他の諸天人等あり、遠塵離垢して、諸法中に於て淨眼を獲得す。復た五百の諸比丘等あり。無爲法に於て漏盡心を獲得して解脱を得たり。復た二百比丘尼等あり。其の同類二萬人と俱なり。其の中或ひは未だ曾つて阿耨多羅三藐三菩提を發せざる者ありしも、亦た菩提の心を發すを得たり。佛、此の經説き已つて、月上菩薩・長老阿難諸菩薩衆、及び彼大會の天人阿修羅・乾闥婆等の八部の類、歡喜奉行せり。

## 佛說月上女經終

と巧分別と有名聲と能破との四義を出す。經中には多く世尊と譯す。「尊きもの」の意である。

【三】釋師子(Śālistambha)、釋迦族中の師子であるの意。師子は獸中の王である如く、釋迦族中の師子であるの意で、釋迦牟尼佛に言ふ。

【三】遠塵離垢、塵垢を遠離すること。塵垢とは煩惱の變名であるけれども、今は八十八使の見惑を指す。八十八使の見惑を斷じて正見を得るを遠塵離垢得法眼淨と云ふ。是れ二乗の初果と菩薩の初地に就いての得益である。但し多くは小乗の初果に就いて云ふ。

諸法皆悉く幻化の如し。

是の處人無く養育するなし。

是の如き諸法の本性は

我先きに所有の女人の身、

即ち實體無し、是を空となす。

彼の身の顛倒是分別より生ず、

意に佛の菩提を成就せんと欲し、

復た三千大千界に

汝等菩提の意を猛發して、

久しからずして當に功德尊を成すべし。

善利丈夫尊沙門<sup>とと</sup>

能く愛物を施せば、常に愛を得。

佛は是れ樂の本にて能く樂を與ふ。

我嘆じて應に最勝尊を嘆すべし。

我が意に觀る所の諸方處

放光今の釋師子の如し。

皆悉く同體にして一法を覺り、

無量の衆生同じく實際なり。

爾の時月上菩薩、此の偈を説き已つて、空より下りて頭面作禮す。彼の作禮する時頭未だ地を離  
す。而も無量百千數佛有つて其の目前に現す。彼等の諸佛同音に彼の月上の記を授け、「當さに阿

諸佛の所説は夢想の如し。

衆生の命及び富伽羅<sup>ニカラ</sup>。

喩へば虚空の如く、異有るなし。

彼の身は空體にして亦た實なし。

空體物無し、取るべきなし。

分別は猶ほ鳥の空を飛ぶが如し。

復た四魔衆を降伏せんと欲し、

微妙の大法輪を轉せんと欲せば、

婆伽婆を尊重供養せよ。

眞體を同じうして別あるなし。

二足中尊に我れ頂禮す。

能く法財を施せば自在を得。

能く怨讎及び諸魔を伏す。

又自在無羨者を嘆す。

願くは諸佛の不思議を見ん。

我亦た當に知るべし、十方佛は

眞如法に於て悉く無二にして

此の忍を有するある者は當に佛と作るべし。」と。

【九】富伽羅 (Aurelian)、補  
特伽羅、舊に福伽羅、補伽羅、  
弗伽羅、富特伽耶に作る。舊に  
人又は衆生と譯す。新に數取  
趣と譯す。五趣を輪廻する主  
體である。

【一〇】魔、梵語摩羅 (Mara)  
の略。能奪命、障礙、擾亂、  
破壞などと譯す。人命を害し、  
人の善事を障礙するもの。欲  
界の第六天主を魔王とし、其  
の眷屬を魔民魔人とす。舊譯  
の經論はもと唐に作つたのを  
梁武より魔字に改めたといふ。  
四魔とは一に煩惱魔、貪等の  
煩惱能く身心を惱害するので  
魔と名ける。二に陰魔又五衆  
魔と云ひ、新譯に蘊魔と云ふ。  
色等の五陰能く種々の苦惱を  
生ずるので魔と名ける。三に  
死魔、死能く人の命根を斷つ  
ので魔名とける。四に他化自  
在天子魔、新譯に自在天魔と  
云ふ。欲界の第六天即ち他化  
自在の魔王能く人の善事を  
害するので魔と名ける。此の  
中第四を以て魔の本法とし、  
他の三魔は類從して皆魔と稱  
する。

【一一】婆伽婆 (Bhagavā)、婆  
伽伴、婆伽婆、婆伽梵、薄阿  
梵 (Bhagavān)。(體聲、一言  
聲男聲)佛地論に自在と熾盛  
と端嚴と名稱と吉祥と尊貴と  
の六義を擧げ、智度論に有徳



我若し一劫の間彼を讚嘆するも、

今日説く所の諸譬喩は

世尊の利土の諸功德は  
海ニ一滯水ヲを取るが如し。」と。

爾の時月上は佛の對に從つて已に授記を與ふるを聞き、聞き已つて歡喜踊躍すること無量にして虚空に飛騰し、地を去る高さ七多羅樹に至る。既に彼の七多羅に住し已つて、其女即ち彼の女身を轉じ、變じて男子と爲る。即時に大地皆悉く震動し、大音聲を出し、天の華雨を雨らし、大光明を出して普く世界を照らす。爾の時月上菩薩は即ち彼の空に住し、偈を以て佛を嘆じ、是の如き言を作す。

「假りに須彌を動して空を地に倒し、

大海枯涸して月天墜つるも、

修羅住する處皆悉く滅するも、  
如來は終に妄言を出さず。

假使十方衆同心して、

無量の功德最大尊は

或ひは火を水と成し、水を火となすも、  
衆生を利益して異説するなし。

大地虚空混沌となるも

羅網用ひて猛風ヲを縛すべきも、

百利同じく芥子の中に入るも、  
如來は終に妄語を有せず。

世尊是の如く眞實を言ふが

今既に大地漏く震動す。

故に我決して菩提道を住せむ。  
我れ菩提を證するは定めて疑なし。

我今既に菩提の記を得。

猶ほ世尊所説の法の如し。

即ち法輪を轉じて別あるなし。  
我百數劫已に聞くを得て、

天人八部の輩

及び諸比丘ニ四衆等を利益す。

又無量の諸菩薩と爲す。

汝等佛に於いて疑ひを生ずる勿れ。

當來悉く成じ、分別なし。

是の故に決して菩提心を發す。

【三】 滯、しづく、したり、流して滴る水。

【六】 羅網、寶珠を連綴して網となし、以て莊嚴の具となすもの。帝釋殿前の羅網を帝網と云ふ。

【七】 記(Vyakarana)、佛道修行者が佛への何等かの功德をなしたに對し、將來、何の世に何の名にて成佛すべしと豫言されることを云ふ。

【八】 四衆、二種あるが、こゝでは僧伽の四衆であらう、一に比丘(Bhikkhu)、二に比丘尼(Bhikkhuni)、三に優婆塞(Uparaka信士)、四に優婆夷(Uparika信女)。外に出家の四衆あり、一に比丘、二に比丘尼、三に沙彌(Samanera)、四に沙彌尼(Samanerika)である。

精進・智慧・禪定の力にて  
劫數の諸佛を供養し已つて  
後の八萬三俱致劫に於て  
彼の尊の名號月上とは、  
其の光金色にして甚だ輝麗にて  
日月火光及び摩尼  
晝夜歲月及び四時。  
彼の刹に當に辟支佛なかるべし。  
清淨勇猛なる菩薩衆  
彼の衆身並に黄金色にして  
悉く名けて人妙可喜と爲す。  
蓮華臺中自ら化生し、  
算數の中に於いて量るべからず。  
無生忍法は障礙なし。  
亦た破戒惡朋友なし。  
若し彼の刹に生ずる所の者あらば  
金銀眞珠微妙の網をもつて  
彼の大世尊は壽命長く、  
壽盡きて涅槃滅度の後、  
彼の尊の在世及び滅度も

是の如き諸世尊を供養す。  
無量千萬衆を教化す。  
當さに作佛を得て月上と名く。  
眉間の白毫妙光を出し、  
顯赫として遍く彼の佛刹を照し、  
星宿の諸光悉く現せず。  
皆彼の光に由つて更に別なければなり。  
聲聞羅漢しやうもんらんし亦た名なし。  
彼の尊は唯だ當に是の如くあるべし。  
百種諸相具さに莊嚴す。  
彼刹には胎生を欲する者なし。  
生じ已つて即ち大威徳あり。  
無量の神通は諸刹に至り、  
彼の刹には魔及び外道なく、  
淨報を受くること兜率陀とさつたの如し。  
諸受の果報は悉く平等なり。  
廣大にして遍く彼の世間を覆ふ。  
世に住すること七十三千劫、  
正法の世に住すること滿一劫なり。  
法教一たび住して殊有るなし。

【三】俱致(Koiti)、又俱賊。  
拘致、數の名。譯、億。

【三】摩尼(Mani)、珠玉のこと。

【三四】無生忍法、前出、註二。

諸欲を厭離おんりすること五百世にて

若し人起つて來り觀んと欲すれば

是の故に三十三天に生ず。

一切生處に宿縁を知り、

父母及び諸親を教化し、

教化せむと欲する爲めに菩提を發す。

童女男女婦人等

二萬三千の諸人類

其の女此の女人の身を轉じ、

廣く清淨の大梵行を行じ、

天より命終して復た此に生れ

此の衆類と利益を作す。

當來の彌勒下生の時。

其の彼の衆に於て才藝多く、

彼の尊を供養すること三月日、

彼の佛邊に於て出家を得、

彼の佛の正法を受持し已つて、

既に往いて阿彌陀を見るを得て、

賢劫諸佛刹に當り、

及び洹河沙の如來は

常に清淨の諸梵行を行す。

乃ち清淨無欲心を得る。

彼むじより離車種來生し、

巧みに諸偈微妙の句を説き、

無量の衆生等を利益し、

故に豪貴なる大離車に生る。

教化して佛乘中に入らしめ、

無量菩提道を成熟す。

久しからずして出家して我が法に在り。

此處に命終つて還た天に生れ、

後の惡世に於いて我が法を護り、

命を捨て、還た兜率陀とさつたに生れ、

饒住輪王の家に子と作り、

可憐端正にして諸徳を備へ、

及び諸の左右の衆圍繞し、

六千三百衆隨逐す。

然る後安樂土に往生し、

禮拜尊重して供養す。

十方所有の諸世界

悉く彼の衆の爲めに利益を作す。

【10】阿彌陀(Amita)・無量。正しくは無量壽(Amitayus)・無量光(Amitabhya)・法藏菩薩、四十八の誓願を立て、修行し、成佛したるもの。法報化の三身がある。南無阿彌陀佛と稱へ、佛を念ずるものを淨土に往生せしむる。  
【11】賢劫(Bhadrakalpa)・過去の住劫を莊嚴劫と名け、未來の住劫を星宿劫と名け、現在の住劫を賢劫と名ける。現在の住劫二十増減中には千佛の出世があるので、之を稱讃して賢劫と云ひ、亦善劫と名ける。



和合十力今是誰れぞ。

千萬諸天は虚空にあり、

及び諸天女合掌して禮す。

聚集せる無量の諸菩薩

深智海の如く法を聽かんと欲す。

爾の時世尊即ち偈句を以つて阿難に報へて言く。

「阿難よ、汝此の童女觀よ。

彼れ諸佛妙神通を見て

過去會つて三百佛を見たてまつり

恒に恭敬を生じ尊重す。

願くは惡道の裏に生れず。

生處に菩提心を忘れず、

昔如來を見る、迦葉と名く。

彼の尊迦葉を供養するが故に

復た佛有り、鉤婁村と號す。

是の故に現に金色の體を得て、

佛有り、迦尼迦牟尼といふ。

是を以て口に妙香氣を出すこと

佛あり、尸棄兩足尊と名く。

是の故に兩目青蓮色にて、

是の如く放光し及び微笑す。

夜叉と金翅と摩呼羅と

世尊を瞻仰する歡喜心をもつてし。

十方の刹土悉く瞻仰し、

淨意光笑何の縁かある」と。

十指掌を合せて我が前に在り。

即ち無上菩提の意を發す。

生生世世所見の者

常に願うて云何が菩提を證せん。

唯だ天及び人中に生ずるを願ひ、

命終已つて後宿命を知る。

樓上に在り、身を墜下し、

現に無生及び順忍を得。

一具の妙衣服を奉施す。

清淨顯赫なること月天の如し。

香華塗末にて彼を供養す。

猶ほ梅檀・優鉢羅の如し。

彼の尊を瞻仰すること滿七日なり。

諸類看る者厭ふを知らず。

【七】金翅 Garuda、梵、迦樓陀、鳥王であつて、蛇を取つて食ふと言ふ。形、極めて大である。

【八】摩呼羅(Mahoraga)八部衆の一、地龍を言ふ。

【九】迦葉如來(Kasyapa-bhagava)過去佛の名。過去の諸佛は無量であるが、七世の父母を廟祀する世譜に順じて、三世の諸佛順次に滅後の衆生の爲に過去の七佛を説くのである。是れ七佛を以て祖となさしむる意である。是れ三世諸佛の通規である。其の七佛の出世教化の相は長阿含一の大本經(Chakrapadama-utthana)及び增一阿含四十四の十不善品に説く。其他七佛父母姓字經、七佛經の別譯がある。七佛の名號にも少異がある。大本經によれば、過去九十一劫に佛あり、毘婆尸如來(Vipasyin)と云ひ、次に過去三十一劫に尸棄如來(Sikhan)あり、次に三十一劫に毘舍婆如來(Vishvabhu)あり、次に賢劫中に拘樓孫佛(Krakucchanda)あり、又拘那含(Kanakamuni)又迦葉佛(Kasyapa)あり、我(釋迦佛)又賢劫中に成覺した、と云ふ。

住忍不動にして須彌しよみの如し。

常に精進及び禪定を修し、

意行深遠にして猶ほ海の如し。

常に慈悲を行じて休息くそくすることなし。

路を迷失する者は能く濟拔す。

尊一たび毛孔より光明を出し、

忽然として日月の光を覆蔽し

所出の音聲は妙清淨にして

所有る聞く者厭足することなく

十方利に於ける無量衆

世尊知り已つて疑網を決す。

誰れか今決定して道意を發する、

誰れか今是の如く心願を滿す。

誰れか今四種の魔を降伏する、

陰魔及び天魔等

世尊今誰れか大利を證する。

名聞誰れか十方利に至る。

一切智者は不善を滅し、

諸の分別に於て皆已に斷す。

何誰れか今廣大の利を得る。

尊の今の光笑は何の縁有らん。

諸有の生死等を免るゝを得たり。

微笑放光何の縁有る。

及び喜捨も亦た復た爾り。

尊の笑光を放つは何の縁ある。

遍く十方無量利に至り、

彼の威力りきを奪うて他眼と作す。

六十種を具して世に獨り尊し。

復た能く諸煩惱を除滅す。

一切心の所行ある者は

尊笑放光何の縁有らん。

誰れか今佛の廣大乘に乗る、

世尊微笑みせうして光を放つ。

謂く煩惱魔及び死魔

微笑放光は何の縁ある。

是の如き微笑みせう及び放光

諸慈行中最勝の慈なり。

微笑放光何の縁ある、

誰れか復た今滿願の心を得る。

【六】九使。使は煩惱の異名である。喻に就て煩惱に名ける。世の公使罪人に隨逐して之を繫縛する如く、煩惱亦行人に隨逐して三界に繫縛し、出離せしめず、故に使と名ける。又使は駈役の義で、煩惱能く人を駈役すれば使と名ける。

十使、一に貪欲、二に妬毒、三に無明、又愚痴と云ふ。四に慢、五に疑、六に身見、又我見と云ふ。七に邊見、八に邪見、九に見取見、十に戒取見。一切諸使の中に此十を根本とするので、標出して十使となす。又十煩惱とも十惑とも十隨眠とも云ふ。合宗は此の中初の五を五鈍使と稱し、後の五を五利使と云ふ。惑性の利鈍に依つて之を分けたのである。又見思を以て分別するので、初の小乘俱舍の義に依れば、疑以下の六使は唯見惑である。又大乘唯識の義に依れば、四使と身邊二見の六使は見修に通じ、疑と邪見戒三見の四使は唯見惑である。但し九使は不明。

せば、爲めに其の法を説き、悉く除滅せしめむ」と。

爾の時彼の女佛の神力を以て、忽然として復た第九蓮華ありて其の右手に現す。其の女復た將に遙かに佛頂に擲つ。其の華至り已つて次第に第九華帳を成す。其の帳の縱横上の所説の如し。其の女是に於て復た言く、『世尊よ、願くは我此の善根の因縁を藉りて、當來世に於いて若し衆生有りて九使に住する者あらば、我爲めに說法して九使を除かしめん』と。

爾の時彼の女佛の神力を以て、忽然として復た第十の蓮華有りて其の右手に現す。其の女是に於いて復た彼の華を以て如來の頂に擲つ。其の華至り已つて次第に第十華帳を成す。莊嚴縱横上の所説の如し。其の女爾の時復た言く、『世尊よ、願くは我此の善根の因縁を藉りて、當來世に於て十力を具足すること。今の世尊の如く大光明を放つて十方刹を照らし等しくして異なるなけん。』

爾の時彼等の所化の華帳高く梵宮に至る。是を以て地居乃至大梵の諸天子等、彼の華帳に因つて復た無量千萬天衆と同じく來つて集會す。』

爾の時世尊便ち微笑する有り。然るに諸佛等しく是の如き法有り。微笑の時其の口より種々色の光を出す。其の光所謂青黃赤白頗梨等の色、及び金銀是の如き等の色あり。而かも彼の光照り、無量無邊佛土に至る。普く梵天に至りて日月を覆翳し、光明威力勝益無比なり。晃耀顯赫して還つて佛頂に入る。

爾の時衆中の長老阿難、座より起ちて衣服を整理し、偏袒右臂して右膝を地に著け、十指の掌を合せ、偈を以て佛に微笑放光の因縁の事を問ふ。

『一切諸智は無眼にあらず。

普く世間を照らして光平等に、

往昔劫數施を行ふを尊び、

一切法に於いて疑ひ有るなし。

及び微笑は何の緣あらん。

清淨の戒行は寶珠の如く、

義、此の讖常に第八讖の見分を緣じて我なりと思量する故に末那と名く。我法二執の根本である。されば第六讖を意識と名けるのに何の別があるかと云ふに、彼は此の末那即ち意に依つて生ずる讖であるので意識と云ふ。即ち依主讖釋である。此は末那即ち第七讖なので、末那讖（即ち意識）と云ふ。是は持業釋である。（總田）。

【二】八顛倒。顛倒とは無常を以て常となし、苦を以て樂となす如く、正しく本眞の事理反する妄見を云ふ。無明の然らしむる所、事理を倒に見るのである。八顛倒とは凡夫二乘各々四倒あり、合せて八倒となすのである。凡夫の四顛倒とは一に常顛倒、世間無常の法に於て常見を起すもの。二に樂顛倒、世間の諸苦に於て樂見を起すもの。三に淨顛倒、世間の不淨法に於て淨見を起すもの。四に我顛倒、世間の無我法に於て我見を起すもの。心受身法の四念處は次第の如く此の四倒を破する爲の觀法である。第二の二乘の四倒は一に無常顛倒、涅槃の常に於て無我を計するのである。二に無樂顛倒、涅槃の樂に於て無樂を計するのである。三に無我顛倒、涅槃の我に於



爾の時彼の女忽然として復た第四蓮華有りて其の右手に現す。其の女亦復た彼の蓮華を以て如來に投擲して佛頂に至る。尋いで復た第四華帳を化成す。其の莊嚴する所、上の所説の如し。復た言く、「世尊よ、願くは、我れ此の善根の因縁を藉りて、未來世に於て、若し衆生ありて四顛倒に住せば、我れ爲めに説法して四倒を除かしむ。」

爾の時彼の女復た如來の神通力を以ての故に。忽然として第五蓮華有りて其の右手に現す。其の女爾の時復た其の華を以て如來に向つて擲つ。其の華到り已つて佛頂に在り、亦た即ち其の第五華頂を成す。其の帳の莊嚴亦た上に説くが如し。其の女時に於て復た言く、「世尊よ、願くは我れ此の善根の因縁を藉りて、當來世に於いて若し衆生有りて五蓋の覆ふもの、爲めに説法して五蓋を除かしめん。」と。

爾の時彼の女、佛の神力を以て、忽然として復た第六蓮華有りて其の右手に現す。其の女亦た復た彼の蓮華を持つて如來に擲向す。其の華至り已つて佛頂にあり。亦た復た第六華帳を化成す。其の莊嚴する所上の所説の如し。是の時彼の女復た言く、「世尊よ、願くは我れ此の善根の因縁を藉りて、未來世の中若し衆生有りて六入に著する者あらば、我爲めに説法して彼の著を離れしめむ」と。

爾の時彼の女、佛の神力を以て、其の右手に於て忽然として復た第七蓮華有りて自然に顯現す。其の女爾の時復た彼の華を以て如來に擲向すれば、佛頂に至り已つて即ち復た第七華帳を變成す。形狀大小上の所説の如し。其の女爾の時復た言く、「世尊よ、願くは我れ此善根の因縁を藉りて、當來世に於て若し衆生有りて七識に住著するあらば、我爲めに説法して其を除斷せしめむ」と。

爾の時彼の女、佛の神力を以て、忽然として復た第八蓮華有りて其の右手に現す。「其女復た持つて佛に向つて擲つ。其の華至り已つて次第に第八華帳を成す。形狀縱廣亦た上に説くが如し。其の女是に於いて復た言く、「世尊よ、願くは我れ來世此の善因を藉りて、若し衆生有りて八顛倒に著

【三】五蓋、蓋は即ち蓋覆の義。五法ありて能く心性を蓋覆して善法を生ぜざらむ。一に食欲蓋、五欲の境に執着し、以て心性を蓋ふもの。二に瞋恚蓋、違情の境に於て忿怒を懷き、以て心性を蓋ふもの。三に睡眠蓋、心昏く身重くして其用を爲さず、以て心性を蓋ふもの。四に掉悔蓋、心の躁動するを掉と云ひ、所作の事に於て心に憂惱するのを悔と云ひ、以て心性を蓋ふもの。五に癡法、法に於て猶豫して決斷なく、以て心性を覆ふもの。

【三】六入、眼耳鼻舌身意の六根又は色聲香味觸法の六境を著し六入と云ひ、新に六處と云ふ。即ち十二入十二處である。六境を外の六入とし、六根を内の六入とす。十二因縁中の六入は内の六入即ち六根である。入は渉入の義。六根六境互に渉入して六識を生ずるので、處と名け、處は所依の義。六根六境は六識を生ずる所依であるので、處と名ける。

【四】七識、唯識論所説八識中の第七識で、末那識即ち意識と稱す。第八識を所依とし、且つ第八識の見分を所縁として生ずる識である。末那識を意と譯する。意は思量の

爾の時世尊一一毛孔より一蓮華を出す。色、眞金の如し。白銀を葉となし、功德藏寶を以つて蓮臺と爲す。彼の諸華の内自然に各各復た一佛を出し、結跏趺座す。彼の諸如來の所化の形像衆相莊嚴し、遍く十方諸佛刹土に至り、自然に顯現して彼れが爲めに說法す。彼の諸佛刹の所説の法句は佛の神力を以つて聲還た此の如來の刹土に聞ゆ。

爾の時月上、是の如き等の妙勝神通を見、歡喜踴躍して其の體に遍滿して自ら勝る能はず。其の女右手に執る所の蓮華、遂に捉つて如來の身上に投擲す。其の華到り已つて佛頂に在り、一花帳を成す。其の帳方整にして下に四柱あり。縱廣正等にして繩墨に依るが如し。帳中自然に一座を化出す。衆寶莊嚴して無量の天衣を以つて座上を覆ふ。其の座爾の時忽ち復た一化佛の形像釋迦の如き者あり。彼の座上に坐して結跏趺座分明顯著なり。而も月上女、彼の華を擲つ時はの願を作して言く。「世尊よ、願くは此の善根の因縁力を藉りての故に、未來世に於て若し諸の衆生我が相に住する時、爲めに其の法を説いて我が相を除かしめん。」と。

爾の時彼の女、佛の神力を以て、忽然として復た第二蓮華ありて其の右手に現す。彼の女是に於いて復た其華を以て如來に擲向す。其の華到り已つて如來の上に在りて第二帳を爲す。衆寶莊嚴して上の所説の如し。時に於て彼の女復た言く。「世尊よ、願くは我此の善根の因縁を藉りて、未來世に於いて若し衆生有りて我見に住する者は、爲めに其の法を説いて我見を除くを得ん。」と。

爾の時彼の女、佛の神力を以て、忽然として復た第三の蓮華有り、其の右手に現す。其の女爾の時復た此の華を以て如來に擲向す。即ち化して第三華帳と成り、衆寶莊嚴すること上の所説の如し。是の時彼の女復た言く。「世尊よ、願くは此の善根の因縁を藉りて、未來世に於て若し衆生ありて一切分別の相に住する者あらば、我爲めに法を説いて其の分別を除かん。及び、貪欲瞋恚癡等を除かん。」

【一〇】 以下、月上女の十善願出づ。

子宮は聚落城邑を容受する能はず。須彌巨海を建立して、十方世界空の如くなる能はざる者なり。是の如し、是の如し。尊舍利弗よ、一空無想無願に於て、諸佛と聲聞と同じきことありと雖も、然かも彼の聲聞は彼の無量無邊の諸の衆生輩の爲めに大利益を作すこと。諸佛・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀の如似くなる能はざるものなり。」と。

爾の時長老舍利弗言く。「是の如く月上よ、佛と聲聞と所得の解脱豈に等しからざらんや。』月上答へて言く、「尊舍利弗よ、是の説を作すなかれ。乃ち言ふ、諸佛と彼の聲聞と解脱同等なり。」

時に舍利弗復た女に問うて言く。「是の如きの事其相云何ぞ。」女復た答へて言く。「尊舍利弗よ、我今に於て所問あらんと欲す。尊者の意の如く我が爲めに之を説け。尊者心解脱を證得する時、頗る能く此の三千大千をして是の如く世界を平かなることを掌の如くならしむるや不や。頗る樹木及び諸山あり。悉く各傾低して汝に向ふや不や。頗る或は能く一切諸惡を除滅する有るや不や。頗る悉く一切衆生の煩惱を除く有りや否や。頗る能く一切諸天の頂禮を得るありや不や。頗る魔衆有りて聚集して三十由旬に遍滿して來るや不や。頗る一念、智慧心を起して解脱を得るありや不や。頗る復た能く一切諸魔眷屬を降すや不や。」

時に舍利弗、月上女に答へて是の如き言を作す。「我れ是くの如き一切諸事に於いて悉く一有るなし。」其の女復た言く。「尊舍利弗よ、菩薩は菩提道場にありて、能く是の如き勝妙なる諸事あり。復た無量無邊の勝事あり。尊舍利弗、聲聞解脱諸佛解脱は乃ち是の如き勝負優劣差別の事あり。尊者云何ぞ是の如き念を作す。謂く佛如來と聲聞と解説等しきなり。」と。

爾の時世尊、月上女を讚して是の如き言を作し給ふ。「善い哉善い哉、月上よ、汝今乃ち能く是くの如く無礙辯を以つて説く。爾の時所化如來の形像月上女右手の中に在り。即ち華より起ちて、世尊の所に至り、世尊を圍遶すること滿三匝にして已に躋より入る。佛神力の故に大地震動す。

【10】多陀阿伽度、阿羅訶、三藐三佛陀 (Tathagata, Arhat, samyaksambuddha)。如來、應供、等正覺又は如來應正通知と譯す。佛の三號である。多陀阿伽度は即ち如來、阿羅訶は應又は應供、三藐三佛陀は正通知又は等正覺である。佛號を擧ぐるに或ひは一號を以てし、或ひは三號を以てし、或ひは十號を以てする。但し三號は十號中の初三である。



其の女答へて言く。『善男子よ、彼の陽焰の今を經る幾時なるが如し。我菩提を發すること亦た復た是くの如し。』

爾の時彌勒菩薩、彼の女に告げて言く。『汝何れの時に於て阿耨多羅三藐三菩提を成就するを得べき。』其女答へて言く。『亦彌勒菩薩の如し。何れの時にか凡夫行地を越ゆるを得ん。』

爾の時長老舍利弗、復た佛に白ふして言く。『世尊よ、希有なり。此の女是の如き辯才あり。云何ぞ乃も能く是の如き等の鎧甲の大龍と共に相ひ問答して、卓立して坐せず、復た身を屈せずして諸菩薩を禮するや。』と。

爾の時月上舍利弗に白して是の如き言をなす。尊舍利弗よ、譬へば小火の如し、體能く燒く故に所有の諸物悉く皆能く燒く。是の如し、是の如し。尊舍利弗よ、諸の菩薩等諸佛と亦た異有るなし。諸行中に於て一切諸煩惱を燒かんと欲する時、所有の煩惱或は自ら、或は他なるも、能く燒かざるなし。』

爾の時舍利弗復た女に問うて言く。『汝當に阿耨多羅三藐三菩提を成就する時、彼の佛刹之を如何がすべきや。』其の女答へて言く。『尊舍利弗よ、我當來佛刹の中に於て、是の如き小行小智名字劣劣なる有る無し。猶ほ今日の舍利弗の如し。我れ必ず當に是の如き佛刹を取るべし。』

爾の時舍利弗、復た月上に言ふ。『汝既に説いて言く。一切法界と如來の體と等ふして異なるあるなし』と。今は所見云何ぞ勝負あるや。月上女の言く。『尊舍利弗、譬へば大海と牛跡との如し。然るに彼の二水は等しくして果あるなし。而かも彼の牛跡は無量無邊の衆生を受くる大海の如くにはあらず。是の如し、是の如し。尊舍利弗よ、諸佛聲聞は法界と同じなりと雖も、而も諸聞聲は爲めに無量無邊諸衆生輩に於て、大利益を作すこと諸佛の如くなる能はざる者なり。又舍利弗よ、譬へば芥子の内に虚空あるが如し。十方世界も亦虚空あり。彼の二虚空は異なるなしと雖も、然かも芥

を燒いた。喜菩薩。具名、金剛喜菩薩、阿耨如來四親近の一。

【九】彌勒菩薩(Maitreya)、釋迦佛の次に成佛する未來佛。前出。

答へて言く。「善男子よ、法界の體は言説すべからず。亦文字算數の所攝受する所を以てすべからず。」

爾の時、無礙辯菩薩復た月上に告げて是くの如き言を作す。「汝、過去諸如來所に於て、何等の法を開けるや。」其の女答へて言く。「善男子よ、今如上虚空を仰觀すべし。如來の説法と此の虚空と等しうして異有る無し。其の聽く所の者も亦復た是くの如し。善男子よ、而して彼の法相等は虚空の如く、異無く、別無し。」

爾の時、虚空藏菩薩は彼女に告げて言く。「汝往昔に於て諸佛に施す所、云何が奉施し、云何が廻向せしや。」其の女報じて言く。「善男子よ、此の所化佛像に於て彼の佛僧に施すが如し。獲る所の功德其の事云何。」時に虚空藏菩薩、月上に執じて言く。「此の佛は是れ化なり。若し彼に於て施すも功德の相無し。」其の女答へて言く。「善男子よ、我亦た是くの如し。昔日如來の前に於て、所行の布施及び迴向す。亦た是の相を作し、亦た是くの如く迴向を作す。」

爾の時不損他心菩薩、復た是の言を作す。「汝今云何ぞ能く一切の諸の衆生等に於て、慈心を以て普遍なるを得るや。」其の女答へて言く。「善男子よ、彼の衆生等の如く異有る無し。」菩薩復た言く。「彼の諸の衆生は其の事云何ぞ。」女復た答へて言く。「衆生の事は是れ過去に非ず、亦た未來に非ず、亦現在に非ず。而して彼の慈心も亦た復た是くの如し。是れ過去に非ず、是れ未來に非ず、是れ現在の所攝に在らざるなり。亦復た言説を以てすべからざるなり。善男子よ、彼の慈心は其の事は是くの如し。」と。

爾の時、喜王菩薩、復た彼の女に問うて是くの如き言を作す。「汝今に於て法眼を得たるや不や。」其の女答へて言く。「善男子よ、我今肉眼を猶ほ尙得ず、況んや法眼を得んや。」と。

爾の時、緊意菩薩復た彼の女に告げて是くの如き言を作す。「汝菩提を行すること今を經る幾時ぞ。」

【五】 無礙辯菩薩。無礙辯とは無礙解と同じ、是れ諸菩薩説法の智辯なので、意業に約して解と言ひ智と言ひ、口業に約して辯と言ふ。一に法無礙、名句文能詮の教法をたとひ、教法に於て辯ることなきを法無礙と名ける。二に義無礙、教法所詮の義理を知りて辯ることなきを義無礙と名ける。三に辭無礙、又謂無礙と云ふ。諸方の言辭に於て通達自在なるを辭無礙と名ける。四に樂説無礙、又辯説無礙と云ふ。前の三種の智を以て衆生の爲に樂説自在なるを樂説無礙と名ける。又正理に契ふ無滯の言説を起すのを辯無礙と名ける。無滯の言説は即ち辯である。之を菩薩の名とした。

【六】 虚空藏菩薩、前出。

【七】 迴向、又回向、回は回轉である。向は迴向である。已が所修の功德を迴轉して期する所に趣向せしめるのを回向と云ふ。已が善根功德を他に施與せんと期するのは衆生に回向するのである。已が功德を以て自他共に佛果を成ぜんと期するのは佛道に回向するのである。

【八】 喜王菩薩、不明。喜見菩薩なら、一切衆生喜見菩薩の略。藥王菩薩の前身に、嘗て法華經を供養する爲に身

言く。「尊舍利弗、此の女今既に佛邊に詣向す。今日必ず當に大法義有るべし。我等亦回還して去るべし。今日寧ろ食はずして善を爲すべし。我等をして身、外に在つて是くの如き法義を聞くを得ざらしむる莫かれ。」と。是の故に彼等諸の聲聞衆遂に即ち回還して、月上に隨逐して佛所に向ふ。

爾の時月上漸く行いて彼の大林の内の草茅精舍に至り、佛所に詣り、佛足を頂禮して右邊三匝す。所持の香華・末香・塗香・衣服・資財・寶幢・旛蓋、佛に奉ずる所の者は以て佛上に散す。散じ已つて復た散す。彼の時大衆所持の香華・華鬘・塗香及び末香、亦佛上に散す。散じ已つて復た散す。散ずる所の諸華は佛の頂上に於て一華蓋を成す。縱横遍覆すること十由旬に滿ちたり。

爾の時童子、文殊師利、月上女に告げて是くの如き言を作す。「汝往昔に於て何より身を捨て、來つて此に生る。當に此の身を捨て、復た何處に生るゝや。其の女答へて言く。「文殊師利、意に於て云何。我今所執の如來の形像、蓮華に座するもの何より身を捨て、來つて此に生れ、今此の身を捨て、當に何處に生るべきや。」と。文殊師利復た月上に言ふ。「此れは是れ化のみ。夫れ化と言ふは處捨無く、身後も亦生無し。」其の女報へて言く。「是くの如し、是くの如し。文殊師利よ、一切諸法は本體是化なり。我、彼の法に於て捨つる時を見ず。生るゝ時を見ず。」

爾の時不空見菩薩、月上女に告げて是くの如き言を作す。「是くの如し月上よ。既に女身を以て成佛すべからず。汝今何故に女身を轉ぜざる。」其の女答へて言く。「善男子よ、夫れ空體は遍無く、轉無し。一切諸法も亦た復た是くの如し。云何ぞ我をして女身を轉ぜしむるや。」

爾の時持地菩薩復た月上に告げて是くの如き言を作す。「汝頗る會て如來を見已るや不や。」其の女答へて言く。「善男子よ、我れ如來を見ること、我が手中に執る所の化佛の如し。是くの如く如來と等しうして異る有る無し。」

爾の時辨聚菩薩復た月上に告げて是くの如き言を作す。「汝今能く法義を辨じ已るや不や。」時に女

【二】文殊師利 (Mañjuśrī) 菩薩の名。前出。

【三】女身變成男子の思想出づ。

【四】持地菩薩。佛、母の爲に說法せんとして、忉利天に上るとき、此の菩薩爲めに三道の寶階を作つた。



## 卷の 下

爾の時長老舍利弗、復た月上に問うて是くの如き言を作す。『汝今に於て菩薩地に在りて是の忍相有り。汝當に久しからずして阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得べし。』爾の時月上是くの如きの言を作す。『尊舍利弗よ、夫れ菩提とは言説有る無し。但だ假名の文字を以て説くのみ。言ふ所の成ずるとは亦假名の説なり。若しくは久しく、若しくは近し、俱に是れは名字なり。尊者よ、云何が是くの如きの言を作す。』汝當に久しからずして阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得べし。』と。尊者舍利弗よ、夫れ阿耨多羅三藐三菩提とは、彼に生處なく、亦た説く可からず。體性有る無く、其の間亦復た成すべき者なし。何を以ての故に。菩提の體は二相有るなし。是の故に菩提は無二離一なり。』

爾の時舍利弗、月上女に告げて是の如き言を作す。『汝今但當に先づ佛所に向ふべし。我等須臾にして法を聽かんが爲の故に。久しからずして當に彼處に還向して來つて法を聽くべし。』

爾の時月上復た長老舍利弗に白して言く。『尊舍利弗よ、如來は聽法者の爲に説かず。亦復た法を樂ぶ者の爲に説かず。舍利弗言く。』如來若し爾らば誰の然に説法するや。』被女答へて言く。『尊舍利弗よ、若し所聞有るも菩提を生ぜず、欣樂の相なし。如來乃ち是くの如く説法を爲す。』と。

爾の時舍利弗、月上に語つて是くの如き言を爲す。若し衆生佛に詣でて法を聽く者有れば、聞法の爲の故に、如來爾の時豈に彼が爲に法を説かさらんや。』

爾の時月上復た彼に答へて言く。『若し衆生有つて是くの如き想を作せば、此れは是れ如來我が爲に説法す。』と。是くの如き衆生は我想到に住す。若し眞洞に法性に入る者有らば則ち是の念なし。終に佛我等の爲の故に是くの如き法を説くと云はず。』と。爾の時尊者摩訶迦葉、長老舍利弗に告げて

【一】阿耨多羅三藐三菩提 (Anuttarasamyak-sambodhi)、佛智の名。舊譯、無王を編知、無上正遍道。眞正に編く一切の眞理を知る無上の智慧のこと。

利弗言く、「彼の文字滅すれば、足跡有るなし。其の女答へて言く、「尊者舍利弗よ、是の如き滅相一切法中間有る者の如く、答有る者の如し。こは俱に滅相にして得可らざるなり。」と。」

第二の信等の五根を言ふ。一に信根、三寶四諦を信ずること。二に精進根、又勤根と名ける。勇猛に善法を修するこ

と。三に念根、正法を憶念すること。四に定根、心を一境に止めて散失せしめないこと。五に慧根、眞理を思惟すること。此の五法は能く他の一切の善法を生ずる本となるので五根と名ける。

【九】五力、三十七道品の一。信、精進、勤念、定、慧、の五根増長して五障を治する勢力を有するもの。一に信力、信根増長して諸の邪信を破するもの。二に精進力、精進根増長して能く身の懈怠を破するもの。三に念力、念根増長して能く諸の邪念を破するもの。四に定力、定根増長して能く諸の亂想を破するもの。五に慧力、慧根増長して能く三界の諸惑を破するもの。

【一〇】山王。山々の王即ち須彌山又は雪山を言ふ。

【一一】崖墮窓、不明。藻、あや。玉の下のしきもの。柎、うだち(樑上の楹)。雖、ほるる。ちりばむ。文飾を刻む。

【一二】多羅(Tala)、樹名。棕櫚に似る。高さの單位によく用ふ。

【一三】鳩槃(Kumbhāṇḍa)、又鳩槃荼、弓槃荼、兜槃荼、忉槃荼、拘槃荼、俱槃荼、忉槃荼、拘槃荼、鳩槃荼、兜槃荼、鬼の名。人の精氣を散ぶ鬼。譯、婆形鬼。冬瓜鬼。南方増長天王の領鬼。

【一四】卑舍、畢舍遮(Pishāṇa)又臂者栢、毘舍闍、毘舍遮、食肉鬼の名。

【一五】枷、くびかせ。鎖、くさり、ぢやう。相、てかせ。械、かし、かせ。

【一六】刎、足を断つ、あしきる、あしきらる、古代の刑罰の名。刎、古の刑の名。鼻をそぐ。はなきる。挑、ほじる。

【一七】緣覺、梵語(Paṭhokāṇa buddha)、舊稱、辟支佛。又辟支迦羅。新稱、針刺髻伽佛陀。舊稱、緣覺。新譯、獨覺。覺とは、一は十二因縁の理を觀じて斷惑證理し、一は飛花落葉の外縁に因つて自ら無帶を覺悟して斷惑證理するを云ふ。獨覺とは彼は無佛の世に於て宿縁を觀し、或ひは飛花落葉を觀じて獨り自ら覺悟す

るからである。

【一八】由旬(Yojana)、又俞旬、輪旬、由延、或ひは輪旬那。新稱、踰那。一里程を計る那目である。帝王一里行軍の里程である。或ひは四十里と云ひ或ひは、三十里と云ふ。

【一九】聲聞、梵語、舍羅婆迦(Vāśīṣṭha)、佛の小乘法中の弟子にして佛の聲教を聞いて四諦の理を悟り、見思の惑を斷じて涅槃に入るものである。是れ佛道中の最下根である。

【二〇】摩訶迦葉(Mahākāśyapa)、具々に摩訶迦葉波と云ふ。摩訶(Mahā)は大と釋し、迦葉波は龜又は飲光と譯す。迦羅門種の一種である。名は畢波羅(Kāśyapa)、彼が父母畢波羅樹の神に禱りて得た子であるので、畢波羅と名ける。

大富長者の子であつて、能く大財と大姓を捨て、頭陀の行を修して大人に識られた。故に大の名を標して餘の十力、優樓婆羅等の迦葉姓に衍ぶ。

【二一】乘、梵語、舊に簡(Xin)、新に野那。乘は乘載の義、行法に名ける。行人を乘

せて其の果地に到らしむる意である。一乘二乘三乘五乘の別がある。其の中一乘に二種あり。二乘に二種あり、三乘に三種あり、五乘に五種ある。三乘中普通のものは大乘の三乘で、次の如くである。一に聲聞乘、又小乘と云ふ。速きは三生、遅きは六十劫間空法を修し、終に現世に於て如來の聲教を聞いて四諦の理を悟り、以て阿羅漢を證するものである。二に緣覺乘、又中乘、辟支佛乘と云ふ。速きは四生、遅きは百劫の間空法を修し、其の最後の生に於て如來の聲教に依らず、飛花落葉の外縁に感じて自ら佛果を證するもの。三に大乘、又菩薩乘と云ふ。三無數劫の間六度の行を修し、更に百劫の間三十二相の福因を植へ、以て無上菩提を證するもの。或ひは之を羊鹿牛の三中に喩へ、或ひは之を象馬兔の三獸に比べる。是れ大乘の三乘なる故に不思議の法を攝しない。

上に問ふて是の如き言を作す。女今何乗を行すや。聲聞乘を行すると爲さんや。辟支佛乘を行すると爲さんや。大乘を行すると爲んや。」

爾の時月上、舍利弗に報へて是の如き言を作す。「尊者舍利弗、今既に我何乘を行するかを問へば、我今還つて尊者舍利弗に問はん。唯願くは是の如く隨意に我に答へよ。舍利弗所證法の如きは、聲聞乘を行すると爲んや。辟支佛乘を行すると爲んや。大乘を行すと爲んや。」

爾の時舍利弗復た彼女に報へて是の如き言を作す。「非也、月上。所以は何ぞや。然るに彼の法は分別す可きなく、亦言説無し。別に非らず、一に非らず、亦衆多に非らず。」

爾の時月上、彼の尊者舍利弗に報へて言く。是の故に應に諸法を分別すべからず。一相・異相は別異の相なし。諸相の中に於て住すべきあるなし。故に涅槃は實に滅す可き無し。」

爾の時長老舍利弗は復月上に告げて是の如き言を爲す。「希有なり、希有なり。汝今乃ち能く此の如き辯才滯礙有ることなし。是の故に汝昔曾つて更に幾許の諸佛に奉侍し來たるや。爾の時月上舍利弗に報へて是の如き言を作す。「尊者舍利弗今我に問ふ。汝昔も曾つて更に幾許の諸佛に奉侍し來たるやとは、猶ほ實際と法界との如きなり。」

時に舍利弗復た女に問うて言く。「言ふ所の實際と法界とは幾許有りや。女復た答へて言く。無明と有と及び愛等の如く異なる有るなし。」

時に舍利弗復た女に問うて言く。「無明と有愛とは復た幾許ありや。其の女報へて言く。「衆生界の如く異なる有るなし。時に舍利弗復た女に問うて言く。「衆生界は復た幾許ありや。其の女報へて言く。「彼の過去・未來・現在の諸佛境界の如し。舍利弗言く。若し此の如きは汝何事を説いて是何を解釋するや。其女報へて言く。「尊者の間に依り我還た依つて答ふ。」と。」

時に舍利弗復た女に問うて言く。「我、何の義を問ふや。其の女報へて言く。「文字を問ふなり。」舍

心は四禪定に依つて修する所之を修すれば、色界の梵天に生ずるを得るので四梵行と云ふ。

【四】 政界の統一王轉輪王が輪を投じて世界を統一する如く、法界の統一王、法輪を轉じて精神界を統一する。轉法輪とは即ち説法を言ふ。

【四五】 那由他(Ananta)、又那由多、那由多、那術、那述と云ふ、數目の名。此方の億に當る。億に十萬、百萬、千萬の三等あり、故に諸師、那由他の數を定めるのに不同がある。

【四六】 灌頂(Anirahita)、王の即位式に一定の法式に配合された水を頭より灌水するを言ふ。之に因んで、佛にも行はれる。薩婆會と爲すは之の慣と從ふ。

【四七】 五眼。一に肉眼、肉身所有の眼。二に天眼色界の天人所有の眼、人中禪定を修して之を得る。遠近内外晝夜を問はず、能く見ることを得。

三に慧眼、二乘の人虚空無相の理を照見する智慧を云ふ。四に法眼、菩薩衆生を度する爲に一切の法門を照見する智慧を云ふ。五に佛眼、佛陀の身中前の四眼を具備するもの。

【四八】 五根、二種あり、眼耳鼻舌身の根である。こゝでは



て毘耶城に向ふ。時に彼の五聲聞諸徒衆等、遙かに月上の其の大衆と前後圍遶わらして相向つて來るを見る。時に舍利弗遂に長老 摩訶迦葉まかに白し、是の如きの言を爲す。『長老迦葉よ、彼所に來る者は是れ月上女にて佛邊に向はんと欲するなり。我等且ま逆さに彼女に問ふべし。義の趣に隨つて其女の忍を得已るや不なやを驗試せん。』

爾の時長老舍利弗等五百比丘は前行して既に月上女の邊に至る。到り已つて告げて言く。『汝今に於て何所に去らんと欲するや。』其月上女即ち長老舍利弗に報じて言く。『尊者舍利弗、今既に我に問ひ是の如き言を作す。』汝今何所に向つて去らんと欲する者ぞ』と。我今亦舍利弗の去るが如く是の如く去るのみ。』と。

爾の時舍利弗復た月上に報じて是の如き言を作す。『我今毘耶離城に入らんと欲す。汝今に於て乃ち彼より出ず。云何ぞ報へて言く。』我今亦舍利弗の去るが如く是の如く去るを作す。』と。爾の時月上復た長老舍利弗に報へて言く。『然れど舍利弗舉足下足凡て何處に依るや。』舍利弗言く。我今舉足及び下足竝に虚空に依る。』其の女復た舍利弗に報へて言く。『我亦是の如く舉足安足悉く虚空に依る。而して虚空界は分別を作さず。是の故に我言ふ。亦尊者舍利弗の去る如く是の如く去るのみ。尊者舍利弗此事自然り。今舍利弗何行を行するや』と。舍利弗言く。『我に涅槃ねはんに向つて是の如く行くなり。』其の女復た舍利弗に白して言く。尊者舍利弗、一切諸法は豈に涅槃に向つて行かさらんや、我今に於ては亦彼に向つて行く。』

爾の時長老舍利弗復た月上に問ふて是の如き言を作す。『若し一切法、涅槃に向めば、汝今云何にして滅度せざる。其女報じて言く。』尊者舍利弗、若し涅槃に向はば、即ち滅度せず。何を以ての故に。其の涅槃の行は生滅せざる故に。涅槃の行者は見るを得べからず。體は分別無く、滅すべき者なし。是の義を以ての故に。涅槃を行すれば即ち之れ涅槃なり。即ち是れ涅槃なり。』爾の時舍利弗復た月

陀文學にも現れ、太陽を神格化した神であるが、佛敎に變化し入られては觀世音菩薩の變化身であつて、太陽の中に住生する。太陽は彼の宮殿であるとも云はれる。

【三〇】 頗黎、又頗璃、頗梨に作り、新譯に頗風迦、頗風迦、娑波致迦、寒頗致迦(Sambhiti)と云ふ。此方の水精に當る。紫白紅碧の四色がある。

【三一】 乾闥婆(Gandharva)、八部衆の一、音樂を掌る。詳しくは看八部衆。

【三二】 須輪(Sure), 前出。

【三三】 施、梵語檀那(Dana)、憐愍を離れて他に施與する義。以下忍辱精進禪定、智慧等出づ。

【三四】 慈悲喜捨心、四無量心、又四等と云ひ、四梵行と云ふ。十二門禪中の四禪である。一に慈無量心、能く樂を與ふる心である。二に悲無量心、能く苦を拔く心である。三に喜無量心、人の離苦得樂を見て慶悦の心を生ずるのである。四に捨無量心、如上の三心之を捨して心に存着せざるなり。又怨親平等にして怨を捨て、親を捨てるのである。此の四心普く無量の衆生を緣じ、無量の福を引くので無量心と名け、又平等に一切の衆生を利するので等心と名け、此の四

緣覺及び羅漢

自覺覺他廣く利益するは

行欲は唯一種の患に非ず。

速かに諸欲を解脫せんことを望まば、

更に歸依するも能く罪を抜くなし。

汝等速かに彼の尊邊に往け。

衆相莊嚴せる諸佛身と作らんと欲せば、

皆な有欲の想を捨離せるに由る。

諸の過惡多くして利益なし。

我と共に往いて如來の邊に詣れ

唯諸佛天人尊有り。

無量劫數に佛は覩難し。」と。

爾の時月上此の偈句を説いて諸人に語り已る。是の時大地皆悉く震動す。虚空内に於て無量の諸天子等有り。聲を揚げて大いに叫んで身衣を舞弄し、詠歌嘯調すること無量無數なり。諸天華を雨らして百數千數なり。諸音樂を作し、具に宣ふべからず。

爾の時大衆是を見聞し已つて、遂に諸欲等を厭離するの想を生じ、希有想・未曾有想を生ず。爾の時に當つて身を擧げて毛豎ら、更に欲惱無し。瞋無く、恚無く、貪無く、癡無く、怒無く、妬無く、嫉無く、淨無く、復た煩惱無く、諸使有るなく、皆歡悅を以て其の身を潤澤し、各各互に父母兄弟姉妹諸親尊長等の想を生じ、既に一切諸煩惱を捨て訖つて、各各の頭面にて月上女を禮す。

爾の時大衆執る所の香華・末香・塗鬘・香華・華・鬘・衣服・諸瓔珞等、悉く將に散擲して月上に向ふ。既に散擲し已つて、佛の神力の故に、其の物彼の化如來の上に在つて一徹蓋を成ずること、廣さ半五六由旬なり。

爾の時、月上還た空より下つて地を去ること四指なり。足虚空を歩んで經行來往す。須臾にして即ち毘耶離城を出で、釋迦如來の所に向はんと欲す。爾の時月上安足の處地皆な震動す。而も彼の大衆、其の數八萬四千と俱に、月上に隨從して次第に去る。

爾の時長老舍利弗五百比丘と共に、晨朝の時に於て衣を整へ鉢を持ち、乞食の爲の故に便ち來つ

し。五十一に舌薄し。五十二に毛紅色なり。五十三に毛纏淨なり。五十四に眼廣長なり。五十五に死門の相現る。五十六に手足赤白なること蓮華の色の如し。五十七に臍出でず。五十八に腹現れず。五十九に細腹なり。六十に身傾動せず。六十一に身持盡す。六十二に其身大なり。六十三に身長し。六十四に手足纏淨にして滑澤なり。六十五に四邊の光長一丈なり。六十六に光身を照して行く。六十七に等しく衆生を視る。六十八に衆生を輕せず。六十九に衆生の音聲に隨つて不増不減である。七十に法を説いて着せず。七十一に衆生の語言に隨つて法を説く。七十二に發音樂聲に應ず。七十三に次第因緣を以て法を説く。七十四に一切衆生盡く相を観ること能はず。七十五に觀て厭足なし。七十六に髮長好なり。七十七に髮亂れず。七十八に髮旋好なり。七十九に髮色青珠の如し。八十に手足有徳の相である。

【七六】 緊那羅(Kinnara)、夜叉(Yaksha)、前出。八部衆を見よ。

【七八】 日天。日天子(Surya)の略。蘇利耶、修利、修野など。異名。寶光天子、寶意天子。もと婆羅門教の天子で、早くは吠

我今本姪慾の心なし。

今此の尊像は我を證明して

汝等昔或ひは我が父と作り、

互に父母及び兄弟と作り、

我或ひは往昔汝等を殺し、

各怨讎を作し、互に相殺す。

欲有るに因つて端正を得非ず。

欲心有る者は解脱なし。

若し地獄及び餓鬼

鳩槃・夜叉・阿修羅

眼瞠舌無く、髀を與ふ。

一切種種の諸過惡は

若し來世に於て輪王・

大梵・自在諸天等に作るは、

盲啗啞に生れて本性を失ひ、

象・牛・虎・蠅・蚊・蛇等

大地主喜樂の家に生れ、

此の如きは皆な梵行を行するに因る。

重煮炙を負ひ、煙鼻を熏じ、

斬截 則劓及び挑眼

汝、無欲に於て欲を生ずる莫れ。

我の如く實を語つて虚有る無し。

我或ひは汝に於て母となる、

云何ぞ此に於て欲心を生ぜんや。

汝等或ひは又我を殺し來る。

云何ぞ此に於て欲想を生ずる。

欲有れば定めて當に不善を生ずべし。

是の故に今須らく欲心を捨つべし。

及び畜生の種類中

卑舍等に墮すらは、皆な欲に因る。

身體形容悉く醜陋なり。

皆往業の欲心多きに因る。

帝釋・三十三天主・

皆廣く淨梵行を行するに因る。

猪・狗・馬・驢及び駱駝、

皆多欲に由つて此の報を獲たり。

豪富・長者及び居士

現に歡喜を得て常に樂を受く。

枷鎖柱械は身を搦辱し、

人の僕使となるは皆な欲に因る。

十四に指圓くして纖細なり。

十五に指文藏覆す。十六に眼

深くして現れず。十七に蹠現

れず。十八に身潤澤なり。十

九に身自ら持して透進せず。

二十に身満足す。二十一に容儀

備足す。二十二に容儀備足す。

二十三に住する處安くして能

く動かす者なし。二十四に威

一切に振ふ。二十五に一切の

衆生見るを樂ぶ。二十六に面

長大ならず。二十七に容貌を

正しくして色を撓さず。二十

八に面具に満足す。二十九に

唇は頻婆果の色如し。三十

に言音深遠なり。三十一に臍

深くして圓好なり。三十二に

毛右旋す。三十三に手足満足

す。三十四に手足意の如し。三

十五に手文明直なり。三十六

に手文長し。三十七に手と斷



爾の時月上所期の日、六日已に過ぎて第七日に至る。時に無量千數の大衆あり。集會し俱に來つて、彼の月上を見る。時に於て衆の内或ひは諸人の欲惱心を以て來り會する者あり。或ひは毘耶離城を見る。其の城上所有の莊嚴・却敵樓櫓・崖墮窓・勾欄・藻梲の諸雕飾事を著觀するに因つて來り會する者有り。時に無量の男夫婦女有り、因つて彼の城に涉り月上を見る。爾の時月上仍彼の華を執り、其の女の父母及び其の眷屬は諸の華鬘塗香末香種種の燒香、上妙の衣服、寶幢幡蓋、種種音聲を齊し、左右侍從し周匝圍遶して家より出でて街巷に在り。

爾の時月上諸眷屬等は出でて街巷に至る。是の如く行く時に無量無邊千數人衆は彼の月上の街巷に在るを見て、進止して行く時、即ち其の所に詣でて口に悉く是の如き言を唱ふ。『此れ是れ我が妻なり。此れは是れ我が妻なり』と。爾の時毘耶離大城の内、或ひは諸人一時に走り來る在り。聲を出して大いに叫んで月上に向ふ。是の時彼女は其の大衆速かに疾く來るを見るが故に、遂に即ち飛騰して虚空に在ること高さ一多羅三三なり。仍彼の華を執つて空に在つて住し、偈を以て彼の諸大衆に白して言く。

『汝等我が此の妙身を觀ること

昔欲心を發すに因らざるが故に、

淫欲を棄捨すること火坑の如く

能く苦行を行じて六根を調へ、

他の妻妾を見て貪欲せず、

是の如くして當に可憐の身を生ずべし。

我が身毛孔妙香を出す。

此れ欲心の熏じて得る所に非ず。

猶ほ眞金の火色を帯ぶるが如し。

能く是の如き微妙の身を得。

及び諸の世事に染著せず。

及び清淨なる諸梵行を行じ、

皆な姉妹及び母の想を生ず。

衆人樂見して厭足する無し。

汝豈に此の城を滿すを聞かざらんや。

皆な布施調伏の果に由る。

ぶれば面を覆ひて髮際に至るもの、二十八に梵音深遠相、梵は清淨の義である。佛の音聲は清淨にして遠く聞ゆるもの、二十九に眼色如紺青相、眼晴の色紺青の如きもの、三十に眼睫如牛王、眼毛の殊勝なること、牛玉の如きもの、三十一に眉間白毫相、兩眉の間に白毫あり、右旋して常に光を放つもの、三十二に頂成肉髻相、梵に烏瑟膩、肉髻と譯す。頂上に肉あり、隆起して髻の形を爲すもの、亦無見頂相と名ける。一切の有情皆見ること能はないが故である。【三三】八十種好、又八十隨形好、三十二の相を更に細別して八十種の好となす。隨形好とは三十二の形相に隨ふ好である。一に無見頂相、佛頂上の内鬘は之を仰げば愈々高く遂に其頂上を見ることがない。二に鼻高くして孔が現れない。三に眉初月の如くである。四に耳輪垂埵する。五に身堅實なること那羅延の如し。六に骨際鉤鎖の如し。七に身一時に廻ること象王の如し。八に行く時足を去ること四歩にして印文現る。九に爪は赤銅色の如くにして薄く潤澤である。十に膝骨堅くして圓好なり。十一に身清潔なり。十二に身柔軟なり。十三に身曲らず。

千萬諸佛を供養し已つて、  
我想及び佛想有る無く、

一切諸想悉く染なく、

汝若し彼の世尊

微妙の諸佛法を聴き、

爾の時月上は彼の蓮華及び化佛を執つて。樓閣の上下より來り、往いて父母の邊に至る。到り已つて偈を説いて其の父母に白して是の如き言をなす。

『父母我が執る所の華を觀るに、

又無上華中を觀ずれば、

是の如き微妙の最勝尊は

我れ今遍く家内を見るに、

其の身遍く度量すべからず

赤白黃紫及び頗梨を成す。

大聖瞿曇大林に在り。

父母同じく往いて供養を設くれば、

父母聞き已つて唱ふ、善い哉。

遂に種々の諸香等、

月上の父母及び親眷

無價の珍寶及び音聲

既に嚴備し已つて家より出で、

一時の頃に於て還つて復た來る。  
利想及び法想有るなし。

諸の衆生に於て利益をなす。

及び大菩薩聲聞衆を見んと欲せば、

速に彼の大導師の邊に往け。』

微妙の華幹金剛色なり。  
諸相の莊嚴は。山王の如し。

何人か當に供養せざるべき。

金色の光耀ること母應に知るべし。

須臾に變じて種々の色

我等今須く供養を設くべし。

速かに華香及び末香を執り、

應に無量の諸功德を獲べし。』

月上、此の言は大利益なり。』と。

寶堂幡蓋及び華鬘を辦へ、

悉く微妙の上衣服を著し、

種々の莊嚴悉く充備す。

大林世尊の邊に往かんと欲す。

十一に身縱廣相、頭足の高と  
兩手を張つた長さと齊しきも  
の。十二に毛孔生青色相、一  
の毛孔から青色の一毛を生じ  
て雜亂せざるもの。十三に身  
上靡相、身毛の頭右旋し、上  
に向つて偃伏するもの。十四  
に身金色相、身體の色黄金の  
如きもの。十五に常光一丈相、  
身より光明を放つこと四面各  
一丈なるもの。十六に皮膚細  
滑相、皮膚の軟滑なるもの。  
十七に七處平滿相、七處は兩  
足下兩掌兩肩并に頂中である。  
此七處皆平滿であつて、缺陷  
がないもの。十八に兩腋滿相、  
腋下充滿するもの。十九に身  
如獅子相、身體平正威儀の嚴  
肅獅子王の如きもの。二十に  
身端直相、身形端正にして區  
曲せざるもの。二十一に眉圓  
滿相、兩眉圓滿にして豐腴な  
るもの。二十二に四十齒相、  
四十齒を具足するもの。二十  
三相に齒白齊密相、四十齒皆  
白淨にして堅密なるもの。二  
十四に四牙白淨相、四牙最も  
白くして大なるもの。二十五  
に頰車如獅子相、兩頰隆滿獅  
子の頰の如きもの。二十六に  
咽中津液得上味相、佛の咽喉  
中に常に津液あつて凡そ食す  
る物の爲に上味を得るもの。  
二十七に廣長舌、舌廣くして  
長く柔軟にして細薄、之を展

衆生を利益し、説くに時を知る。

一切功德悉く具足し、

一切智を具して諸法を見る。

我れ若し一劫を經由して説くも、

何故に其の名號を佛とするかは

爾の時月上、此の偈を聞き已つて歡喜踊躍して其の體に遍滿して自ら勝ゆる能はず。心に渴仰を

生じて如來を見んと欲す。復偈頌を以て彼の化像に白し、是の如き言を爲す。

『尊者是の如く功德を説く。

智者又若し是の如き法を聞かば、

我今若し佛を見ざれば、

亦た復た睡眠に樂著せず、

我、尊者を見已つて歡喜し、

若し彼の佛の體相を對見せば、

佛は大丈夫にして世に聞き難く、

我已に斯の漏盡の名を聞く。

所化如來即ち報へて言く、

其は徒衆數百千有り、

一一能く三千界を負ひ、

定の智慧辭無礙を得て、

神通能く數億刹に至り、

是の故に其の名號を佛と爲す。

諸の衆生等の爲に供養を爲す。

是の故に其の名號を佛と爲す。

或ひは百數千萬劫を經るも、

説いて盡くべからず。故に佛と名く。』と。

我れ今見んと欲す。得べきや不や

決して應に在家の住を樂まざるべし。』

必ず定めて飲まずして食噉せず。

及び以て本の床鋪に坐せず。

復た彼の徳を聞いて淨意を獲ん。

當に更に大歡喜心を發すべし、

劫數百千億を經由せり。

彼の尊は今何の方所に在るや。』

『法主今大林の内に在り、

清淨離垢にして悉く勇猛なり。

手擎けて劫を經るも疲勞せず。

具に多聞を得て大海の如し。

一頃遍く彼の諸佛を禮す。

ひ、之に反するを吉祥坐と云ふ。釋尊菩提樹下に正覺を成ずる時の身は吉祥坐にして、手は降魔印をなしてある。

【五】三十二丈夫相、又三十二大人相と云ふ。此の三十二相は佛に限らず、總べての大人相である。此の相を具するものは、家に在りては輪王となり、家を出れば無上覺を聞くと云ふ。天竺國人の相の理想の形式である。この相を感じるのはその一々の相について百種の福を積むに由る。異説が多いが、代表的ものを擧げると、一に足安平相、足裏に凹處なきもの。二に千輻輪相、足下に輪形あるもの。三に手指纖長相、手指の細長きもの。四に手足柔軟相、手足の柔かなるもの。五に手足縵網相、手足共其の指と指の間に縵網の纖緯あつて交互に連絡するを鵝鴨の如きもの。六に足跟滿足相、跟は足の踵である。踵の圓滿して凹處なきもの。七に足趺高好相、趺は足背である。足背高起して圓滿なものである。八に膺如鹿王相、膺は股肉である。佛の股肉纖細なること鹿王の如きものである。九に手過膝相、手長くして膝を過ぐるもの。十に馬陰藏相、佛の男根、體内に密藏すること馬陰の如きもの。



自ら能く無上道を覺悟す。

彼れ昔恒に常に能く

光明普く千萬刹を照し、

諸佛の刹土は千數

廣大の舌根は能く遍覆す。

諸佛の刹土は千數有るも、

彼れ大聲を出して悉く遍滿す。

諸佛の刹土千億數あるも、

一たび不動に住すれば千萬劫なり。

諸佛の刹土は千億數にして

彼の尊の一毛繫縛し已て

往いて諸佛の上妙向聞いて

自ら覺證し已つて能く衆生を度す。

自在十力皆具足し、

諸佛の法に於て疑ひ有る無し。

佛能く灌頂を作す者なし。

四八 五根・五力等圓備し、

善く禁戒を持つて普く共に住し、

詔無く、曲無く、心調順なり。

佛は常に諸禪定に入り、

是の故に其の名號を佛と爲す。

一切諸法無上輪を輪轉し、

常に苦空及び無我を説く。

百數億數 那由他有るも、

是の故に其の名號を佛と言ふ。

其の數又恒河沙なる如く、

是の故に其の名號を佛と爲す。

彼の尊は牛を以て能く執持す。

是の故に其の名號を佛と爲す。

其の刹の所有の諸の須彌も

能く持行して數億刹に至り

法に於て自在に彼岸に度る。

是の故に其の名號を佛と爲す。

又能く四畏を成就し、

是の故に其の名號を佛と爲す。

五眼成就して悉く具足す。

七覺分道染著する無し、

寂定調伏最も比なく、

是の故に其の名號を佛と爲す。

心に暫亂なく、畏なく、

ず、九に不過中食なり。此中前八は戒にして齋にあらず、第九は正して齋戒である。即ち八種の戒と二種の齋戒とを合せて八齋戒と名ける。成實論・智度論の意である。若し俱舍論の意は第六の幢飾香鬘と第七と歌舞觀聽とを合せて戒となし、以つて前七を七戒とし第八を齋戒とし、合せて八齋戒と云ふ。

【註】琉璃(Vaidurya)、新譯に吠瑠璃、吠瑠璃耶、毘頭梨、吠努瑠耶など云ふ。七寶の一。遠山寶、不遠山寶など譯す。青色の寶石である。産出の山についた名である。遠山は須彌山の異名。不遠山は波羅奈城を去る遠からざる山であると云ふ。

【註】馬瑙(Margārajanī)。結加跏坐、佛陀の坐法である。跏を左右の脛上に結加して坐するを云ふ。跏字の足を添ふるは所謂蛇足である。跏は足背である。左右の足背を交結して左右の一足を左右の脛上に置くを全跏坐と云ふ。即ち結跏跏坐である。左右の一足を左右の一脛に置くのを半跏坐と名ける。全跏坐に吉祥降魔の二があり、先づ右足を以て左の股を押へ、次に左足を以て右の股を押し、手も亦左を上にするを降魔坐と云

須輪等の八部衆に非ず。

我は眞の釋種の佛の使者なり。」と。

爾の時月上復た偈頌を以て、彼の所化如來の形象に白し、是の如きの言を作す。

「仁今ま言ふ所の佛世尊は

彼の形色の體は何に似る所ぞ。

願くば我が爲に彼の形相を説かれよ。

我聞くことを得已つて是くの如く思はん。

又自ら言ふ、我れ佛法の使にして

而も我が爲に佛相を説かず。

我、仁の威及神力を觀るに

世間に比無く、即ち佛の如し。」と。

爾の時彼の化如來の形像復た偈を以て、月上女に答へて言く、

「彼の尊の形體は眞金色にして

三十二の大人の相を具し、

能く衆生のために福田と作る。

是の故に其の名號を佛と爲す。

自ら能く一切法を覺知し、

又復た衆生の心を

若しくは上、若しくは中、若しくは下者と了別す。是の故に其の名號を佛と爲す。

世間の事に於て悉く知解し、

及び以て一切法を了知し、

諸法を知り已つて彼の岸に達す。

是の故に其の名號を佛と爲す。

諸の一切の衆生心に於て

自心に一一能く知見し、

而も衆生及び心に於て

二處但に亦染著せず。

彼の 施を行するに因つて佛と作るを得、

及び能く常に清淨戒を持し、

又た復た忍辱及び精進

禪定・智慧等佛を成ず。

世事に於て知らざる者なく、

所謂一切の諸の技藝に

常に 慈悲喜捨心を懷く、

是の故に其の名號を佛と爲す。

一切諸魔等を降伏し、

名聞は千萬界に震動し、

めないので結と云ふ。即ち生死の因となるものである。

【二〇】閻浮 (Ambudvipa)、舊稱、閻浮提、新稱、瞻部洲。須彌山の南方に當方に當れる大洲の名。即ち吾人の住處。閻

浮 (Jambū) は新稱、瞻部、樹の名。提 (提鞞波 (Dvīpa)) の略。露、洲。此洲の中心に閻

浮樹の林あるを以て洲名とす。又南方に屬するので南閻浮提と云ふ。

【二一】那羅延 (Nairāma)、天上の力士の名である。或ひは梵天王の異名。嘉祥法華義疏では眞諦の註を引いて、那羅

は譯じて人と爲し、延は生本と爲し、梵王は衆生の祖父で、生本と言ふとし、羅什は天の力士を那羅延と名け、端正猛

健であるといふ。

【二二】四大海、佛教にては須彌山を圍繞する四方の外海を以て四海と爲す。須彌山は四大海の中央に在り、四大海の外を鐵圍山にて圍繞してゐる。

【二三】八關齋、八齋戒の異名。關は禁である。八戒齋は殺盜等

の八罪を禁閉して犯しめぬい法であるので關と云ふ。

一に不殺、二に不盜、三に不淫、四に不妄語、五に不飲酒、

六に身を塗飾香鬘せず、七に自ら歌舞し、又歌舞を觀聽せず、八に高廣の牀座に臥坐せず、

上後の六日に至る。是れ月の十五圓滿の時にて、八關齋を受く。其の夜明靜にして樓上に在り、往來經行す。佛の神力の故に其の右手に於て忽然として一蓮華の自ら出づるあり、黄金を莖と爲し、白銀を葉と爲し、<sup>三三</sup>琉璃を藥となし、<sup>三四</sup>馬瑙を臺となす。其花合して一百千葉有り、光明嘩々として妙麗精華なり。華内に一如來の形象あり。<sup>三五</sup>結加趺坐して身金色の如く、自然に顯現す。威光赫奕として明かに彼の樓を明し、<sup>三六</sup>三十二丈夫之相を具し、八十種好にて其の身を莊嚴す。彼の如來の像の出す所の光明も亦復た漏く月上の家内を照す。爾の時月上自ら右手に於て忽ち華を見已つて、瞻仰して彼の如來の形象を覩て、歡喜踊躍して其の體に遍滿して自ら勝つ能はず。即ち便ち偈を以て彼の所化如來の形象に問ひたてまつり、是の如き言を作す。

『不審なり、仁者を天龍と爲すや、是れ鬼神・阿修羅と爲すや、尊者此の身不思議にして或ひは復た黄色身に變化して我れ身心に於て有想無く、仁者今誰の使はず所と爲すや、知す、來意何の縁をなすや。尊嚴顯赫として火聚の如く、爾の時彼の化如來の形象、復た偈を以て月上女に報じて言く、』

『我今天に非ず、亦た龍に非ず。師子釋種の佛世尊故に天龍及び夜叉に非ず。』

緊那羅・夜叉等と爲すや、唯だ願くは德聚我がために説かれよ。

猶ほ金色の 日天等の如し。  
忽ち 頗黎紅縹色に似たり。

尊の功德を見て大に歡喜す。  
未審なり、又何方より來るや。

來已つて還た何所に至らんと欲するや  
功德巍巍として須彌に似たり。』

又夜叉・乾闥婆に非ず。

今我をして來つて備所に至らしむ。  
入に非ず、亦た緊那羅に非らず。

乾闥婆は俗樂を奏するもの、此は法樂を奏する天神である。八に摩睺羅迦(Mahoraga)大神、大腹行など譯す。地龍である。

【三十三】 三十三天、梵語忉利天(Trayastrihan)譯三十三天。欲界の第二天にて須彌山の頂上に在り、中央を帝釋天として四方に各八天がある。合せて三十三天である。忉利天については前出。

【三十四】 梅檀香(Sandana)印度に産する高價な香である。粉末として燒き、又細末を身體に塗り、身體を冷やすに用ひる。

【三十五】 優鉢羅(Utala)又烏鉢羅。漚鉢羅。優鉢刺。花の名。罌、青蓮花。鶯花。紅蓮花。

【三十六】 憍嬌。勸、おそる。威力を以て恐迫す。おびやかす。おどす。嚇、しかる、おどす、いかる。

【三十七】 呵喝。呵、しかる、せむ、わらふ。喝、しかる、よぶ、よぶ。

【三十八】 頤、肩を覺む、しかむ、ひそむ。

【三十九】 結。結果の義、繫縛の義。煩惱の異名。煩惱因となりて生死を結果すれば結と云ひ、又衆生を繫縛して解脱せ



世間但だ此の慈有る者は

假使虚空は地に没するも、

三四 四大海水の牛跡に處するも

他人決定して欺く能はず。

及び須彌を以て芥子に入るも

亦た復た能く我身を降するものなし。」

爾時月上は此の偈を説き已つて父母に白ふして言く。『尊者父母よ、若し必定して此の如き事あらば、願くは此處毘耶離城四衢道頭に於て其の鈴鐸を振ひ、城内の一切人民に號令して是の如き言を作されよ。』今より七日我が女月上は定めて當に外に出で、自から婚嫁を求めて夫主を撰擇すべし。汝等一切諸男子等未だ婚娶せざる者は應に各各好く自ら衣服瓔珞を嚴飾すべし。亦た須らく城内街巷を掃除すべし。香華を布散し、燒香末香及び華鬘等悉く各備辦し、寶幢を堅立し、幡蓋を張懸せよ。是の如く種種好く自ら莊嚴せよ。』是の如く等の諸種の法用を以て父母に諮請し、是事を作さしむ。爾の時父母女の語るを聞き已つて、即ち其言を取り、家より出で、女の所説に依り、即ち便ち振鈴して遍く城内一切の人民に告げて是の如き言を作す。『我が女月上、今日より後ち七日に至り、當さに家より出で、自ら婚嫁を求め、夫主を選擇すべし。汝等應當に各自ら努力して衣服を莊嚴し街巷を掃治し、香華を布散し、燒香末香悉く各備辦し、寶幢及び諸幡蓋を堅立すべし。是の如く種種好く自ら嚴飾せよ。』と。

爾の時城内一切の人民、此語を聞き已つて心に踊躍を生じ、各自ら當家の門庭及び街巷に於て、嚴飾莊麗すること上に陳ぶる所に過ぐ。

爾時城内の刹利大臣、及び婆羅門居士長者乃至工巧の、所有の童男皆悉く髮を沐し、身體を澡浴し、妙香を塗治し、各各争ひ競ふて衣服及び諸の瓔珞を嚴飾し、是の如きを作し已つて、方に始めて復た左右の眷屬に告げて是の如きの言を作す。『汝等の心意傾動するを得ず、餘念を生ずる莫れ。

其女月上、若し來つて我邊に向はずんば、汝等必ず強力にて我を助け、之を奪取すべし。』爾の時月

問經等の説にして通常之を用ふる。一に天衆 (Devā)、欲界の六天、色界の四禪天、無色界の四空處天である。身に光明を具するので、天と名ける。又自然の果報殊妙なので天と名ける。二に龍衆 (Nāga)、畜類にて水屬の主である。法華經の聽衆に八大龍王を列ねる。三に夜叉 (Yakṣa)、新に藥又と云ふ、空中を飛行する鬼神である。四に乾闥婆 (Gandharva) 香陰と譯す。陰は五陰の色身である。彼の五陰は唯香臭を嗅いで長養するので香陰と名ける。帝釋天の樂神である。法華經の聽衆に四人の乾闥婆を列ねる。五に阿修羅 (Asura) 舊に無酒、新に非天、無端正など譯する。その果報は天に類するが、天部でないので非天と云ひ、又容貌醜惡なので無端正と云ひ、彼の果報として美女があり、酒が無いので無酒と云ふ。常に帝釋と戰鬥を爲す神である。六に迦樓羅 (Garuda) 金翅鳥と譯す。兩翅相去ること三百三十六萬里あり、龍を搦つて食と爲す。七に緊那羅 (Kinnari) 非人と譯し、新に歌神と譯す。人に似て頭上に角があるもので、人非天と云ひ、帝釋天の樂神なので歌神と云ふ。帝釋に二種の樂神あり、初の

と欲する者あり。然して彼の離車は其本念を失ひ、煩冤懊惱し、眉をニクニク嘸め、頬を皺よらせ眼目瞬せしめて其の女に向ひ、遂に即ち聲を擧げ、啼呼涕泣して涙下ること雨の如し。爾の時月上、父の是の如く憂愁啼哭するを見て之れに問ふて言く「父よ、今に於ては何の故に懊惱啼哭すること此の如きや」と。

爾の時離車は毘摩羅結其の女に告げて言く、「汝今日に於いて知らざる可けんや。汝の身の爲めの故に城内一切の所有の人民、悉く皆な共に我身に惡結ニクを爲す。是の故に各各來つて汝を争はんと欲す。我れ今將さに其勢力を被つて汝を劫して將に去らんとし、我が身命及び諸の財寶を損じ並びに皆な喪失せんとするを恐る。」と。

爾時月上即ち偈頌を以つて其の父に報じて言く、

「假使ニクひ 閻浮大地の内

悉く各よ力 那羅延の如く

其身力を盡くして我を趁逐するも

慈心は毒仗の害せざる所

死屍諸鬼使

慈心は決定して瞋恨なく

我今此の慈心の念を起し、

現に亦他人に苦を與へず、

慈を厭ふて自ら慈想あるなく、

我れ欲瞋及び癡患無し

我れ一切の諸の衆生を觀するに

所有の一切の諸の衆生

人人手に利刀仗を執つて

彼終に我を害し得る能はず。

水火も亦復た漂然せず。

及び呪咀を以て言説する者を畏れず。

慈心は畢竟して他を畏れず。

世を護ること猶ほ身を護るが如きのみ。

是故に誰れか當さに能く我を害すべき。

慈を成じて亦た恚怒癡なし。

是の故に能く我れを害する者無し。

皆悉く猶ほ父母の想の如し。

にして、強盛繁盛であつたと云ふ。よく和し、長老を敬ひ、協議に基く政治を行つてゐた。

【二】毘摩羅結(Vimalakīrti)。舊稱、維摩詰、新に毘摩羅詰、鼻鼻羅難利帝と云ふ。無垢稱と譯す。

【三】伏藏(Khudi)。地下に埋伏された寶を云ふ。

【四】嚴重(Grand)。即ち師長の意には「重き、年老いたる」の意あり。

【五】塗香、香の粉末にて身に塗るもの。香らず目的の外に夏、身體を冷す爲に用ふることもあり。

【六】多羅(Dāra)。樹の名。譯、岸樹、高諫樹。樹形は椶の如く、極めて高きものは七八十尺、果熟は赤く大石榴の如く、人多く之を食する。東印度に最も多いと云ふ。此の樹は幹を中斷すれば、再び芽を生ぜず、依つて經中比丘が波羅夷の重罪を犯すに譬へる。又物の高さに喩へる。

【七】迦葉佛(Kāśyapa)。現世界に於て人壽二萬歳の時に出世して正覺を成し、釋迦より直ぐ前の佛である。過去七佛の一。

【八】兩足最勝、兩足は即ち人間の意である。人間中の最勝者即ち佛陀を云ふ。

【九】二説あり、一は舍利弗

我れ三十三天に在る時、

今生に五欲を爲さざる故に

我れ宿世の諸業報を念ふに、

受くる所の福德皆な今の如し。

釋迦牟尼佛を供養す。

唯だ還つて此の如來を供養す。

凡て八十九處の生を經たり。

智者宜しく應に佛を供養すべし。」

爾の時彼の女は此の偈を説き已つて默然として住す。其の女往昔諸善根業を造る因縁の故に、其の身自然に諸天の服する妙寶の衣裳を著け、其身上に於て妙光明を出すこと月の照すに勝る。猶ほ金色の其家内に耀くが如し。然も其父母は彼の光を見る故に、即ち爲に名稱を立てて月上と爲す。

爾の時月上生れて未だ幾時ならざるに、其の身忽然として八歳の大さの如し。彼の女行住坐立の所は其地皆な悉く光明晃曜として、身の諸毛孔は梅檀香を出し、口氣香はしきこと優鉢羅花の如し。毘耶離城所有の刹利王公子弟、及び諸大臣居士長者婆羅門等、及び餘の大家豪姓種族の所有の童子は、彼女月上の名聲端正可意にして世に雙比するものなきを聞き、是の事を聞き已つて、彼等悉皆な欲火熾然として、心に熱惱を懷き、遍く身體に滿つ。一一皆な是の如き思惟を作す。「願はくは彼女月上を得て婦と爲さん」と。爾の時一切諸童子等是の念を作し已つて、皆悉く往いて毘摩羅詰離車の家に至り、意趣を通傳して進止參承す。各各皆な無量の珍寶・駝驢象馬諸財物等を許し、或は彼の離車と共に相見るありて、口に情嚇して「我當さに抑奪すべし」と云ひ、或は呵喝して是の如き言を作すあり、「汝今若し我に女を與へずんば、我必ず汝の床褥臥具・財物・衣裳・身の諸璣珞、一切服飾を劫し、悉く將に皆な去らんとす」と。或は打つと言ふ者、或は縛すると言ふ者あり、是の如き等の恐怖の事を將つて而して以て之れに告ぐ。

爾の時離車毘摩羅結は心に恐怖を生じ、身毛を擧げて堅ち、憂愁樂まず、是の如き念を作す。彼等或は其の勢力を以て我女月上を抑奪して將に去らんと欲する者あり、或は來つて我命を奪はん

の。菩薩の大智一切處に至る故に大勢至と名ける。眞言には胎藏界觀音院の一尊である。【九】虚空藏菩薩。梵名 Akāśagarbha (Akāśagarbhangarāṇa)。又虚空孕菩薩の名。空慧の車藏猶ほ虚空の如くなので、一切の功德を包藏すること虚空の如くであるので、虚空と名ける。胎藏界曼荼羅虚空藏院の中尊である。

【一〇】彌勒 (Maitreya)。新稱、彌帝隸、梅低梨、迷諦詩、梅怛隸、菩薩の姓である。慈民と譯す。名は阿逸多、無能勝と譯す。或は言ふ、阿逸多是姓にして彌勒は名である。南天竺婆羅門の家に生れ、釋迦如來の佛位を紹ぐ補處の菩薩となり、佛に先つて入滅し、兜率天の内院に生じて彼の四千歳即ち人間の五十六億七千萬歳を経て人間に下生し、華林園の龍華樹の下に正覺を成ずる。初め過去の彌勒佛に値つて慈心三昧を修得したので慈民と稱し、乃至成佛して猶是の名を立てたと云ふ。【一一】離車 (Vāśatī)。刹利、離奢、果唱、離車、律者など。毘舍離城 (Vāśatī) の刹利利種の名である。薄書と譯す。種。其の祖先が一胞肉の中から生じたので名けたと云ふ。又貴族家族などと譯す。有力



我が心既に清淨を得已つて、  
爾の時現在に香華

遂に即ち空中に聲を聞く。  
一切の諸の衆生を慈愍す。

汝彼の尊者を供養せんと欲せば、  
比三界に於て供養を設くるも、  
我是の如く空の聲を聞き已つて、

遂に不動の菩提心を發し、  
空に住すること高さ一多羅樹にして、

猶ほ雜寶須彌山の如し、  
是の時諸佛の神力の故に、

我れ時に迦葉の上に散じ、  
見る所の十方諸佛は

我れ曼陀羅華の蓋を見ること、  
我れ時に空中に是の語を説く。

修行すること乃至塵數劫にして、  
天龍乃至非人等の、

我が是の如き師子吼を聞き、  
我れ三十三天を捨て已つて、

恒に常に賢善の行を失はず、

彼如来を供養尊重す。  
塗香・末香・飲食等なし。

「佛は世間に於て報を求めず。  
是の故に遊行し來つて乞食す。

當さに無上菩提心を發すべし。  
道心を信發する者に如す」と。  
復た諸佛の微妙相を見、

樓上より身を墜して下る。  
復た十方一切佛を見たてまつる。

迦葉佛の身も亦た復た兩り。  
曼陀華我が手に滿つ。

即ち清淨妙花蓋を成す。  
微妙の相好にて身を莊嚴す。

亦た復た同じく迦葉の上の如し。  
「願くは兩足最勝の尊と作らむ。

菩提を獲ずんば誓つて退かず」と。  
八部は其數二千あり、

亦た無上菩提の意を發す。  
還り來つて閻浮提に生じ、

故に汝等に修福の業を勸む。

八字文殊、一髻文殊、五髻六  
殊、八髻文殊、兒文殊等であ  
る。此字五字五髻文殊を以て  
本體とする。

【七】觀世音菩薩(Avalokite-

Svara)。舊に光世音、觀世音

と云ひ、觀音と稱す。新に觀

世自在、觀自在と云ふ。觀世

音とは世人彼の菩薩の名を稱

する音を觀じて救を垂るゝ故

に觀世音と云ひ、觀世音とは

世界を觀じて拔苦與樂するに

自在であるのを云ふ。觀音に

六觀音、七觀音乃至三十三觀

音がある。但常に觀音と云ふ

は六觀音中の聖觀音を指す。

法華普門品の觀音(觀無量壽

經)の觀音是である。之を觀音

の總體とする。顯教には阿彌

陀の弟子となし、密教では之

を阿彌陀の化身となし、以て

大勢至菩薩と共に阿彌陀佛の

左右(觀音は左、勢至は右)に

在りて其の教化を贊く。故に

彌陀の二脇士と稱す。梵號禮

懺に依れば阿彌陀佛の本名觀

自在王なので、其の本師の名

に依つて自ら觀自在王と稱す

こと、猶今の釋迦牟尼の久

遠本師釋迦牟尼に依て其の稱

を得し如くである。

【八】大勢至、得勢至、梵語、

摩訶那鉢(Mahānāpātika)。

阿彌陀三尊の一、阿彌陀の右

脇に侍して佛の智門を主るも

見菩薩・度衆生菩薩・常精進菩薩・常喜根菩薩・破惡道菩薩・金剛遊步菩薩・三界遊步菩薩・行不動菩薩・不容見菩薩・功德藏菩薩・蓮華德菩薩・如香像菩薩・得深智辯菩薩・大辯菩薩・法上生菩薩・諸法無疑德菩薩・師子遊步菩薩・散諸恐怖菩薩・蔽塞諸障菩薩・師子吼音菩薩・非不言菩薩・辯聚菩薩・彌勒菩薩摩訶薩等と曰ひ、而して上首と爲す。復た是の如き百千の菩薩摩訶薩有りて俱なりき。

爾の時世尊、毘耶離大樹林中草茅精舎に在ます。時に諸國王・大臣百官・大富長者・婆羅門等、居士・人民・遠來の商客、皆悉く尊重し、恭敬奉侍す。爾の時彼城に、一離車あり。二毘摩羅詰と名く。其家巨富にして、資財無量にして倉庫豐盈して、數を稱ふべからず。四足二足諸の畜生等悉く皆充溢す。其の人に妻有り、名けて無垢と曰ふ。可意端正にして形貌殊美にして女相具足す。然るに彼の婦人、時に懷妊して九ヶ月を満足す。便ち一女を生む。姿容端正なり。身體圓足して觀る者厭くなし。其の女生るゝ時大光明あり。其の家内を照らして處々充滿す。是の如く生るゝ時大地震動す。其の家門の外の所有の樹木、並びに酥油を出して自然に流溢す。毘耶離城一切の大鼓及び諸の小鼓、種々の音樂は作さずして自ら鳴り、上は虚空に徹して天は衆華を雨ふらす。其の宅内の四角に於て各々伏藏自ら開くあり、微密の雜寶皆悉く出現す。其女生るゝに當つて曾つて啼哭せず。即ち便ち舉手して十指の掌を合せ、而して偈を説いて言はく、

「昔より諸惡業を造らず

若し當に惡業を造作すべき者ならば

故に昔より諸惡行を斷じ、

嚴重恭敬をして尊ばるゝが故に、

我念ふに往昔迦葉佛は、

我樓上にありて彼の尊を見奉る。

今是の如き清淨身を得たり。

此の大豪貴に生れ在らす。

施を好んで調順にして放逸ならず。

方さに此の賢善の家に生ずるを得たり。

乞食し來りて毘耶離に入る。

是の如く見已つて心清淨なり。

と無生滅である故である。  
【三】 深法忍、平等忍法、不明。

【四】 使煩惱の異名である。公使罪人に隨逐して之を繫縛する如く、煩惱亦行人に隨逐して三界に繫縛し出離せしめず、故に使と名く。又使は驅役の義、煩惱能く人を驅役するので使と名く。

【五】 三摩鉢帝 (Samadhi) 禪定的一種。又、三摩鉢提、三摩拔提、三摩拔提とも言ふ。

【六】 文殊利童子菩薩 (Manjushri) 舊譯文殊師利、滿殊尸利、新稱、曼殊室利。新舊六譯ある。無量壽經、涅槃經に妙德、無弘經に妙首、觀衆三昧經、大持法門經に普智、阿目目法經普超經に滿首、無量門微密經、金剛瓔珞經に敬首以上舊譯)。大日經に妙吉祥。或

殊或は曼殊は經の義、師利或は室利は頭の義、德の義、吉祥の義である。此菩薩は普賢を一對にて常に纏迦如來の左に侍して智慧を司る。此の菩薩頂に五髻を結ぶのは大日の五智を表するのである。手に劍を持するは智慧の利劍である。師子に駕するのも智慧の威猛を表するのである。此の文殊に種々の差別があり、一字文殊、五字文殊、六字文殊、

# 佛說月上女經

## 卷の上

隋 天竺三藏法師闍那崛多譯

是の如く、我聞けり。一時佛、毘耶離國大樹林中草茅精舎に在して、大比丘五百人と俱なりき。皆是れ阿羅漢なり。復た菩薩八千人有り、俱に皆是れ大徳なり、大威力あり、大神通あり、悉く皆な諸陀羅尼を受持し、無礙辨を得、諸禪定を得、無生忍を得て五通を具足す。言ふ所眞實にして、虚妄あるなく、諸の毀譽を離る。己の眷屬に於て及び利養を以つて悉く染著せず。報を求めざる故に人の爲めに法を説いて深法忍を得て能く彼岸に度る。無畏を具足して己に魔事を過ぎ、業結ある無し。諸の法性に於て疑滯あるなく、無量百千那由他劫に修行成就す。恒に悦色を以て行者を慰諭し、終に嘖噀することあるなし。善巧の辭句心變改せずして辯説して窮りあるなし。亦皆な平等忍法を成就す、能く大衆に於いて説法して畏れなし。一法句を説いて百千億那由他劫を過ぎ、巧方便無盡の智慧を得て、諸の三世を知ること猶ほ幻化の如く、亦陽炎の如く、水中の月の如く、夢の如く星の如く空谷の響の如し。諸の法性空無相願を知つて心常に寂滅にして、眞如の法に住して諸の取捨を離れ、既に無量智巧方便を得たり。亦た衆の心所行智巧方便の事を知りて、所に隨つて化する處悉く皆な能く爲めに諸法を演説す。衆生心に於て損害あるなく、諸の愛染を離れて、復た煩惱あるなく忍行を具足し、諸の法性に於て皆悉く了知す。己に諸佛刹土莊嚴の事を成ずるを得、恒に常に念佛三昧を成就し、亦た能く佛智を勸請することを成就し、能く種種の煩惱諸使を斷ず。諸三昧・三摩鉢帝に於て其中に遊戲し、亦悉く能く智巧方便を得たり、其の名を文殊利童子菩薩摩訶薩・觀世音菩薩・大勢至菩薩・難有菩薩・香像菩薩・不捨擔菩薩・日藏菩薩・陀羅尼菩薩・放香光菩薩・雷音菩薩、分別金光明決定王菩薩・那羅延菩薩・寶才菩薩・寶印手菩薩・虛空藏菩薩・意王菩薩・意

佛說月上女經卷上

【一】陀羅尼(Dhāraṇī)、又陀羅那、陀羅尼。譯、持、總持、能持能遮。善法を持して散ぜしめず、惡法を持して起らしめざる力用に名く。之を四種に分つ。一に法陀羅尼、佛の教法に於て閉持して忘れないのを云ふ。又閉陀羅尼と名ける。二に義陀羅尼、諸法の義に於て秘密語を呪し、不測の神驗を有するを呪と云ふ。呪に於て總持して失しないのを云ふ。四には忍陀羅尼、法の實相に於て安住するのを忍陀羅尼と名ける。能持の體から云へば法義の二は念と慧とを體とし、呪は定を體とす。忍は無分別智を體とする。

【二】無生忍、忍に三種あり、無量壽經に極樂に往生する人は七寶樹林の音聲を聞いて三種の忍を得、一は音聲忍、二は柔順忍、三が無生法忍であつて、無生の實性を證つて諸相を離れるもの、是れ悟道に至極である。又仁王經中に五忍の第四として無生忍あり、七地より九地の間に於て諸法無生の理に悟入する位に名ける。又十地中、眞諦の境はれ無爲法であると觀じて諸念生ぜず、無生忍を得る。眞空の理はも



願思想が現れてゐる。然し、他の維摩經類と異り、大乘思想の現れることは少く涅槃に就いての見解、無明と有愛は異るなし、菩提の生處なく不可説なること、法界の體は不可解・布施についての見解、一切法界と如來の體との同異・諸佛聲聞

の解脱の同一等の如きである。

月上女經にて興味深きは毘摩羅詰居士が弱少な脇士であつて、諸離車族子の脅迫に恐怖し、維摩經に於て舍利弗等の大弟子を説破する氣魄は毫も伺はれぬことである。

此の月上女經は月上女が善思童子と同じく毘摩羅詰の子女である如く、大方等頂王經とは、姉妹篇を爲すものと思はれる。

昭和八年二月十五日

譯者 平等 通 昭 識

に於て諸佛と聲聞と同じきありとも衆生を利益するに於て異なる、諸佛と聲聞と解脱同等であるとし、唯、一切諸惡を除滅する、一切衆生の煩惱を除く、一切諸天の頂禮を得る、一念智慧心を起し解脱を得る、一切諸魔眷屬を除すの點に於て有無があると述べる。之の言説を佛は是認し、佛の一毛より一蓮華現れ、一化佛あり、説法し、月上女は手に持つ蓮華を如來の身上に散じ、その華は一花帳となり一化佛あり、月上女は來世にて我が相(女)に住するものは法を説いて相を除かしめんと願をなし、更に佛の神力にて第二蓮華あり、第一の誓願、我見に住する者は法を説き我見を除かんとし、次々に一切分別の相に住する者の爲其の分別貪欲瞋恚癡等を除き、四顛倒に住する者の爲四顛倒を除き、第五一五蓋に覆はるゝ者の五蓋を除き、第六一六入に著する者の爲著を除き、第七一七識に住著する者

の爲之を除斷し、第八一八顛倒に著する者の爲之を除滅し、第九一九使に住する者の爲九使を除き、第十一今の世尊の如く十力を具足し、光明を發つて十方利を照さんとの十誓願を立てた。世尊の微笑より種々色の光明を發つて對し、阿難は微妙放光の因縁を問うた、佛は月上女が過去諸佛を供養し、諸欲を厭離し、親族を教化し、衆生を利益し、大離車の家に生れ、佛に就いて出家し、彌勒下生の時儂佉輪王の家の子と作り、阿彌陀佛外の諸佛に且つて仕へ、後の八萬俱致劫に於て彼の誓願を満足し、佛と作り、月上と號すると授記する。

之を聞き了つて身を轉じて男子と爲り授記を喜び、諸佛の尊重供養をすゝめ、疑を生ぜず、衆生の命、富伽羅の如き諸法の本性は虚空の如く、女身は空體にて實無く、極力諸佛世尊の供養をすゝめ、諸佛を讚嘆し、十方佛は皆悉く同體にて

一法を覺り、眞如法に於て悉く無二にて無量の衆生同じく實際であり、此の忍を有する者は佛と作るべしと述べる。此處に月上女は父母の許を得て佛について出家し、童子出家に當つて一萬二千人菩提を發し、佛法を説く時七十那由他の天人遠塵離垢し、諸法中に淨眼を獲得し、五百比丘無爲法に於て漏盡心を獲得して解脱を得た、二百比丘尼、其同類二萬人あり、その内菩提を發せぬ者は菩提心を起したと結ぶ。

この月上女經も亦維摩經の例に洩れず、小乘の大比丘を論難し、舍利弗等をして顔色無からしめてゐる。然も同じく童女は當歳にして壯年の如き大乘の見解を有し、文體は多く月上女と舍利弗外諸菩薩との問答體となり、佛の説法は極めて少く、多くを月上女に語らし、之を肯定するの形式を取つてゐる。この文の規模は大乘的であつて、殊に月上女十願の誓

述べる。女の身邊に光明晃耀する故に月上と名けた。城内諸公子懸想して婚を求め、父を脅迫する者もあつた。毘摩羅詰が恐怖を抱くを見て、月上女は今後七日毘那離城四衢道に於て夫を撰ぶべしと父に公告せしめた。六日の後月上女が八關齋を受けた折、所化如來が現れ、女の問に對し釋種佛の使者であると答へ、眞佛は三十二相を具し。忍辱・精進・禪定・智慧を具し、慈悲喜捨の四無畏あり、法輪を轉じ、長廣舌を振つて苦空無我を説き不動に住し、五眼を成就し、五根五力圓備し、七覺道分染著無く、一切智を具し一切功德悉く成就する、と述べた。月上女は渴仰を生じ、佛に來詣せんとし、第七日父母を伴ひ、衆人集る上を飛んで彼等欲想の邪惡にして捨離すべきを喻し、虚空を歩んで途中舍利弗と問答し、兩人の往行の目的地について語り、舍利弗の言説を大乘の見地より批判し、涅槃を行

すれば之れ涅槃なりとし、諸法を分別すべからず、一相・異相・別異の相なく、涅槃は滅す可き無しとし、無明と有・愛とは異なる無しと言ひ、舍利弗弗月上女が菩薩地に在り忍相有る故阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得べしと述べ、女は菩提は生處なく、説く可らず、體性有る無く無二離一であるとし、如來は聽法者の爲に法を説かず、衆生が佛我が爲に説法すと考ふるの是我想到住するのであると述べる。

佛所に於て月上女は文殊師利の間に對し、月上女所執の如來形像は化にて處捨無く、身後も生無く、一切諸法は本體是れ化であるとし、不空見菩薩の女身を轉ぜよとの勧めにその要なしとし、持地菩薩の如來を見已ると問ふに對し、如來を見ること、手中に執る所の化身の如しと述べ、辨聚菩薩には法界の體は言説すべからずと云ひ、無礙解菩薩に對し如來の

説法と虚空と等しく、聽者も法相も復た同じと述べてゐる。虚空菩薩と布施に就いて問答し、佛僧に施し、昔日如來に爲せし如く廻向すると述べ、一切諸衆生に於て慈心を以て普遍なるを得るやとの問に對し、衆生は過未現在三世に非ず、慈心も亦然りとし、喜王菩薩の間に對し、肉眼さへ得ず、まして法眼を得ないと述べ、堅意菩薩には菩提を發すること久しとし、彌勒菩薩が何時成覺し得るやとの問に對しては彌勒菩薩の如く何れの時にか凡夫行地を超ゆるを得んと述べ、舍利弗に對しては一切諸煩惱を燒かんと欲する時、所有煩惱燒かざるなしとし、月上女成覺の時當來佛刹の中に於て是の如き小行小智名字狹劣なる有る無しと述べ、一切法界と、如來の體と等しうして異らずと述べ、諸佛聲聞は法界と同じであつても、聲聞は無量の衆生に於て大利益を作すと諸佛の如くなる能はず、一空無想無願



# 佛說月上女經解題

佛說月上女經 (Candrotarā-darika-

vyākaraṇa-sūtra, pg. 441) は中大の經で

あつて、上下二卷に分れ、隋の闍那崛多 (Jñānagupta) の譯が成つてゐる。

## 一、作者並に漢譯者、成立年代

佛說月上女經の作者は記載されてゐない。大方等頂王經と同じく、毘摩羅詰 (Vimalakīrti) に關係があるが故に、維摩經類に屬し、之と相前後して成立したものであらう。

漢譯は隋(紀元五八九—六一八年)の闍那崛多 (Jñānagupta) によつて紀元五九一年に譯出された。譯者闍那崛多是志徳と譯され、北印度憍達婆 (Gandhāra) の沙門で、北周(紀元五五七—五八一)に支那に來り、紀元五六—五七八年の間に

解題

四經五卷を譯したが、その内二經二卷が紀元七三〇年に現存した。隋の紀元五八五年より五九二年間に三十九經一九二卷を譯し、その内七三〇年には二經十四卷が失はれてゐた。六百年七十八歳で死んだ。現存三藏中に三十八經が藏されてゐるが、その内、添品妙法蓮華經・佛本行集經・佛說大方等大雲請雨經・大方等大集賢護經・佛說文殊尸利行經等がある。譯經家として著名でもあり、貢獻する所も多かつた。殊に闍那崛多是佛說月上女經と關係ある大方等頂王經又は大乘頂王經の異譯善思童子經を譯してゐることは注意すべきである。

西藏藏經に相當するものがあると言ふ。

漢譯からは紀元五九一年以前に成立し

たと考へる外、製作年代を推定する手段はない。恐らく大方等頂王經等と相前後し、三、四世紀に成立したものであらう。

## 二、結構と表現

佛說月上女經は二卷より成り、各卷の長さは略々等しい。大部分散文より成つてゐるが、上卷後半に長い偈文を出してゐる。叙述は平明であつて、寧ろ物語文學の觀を多分に有し、大乘思想を記述する部分は極めて少い。譯文又平易で、解り易い。

## 三、内容

世尊が毘耶離城大樹林に諸弟子諸菩薩と俱に在る時、長者毘摩羅詰 (Vimalakīrti) と妻無垢との間に一女が生れた。女は併れて合掌をして、前生に迦葉佛に會ひ、菩提心を起し、諸佛の神力によつて賜つた曼陀羅華を散じ、授記し、轉生したと



佛說大方等頂王經終

佛說大方等頂王經

可して心心相應する法なので、法印と云ふ。佛法を該攝して三種の法印を立てる。三法印と稱する。

【九一】清信士。優婆塞(Uparaka)の譯。舊稱優婆塞、伊蒲塞。新稱、鄒婆塞迦、優婆塞迦、優婆婆柯、鄒婆塞迦、近事男、善宿男など。三寶に親近し奉事する義。總て五戒を受けた。男子の稱。四衆の一、七衆の一。

優婆夷(Uparika) 舊稱、優婆夷、優婆斯。新稱、鄒婆斯迦、鄒波斯迦、優婆賜迦、優婆私柯、鄒波斯迦など。譯、清信女、近善女、近事女。三寶に近く事ふる義。惣て五戒を受けた女子の稱。四衆の一、七衆の一。

釋尊は人中の師長たること諸獸中の師子の如くである故に言ふ。

の義。三界の有情は眼耳等の六清門より夜に煩惱現行して心をして連注流散せしめて絶へないので、漏と名ける。煩惱は漏器漏舎の如くである。

【九二】第十業、十業とは十善業十惡業を言ふ。前出。第十惡業は邪見で、第十善業はその反對正見である。

【九三】大仁師子、釋尊を言ふ。

【九四】漏、梵語(Bhava)煩惱の異名である。漏は流注漏泄



に十名あり、天上は利根であるので、尙、百名ある。大日如來は天上に於て成道するが故に之に應じて百八號を立て釋尊は人界に成道するが故に亦之に應じて十號を立てる。其の十號とは一に如來、梵に多陀阿伽陀 (Tathagata) 成實論に如實の道に乗じて來りて正覺を成するが故に如來と名けると。又大論には諸佛が安穩の道より來る如く此の佛も是の如く來るが故に如來と名けると。二に應供、梵に阿羅伽 (Arhata)、人天の供養に應ずべきが故に應供と名けると。三に徧知、梵に三藐三佛陀 (Samyaksambuddha) 正しく徧く一切の法を知るが故に正徧知と名ける。四に明行足、梵に轉多庶羅那三般那 (Vidaḥ-saaran-sampanna) 三明の行具足する故に明行足と名ける。五に善逝梵に修伽陀 (Sugata) 又は好去と云ふ。一切智を以て大車とし、人正道を行じて涅槃に入るが故に善逝と名ける。六に世間解、梵に路伽德 (Loharika) 世間の有情非情の事を能く解するが故に世間解と名ける。七に無上士梵に阿耨多羅 (Anurata) 諸法の中に於て涅槃無上なる如く、一切衆生の中に於

て佛亦無上なるが故に無上士と名ける。八に調御丈夫、梵に富樓沙曇藐婆羅提 (Purusadumya-samhi) 佛或る時は柔軟語を以て、或る時は苦切語を以て能く丈夫を調御して善道に入らしめるが故に調御丈夫と名ける。九に天人師、梵に舍多提婆魔笈沙喃 (Sastadevanamayanam) 佛は人及び天の導師にして能く其の應作不應作を教示するが故に天人師と名ける。十に佛世尊、梵に佛陀路迦那他 (Buddhakarānātha) 佛陀は知者又覺者と譯する。世尊とは世に尊車せらるゝ義である。さて此中に佛と世尊とを分ては十一號となる。然るに成實論等には無上士と調御丈夫を合せて一號となす故に世尊に至つて正に十號となる。即ち前の九號を具つて世々尊重せらるゝ故に佛に至つて正に十號とし、世尊を別の尊號とした。即ち上の十號の德を具するが故に世尊と稱するのである。又梵に薄伽梵 (Bhagavan) と云ふ。即ち是である。(智度論、瓊祇經疏)

煩惱を離れた出世間の事體は盡く無漏法である。【六七】三忍、忍とは (ksanti) 忍耐である。違逆の境に忍耐して嗔心を起さない。又安忍である。道理に安住して心を動かさないのである。三忍に三種ある。一は無量壽經第四十八願に聲聞者の得三法忍の願を擧げて第一法忍第二法忍第三忍と言ひ、其の法忍の名を擧げない。之に就いて諸師の解は不同である。法位は仁王經に説く五忍の初三、即ち伏忍信忍順忍であると云ふ。憍輿は伏忍の中の下中上の三忍であると云ひ、一は音響忍、柔順忍、無生忍の三である。無量壽經に極樂に往生する人は七寶樹林の音聲を聞いて三種の忍を得る。一に音響忍、音響に由つて眞理を悟解することあるもの。二に柔順忍、慧心柔軟にして能く眞理に隨順するもの。三に無生法忍、無生の實性を證いて諸相を離れるもの。是れ悟道の至極である。善導所説の三忍。一に信忍。彌陀佛を念じて眞理を悟解すること。二に信忍、彌陀佛を念じて正信に住するもの。善導は觀經中、韋提希夫人所得の無生法忍を解して此三忍となす。

【六八】初利天 (Tavatika) 相剌耶相剌耆天、多羅夜登陵舍天に作る。譯三十三天。欲界六天中の第二、須彌山の頂、閻浮提の上、八有句の處にある。この天の八有句は身長一由旬、衣の重さ六銖、壽一千年である。(世間の百年を一日一夜とする)。城廓八萬由旬、善見城と名く。帝釋ここに居す。嶺の四方に坐あり、各廣さ五百由旬、華毎に八天あり、善法堂天、山峯天、山頂天、喜見城天、鉢私他天、俱吒天、雜殿天、歡喜閻天、光明天、波利耶多天、離險岸天、谷崖岸天、摩尼藏天、旅行天、金殿天、鬘形天、柔輿天、雜莊嚴天、如意天、微細行天、歌音喜樂天、威德輪天、日行天、閻浮那婆羅天。連行天、影照天、智慧行天、衆分天、曼陀羅輪光天、清淨天を以て三十三天とする。【六九】窮冥、窮、ふかし、くらし。【七〇】法印。妙法の印置である。斯法眞實にして不動不變であるので、稱して印と云ふ。又王印の如く通達無礙なので、印と云ふ。又是れ佛の正法たることを證明するものなので、印と云ふ。又諸佛諸祖互に印

便ち能く師子吼すること、

其の師子吼に因つて

億載の衆を濟脱して。

佛復た善思に告ぐ。『斯の經典を受けて十方に宣布し、一切に受持して正法を奉行し、無極の大慧を同學に開示して、六度無極を習行し得て三界を救はしめよ。若し族姓子及び族姓女ありて是の經典を受けて他人の偽に説かば、徳量るべからず。猶ほ虚空の如く限度すべからず。佛説くことはよくの如し。善思童子一切の聖衆・諸天龍神・諸阿須倫・世間人民は佛の所説を聞いて歡喜せざる莫し。作禮して去れり。』

亦我が今日の如し。

諸法に在つて勇猛に

減度し漏有る無し。』

各一邊に付て名を與へたのである。其の中神境通が最も汎く通ずる。二に天眼智證通(Divya-darsana)色界天の眼根を得て照久無礙なるを天眼智證通と云ふ。三に天耳智證通(Divya-srotra)界天の耳根を得て聽聞無礙なるもの。四に他心智證通(Tametta-jana)他人の心念を知るに於て無礙なるもの。五に宿命智證通(Purva-tyasamsmriti-jana)自己及び六道衆生の宿世の生涯を知るに於て無礙なるもの。此の五通は有漏の禪定或ひは藥力を呪力に依つて得るので外道の仙人も之を成就することを得る。此の五を總じて智證

通と名けるのは各其の智に依つて證得する通力であるからである。この五通に漏盡智證通(Asravakshaya-jana)の一を加へて六通と云ふ。漏盡智證通とは三乘の極致で、諸漏即ち一切の煩惱を斷盡するに無礙なるものである。此の六通を成就するのは三乘の聖者に限る。【七】無所從生法忍。無所從生法忍は不明、無生法忍は三忍の一に無生の實性を證つて諸相を離れるもので、悟道の至極である。【七】擲、うすつく。【六】梅檀香(Chandana)、梅檀は香木であつて、高價な

のである。又その粉末は身體に塗り、暑中冷くする効がある。【七九】箜篌、一種の樂器、くだらごと。體曲つて而して長く、二十三絃、懷中に抱き、兩手齊しく之を奏す、と。(事物紀原)【八〇】瓊瑤。瓊は元、明版は瑤。瓊は珩と瑛との中にある佩玉の名。おびだま。芝の形圭の如くにして正方である。瑤は、くし、奇偉なり、すぐれて大なり、奇異なり、ことなり、めづらし。【八一】五音、宮、商、角、徵、羽の稱。五聲に同じ。【八二】榻、狭長なる牀、こし

到れば、六波羅蜜と稱する。【七五】六通、通とは作用自在であつて、無礙なるを通と云ふ。佛・菩薩・外道・仙人の所得である。通力、神通と云ふのは之である。六通とは一に神境智證通、又身如意通(Dhivadhik-jana)と云ひ、神足通と云ふ。即ち不思議に境界を變現する通力なので、神境通と云ひ、遊涉往來の自在なる通力なので、神足通と云ひ、自身の變現自在を得る通力なので、身如意通と云ふ。

かけ、ねだい、ゆか。【八一】舍利(Sarira)、舍利(Sarira)は單に骨の意味であるが、佛骨の場合には復數にて(Sarira)と言ふ。之を塔に藏して供養する。【八二】綺縠、綺、きぬ、帛の沈稱。縠、あやぎぬ、彩文の綺。あや、もやう、いろ、いろどり。【八三】無垢光は佛の名。以下に大體佛の十號出づ。一、十號。劫初には諸説の上に皆萬名あり、衆生漸く鈍ければ減じて千名となる。衆生彌よ味ければ減じて百名となる。衆生更に愚なれば減じて現に十名あり。天竺の俗法

以て諸の正覺に施せば、  
其の是の經の

斯を諸佛に供養すれば、

我が所宜の經典は

其の心是に倚つて、

其の世俗に倚らざるは

都べて無學無下なるを

其の佛は正學の法にて

如來の班宣する所、

其れ定光の諸佛は

諸の菩薩法を見る。

是の供養は第一にて、

其に從つて授決し已つて、

佛道に住せんと欲れば、

是の清淨法を習へば、

是くの如き供養を以て

衆生を慫んで法を奉じ、

十方諸佛の法は

是皆正に歸趣す。

已に佛界に入るを得れば、

是の福は殊特ならず。

頂王の班宣する所を學ぶ有つて、

是れ所宜の第一なり。

諸佛の道に著せず。

如來を供養せんと欲す。

是れ第一の奉事なり。

是を乃ち供養と曰ふ。

一切不可得なり。

是れ第一の禮敬なり。

供養奉事する所なり。

是れ第一供養なり。

如し佛世尊に奉ずれば、

當に正覺を致すを得べし。

正覺は衆生尊ぶ。

則ち導師を供養せよ。

道を得て所至無し。

皆一切慧に趣く。

護世の敷演する所。

是れ第一供養なり。

佛慧議すべからず。

と譯す。菩薩六度の行法窮極なき故に度無極と云ふ。波羅蜜は新稱で到彼岸と譯す。度は生死海を渡る義で、到彼岸は涅槃は涅槃の岸に到る義であるので、其の意は一である。其の波羅蜜の行法に六種ある。一に布施、二に持戒、三に忍辱、四に精進、五に精進、五に禪定、六に智慧である。布施波羅蜜は梵語檀波羅蜜、檀は檀那の略。布施は譯である。財施、無畏施、法施の三行である。この持戒は梵語尸羅波羅蜜、尸羅は戒と譯す。在家出家小乘大乘等の一切の戒行である。三に忍辱とは梵語提波羅蜜、忍辱は屈提の譯である。一切有情の罵辱打等、及び非情の寒熱飢渴等を忍受する大行である。四に精進、梵に毘梨耶波羅蜜。精進は毘梨耶の譯。身心を精勵して前後の五波羅蜜を進修するのである。五に禪定波羅蜜とは惟修と譯し、新に靜慮又は三昧と名け、定と譯す。眞理を思惟して散亂の心を定止する要法である。四禪八定乃至百八三昧等の別あり。六に智慧とは梵名般若波羅蜜、智慧は般若の譯である。諸法に通達する智及び斷惑證理する慧である。菩薩は此の六法を修し、自利利他の大行を究竟して涅槃の彼岸に



佛、阿難に告げたまはく、「若し是くの如き像法純淑の經卷を奉受する有りて持誦誦讀し。若しくは比丘・比丘尼・清信士・清信女有り、啓受に従つて持誦誦讀すれば、其の徳無量にして功限るべからず。能く稱載して涯底を得る者なし。猶ほ虚空の際を得べからざるが如し。是くの如し、阿難よ、若し是の經を受け、多くする能はずと雖も、四句の頌を受けて、誦宣布して他人の爲に説かば、福は計るべからずして崖底無し。無邊無際にして喩を爲すべからず。」佛爾の時頌して曰く。

「虚空は猶度すべし。

斯の功德の福祐は、

十方世界に、

若しは是を受持する有らば、

若し諸の神通の

此の經を聞いて、

其は十方世に於て

斯を以て佛に奉事し、

若し諸の減度、

今の十方土の

一切の有爲の業は

若し是の經卷

若し衣食を以て養へば

其は斯の業を持する有らば

一切十方世の

衆想は窮説すべし。

竟に盡極すべからず。

諸の無上の護世を奉ず。

斯を諸佛に供せんが爲なり。

十方世界を擧ぐるを觀るも。

普く是の諸佛に奉するに如す。

第十業を棄捐し、

聞いて供養するに如す。

及び當來の正覺、

現在の天人尊に於て

大仁師子に歸す。

正覺の宣説する所を持し、

斯は精智慧に非ず。

此の慧は供の無上なり。

滿中の衆珍寶は

涅槃に至る等の如く各其の行

因の至る所を知るのである。

八に知天眼無碍智力、天眼を

以て衆生の生死及び善惡の業

縁を見るに障碍なき智力である。

九に知宿命無漏智力衆生の

宿命を知り、又無漏の涅槃

を知る智力である。十に知永

斷習氣智力、一切の忘惑の餘

氣を永く斷じて生ぜしめざる

に於て能く如實に知る智力で

ある。(智度論二五、俱舍論二

九)

【七二】三達智。三達とは羅漢

に於て三明と云ふに對し、佛

に就いて云ふ。天眼・宿・漏

盡である。天眼は未來の生死

因果を知り、宿命は過去の生

死因果を知り、漏盡は現在の

煩惱を知りて之を斷盡す。之

を知ること明らかなるを明と

云ひ、之を知ること窮盡する

のを達と云ふ。

【七三】六情、舊譯の經論は多

く六根を六情と云ふ。即ち根

に情識を有するからである。

是れ意の一は當體の名である。

意根は心法であるからである。

他の五は情識を生ずるので、

所生の果に従つて情と名くる

のである。

【七四】六度無極。六度、六波

羅蜜のことである。舊に波羅

蜜は度と譯し、或ひは度無極

以て普く諸法を照し、是の典を習持して未だ會て冥に遭はず。猶ほ日光の出でて天下を照し。周遍せざる靡きが如し。斯の經是くの如し。道法の明かなるを以て咸三界を曜し。一切衆生に示すに道慧を以てす。猶ほ月殿の虚空を遊行して休廢せざるが如し。斯の經是くの如し。十方界の一切蒙荷を照し。是は則ち法印は一切法を印し、此の印を建立して諸の菩薩と爲す。又其の印を計すること猶ほ虚空の如く、悉く無所有にして有ならしむるべからず。虚空及び印の是の二は無望なり。佛と正法とも亦復た是くの如し。是の經を班宣するも亦所説無し。猶ほ國王の所愛の敬子を太子に立てんと欲して任ずるに國財を以てするが如し。

王大臣に告ぐ。「是の洪業を以て其の太子に付す。又斯の聖財天下國土。一切萬民委任して係後諸臣命を奉ぜよ」と。今是の經法も亦復た是くの如し。善思童子よ、佛の啓受に従つて當に以て無數の菩薩に授與し上法に入らしむべし。佛以て是の經法を建立するは諸の菩薩を要するが故なり。熾盛の徳本若し手を以て執らば福は量るべからず。其は是の所宣頂王を持して當に疑ふべからず。是は正覺を成ぜず。辨才を逮て一切法に於て所著なからんと欲せば、當に斯の經の所宣頂王を學ぶべし。云ふ所の世法は則ち正道なり。所以は何ぞ。俗人道を信じ、若しくは此の經に入り、或は復た信ぜず。聞經の恩を用ひて會ふて久しく道を成ず。若し是の經を受けて廣く人の爲に説かば皆至賢と謂ふ。普く世の諸人能く虚欺する莫れ。諸佛の法を解して衆生を饒益すれば、世護無上なり。若し是の經を説けば、諸天億千虚空に住し。而して嗟歎して言く「善い哉、正覺の所宣、甚しい哉及び難し、及び難し」と。乃ち妙典を説くは是の學道英にて慧笑にして所益不可思議なり。若し四句を誦し、人の爲に講説すれば、復無央數の經を精學するが若し。是の深法不可思議を以て廣く人の爲に説けば、其の人慈を蒙り、爲に佛と談じて聖典を愛樂し、以て宣傳をなす。斯の頂王の法は訓誨の經典・無上の道要なり。是を乃ち名づけて不可思議と曰ふ。」

に倚語、新に雜穢語と云ふ。語に婬意を含むもの。八に貪欲、九に瞋毒、十に邪見、正因果を發して憍信福を求むるもの。此十並に理に乖いて起る故に惡と名け、又此の十惡は苦報の業因ならば十惡業又は十不善業と云ひ、又此十業能く苦報に通ずるを以て十不善道又は十惡業道と云ふ。

【七〇】十善とは、不殺生乃至不邪見である。此十能く理に順ずる故に善と名け、十善業又は十善道又は十善業道と云ふ。

【七一】十種力、如來の十力である。一に知覺處非處智力、處とは道理の義、物の道理非道理を知る智力である。二に智三世業報智力、一切衆生の三世の因果業報を知る智力である。三に知諸禪解脫三昧智力、諸の禪定及び八解脫三昧を知る智力である。六に知種種界智力、世間の衆生の種種々の境界同じに於て、如實に普く知る知力である。五に知種種解智力、一切衆生の種種々の知解を知る知力である。六に知種種解界智力、世間の衆生の種種々の境界同じに於て、如實に普く知る知力である。七に智一切至所道智力、五戒十善の行は人間天上に至り、八正道無漏法は



數の衆人悉く道教を受く。本空にして法の班宣すべき所なし。皆處所なく悉く不可得なり。所以は何ぞ。本未空なるが故に。古より以來義違ふべからず、一切法然り。是の門を奉持すれば、法の得べきなし。則ち有無ならず。是れ本淨法にして乃ち執持と名づく。其の斯の光の無量普明なるを慕ひ當に以て隨時に是の頂王を講ずべし。廣く法界を求めて斯の光目を志せば、境界を得ず、乃ち執持と曰ふ。諸法甚深にして法は不可得なり。若し不可得なれば則ち有無ならず。辨才具足して志佛道に存す。覺も亦斯くの如くして以て經義を暢ぶ。無卷無形にして龍の化生して先づ其の雲を興し、然る後乃ち雨ふるが如し。心は從來なく因縁にて合成す。斯の慧は無形にして是れ思議するなし。若し無央數法を宣布せんと欲せば當に斯の經を學ぶべし。一切空を解すれば、所著の法無し。經典を思惟して從來を知らず。所說甚だ善く斯の法無生にして經の所傳の如し。其の光玄照にして猶ほ日の明かなるが如し。光は從來なく去るも所至なし。經典是くの如し。諸の所有を照して、無所得ならしむ。若し比丘有り辨才を執持して清淨無斷ならば、當に至心を以て是の頂王を學ぶべし。法の光明は所曜無量なるに因つて諦に法を廣布し、疾く無礙の辨才に逮入するを得。頂王を學ぶを以て世俗を饒益す。其は此を學ばざれば法味を知らず。無玄の妙典頂王無上なり。若し是を奉ぜざれば佛法の教に遠さかる。

諸の比丘衆、若しくは比丘尼、若し是の法典の訓誨に従はずんば、義趣に歸せず。其の是を求めざれば、正眞に至らず。若し比丘比丘尼あつて是の法に求歸すれば、一切世の爲に法因を作す。一切諸法は悉く喩ふべからず。猶ほ人有つて忉利天に住し、天の宮殿に處りて悉く天下を見るが如し。斯の經を學べば普く衆生を超えて一切を濟度すること、須彌の頂に住して其の上に在つて天下を觀察するが若し。斯の經是くの如し。諸法を解暢して一切無なるを覩て、衆生を開導すること、猶ほ人有つて大炬火を執つて冥室に入つて窈冥を消除するが如し。斯の經是くの如し。法の光明を

を説く經文である。法華經の中藥王菩薩本事品の如きが是である。六に閻多伽(Utataka)此を本生と譯する。佛自身の過去世の因縁を説く經文である。七に阿浮達摩(Abhitarman)新に阿毘達摩と云ふ。此に未曾有と譯す。佛が種種の神力不思議を現じ給ふ事を記した經文である。八に阿波陀那(Avadhuta)此に譬喩と譯す。經中譬喩を説く處である。九に優婆提舍(Uparishi)此に論議と譯す。法理を論義問答する經文である。十に優陀那(Utana)此に自説と譯す。問者なきに佛自ら説く經文である。阿彌陀經の如き之である。十一に毘佛略。此れ方廣と譯す。方正廣大の眞理を説く經文である。十二に和伽羅、此に授記と譯す。菩薩に成佛の記を授ける經文である。此十二部の中に修多羅と祇夜と伽陀の三は經文の上の體裁であつて、餘の九部は其の經文に載せる別事に從つて名を立てたのである。(智度論三三)【六】十惡、一に殺生、二に偷盜、新に不與取と云ふ。三に邪淫、自らの妻妾に非ずして淫欲を行ずるもの。四に妄語、新に離間語と云ふ。五に惡口、新に麁惡語と云ふ。七



観るも處所を得ず。

所説の諸佛法は、

吾我不可得なり。

設使十方界も、

護世の所宣は、

唯世を愍んで之を宣ふ。

是の經名を班宣せよ。

此の經の義はくの如し。

斯に於て所敷なし。

甚しい哉、快く經を説く。

自然は無所有なるも、

未だ此の經趣に及ばず。

人中の最願演なり。

今未だ稱號せざる所なり。」

佛、舍利弗に告げたまはく、「是の經は頂王と名づく。當に共に傳號すべし、大智よ當に頂王と名づくる所以を了すべし。須彌の頂は、皆四天下を見るが如し。是の經の慧を解すれば、四無畏無上大道を得、生老病死無く三界の厄を度す。若し世人、是の法を好喜すれば、十方濟を蒙らざるなし。故に頂王と名づく。常に斯を奉持せよ。若し此の佛所宣の經を持する有れば、當に世の爲に諸天人民百萬億衆を護るべし。無數の徳無上正眞を興す。緣覺及び聲聞と爲らず。若し是の法を宣すれば、必ず無極の世護を成就するを得。以て法の深難究暢なるを聞き得て、處々に義を演べ、是の法の深奥無上なるを解了すれば、當に成佛するを得べし。以て能く一切法を奉持して復た狐疑なし。若しこの經の所宣至化所喻頂王を受くれば、但當に第一法忍を得べからず。第二第三は三忍法を具す。其の法不可得にして道に處所無く、光顯する所なく、乃ち大道を布く。一切法に於て此の人欲無く、現在に求むる無し。若し是の經の佛班宣する所の頂王の言辭を持すれば、諷誦して人を化し、福量るべからず。若し女人有つて斯の經を受持すれば、以て智慧を行じて疾く殊勝を得。女の惡態を捨て、一切の一なるを知り、以て衆一を知り、更ら是の法を持す。是の經を班宣すれば諸の行業に入り、一切諸の歸趣する所を明了し、以て此の法説多所照に入り、若干品の所行の精進を知る。無

正法悉く能く成立する。無量の衆生一時に來つて難問するも菩薩悉く能く一時に酬對するが故に大衆の中に説法して畏れないのである。四に能斷物疑説法無畏、衆生問難する時、意に隨つて法如法に解説し、能く巧みに衆生の疑を斷つ。之を能斷疑と名ける。此能あるを以ての故に大衆の中に説法して畏れないのである。【六八】十二部經、一切經を十二種類に分けた名である。一に修多羅(sūtra)、契經と云ふ。經典の中に直に法義を説いた長行(頌文に對して頌文でない通常の經文)の文を云ふ。契經とは理に契ひ、機に契ふ經典であるのを云ふ。二に祇夜(ghāṭīya)、應頌又は重頌と譯す。前の長行の文に應じ、重ねて其の義を宣べ頌となすからである。凡そ字句を定めた文體を頌と云ふ。三に伽陀(gāthā)、偈頌又は孤起頌と譯す。長行に依らず、直に偈頌の句を作る者を云ふ。法句經の如きは是である。四に尼陀那(nidāna)此を因縁と譯す。經中見佛開法の因縁、佛の説法教化の因縁を説くのである。即ち諸經の序品の如きは是れ因縁經である。五に伊帝目多(Chetivāḍīya)此を本事と譯す。佛弟子の過去世の因縁

供養す。好名香衆華衣服衆妙若干種寶妓樂幢旛梅檀雜香を以て、解脫華及び衆の縵綵を以て、以て用ひて諸如來至眞等正覺に供事し、最後末世に當に佛道を得べし。無垢光如來・至眞等正覺・明行成爲・善逝世間解・無上士・道法御天人師・佛世尊と號さん。爾の時大聖即ち頌を説いて曰く。

「若し衆雜寶を以て、

以て用ひて諸佛、

若し是の經典を聞けば、

住力は法を講説し、

爾の時舍利弗は佛の所説を聞き、歡喜し心悅んで未曾有を得たり。佛の至聖を念じ、徳は須彌を踰え、慧は三世に超えたり。道は比すべからず。空の如く、侶無し。古きを探ねて今を知り、觀る所無限にして、智明曠然として以て喩を爲すなし。厄を救うて明に通すること猶ほ空の如く際無く一切に慈を蒙る。時に舍利弗、佛の恩徳を念じて恭敬して偈を説く。而も歎じて頌して曰く。

「是の經甚だ微妙にして、

其の名號を説かず。

古來未だ會て、

彼、住處を得ず。

假使有漏法。

計するに亦た無所得なり。

若し有爲界、

斯の二積む所なからしむるも、

世を護り妙法を宣べ、

護世衆如來に施すも、

徳多くして彼の施に過ぐ。

世を護りて三界を照す。」

護世の所宣なり。

云何ぞ其の稱を知らん。

斯の法を班宣するを聞かず。

甚しい哉法を説いて快し。

及び無漏法も

甚しい哉快く法を説く。

及び無爲界をして、

是の經の歸すること斯くの如し。

道、正眞教を行ふ。

味門の名は有漏無漏に通ずる。【六】四無畏、又四無所畏と云ふ。化他の心が怯れないのを無畏と名ける。四無畏に佛と菩薩との二種がある。佛四無畏を法界次第下には智度論に依つて釋してゐる。一に一切無所畏、世尊の大衆の中に於て我は一切正智の人なりと師子吼して些の怖心のないのを云ふ。二に漏盡無所畏、世尊大衆の中に於て我れ一切の煩惱を斷じ盡せりと師子吼して些の怖心のないのを云ふ。三に說障道無所畏、世尊大衆の中に於て佛道を障害する法を師子吼して些の怖心なきを云ふ。四に說盡苦道無所畏、世尊大衆の中に於て盡苦の道を師子吼して些の怖心のないのを云ふ。菩薩の四無畏は智度論五にも出るものを大乘義章十一が釋してゐる。一に總持不忘説法無畏、菩薩能く教法を開持し、衆義を憶持して忘れざるを以て、大衆の中に法を説いて畏れないのである。二に盡知法藥及知衆生根慇懃心説法無畏、藥に二種あり、世間法出世間法である。衆生の根慇懃に種々あり菩薩能く之を了知するが故に大衆の中に説法して畏れないのである。之に善能問答説法無畏、一切の異見皆能く摧破し、一切の



節せざるなし。此の三千大千世界は諸寶を羅列す。交露坳瑤妙帳高閣樹木流水浴地五音俱に發して和雅悲哀なり。此の變を聞見して悅豫せざる無く、未曾有を得たり。賢者阿難は即ち座より起つて、偏露右臂して更に衣服を整へ、長跪又手して前んで佛に白して言く、「何の縁を以て笑ふ。既に笑ふは當に意有るべし。」偈を以て佛を歎す。

「聖尊未だ會て妄にせず。

世を惹愍して雄々しく説く。

天は虚空の中に處して、

各口にして歌詠し、

高燈電光の如し。

斯の曜も亦斯くの如し。

諸佛の法の如し。

還つて身を遶ること三匝し。

聖尊は笑ひ暉曜し、

佛の口より出でて頂に入つて。

爾の時世尊は賢者阿難の爲に頌を説いて曰く。

「善思族姓子は、

當に如來の覺を成じ、

佛、阿難に語りたまはく、「是の善思童子は、當に不可計會億兆佛に值ふべし。世世隨侍して未

だ會て之に遠ざからず。常に至心を用て諸佛に衣被・飯食・床榻臥具病瘦醫藥を供養し、佛滅度の

後は舍利を供養す。衆の寶塔を興し、高さ四萬里なり。以て舍利を持して衆くの寶塔に著け、奉事

大明は虚く忻ばず。

何の縁によつて忻笑するや。

人中の上を供養す。

快い哉經典を宣ぶ。

若干色の微妙なり。

光光りて遠近を照し。

正道決を授與す。

忽ち頂上に没して。

若干種の光色は、

唯此の瑞意を説く。

造立の徳は無量なり。

天人尊に逮致すべし。」

と名ける。十二に解脫知見無減佛一切の解脫の中に於て知見明了分別無碍である。之を解脫知見無減と名ける。十三に一切身業隨智慧行、佛諸の勝相を觀じて衆生を調伏し、智に稱ひて一切諸法を演説し、各解脫證入せしめる。是を一切身業隨智慧行と名ける。十四に一切の業隨智慧行、佛微妙清淨の語を以て智に隨つて轉じ、一切衆生を化導利益する。是を一切口業隨智慧行と名ける。十五に一切意業隨智慧行、佛清淨の意業を以て智に隨つて衆生心に轉入し、爲に法を説いて無明癡惑の膜を除滅する。是を一切意業隨智慧行と名ける。十六に智慧知過去世無碍、佛智慧を以て過去世の所有一切若くは衆生法、若くは非衆生法を照知し、悉く能く遍く知つて無礙である。是を智慧知過去世無碍と名ける。十八に智慧知現在世無碍、佛智慧を以て未來世の所有一切、若くは衆生法、若くは非衆生法を照知し、悉く能く遍く知つて無碍である。是を智慧知現在無碍と名ける。〔智度論二六〕

【六】三脫門、空、無相、無願の三である。又三三昧門を言ふ。但し通別等の等があり、三解脫門の名は無漏に局り、三



願宣し修して消除す。

若し斯の寂法に於て、

虛妄の法を以て、

其の諍訟を宣ぶる、

善思は當に是を了すべし。

若し修行の道有つて、

朋友亂れて顛倒す。

佛所演の講説なり。

當に來つて諸の學に就くべく、

若し是の佛所化の、

一切衆生を用ひて、

若し明智の者有つて、

斯等の將來世は。

其は是の法を行はず。

自ら謂ば則ち慧に應じて、

佛法を去る大だ遠し。

虛妄の思想を造り、

滅度に親近せず。

斯を滅度と爲す。

斯くして正見の行なし。

反逆の事を宣布すれば、

是を學者の業と爲す。

菩薩は大名稱あり。

故に行道を勸化す。

深妙を奉持する有らば。

以て佛を供養すると爲す。

是の眞法を受持すれば、

正法を用ひて存立して、

心立つて思想を存す。

餘を用ひて道を致さず。

佛是の經を説く時、善思童子は尋時無所從生法忍を逮得して、忻然として大に悦び、虚空に踊在して地を去ること四丈九尺なり。時に佛忻笑して五色の光明巍々として甚だ妙なり。青黃赤白紅紫の色は佛の口より出で、十方無量佛土を照して、還つて佛を遶ること三匝にして頂上より入る。六反是の三千大千世界を震動す。上虚空の中天に上り、細掃したる梅檀香木蜜の衆香を雨らし。天の好華を雨して人目を晃曜す。塗篋の樂器は鼓せずして自ら鳴る。虚空を莊嚴して十方を周匝して校

名ける。三に念無失、佛諸の甚深の禪定を修し、心散亂せず、諸法の中に於て心著する所なく、第一義の安穩を得るが故に念無失と名ける。四に無異想、佛一切衆生に於て平等に普く度し、心に簡潔がない。是を無異想と名ける。五に無不定心。佛の所住坐臥常に甚深の勝定を離れず、是を無不定心と名ける。六に無不知已捨、佛一切諸法に於て皆悉く照知して方に捨て、一法として了知して之を捨てざる者あることなし。是を無不知已捨と名ける。七に欲無滅、佛樂善を具して常に諸の衆生を度せんを欲し、心に厭足がない。之を欲無滅と名ける。八に精進無滅、佛の身心精進満足し、常に一切衆生を度し休息することがない。之を精進無滅と名ける。九に念無滅、佛三世諸佛の法一切の智慧相應し。満足し、退轉あることなし。是を念無滅と名ける。十に慧無滅、佛一切の智慧を具し、無量無際不可盡の故に慧無滅と名ける。十一に解脫無滅、佛一切の執著を遠離し、二種の解脫を具する。一は有爲解脫、謂く無漏の智慧の相應する解脫である。二に無爲解脫、謂く一切の煩惱淨盡して無餘である。是を解脫無滅

慧は以て得べからず。

此際及び彼の岸は、

深く解して斯を行はず。

是を智慧の法と念す。

此の佛の教法に違へば、

無勤若しくは勤度は、

其は平等を行ぜざれば、

以て斯の法を發興す。

此等の諸比丘は、

以て能く衆苦を斷ず。

是くの如き說法者は、

佛復た善思に告ぐ。若し諸行を説いて皆習致に従ひ、三界の衆を以ての故に道習を修す。吾我を計する有る故に、大慈を行じて無蓋の哀を修し、三界に倚つて三脫門を行す。四大を慕ふが故に無常苦空非身を行す。生老病死を以て四無畏を求め、十二因縁を以て十二部經を了し、十八種を以て十八不共諸佛の法を行じ、十方の衆は十惡を犯すを以ての故に、十善を求めて十種の力を求め、三蔽を求むるが故に三達智を致す。六情に著するが故に、六度無極を行じて六通獨歩す。病に應じて藥を與へて、危厄を濟はしむ。佛は猶ほ良醫にして經法は藥の如し。疾病を用ひての故に醫藥を有り。病なければ則ち藥なし。一切本空なり。無形無名も亦假號なし。心等は空の如く、比無く侶なし。忽然として際なく、爾乃ち道に應ず。佛時に頌して曰く。

「其の無所住の法は、

中に於て所行を習ふ。

斯くして堅固有る無し。

所見若し見ずんば、

是は妄想を求むるに非ず。

斯の法は則ち平等にして、

則ち善親友に非ず。

乃ち到虚妄と曰ふ。

則ち善親友に非ず。

若し復た斯の法を滅すれば、

善く佛教を思はず。

本淨にして無所有なり。

則ち佛教を誑宣す。」

慮礙心と譯す。心を一處に定

めて動かないので、定と云ひ

正しく所觀の法を受くるので

受と云ひ、心に暴を調へ、心

の曲れるを直し、心の散つた

のを定めるので調直定と云ひ

心の行動を正して法に合せし

める依處なので正心行處と云

ひ、緣慮を息止し、心念を凝

結するので、息慮礙心と云ふ。

【六二】所有、身に生死の果報

を有する所のあるのを云ふ。

【六三】六衰、色等の六塵はよ

く人の眞性を衰耗せしめるの

ので六衰と云ふ。六賊と云ふ如

くである。

【六四】客塵煩惱を形容したも

の、煩惱は心性固有の物でな

く、理に迷つて起る者なので、

之を客と名け、心性を汚す者

なので塵と云ふ。雜摩經問疾

品にも同様の章句出づ。

諸法及び道慧は、  
有爲及び無爲は、  
諸の菩薩は無想に、  
普く斯の世を觀するに、  
用ひて世を曠了する所、  
佛聖及び衆生は、  
其は思想なき者なり。  
假使へば衆生界、  
是れ乃ち之を名づけて、  
以て悲哀を觀るに、  
其の哀は貌無きを以て、  
五事は虚空に在り。  
一切の俗は是くの如し。  
其の無上の正法は、  
此は貪する所なし。  
護世の所照は、  
是の無色の法を以て、  
虚空に邊有る無し、  
是を佛の正法となす。  
其の慧は逮ぶべからず。

佛の所宣に非ず。  
愚の發す所の望想なり。  
諸佛大聖は明かなり。  
世は悉く得べからず。  
是亦處所無し。  
是に於て望想なし。  
善い哉慈無上。  
法界も亦復た然り。  
菩薩は所著無しといふ。  
其の哀は形貌なし。  
愚の所了の行に非ず。  
有無の處所に有らず。  
是れ乃ち無上の哀なり。  
乃ち曰つて佛法と爲す。  
世に是を自然の法と爲す。  
其の色は無所有なり。  
乃ち無見頂と曰ふ。  
普く平にして獲べからず。  
名づけて無能觀と曰ふ。  
是れ無上の大道なり。

八天を立てる。三に無色界、此界には色即ち物質的の者は一もなく、身體も無ければ宮殿國土もなく、唯心識を以て深好なる禪定に住するものなので、之を無色界と云ふ。これ既に無物質の世界であるので、方所を何れと定むべきでなく、唯果報の勝れた義に就いて色界の上にあると云ふ。之に四天あり、四無色又は四空處と云ふ。

【五】日宮殿、日天子の宮殿である。佛說に所謂太陽は日天子の宮殿であると云ふ。

【五】三毒、又三根、一に貪毒、引取の心を貪と名ける。迷心を以て一切順情の境に對して取取して厭くなきもの。二に瞋毒、恚忿の心を瞋と名く。迷信を以て一切違情の境に對して忿怒を起すもの。三に痴毒、迷闇の心を痴と名ける。心性闇鈍にして事理の法に迷ふもの、亦無明と名ける。これに二種あつて痴毒の獨り起るのを獨頭無明と名け、貪毒と共に起るのを相應無明と名ける。貪毒等は必ず痴毒と相應して起るのである。

【六】窈冥、窈、ふかし、くらし。

【六】三昧(Samadhi)、舊稱三昧、三摩提、三摩帝。定、正受、調直定、正心行處、息



若し法の獲べき無くんば、

其の佛及び經法は、

若し是くの如きを行すれば、

是くの如く以て行する者は、

其の心無所著にして、

佛復た善思に告げたまはく、「若し菩薩大士有り是の深經を聞き、若し讀持諷誦して心に恐怖せざれば、善く弘誓を被つて心は金剛の如く、疾く佛樹に近い道場に坐すれば、佛の境界に近きて至

眞無礙脫門に親しむを得。無爲無合會處を觀じて、十方諸佛の世界に到り、大慈無蓋の道哀を建習し、

十八不共諸佛の法を成じ、三世の最尊慧は日月に踰ゆ。徳に等侶無く、慧は虚空に過ぎたり。道

明巍々として、喩を爲すべからず。無邊聖無見頂相に逮ぶ。若し是の無限の雅典を聞くこと有り、

斯の深卷を以て人の爲に班宣して信樂すれば、往過去世に會て諸佛を見ること亦計るべからず。又

輕慢戲笑せざる者は、佛以て豫見して其の人本早く此の經を信するを觀じて、如來久しく觀る。若

し信樂して斯の經典を習はず、之を聞いて調戲すれば、則ち外の異學諸魔官場放逸の人なり。是の

法を信する者は是れ佛弟子にして、佛は則ち是れ師なり。親成就の爲に其の鬚髮を下げて沙門と作

る。其の信ぜざる者は、則ち外の邪業にして九十六種は道法に反逆す。佛時に頌して言く。

「佛の樹下に坐するを見、

其の佛道を信ぜざれば、

其の無聖礙の法は、

法を了して處所無く。

意、聖慧に入つて、

是は則ち佛道に近し。

此の一切悉く無なり。

則ち佛道に近づくを得。

俗人と與侶なし。

彼は乃ち佛道に近し。」

眞道場を行じて、

是の慧は得べからず。

究竟して得べからず。

是を曰つて解脱と爲す。

一切法の主なり。

を合して一と爲し、心を開いて四となして五蘊を立てる。色蘊の一は色であり、後の受想行識は心の差別である。次に色に迷ふこと偏に重き者の爲には色を閉いて十と爲し、心を合して二となして十二處を立てる。初の五根五境の十處は色である。後の意根法境の二處は心である。次に色心共に迷ふ者の爲には色を閉いて十と爲し、心を閉いて八となし、以て十八界を立てる。五根五境の十界は色であり、意根と法境と六識との八界は心である。此の次第が即ち上中下の三根である。(織田)

【至】三界、凡夫の生死往來する世界を三に分つ。一に欲界、淫欲と食欲との二欲を有する有情の住所である。上は六欲天より中は人界の四大洲下は無間地獄に至るまでを欲界と云ふ。二に色界、色は實礙の義で、有形の物質を云ふ。此界は欲界の上に在つて飲食の二欲を離れた有情の住所であつて、身體と云ひ、宮殿と云ひ、物質的のものは總て殊妙麗妙であるので、色界と名ける。此の色界を禪定の淺深麗妙によつて四級に分つて四禪天と稱し、新に靜慮と云ふ。此の中或は十六天を立て、或は十七天を立て、或ひは十

至る所虚空の如く、

若し能く斯を曉了すれば、

一切法を分別し、

彼、衆生を得ず。

以て諸界を剖判すれば、

是を入道行にちうどうぎやうと曰ひ、

以て此の至業を致し、

諸界及び衆生は、

彼是くの如きを念するを以て、

其の内及び外事、

以て法を除かずとなし、

斯の法思議する無し。

此れ悉く無所有にして、

所行能く是くの如し。

無爲の慧まを以てす。

是の乗を大乘と爲す。

永く此の世を畏れず。

其は世界に在つて、

菩薩は所行無く、

是の法を深遠と爲す。

是の法を自然じぜんと爲す。

菩薩所畏無し。

衆生の行を解了すれば、

其の法皆是くの如し。

其の界所有無し。

斯これを無上道と曰ふ。

衆生の心行を知る。

二つながら俱に無所有なり。

皆一切法を了す。

合會ごうかい望想ぼうさうなし。

乃ち真本際と曰ふ。

乃ち曰つて佛法と爲す。

悉く亦無所成なり。

計數して人有るなし。

乃ち曰つて佛慧ぶつゑと爲す。

普く一切を安んず。

世も亦無所有なり。

世の一切界に普し。

無上慧を求む。

佛法は思ふ可からず。

て唯身根所得である。身根諸色と觸れて堅濕煖動を覺知するのである。假の四大とは世間稱する所の地水火風である。此四大は其實地水火風及び色聲香味觸の九法の假和合であるが、其の中最も堅性の矜盛なるを地と名け、乃至動性の最も増盛なるを風と名く。之を要するに、實の四大は能造にして、假の四大は所造に屬する。然るに成實論に依れば、實の四大はなく、唯假の四大のみである。色香味觸の四座を以て一切色法の能造となす。四座和合して方に四大を成ずると立つ。故に四大は唯假法である。要するに一切有形有質の物四大の所造とならないものはなく、(俱舍論)、四大の和合でないものはない(成實論)。依つて稱して大と言ふのである。或は之を二種に分ち正報の人身を内の四大と稱し、或ひは有識の四大と稱する。依報の諸色を外の四大と云ひ、或ひは無識の四大と云ふ。(織田)

【五】十八界、三科に屬する。五蘊十二處十八界の三門は舊譯に五陰十二入十八界と云ふ。三門共に凡夫實我の執を破せん爲に施設したもの。凡夫の迷執に偏頗があり、心に迷ふこと偏に重き者の爲には、色

識を以て法を知らず。

若し此の行を了する有れば、

第一の義を行じ、

衆會して等倫なく、

斯等は遊居すと雖も。

佛復た善思に告ぐ。「一切諸法は猶ほ幻化の如し。幻化は本空にして悉く所有無し。迷惑の愚俗は自ら己身及び他人を計して、悉く所有有るが故に五趣に沈む。敢て能く曉了すれば是悉く無所畏なり。諸法の本末は内外有る無し。如是の心を了するを以て怯弱ならず。三界を難しとせず三界は悉く空なり。若し菩薩有り是の本無きを曉れば、三界を獨歩して所難無し。生死に達すること猶ほ虚空の如く、無形の本亦た無名なり。一切諸法も亦復た是くの如く無形無名なり。無明を用ての故に三界に馳逸して轉輪無際なり。猶ほ五事の如く虚空に住して垢を爲す能はず。自然の故に心本清淨なり。權に未だ即ち解便せず。三毒五陰六衰の客塵の所蔽有り。是非有りと雖も本淨を汚さず。心は亘つて開達し、三世の空を暢べて則ち大道に入る。佛時に頌して曰く。

「衆生は猶ほ幻の如し。

所宜是くの如きは、

己身と他人と、

能く是を曉了するを以て、

其の内及び外法。

怯弱の心を以て、

諸法無所礙にして、

自然に無所有なり。

菩薩の意は堅強にして、

世所は所趣無し。

衆の爲に法を宣ぶ。

衆生の望想無し。」

其の幻は無所有なり。  
永く復た畏るゝ所なし。  
二つながら俱に虚にして無寂なり。」

則ち永く所畏なし。

有の所在を計せず。

世俗を難しとせざる無し。」

猶ほ虚空に遊ぶが如し。

譯語。(Salya)に能仁の意がある、釋迦は釋尊の出身した族名であるが、「能仁」は普通釋迦牟尼(Sakyamuni)に用ぶ。

【五二】結(Bandha)、結集の義、繫縛の義。煩惱の異名であつて、煩惱因となつて生死を結集するので結と云ひ、又衆生を繫縛して解脱せしめないの爲、結と云ふ。即ち生死の因となるものである。

【五三】獨、のぞく。

【五四】等心、一切衆生に於て怨親平等の心。又諸行等しく修する心。

【五五】顛倒、前出(看註二四)。

【五六】黎庶、もろゝのたみくさ。

【五四】般若思想を豫想する。色受想行識は、五蘊(五陰)である。五蘊に於ては前出。

【五五】四大、地水火風の四である。俱舍論に依るに假實の二種があり、實の四を四界又は四大界と稱し、假の四を單に四大と云ふ。實の四大とは一に地大、堅を性ととし、物を支持す。二に水大、濕を性ととし、物を收攝す。三に火大、煖を性ととし、物を調熟す。四に風大、動を性ととし、物を生長す。此四以て一切の色法を造作すれば能造の四大と云ふ。其の四大の體は觸處所攝にし



虚空を行いて、衆冥を汚さざるが如し。菩薩はくの如く三界を獨歩して心に所著なし。姪怒癡の三毒の窈冥を去り、猶ほ蓮華の泥中に生じて其と合せざるが如し。菩薩はくの如く生死に在つて最正覺を成じ、心淨きこと空の如く、永く所著無く、一切を度脱す。佛時に頌して曰く。

「其の心不可得なれば、」

若し衆生を得ずんば、

菩薩懈怠を離るれば、

永く勤修する所無し。

其の心及び心意、

菩薩は所説無し、

若し懈怠有れば、

無心無所行にして、

其の心不可得にして、

若し速及ぶべからずんば、

心に常に自ら勤修し、

無思無正受なるを。

定意と言ふ所以は、

安住するを自然と名づく。

慧の所在を知らず、

自然及び慧は、

是の法不可得にして、

則ち諍訟有る無し。

是を第一忍と爲す。

其の志、所行無く、

乃ち最精進と曰ふ。

所遣は直にして邪なく。

是れ第一精進なり。

菩薩化して之を立つ。

第一精進に住す。

内外無所著なり。

是則ち定意と爲す。

自然に無所有なり。

乃ち三昧に速ぶと曰ふ。

能く是の行を爲すを以て、

是れ第一定意なり。

何所にか自然の法あらん。

二ながら俱に無所有なり。

斯の識は正法を行す。

る。二に天台、嘉祥等の諸師二十種の我見に於て六十二見の一釋をなす。外道色蘊に就て我を計す四句あり、一に色は是れ我なり、二に色を離れて我あり、三に色は大にして我は小なり、我は色の中に住す。四に我は大にして色は小なり、色は我の中に住す。他の四蘊を計するも亦然り。合せて二十あり、三世を歴て六十となる。斷常の二見を根本とする。六十二となる。是れ五見中身邊二見の所屬である。三に本劫本見未劫未見に就いて六十二見がある。本劫とは過去の時である。本見とは彼の過去に於て常見を起すのである。未劫とは未來の時である。未見とは未來世に於て斷見を起すのである。本劫本見の十八とは經に、常論に四、亦常亦無常論に四、邊無邊論に四、種種論に四、無因而有論に二とある。未劫未見の四十四とは有想論に十六、無想論八、非有想非無想論に八、斷滅論に七、現在泥洹經に五である。この六十二見の個々については、「瑜伽論八十七」と織田氏「佛教大辭典」一八三一の三を参照されたい。普通六十二見とは第三の外道の六十二の見解を言ふ。【四〇】能仁、釋迦(Siddha)の

此を第一慈と爲す。

是を世大施と曰ふ。

常に樂を慕つて放捨する、

正使は法を得ず。

菩薩の明達を示す。

法を解すること不可得に、

無算は是の法なり。

法貌獲べからず。

是の戒は犯す所無く、

佛土不可議にして、

戒に於て望想せず。

能く諸の衆生を忍び。

佛の教ふる所の訓誨にて、

慈を歎ずること乃ち無極なり。

斯を乃ち大士と爲す。

乃ち慧道心と曰ふ。

諸法虚にして實無し。

是を好布施と曰ふ。

便ち恐畏する所無し。

乃ち曰つて布施と爲す。

佛法は思ふ可からず。

諸法は著する所無し。

此れ諸界を見ず。

諸菩薩の歎ずる所なり。

一切不可得なり。

是の法第一忍なり。』

佛復た善思に告ぐ、「色は空にして不可得なり。痛想行識も空にして不可得なり。所謂空とは色は

則ち空と爲し、復た空と異なるなし。痛想行識の空も復た空と異なる無し。四大・五陰・十八諸種の三

界は本は空なり。十二因縁無なれば則ち空と爲し、復た空と異なるなし。現世度世・有爲無爲・四大皆

空にして復た空と異なる無し。色は聚沫の如く、痛痒は泡の如し。思想は芭蕉の如く、生死は夢の如

く、識は幻の如し。三界は猶ほ化の如く、五趣は影の如し。所以は影の如く、縁より對生す。三界

の本末・欲界・色界及び無色界の心意所爲は、猶ほ畫師の素壁板を治め、因縁合成するが如し。猶

ほ飛鳥の空中に飛行するが如し。菩薩是くの如く無望想を行じて十方に旋到するは、猶ほ日宮殿の

無常、四に色は非常非無常である。計する、他の受等の四蘊も亦さうで、合せて二十句ある。此は過去の五蘊に於ける所を計するのである。又色を計するに有邊無邊等の四句がある。一に色は有邊である。空間の十方上下に於て邊際窮極があるのを言ふ。二に色は無邊である。上に反する。三に色は有邊無邊である。四に色は非有邊無邊と計する、他の四蘊も亦さうである。合せて二十句ある。此は現在の五蘊に於ける所得執である、又色を計するのに如去不如去等の四句がある。一に色は如去なり、人來つて此の間に生ずる如く去つて後世に至るも亦是の如しと計するを云ふ。二に色は不如去なり、過去從來する所なく、未來も亦所去なしと計するを云ふ。三に色は如去不如去である。身神和合して人となる、死後神去れども身去らずと計するを云ふ。四に色は非如去非不如去である。第三句過あるを見て、此の句を計するのである。他の四蘊を計するのにも亦同様である。合せて廿句ある。此は未來の五蘊に於ける所見である。三世合せて六十句あり、此に身と神との一異の二見を加へて六十二見とす

明者是の違を作し、

是の乘は無所畏にして、

畏と無所畏と、

一切無所有は、

設たしむ悉く虚まぼろし靜を了するは、

斯の行甚だ微妙にして、

所濟も亦深遠にして、

所行の邈は玄妙にして、

若し能く本際を知つて、

法永く衆垢無し。

是の法本清淨にして、

而して邪逆を示現して、

文字の業を轉くわんぜずして、

不著は猶ほ幻の如し。

以て反倒の行を棄つれば、

一切衆生の行は、

若し能く斯を曉了すれば、

衆生は無明を以て、

衆生の法も亦爾り。

其の念及び衆生は、

無上乘を行す。

大乘の最無極なり。

是も亦放逸無し。

衆行中の最勝なり。

彼れ無上道を行す。

一切法を救護す。

衆望の想を消除す。

二は俱に處所無し。

法に倚念せざれば、

亦垢を離れて去らす。

反つて欲を捨つるを宜ぶ。

愛欲堅固ならず。

斯の句は無上と爲す。

此は則ち言教無し。

便ち諍訟の意なし。

是實に不可得なり。

此の行は乃ち善教なり。

故に曰つて黎庶五三と名づく。

此是の道は則ち無上なり。

是れ永く不可得なり。

する一切の心の作用である。五に識蘊、境に對して事物を了別識知する心の本體である。之を一有情に徴すれば色蘊の一は即ち身にして、他の四蘊は即ち心である。心の中に受想行の三は心性上各一種特別の作用なので、之を心所有法、即ち心王の所有の法と名け、(略して心所)、識の一は心の自性なので、之を心王と名ける。即ち五蘊は身心の二法であつて、色界欲界の如き身ある有情は五蘊から成り、無色界の如き身なき有情は四蘊(色蘊を除く)より成るのである。

【四七】摩羅(Mara)、又魔羅、略して魔と言ふ。能奪命、障礙亂、破壞などと譯す。人命を害し、人の善事を障礙するもの。欲界の第六天主を魔王とし、其の眷屬を魔民魔人とす。舊譯の經論はもと磨に作つたが、梁武から魔の字に改めたと云ふ。

【四七】六十二見、六十二邪見を言ふが、經論の諸釋は不同であつて、多く依用するのは三種である。一は大品般若經佛母品に十四難を開いて六十二見となしてゐる。先づ色蘊を計するのん常等の四句がある、一に色は常である、二に色は無常である、三は色は常



虚偽まごころの業を解暢す。

勇猛ゆうまうの世俗の爲に、

八  
能仁は諸見を滅し。  
我が衆の狐疑を斷す。」

爾の時世尊、善思童子に告げたまはく、「菩薩の所行は未だ會て虚妄ならず。救護する所多し。思を以て加濟して評訟有る無し。衆暇を除去して一切穢無衆生を懲傷して深遠の義を行じて望想を懷かず。世に堅固無く貪欲を消去し、無貪欲を以て業しう結くわつを獨棄どくきす。常に等心じやうしんを行じて衆生に加へ、志虚妄ならず。大慈の行法は不可得にして大義吼を修して精進を捨てず。心に至眞を行じて勤業を失はず。燒害有る無く忍辱を奉行して評訟せず。覩見する所無く夙夜尊行す。善思は一心に懈怠を棄て、道行を成就す。定意正受して其の心寂靜なり。善慧を修して一切諸法永く所得無し。行に所畏なく心怯羸ならず。道心を顯發けんぱつして無望礙を行じ、如來十種の力を成就す。當まぎに何の行を以て殊特の業に至るべき。其の至慧に尊んで奉じて等倫無し。十方諸佛の世界に遊んで、行に望礙なく一切を度脱す。」時に佛、頌して曰く。

「無虚妄の業を行ずるは、

以て脱門を奉じて、

無行は謂く正行にして、

若し能く是の行を解すれば、

法を以て之を救攝す。

其れ無所得の義なり。

吾、道法を行ずると言ふは、

顛倒の業に住するを以て、

假使たごひ評訟有るも、

是れ諸菩薩の辭なり。

諸の礙行を畏れず。

是れ菩薩の業なり。

則ち貪求する所無し。

諸菩薩の宜する所。

是の行を無上となす。

則ち顛倒ぎんたうに住するなり。

便ち有所畏を得。

靜の所在を見ず。

の中に攝して別に果の名を存せず、因縁觀と云ふのである(織田)。然し、十二緣起には他に種々の解釋がある。

【四四】五趣、又五惡趣、五道などとも言ふ。一に地獄、二に餓鬼、三に畜生、四に人、五に天である。

【四五】五陰、陰は色聲等の有爲法を云ふ。此に就て諸師に異釋があり、天台は陰に二義、一は陰は蘊覆の義で、色聲等の有爲法は眞理を蘊覆するの

で云ふ。二は積聚の義で、色聲等の有爲法は生死の苦果を積聚するので云ふ。蘊と同じ。

蘊とは梵語の塞障陀(bandha)を蓋には陰と譯し、又衆と譯し、新には蘊と譯す。陰は積聚の義。衆は衆多和聚の義であつて、蘊の義と同じ。是は數多積集する有爲法の自性を顯はす。有爲法の用を作すの

に純一の法がなく、或ひは同類或ひは異類、必ず數多の小分相集つて其用を作せば、概して之を陰又は蘊と云ひ、之を大別して五法とする。一に色蘊、五根五境等の有形の物質を總該する。二に受蘊、境に對して事物を受け込むの作用である。三に想蘊、境に對して事物を想像する心の作用である。四に行蘊、其他境に關對して賦り食する等の善惡に關

善思當に斯を了すべし。

正覺は所作無ければ、

若し道處を得ずんば、

若し佛道を望想すれば、

若し行志、道に存すれば、

諸の生死は自然なれど、

自然は無所有にして、

究竟は無所生にして、

無明業を行するを以て、

懷來の衆義を以て、

彼は悉く無所生にして、

彼所宣の深妙法を、

一切の起生を用ひて、

爾の時善思、偈を以て世尊に答へて曰く。

「佛興つて世に出現するは、」

身を以て疑網と爲し、

佛出づるに思議無く、

以て魔羅の綱を壞り、

以て生死の元を絶つ。

永く沈吟有る無し。

佛說大方等頂王經

是の佛の演ぶる所の法なり。

則ち不可逮と爲す。

乃ち三界の事を見ん。

則ち正覺を求めず。

永く無想を造さず。

自然の法を觀ぜず。

是を無爲想と爲す。

所説は不可得なり。

因て無爲法を示す。

諸法は則ち自然なり。

便ち靜訟の事無し。

牽行ぜざる無し。

菩薩は愍哀を行す。」

皆用ひて我等を愍み、

是の法義を宣布す。

具足興變を爲す。

六十二を除くを説き、

佛樹下に坐するに因つて、

衆想の著を宣消し。

去の惑業の因に縁つて受けた現在の果に屬する。是れ過現

一重の因果である。又愛取の

二は現在の惑にして有の一は

現在の業である。此の惑業の

現在の因に縁つて未來の生と

老死の果を感ずる。是れ現未

一重の因果である。之を三世

兩重の因果と云ふ。此の兩重

の因果に依て輪廻の極りなき

を知る。何となれば、現在の

惑(受取)業、(有)、既に現

在の苦果(識乃至受)より生ず

るを見れば、過去の惑(無明)

業(行)亦過去の苦果より生ず

るを知り、既に現在の苦果(識

乃至受)現在の業(有)を生ず

るを見れば、亦未來の苦行(生

老死)未來の業を生ずるを知

る。それ故之を溯れば過去の

惑業は更に過去の苦果より來

り、之を趁へば未來の苦果は

更に未來の惑業を生じて過去

に始なく未來に終がない。之

空寂を曉知せず。

無得にして速ぶべからず。

獲る無く、致すべからず。

彼在つて戒を修せず。

行無く戒有る無し。

諸法は無所有にして、

無明の法有るを以て、

諸法假に名有り。

假號にして法有る無し。

所起は無所生にして、

其の陰無所見にして、

所有は無處所にして、

法は生死の業を離れ。

幻師の形を化するが如し。

所有と無所有は、

法の生と無所生とは。

諸法皆悉く空なるも、

法適ま所生有らば、

其の生及び病死は、

諸法一切空にして、

其の本有身無し。

緣對に従つて合成す。

又現に生を得るを望む。

亦復た禁を犯さず。

是を諸法の相と爲す。

無明に因つて生ず。

便ち明達の智を造る。

是を無所有と名づく。

乃ち名づけて滅土と曰ふ。

因つて五陰有るを現す。

因つて有所現と號す。

因つて有法を變示す。

長く生死の難無し。

愚冥は人有りと謂ふ。

明者は迷を爲さず。

愚者是の計無し。

愚者此を解せず。

便ち當に終歿有るべし。

是を捨すれば無所畏なり。

法も亦所歸無し。

一念を云ふ。四に名色(Nāma-rūpa)胎中に在て漸く心身の發育する位を云ふ。名とは心法である。心法は體を以て示すことが出來ず、唯名を以て之を詮はすので名と云ふ。色は即ち眼等の身である。五に六處(ṣaḍāyatana)六處とは六根である。六根具足して將に胎を出でんとする位である。此の中に五位がある。六に觸(sparśa)二、三歳の間事物に對して未だ苦樂を識別することなく、唯物に觸れんとする位である。七に受(vedanā)六、七歳より以後漸く事物に對して苦樂を識別して之を感受する位である。八に愛(triṣṇā)十四、五歳以後種々の強盛なる愛欲を生ずる位を云ふ。九に取(upādāna)成人以後愛欲愈盛であつて、諸境に馳驅して所欲を取求する位を云ふ。十に有(bhava)愛取の煩惱に依つて種々の業を作り、當來の果を定むる位を云ふ。有とは業である。業能く當來の果を有すれば有と名く。十一に生(jīva)即ち現在の業に依て未來に生を受くる位を云ふ。十二に老死(ṭhānaṃbhava)來世に生を受くる位を云ふ。此の中初の無明と行との二は即ち惑業の二にして過去世の因に關し、識名色六處觸受の五は過



諸法は形貌なく、

若し諸法有る無ければ、

假に號して境界と曰ふ。

愚冥の倚著する所なり。

是は其の自然の義なり。

解説は無解説なり。

自然は無境界なり。

故に名づけて部界と曰ふ。

佛復た善思に告ぐ。色痛想行識は空にして本無所有なり。眼耳鼻口身心は空にして本無所有なり。地水火風は空にして本亦無形なり。因縁合成して猶ほ五事の其の屋宅を成するが如し。何を謂つて五となすや。一には曰く材木、二には曰く瓦草、三には曰く土壁、四には曰く人功、五には曰く泥水なり。是の五事を以て乃ち成じて屋を爲す。本各別の時は都て屋の名無し。因縁合成の身亦是くの如し。五陰の縁對便ち四大有り。因つて名づけて身と曰ふ。地水火風各縁來合して猶ほ屋の四柱四壁の如く皆因縁により會す。合成散壞するも皆處所無し。猶ほ夢中に屋宅、城郭、樹木、華實を見るが如し。流水田地犁中の諸種、其の五穀を下して各々時に隨つて生ず。人主として意を用ひて之を獲れば自ら給す。心神無明にして一切三界皆空に達せず。因つて倚望して求めて便ち意識を生ず。十二牽連往來周施して輪轉無際にして神識を勞し、五趣に沈迷して懈息の時無し。本空を解せざること夢の見る所の如し。覺に處を知らず、何ぞ歸趣する所あらんや。成正覺に至つて乃ち五趣を了す。本處所無し、獨歩して無畏なり。佛是に於て頌して曰く。

【色痛想識空、

本寂にして無所有なり。

界を了して自在を得。

所言上佛土。

諸法各々有形にして、

眼耳鼻口意。

地水火風火異る。

徧宣して部章無し。

其の境滅度の想なり。

本は亦た合會無し。

【一】以下五蘊についての説明をなす。

【二】壁、一本壁、塼か、城を造れる水、ほり、あな。

【三】十二牽連、十二因縁。新に十二緣起と云ひ、舊に十二因縁と云ひ、又單に因縁觀とも支佛觀とも云ふ。是は辟支佛の觀門である。衆生が三世に涉つて六道に輪廻する次第を説いたのである。その普通在來の解釋は次の如くである。一に無明(avidya)過去世の煩惱の煩惱を云ふ。過去世の煩惱に依つて作つた善惡の行業を云ふ。二に行(samskara)三に識(vijñāna)過去世の業に依つて受けを現世の受胎の

諸法は能く相應して、

不諍を自然と爲す。

諸法に所應無く。

是くの如く不可得にて、

諸法は不可得にて、

甚しい哉、永く無實にて、

諸法皆悅豫し、

若し法不可得ならば、

諸法に放逸無く。

自然に取る可きなく、

諸法知るべからず。

以て解するに志求する無く。

無爲無所樂、

用ひて無明業有り。

若し諸法を念すれば、

此は則ち眞實の言なり。

諸法を念ぜず、

斯を了して衆生無く、

一切の法は猶ほ幻の如く、

法無明を以ての故に、

無所諍を示現す。

究竟して形有る無し。

無作にして滅度せず。

常に諸數を離る。

亦過去有る無し。

乃ち本眞際を曰ふ。

亦悦喜すべからず。

彼も亦言説無し。

二は俱に無所有なり。

是を深妙の相と爲す。

無我にして自然なり。

自然號に至る。

彼も亦無所有なり。

因つて號して無爲と曰ふ。

究竟して不可見なり。

故に名づけて意念と曰ふ。

無住無所歸にして、

是を法中の法と號す。

其の幻は無所有なり。

因つて生死を宣説す。

【三元】眞際、眞言の邊際、即ち至極の義にて空平等の眞性を云ふ。

【四〇】無爲、梵語(Anankata)爲は造作の義。因縁の造作なきを無爲と云ひ、又生住異滅の四相の造作なきを無爲と云ふ。即ち眞理の異名である。此の無爲法に三種六種の別がある。三無爲の中の擇滅無爲、六無爲の内の眞如無爲是れ正しく聖智所證の眞理である。涅槃と云ひ、法性と云ひ、實相と云ひ、法界と云ふのは、皆無爲の異名である。

く、本從來する無く、去るに所至なし。猶ほ虚空の忽ち現じ、雲霧塵煙灰等の如し。虚空に託現して垢を爲す能はず。忽然として便ち滅すれば、虚空自然も亦所淨無し。有道無道の世俗の慧明普く自然を解いて乃ち所著無く、了し、所了無し。乃ち道慧無上正眞に應じ、恐畏する所無く、心懷懐せず。佛、是に於て頌して曰く。

諸法は無所有にて、

其の自然も虚無にして、

諸法は所淨無く、

以て諸法無なるを了し、

淨訟する所の諸法は、

以て法の虚無を曉り、

諸法は無所有にして、

本淨は得可からずして、

一切諸法を斷ず。

斯を永く毀壞と謂ひ、

諸法は滅する所無く、

亦多く所壞なし。

諸法は本虚無なるも、

設使無所得なるも、

諸法は無所有なるも、

所有・無所有は、

自然は虚にして不眞なり。

是の相便ち滅度なり。

斯も亦た無所有なり。

不有自然に達す。

是れ亦た無所有なり。

則ち不淨訟を解す。

本淨永く無形なり。

亦忘失する所無く、

故に曰つて明智となす。

亦無所壞を現す。

計つて亦起立なく、

法も亦不可得なり。

亦得て見るべからず。

方便して所有を現じ。

因縁は對より生ず。

經典を班宣し。



を得る勿れ。正真無極の大慧深遠の法を成ぜず。乃ち優奥と曰ふ。是れ即ち法に應じ斯は無得と曰ふ。衆生は邪に墮し、斯を行する能はず。三昧は利義を解すべきを用ひず。慧に境界無し。無慧亦然り。當に斯の際の智の所行に非ざるを了すべし。佛往宿世に是の深法を聞き、寂靜を解するを以て心に所著無し。若し斯の典を聞いて悅豫の喜びを得。曾て無數の佛の所造の行に於て功勳の徳を立て、心懷に受著して諷誦奉行し、以て他人を化して十方に宣布す。」と。

佛復た善思童子に告げたまはく。「菩薩當に是くの如き弘誓を修すべし。世人所在常に恐れを抱き、勤學して至真に當に懷懼すべからざるなり。難を畏れ退却して是の解を作すべし。宣布奉行して乃ち道慧に入る。善思前んで佛に白して言く。「唯然り信樂するなり。世俗の信ぜざる所にして獨り篤く窮る無し、志曠くして空の如く永く所慕なし。佛復た善思に語る。「若し菩薩大士深妙の法に志せば、斯の諸の正士は是の方便を以つて佛教に順如し。則ち道法に於て諍訟する所無し。不諍訟を以て一切諸法は則ち恐怖無し、皆斷すべからず。一切諸法は之を了するに本無なり。志所慕無く、便ち道慧に入る。若し一切法有なりと説くを聞くあらば、以て恐れを爲さず。若し説いて無なりと言はゞ、以て憊となさず。有無の法に於て以て増損せず。諸法の應と諸法の不應と、諸法の精進と諸法懈怠とを聞いて、是の一切十方の諸法を解す。慧の歸趣する處若し所趣無ければ、若し復た諸法有念諸法無念を解せざれば以て恐怖せず。諸法有爲諸法無爲。諸法有界諸法無界。諸法忻喜諸法無喜にても以て恐怖せず。一切諸法も亦有爲ならず、亦無爲ならず。一切諸法本所有有り、本所有無し、諸法寂然。諸法憤亂も以て恐怖せず。諸法顛倒、無有顛倒も、諸法虛無も眞實無爲も以て恐怖せず。諸法一切有戒無戒・有明無明・有名無名・有興無興・有畏無畏・有生無生・有死無死も、以て恐怖せず。諸法は有道、諸法は無道、諸法は有度、若くは不減度、諸法は是非も、以て恐怖せず、所以は何ぞ。諸法は皆空虛にして無不眞なり。猶ほ幻化・泡沫・芭蕉・影・響・野馬夢中所見の如

【四】 優奥、不明。

【三】 三昧、梵語(Samādhi) 舊稱三昧、三摩提、三摩帝。定、正受、調直受、正心行處、息慮凝心と譯す。心を一處に定めて動かないので定と云ひ、正しく所觀の法を受くるので受と云ひ、心に暴を調へ、心の曲れるを直し、心の散れるを定むれば、調直定と云ひ、心の行動を正して法に合せしむる依處であるので、正心行處と云ひ、緣慮を息止して心念を凝結するので息慮凝心と云ふ。

【六】 道慧、四智の第一で、一道を知る智である。(智度論二七) 憊、よわし、おそる、はづ。

【三】 空しくはかなきものゝ喩。

愚妄の所行は、  
佛道は思議無し、  
本淨にして有を計す。  
是の所有を念はず。

若し深妙の法を聞いて、  
受けて奉持する能はず。  
班宣する者あらざれば、

未だ曾つて是の如き經法を、  
法は逮得すべからず。  
所説も亦た獲るなし。

佛樹下に坐し、  
若し道慧を致さずんば、  
是に因りて道慧を成ず。  
則ち亦た所知なし。

佛道及び慧場、  
凡夫望想を懷き、  
亦た言説あるなし。

斯は則ち眞實教にして、  
佛の所演の法を慕ふ、  
佛の所宣は深妙にして、  
是れを魔の所行となす。

其の意覺甚深なり。  
若し定の佛所説の經典を、  
聞くを得るあるも、  
諸法の救護する所にして、

經の義味を解せずんば、  
菩薩甚だ勤苦して、  
道の安隱を求めず。  
是の二事無像なり。

斯に於いて道覺なく、  
意當さに斯を倚慕すべし。  
是の佛所説あり。  
顛倒の業に著し。

是は何ぞ此は云何にして、  
若し苦惱に遇ふあらば、  
甚だ深妙に著し、  
各大音を稱擧して、

「快し、佛は思議するなし。」と。

佛復た善思に告ぐ。『定の法を學ぶものは、當さに深典を習ふべし。志、雜句多辭無益の義に存する

是の想は顛倒と爲す。

若し法を解了すれば、

則ち望想を懐かず。

道明かに由るを得ず。

是を乃ち本淨と白ふ。

若し明達の者有つて、

善思當に斯を解すべし。

道乘を行ぜざるは、

若し人有つて斯を諍へば、

慧業を行ぜず。

用ひて此の行に順はされば、

諸法は無所法にして、

所有も亦虚無にして、

諸業業苦を計するは、

若し能く是の行を思へば、

有身を吾我と云ふ。

其れ吾我を有せざれば、

斯等は命を想はずんば、

虚無想は眞實なり。

吾我及び壽命は、

想有人を用ての故に。

各各異なる有る無し。

命無く人有る無し。

道無きも亦復た然り。

法は無所有の故に。

有を曉るは悉く本淨なり。

是を道の正道となす。

佛乘の救濟する所なり。

便ち道法を暢べず。

道の所護とならず。

佛法深くして解し難し。

本悉く形貌無く。

三界永く不安なり。

猶ほ虚空を行くが如し。

斯く乃ち心解脱す。

彼の法も亦虚無なり。

所知も無所有なり。

本未を究むるを得ず。

少しく明なるを迷惑となす。

本淨にして無所有なり。

【三】體性。物の實質を體とし、體の改まることなきを性とす。體即ち性である。

【三】以下四顛倒を論ず。四顛倒とは四種顛倒の妄見である。之に二種ある。一は生死の無常無樂無我無淨に於て常樂我淨を執するを凡夫四倒となし、一は涅槃の常樂我淨に於て無常無樂無我無淨を執するを二乘の四倒とする。初を有爲の四倒と云ひ後を無爲の四倒と云ふ。有爲の四倒を斷ずるを二乘とし、無爲の八倒を斷ずるを菩薩とする。

【三】本論、本來清淨なのを言ふ。



虚空は高き有る無く、

以て是の法を解了して、

亦復た下る有る無し。  
彼悉く無所畏なり。』

爾の時佛、善男子に告げたまはく、『仁者、體性は無所畏なりや。佛に白す、『しからざるなり。』世尊、佛復た重ねて問ふ。『卿密に畏れざるや。』白して曰く、『しからざるなり。』佛言く、『善い哉善い哉、仁は乃ち無畏にして恐懼を懷かず。』時に佛頌して曰く。

『有より畏を生じ、

假に無所有を現す。

若し能く是の忍を解せば、

爾乃ち佛道に近し。

人想に因つて、畏有り。

衆生本永く無なり。

若し能く解することは是くの如くなれば、

斯に於て無所住なり。

其は正覺を得ざれば、

無覺も亦是くの如し。

若し餘の所獲無きは、

此の儻無所畏なり。

若し能く斯を曉了すれば、

有無の際に住せず。

善思解することは是くの如くなれば、

是を佛道に由ると爲す。』

佛、善思に告げたまはく、『若し菩薩有り、疾く永く無上正眞の道に安逮して、最正覺を爲さんと欲せば、便ち當に有常想・安想・苦想・衆生想・人壽命想を消除すべし。分別解了して所著の行無く、悉く所倚無し。是の慕業を作せば無上正眞の道を速成するなり。佛往昔世に菩薩の業を行する時、是の行道を作し、以て便ち慧を懷來して能得の法無し。乃ち佛道と曰ふ。時に佛頌して曰く。

『常想を解すること猶ほ幻の如く、

計して常に生死を致す。

常と無常と虚無にして、

業を求むること無所有なり。

衆生安想有れば、

不安を了して自然なり。

須彌に作り。新に蘇迷盧、蘇迷盧に作る。山の名。一小世間の中心である。妙高、妙光、安明、善積、善高などと譯す。凡そ器世界の最下を風輪とし、其の上を水輪とし、其の上を金輪即ち地輪となし、其の上は即ち須彌山である。水に入ること八萬由旬、水を出ること八萬由旬、其の頂上を帝釋天の所居とし、其の半腹を四王天の所居とし、其の周圍に七香海七金山あり、其の第七金山の外に鹹海あつて其の外圍を鐵圍山と云ふ。依て九山八海と云ふ。瞻部洲等の四大洲は此の鹹海の四方に在るのである。

【元】自然、又自爾とも法爾任運天然とも云ふ。人爲の造作を離れて法の自性として自ら然るを云ふ。又は因なくして自ら然るを云ふ。後者は自然外道の邪執である。こゝでは天地の意に用ひたか。

【二〇】無所有、無所得のこと、空の異名である。無所得とは、無相の眞理を體して心中執着する所なく、分別する所なきを無所得と云ふ。即ち空慧である。無分別智である。

今斯の衆中に處りて、

善思の咨嗟する所、

亦本際無く、

其の辭無所畏にして、

善思は之を説く。

善思、偈を以て報へて曰く。

「吾以て身命を棄て、

志、正覺を貪ら<sup>じま</sup>ず。

欲に倚るが故に墮落し、

誰か炎に墮せざる者あらん。

是の諸佛の境界は

其の身に所危無く、

虚空及び人身、

法の如く不可得なり。

虚空、佛身を曉つて、

若し是の忍辱を成せば、

其の虚空より地に至るまで、

是れ自然に善思

其の虚空より地に至るまで、

生無く自然無く

快く此の妙句を宣ぶ。

説き名けて有無ならず。

世俗の觀ざる所。

敬歎せざる者なし。

云何ぞ本末を知らん。」

無罣礙の鎧を被り、

爾乃ち博聞と曰ふ。

合集して極めて殃禍あり。

唯世の導師を見るに

護世して持濟する所なり。

佛の尊道に住す。

二は俱に得可からず。

法壞れて所畏無く、

眞實に處所無し。

永く悉く無所畏なり。

自然は無所有なり。

達して悉く處所無し。

善思不可得にして。

虚寂にして所有無し。

虚寂にして所有無し。

有爲の四倒と云ひ、後を無爲の四倒と云ふ。有爲の四種を斷するを二乗とし、有無爲の八倒を斷するを菩薩とする。

【二五】 邪壽、詳しくは邪壽文陀尼子 (Purna-mahirayanī-pūtra) 即ち富樓那のこと。前出(二二)。

【二六】 阿難 (Ānanda)、阿難陀の略。譯、歡喜、慶喜、解飯玉の子、提婆達多 (Devadāsa) の弟。佛の從弟にして十大弟子の一。佛成道の夜に生れたと。佛壽五十五、阿難二十五歳の時、出家して佛に從佛すること二十五年、一切の佛法を受持した。佛弟子中多聞第一にて、佛滅後、摩訶迦葉 (Mahākāśyapa) 摩揭陀國の大石窟に於て三藏を結集した時、阿難をして經藏を集めしめた。

【二七】 阿須輪、阿須羅 (Asura) と同じ。阿修羅は又阿須羅に作る。舊稱、阿素羅、阿須倫、阿蘇羅、阿素羅。譯、無端、容貌醜陋の義。又、無酒、その果報には酒なき義。新稱、阿素洛、譯、非天。その果報勝れて天に似てゐるが、天に非らざる義。常に帝釋天 (Śakra) と戰鬪をなす神。六道の一。八部衆の一。

【二八】 須彌 (Sumeru)、又修迷樓、蘇彌樓、須彌樓。彌樓、

其の法に言辭無く、

託して假に言教を造る。」

爾の時賢者那耨文陀尼子、前んで佛に白して言く、「至つて未曾有なり。世尊よ、今是の善思童子は、深く智慧に入つて巍巍として乃ち爾り。宜ぶる所は獨歩にして衆の逮ばざる所なり。」佛言く、「是くの如し、是くの如し。那耨の言の如くにして異なる有る無きなり。」時に佛菩薩善思童子に告げ給はく、「卿何を以ての故に、無上正眞の道に遠んで最正覺を爲さんと欲するや。」善思答へて曰く、「聖尊の明す所なるが故に復た相問ふ。最大聖を用ひての故に弘誓を被る。大聖の至仁是の語を宣するに因り、我が身寂然として所爲有らず。以て弘誓を被つて悉く罣礙するなく、開化する所無し。爾は乃ち名づけて斯を深上句と曰ふ。衆生の無人なるも亦然り。其の斯れに惑はさず、是等を能く度し、至賢詳序深妙上句にて、斯の本眞際本未を曉了す。其れ無數を以て若干有る無く、深妙無上の章句を解達し、法を用ふるを以ての故に此の衆生を化す。其の行各々異つて誨へて衆生無し、設へば衆生無ければ彼一切空なり。無智の智慧にして衆生本淨なり。本淨に達するを以て各々異なる有る無し、以て斯の義を解すれば斯れ世の明智なり。唯然り聖尊、我斯を解するを蒙り、自ら正覺を成じて、衆の爲に說法せん。」

賢者阿難前んで佛に白して言く、「至つて未曾有なり、是の善思童子辨才乃ち深く入ることは是くの如きか。乃ち能く斯の應順妙章無所著の句を宣ぶ。天上世間凡庶衆人阿須輪聞かば必ず恐怖し、受學するを肯ぜざるべし。誰か當に此の深妙法を信樂すべき。往者宿世會て是の深遠の行を學び、爾乃ち信受す。」時に阿難、偈を以て歎じて曰く、

「猶ほ須彌の頂、

今此の善思の徳。

若し衆山の王は

速く微妙好を現するが如し。

業妙に在る、是くの如し。

大海に堅住するが如し。

大し、五百弟子授記品に於て未來に成佛して法明如來と號するを授記された。

【二】 仙人野、鹿野園の異名。鹿野園 (Sattapitthas) は鹿野園苑、仙人論處、仙人住處、仙人墮處、仙人鹿園、仙人園、仙園、鹿園、鹿鹿園、鹿林などと言ふ。中天竺波羅奈國 (Vārāṇasī) 今のベナレス (Benares) に在り、佛成道の後、始めて此處に來て、四諦の法を説き、憍陳如 (Kāśyapa) 等の五人の比丘を度した。古來仙人の始めて法を説く處であるので、仙人論處を名け、昔五百の仙人玉の姝女を見て歡心を發し、神通を失して此に墮墮するので、仙人墮處と名け、多く鹿の住する處なので、鹿林と名け、梵達多王、此の林を鹿に施與したので施鹿林と名け。印度宗教、文化の中心地である。

【三】 顛倒、無常を以て常となし、苦を以て樂となす如く、正しく本眞の事理に反する妄見を云ふ。無明の然らしむる所で、事理を倒に見るのである。四種を數へ、一は生死の無常無樂無我無淨に於て常樂我淨を執するを凡夫四倒となし、二は涅槃の常樂我淨に於て無常無樂無我無淨を執するを二乘の四倒とする。初めを



「童子卿云何にして、

是の處深くして速び難し。」

仁、生來久如にして、

聲聞と談語して、

處々に能く分別して、

王路に立ち巍巍として、

時に善思童子、偈を以て答へて曰く、

惟仁は所生を問ふ。

諸法は無所起にして、

其の法は無所生にして、

是を本清淨と曰ふ。

諸法は本清淨にして、

斯の無明の慢を以て、

仙人野に在つて

多く聲聞の業に存し、

法音の響を宣暢して、

權來の聖慧を以て、

有生は乃ち終に没し、

顛倒の業に處在すること、

生を以て老死有り、

斯の法を學ばんと欲するや。」

明者の迷惑する所なり。

智慧獨り勇猛にして、

卒對の慧無畏なり。

所住の像紫金なり。

猶ほ虚空の月盛なるが如し。」

所生は無所生にして、

誰か當に復た生ずべき者ぞ。

自然無所有なり。

無法無所得なり。

未だ會て能く是を得ず。

佛故さら是の法説き、

第一に此の輪を轉ず。

係志、虚空に在り。

衆の爲に多辨才なり。

審の諦を宣説す。

斯の愚之行無し。

邪辯の所説の如し。

是を方俗の言と爲す。

いて出家した。智慧第一にて、法華の法悅段に於て第一に唯獨り、圓乘を開悟し、回心向大した。

【三】 邪辯文陀施尼子 (Pura-ma-mātrīyānīputra) 富樓那尊者の母を邪辯文陀尼と云ひ、富樓那を邪辯文陀弗又は邪辯文陀尼子と云ふ。弗 (Phu) は子の義である。未來成佛華光如來の記別を受けた。法子に擧げられたが、舍利弗目連の二大弟子は共に、佛が諸比丘に却後三月當に涅槃に入るべしと言ふを聞いて、眼に世尊の入滅を見るに忍びず、佛に告げて已に滅度を取つたと。目連は宿業の爲に執杖外道に打殺された。

富樓那又は富刺拳麗 (Chirana) は滿と譯し、名である。彌多羅尼又は梅咀行尼 (Maitrayani) は慈と譯し、母の姓である。富多羅又は弗阻羅 (Pura) は子と譯す。この「滿」なる人は慈氏の子なので譯語を擧げて子と云ひ、梵語を擧げて弗阻羅と云ふ。母の姓に従つて名となす印度の風習がある。總名を譯して滿慈子、滿願子、滿祝子、滿見子など云ふ。

釋尊の十大弟子中説法第一の阿羅漢である。初め出家して阿羅漢果を證し、後に法華の因緣周の説法を聞いて向小向

其の際相は虚空にして、

善思、佛の爲に偈を説いて問ふて言く、

「甚だしい哉眞正處。

一切衆生をして、

時に善思童子、前んで佛に白して言く、「世尊よ、惑みを垂れて斯の蓮花を受けたまへ。」と。佛

便ち之を受く。善思童子口に自ら發言す。「是の功德を以て無上正眞の道を致し、最正覺を成じ、諸

の衆生の爲に經典を頒宣して、凡夫の法に至るを得ざるをして道法に至らざらしむ。」と。爾時賢者

舍利弗も亦會中に在つて善思童子に謂ふ。「善思の心の所趣に於て云如。成ずる所の正覺の法は何

の所像か。衆生の爲に之を班宣せんと欲するや。」と。善思、誦を以て答へ、偈を説いて言く。

「佛志は無所得なり。

當に斯の正覺を成ずべし。

彼、向に説く所無く。

大智當に斯を解すべし。

過去の諸正覺は、

亦諸法を得ず。

計求して法界なく、

是は則ち本際と爲す。

假に號して世界と曰ふ。

亦諸の所想無く、

爾時邪釋文陀尼子、善思童子の爲に是の偈を説いて言く、

虚空も亦た無相なり。」

其の處立なること無上なり。

住して今導師の如くならしむ。」

諸の聲聞も亦た然り。

衆生の爲に班宣す。

亦復た所致無し。

本淨明なることはくの如し。

護世の無上尊なり。

導世の因滅土し、

亦衆生界なし。

世俗の暢べざる所なり。

人倚つて相名號し、

便ち異業有る無し。」と。

つて、一類の衆生、此の法に因て遂に一切智地に到るを得る。」と。

【9】 人非人、眞陀羅 (Kinnara) の義譯である。同義。

【10】 本際、窮極の始修を云ふ。

【11】 舍利弗 (Śāriputra) 舍利弗多、舍利弗羅、舍利子に作り、新に舍利弗多羅、舍利富多羅、舍利補怛羅と云ふ。

舍利 (Śāli) は母の名。弗又は弗多是弗多羅 (Pāra) の略。

舍利女の子であるので、舍利弗、舍利子と云ふ。又父の名を優婆提舍と言ひ、父に従つて優婆提舍 (Upasāya) と稱する。母名の舍利に就いて古來二釋あり、一は鳥の名とし、

秋露、鷲鷲、鳩鷲鷲、百舌鳥と譯す。或ひは母の眼彼の鳥に似、或ひは才辯鷲鷲の如くなので、かく言ふと。二に舍利は身又は珠と譯す。母の身形好妙なので、身と名け、母の聰明眼珠に在る故に珠と名けると。何れにするも母は聰明なりし如し。舍利弗は目連と共に佛弟子中最も重要な一人である。その出家の因縁は、もと外道であつたが、師の死に逢ひ、茫々然として道を求めんとして行く途上、馬勝比丘の安序として歩むのを見て、比丘より因縁所生法の偈を聞

以て佛を欺す。

「聖慧は尊くして且住す。

衆生を哀れむを用ての故に。

是に於て世尊、善思の爲に偈を説いて言く、

「以て眞本際に住す。

彼の際無所有にして、

善思童子、偈を以て佛に問ふ。

「云何が本際に住するや。

無明の倚際。

時に佛復た偈を以て善思に告げて曰く、

「其の際は眞本際なり。

如し審に本際に住すれば、

如し際は眞本際ならば、

猶ほ眞本際を了する如く、

善思童子、復た偈を以て佛に白して言く、

「無際は何の際ぞ。

何の權方便を以て、

是に於て世尊、善思を親見して心に了解道無處を暢べんと欲し、善思童子に告ぐるに偈を以て報

じて曰く、

「無際は待つべからず。

人中の雄愍待す。

唯斯の水漿を受く。」

世俗の達せざる所なり。

是を本際の相と爲す。」

眞本際の化導なり。

何を謂つて虚無を立てん。」

是の際は則ち如來なり。

了了として住することはくの如し。

斯は則ち如來際なり。

童子住するも亦然り。」

何所か是れ際相なる。

名けて曰ふて本際となすや。」

乃ち眞本際と曰ふ。

と云ふ。但し常に梵天と云ふのは大梵天王を指すのである。名を尸棄(Śarīra)と云ひ、元婆羅門教の主要神であつたが、佛敎の中の護神と化され、深く正法を信じ、佛の出世毎に必ず最初に來り、轉法輪を讀ひ、又常に佛の右邊に在つて手に白拂を持つ、但し、外道所説の梵天は大に之と異なる。

【二六】喜悅又は恐怖の形容である。

【二七】蘭一本、欄とす。蘭は兵器を架くる所、かたなかけやりかけ。又欄と通ず。てすり、しきり。

【二八】魅、異氣、怪精、ものけ、ばけもの。反足、不明。

【二九】眞陀羅(Kinnara)、緊那羅、緊捺羅、緊陀羅、甄陀羅、舊譯、人非人、疑神、新譯歌神。即ち樂神の名。八部衆の一である。人に似て頭に角あり、人を見ても、人か人にあらざるかと言ふ。故に之に名けた。夫の伎神であつて、小にて乾闥婆(Gandharva)に及ばなす。

摩休勒(Mahoraga)、莫呼洛伽舊に休勒、摩騰羅伽、新に莫呼洛迦、摩騰羅訶、八部衆の一。大蟒神である。胎藏界第三院の一尊にして釋迦如來の眷屬である。而して是は大日如來普門示現の一法門身であ



衆庶佛後に従ふは

毘傷の世疑無し。

今右足の指を以て。

今日城人を觀るに

展轉して相示談し、

德光沈吟する無く、

今右足の指を以て

男女大小を察して

又手して自歸し、

大導猶豫無く、

今右足の指を以て

諸天人間の華

華を散じて香を燒き、

大勇は疑結無し、

化に因つて大衆を悦ばず、

爾時善思の妻室、是の言を説くを聞いて心中恐を抱き、衣毛爲めに堅ち、身内和涼す。蘭邊に住して心に自ら念言すらく、「是れ何等の神ぞ。天龍鬼魅反足か、一九九眞陀羅摩休勒人非人とせんや。口に人語を宣べて其處所に在り、不動不搖にして敢て移轉せず。」と。時に佛善思童子の所居里中に往詣して、舍邊に在りて立つて門前に在り。善思童子佛世尊を見て、即ち樓閣を下り、往いて自ら奉迎せんと欲す。心中喜悅して自ら勝ゆる能はず。已に樓下に投じて佛の聖旨を承り、虚空に住して偈を

天の梵王に侍するが如し。

尊人聖導師

城門の闕に接んず。

各々慈向して恨まず。

父母子孫の如し。

福威をもつて自ら莊嚴す。

城門の闕に安んず。

各々若干の華を執る。

歡悅して遙に華を散す。

德華にて身を嚴飾す。

城門の闕に接んず。

虚空に遍布し、

其の香意悦すべし。

維耶離に入らんと欲す。

最勝の故に此に到る。」と。

又維摩羅詰、毘摩羅詰、維摩羅、新譯、無垢稱。佛の在

毘耶離城の居士であつた。妙喜國より此に化生して身を在俗に委し、釋迦の教化を輔けた。法身の居士である。佛、毘耶離城の菴摩羅闍、在つて城中五百の長者子佛所に詣て法を説くを請ふた時、彼は故らに病を現じて往かず。爲ん佛をして諸の比丘菩薩を遣して其の病床を問はしめんとして以て方等時の禪訶を成じた法であるので、其の經を維摩經と名ける。

【一】大雄 (Mahavira)、佛名號の一。又耆那教の祖に多くこの名を使ふ。

【二】闕、門扉を止むる中央の樞、しきみ、くひ。

【三】鬻、響に同じ。ひびく、ひびき。

【四】芬蘭、芬、かをり、と訓じ、好き香氣、か、にほひ。又、德名。葩、はな(華)。

【五】梵王、梵天と同じ。新に婆羅賀慶天 (Brahmagya) と云ふ。色界の初禪天である。此天は欲界の淫欲を離れ、寂靜清淨であるので梵天と云ふ。此中三天あり。第一を梵衆天 (Brahmapurohita)、第二を梵輔天 (Brahmapurohita)、第三を大梵天 (Mahabrahman) と云ふ。

古より未だ會て

大雄來ること疑はず。

今右足の指を擧げて。

我今日佛を覩れば、

衆妓鼓せずして鳴り、

三千の聖は疑無く、

必ず右足の指を以て

譬へば大鉢有るが如し、

則ち調和の音を聞いて、

人中の天疑無く。

佛は世間を開導して、

神通は衆生を化し、

若干色（四天王は）の芬葩

大龍疑ふ所無く、

今右足の指を以て

普く虚空を照して

日明かにして爲に以て蔽ひ、

一切の尊疑ひ無く

今右足の指を以て

猶ほ諸天人の

是くの如き諸妙嚮（三摩耶）を聞かず。

衆生を導利せんと欲すればなり。

以て門闥に安著す。

猶ほ寶瓔珞身にある如く。

微妙にて心を悦ばすべし。

威徳にて淨莊嚴して、

城門の闥を踏む。

著地河水至り、

其の土地に周遍す。

大聖は尊光を延ぶ。

定めて來つて城門に入る。

猶ほ樹下の茂盛するが如し。

流布して極めて美香なり。

華願本を建立す、

城門闥に按んず。

天地に周遍す。

永く復た光を現ぜず。

威大の晃曜を現す。

城門の闥に按んず。

虚空の中に住するが如し。

在つて三達と云ふ。天眼、宿命、漏盡である。天眼は未來の生死因果を知り、宿命は過去の生死因果を知り、漏盡は現在の煩惱を知りて之を斷盡する。之を知ること明らかなるを明と言ひ、之を知ること窮盡するのを達と云ふ。

【七】三處、判然とせず。普通處とは三科の一にて、梵に阿耶怛那（Ayanana）と言ひ、舊に入と譯し、新に處と譯す。根と境とは心所の作用を生ずる所の處であるので、處と云ひ、根と境と相渉入するので入と言ふ。六根六境の十二法があるので、十二處又は十二入と云ふ。

【八】三塗、四解脫經の説。塗は途の義。一に火塗、地獄趣の猛火に燒かれる處。二に血塗、畜生趣の互に相食む處。三に刀塗、餓鬼趣の刀劍杖を以て逼迫せられる處。又、既に地獄餓鬼畜生の三を言ふ。

三惡趣三惡道と言ふに同じ。【九】分衛（Pindavata）、或ひは乞食と翻じ、或ひは團墮と翻す。乞食とは比丘行いて食を乞ふのである。團墮とは乞食して得た食に就いて釋す。

西竺の法多く食を團々に搏つて鉢の中に墮疊するを以てかく言ふ。

【10】維摩詰（Vimalakirti）

# 佛說大方等頂王經

一名維摩詰子問經

西晋月氏三藏竺法護譯

聞く是くの如し。一時佛維耶離奈氏の樹園に遊び。大比丘衆と俱なりき。比丘八百菩薩一萬にて一切の大聖は神通已に達し、悉く總持を得て辨才無礙なり。三世の慧を攝して三達智に至り。空無相の願は中に證を取らず。大慈を行じて無蓋の哀を奉じ。吾我を計さずして已に彼岸を度り、三世に通じて去來今無し。一切法は幻化の夢影・響・野馬・芭蕉・水泡の聚沫の如し。曉る三處は本所無なしと解す。緣より對生して有利無利、若しくは擧、若しくは誘、得名、失譽も、若しくは苦、若しくは樂過世間の所有の法を以つて、權方便によつて、三塗を周旋し、已に欲界・色界・無色界を超越。道義を解暢して一切を救度す。諸天來侍して深法を諮受し、愚心を開發して悉く道門に入る。爾時世尊、明旦に衣を著け、鉢を持つて、維耶離城に入つて分衛し、維摩詰の舍に至る。時に維摩詰に子有り、名を善思と曰ふ。明旦沐浴して香を以て身に塗り、體に新衣を著して手に蓮華を執り、妻室と俱に樓閣に上り、作妓を觀て相娛しむ。宿命徳本の感應する所なり。遙に佛來つて聖聚と俱に城に入つて、分衛するを見て、大瑞變現じ、偈を以て妻に語り、所説の雅頌を以て佛の功徳を歌ふ。

「斯の和雅の音を聞くに

衆妓其の處に有り。

大雄來ること疑はず。

必ず足の右指を以て

百鳥・諸禽獸

同時に今俱に作す。

速に樓閣の上に徹す。

護世光輝を演ぶ。

城門の闕を踏み、

哀悲の和聲を發す。」

【一】 "evam manya bhutam  
ekasmin samaye" の譯。  
以下の數行と共に、經典、殊  
に大乘經典の常例的文章であ  
る。

【二】 維耶離 (Vāśālī) 毘舍  
離、毘耶離、鞞舍離等に作る。  
新に吠舍釐と云ふ。國の名、  
譯、廣嚴。中印度である。維  
摩居士が此の國に住した。又  
佛滅一百年、七百賢聖第二の  
結集を爲した處である。此國  
内の種族を離車とも跋闍子と  
も言ふ。此の國城の鼻祖を離  
車と名け、當時三時城郭を開  
闢莊嚴したので毘舍離と名け  
ることが善見律中に出でてゐ  
る。

【三】 奈氏樹園、梵語、菴羅  
(Āmra) 舊に奈と譯す。毘  
舍離の富める遊女奈女が所有  
せし菴羅國であるので、かく  
いふ。佛好んで此處に宿泊さ  
れた。維摩經の説處である。

【四】 總持、梵語、陀羅尼 (Dhāra  
ṇī) の譯である。善を持して  
失はず、惡を持して起らしめ  
ざる義である。念と定と慧を  
體とする。菩薩所修の念定慧  
に此の功徳を持つする。

【五】 三世慧、三世智と同じ  
きか。然らば如來十智の一。  
三世を通達する佛智である。  
【六】 三達智、三達とは羅漢  
に在つて三明と云ふのを佛に



修道の徳目・方法を大乘的に説述したものであつて、無所有・無所生・虚空、心本清淨等の思想を強調してゐる。而して維摩經類の常として、問答體となり、佛直

昭和八年二月十日

弟子舍利弗・富維那・阿難等は小乗の徒として卑下され、善思童子を高揚讃嘆する具に資されてゐる。而して童子が乳母を要する兒童なる點、飽く迄實大乘的、維

佛生二四九八年十二月六日

譯者 平等通 昭識

摩經類的である。教理史上、維摩經に附隨し、附帶して、之を補足して重要な地位を占む可きものと思ふ。

法有界・諸法無界・諸法忻喜・諸法無喜にも、一切諸法本所有有り無し、諸法寂然諸法憤亂にも、諸法顛倒・無有顛倒・諸法虛無・眞實無爲にも、諸法一切有戒無戒・有明無明・有名無名・有興無興・有畏無畏・有生無生・有死無死も、諸法有道無道・諸法有度・不滅度・諸法は是非も恐怖しない。諸法は空虚にて無不眞である故である。次いで佛は諸法は無所有であつて、自然は虚無であることを説いてゐる。又色痛想行識・眼耳鼻口身心・地水火風は空で、本無所有である。之等は因縁によつて會するが、處所が無い。十二牽連往來周旋して神識を勞し、五趣に沈迷する。佛は生及び病死を捨すれば無所畏であるとし、之を了する善思に勧めてゐる。善思は六十二見を除き、生死の元を絶つるを答へてゐる。進んで佛は定・慈・精進・忍辱等の波羅蜜を奉行し、道心を顯發し、如來十種の力を成就すると述べ、

顛倒の業に住する故に有所畏を得、是を覺つて無上乘を行ずる、是が大乗の最無極であるとする。第一慈・好布施、第一忍・第一精進、第一定意を説明し、再び色・痛・想・行・識も空、四大・五陰・十八諸種の三界も空であり、菩薩は是の本無きを曉り、三界を獨歩し、三毒を去り、心に所著が無く、生死に在つて最正覺を成じ、一切を度脱すると述べる。無明を用ひての故に三界馳逸し轉輪無際であり、三毒五陰六裏の客塵の所蔽があるが、菩薩は自然の故に心本清淨であつて、虚空に住して垢を爲す能はない。この深經を聞き讀持諷誦すれば、十方諸佛の世界に到り、十八不共諸佛の法を成ずる。次いで三脱門・無常苦空非身・四無畏・十二部經・十八不共諸佛法・十善・十力・三達智・六度無極・六通を行じ或ひは求め修すべきを説く。善思の無所從生法忍を逮得したのに對し、佛は忻然大悅し、阿難にその理由

を問はれ、善思の成佛を豫言し、舍利弗又讚じてゐる。  
佛はこの經を頂王と名けると舍利弗に告げ、山王須彌山の如く、是の經の慧を解すれば、四無畏無上大道を得、生老病死無く、三界の厄を度すと述べ、この經を奉持すれば、無極の世護を成就し、成佛するを得ると述べる。以下長々しく大乘的に聞法傳法の功德を述べ、この法を學べば、世俗を饒益し、法味を知り、正眞に至り、この妙典を説けば、所益不可思議であつて、慈を蒙り、福計るべからず、無邊無際であり、頂王經の班宣が所宣の第一、如來の供養が第一奉事・第一供養・第一禮敬であるとし、「この經典を十方に宣布し、一切に受持して正法を奉行し、無極の大慧を同學に開示して六度無極を習行し、三界を救へ」と善思に告げてゐる。  
之を要するに、本經は佛が善思童子に

て譯出された。

## 二、結構と表現

大方等頂王經は維耶離 (Varāṇasī) 奈氏の樹園を會處とし、比丘八百、菩薩一萬を會衆としてゐる。然し、事件は善思童子の宅に於て發展してゐる。

結構は散文に偈頌を交へ、大體善思童子を中心にしての佛の説法、佛弟子と善思童子との問答體となつてゐる。主要な思想は殆んど偈文によつて表現されてゐる。散文の次に偈文が現れる時は、多く散文の意味を反復高潮敷延してゐる場合が多い。文體は簡潔であつて、文意は必ずしも明快とは言へないが、難澁ではない。過半は偈文より成り、一句五言より成り、佛・佛弟子・善思の主な言説は殆んど、之である。

大方等頂王經は卷又は品に分けてゐない。又流通品を有しないが、この經宣布

●功德を卷末に述べ、頂王經の名の依つて來る處を述べてゐる。

## 三、梗概と思想・地位

全經は善思の宅に於ける佛・佛弟子と居士善思との對話になつてゐる。善思の讚辭に對し、佛は眞本際に住し、無所有とし、則ち如來とし、舍利弗の正覺の所像は如何との間に對し本際を論說する。

那耨文陀尼子 (Pāramitayāni-putra) が至難の法を學ぶ理由を問ふ、所生を訊すに對し、所生は無所生、諸法は無所起、自然は無所有であつて、之を本清淨と曰ふと述べる。佛に菩提を求める理由を問はれ、本眞際本末を曉了し、衆生本淨なるを解して、自ら正覺を成じて衆生の爲に説法せん爲であると、大乘菩薩の見解を吐露する。阿難之を讚嘆する。善思は報へて、正覺を食らず、諸佛の境界は護世して持濟する所で、虚空及び人身は

## 二

不可得で、忍辱を成ずれば無所畏である」と述べ、佛の間に體性は無所長にあらざるとし、佛は人想に因つて有があるので、衆生は永く無であつて、斯く解せば無所住であると褒め、無上正眞の道に安速して最正覺を爲さんと欲せば、有常想・安想・苦想・衆生想・人壽命想を消除すべしと述べてゐる。佛は常想・安想を顛倒となし、有を曉るを本淨とし、所有・有身の法は虚無であつて、吾我及び壽命は本淨にて無所有である。佛道は思議なく、所有を念はず、佛は道慧を成じ、眞實教は深妙にて覺は甚深である。菩薩の勤苦して道の安穩を求める所以である。佛は善意に是の法を學ぶものは深典を習ふをすゝめ、之を諷誦奉行し、他人を化して十方に宣布するの弘誓を修すべしとなし、方便を以て佛教に順如し、道法に於て諍訟する所無く、不諍訟を以て一切諸法は恐怖が無い、諸法有爲・諸法無爲・諸



# 佛說大方等頂王經解題

佛說大方等頂王經 (Mahāvaiṣṭya-m-  
ūddharjā-sūtra, Vimālakīrti-nirdeśa,  
p. 143) は中大の經であつて、維摩詰子  
善思の思想を中心として記述した大乘經  
典である。竺法護 (Dharmarakṣa) の譯  
に成り、大方等 (Mahāvaiṣṭya) とは大  
方廣とも言ひ、大乘經の通名であつて、  
所説の義理方正平等なを云ふ。方等部  
中で最上なのを大方等と言ふのである。

## 一、作者並に漢譯者

### 並に異譯

作者は不明である。佛説とあるが、多  
くの大乗經典がさうであるやうに、歴史  
的には佛説ではない。維摩經の思想系統  
に屬する大乘思想家の手に成つたもので  
あることは確かである。

漢譯者は西晋(紀元二六五—三二六)の

竺法護 (Dharmarakṣa) である。竺法護は  
梵名を竺曇摩羅察(又は刹 Dharmarakṣa)  
と云ひ、法護はその漢譯である。沙門で  
あつて、祖先は代々燉煌に住んだ。又は  
月支の人の子孫であつた爲、その姓を月

支の第二番目の文字に因んで支と言つ  
た。然し、後に外國沙門竺高座の弟子と  
なつてから、天竺の第二字の竺の字を取  
つた。經藏では常にこの名を用ひてゐる。  
彼は師と共に西國に赴いて、三十六の外

國語又は方言に熟達した。紀元二六六年  
に洛陽に來て、其處で紀元三一三年又は  
三一七年まで譯經に従つて、七十八歳で  
死んだ。彼は方等 (Vaiṣṭya) 部の數經  
を譯した最初の人である。之によつて考  
へれば、彼は進歩的の佛教思想の所有者  
と考へられる。その譯經は開元錄では百

七十五部三百五十四卷であるが、紀元七  
三〇年には九十一部二百八卷残つてゐた  
と言ふ。その内には添品妙法蓮華經 (Sa-  
ddharma-puṅḍarīka-sūtra)・普曜經 (La-  
hāvistara)・賢劫經・佛説生經・瑠璃王經  
等を含んでゐる。譯經家として相當活躍  
した沙門と言へる。

譯出年代は西晋二六五年より三一六年  
の間である。従つて製作年代も之れ以前  
である筈であり、この經所有の大乗思想  
は紀元前後の成立ではあり得ないから、  
紀元二、三世紀恐らく三世紀の成立であ  
らう。

梁、優禪尼國王王子月婆首那 (Upaśyana)  
が紀元五〇二年より五五七年に譯した  
大乘頂王經 (T. 110) は略々大方等頂王  
經と一致し、この後世に成る異譯である。  
更に後世に隋(紀元五八九年より六一八  
年)の闍那崛多 (Jatagupta) によつて紀  
元五九一年に善思童子經 (T. 181) とし

は「一切衆生斷五逆罪・淨除業障・報障・煩惱障・修習慈心與彌勒共行」と名く。是の如く受持せよ、亦  
「一切衆生得聞彌勒佛名必免五濁世不墮惡道經」と名く。是の如く受持せよ。亦「破惡口業心如蓮  
花定見彌勒佛經」と名く。是の如く受持せよ。亦「慈心不殺不食肉經」と名く。是の如く受持せよ。  
亦「釋迦牟尼佛以衣爲信經」と名く。是の如く受持せよ。亦「若有聞佛名決定得免八難經」と名く。是  
の如く受持せよ。亦「彌勒成佛經」と名く。是の如く受持せよ。佛、舍利弗に告げたまはく、「佛滅度  
の後比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・天龍八部・鬼神等、此の經を聞くを得て受持し、讀誦し、禮拜し、  
供養し、法師を恭敬して一切の業障・報障・煩惱障を破すれば、彌勒及び賢劫の千佛を見るを得て、  
三種の菩提は願に隨つて成就し、女人の身を受けず、正見にして出家して大解脱を得。」是の語を説  
き已る。時に諸大衆、佛の所説を聞いて皆大いに歡喜して佛を禮して退けり。」

## 佛說彌勒大成佛經終

を遠<sup>とほ</sup>げ、垢を離れ、諸法中に於て諸法を受けず、阿羅漢を得、また無數の天人は菩提心を發せり。  
「迦葉」、佛を繞ること三匝、還つて空より下り、佛の爲に禮を爲して、有爲法は皆悉く無常なることを説き、佛を辭して退いて耆闍崛山の本所住處に還り、火を出して般涅槃に入る。身の舍利を收めて山頂に塔を起す。彌勒佛歎じて言はく、「大迦葉比丘は是れ釋迦牟尼佛の大衆中に於て常に讚歎せる所。頭陀第一にして禪定解脫三昧に通達せり、是の人大神力ありと雖も而も<sup>四三</sup>高心なく、能く衆生をして大歡喜を得しめ、常に下賤貧苦の衆生を感れむ。」彌勒佛は大迦葉の骨身を歎じて言はく、「善<sup>四四</sup>い哉、大神德釋師子の大弟子大迦葉は彼の惡世に於て能く其の心を修す。」と。爾の時摩訶迦葉の骨身、即ち偈を説いて曰く、

頭陀は是寶藏なり。

持戒は甘露となす。

能く頭陀を行する者は、

必ず不死の地に至る。

持戒は生天と

及び涅槃の樂を得。

此の偈を説き已つて、瑠璃水の如く還つて塔中に入る。爾の時説法の處廣さ八十由旬、長さ百由旬、其の中の人衆、坐せるも立てるも、近きも遠きも、各々佛其の前にあつて獨りわが爲に説法したまふと見る。彌勒佛、世に住すること六萬億歲、衆生を憐愍するが故に法眼を得しむ。滅度の後、諸<sup>四五</sup>天・世人・佛身を闡維す。時に轉輪王、舍利を收取して、四天下に於て各八萬四千の塔を起す。正法世に住すること六萬歲、像法二萬歲なり。汝等宜しく勤めて精進を加へ、清淨心を發して諸の善業を起すべし。しからは世間の燈明・彌勒・佛の身を見るを得ること、必ず疑なきなり。」と。

佛、語を説き已る。尊者舍利弗、尊者阿難即ち坐より立つて佛の爲に禮を作し、胡跪合掌して佛に白して言はく、「世尊よ、何と斯の經を名づけ、云何に之を奉持すべきや」佛、阿難に告げたまはく、「汝好く憶持して、普<sup>四六</sup>く天人の爲に分別して演説し、最後の斷法の人と作<sup>四七</sup>す莫<sup>四八</sup>れ。此の法の要

【三】 慢心の意なり。

【四三】 大神德ある釋迦佛。師子は佛の敬稱なり。

【四五】 又茶毘といふ。火葬なり。



汚穢にして堪ゆべからず

智慧は鍊金の如し。

生死の苦餘すなし。

常に頭陀の事を行じて

苦行は與等きものなし。

遺棄して我が所に至らしむ。

合掌恭敬して禮すべし。

是の偈を説き已つて諸の比丘に告ぐ。『釋迦牟尼世尊、五濁惡世に於て衆生を教化したまへる千二百五十の弟子中にて頭陀第一なり。身體金色にして、金色の婦を捨て、出家し道を學ぶ。晝夜精進して、<sup>四〇</sup>頭然を救ふが如し。貧苦下賤の衆生を慈愍して恒に福を以て之を度し、法の世に住まる。摩訶迦葉とは此の人はなり。』此の語を説き已つて一切大衆悉く爲に禮をなす。

爾の時彌勒、釋迦牟尼佛の僧伽梨を持し右手を覆ふに漏からず、纔に兩指を覆ふのみなり。復た左手を覆ふに亦兩指を掩ふのみなり。諸人怪しみ歎じ先佛の卑小なるこれ皆衆生貪濁憍慢の致す所に由るのみとなし、摩訶迦葉に告げて言はく、『汝神足を現じて、過去佛所有の經法を説くべし』と。爾の時摩訶迦葉、身を虚空に踊らして十八變をなす。或は大身を現じて虚空中に滿たし、大より復た小を現じて、<sup>四一</sup>葶藶子の如し。小より復た大を現す。身上より水を出し、身下より火を出す。地を履むこと水の如く、水を履むこと地の如し。空中に坐臥して身陷墜せず、東に踊れば西に没し、西に踊れば東に没す。南に踊れば北に没し、北に踊れば南に没す。邊に踊れば中に没し、中に踊れば邊に没す、上に踊れば下に没し、下に踊れば上に没す。虚空中に於て瑠璃窟を化作し、佛の神力を承けて梵音聲を以て釋迦牟尼佛の十二部經を説く。大衆聞き已つて未曾有と怪しみ、八十億人、<sup>四二</sup>塵

そのごとく此の人短小なりと雖も、

煩惱の習久しく盡きて

法を護るが故に此に住まる。

天人中の最勝なり。

牟尼・兩足尊

汝等當に一心に

【四〇】 頭髮の燃ゆるを防ぐが如く一心を精進するの意なり。

【四一】 いぬなづな。その種は寧し微細なるものか。

【四二】 塵垢を遠隔す、世俗の煩を遠離して道を木むるなり。

願くは我等羣萌の類の爲に

無惱の釋迦師の

我等應に過佛の、

遺法を聞くを得ば

惡業を

諸の弟子を將いて彼の山に詣り、

頭陀第一の大弟子を供養し、

著る所の袈裟を見、

前身の濁惡劫の不善

懺悔して清淨を得べし。

爾の時彌勒佛、娑婆世界の前身剛強の衆生及び諸大弟子と俱に香閼嶺山に往く、山下に至り已つ

て、安詳に徐歩して三五狼山跡に登る。山頂に到り已つて、足の大指を擧げて山根を躡めば、是の時

大地は十八相に動ず。既に山頂に至り、彌勒は手の兩向を以て山を擧ぐ四五こと轉輪王の大城門を開く

が如くす。爾の時梵王は天の香油を以て摩訶迦葉の頂に灌ぐ。油を身に灌ぎ已つて、大捷四五椎を擧ち、

大法三五蟲を吹けば、摩訶迦葉即ち滅盡定より覺めて、衣服を齊整し、偏に右肩を祖ぎ、右膝を地に

著け、長跪合掌して釋迦牟尼佛の三六僧伽黎三六を持し、彌勒に授與して是の言をなす。『大師釋迦牟尼

多陀阿伽度阿羅訶三藐三佛陀、涅槃に臨む時、此の法衣を以て我に付囑して世尊に奉らせしむ。』

と。時に諸の大衆各々佛に白して言はく、『云何ぞ今日此の山頂の上に三九人頭の蟲あつて、短小醜陋

にして沙門の服を著け、而も能く世尊を禮拜し、恭敬するや』と。時に彌勒佛諸大弟子を訶して、

此の人を輕んずる莫れ』と。いひ、偈を説いて曰く、

孔雀は好き色あれども

白象は無量の力あれど、

そを撮つて食すること塵土の如し。

金翅鳥の搏つ所となる。

肥へて白く端正にして好しと雖も、

鷹・鵝鶴の食する所なり。

師子の子の小なるものと雖も

大龍は身無量なれども、

人身は長大にして

七寶の瓶も羨を盛れば

【三五】 又鷄足山ともいふ。釋尊の弟子大迦葉が入定せると傳ふる山。

【三六】 法螺に同じ。

【三七】 大衣。托鉢の際の衣なり。

【三八】 Tatigata, Arhan, Aniyasambuddha, 如來、阿羅漢(無所着)、等正覺(正通知)、いづれも佛の十號の一なり。

【三九】 彌勒出世の時代には經に説きたるが如く、生類はすべて現在の數倍大なるが故に、迦葉を見て虫の如く思へるなり。

無爲にして足跡なし。

慈心の大導師を禮す。

長夜に生死を受けて

及び女人身とならん。

苦を抜て安樂を施し、

女人は詔曲なく、

大涅槃を具足せん。

藥を施さんが故に出世す。

常に一切の樂を施して、

忍心、大地の如かりき。

忍辱の大導師を禮す。

慈悲の大丈夫を禮す。

能く衆生の厄を抜き、

世間に比あることなし。

爾の時世尊、次第に乞食し、諸の比丘を將いて還つて、本處に至り、深く禪定に入る。七日七夜

寂然として動かす。彌勒佛の弟子は色天色の如く、普く皆端正にして生死病死を厭ひ、多聞廣學し

て法藏を守護し、禪定を行す。諸欲を離るゝを得ること鳥の轂を出づるが如し。

爾の時釋提桓因、欲界の諸天子と與に歡喜踊躍して、復偈を説いて曰く、

世間の所歸たる大導師は

慧眼明淨にして十方を見る。

智力功德は諸天に勝れ、

名義具足して衆生を福す。

我今稽首して

衆生、佛を見されば

三惡道に墜墮し

今日佛世に興り、

三惡道已に少く、

皆當に止息を得て、

大悲は苦しむ昔を救ひ、

本菩薩たりし時、

殺さず、他を惱まさず、

我今稽首して

我今稽首して

自ら生死の苦を免れ、

火のなかに生ずる蓮華の如く



子・天龍八部一切の大衆を將いて城に入つて乞食す。無量の淨居天衆は恭敬して佛に従ひ、翅頭末城に入る。城に入る時に當つて、佛は十八種の神足を現す。身下より水を出せば、摩尼珠の如く化して光臺と成つて十方界を照す。身上より火を出せば須彌山の如く紫紺の光を流す。大を現すれば空に滿ち、化して瑠璃と成る。大より復た小を現すれば芥子許の如く、泯然として現れず。十方に涌き、十方に没す。一切人をして皆佛身の如く種種神力無量變現せしめ、有縁の人をして皆解脫を得しむ。釋提桓因の三十二の輔臣は欲界諸天・梵天王と色界の諸天并びに天子天女と與に、天の瓔珞及び天衣を脱いで佛土に散す。時に諸天の衣は化して華蓋となり、諸天の伎樂鼓せずして自ら鳴り、佛徳を歌詠して密かに天華を雨らし、栴檀雜香もて佛を供養す。街巷の道陌には諸の幢旛を豎て、諸の名香を燒き其の煙雲の如し。世尊城に入る時大梵天王・釋提桓因は合掌恭敬して偈を以て佛を讚す。

正遍知者・兩足尊は

十力の世尊は甚だ希有にして

其を供養する者は天上に生れ、

無上大精進に稽首したてまつる。

東方の天王提頭頼吒・南方の天王毘樓勒叉・西方の天王毘留博叉・北方の天王毘沙門王は其の眷屬と與に恭敬合掌して清淨心を以て世尊を讚歎す。

三界に比有るなく、

第一義を體解して

諸法の相とを見ず、

善住して所有なし。

天人にも世間にも與等しきものなし。

無上最勝の良福田なり。

未來解脫して涅槃に住せん。

慈心大導師に稽首したてまつる。

大慈を以て自ら莊嚴し、

衆生の性と

同じく空寂性に入り、

大精進を行ずると雖も、

【三四】護世四天王。その名は又各々左の如くも呼ばる。持國(東)增長(南)廣目(西)多聞(北)

九親諸族相濟ふ能ざるを、善い哉、善い哉、釋迦牟尼佛、大方便と深厚の慈悲とを以て能く苦惱の衆生の中に於て顔と和げ、色美しく、善巧智慧もて誠實の語を説き、我の當に來つて汝等を渡脱すべきを示す。是の如き導師の明利なる智慧は、世間に希有にして甚だ遇ひ難しとなす。深心に惡世の衆生を憐愍し、爲に苦惱を拔きて、安隱を得、第一義の甚深法性に入らしむ。釋迦牟尼の三阿僧祇劫のあひだ汝等の爲の故に難行苦行を修行して、頭を以て布施し、耳鼻手足肢體を割截して諸の苦惱を受け、八正道もて平等に解脫したるは汝等を利するが爲の故なり。』

時に彌勒佛是の如く無量の諸の衆生等を開導安慰し、其をして歡喜せしむ。彼の時衆生の身は純ら是れ法なり。心は純ら是れ法なり。口は常に法を説き、福德智慧の人は其の中に充滿せり。天人は恭敬し信受し渴仰す。時に大導師は各々彼らをして、往昔の苦惱の事を聞かしめんと欲し、復た是の念をなす。五欲の不淨は衆苦の本なり。又能く憂感・愁恨を除捨し、苦樂の法は皆是無常なりと知り、爲に色・受・想・行・識・苦・空・無常・無我を説く。是の語を説く時、九十六億人は諸法を受けずして、漏盡き意解して阿羅漢を得、三明六通、八解脫を具せり。三十六萬の天子と二十萬の天女とは阿耨多羅三藐三菩提を發す。天龍八部中には須陀洹三〇を得る者、辟支佛道の因縁を得る者、無上道心を發す者あり。數甚だ多くして稱計す可からず。

爾の時、彌勒佛九十六億の大比丘衆並びに僂法王八萬四千の大比丘と眷屬とに圍繞せられ、月天子に諸星宿の從ぶが如く翹頭末城を出でて華林園重閣講堂に入る。時に閻浮提の城邑・聚落の小王・長者及び諸四姓皆悉く、龍花樹下花林園中に來集す。爾の時世尊重ねて四諦・十二因縁を説くに、九十四億人は阿羅漢を得ん。他方の諸天及び八部衆、六十四億恒河沙の人は、阿耨多羅三藐多三菩提心を發して不退轉に住せり。第三の大會には九十三億人は阿羅漢を得、三十四億の天龍八部は三菩提心を發せり。時に彌勒佛、四聖諦の深妙なる法輪を説き、天人を度し已つて、諸聲聞弟

【三〇】又預流果ともいふ。初めて聖者の流類に預り入りし位。

【三一】又緣覺ともいひ、師に依らず十二因縁等を觀じて獨り覺りを開くをいふ。

【三二】この法會を龍華會と言ひ、彼世彌勒佛供養の爲めに龍華會を開くはこれに擬するものなり。

【三三】恒河の砂の數、即ち數へ難きは多敷の意。

戒・多聞・修行・禪定・無漏の智慧を以て、是の功德を以て我が所に來生す。或は塔を起し、舍利を供養し、佛の法身を念じ、此の功德を以て我が所に來生す。或は厄困・貧窮・孤獨のものあつて他に繫屬せられ、王法を加へられて、刑戮に當るに臨んで八難の業をなし大苦惱を受くるとき、彼等を救濟して解脱を得しむ。此の功德を修して我が所に來生す。或は恩愛は別離せる明當が相諍訟して大苦惱を極むものあれば、方便力を以て和合を得しむ。此の功德を修して我が所に來生す。是の語を説き已つて釋迦牟尼佛を稱讚して「善い哉善い哉能く五漏惡世に於て、是の如き百千萬億の諸惡の衆生を教化して善本を修して我が所に來生せしむ」と。時に彌勒佛は是の如く三たび釋迦牟尼佛を稱讚し、偈を説いて言はく、

忍辱勇猛の大導師は

惡業生を教化し成熟して

衆生を二五荷負して大苦を受け、

彼の弟子をして我が所に來らしむ。

亦三十七菩提。

汝等宜しく當に無爲を觀じて

能く五濁不善の世に於て

彼をして修業して佛を見るを得しむ。

今常樂無爲の處に入り、

我今汝らの爲に四諦を説き、

莊嚴涅槃の十二緣を説く。

空寂本無處に入るべし。

此偈を説き已つて、復た更に彼の時の衆生の苦惡の世に於て能く難事をなせるを讚歎す。貪欲・瞋恚・愚痴に迷惑せる短命の人中に能く持戒を修し、諸の功德を作せるは甚だ希有のこととなす。爾の時衆生は父母・沙門・婆羅門を識らず、道法を知らず、互に相惱害して刀兵劫に近づき、深く五欲に著して嫉妬詭佞し、曲濁邪僞にして憐愍の心なし。更に相殺害して肉を食し、血を飲み、師長を敬はず、善友を識らず、報恩を知らず、五濁世に生れて慚愧を知らず、晝夜六時相續して惡を作して厭足を識らず、純もつぱら不善を造つて五逆の惡を聚め、魚鱗のごとく相次いで求めて厭くを知らず、

【二六】この一句は釋尊を指す。

【二五】惡業生を教化するの大任を荷負するなり。



四千人と俱共に出家す。復た梨師達多・富蘭那の兄弟あり、亦八萬四千人と俱共に出家す。

復た二大臣あり、一は名を梵檀末利、二は名を須曼那といひ、王の愛重する所なり。亦八萬四千人と俱に佛法中に於て出家學道す。轉輪王の寶女、名は舍彌婆帝、今の毘舍佉母是なり。八萬四千の姪女と俱共に出家す。懷佉王の太子、名は天金色、今の提婆婆那長者子是なり。亦八萬四千人と俱共に出家す。彌勒佛の親族の婆羅門の子、名は須摩提、利根にして智慧あり、今の鬱多羅普賢比丘尼子是なり。亦六萬人と俱に佛法の中に於て俱共に出家す。懷佉王の千子は唯一人を留め、用つて王位を嗣ぎ、餘の九百九十九人は亦八萬四千人と佛法の中に於て俱共に出家す。是の如き等の無量億衆は世の苦惱五陰の熾然たるを見て、皆彌勒佛法中に於て俱共に出家す。

爾の時彌勒佛、大慈心を以て諸の大衆に語つて言はく、「汝等今生天の樂を以ての故にもあらず、亦復今世の樂の爲の故にもあらず、我が所に來至するは但涅槃常樂の因縁の爲なり。是の諸人等は皆佛法の中に於て諸の善根を種ふ。釋迦牟尼佛五濁世に出でまして、種種に訶責して汝の爲說法したまふも汝を奈何ともするなし。植ゑ來れる縁をもて今我を見るを得しむ。我今是の諸人等を攝取す。或ひは修多羅・毘尼・阿毘曇を讀誦し、分別し、決定したるところを以て、他の爲に演説して義味を讚歎し、また嫉妬を生ぜず、他人に教へて受持するを得しむなど、諸の功徳を修して我が所に來生す。或は衣食を以て人に施し、持戒・智慧、此らの功徳を修して我が所に來生す。或ひは妓樂靡蓋華香燈明を以て佛を供養し、此の功徳を修して我が所に來生す。或は僧に常に食を施し、僧房を起立し、四事供養し、八戒齋を持して慈心を修習するを以て、此らの功徳を行じて我が所に來生す。或ひは苦惱の衆生の爲に深く慈悲を生じ、身を以て代受して其をして樂を得しめ、此の功徳を修して我が所に來生す。或ひは持戒・忍辱をもて修淨の慈心を以て、此の功徳を以て我が所に來生す。或は僧祇四方無礙齋講設會を造り、飯食を供養し、此の功徳を修して我が所に來生す。或は持

是の語を説き已つて、時に儂佞王は八萬四千の大臣に恭敬圍遶せられ、及び四天王は轉輪王を送つて花林園龍華樹下に至り、彌勒佛に詣して、出家せんことを求索め、佛の爲に禮を作す。未だ頭を擧げざる頃に鬚髮自ら落ち、袈裟身に著す。便ち沙門となる。

時に彌勒佛は儂佞王と共に八萬四千の大臣・諸比丘等に恭敬圍遶せられ、並びに無數の天龍八部と共に翅頭末域に入る。足、門の闢を躡めば、娑婆世界は六種に震動し、閻浮提地は化して金色となる。翅頭末大城の中央は、其の地金剛にして過去諸佛の坐したまへる金剛寶座あり。自然に衆寶行樹を涌出し、天は空中より大寶華を雨らす。龍王は衆の妓樂をなし、口中より華を吐き、毛孔より華を雨らし、用つて佛を供養す。佛は此の座に於て正法輪を轉す。是の苦を苦聖諦と謂ひ、是の集を集聖諦と謂ひ、是の滅を滅聖諦と謂ひ、是の道を道聖諦と謂ふ。並びに爲に三十七品助菩提法を演説す。亦爲に十二因縁を宣説す。無明は行を縁とし、行は識を縁とし、識は名色を縁とし、名色は六入を縁とし、六入は觸を縁とし、觸は受を縁とし、受は愛を縁とし、愛は取を縁とし、取は有を縁とし、有は生を縁とし、生は老死・憂悲の苦惱等を縁とすと。爾の時大地六種に震動す。此の如き音聲は三千大千世界に聞ゆ。復た是の數を過ぐるに無量無邊にして、下は阿鼻地獄より、上は阿迦膩吒天に至る。時に四天王は各々無數の鬼神を將領し、高聲に唱へて言はく、『佛日世に出で、法雨の露を降し、世間の眼目今始めて聞く。普く天地一切の八部をして佛に縁あらば皆聞知するを得しむ。』と。三十三天・夜摩天・兜率陀天・化樂天・他化自在天、乃至大梵天も各各己の統領する所處に於て高聲に唱へて言はく、『佛日世に出でて甘露を降り注ぎ、世間の眼目今始めて聞く。有縁の者は皆悉く聞知せよ』と。其の時諸龍王八部・山神・樹神・藥草・神水・神風・神火・神地・神城・池神・居宅神等もまた踊躍歡喜して高聲に唱へ言ふ。復た八萬四千の諸婆羅門あり、聰明大智にして佛法の中に於て亦大王に隨つて出家學道す。復た長者あり、名は須達那、今の須達長者是なり。亦八萬

【三三】 Avīti. 譯して無間地獄。八大地獄の最下なり。  
【三六】 Akrośīṣa. 譯して色究竟天。色界十八天中の最上なり。

梵天宮殿は盛んなり

普く十方の衆の爲に

唯願はくは甘露を開き、

身光も亦明懸けし。

大導師を勸請したてまつる。

無上の法輪を轉じたまへ。

此の偈を説き已つて頭面もて禮を作し、復た更に合掌して慇懃に三たび請す。「唯願くは世尊甚深微妙の法輪を轉じて爲に衆生苦惱の根本を抜き、三毒を遠離して四惡道不善の業を破られよ」と。

爾の時世尊は諸梵王の爲に即ち便ち微笑して五色の光を出し、默然として之を許す。時に諸天子および無數の大衆は佛の許可を聞いて、歡喜すること無量、體を漏して踊躍す。譬へば孝子の新たに慈父を喪ふに忽然として還活したるが如く、大衆の歡喜するも亦復た是の如し。時に諸天衆は世尊を右遶して無數匝を経て、敬愛厭くなく、却りて一面に住す。

爾の時大衆は皆是の念を作す。「復た千億歳に五欲の樂を受くと雖も、三惡道の苦を免るを得る能はず。妻子財産も救ふ能はざる所なり。世間無常の命は久しく保ち難し。我等は今佛法の中に於て梵行を淨修せん」と。是の念をなし已つて復た更に念じて言はく、「設ひ五欲を受けて、無數劫を経るも、また無想天の壽なるは無量億歳を、諸姝女と共に相娛樂して、細滑の觸を受くるが如きも、會麀滅に歸して三惡道に墮し、無量の苦を受けなば、樂しむ所幾ばくもなく、猶ほ幻化の如し。蓋し言ふに足らず。地獄に入る時は大火洞然として、百億萬劫無量の苦を受け、脫を求むるも得<sup>がた</sup>じ、此の如き長夜の苦厄は抜き難し。今日佛に遇ひまつる宜しく勤めて精進すべし」と。時に傳佉王高聲に唱へて曰く、

設ひ復た生天の樂あるも、

會亦麀滅に歸す。

久しからずして地獄に墮せば

そは猶ほ猛火の聚の如し。

我等宜しく時に速かに

出家して佛道を學ぶべし。



を供養し、三千大千世界は六變震動す。佛身より光を出して無量を照し、應に度すべきものは皆佛を見るを得たり。

其の時釋提桓因・護世天王・大梵天王の無數の天子は花林園に於て頭面もて足を禮し、合掌して法輪を轉ぜんことを勸請す。時に彌勒佛默然として請を受け、梵王に告げて言はく、「我長夜に於て大苦惱を受けて六度を修行し、始めて今日に於て法海満足す。法幢を建て法鼓を撃ち、法螺を吹き、法雨を雨らすこと正に爾り。當に汝等の爲に說法すべし。諸佛の轉する所の八聖道輪は諸天世人の能く轉する者なし。其の義は平等に直ちに無上無爲寂滅に至り、諸の衆生の爲に長夜の苦を斷つにあり。此の法は甚深にして得難く、入り難く、信じ難く、解し難し。一切世間に能く知る者なく、能く見る者なし。心垢を洗除すれば、萬の梵行を得ん」と。是の語を説く時、復た他方の無數百千萬億の天子天女・大梵天王、天の宮殿に乗つて天の花香を持し、如來に奉獻して遶ること百千匝、五體を地に投じ、合掌勸請す。諸天の妓樂鼓せずして自ら鳴る。時に諸の梵王異口同聲に偈を説いて言はく、

無量無數の歳は

衆生は惡道に墮す。

三惡道は増廣し

今日、佛世に興る、

天人衆は 増長せん。

衆心をして著するなく、

我等 諸の梵王は

今無上の大法王に

空しく過ぎて佛なく、

世間の眼目滅すれば

諸天への路永く絶ゆ。

三惡道は殄滅し、

願はくは甘露門を開き、

疾疾く涅槃を得せしめよ。

佛世間に出でますと聞き、

値遇しまへるを得たり。

【二】護世四天王。持國、増長、廣目、多聞の四天。

【三】「此の法を聞きて心垢を洗除すれば」なり。

【三】佛を指す。佛はこの世に於ける光明であり指針であること、例へば人體の眼目の如きが故なり。

【四】増長は増長慢の意に非ず。益々繁榮するの意。

く磨滅するを知り、無常想を修して、過去佛の清涼甘露無常の偈を讀す。」

諸行は無常なり

是れ生滅の法なり。

生じ滅し、滅し已る。

寂滅を樂と爲す。

此の偈を説き已つて、出家學道して、金剛莊嚴道場の龍華菩提樹下に坐す。枝は寶龍の如く百寶の華を吐き、一一の華葉は七寶の色を作し、色色の異果あつて衆生の心に適ふ。天上「界」にも人間「界」にも比有るなし。樹の高さ五十由旬、枝葉四方に布いて大光明を放つ。爾の時彌勒は八萬四千の婆羅門と俱に道場に詣り、彌勒即ち剃髮して出家學道す。早く起きて家を出で、即ち是の日の初夜に於て四種の魔を降し、阿耨多羅三藐三菩提を成ぜんとす。即ち偈を説いて言はく、

久しく衆生の苦を念じ、

抜かんと欲するも脱するに由なし。

今は菩提を證して

霍然として礙ぐる所なし。

亦衆生空に達すれば、

本性相如實にして

永く更に憂苦なく、

慈悲も亦縁なし。

本汝等を救はんが爲に

國城及び頭も目も

妻子をも手足をも

人に施し、こと數なし

今こそ始めて解説・

無上大寂滅を得たれ、

當に汝等が爲に説き

廣く甘露の道を開くべし。

是の如き大果報は

皆施・戒・慧・等の

六種の大忍より生じ、

亦大慈悲・無染の

功德より得るなり。

此の偈を説き已つて黙して而も住す。時に諸の天龍鬼神王其の身を現ぜずして天華を雨らして佛

【八】彌勒菩薩の成道の名。

【九】前經の註二二頁を見よ。

【一〇】六忍の語もあれど、こゝは布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の六波羅蜜を指す。

欺誑し、妄語し、生死の苦緣をして展轉增長して大地獄に墮せしむ」と。

翅頭末城は衆寶羅網を其の上に彌覆し、寶鈴にて莊嚴して微風に吹動し、其の音和雅にして鐘磬を扣くが如く、歸依佛・歸依法、歸依僧を演説す。時に城中に大婆羅門主有り、名は修梵摩、婆羅門の女、名は梵摩拔提、心性和弱なり。彌勒、生を託して以て父母と爲す。胞胎に處ると雖も天宮に遊ぶが如く、大光明を放つて塵垢も障へず、身は紫金色にして三十二丈夫の相を具して寶蓮華に坐す。衆生之を視て厭足あるなし。光明晃耀として勝計すべからず。諸天世人の未だ會て觀ざる所なり。身力無量にして、一一の節力普く一切の大力龍象に勝つ。不可思議にも毛孔に光明ありて、照耀無量、障礙あるなく、日月・星宿・水火の珠光も皆悉く現れざること猶ほ埃塵の如し、身は釋迦牟尼佛より長すること八十肘八十二丈なり、脇の廣さ二十五肘十丈なり、面の長さ十二肘半五丈なりにして、鼻高く修直にして面門に當る。身相具足し端正無比にして相好を成就し、一一の相八萬四千好にして、以て莊嚴すること鑄金像の如し。一一の好の中より光明を流出して千由旬を照す。肉眼は清徹にして青白分明なり。常に光は身を遶りて百由旬に面し日月・星宿・眞珠・摩尼・七寶行樹皆悉く明耀として佛光を現じ、其の餘の衆光は復た用を爲さず。佛身は高顯にして黄金山の如く、見る者自然に三惡趣を脱す。

爾の時彌勒、諦かに世間の五欲の過患を觀するに、衆生苦を受け、長流に沈没して大生死にあり甚だ憐愍す可し。自らは是の如き正念を以て苦空無常を觀察して家に在るを樂しまず、家の迫近を厭ふこと猶ほ牢獄の如し。時に嬖佞王諸の大臣・國士・人民と共に七寶臺の、中に千の寶帳及び千の寶軒・千億の寶鈴・千億の寶旛・寶器千口・寶鬘千口あるを持して彌勒に奉上す。彌勒受け已つて諸の婆羅門に施す。婆羅門は受け已つて即ち毀壞して各々共に之を分つ。諸の婆羅門は彌勒の能く大施を作すを觀見して大奇特心を生ず。彌勒菩薩は此の寶臺の須臾にして無常なるを見て、有爲法は皆悉

【七】常に身より光を放ち、その光は百由旬を照し、日月星宿・七寶行樹は皆この佛光を反射して明かに耀いてゐるの意。



し、適意の香を出して普く一切を熏す。爾の時閻浮提中常に好香あつて、譬へば香山の如し。流水美好にして味甘く患を除く。雨澤時に隨ひて天國に香美の稻種を成熟す。天神力の故に一種にして七穫ありて、功を用ふるに甚だ少く、收むる所甚だ多し、穀稼滋茂して草穢あるなく、衆生の福徳本事の果報によつて口に入ればと銷化し、百味具足し、香美なること無比にして氣力を充實す。

其の國に爾の時轉輪聖王有り、名を穰佉と曰ふ。四種の兵を有し、威武を以てせずして四天下を治め、三十二大人相好を具す。王に千子あり、勇猛端正にして怨敵自ら伏す。王に七寶あり、一には金輪寶、千輻轂輞皆悉く具足す。二には白象寶、白きこと雪山の如く、七支地を拄へ、嚴顯にして觀る可く、猶ほ山玉の如し。三には紺馬寶、朱鬣鬚尾にして足下に華を生じ、七寶の蹄甲あり。四には神珠寶、明顯にして觀る可く、三肘より長し、光明かにして寶を雨らし、衆生の願を適ふ。五には玉女寶、顔色美妙、柔軟にして骨無し。六には主藏臣、口中より寶を吐き、足下に寶を雨らし、兩手より寶を出す。七には主兵臣、身を動かす時四兵雲の如く、空より出づるべし。千子、七寶・國界の人民、一切たがひに相親て惡意を懷かず、母の子を愛するが如し。時に王の千子各珍寶を取つて正殿の前に於て七寶臺を作る。三十重にして高さ十三由旬あり、千頭千輪遊行自在なり。四大寶藏有り、一の大藏に各々四億の小藏有つて圍遶す。伊鉢多大藏は乾陀羅國にあり、般軸迦大藏は彌縵羅國にあり、寶伽羅大藏は須羅吒國にあり、穰佉大藏は波羅捺國古仙山處にあり、此の四大藏は自然に開發して大光明を顯し、縱廣正等く一千由旬にして、中に珍寶を滿たす。各々四億の小藏あつて之に附す。四大龍王あつて、各々自ら此の四大藏及び諸の小藏を守護す。自然に湧出して形運華の如し。無央數の人皆共に往いて觀る。是の時衆寶守護する者なきも、衆人之を見て心に貪著なく、之を地に棄つること猶ほ瓦石・草木・土塊の如し。時人見る者心に厭離を生じ、各各相謂つて是の言を作す。佛の所説の如くんば、往昔の衆生此の寶の爲の故に共に相殘害し、更に相ひ偷劫し、

く、燈燭の明は猶ほ聚墨の如し。香風時に來つて明珠の柱を吹き、寶瓔珞を雨らす。衆人皆用つて服すれば自然にして三禪の樂の如し。處處に皆金銀珍寶摩尼珠等あり、積んで用つて山を成す。寶山光を放つて普く城内を照し、人民の遇ふ者皆悉く歡喜しに菩提心を發す。大夜叉神あり、名は跋陀婆羅賒塞迦、素に善教 晝夜翅頭末城及び諸の人民を擁護し、灑掃して清淨ならしむ。設ひ一五 便利あるも地を裂きて之を受け、受け已つて還合し、赤蓮華を生じて以て穢氣を蔽ふ。時世の人民若し年衰老すれば、自然に山林の樹下に行詣し、安樂淡泊に念佛して盡を取る。命終すれば多く大梵天上及び諸佛の前に生る。其の土安隱にして怨賊劫竊の患あることなく、城邑聚落門を閉づる者なし。亦衰惱・水火・刀兵及び諸飢饉・毒害の難なし。人は常に慈心にして恭敬和順、諸根を調伏すること子の父を愛するが如く、母の子を愛するが如し。語言謙遜なるは皆彌勒の慈心の訓導に由る。不殺戒を持して肉を噉はざるが故に、此の因縁を以て彼の國に生るる者は諸根恬靜にして面貌端正、威想具足して天の童子の如し。復た八萬四千の衆寶の小城有り、以て眷屬を爲して翅頭末城は最も其中に處る。二六 男女大小、遠く若しくは近しと雖も、佛の神力の故に兩つながら相見るを得て、障礙する所なし。夜光摩尼・如意珠華、世界に遍滿し、七寶の花を雨らす。鉢頭摩華・優鉢羅華・拘物頭華・分陀利華・曼陀羅華・摩訶曼殊沙華を其の地に彌布し、或は復た風吹けば空中に迴施す。彼の國界の城邑・聚落・園林・浴池・泉・河流・沼には自然に八功德水あり。命命之鳥・鷲・鴨・鸞・孔雀・鸚鵡・翡翠・舍利・美音の鳩・鵬羅・耆婆闍婆快見鳥等妙なる音聲を出し、復た異類の妙音の鳥有りて稱數すべからず、みな林池に遊集す。金色無垢淨光明華・無憂淨慧日光明華・鮮白七日香華・瞻葡六色香華および百千萬種の水陸に生ずる華は、青色には青光あり、黄色には黃光あり、赤色には赤光あり、白色には白光ありて、香淨きこと比なく、晝夜常に生じて終に萎む時なし。如意果樹あり、香美にして比なく、國界に充滿す。香樹は金光にして寶山の間に生じ、國界に充滿

【一五】 糞尿の排泄をいふ。

【二六】 男女、大人小人、すべての人たちが佛の神力によつて遠近を見透すことが出来るといふ意。

妙の十願を以て大莊嚴し、一切衆生は柔軟心じやんなんしんを起すを得て、彌勒大慈に攝あつせられて彼の國土に生れ、諸根を調伏し、佛化に隨順するを得。

舍利弗よ、四大海水の面を各々減少すること三千由旬、時に閻浮提の地は縱廣じよんこく正等しく十千由旬、其の地平淨にして琉璃鏡の如し。大適意華・悅可意華・極大香華・優曇鉢華・大金葉華・七寶葉華・白銀葉華あり、華鬚柔軟にして狀天縉の如く、吉祥の菓を生じて香味具足し、輒きこと天縉の如し。叢林樹華の甘果は美妙極大にして茂盛すること帝釋ていじやくの歡喜園に過ぎたり。其の樹高く顯れて高さ三十里なり。城邑次ぎ比び、雞すら飛んで相及ぶ。皆今佛の大善根を種へて慈心を行する報に由つて俱に彼の國に生る。智慧・威徳・五欲を衆具して快樂安隱、亦寒熱風火等の病なく九惱の苦なし。壽命具足すること八萬四千歳にして中天あるなし。人身悉く長一十六丈、日日常に極妙の安樂を受け、深く禪定に遊んで、以て樂器と爲す。唯三病あり、一には飲食、二には便利、三には衰老なり。女人は年五百歳にして乃ち行いて嫁す。一大城あり、翹頭末せうとうまつと名づけ、縱廣一千二百由旬、高さ七由旬ありて七寶もて莊嚴せり。自然に化生せる七寶の樓閣ありて端嚴殊妙にして莊校清淨なり。窟窟の間に諸の寶女を列し、手中皆眞珠の羅網を執り、雜寶莊校して以て其の上を覆ひ、密に寶鈴を懸けその聲天樂の如し。七寶の行樹の樹間には渠泉あり、皆七寶より成る。異色の水を流して更に相映發し、交横徐遊して相妨礙せず。其の岸の兩邊には純じゆん金沙を布く。街巷の道陌みちは廣さ十二里にして、悉く皆清淨にして猶ほ天園の如く掃灑清淨なり。大龍王あり、名は多羅尸棄、福德威力皆悉く具足す。其の池は城に近く、なかに龍王の宮殿ありて七寶の樓の如く、外に顯現す。常に夜半に人の像すがたを化作し、吉祥の瓶を以て香水色を盛りて塵土に灑灑す。其の地の潤澤なること、譬へば油を塗れるが如く、行人往來して塵盆あるなし。是れ時世の人の福德の致す所なり。巷陌の處處に明珠の柱有り、光は日の暈うきく、四方各々八十由旬を照す。純黃金色にして、其の光照耀して晝夜異なるな

【三】帝釋の居所忉利天喜見城の北面にある園の名。この園に入る者自ら心中歡喜を生ずるが故に名くといふ。

【四】種々の色の水が入り亂れて靜かに流るゝ様。



何の心中に於て 八正路を修するや』舍利弗、此の問を發せし時、百千の天子・無數の梵王は合掌恭敬し、異口同音に共に是の問を發し、佛に白して言はく、『世尊よ、願くば我等をして未來世に於いて、人中の最大果報・三界の眼目の光明たる彌勒の普く衆生の爲に大慈悲を説くを見るを得しめよ。』並びに八部衆亦皆是の如く、恭敬又手して如來を勸請す。爾の時梵王諸の梵衆と與に異口同音に合掌讚歎して頌を説いて曰く

南無したてまつる満月のごとく

大精進の將として

一切智の人は

三達智を成じ

身を法器となす。

靜然として動かす

無・非無に於て

世の讚歎する所なり。

一時に歸依す。

爾の時、世尊、舍利弗に告げたまはく、『當に汝等の爲に廣く分別して説くべし。諦に聽け、諦に聽け、善く之を思念せよ。汝等今は妙善心を以て如來の無上の道業・摩訶般若を問はんとす。如來は明かに見ること掌中の 菴摩勒果を見るが如し。』舍利弗に告ぐ、『過去七佛の所に於て佛名を聞くを得て禮拜供養すれば、是の因縁を以て業障を淨除す。復た彌勒大慈の根本を聞くも清淨心を得せん。汝等今一心に合掌して 未來の大慈悲者に歸依すべし。我當に汝の爲に廣く分別して説くべし。彌勒佛の國は淨命に從つて諸詔偽なく、檀波羅蜜・尸羅波羅蜜・般若波羅蜜もて不受不著を得。微

【六】 八正道といふに同じ。

【七】 内外一切の諸法及び言教を知るの智。

【八】 又三界ともいふ。欲界、色界、無色界の三。一切衆生の生死轉廻する世界なり。

【九】 又三明智ともいふ。阿羅漢果を證したる聖者の有する過現未三世を通達する智明。

【一〇】 藟、煩惱、死、天の四魔の義。

【一一】 Anur 樹名、その果は胡桃の如く又梨の如くともいふ。味酸く甘し。

【一二】 彌勒を指す。

# 佛說彌勒大成佛經

姚秦鳩摩羅什譯

是の如く我聞く。一時佛、摩伽陀國波沙山孤絕山過去諸佛常降魔處に住し、夏安居中、舍利弗と

與に山頂を經行し、偈を説いて言はく、

一心に善く諦かに聴け、

無比功德の人

彼の人妙法を説かば、

渴して甘露を飲むが如く、

時に四部衆道路を平治し、灑掃して香を燒き、皆悉く來集し、諸の供具を持して如來及び諸の比丘僧に供養す。如來を諦觀すること、喩ふるに孝子の慈父を視るが如く、渴して飲を思ふが如し。

法父を愛念するも亦復是の如し。各各心を同じて法王に正法輪を轉ぜんことを請はんと欲し、

諸根動ぜず、心心相次いで流注して佛に向ふ。是の時比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・天・龍・鬼神・乾闥婆・阿脩羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人・非人等、各々座より立つて右に世尊を遶り、五體を地に

投じ、佛に向つて泣涙す。爾の時大智舍利弗は衣服を齊整して偏に右肩を袒ぎ、法王の心を知つて

善能く隨順し佛法王に學んで正法輪を轉する是の佛の輔臣・持法の大將は、衆生を憐愍するが故に、

その苦縛を脱せしめんと欲し、佛に白して言はく、『世尊よ、如來は向に山頂上に於て偈を説き、

第一智人を讚歎したまへり。これは前後經中に未だ説きたまはざる所なり。此の諸大衆は心に皆

渴仰して淚盛雨の如く、如來が未來佛の甘露道を聞き、彌勒の名字・功德・國土莊嚴を説くを聞かんと欲す。何の善根、何の戒、何の施、何の定、何の慧、何等の智力を以てか彌勒を見るを得、また

光明大三昧

爾當に正しく爾も出生すべし

悉く皆充ち足るを得ること

疾く解脱道に至らん。

【一】この名を有する特定の三昧あるにあらず。光明の如く赫々たる大三昧の意。次三句の法意は「最上の大三昧を修したぐひなき大功徳を有する人が正しくこの世に出生せん」となり。

【二】舍利弗を指す。

【三】釋等を指す。

【四】「五根等の外界に働きて心を動ずるものも收まり、心を一處に集注して」となり。即ち「一心に佛の説法を顧つて」の意。

【五】第一等の智人。前の偈中に稱讚せる聖者。即ち彌勒菩薩を指す。

彌勒佛、大迦葉の骨身を讀して言はく、「善い哉大神徳なる釋二師子の大弟子大迦葉、彼の惡世に於て能く其の心を修す」と。爾の時人衆は、大迦葉の彌勒佛に讀せらるゝを見、千億の人は是の事に因つて已に世を厭ひて道を得たり。是の諸の人等は釋迦牟尼佛の惡世の中に於てすらも無量の衆生を教化して六神通を具し、阿羅漢を成ずるを得しと念おもへり。爾の時の說法處は廣さ八十由旬、長さ百由旬にして其の中の人衆は坐せるも立てるも、近くなるも遠くなるも、各々自ら佛其の前にあつて獨りわが爲に說法したまふと見奉る。

彌勒佛は世に住とまること六萬歲、衆生を憐愍して法眼を得しむ。滅度の後法の世に住すること亦六萬歲なり。汝等宜しく精進して清淨心を發し、諸の善業を起すべし。しからは世間の燈明たる彌勒佛の身を見るを得ること必ず疑なし。佛是の經を説とき已まる。舍利弗等は歡喜して受持せり。

## 佛說彌勒下生成佛經終

【三】師子は佛の敬稱。



正遍知者 兩足尊は

十力世尊は甚だ希有にして

其を供養する者は天上に生れん、

天人世間に與等する者なし  
無上最勝の良 福田なり。

無比大精進に稽首したてまつる。

爾の時天人羅刹等は、大力魔を佛の降伏するを見、千萬億無量の衆生皆大いに歡喜し、合掌して唱へて曰く、「甚だ希有なり、甚だ希有なり。如來は神力功德具足して不可思議なり」と。是の時天人は種種の雜色の蓮華及び曼陀羅華を以て佛前の地に散じ、積んで膝に至る。諸天は空中にて百千の妓樂をなして佛徳を歌歎す。爾の時魔王初夜後夜に於て諸の人民を覺して是の如きの言をなす。

「汝等既に人身を得て好時に值遇す。竟夜睡眠して心を覆ふべからず。汝等、若しくは立ち若しくは坐し、常に勤めて精進し正念して五陰無常苦空無我を諦觀せよ。汝等放逸をなして佛敎を行ぜざること勿れ。若し惡業を起さば後必ず悔を致さん。」時に街巷の男女皆此の語に効ひて言はく、「汝等放逸をなして佛敎を行ぜざること勿れ。若し惡業を起さば後必ず悔あらん。當に勤めて方便し精進して道を求むべし。法利を失つて徒に生じ徒に死するなかれ。是の如くよく苦惱を抜く大師には甚だ遇ひ難し。堅固精進して當に常樂涅槃を得べし」と。爾の時彌勒佛の諸弟子は普く皆端正にして威儀具足し、生老病死を厭ひ、多聞廣學にして法藏を守護し、禪定を行じ、諸欲を離るゝを得ること鳥の毳を出づるが如し。

爾の時彌勒佛は長老大迦葉の所に往かんと欲す。即ち四衆と俱に耆闍崛山に就き、山の頂上に於て大迦葉を見る。時に男女の大衆心に皆驚き怪む、彌勒佛讚して言はく、「大迦葉比丘は是釋迦牟尼佛の大弟子なり。釋迦牟尼佛は大衆中に於て常に頭陀第一と讚歎したまふ所に於て、禪定解脫三昧に通達す。是の人大神力ありと雖も、而も高心なく、能く衆生をして大歡喜を得しむ。常に下賤貧惱の衆生を愍み、苦惱を救拔して安隱を得しむ。」

【六】 又等正覺ともいひ、正理を覺つて知らざるなき者の意。佛十號の一。

【七】 兩足は二足を持つ者即ち人天の意。兩足尊は人天中の最高者即ち佛をいふ。

【八】 如來が有する十智力、一處非處智力、二業異熟智力、三靜意解脫等持等至智力、四根上下智力、五種々勝解智力、六種々界智力、七遍處行智力、八宿住隨念智力、九宿住生死智力、十漏盡智力、これに異説もあり其他菩薩の十力等もあれど、この「十力世尊」の意は單に勝れたる智力を有する世尊。即ち如來の敬稱の程度に解すべし。

【九】 田畑の物を生ずるが如く、供養すれば必ず福徳を生ずるの意。

【一〇】 たぐひなき大精進者、即ち佛。

【一一】 慢心の意。

衆生を教化して我所に至らしめたまふ」と。彌勒佛是の如く三たび釋迦牟尼佛を稱讚し、然して後說法して是の言をなす。「汝等衆生より能く難事をなせり。彼の惡世・貪欲・瞋恚・愚癡に迷惑せる短命の人の中に於て、能く持戒を修し、諸の功德をなせるは甚だ希有のことなり。爾時衆生は父母・沙門・婆羅門を誑ら<sup>ず</sup>、道法を知らず、互に相惱害して刀兵劫に近づき、深く五欲に著して、嫉妬・詭曲・佞濁・邪僞にして憐愍の心なし。更に相殺害して肉を食ひ、血を飲む。汝等能く其の中に於て善事を修行す。是れ希有のことと爲す。善い哉、釋迦牟尼佛は大悲心を以て能く苦惱の衆生の中に於て誠實の語を説き、我に當<sup>たま</sup>に來りて汝等を度脱すべきことを示す。是の如きの師は甚だ遇ひ難しと爲す。深心に惡世の衆生を憐愍し、苦惱を救拔して安隱を得しめたまふ。釋迦牟尼佛は汝等の爲の故に頭を以て布施し、耳鼻手足支體を割截して諸の苦惱を受け、以て汝等を利したまふ。」

彌勒佛、是の如く無量の衆生を開導し安慰し、其をして歡喜せしめ、然して後說法す。福德の人其の中に充滿し、大師を恭敬し信受し渴仰して各々法を聞かんと欲して皆是の念をなす。「五欲は不淨にして衆苦の本なり」と。又能く憂感愁惱を除拾し、苦樂の法は皆是無上なりと知る。彌勒佛、時に會の大衆の心淨らかに調柔なるを觀察して、爲に四諦を説く。聞く者同時に涅槃道を得たり。

爾の時彌勒佛華林園にいまし、其の園の縱廣一百由旬にして大衆中に滿つ。初會の說法には九十六億人阿羅漢を得、第二大會の說法には九十四億人阿羅漢を得、第三大會の說法には九十二億人阿羅漢を得たり。彌勒佛既に法輪を轉じ、天人を度し已つて、諸の弟子を將<sup>ひ</sup>いて城に入つて、食を乞ふ。無量の淨居天衆恭敬して佛に従つて翹頭末城に入る。城に入る時に當つて種種の神力、無量の變現を現す。釋提桓因および欲界の諸天、梵天王および色界の諸天は百千の妓樂をなして佛徳を歌詠し、天の諸華、栴檀末香を雨らして、佛を供養す。街巷道陌に諸の旛蓋を豎て、衆の名香を焼いて其の煙雲の如し。世尊城に入る時大梵天王・釋提桓因は合掌恭敬して偈を以て讚して曰く、

【四】不還果を得て色界第四禪天の五淨居天に住する聖者。  
【五】帝釋の具名。

く佛法に於て梵行を修行すべし」と。是の念をなし已つて出家して道を學ぶ。時に蟻佉王も亦八萬四千の大臣と共に恭敬圍遶し、出家して道を學ぶ。復た八萬四千の諸の婆羅門あり、聰明大智にして佛法の中に於て亦共に出家す。復長者有り、名は須達那今の須達長者是なり。是の人も亦八萬四千人と俱共に出家す。復た梨師達多・富蘭那の兄弟有り、亦八萬四千人と與に出家す。復た二大臣あり、一は名を栴檀、二は名を須曼といひ、王の愛重する所なり、亦八萬四千人と俱に佛法の中に於て出家す。蟻佉王の寶女は舍彌婆帝と名ひ、今の毗舍佉是なり。亦八萬四千の姪女と俱に共に出家す。蟻佉王の太子は名を天色と曰ふ、今の提婆婆那是なり。復た八萬四千人と俱に共に出家す。彌勒佛の親族の婆羅門の子、名は須摩提、利根にして智慧あり、今の鬱多羅是なり。亦八萬四千人と俱に佛法の中に於て出家す。是の如き等の無量千萬億衆は世の苦惱を見て、皆彌勒佛の法の中に於て出家す。

爾の時、彌勒佛諸の大衆を見て是の念をなして言く、「今諸人等生天の樂を以ての故ならず、亦復今世の樂の爲の故ならず、我が所に來至するは但涅槃常樂の因縁の爲なり。是等の諸人は皆佛法の中に於て諸の善根を種へ、釋迦牟尼佛遣し來つて我に付したまふ。是の故に今皆我が所に至るなり。我今之を受く。是の諸人等或は讀誦を以て、修妬路・毗尼・阿毗曇藏を分別決定し、諸の功德を修して我が所に來至せり。或は衣食を以て人に施し、持戒智慧、此の功德を修めて我が所に來至せり。或は幡蓋華香を以て佛を供養し、此の功德を修めて我が所に來至せり。或は苦惱の衆生の爲に其をして樂を得しめ、此の功德を修めて我が所に來至せり。或は持戒忍辱を以て清淨の慈を修し、此の功德を以て我が所に來至せり。或は施僧常食齊講の設會を以て飯食を供養し、此の功德を修して我が所に來至せり、或は持戒多聞を以て禪定・無漏の智慧を修行し、此の功德を以て我が所に來至せり。或は塔を起し、舍利を供養し、此の功德を以て我が所に來至せり。善い哉釋迦牟尼佛、能く善く是の如き等の百千萬億の

【三】 Sūtra, Vinaya, Abhi-  
dharma. 經律論の三藏。



寶を守護する者無きも、衆人之を見て心に貪著せず。之を地に棄てて猶ほ瓦石草木土塊の如し。時人見る者、皆厭心を生じて是の念を作す。『往昔衆生は此の寶の爲の故に共に相殘害し、更に相偷劫し、歎誑し妄語して、生死の罪縁をして展轉增長せしめたり』と。翅頭末城の衆寶の羅網其の上に彌覆し、寶鈴の莊嚴は微風に吹き動き、其の聲和雅にして鐘磬を扣くが如し。

其の城中に大婆羅門主あり、名を妙梵と曰ふ。婆羅門の女、名を梵摩波提と曰ふ。彌勒これに生を託して、以て父母となす。身は紫金色にして三十二相あり。衆生之を視て厭足することなし。身力無量不可思議にして、光明照耀して障礙する所なし。日月火珠都て復た現れず。身長千尺、胸の廣さ三十丈、面の長さ十二丈四尺、身體具足して端正なること比なし。相好を成就せること鑄金像の如し。肉眼清淨にして十由旬を見、常光四照して面百由旬なり。日月火珠の光も復た現れず、唯佛光有りて微妙第一なり。

彌勒菩薩、世の五欲は患を致すこと甚だ多く、衆生沈没して大生死にありて甚だ憐愍すべきを觀じ、自らはの如き正念の觀を以ての故に、家にあるを樂しまず。時に曠佉王諸の大臣と共に此の寶臺を持って彌勒に奉上す。彌勒受け已つて諸婆羅門に施す。婆羅門受け已つて即ち便ち毀壞して各々共に之を分つ。彌勒菩薩此の妙臺須臾にして無常なるを見、一切法も皆亦磨滅するを知つて、無常想を修し、出家して道を學び、龍華菩提樹下に坐す。樹莖枝葉高さ五十里なり。即ち出家の日を以て阿耨多羅三藐三菩提を得。爾の時諸天龍神王は其の身を現ぜずして而も華香を雨らして佛を供養す。三千大千世界皆大いに震動す。佛身より光を出して無量の國を照し應に度すべき者は皆佛を見たてまつるを得たり。

爾の時、人民各々是の念をなす。『復た千萬億歲五欲の樂を受くると雖も、三惡道の苦を免るること能はず。妻子、財産も救ふ能はざる所にして、世間は無常、命は久しく保ち難し。我等今は宜し

【二】龍華とは華林園にある一菩提樹の名なり。下に説くが如く彌勒菩薩はこの龍華菩提樹の下に成佛し衆の爲めに法を説く。この法會を龍華會と呼び、後世彌勒菩薩を供養せんが爲めに龍華會を修することなり。

舍宅及び諸の里巷には、細微の土塊すらあることなし。純ら金沙を以て地を覆ひ、處處に皆金銀の聚あり。大夜叉神あり、名を跋陀波羅贈寒迦と云ふ。といひ、常に此の城を護り、掃除すること清淨にして、若し便利不淨あれば、地を裂きて之を受け、受け已つて還つて合す。人命將に終らんとすれば、自然に塚間に行詣して死す。時世安樂にして怨賊劫竊の患あることなく、城邑・聚落門を閉づる者なし。亦衰惱水火刀兵及び諸の饑饉・毒害の難なし。人常に慈心ありて恭敬和順し、諸根を調伏して語言謙遜なり。

舍利弗よ、我今汝の爲に粗略に彼の國界城邑富樂の事を説く。其の諸の園林池泉の中には自然にして功德水ありて、青紅赤白雜色の蓮華遍く其の上を覆へり。其の池の四邊に四寶の階道あり、衆鳥を和集し、鵝・鴨・鶯・雀・翡翠・鸚鵡・舍利・鳩那羅・香婆耆婆等の諸の妙音の鳥、常に其の中に入り。復た異類の妙音の鳥もありて稱數すべからず。果樹香樹園内に充滿す。爾の時閑浮提中には常に好香あつて、譬へば香山の如く、流水は美好にして味甘く患を除く。雨澤時に隨ひ、穀稼滋茂し、草穢を生ぜず。一種にて七たびの獲あれば、功を用ゆる所甚だしく、收むる所甚だ多し。之を食すれば、香美にして氣力充實す。

其の國に爾の時轉輪王あり、名を曠法と曰ふ。四種の兵あり、威武を以てせずして四天下を治む。其の王に千子あり、勇健多力にして能く怨敵を破る。王に七寶あり、金輪寶・象寶・馬寶・珠寶・女寶・主藏寶・主兵寶なり。又其の國土に七寶臺あり、擧高さ千丈・千頭・千輪、廣さ六十丈なり。又四大藏あり、一一の大藏各々四億の小藏あつて圍遶す。伊勒鉢大藏は乾陀羅國にあり、斡軸迦大藏は彌提羅國にあり、賓伽羅大藏は須羅吒國にあり、曠法大藏は波羅捺國にあり。此の四大藏は縱廣千由旬にして中に珍寶を滿し、各々四億の小藏を之に附す。四大龍王ありて、各々自ら守護す。此の四大藏及び諸の小藏は自然に踊り出して形蓮華の如く、無央數の人皆共に往いて觀る。是の時衆

# 佛說彌勒下生成佛經

姚秦鳩摩羅什譯

大智舍利弗は能く佛に隨つて法輪を轉じて、佛法の大將なり。衆生を憐愍するが故に佛に白して言さく、「世尊よ、前後の經中に説きたまふが如く、彌勒は當に下つて佛となるべし。願くは廣く彌勒の功德神力、國土莊嚴の事を聞かんと欲す。衆生何の施、何の戒、何の慧を以てか彌勒を見るを得ん。」

爾の時佛舍利弗に告げたまはく、「我今廣く汝の爲に説かん。當に一心に聽くべし。舍利弗よ、四大海水を漸を以て減少すること三千由旬、是の時閻浮提の地は長さ十千由旬、廣さ八千由旬、平坦にして鏡の如く、名華軟草遍く其の地を覆ひ、種種の樹木・華果・茂盛し、其の樹悉く皆高さ三十里なり。城邑次ぎ比び、雜すら飛びて相及ぶ。人壽は八萬四千歳なり。智慧・威徳・色力具足して安隱快樂なり。唯三病あり、一には便利、二には飲食、三には衰老なり。女人は年五百歳にして爾して乃ち嫁を行ふ。

是の時一大城あり、名を翹頭末といひ、長さ十二由旬、廣さ七由旬なり。端嚴殊妙にして莊嚴清淨、福德の人其の中に充滿せり。福德の人なるを以ての故に豐樂安隱なり。其の城は七寶にて上に樓閣あり、戶牖軒窓は皆是れ衆寶にして眞珠の羅網を以て其の上を彌覆せり。街巷の道陌は廣さ十二里、掃灑して清淨なり。大力龍王あり、名を多羅尸棄と曰ひ、其の池は城に近く、龍王の宮殿は此の池中にあり。常に夜半に於て微細の雨を降らして、用て塵土を滄す。其の地潤澤にして譬へば油を塗れるが如く、行人來往するも塵盆あることなし。時世の人民の福德の致す所なり。巷陌の處處に明珠柱あり、皆高さ十里、其の光照曜すること晝夜異なるなく、燈燭の明も復用をなさず。城邑・



爾の時尊者阿難即ち座より立ち、又手長跪して佛に白して言さく、「世尊よ、善い哉世尊よ、快く彌勒所有の功德を説き、亦未來世修福の衆生所得の果報を記し玉ふ。我今隨喜す。唯然り世尊よ、此の法の要は云何に受持し、當に何と此の經を名づくべきや」佛、阿難に告げたまはく、「汝佛語を持して慎んで忘失する勿れ。未來世の爲に生天の路を開き、菩提の相を示して佛種を斷すること勿れ。此の經を『彌勒菩薩般涅槃』と名け、亦『觀彌勒菩薩上生兜率陀天』と名く。菩提心を勸發して是の如く受持せよ。」

佛、是の語を説きたまふ時、他方より來會せる十萬の菩薩は首楞嚴三昧を得、八萬億の諸天は菩提心を發し、皆彌勒に隨從して下生せんことを願ふ。佛是の語を説きたまふ時、四部の弟子・天龍八部、佛の所説を聞いて皆大いに歡喜し、佛を禮して退けり。

佛說觀彌勒菩薩上生兜率天經終

敬し、未だ頭を擧げざる頃に便ち法を聞くを得て、即ち無上道に於て不退轉を得、未來世に於て、恒河沙等の如き諸佛・如來に値はん。」

佛、優波離に告げたまはく、「汝今諦かに聽け。是の彌勒菩薩は未來世に於て衆生の爲に大歸依處となるべし。若し彌勒菩薩に歸依する者有らば、當に知るべし、是の人無上道に於て不退轉を得ん。彌勒菩薩の<sup>三三</sup>多陀阿伽度・<sup>三三</sup>阿羅訶・<sup>三四</sup>三藐三佛陀と成る時、此の如く行ふ人は佛の光明を見て、即ち受記を得ん。」

佛、優波離に告げたまはく、「佛滅度の後、四部の弟子天龍鬼神にして、若し兜率陀天に生れんと欲する者あらば、當に是の觀をなすべし。繫念<sup>けんねん</sup>思惟せよ。兜率陀天を念じて佛の禁戒を持し、一日より七日に至り、十善行・十善道を思念して此の功德を以て迴向して彌勒の前に生れんと願ふ者は、當に是の觀を作すべし。是の觀を作す者は若しくは一天人を見、一蓮華を見、若しくは一念の頃彌勒の名を稱せば、此の人千二百劫の生死の罪を除却す。但彌勒の名を聞いて合掌恭敬するのみにて、此の人は五十劫の生死の罪を除却す。若し彌勒を禮敬する者有らば、百億劫の生死の罪を除却し、設ひ天に生れざるも、未來世中<sup>三三</sup>に龍華菩提樹下に亦值遇するを得て、無上心を發さん。」

是の語を説く時、無量の大衆は即ち坐より起ち、佛足を頂禮し、彌勒の足を禮し、佛及び彌勒菩薩を遶ること百千匝なり。未だ道を得ざる者も各々誓願を發す。

「我等天人<sup>二八</sup>、今佛前に於て誠實の誓願を發し、未來世に於て彌勒に值遇し、此の身を捨て已つて、皆兜率陀天に上生するを得ん」と。世尊記して曰く、「汝等及び未來世に福を修し戒を持する者は、皆彌勒菩薩の前に往生して彌勒菩薩の攝受する所となるべし。」

佛、優波離に告げたまはく、「是の觀を作す者を名づけて正觀と爲し、若し他觀をなす者あれば、名づけて邪觀となす。」

【三三】 Tathagata 如來。  
【三四】 Arhan. 阿羅漢。應供。  
【三五】 Samyaksambuddha, 正遍智。

【二五】 すべて佛道を成ずるは菩提樹下に於てさるべきものにして、未來世に彌勒菩薩がこの土に下生して成佛する際の菩提樹は龍華と名づく。詳しくは次下の彌勒下生經を見よ。  
【二六】 天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅迦の八。

修し、弘誓の願を發せば、命終の後、誓へば壯士の臂を屈申する頃ほどの如く、即ち兜率陀天に往生することを得て、蓮花上に於て結加趺座すれば、百千の天子は天の伎樂を作し、天の曼陀羅花摩訶曼陀羅華を持し、以て其の上に散じ、讚して言く、「善哉、善哉、善男子よ、汝閻浮提に於て廣く福業を修して、此の處に來生す。此處は兜率陀天と名づけ、今此の天主は名を彌勒と曰ふ。汝當に歸依すべし。」聲に應じて即ち禮し、禮已つて眉間の白毫相の光を諦觀すれば、即ち九十六億劫の生死の罪を超越するを得。是の時菩薩は其の宿縁に隨つて爲めに妙法を説き、其を堅固ならしめ、無上道心を退轉せざらしむ。是の如き等の衆生、若し諸業を淨くして、六事法を行へば、必定して疑なく當に兜率天上に生れ、彌勒に値遇し、亦彌勒に隨つて閻浮提に下り、第一に法を聞いて、未來世に於て賢劫の一切諸佛に値遇し、星宿劫に於ても亦諸佛世尊に値遇するを得て、諸佛の前に於て菩提の記を受くべし。」

佛、優波離に告げたまはく、「佛滅度の後、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・天・龍・夜叉・乾闥婆・阿脩羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅迦等、是の諸の大衆、若し彌勒菩薩摩訶薩の名を聞く者あつて、聞き已つて歡喜恭敬禮拜せば、此の人命終して彈指の如き頃に、即ち往生を得ること前の如く異なるなし。但是の彌勒の名を聞くを得る者も命終して亦黑闇處・邊地・邪見諸惡律儀に墮せず、恒に正見の眷屬に生れて三寶を誂らざるを成就す。」

佛、優波離に告げたまはく、「若し善男子善女人、諸の禁戒を犯して衆の惡業を造るも、是の菩薩大悲の名字を聞いて、五體を地に投じ、誠心懺悔すれば、是の諸の惡業は速かに清淨なるを得。未來世中の諸の衆生等是の菩薩大悲の名稱を聞いて形像を造立し、香華衣服綵蓋幢旛もて禮拜し、繫念すれば、此の人命終せんと欲する時、彌勒菩薩は眉間の白毫大人相の光を放ち、諸の天子と與に曼陀羅華を雨らし、來つて此の人を迎ふ。此の人須臾にして即ち往生を得、彌勒に値遇して頭面もて禮

【三】一護戒行、二敬塔行、三供養行、四等持行、五誦經行、六讀經行の六。



陀天上には乃ち是の如き極妙樂事あり。今此の大土何の時閻浮提に於て没して彼の天に生るや佛、優波離に告げたまはく、「彌勒は先に波羅捺國劫波利村の波婆利大婆羅門の家に於て生る。却後十二年二月十五日、本生處に還り、結加趺坐して滅定に入るが如し。身は紫金色にて光明豔赫として百千の日の如く上りて兜率陀天に至る。其の身舍利は鑄金像の如く動ぜず搖がず、身の圓光中に首楞嚴三昧と般若波羅蜜ありて、字義炳然たり。時に諸天人尋いで即ち爲に衆寶の妙塔を起し、舍利を供養す。時に兜率陀天の七寶臺内摩尼殿上の師子床座のうへに忽然として化生す。蓮華上に於て結加趺坐し、身は閻浮檀金の色の如く、長さ十六由旬、三十二相八十種好皆悉く具足す。頂上の肉髮髮は紺琉璃の色にして釋迦毘楞伽摩尼と百千萬億の甄叔迦寶を以て嚴れる天冠あり。其の天冠の寶は百萬億の色あり。一一の色の中に無量百千の化佛ありて、諸化菩薩を以て侍者と爲す、復た他方に諸大菩薩ありて、十八變を作して隨意自在に天冠の中に住す。彌勒の眉間に白毫相の光あり、衆光を流出して百寶色をなす。三十二相の一一の相中に五百億の寶色あり、一一の好も亦た五百億の寶色あり。一一の相好艶として八萬四千の光明の雲を出す。諸天子と與に各々花座に坐し、晝夜六時常に不退轉地法輪の行を説く、一時中を経て、五百億の天子を成就し、阿耨多羅三藐三菩提を退轉せざらしむ。是の如く兜率陀天に處りて晝夜恒に此の法を説き、諸天子を度す。閻浮提の歳數五十六億萬歳にして、乃ち閻浮提到下生すること「彌勒下生經」に説くが如し。」

佛、優波離に告げたまはく、「是を彌勒菩薩の閻浮提到て没し、兜率陀天に生ずるの因縁と名く。佛滅度の後、我が諸の弟子、若し精勤して諸の功德を修し、威儀缺けず、塔を掃き地に塗り、衆の名香妙花を以て供養し、衆の三昧を行じ、深く正受に入りて經典を讀誦するものあらば、是の如き等の人は應當に至心なるべし。結を斷ぜずと雖も、六通を得るが如し。應當に繫念して佛の形像を念じ、彌勒の名を稱すべし。是の如き等の輩、若し一念の頃に戒齋を受け、諸の淨業を

【二】菩薩の異稱。

【三】首楞嚴は譯して健相といひ、諸三昧の行相の多少淺深を知るの三昧と解し、其の他異義あれど、こゝには諸三昧の總稱の意にて、次下の般若波羅蜜と具して、禪定と智慧二大徳目を擧げたるものと解すべし。

【四】佛の頭頂にある肉の盛り上れるをいふ。三十二相の一。

【五】能く種々に現ずる如意寶なりといふ。

【六】延珪の如く赤瑠璃に似たる寶玉なりといふ。

【七】佛の眉間に柔軟なる細き毛ありて右旋宛轉して常に白き光明を放つをいふ。三十二相の一。

【八】佛塔を供養せんが爲めに先づ塔を清め地を飾るなり。塔供養は初期佛教徒の勝事とせる處なり。

【九】煩惱の異名。

【一〇】六神通の略。

く天宮には百億萬無量の寶色あり、一一の諸女亦同じく寶色あり。爾の時十方無量の諸天、命終して皆兜率天宮に往生せんことを願ふ。

時に兜率天宮に五大神あり。第一の大神は名を寶幢と曰ひ、身より七寶を雨らして宮牆の内に散す。一一の寶珠は無量の樂器を化成して空中に懸處し、鼓せずして自ら鳴り、無量の音ありて衆生の意に適ふ。第二の大神は名を花徳と曰ひ、身より衆花を雨らし、宮牆を彌覆して花蓋を化成し、一一の花蓋は百千幢幡を以て導引となす。第三の大神は名を香音と曰ひ、身の毛孔の中より微妙なる海此岸栴檀香を雨出し、其の香、雲の如く百寶の色を作し、宮を遠ること七匝なり、第四の大神は名を喜樂と曰ひ、如意珠を雨らす。一一の寶珠自然に幢幡の上に住在し、無量歸佛歸法歸比丘僧を顯説し、及び五戒、無量の善法諸波羅蜜、饒益勸助菩提音者を説く。第五の大神は名を正音聲と曰ひ、身の諸の毛孔より衆水を流出し、一一の水上に五百億の花あり、一一の華上に二十五の玉女あり、一一の玉女の身の諸毛孔より一切の音聲を出し、天魔後の所有音樂にも勝る。

佛、優波離に告げ玉はく、「此れ兜率陀天十善報應勝妙福處と名く。若し我れ世に住すること一小劫中に一生補處菩薩の報應及び十善の果を廣説するも、窮盡すること能はず。今汝等の爲めに略して解説せん。」

佛、優波離に告げたまはく、「若し比丘及び一切大衆ありて、生死を厭はず、天に生るゝを樂ふ者、無上の菩提心を愛敬する者、彌勒の爲めに弟子と作らむと欲する者は當さに是の觀を作すべし。是の觀を作す者は應に五戒八齋具足戒を持し、身心精進し、斷結を求めず、十善法を修し、一々に兜率陀天上の上妙の快樂を思惟すべし。是の觀を作す者は名けて正觀と爲す。若し他の觀をなす者あらば、名けて邪觀と爲す。

爾の時優波離即ち座より起ち、衣服を整へ、頭面もて禮を作し、佛に白して言く、「世尊よ、兜率

【二】觀彌勒上生兜率天經の意によれば饒益は利樂、勸は讚勉、助は資益濟苦の義、音は音聲、者は行者の義、總意は利樂勸勉して大菩提聲を發求する行者の義と言へり。

んば、我が額上に自然に珠を出さしめよ。既に發願し已れば、額上に自然に五百億の寶珠を出す。琉璃瓊梨一切の衆色具足せざるなし。紫紺摩尼の表裏瑛徹するが如く、此摩尼の光は空中に迴旋し、化して四十九重微妙の寶宮となる。一一の欄楯は萬億梵摩尼寶の共に合成する所なり。諸欄楯の間自然に九億の天子・五百億の天女を化生す。一一の天子の手中に無量億萬の七寶の蓮華を化生し、一一の蓮華上に無量億の光あり。其の光明中に諸の樂器を具す。是の如き天樂鼓せずして、自ら鳴る。此の聲出づる時、諸女自然に衆の樂器を執り、競ひ起ちて歌舞す。詠歌する所の音は、十善の四弘誓願を演説す。諸天の聞く者皆無上道心を發す。時に諸園中に八色の琉璃渠あり、五百億の寶珠ありて用つて合成す。一一の渠中八味の水あり、八色具足す。其の水湧して梁棟の間を遶る。四門の外に於て四花を化生し、水の華中より出づること寶花の流るゝが如し。一一の華上に二十四の天女あり、身色微妙にして諸菩薩の莊嚴身相の如し。手中自然に五百億の寶器を化す。一一の器中天の諸甘露自然に盈滿す。左肩には無量の瓔珞を荷佩し、右肩には復た無量の樂器を負ふ。雲の空に住するが如く水より出でて菩薩の六波羅蜜を讚嘆す。若し兜率天上に往生する者あらば、自然に此の天女の侍御を得。亦七寶の大師子座あり、高さ四由旬、閻浮檀金の無量の衆寶を以て莊嚴となす。座の四角の頭に四蓮華を生ず。一一の蓮は百寶の所成なり。一一の寶は百億の光明を出だす。其の光微妙にして化して五百億の衆寶雜花もて莊嚴せる寶帳となる。時に十方面に百千の梵王あり、各各一梵天の妙寶を持し、以て寶鈴となして寶帳上に懸く。時に小梵王は天の衆寶を持し、以て羅網と爲して帳上に彌覆す。爾の時百千無數の天子天女の眷屬は各寶華を持し、以て座上に布く。是の諸蓮花は自然に皆五百億の寶女を出す、手に白拂を執りて帳内に侍立す。持宮の四角に四寶柱あり、一一の寶柱に百千樓閣あり、梵摩尼珠を以て絞絡となす。時に諸閣の間に百千の天女あり、色妙にして比なく、手に樂器を執り、其の樂音中、苦空無常無我の諸波羅蜜を演説す。是の如

【九】菩薩が起す四種の誓願、即ち衆生無邊誓願度、煩惱無數誓願斷、法門無盡誓願知、佛道無上誓願證の四。唐の慈恩大師窺基の撰なる觀彌勒上生兜率天經贊には、一未離苦願斷、二未得樂願得、三未發菩提心斷惡修善者願早發心斷惡修善、四未成佛者願早成佛の四を挙げたり。

【一〇】佛の座し給ふ座。



未だ諸漏を斷ぜず、此の人命終して當に何れの處に生ずべき。其の今復た出家すと雖も、禪定を修せず、煩惱を斷ぜず。佛は此の事成佛すること疑なしと、記したまへり。此の人命終して何れの國土に生ずるや、佛、優婆離に告げ玉はく、「諦に聽け、諦に聽け、善く之を思念せよ。如來應正遍知、今此の衆に於て彌勒菩薩摩訶薩の阿耨多羅三藐三菩提の記を説かん。此の人今より十二年後命終し、必ず兜率陀天上に往生せん。爾の時兜率陀天上、五百萬億の天子あり、一一の天子皆な甚深なる檀波羅蜜を修して一生、補處菩薩を供養せんが爲の故に、天の福力を以て宮殿を造作し、各自身より梅檀摩尼寶冠を脱し、長跪合掌して是の願を發して言く、「我今此の無價寶珠及び天冠を持す。大心衆生を供養せんが爲の故に。此の人來世久しからずして、當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずべし。我、彼の佛の莊嚴國界に於て受記を得る者に我が寶冠をして供具に化成せしめむ。」此の如く諸天子等も各各長跪して弘誓願を發すこと、亦復是の如し。時に諸天子是の願を作し已れば、是の諸の寶冠は五百萬億の寶宮を化作す。一一の寶宮には七重の垣あり、一一の垣は七寶の所成なり。一一の寶は五百億の光明を出し、一一の光明中に五百億の蓮華あり、一一の蓮華は五百億の七寶行樹を化作す。一一の樹葉に五百億の寶色あり、一一の寶色に五百億の閻浮檀金の光あり。一一の閻浮檀金の光の中に五百億の諸天寶女を出す。一一の寶女は樹下に住立し、百億の寶の無數の瓔珞を執りて妙なる音樂を出す。時に音樂の中に不退轉地法輪の行を演説す。其の樹、頗黎色の如き果を生ず。一切の衆色頗梨色中に入る。是の諸の光明は右旋婉轉して衆音を流出し、衆音は大慈大悲の法を演説す。一一の垣牆は高さ六十二由旬、厚さ十四由旬なり。五百億の龍王は此の垣を圍遶す。一一の龍王は五百億の七寶行樹を雨らし垣上を莊嚴す。自然に風ありて此の樹を吹動し、樹相振觸して、苦空無常無我的諸波羅蜜を演説す。爾の時此の宮に一大神あり、名は牢度跋提、即ち座より起ちて遍く十方佛を禮し、弘誓の願を發す。若し我が福德、應に彌勒菩薩の爲めに善法堂を造るべく

【三】 佛が弟子の未來の證果を分別して説き玉ふこと。

【四】 又觀史多、都率、兜術等とも音譯す。梵名(Dhriti)意譯して妙足、知足等といふ。

欲界六天の中第四。須彌の頂上十二萬由旬の處に在り。詳細は經下を見よ。

【五】 天人の男子。

【六】 具さには檀那波羅蜜。六波羅蜜の第一。檀那は布施、波羅蜜は度又は到彼岸と譯す。

菩薩が涅槃の彼岸に到らんが爲めに修する六の行中の一。

【七】 前佛の滅後其跡を繼ぎて成佛する菩薩。現に等覺の位に住し一生を過ぐれば佛處を補ふなり。彌勒は即ち釋迦佛の補處なり。

【八】 菩薩の異名。菩薩は成佛せんといふ大心を有する衆生なるが故なり。

# 佛說觀彌勒菩薩上生兜率天經

劉宋 沮渠京聲譯

是の如く我聞く。一時佛舍衛國祇樹給孤獨園に在しましき。爾の時世尊、初夜分に於て身を擧げて光を放つ。其の光金色にして祇陀園を遶り、周遍七匝して、須達の舍を照し、亦金色を作す。金色の光ありて猶ほ段雲の如し。舍衛國に遍く處處に皆な金色の蓮花を雨らす。其の光明の中に無量百千の諸大化佛ありて、皆な是の言を唱ふ。「今此中に於て千の菩薩あり、最初に成佛せるは名を拘留孫、最後に成佛せるは名を樓至と曰ふ」と。是語を説き已れば、尊者阿若憍陳如は即ち禪より起つ、其の眷屬二百五十人と俱なり。尊者摩訶迦葉、其の眷屬二百五十人と俱なり。尊者大目犍連、其の眷屬二百五十人と俱なり。尊者舍利弗、其の眷屬二百五十人と俱なり。摩訶波闍波提比丘尼、其の眷屬千比丘尼を俱なり。須達長者、三千優婆塞と俱なり。毘舍佉母、二千優婆夷と俱なり。復た菩薩摩訶薩あり、名は跋陀婆羅、其の眷屬十六菩薩と俱なり。文殊師利法王子、其の眷屬五百菩薩と俱なり。天龍・夜叉・乾闥婆等の一切の大衆、佛の光明を覩て皆悉く雲集す。

爾の時世尊廣長の舌相を出し、千の光明を放つ。一々の光明各々千色あり、一々の色中無量の化佛あり、是の諸の化佛異口同音に皆な清淨諸大菩薩甚深不可思議の諸陀羅尼法を説く。所謂阿難陀目佉陀羅尼・空慧陀羅尼・無礙性陀羅尼・大解脱無相陀羅尼なり。爾の時世尊一音聲を以て、百億陀羅尼門を説く。此陀羅尼を説き已る。爾時會中一菩薩あり、名を彌勒と曰ふ。佛の所説を聞き、時に應じて即ち百萬億陀羅尼門を得。即ち座より起ちて衣服を整へ、又手合掌して佛前に住立す。

爾の時優婆離亦座より起ち、頭面もて禮を作し、佛に白して言さく、「世尊よ、世尊は往昔毘尼の中及び諸經藏に於て阿逸多是次に當さに作佛すべしと説きたまへり。此の阿逸多是凡夫身を具し、

【一】 Maitreya、梅怛麗耶を略して彌勒といふ。慈氏と譯す。

【二】 Añña、彌勒菩薩の字。無能勝と譯す。





つた造例として、諸寺縁起集西大寺縁起の條に同寺講堂の事を記した下に

講堂高十丈。中尊彌勒佛。前勞度跋提所吹氣成雲。其上有兜率四十九院。

の記事がある。所謂上生經に依る兜率天宮内の有様を模したものであらうか、この類の圖像として所謂兜率内院（四十九院）の圖と云つたやうなものが世に行はれて居る。但しその宮殿の顯しやうは、彼の西大寺のものは別として、普通流布

の圖像は平面的にその宮殿様を畫き現して居るが、經論の本文では四十九重の摩尼寶殿とあつて、立體的のものでなければならぬことになるのである。尙ほ我國藤原時代の末から鎌倉時代の初めにかけて、淨土教の勃興並に聖衆來迎圖の流行と照應して、彌勒來迎の圖が造顯せられた。その一模本は覺禪鈔の中に掲載されてあるが、實物としては鎌倉時代の製作になる優秀な一圖が、現に東京美術學校

に珍藏され居る。

〔附記〕 今回彌勒三經の譯述につきては、下生經にA・B二本ある中、A本を闕いてB本を採用することにした。それは前述の如くA本は増一阿含經の別抄であるから、改めて翻譯する必要が無いからである。なほ本文の譯述並に附註につきては平等通昭、坂井榮三郎兩君の援助によつて成つたものであることを一言附記して感謝の意を表する次第である。

昭和七年十二月一日

譯者 小野 玄 妙 識

るやうに考へられぬでもない。何となれば、兜率へ昇つて彌勒の尊容を拜してその形像を作るとか、或は彼の天上で菩薩の説法を聞くとか、或は彌勒菩薩が此の

界に化現して佛像等を刻まれたとかと云つたやうな傳説は、凡て上代に於ける一般佛教徒の通般の信仰であつた。従つて彼の無著論師が彌勒に就てい瑜伽論等を聞いたといつても、結局この通般の傳説を述べたものに過ぎないのではあるまいか。たとひ彌勒説と傳へらるゝ論本があつたとしても、それは要するに大小乗の諸經を佛説と稱するのと同じ意味と見えてはどうであらうか。さすればそれ等は凡て名を假托したものといふことになるのである。私は今敢て宇井博士の高説を左言右語しやうとするのではない。唯々私一己としては今茲ではむしろ舊來の傳説に依つて歴史上の人物たることは否定しておき度いと思ふ、尙ほこの外に色々

説明を要する問題もあらうが、それは別に他日の機會を待つことにする。

### 五、彌勒經關係の諸變相

この彌勒菩薩に對する信仰は一時彌陀の信仰と相並んで盛に世に行はれた關係上、その變相は多數に製作流布せられた様である。唯々その信仰が彌陀の信仰のやうに永續しなかつた爲めに、遺物として残つたものはその數は割合に少いやうである。但し文獻の上ではそれ等變相製作の消息を知るべき史料は相當にある。例せば唐の代宗の大曆十一年（西紀七七八）に李大賓といふ人が燉煌に於

て一佛龕を作りその中に諸變相を畫いたことを記した中に、彌勒上生下生の圖がある。これ即ち彌勒上生經及び下生經に依る各變相を畫いた事實を述べたものであるが、現在燉煌千佛洞の壁畫の中にはこの種の變相の遺存してゐるものがある。

る。我國等でもこの彌勒の變相は、奈良時代に於て盛んに造顯せられた事實がある。現在遺つてゐるものとしては法隆寺五重塔本の塑の彌勒淨土像がこれを代表して居る。この類の像は興福寺、多武峯其の他の諸大寺の堂塔にも安ぜられたことが諸史籍に散説してある。

彌勒關係の變相はこれを細別すると、上生經關係のものとして下生經關係のものとの兩種に分るゝ事勿論である。その中生經變としては彌勒菩薩が兜率天上で諸天使を對手として説法してゐられるところを造顯するを例とする。それに對し下生經變としては彌勒が既にこの閻浮提に下生して龍華樹下に成道し諸大衆の爲めに説法してゐられるところを畫出するのである。彼の法隆寺五重塔等の變相は、この二者の中では後者に屬するものである。

此の外に上生經關係の變相として稍變

も云ふたやうに比較的初期の經典にその名が見、且つ原始佛教から出たといふ思想上の系統的連鎖もあるのである。從てこの彌勒に對する信仰文は大乘佛教の興起以前から一般佛教徒の間に相當の勢力を有して行はれてゐたものと見る事が出来る。勿論その信仰としては、一はこの菩薩は所謂釋尊の補處の菩薩として現在兜率天に上生して說法して居られるから、吾々も彼の天に往生して菩薩の說法を聽かうといふ、なほ一つはこの菩薩は將來此の土に下生して成佛して衆生を化度せらるゝのであるから、その時まで羅漢果を證してしまはず居て、彼の佛の化度にあづからうとするのである。雜譬喻經の中に左の記事がある。

昔有比丘聰明智慧、時病危頓、弟子問曰、成應眞未、答曰未得、不還、未也、問曰、和上道高名遠、何以不至今乎、和上告曰、已得頻來、二果未

通、問之、已得頻來、礙何等事不至眞人、答曰、欲觀彌勒佛時三會二百八十億人得眞人時、及諸菩薩不可限載、彌勒如來巨身至尊長百六十丈、其土人民皆桃華色、人皆壽八萬四千歲、土地平正、衣食自然、閻浮土地廣長各三十萬里、意欲見此不取眞人、彌勒佛時二尊弟子、一曰雜施、二曰數數、復欲見之、知何如我弟子復問、從何聞此、和上答曰從佛經聞、弟子白曰、生死勤苦、彌勒設有異法當往待之乎、答曰無異、六度四答四恩四諦寧有異乎、答曰不也、設使一等彼此無異、何爲復待、今受佛恩反歸彌勒、亦可取度不須待彼、和上言止、卿且出去、吾當思惟、弟子適出未到戶外、已成眞人、弟子還曰、何乎、師曰、已成眞人、弟子禮曰、咄叱之頃已成果證、

右は極めて簡古な説ではあるが、よく、

この種彌勒佛に對する古い時代の信仰の一端を語つてゐるものと云へよう。しかも今云ふ大乘經典としての彌勒の三部經、及び之に隨伴した思想信仰は、上記の如きものから發達したものであることは云ふ迄もない事である。

次に第五に注意すべきことは、彼の瑜伽論等の一類の經典をば古來彌勒菩薩の説であると傳へらるゝ處からして、最近宇井博士等によつて所謂當來佛としての彌勒の外に實際人間としてこの彌勒なる人が西紀第三四世紀頃に出世してゐたのであらうといふ新説が提唱され、識者の之に賛同するものも相當に多いやうである。彌勒菩薩を歷史上實在の人として生かして來やうといふは、それは確に一理由のある説である。が、然しながら、今支那所傳の經論史籍全般の上から大觀した推論としては、此の彌勒菩薩を特に實在の人とすることに於ては聊か無理な點もあ



めに説法したり、梵天や帝釋が下りて來て佛の説法を聴いたといつたやうな奇蹟的佛傳が、或る程度まで成立してゐた。從て兜率天からの降神説も當然成立すべき可能性を有するは事實であるが、併かし欲色無色の三界説が何の程度まで確定してゐたかを豫想することが出來ぬので、

推定に行き詰るのである、梵天や帝釋が釋尊の記傳に顯はれたからといつて、それはベータダ時代からの古神話の承繼であるから、三界説確立の實證にはならない。然らば後世説く如き三界説は何時頃確説として成立したか、是れは甚だ難しい推案ではあるが、阿育以後部派分裂の時代、之を年代でいへば、紀元前二世紀から同紀元後一世紀に至る間であらうと思ふ。そこで問題は彌勒授記説の考察に入らねばならぬのであるが、それは彌勒の授記説は釋迦の授記説の成立してから後のことであるし、それには最後身の一生

補處菩薩は兜率より下生すべきものといふ思想の附帶を必須條件とすることになり、三界説の確立を前提としなければならぬことであつて見れば、その成立の時代が非常に古いものとは認める譯にはゆかないのである。

次に之と關係して詳覈を要するは、當來佛思想の發現及びその發達の事情である。原始佛教時代は釋迦一佛の崇信であり、猶ほ先世六佛の信仰も相當に古い歴史を持つてゐる、その事は單に經説ばかりでなく遺物そのものからも立證することが出來るが、當來佛の信仰になると、之と稍々成立の年代を異にするべきは止むを得ないことで、既にパルフト、サンチー等の古遺物から積極的な證據を發見し得ない以上、餘りにそれを古い時代に置く譯には行かぬことになり、要するに極く古く見ても西紀紀元前第二世紀までは遡り得ぬこととなる。而して當來の佛

としての信仰は先づ此の彌勒菩薩一尊を説いたものが最も古い。その後此の種の思想が發達して彼の増一阿含の中に説いてあるやうに過去の六佛に對して未來の六佛を説くことになり、それが更に發達をして大乘の賢劫經中に明してあるやうな現在賢劫千佛の信仰となり、それが復た進んで遂に過去莊嚴劫千佛未來星宿劫千佛を合して三劫三千佛の信仰を生ずることになつたのである。次に第四に考慮すべきことは、この彌勒菩薩そのもの、信仰に對する發達の過程である。この彌勒菩薩に對する信仰は後代になると立派に大乘佛教中の有力な信仰の一つとなつてゐることは事實である。一體大乘佛教に於て信仰せらるゝ處の諸佛菩薩は概して皆原始時代の佛教經典にその名を見ないばかりでなく、信仰としても別して連絡のないものゝみでない。その中にあつて唯この彌勒菩薩に對する信仰のみが今

る信仰は、佛教思想上極めて重要な位置を占むるものゝ一である。従てその思想の起原及び發達に就ては熟慮を要する問題が澤山ある。其中先づ第一に此の經に現れてゐる彌勒菩薩は果して佛在世當時に實在の人であるかどうかと先決問題である。而して今此の上生經の中に彌勒菩薩が波羅奈國劫波利村波婆利大婆羅門の家に生れたことを明記して居るところを見ると、滿更非歴史人物でもなさうに見へる、一體小乘阿含部の聖典の中には、釋尊を菩薩と稱することはあるが、普通に大乘經典に顯れて來るうやな文殊師利・觀世音・普賢等の諸菩薩の名は殆ど出て來ない。唯々此の彌勒菩薩だけは漢譯の諸阿含並に南方に傳ふるスツタニパータ等に出て來るので、此の點は確に一異彩である。但し阿含經に出て來るかたと云つて、必ずしも直に佛在世實在の人と判斷する譯にはゆかない。否一步議

つてたとひさういふ名の實在の人があつたとしても、所謂授作佛記の事實なるものがあつたかどうかと疑問になるのである。そこで問題は彌勒菩薩の佛在世の實在せしや否やと云ふことから一轉して、第二彌勒授記の思想傳説が何時頃から起つてゐるかといふことに移らねばならぬことになるのであるが、それが仲々難しい研究なのである。

釋尊以前出世の佛としての毘婆尸等の六佛に關する信仰は、その起原の古いことは事實である。阿育王が拘那含佛の塔を修覆した事實、及びバルフート塔の欄楯、サンチー塔の塔門の彫刻に所謂七佛世尊の道場樹を圖出してある所から見て、既に紀元前三世紀に其の信仰が確立してゐたものであることが解る。但し此の時既に毘婆尸佛授記及び兜率天より降生の傳説が成立したかどうかは多少疑問の餘地を存するのである。例へば象子形

を現じて神の母胎に下すとの傳説があり人その圖像が既にバルフート等の古遺物に存在する處から見れば、兜率降神説も古く成立してゐたものとしても差支ないやうにも考へられるが、併かし私はまだこゝではそれを確と明言するまでの自信がない。何故といふに、凡そ印度の古圖像と、經律所記の傳説との關係は、必ずしも傳説が出來てからその圖像を描がいたものばかりで無く、出來てゐた圖像を見て、之に種々の傳説を附加したものと相當にあるらしく思はれるものもあるので、たとへ今のやうな場合に立ち至つても輕々に最後の斷定を下すことは躊躇しなければならぬからである。それなら結局此の問題をどう解決したらよいか、それにつき若し自分としての卑見を無遠慮に述べしむるならば、彼のバルフート塔の欄楯の出來た西紀前三世紀末又は第二世紀初は、佛が忉利天に上つて母の爲

體としての一部の網格は全く前經と同じである、言葉を換へていへば、同じ題材を選び同じ組織のもとに改めて大乘の精神を體して綴り直したものであつて、その間に内容上の變化があり、發達があり、相違があるのである。例へば

彌勒佛國從於淨命無諸諂偽、檀波羅蜜、尸羅波羅蜜、般若波羅蜜、得不受不著、以微妙十願大莊嚴、得一切衆生起柔軟心、得見彌勒、大慈所攝、生彼國土、調伏諸根、隨順佛化と云ひ、或は

持不殺戒不噉肉故、以此因緣生彼國者、諸根恬靜面貌端正

と云つたやうな章句や思想は、今經に至つて新に付け加へられたものである。此の點前經と比較して大に相違を來してゐるとはいふものゝ、實は同一經典が改竄し増廣し整備されたに過ぎぬものであるから、之を別類のものとして見ても差支な

いが、同類のものとして考へても亦大して差し障りはない。古來諸經錄が、下生經と成佛經とを或は之を別類のものとして見、或は之を同類のものとするは、かゝる事情に基づくのであつて、それは要するに見方の相違であるから兩說俱に誤りではないのである。

即ち彌勒下生の時、此の土一變して清淨莊嚴の淨利となることや、その翹頭末城に曠法轉輪聖王出現し、千子七寶を具し、四大寶藏開發することや、修梵摩を父として梵摩拔提を母として託生し、後出家學道して、龍華樹下に成道することや、三會の説法に合して二百八十二億の人が阿羅漢を得ることや、狼迹山に至り大迦葉に遇ふて釋迦佛の法衣を傳ふることなど、その諸種の記事は、前記の下生經の説と大同小異であるから、こゝには煩を避けて再説しない。

#### 四、製作の由序及び年代

此の彌勒の三部經の製作さるゝに至つた動機及び年代に就いては、同じ彌勒關係の經典の中でも、此の三經は孰れも皆その成立は比較的新しいのであつて、其中下生經は比較的古く、成佛經は之に次ぎ、上生經は尤も最後に出來たものと見れば間違は無い。強て年代を憶測することにすれば、上生經は西紀第四世紀末、成佛經は同第三世紀、下生經は成佛經と相去る遠からざる時代と見做しては如何であらうか。

此の彌勒の信仰並に彌勒經典の事に就きては、既に明治四十四年に松本博士が公にせられた「彌勒淨土論」の中詳説せられてある。今更專説を並べて補説を加ふまでも無いが、兎に角に自分の思ひ付いたことを一つ二つ記して置かう。

それは既に松本博士に依つて充分に指示されてある通り、此の彌勒菩薩に關す



ざるに早くも出家學道し、城を去る遠からざる龍華と名づくる高さ一由旬廣さ五百歩の道樹の下で夜半に無上道を成ずる。その時三千大千刹土六反震動し、地神は彌勒の成道を告げる、魔王大將は欲界無數の天人を將いて、彌勒佛の所に至り、その説法を聞いて諸天と與に盡く法眼淨を得。次いで城中の善財長者八萬四千衆を將いて佛所に至り、その説法を聞いて出家を求め、善く梵行を修して阿羅漢を得。孃法王亦佛所に至りてその説法を聞き、尋で位を太子に讓りて剃頭し八萬四千衆を將ひて佛所に至りて沙門となり阿羅漢果を得、修梵摩大長者、また八萬四千の梵志衆を將ひて佛所に至りて沙門となり阿羅漢を得。唯々修梵摩一人のみは三結使を斷じて苦際を盡し、それについて佛母梵摩越夫人また八萬四千の姪女衆を將いて佛所に至り沙門となつて阿羅漢を得、その中唯々梵摩越一人のみは

(三)結使を斷じて須陀洹を得。その餘諸刹利婦女千萬衆、また往いて佛所に至り出家學道しそれぞ證を取るであらうと説き、次に佛は大迦葉、屠鉢歎、賓頭盧、羅雲の四大聲聞に向つて汝等は吾法の没し盡すまでは般涅槃してはならぬ、特に大迦葉に於ては彌勒の出現を待つべしとて、迦葉が毘提村の禪窟中に住する緣由を明し、更に進んで彌勒成道の後、彌勒自から迦葉の禪窟に至りて迦葉に見へ、無數百千の衆生法眼淨を得、その初の會の説法に九十六億の人阿羅漢を得ること、それ等の人は元と釋尊の弟子なること、彌勒、迦葉の僧迦梨を取つて之を著くこと、迦葉の身體奮然として星の如く散步すること、更にその第二會に九十四億の人、第三會に九十二億の人いづれも皆阿羅漢を得べきことを明し、最後に若し善男子善女人、彌勒佛及び三會の聲聞衆及び翅頭城を見、及び自然粳米を食し并に自然

衣裳を著し、命終の後天上に生ぜん欲するものは、當に勤めて精進して懈怠なく諸法師に供養承事し、名花搗香をもて種々供養せよと勸説して居るのである。

「B」彌勒下生成佛經は、突如として「大智舍利弗」の語を以て筆を起してあるので、その説處の明記を缺いて居り、對告衆も阿難でなくて舍利弗になつてゐるが、その彌勒菩薩下生成道の次第、三會の説法度生等の事を起することは大體に於て前經の同巧異曲である。勿論多少の其略出入はないではないが、とり立てゝ別に詳述を要する程の事項は無い。

(3)彌勒大成佛經 此の經は佛が摩伽陀國の波沙山過去諸佛常降魔處で夏安居中、舍利弗の請問に應じて説かれたことになつてゐる、之を前の下生經に比べるに、文言も非常に増廣せられ、内容も頗る大乘的のものに書き改められてゐるが、その彌勒菩薩下生成道の次第を明す經全

に處て晝夜恒に此の法を説いてゐられると明し、それに引き續き佛滅後の諸弟子等、諸の功德を修し、佛の形像を念じ、彌勒の名を稱するものは命終の後彼の天に往生することを得、彼の菩薩の值遇して説法を聞き、又彼の菩薩に隨つて閻浮提に下生し、第一に法を聞き、未來世に於て賢劫の一切諸佛、並に星宿劫の諸佛世尊に值遇して菩提の記を受く可きことを説き、なほ是の菩薩大悲の名稱を聞き、香花衣服綰蓋幢幡を供養し禮拜繫念するものは、此の人命終の時、彌勒菩薩は眉間の白毫大人相光を放つて諸天子とともに曼陀羅華を雨らして來迎し、須臾に往生を得べきことを明してゐるのである。

(2) 彌勒下生經 彌勒三部經の中の下生經に同じく鳩摩羅什譯の名の下に、實は増一阿含の別抄であり乍ら今竺法護譯として流行するもの「A」と道標譯道政刪改の疑ある彌勒下生經成佛經「B」との二説

あることは前に述べた通りである、其中「A」彌勒下生經は、佛が舍衛國の祇樹給孤獨園に居られた時、阿難の請問に應じて將來出現の彌勒佛につき姓名號翼從の弟子、佛の境界等を説示されたもの、即ち其の經によるに、先づ初に阿難請問の次第を述べ、次に佛、阿難に向つて彌勒尊下生成道の有様を明して、將來此の國界に趨頭と名づくる城郭があるであらう。東西十二由旬、南北七由旬あり。土地は豐熟で人民は熾盛である。時に城中には水光といふ龍王がゐて夜になると香澤を雨らし晝は清和である。

又華葉といふ羅刹鬼がゐて、人民廢棄の後、穢惡不淨の者を除去し香汁を地に漉ぎて香淨ならしめる。此の時に閻浮提の地千萬由旬の山河石壁は、皆自から消滅して極めて平整な鏡のやうに清明となり、村落相近く雞鳴相接し、時氣和適し四時節に順じ、人身に百八の患なく、人

心みな同意、言辭また一類にて差別なく、地には自然に香美なる粳米を生じて食に苦患なく、金銀珍寶車馬瑪瑙真珠琥珀の類が地上に散在しても省みるものない。此の時に曠法法王が出現する。王は正法を以て治化し、七寶成就し、四大寶藏(乾陀越國の伊羅鉢寶藏、彌梯羅國の綢羅寶藏、須賴吒國の寶藏、波羅奈羅の曠法寶藏)自然に應現して稱計すべからざる程の多數の珍寶を出し、又優單越と同じやうに自然樹上に極細柔軟衣を生ずる衣樹をも生ずるのである。その大臣を修梵摩と云ひ、その妻梵摩越と云ふ、時に彌勒菩薩、兜率天に在りて父母を觀察し、神を此の大臣の家に下し右脇から生れる。名を立て、彌勒と稱し、三十二相八十種好その身を莊嚴し、黄金色である、此の時人壽極長、いづれも八萬四千歳、女人は五百歳にて始めて出で嫁ぐことになつてゐる。彌勒菩薩は家にあること幾なら



聞者は皆無上道心を發す。時に諸園の中には八色の瑠璃の渠があり、一一の渠は五百億の寶珠にて合成し、中は八色を具せる八味の水があり、その水上に湧き遊べる梁棟の間、四門の外には四華を化生し、寶華の流るゝが如く水が華中から出で一一の華上には二十四の天女がゐて、手中に自から寶器を化出し、中には天の甘露が盈滿し、左肩には無量の瓔珞を荷佩し、右肩にはまた無量の樂器を負ひて雲の空に住するやうに水中から出でて六波羅蜜を讚歎してゐる。若し兜率天上に往生するものあれば此の天女の侍御を受ける。又七寶の師子座がある、高さは四由旬、閻浮檀金無量の衆寶を以て莊嚴し、座の四角の頭には四蓮華を生じ、一一の蓮華は百寶より成り、一一の寶に百億の光明があり、その光り化して五百億の衆寶雜花莊嚴の寶帳となる。

時に十方面の百千の梵王は各々一の梵

天妙寶を持して寶鈴とし寶帳の上に懸け、小梵王また天の衆寶を持して羅網とし帳上に彌覆し、又百千無數の天子天女は、各寶華を以て座上に布くと、是の諸蓮華から自然に五百億の寶女を出し、手に白拂を執つて帳内に侍立する。宮の四角には四の寶柱があり、一一の寶柱には百千の樓閣があり、梵摩尼珠を交絡し、その諸閣の間には百千の天女がゐて手に樂器を執つて苦空無常無我的諸波羅蜜を演説してゐるといつて、具に兜率天宮の莊嚴を説き、次に此の天宮内に寶幢・華徳・香音・喜樂・正音聲の五大神の住在することを述べ、次に比丘及び一切の大衆、生死を厭はず、生天を樂ひ、彌勒の弟子とならんとするものは、應に五戒八戒具足戒を執し十善戒を修し、一一兜率天上の上妙の快樂を思惟して正觀を作すべしと明し、更に優波離の再請問に應じ、此の彌勒菩薩の此の土入滅兜率上生の次第を述

べて、時に彌勒菩薩は兜率天七寶臺内の摩尼殿上の師子座に忽然として化生し蓮華の上に結跏趺坐する。身は閻浮檀金の色、長は十六由旬あり三十二相、八十種好皆悉く具足して頂上の肉髻髮は紺瑠璃の色で、釋迦毘伽摩尼、百千萬億の甄叔迦寶にて天冠を嚴り、その天寶冠には百萬億の色があつて、一一の色の中には無量の百千の化佛が在し、諸化菩薩を侍者としてゐる、また地方の諸大菩薩も十八變を作し天冠中に住してゐる。彌勒菩薩の眉間には白毫相光があり、衆光を流出して百寶色を作し、その三十二相の一一の相中には五百億寶色があり、一一の好にも亦五百億寶色があり、一一の相手から艷色に八萬四千の光明雲を出してゐる。諸天子と俱に各々花座に坐し、晝夜六時に常に不退轉地法輪の行を説き、一時を經る中に五百億の天子を成就して無上菩提を退轉せざらしめ、是の如く兜率陀天



二千の優婆夷、跋陀婆羅等十六の菩薩、文殊師利法王子等五百の菩薩等のために百億の陀羅尼を説かれた時のこと、會中にゐた彌勒菩薩は佛の所説を聞いて即時に百萬億の陀羅尼門を得、佛前に住立してゐた。其の時優波離尊者は座から起つて、世尊は昔し律及び經の中に阿逸多が次で作佛すべしと説かれたが、此の阿逸多は凡夫で未だ諸漏を斷じてゐない、此の人死後何の處に生ずべきかと問ふたのを發端とし、佛は之に答へて、此の人は今から十二年後に命終し必ず兜率天上に往生するのであるが、その時に兜率天上では五百億萬の天子が、此の一生補處の菩薩を供養するために、天の福力をもつて宮殿を作る。各々身の梅檀摩尼の寶冠を脱して之を供養し發願するやう、此の人は來世乏しからず無上菩薩を成ずるであらう、われ彼の佛の莊嚴國界に於て受記を得んと、此の願を作す時、是の寶冠化し

て五百萬億の寶宮となる、その一一の寶宮には七寶にて成れる七重の垣があり、一一の寶からは五百億の光明を出し、一一の光明の中には五百億の蓮華があり、一一の蓮華は五百億の七寶の行樹を化作し、一一の樹葉には五百億の寶色があり、一一の寶色には五百億の閻浮檀金の光があり、一一の閻浮檀金の光の中からは五百億の諸天寶女を出し、一一の寶女は樹下に住立して百億の寶無數の瓔珞を執つて妙音樂を出し、その樂音中に不退轉地法輪の行を演説する、その樹より生ずる果は頗梨色であつて、一切の衆色がこの頗梨色の中より光明右施宛轉して樂音を流出し大慈大悲の法を演説する。一一の垣の高さは六十二由旬厚さ十由旬あり。五百億の龍王此の垣を圍遶し、一一の龍王は五百億の七寶の行樹を雨らして垣上を莊嚴し、自然の風此を吹き動かして相接觸し、苦空無常無我諸波羅蜜を演説

するのである。その時此の宮に牢度跋提と名づくる一大神があつた、座より起つて遍ねく十方の佛を禮し、弘誓の願を發して、若し我が福徳をもつて彌勒菩薩のために善法堂を造らんに、我が額上より自然に珠を出しめよと、かくて額上より自然に五百億の寶珠を出し、その珠は瑠璃波瑠一切の衆色具足せざるはなく、紫紺の摩尼のやうに表裏映徹してゐるが、此の摩尼光が空中を廻旋して化して四十九重の微妙な宮殿を爲した。その一一の欄楯は萬億の梵摩尼寶にて合成し、この諸欄楯の間には自然に九億の天子と五百億の天女とを化生し、一一の天子の手中から無量億萬の七寶の蓮華を化生し、一一の蓮華の上には無量億の光があり、其の光明の中には諸樂器を具し、鼓せざるに自から鳴る。此の聲出る時、諸女は自然に衆樂器を執り、競て起て歌舞し、その詠歌の音は十善四弘誓願を演説し、

二十五行一行十七字、今檢失本彌勒經目下注云一十七紙、則計七千二百二十二字、此經只有三千一百七十六字、則未其半、豈是彼經歟、則丹經無此經爲得、然此經文頗似漢晉經、注又有漢云之言、還恐此是三失中第一本、錄云今附西晉者耳、宋藏遺得而編入之爲得之矣、而二錄並無下生經是法護譯者、云法護譯者何耶、伏俟賢哲、といつて批議してゐる。ところがよく調べて見ると此の本は増一阿含經第四四卷の部の抄出であつて、因より法護の譯でも無ければ、又西晉失譯の經でもない。此の事に就きては松本文三郎博士が既に十數年前に其の著彌勒淨土論の中に詳説されてゐる。して見れば彌勒經の異譯は結局開元錄所出の三有之闕以外には別に無いことになる。但しその所謂彌勒の三部經なるものに就いては、新羅の憬興は上生經、成佛經の他に今の抄經を加

へて三部とし（但しその譯者に就きては成佛經を竺法護の譯、下生經を羅什譯としてゐる（正藏 XXXVIII.P.304b）慈恩大師窺基は其の著觀彌勒上生兜率天經贊の中（正藏 XXXVIII.P.278b）に大卷成佛經を竺法護の譯、小卷の大智舍利弗を起首とするものを羅什の譯として上生經と俱に列學してゐるのであつて、書物の撰み方も違へば、譯者の宛方も致してゐないのである。蓋し憬興、窺基等の諸師は孰れも初唐の出身者である所から、成佛經等の譯人の宛て方は凡て開元以前の古經錄である法經錄、仁壽錄等の説を依用してゐるのである。

已上譯人署名の問題で大分長くなつたが何しろ六朝以前には一一の經に譯人の名を署さなかつたものを、唐以後になつて始めて之を記入することにしたのであるから、その間に置き違が出來たりして、非常に複雑なことになつてゐる。從て之

が判斷に就いては極めて嚴密なる注意と考證を必要とするのである

### 三、彌勒三部經の内容

彌勒の三部經に就いて、一通り内容の大綱を記述しようと思ふ。本來ならば翻譯の順序なり思想の連絡なりを考へて順次に説述すべきであるが、こゝでは單に三經典各箇に對して極めて簡單に之を紹介するに止めて置く。

#### (1) 觀彌勒菩薩上生兜率天經 觀彌勒菩薩

薩上生兜率天經とは、略して彌勒上生經又は單に上生經ともいふ。是れ彌勒菩薩が兜率天に上生したまひ、現に彼の天に在して天衆を攝化し、有縁の衆生を拔濟したまう次第を明したるものである。即ちその經によらば、初に先づ佛舍衛國祇樹給孤獨園に在して、阿若憍陳如等千二百五十の比丘、摩訶波闍提等一千の比丘尼、須達等三千の優婆塞、毘舍佉母等

彌勒作佛時事經 一卷 祐緣無失譯出

唱錄八紙、今附  
東晉錄、第二卷

彌勒下生經 一卷

梁天竺三藏眞諦譯 第五卷

右三經同本前後六譯三存三闕

と云へるがそれである。現在の大藏經の譯號は大體に於て此の開元錄の説によつて定め置いたのであるから、その署名は開元錄と一致するは當然である。ところで今現在残つてゐる關係經典と照合して見るに、

(1) 觀彌勒菩薩上生與率天經 一卷

(大正 No. 452) 宋 涅槃京譯

(2) 彌勒下生經 一卷

(No. 453) 西晉 竺法護譯

(3) 彌勒下生成佛經 一卷

(No. 454) 後秦 鳩摩羅什譯

(4) 彌勒下生佛經 一卷

(No. 455) 唐 義淨譯

(5) 彌勒大成佛經 一卷

(No. 456) 後秦 鳩摩羅什譯

(6) 彌勒來時經 一卷

(No. 457) 失譯人名附東晉錄

の六部の中、第一の上生經に就いては

別に問題は無い。第五の成佛經に就いては、開元錄では之を羅什三藏の譯とし、

その前の法經錄等では之を竺法護三藏の譯としてゐるが、其の内容から云へば、開

元錄によつて今の如く羅什三藏の譯として間違ひ無いやうである。その餘の四經

の中、第二を除く第三第四第六の三本は、

開元錄にはゆる三存經であるが、その

中の大智舍利弗の語を起首とせる彌勒下

生成佛經を羅什三藏の譯と定むるに就き

ては、開元錄の撰者智昇は、彼の歷代三

寶紀第十一(致六、六八左)及び大唐典錄

第四(結一、六九右)に道標譯、道政刪改

とする説を否定して、強て之を羅什譯に

配してゐるが、彼の三寶紀に

右一部一卷先是長安釋道標譯、是第

三出、小異護什本、齊世江州沙門道政、

更復刪改標所定者、首尾亦名成佛、又

云下生、而其經首有大智舍利弗者是、

既不顯年、未詳何帝

とあるは、其の記事は餘り明瞭すぎる

のと、なほ譯本そのものを手に取つて見

ても、直に之を羅什譯とするはどうかと

も思はれるので多少疑を存して置いては

どうであらうか。そこで残る問題は竺法

護譯と傳ふる彌勒下生經である。蓋し此

の經が開元錄にはゆる六譯三存の一で

ないことは明かであるが、そうかといつ

て之を問三失の一に數へやうといふに

は、法護の譯とするは差支へることにな

る。故に之に就き高麗藏の校勘者は此の

經本の刊記に

按、開元錄有譯無本中有法護譯彌勒

成佛經一名彌勒當來下生經者、乍觀此

經、即彼失本而還得之、其の實非也。何

則羅什彌勒成佛經目下注云、與下生經

異本、與法護譯彌勒成佛經同本、兩譯一

闕、則彼失本經、非此下生經六譯、三失

之一者明矣、又按孤山智圓重校金剛般若

若後序云、古德分經皆用紙數者、一紙有



二右)有譯本錄中に

彌勒成佛經 一卷

與後經異本、姚秦三藏鳩摩羅什譯  
第二譯、兩譯一闕

と云ひ同卷第十四(結五、三五)有譯無

本錄中に

彌勒成佛經 一卷

一名彌勒當來下  
生經十七紙

西晉三藏竺法護譯 第一

右一經前後兩譯一存一闕

と云つてゐるのは、文中「與後經異本」

とある後經とは下生經を指すのであるか

ら、即ち此の説では、法護、羅什兩三藏

譯の彌勒成佛經を同本異譯と見、而も法

護譯は闕失して羅什譯の方が現存してゐ

るものとするのである。

ところが、之に就いて更に又異説があ

る、即ち七卷本隋衆經目錄(法經錄、結

一、九六右)には

彌勒成佛經 一卷 晋世竺法護譯

彌勒成佛經 一卷 後秦鳩摩羅什譯

彌勒受決經 一卷 一名彌勒  
下生經

後秦弘始 年羅什譯

彌勒當來生經 一卷

右四經同本異譯

と記し、五卷本隋衆經目錄(仁壽錄、

結二、一七左)には

彌勒成佛經 一卷 晋世竺法護譯

彌勒下生成佛經 一卷 一名彌勒  
受決經

後秦弘始年羅什譯

右三經同本異譯

と記し、五卷本唐衆經目錄(靜泰錄、

結二、二三左)及び大唐内典錄第六(結二、

九〇左)には

彌勒成佛經 一卷 十七  
祇 晋世竺法護譯

彌勒下生經 一卷 一名彌勒受決經  
六紙

後秦弘始年羅什譯

彌勒來時經 一卷 三譯闕  
本得

右三經同本異譯

と記し、成佛經を竺法護の譯とし且つ

之を下生經と同本異譯に擬してゐるが、

是れは前説とは全く反對である、而して

此の兩説違錯の可否を決定するには、ど

うしても下生經の翻傳に就いて精査しな

くてはならない、ところで僧祐錄、三寶

紀、仁壽錄、靜泰錄、内典錄等の説は略ほ

上記の通りであるが、若し開元釋教錄に

よらば、此の彌勒下生經に前後六譯あつ

て、之は存し三は闕すと明して居る、即

ち同書第十二(結四、一〇二右)有譯有本

錄中に

彌勒來時經 一卷 失譯出法上錄、今  
附東晉錄、第三譯

彌勒下生經 一卷

一名彌勒受決經、初云大智舍利弗、姚  
秦三藏鳩摩羅什譯、第四譯、護依長房  
内典二錄、並云彌勒下生經初門大智  
舍利弗、其經是長安沙門釋道標譯、蕭  
齊洲沙門道政刪改、今詳此說或謂不  
然、其釋道標乃是什公門徒陸善、彼云  
道政所刪、難爲準約、經中子注乃曰  
秦言故是秦翻無繁惑矣、什錄先載是  
其出焉

彌勒下生成佛經 一卷 大唐天后代三藏  
義淨譯、第六譯

右三經同本異譯 前後六譯  
三譯本闕

と云ひ、同卷第十四(結五、三五)有譯

無本錄中に

彌勒當來生經 一卷 僧佑錄云、安公  
錄中失譯經今附

西晉錄  
第二譯

づくもので、此の菩薩に對する信仰としては寧ろ通般のものである。斯の様に考へて來ると、此の彌勒菩薩に對する信仰は、上生下生の兩様に岐れてゐるものとは見ることが出來ぬでもないが、實際の信仰としてはそう判然とはその會座に參じて解脱を得やうと考へてゐたものとすれば、大した間違はないやうである。

## 二、彌勒三部經の傳説

勒彌菩薩關係の經典は相當に多數あるが、其の中特に劉宋沮渠京聲譯の觀彌勒上生兜率天經と姚秦鳩摩羅什三藏譯の彌勒成佛經及び西晉竺法護譯の彌勒下生經（實は增一阿含經抄、或は鳩摩羅什譯、彌勒下生成佛經）の三本を合して彌勒の三部經と稱してゐる。斯く三經合行するに至つた起源に就いては、その時代を詳かにしないが、彼の新羅倣興の彌勒經述贊（今三彌勒經疏と題し正藏經疏部第六

卷 No. 1774 に收む）に三經並べ釋してゐるところから可なり古くから三部一具に行はれたものと見ることも出来る。此の中觀彌勒上生兜率天經の傳譯に就いては、出三藏、記集第二（結一、一一右）に

觀彌勒菩薩上生兜率天經 一卷

或云觀彌勒菩薩經、或云觀彌勒經（中略）

右四部凡五卷、宋孝武帝時、僞阿西王

從弟沮渠安陽侯京師譯出、前二觀先在高

昌郡久已譯出於彼齋來京師

とあるにより、此の經は曾て沮渠安陽

侯が高昌郡で翻譯したものなることが解

つてゐる。次に彌勒成佛經及び同下生經

の傳譯につきては、少しく疑惑がある。

先づ成佛經については、出三藏記集第二

（結一、七右）新集經論錄竺法護三藏譯の

下には、

彌勒成佛經 一卷 與羅什所出略本

と記し、同（結一、九六）羅什三藏譯經

の下には

彌勒下生經

彌勒成佛經

の名を擧げ乍ら、同（結一、一二右）新

集異出經錄の下には、

彌勒成佛經 竺法護出彌勒成佛 鳩摩羅什出彌勒成佛 一卷

と云ひて前後一致してゐない、若し歷

代三寶紀第六（致六、二八右）竺法護三藏

譯經の條によらば

彌勒成佛經 一卷

大安三年（A. D. 383）出一名 彌勒當來下生經見壽道真錄

と記し、同第八（致六、五二右）羅什三

藏譯經の條には

彌勒下生經 一卷 亦云彌勒受決經 見三秦錄

彌勒成佛經 一卷

弘始四年（A. D. 380）出是第二譯 與法護出者大同小異見三秦錄

と記して、その彌勒成佛經なるものは、

法護、羅什の二譯あり、内容は大同小異

にして、下生經とは全く別本のやうに記

してゐる。而して開元錄第六（結四、一〇

# 彌勒三部經解題

## 序言

彌勒菩薩は釋尊の補處の菩薩として現に兜率天上に在して諸天衆の爲に說法し、當來五十六億七千萬歳の後、再び此の閻浮提に下生し、龍華樹下に成道し、三會の說法に釋迦佛の化度に漏れた有縁の人々を度説すると傳へらる。是れ過去の佛でも無く現在の佛でもない當來の佛であるが、その果位の方から崇めて普通に彌勒佛と稱してゐる。

此の彌勒佛に對する信仰は、その起原比較的古く、大小兩乘の經典に互つてその説がある。但し支那日本に傳はつたのは、主として大乘佛教として崇信されたのであるが、その思想流行の程度は、彌陀、藥師と相並んで、一時は非常な盛況

を呈したのであつた。唯々中古以後彌陀淨土教が、佛教の通俗的信仰を代表するやうになつてからは、一般世人から疎遠になつてしまつたには相違ないが、孰れにしても大乘佛教中、最も有力なる思想信仰の一として藝術上にも相當なる影響を有してゐるものであるから、こゝに一應之に就いて辯述して置かう。

此の彌勒菩薩に對する信仰は、同じ一尊を崇めながら自から兩様に岐れる傾向がある。其の一は菩薩は今現に兜率天に在して說法度生してゐられるのであるから、われ／＼も彼の天に上生してその化益に與からうといふのである。是れ彌勒の三部經の中には、觀彌勒上生兜率天經の説に基づくもの、殊に中古一部の學者の間に、彌陀の淨土は報身報土とすれ

ば凡夫が往生することは出来ぬけれど、兜率ならば三界欲天の内であるから、吾等凡夫で比較的容易に往生することが出来る」と主張せられ、所謂兜率上生の信仰は、彌陀の西方往生の思想と相並んで盛觀を極めたのであつた。尙ほその當時の信仰としては、兜率上生を希求すると同時に兼ねて西方往生をも思願し、その旨を記した願文等の遺つたものもある。其の一は菩薩は向後五十六億七千萬歳を過ぎ兜率天壽數が竭きると、再び此の吾等の住んでゐる閻浮提に下生し、そして龍華樹下に成道して、その三會の說法に會て釋迦佛の化度にあづかることの出来なかつた吾等衆生を濟度せらるゝことに定まつてゐるのであるから、吾々は今から善根を積んで置いて、その時こそ得脱せねばならぬといふのであつて、所謂龍華三會の曉を待つ信仰である。是れは彌勒の三部經の中では彌勒下生經等の説に基



無欲行品第五 ..... 三六

卷の第三 ..... [三]—[四] ..... 三六

信値法品第六 ..... 三六

轉法輪品第七 ..... 三四〇

決諸疑難品第八 ..... 三四四

卷の第四 ..... [四五]—[五六] ..... 三四九

不起法忍品第九 ..... 三四九

衆要品第十 ..... 三五二

受封拜品第十一 ..... 三五四

囑累法藏品第十二 ..... 三五八



索引 ..... 卷末

總持品第六 ..... 二六〇

三藏品第七 ..... 二六八

不退轉輪品第八 ..... 二七〇

變動品第九 ..... 二七一

卷の 下 ..... [四六—六八] ..... 七六

決疑品第十 ..... 二六九

心本淨品第十一 ..... 二八八

月首受決品第十二 ..... 二九四

屬累品第十三 ..... 二九八

弘道廣顯三昧經解題 ..... [一—三] ..... 三〇一

弘道廣顯三昧經 ..... [一—五六] ..... 三〇二

卷の 第一 ..... [一—一七] ..... 三〇三

得普智心品第一 ..... 三〇三

清淨品第二 ..... 三二三

道無習品第三 ..... 三二七

卷の 第二 ..... [一八—三二] ..... 三三三

請如來品第四 ..... 三三三

佛說瑠璃王經 ..... 一〇八

如來示教勝軍王經解題 ..... 一四九

如來示教勝軍王經 ..... 一五二

無所有菩薩經解題 ..... 一五九

無所有菩薩經 (四卷) ..... 一六一

文殊師利普超三昧經解題 ..... 一三九

文殊師利普超三昧經 ..... 一三三

卷の上 ..... 一三三

正土品第一 ..... 一三三

化佛品第二 ..... 一四三

舉鉢品第三 ..... 一五五

卷の中 ..... 一三五

幼童品第四 ..... 一五五

無吾我品第五 ..... 一五八



目次

(本丁)

(通頁)

彌勒三部經解題	一六	一
佛說彌勒菩薩上生兜率天經	一八	七
佛說彌勒下生成佛經	一七	五
佛說彌勒大成佛經	一九	三
佛說大方等頂王經解題	四	五
佛說大方等頂王經	三七	五
佛說月上女經解題	四	三
佛說月上女經	三	九
佛說淨飯王般涅槃經解題	二	九
佛說淨飯王般涅槃經	八	三
佛說琉璃王經解題	二	九



經  
集  
部  
二

布	平	小
施	等	野
浩	通	玄
岳	昭	妙
	譯	





CHENG YU TUNG  
EAST ASIAN LIBRARY  
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY  
130 St. George Street  
8th FLOOR  
TORONTO, CANADA M5S 1A5

35

國譯一切經

大東出版社藏版











